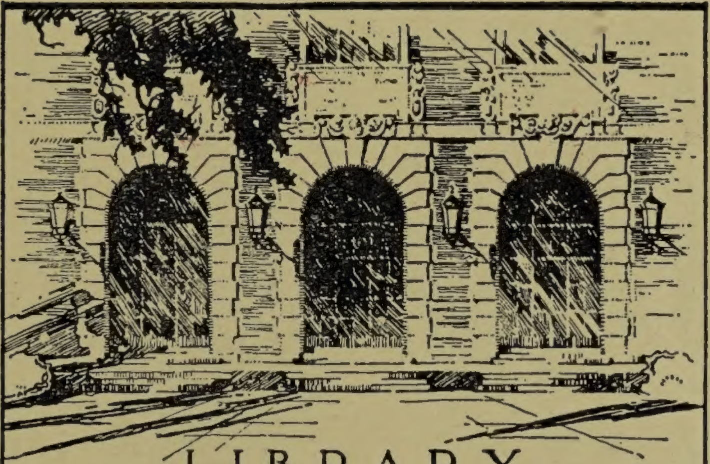
UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 078027924

渡邊家文庫
國書 二/七 類
四八九九 號
一 冊
四八四函
一架

The
Joseph K. Yamagiwa
Book Collection



LIBRARY
OF THE
UNIVERSITY
OF ILLINOIS

PN
58
.T8

NOTICE: **Return or renew all Library Materials! The *Minimum* Fee for each Lost Book is $50.00.**

The person charging this material is responsible for its return to the library from which it was withdrawn on or before the **Latest Date** stamped below.

Theft, mutilation, and underlining of books are reasons for disciplinary action and may result in dismissal from the University.
To renew call Telephone Center, 333-8400

UNIVERSITY OF ILLINOIS LIBRARY AT URBANA-CHAMPAIGN

DEC 20 2002

JUL 15 2004

RECEIVED JAN 16 2009

L161—O-1096

坪内逍遙著

文學その折々

全

春陽堂版

PN
58
.T8

はしがき

七年毎に、人の身の組みたてのあらたまりゆくにひとしく、そが心の組織も、五とせ六とせが程にはやう〱あらたまりゆくとぞおぼゆる、來しかたの我れをかへりみて我が行末のかゞみとせんと、無限精進のよすがなり、と嘗て『小羊漫言』『春のや漫筆』といふ二册子を編輯し、ことしまた、廿四年このかた書きすてたるを、雜誌、新聞紙よりえりいださせて、綴ぢあはせおきけるを、春陽堂のあるじ、或時見て、かゝる物も或は讀む人あるべし、一册子となして公にせばや、といふ、世の人に對しては嗚呼がましけれど、我が爲には此の上の便利やはある、ふと心動き、うべなひ、取り集めたる中の、要なきは大か

た除き、過去を見るたよりと思へるは、長短精粗共に存して、稿を送り、校するに及びて心附けば、尙棄つべかりしものあまたありけり、されど今更にいかにすべき、さて、書名もありのまゝに「文學其の折々」と命じつ、予が管見の近世文學史料とも、讀む人の見たまはゞ本意也。同じく廿九年のはじめまでに物したるもの、こゝに收めたる外に、「美辭論稿」、及びそを修正して東京專門學校の『政治科講義錄』に掲げたる「修辭論」、幷びに「フイツシヤル萬國史譯」、「マクベス評釋」(第二套終まで)、及びそを修正して今方に同上『文學科講義錄』に掲げつゝある「マクベス評註」、幷びに「英文學史」(十八世紀まで)、又同じく『文學科講義錄』及び『國學院雜誌』などに掲げ來たりし「英米大家の詩文評釋」等、おの〳〵一册子をなせるものあれど、そ

れらは皆除きたり、又某新聞社の需に應じて物せし西洋小説の義譯、エインスヲオスの作"Jack Sheppard"及び米人某の作"False Friend"二篇あれど、これもおの〳〵一册子をなすべきものなれば、除きたり。又すべて脚本及び演劇に關する雜筆は、其の類頗る繁多なれば、便宜の爲「梨園の落葉」と題して別册に收めたり。

明治廿九年八月

著者識

文學その折々

目次

文體の紛亂……一
文體の成行……七
英語と英文學……一三
官立學校の英學試驗……一五
死灰再燃……一七
外國語學と外國文學……二一
外國美文學の輸入……二五
飜譯すべき外國文學……二九
文學と安心……三五
歐文直譯幷に訓點……三六
『マクベス』評釋の緒言……四〇
我れにあらずして汝にあり……五〇
文人社會……五二

文學と糊口……六七
逸話の効用……七九
文學の定義……八二
中世書籍の價値……八五
書籍につきて……八六
讀書につきて……八九
公共圖書館の利害……九五
泰西古今の圖書館……九七
詩論雜纂……一〇一
年首のほぎごと……一一九
烏有先生に謝す……一二一
沒理想の語義を辨ず……一二三
烏有先生に答ふ……一二八
其の意は違へり……一六二
小羊子が白日夢……一六五
『早稻田文學』が谷「時文評論」村の緣起……一七七
城南評論城主と逍遙子とのパーレー……一八四

陣頭に馬を立てゝ敵將軍に物申す……一九五
雅俗折衷之助が軍配……二〇二
入道常見が軍評議……二二九
文珠菩薩の剛意見……二三三
小羊子が矢ぶみ……二五五
!?……二三六
沒理想の由來……二三八
罵の字……二六三
一種の批評家……二六六
解嘲……二六七
大旱雲霓……二七二
名著の筋書に就いて……二七六
角を正さんとして牛を殺す勿れ……二八〇
不平界……二八一
機械の研究……二八三
禿頭翁去りぬ……二八四
逑義評釋……二八五

名著梗概と名著解題……二八八
滑稽家……二九〇
モリエールの面影『夏小袖』……二九二
小說に於ける二勢力……二九五
讀書社會……三〇五
海外の文學につきて……三一四
ジエームス、サリーの小說論……三一七
『おぼろ月夜』と『荒海實一』……三三四
小說『五重塔』……三三六
小說『罪と罸』……三三九
韵の種類……三四六
騈儷……三六〇
文學と報酬……三六六
時文の傾向……三七二
首府と地方と……三八〇
始即終……三八七
史論四派……三八九

文學管見……三九五
佛の文豪テーン逝く……四三一
新桂冠詩宗?……四三六
故テーン……四四二
ラスキンが美の論……四四七
故テーンの性行……四五一
國文家の新事業……四六〇
政治家と文學……四六四
新題目……四七四
新着眼……四八〇
宗教界……四八七
佛教と其の說明……四九一
佛教諸雜誌……四九六
『英文學史綱領』を講述するにつきて……五〇二
東京專門學校第十回卒業式場にて……五〇五
『靜思餘錄』……五一一
某に答へて小說不振の因緣を論ずる書……五一四

『早稲田文學』の刷新に際して……五三三
同志社講話會……五三八
小說學校鬢撥科の敎則……五四七
明治二十六年文學界の風潮……五四九
時文二派……五六五
讀者評判記……五七五
續小羊漫言……五七五
隨筆の種類……五八三
陳說と奇論……五八八
破格の名文……五九二
文のすがた……五九九
近松の淨瑠璃……六〇八
近松が敍事詩の特質……六一三
人生四季……六一七
まづ我が國の四大作家を棄却すべし……六四七
『日本昔噺』序……六五三
日淸事件と文學……六五四

『ジョンソン』……六五七
讀書法を説きて國文研究者に望む……六六〇
小説家は實驗を名として非義を行ふの權利……六六〇
わりや……六七三
明治二十七年文學界の風潮……六八七
戰爭と文學……七〇三
文學者と政治家と貴族……七四五
正直正太夫に與ふる書……七五七
評釋『天の網島』……七五九
思想の三世……七八一
第二の反動……七八二
陋又醜……七八三
俗謠的新體歌……七八四
pun（ポン）、地口、かけ言葉……七八六
滑稽……七八八
新思想と險晦の語……七八九
『尋常小學讀書敎本』……七九〇

新文壇の二大問題（新國字論）……七九三
音字の便益……八〇八
非音字論……八一五
實用上の利害……八一八
國語學上の利害……八二四
國文學上の利害……八二八
過去との關係……八三二
「英文評釋」緒言……八三四
好尙の墮落……八四七
影を追ふは誰そ……八四八
慢と漫と……八四九
詩人と飄逸……八五一
文學者の謙讓……八五二
强ひて放言の題を求むる勿れ……八五八
いづれか罪ある……八五九
國文學の將來……八六二
文海の新潮……九〇六

歴史小説につきて……九一二
脚本『牧の方』緒言……九二四
『早稲田文學』雜界彙報緒言……九三八

文學その折々目次終

文學その折〻

文體の紛亂

過ぎ來しかた

坪内逍遙著

文格紛亂の因縁

內外三大變

我が近年の文壇に於ける、語法文格の大紛亂は、政治上、社會上に於ける未曾有大革新の餘波にして、もとより深く異しむに足らず、其の由來はた明なり、されど新代の讀者の爲に、爰に一わたり、其の變遷の跡を叙すべし。　案ずるに、維新のはじめ、外來の新思想と在來の舊思想と撞着し、鎖國と開國との、漠然たる二大黨派を生じたりし時(第一內變)此の第一の內變、因縁となりて、復古の政變を呼び起し(第一外變)此の變また因縁となりて二百年來の政治上の信仰破れ、開國派は化して歐化派となり、やうやく二千年來の觀念をも動かし(第二內變)國俗が衣食住(社交)の上にも、言語文章の上にも、(或は自然の必要、或は人爲の取捨によりて、)未曾有の變動を生じ(第二外變)二百年來統一の反動之れを助けて、人々我が思ふ所のみを是とし、身を修め、家を齊へ、また國家をも理せんとせり(第三內變)。　此の變一轉し

UNIVERSITY OF
ILLINOIS LIBRARY

歐文の形を傳へんとせる者

歐文の心を傳へんとせる者

て政治上、社交上にては、鎖國派の變體たる保守派に對する歐化派の勝利となり、文學上にては、國文正格派に對する歐文輸入派が破格文の勝利となり(第三外變)やゝ極端に流るゝに及びて、又其の反動を生じ、保守派の新運動となり、國粹保存旨義となり(第四內變)政治、社交の上は更なり、文學の上にも、大波瀾を生じ、明治廿二三年の交に於ける文體大紛亂の有樣を釀しき。蓋し此の時に當たりて、歐化的文體と國粹的文體と互に相觸れて相影響せしかば、歐化派の內部にも反動を生じ、又國粹派の內部にも反動を生じて、彌ゝ紛錯をきはめたりき。當時歐化的文體派に二派ありき、直輸派とも稱すべきは急激にして、折衷派ともいふべきは溫和なりき。直輸派にも(其の外部に見えたる所によりて、强ひて分かてば)二派あり、歐文の形を主として、そを我が國に直輸せんとせる者と、歐文の心を主として、そを國文にあらはさんとせる者となり。而して前者(主形派)にも二派あり、大體の文脈を採らんとせるもの(溫和なる翻譯文體家)と語法、語格をも傳へんとせるもの(直譯家)となり、然るに、此の直譯家にもまた二派を生じて、甲は言文の一致を主張し、乙は言文の別を立てたり。

之れと同時に、歐文の心を主とせるものも、また分かれて二派となり、甲

歐文の精髓を傳へんとせる者

は歐米の文心の皮相を傳へんとし、乙は其の精神を傳へんとせり。　皮相とは、叙、記、評、論の綿密精緻にして、分析(アナリシス)の周細にして總合(シンセシス)の博大なると、精神とは、自由、平等、自治、改進、科學、哲學等の思想是れなり。　而して程無く此の皮相派の中に、例へば、小説壇にては、客觀的叙、記を旨(むね)とすると、彼のスコット、チッケンスなどに似たる派と、主觀的叙、記を專とすると、彼のバイロン、ドストイエフスキーなどに似たる派とを出ださんとする傾を生じぬ。　精神派の方の分脈も亦おなじ。　詩壇にて、主實派といひ、理想派といひ、美術派といひ、自然派といひ、政治幷に社會上にて、耶蘇教主義といひ、功利主義といひ平民主義、個人主義、國家主義、宇宙主義などいふも、概して此の精神派の分脈たるに外ならず。　固より此等諸派の間に、截然たる區分ありしにはあらねど、其の守る所異なるゆゑに、其の相に若干の徑庭を生じ、延いて其の末流に及びては、百千里の懸隔を生ぜしと、蓋し其の分の事なり。

同時に、折衷派の方にても、幾多の分脈あり、また保守派、即ち國粹派の方にても、同然の分別ありき。　管々しければ、總括して表とすべし。　文體雜駁の止むを得ざりし由緣は、此の表によりて測度すべし。　但し、下表は理論上より假設したる分派なり、實際は必ずしもかう相離れて對立

せしにはあらず。

- 維新の大革命
  - 保守(國粋*)
  - 改進(歐化)
    - 折衷
      - 和漢の思想と歐米の思想とを調和して和漢折衷の文をもてあらはさんとする者
      - 和漢洋の思想を調和して和漢洋折衷の文體をもてあらはさんとする者
    - 直輸
      - 主形派
        - 大體の語脈
        - 語法語格
      - 主想派
        - 皮相
        - 精神
          - 信仰
          - 學理
          - 主義

- 國*粋
  - 保存(守舊)
    - 上古の思想を奉じて上古の文を綴るもの(古文家)
      - 和文家の一派
      - 漢文家の一派
    - 近古の思想を奉じて近古の文を綴るもの
      - 雅文の一派
      - 通俗文の一派
        - 馬琴派
        - 近松派
        - 西鶴派等
  - 擴張
    - 復興(過去の文を以て今の心を寫すもの)
      - 通俗文(所謂元祿文學派)
      - 雅文(所謂國文學派の一部)
    - 折衷(過去の文と今の文とを折衷せんとするもの)
      - 所謂國文學派の一部分
      - 通俗文の一部分

要するに、歐化直輸派の胸中には、時としては、國文無からんとし、歐化折

衷派の胸中には、常に必ず國文あり。前者は外國を先とし、後者は日本を先とせり。而して國粹擴張派と歐化折衷派とは、一步を轉せば、容易く合すべく、就中、擴張派中の折衷派と歐化折衷派中の第二派とは、最も容易く合すべし。今や第五の外變將に起こらんとす、折衷主義(第五內變)は正しくその前兆なるべし。

國文學の興隆

こゝに國文學の興隆といふ中には、所謂元祿文學も、所謂國文學も、漢文學も、皆悉く含まれたりと知るべし。夫の維新の初に於ては、人の觀る所、聞く所、一として新奇ならざるはなかりき。彼等は此の新現象に遭うて、新感こも〴〵生じぬれども、そをいひあらはすべき適當なる詞をえ知らず、すなはち只當用に充つるために、屢〻不穩なる俗語を用ひき(此證古き英和字典などにいちじるし)されど、其の實は國文語の中に恰當の詞無かりしにはあらず。所詮周章と驚駭とのあまり對照比較するの遑なかりしのみ。而して當時最も新思想に富めりしものは、おほむね維新以後に生長なりて、舊字彙、舊語林に疎かりしかば、たま〳〵才あるものゝ世にいでゝ、吏となり、若しくは、新聞記者となりて、齊家治國の道を論ぜんとするに及びて、不穩なる俗語、卑俗なる譯語にては、思想を

表示するに不便なるを感じて、漸くおのがじゝ造語をほしいまゝにし、所謂歐文直輸派といふ一種の文體を誘致したり。是れ文體紛亂の一原因なり。其の他、わざと國文の體を改めんとせし假名の會、羅馬字會などのたぐひあり、好事の心より一機軸をいださんとて、或は何事をせんとてか我れも知らずして、新體を試みしもありぬべし、いづれも幾分かは前にあげたる第一の原因を離れざりしなり。畢竟彼等の眼中には、維新當初の國文(和漢とも)又はタカヾ文化、文政の國文體の外には、國文あることを認めざりしかば、到底これらの文字を以ては、新思想をいひあらはす能はずと思惟し、匆卒に造語せしも多かりぬべし。もとより國粹派の文士の中には、當時とても博識はありしが、双方相通ずる能はざりし故に、彼此相救ふべき便なかりき。

さて、直輸熱やうやく醒めて、互ひに倘新奇を競ふに當たりて、國文の復興は先づ通俗文界(小説界)よりはじまりぬ。蓋し、小説は、當時の乾燥なる政治上の論文よりも、詞藻の彫琢を要すると、一層多かりしがゆゑならん。　小説文體の改革は、最初は馬琴の雅俗體と三馬、春水、種彥の通俗髓と穩和なる飜譯體との混同よりはじまりて、やがて江島屋、八文字屋派の國文體と化し、更に變じて西鶴(元祿)の國文體となりぬ。これは當局

の作者等が、漸く不穩なる造句にあきて、無意若しくは有意の間に、恰當の國文を求めたりしに因るなるべし。（以上只おほむねをいふのみ）。

國語學の興隆

此の勢漸く盛になりて、全般の文體に及び、雅文派の大運動となり、やがて文法論、語格論となりぬ。是は吾人が今現に觀る所の有樣なり。漢文學の興隆とても同じ理也。要するに、自然の趨勢は、將來に向かひて、左の數箇條を宣言しつゝあるものに似たり。

（第一）簡潔にして便宜なる語格を破りて、不便なる外國の語格を用ふるは非也。

（第二）恰當の語、國文の中にあるに、不穩なる造語をほしいまゝにするは非也。

（第三）在來の文法、語格を破らんとせば、先づ破らざる可からざる所以を明にせよ。（双方の利弊を比照せよ）。

（第四）只見よ、見て後に取捨せよ。

（以上、二十四年十月稿）

文體の成行

今は過激なる直輸派も、魅せられたりし人の覺めたるが如くに戻り來

たりぬ。言文一致も今は接續詞、及び語尾の上に、僅かに其の影をとゞむるのみとなりぬ。直譯體の如きも、今は殆ど廢れたり、一時盛んなりし雨滴の點もいつか音を絶ち、早蕨も枯れ、おたまじやくしも死に果てたり。今はたま〳〵用ひらるゝも、地方の新聞紙のつゞきもの、若しは必要と認められたる所にのみ。しかのみならず、文壇の名家の宣言する所はた調和主義に外ならず。左に掲ぐる所を見よ。

森鷗外氏は木堂、學堂、兩氏の破格文章論を駁して、宣言して曰はく

「今の少年にして文を學ぶものよ外國語を文中に挿まむとせば必ず先づ國語にて同じ目的を達すべしやあらずやと問ひ其の達すべからざるを認めて後にせよ、固有名の其の儘に使はるべきは我が言を待たず、文品の浩織おの〳〵おのれが長じたるところを撰ぶはよし、他人の蹤跡をたづねずしてみづから一家の文致を出だすもよし、然れどもゆめ新文法をなさむなどゝおもふこと勿れ肆然筆を下すこと勿れ勝手自儘に書かむと欲するところを書き言はむと欲するところを言ふこと勿れ洋學先生の數固より聞くべし漢學先生の教も聞かざるべからず唯我が日本の國文の格式に至りては宜しく和學先生の前に磕頭して其の教を奉ずべし

(志がらみ艸紙第廿四號參照)

「國文には國文の法あり假名遣手爾遠波即はち是れなり假名遣手爾遠波の中にば舊ふりて廢すたれたるものありといへども其の大體に至りては金

森田思軒氏

隙の缺くることなきが如し國文は日本國人の文なり一文派の私すべき文にもあらず反對者の斥けうべき文にもあらず」(同所)

是れ豈我が謂ふ所の折衷主義にあらずや。

森田思軒氏も漢語漢文を論じたる序に、論じて曰はく「此のころ諸生が一般に漢文を讀み漢語を知らんと欲する心出で來たりたるさまあるは喜ぶべし。(中略)近ごろ落合、小中村、等諸君が、大に日本古文を唱道せるより、自然一般著作者に、一種日本古文の趣味を吹きこみ、又稍〻語法、語格に省みる所あらしめたる功績は掩ふべからず」云々、といひ、次に方今の著作者が、漢字、漢語に昏きがために、笑ふべき造語、を事とすることを難じ、末に大に宣言して曰はく

「然れども詞は物に隨て生ず駸々たる社會は日に幾多の未た嘗て有らざりし新物を齎す則ち必ず之に應ずる新詞を出ださゞるべからず余輩は未嘗有の新物に加ふるに未嘗有の新詞を以てするを異しまず亦徒らに新詞の帆影を望て駭走する亞米利加土人にあらず唯た元來本然の詞あるに之を索めず一知半解の漢字を積累して不隱不當熟せざるの熟字を私する者を咎むるなり現時著作者が需用する所の詞は一部の史記若くは一部の東坡集若くは一部の陽明集只た手に觸るゝ所をとりて之を開かば雅馴妥當熟字簇擁して其の眼下に現れ來らむ且つ新物に逢て新詞を

作るにも先つ一應のエテイモロヂーは略ぼ之を知らざるべからず苟も詞の本義上と由來とに就て絲毫の知る所なく叨りに詞を變化して經緯せむとする者あらば誰か其膽の大にして顏の厚きに驚かざらむ而して現時著作者高等官の中には實に幾個の斯の大膽と厚顏とを見るなり

(國民の友第百二十八號參照)

此の文意と文の形とを能く味ふものは、此もまた折衷派の人たるとを知るべし。

大和田建樹氏

大和田建樹氏は「文明の一致を論ず」と題して、先づ文體の紛雜を說き、次に文の紛雜は、其の緒を漢文訓點に流派ありしにひらけり、と論じて、道春點の國語の格にかなへりしこと、後藤點、一齋點がやう〳〵國語格に遠ざかりゆきしことを辨じ、その事が原となりて、和にもあらず、漢にもあらぬ、鵺文章を形づくるに至りき、と斷定し、(この說は前に落合、小中村、關根などいふ諸氏が、國文學のチャムピオンとなりて唱へしところと同じ)次に英、佛、獨語等の直譯法が、第二の一齋點とならずや、と懸念し、更にまた論じて曰はく

「前には漢文の譯讀方すでに國語の發達を妨げたり然れども彼古訓を傳へたる等の功少なからず後には英佛獨語等の譯語方やう〳〵要路に進擊し來らんとす其弊其害は前に言へり其功に至りては豈また漢文の下

巖本善治氏

> に出でんや漢文には動詞に時なく自動詞他動詞の別ことに著しからず去れば漢文直譯體には之を學びて不精密に不文法なる常に多し之を打碎きて國語の本體に復さんとする時運の至れるは原因一ならずといへども抑々今日の急務として實用として文學として理學として信用ふかき英語等の精密なる文法に誘はれたること少々なりとは謂ふべからず果して然らば文體の一致は漢文直譯體に破れて洋文直譯體に成らんとする如し洋文直譯體は漢語とも親しめり俗語とも親しめり或場合に依りては和文とも親しめり彼の弊害の點を除き文法を正し國語の性質に違背せしめざる以上は十分通俗體の材料と爲らんとす和文漢文言文一致いづれも一方に拘泥する處ありて其中を得ず洋文直譯體ひとり自然の言語を集め尋常の文章を成し以て人氣の向ふ處に任せばなるべし(本月「國會」参照)

見るべし、此もまた一種の調和折衷派に外ならぬを。而して以上三體の文脈を含味して三名家の理想の在る所を窺ふに、鷗外氏は圓滿に謹嚴なる調和を主とするが如く、思軒氏はむしろ漢語の用法を誤らざらんことを勸むるもの丶如く、大和田氏は二氏よりも一層自由主義なるが如し。 但し其の調和折衷の必要を勸むるに至りては、三氏共に一味なり。

巖本善治氏は文體一新の機、正に中せり、と宣言して、純粹の和漢文幷に

俳諧文などの今の文にあらざるべきを論斷して曰はく

「ピチー曰く、文體は人の心理なりと。　國體によりて文體を異にし、時勢につれて、文體の相違しゆくを亦論ずる迄もなし。　左れば、國民の思想内外の潮流を合して、其質に大變化を生ずるの時は、文の體亦た隨變せずんばあらず。　而して其體たる、書く人其の思想を尤とも容易に書現はすをを得、讀む人尤とも容易に解釋することを得るの方向に進み、其尤とも平易自由なる所ろに至りて安着するを定則となす。　故に天武の朝以前たゞ漢文のみ隆んに行はれたるが、土佐日記以下の女文と相合して、遂に榮花、今昔などの物語り、盛衰記、太平記の巧妙和熟せる日本文に至れる迄で、漢和全く混淆せり。　其後兩者亦別離して、各途に發達せんとしたりしかは、春臺、白石、益軒、鳩巣の流、亦起つて之を調合し、再たび、自由にして自然なる日本文とはなしける。

故に文體の發達は必らずや、斯の如き理法を歩み、國民思想の大變遷ある毎に、文體を變じて、而して其尤とも自然平易なる所ろに沈着するを必せり。　此に至りて知る、今後眞に沈着すべき日本の新文體は、漢文體にあらず、和文體にあらず、歐文體にあらず、無論俳文體、元祿體などにあらずして、即はち、東西兩洋、古今内外の文體を調合し、今日の思想を尤とも平易に言現はすを得て、而して讀者に尤とも容易に解味せらるゝの體なるを必定なり。(女學雜誌)

以て文體の成行の如何をトすべし。

(二十四年十月稿)

英語と英文學

英語學と英文學の別

英語の教課書と英文學の教課書とは自ら別あり。若し英語を教ふるを主とせば「ナショナル」「ユニオン」「チャムバー」等の讀本こそ、最も善く其の目的に適ふべけれ。然るに、府下諸私立英語學校の本意は必ずしもこゝにあらず、英語を教ふると同時に、高尙なる英文學の趣味をも傳へんとするにや、今諸學校の課程表を見るに、其のザラに用ふる所の教課書、多くは學生の學力には似ぬ甚だ高尙なる文學書にして、所謂「讀本」類の如きは、最下の一二級に用ひらるゝか、誦讀法の用に供せらるゝのみ。見よ、マッコーレーの論文、アルヸングの記叙文、ゴールドスミッスの小說、ジョンソンの『ラセラス』、ベーコンの論文などは、おの〳〵一世の名文たるに係らず、憫むべし、第四讀本生のツゝキまはし、ヒネクリまはし、已に厭き、已に倦み、漸く輕蔑せんとするに至りたるを。（今やシェークスピア、ミルトン等を讀む者、私立學校に多きを見て、此の言の信なるを知れ）。知らず、當今の諸英語學校は、英語を教ふるを主とせるか、將た又英文學を教ふるを主とせるか。

若し英語を教ふるを主とせば、成るべく多く「讀本」類を用ひて、專ら最近

の英文を含味せしめ、兼ねて近代大家の傑作を讀ましむれば足る、他のエリザベス時代の文學、若しはアン時代の文學は、宜しく純文學、古文學の領内に殘すべき也。　案ずるに、シエークスピア、ベーコンの類は、譬へば、我が奈良朝の文學にも比すべし、然るに、第五讀本生が、孜々之れによりて文法を講じ、廢語を研究し、甚しきは語源の取調を聽くことに熱衷す、吾人其の可なるを見ず。　十五童に頬鬚を剃る必要無くば、三十歳にして入齒せんは、却りて口舌の邪魔なるべし。

若し又英文學を敎ふるを主とせば、宜しく靈活なる詩眼を開きて、シエークスピア、ベーコン、アヂソン、讀むに隨うて含味し、分析し、解釋し、批評し、或はエリザベス文學の全豹を論じ、或はアン時代の特質を辨じ、古今文學の相違を說き、東西理想の異同を議し、文外の隱微を發揮すべし。文學を講ずるに當たりては、一字一句の解は末なるべきなり。　然るに、策こゝに出でずして、シエークスピア、ミルトンを講ずること、所謂讀本を講ずるが如くならんには、吾人竊に恐る、明治聖代の後進(十九世紀の文士)をして、十六、七世紀の死文の皮膚に拘々たる、腐文士、俗才子たらしめんかと。

"Beautiful indeed is his (Shakespear) speech; but its beauty lies in this very

thing, that it is the crystal shrine, itself unseen, of the speaking soul within. The less, therefore, the attention of students is diverted from his matter to his language by external calls, the quicker and stronger will be their interest in him; —an interest free, natural, and unconscious indeed, but all the better for that."

之れを要するに、當今の私立英語學校の敎授法に二種あり、用ふる所の敎課書は双方殆ど同じけれど、甲は文學趣味を先として、語學を後とし、若しは大要の領解を主として、語格の研究を客とす。此の派は諸生をして鼻先英學者たらしむべき弊あり。乙は字句の解釋、文法、語格の取調に深切にして、大體の用心殆ど空し。此の派は諸生をして目先ばかりの英學者たらしむべき弊あり。前者は、耳學問の新聞屋文人を作るに宜しく、後者は、官立學校の應試に便なり。此の二弊共に除かざる可からず。（同前）

官立學校の英學試驗

或官立學校の入學試驗に於ける英文翻譯を見る毎に、吾人は不審無き能はず、彼れは奇句奇語のみを連ねて、英語學の力を檢すれば也。げにやIdiomを解せざるものは、國語を解せざるものなるべし、然れども、idi-

語學と文學とを區別せよ

om を解せざるもの、未だ必ずしも英文に通せざるものにあらず。 ことに、字典を繙せば、忽ちにして解し得べき(然かれども prima facie には解し惡き)異(こと)やうなる字面を試題中に加へて、以て學力を檢せんとするに至りては、吾人其の本意を訝り疑ふ。 試に思へ、字句の穿鑿に明るき漢學者、未だ必ずしも、漢文に詳なるものにあらず、典故にくはしきもの、多くは文學の本旨に昧し。 我が國由來官風きそへり、官若し只管に學の煩瑣にして博通なることを喜ばゝ、明治の文壇は phraso.、idion の字典と首引して、半生を終へ、百科全書(サイクロピヂア)、人名、地名字典、萬屋字典を枕として極樂往生を遂げんとする。ベダンをもて滿たさるゝに至らん。 今日の事は粗なる變則讀の反動ならんが、此の風にして漸く長せば、或は第二の流弊とならん。 然かりと雖も語ありて文あり、語文相離る可からず。 語を解せずして能く文を解するものは無し。 吾人豈語學を要無しといはんや。 只謂ふ、古文學を講ずるに、專ら語格、文法に泥み、英學の力を檢するに、只管イヂォムと異字面とによるは、甚だ其の當を誤れりと。 此は元より英文學に關してのみいへるにあらず、國學者、漢文家に向かひても、同樣の希望を訴へんと欲す。

“Word-mongering and lingual dissection—a vice as old of Cicero's time who

pointedly ridicules it in describing one as a chanter of formulas, a bird-catcher

死灰再燃

枯木に燃ゆる火の光、生木の丶光を凌ぎ、新光焔の萬丈は、此の舊光焔の裡より燃えいづること屢〻あり。　夫の歐洲の文藝復活の如き、古學の死灰再燃して、英佛到處の暗黒を照らし、近文黎明の縁となりにき。　蓋し家鷄已に唱ひて、霜夜未だ明けず、鐵衾稜々たる時、夢魂俄に驚かば、人皆喜んで昨夜の爐を擁し、冷灰を掻きわけて餘暖を求めんと試むべし。維新以來飜刻の書類が歡迎せられたる、稍〻此の趣あり。

飜刻三遷

大躰の上よりいはゞ、彼の豫約出版の流行以來、飜刻物の本意、おのづから三遷したりとも評すべし。　其の中第一期は豫約出版の時代にて、明治十六、七、八年の頃に最も盛んなりしものなり。　第二期は元祿文學流行の時にて、西鶴物、近松物などが復活せし昨年をいふ。　第三期は現今を謂ふ、すなはち古文學出版時代なり。　さて此の三期のうち、第一期の飜刻には、出版者の心は知らず、買ふ者の方に於ては、是れといふ判然たる目的無かりしものゝ如し。然れども、稗史野乘の類が、最もよくハケた

りしを思へば、娯樂消閑の料にとて購ひし者多かりしか。尤も、此の折にも、『綱鑑易知錄』『康熙字典』などをはじめとして、『史籍集覽』の如き『嬉遊笑覽』の如き、其の他、史傳、子類などのむね〳〵しきもいで、隨筆の類もあまたいでたり。併しながら、いづれも必要ありて飜刻せられたりとはいはんよりは、利に敏き書肆が、活版印刷の便宜を知りて、從前は其の卷帙浩繁なる爲に、需要はありながら流布せざりしを、廉價に賣り捌きて利を射んと欲し、競つて飜刻に從事しきといふかた、恐らくは當たれるならん。其の他にも尚因緣ありとせば、革命の餘波やうやく收りて、人々が多少の閑暇安心を得たりしと、新代の讀者が追々に增加して、彼等が見慣れざる舊書類の需要、冥々の裡に增加せし事、及び新著述の見るに足るべきもの、晨星の如く寥々たりしことなど、其の重なるものならん。されば、第一期の飜刻物は、(稗史野乘の外は)しばらく書架の粧飾となりて、朝夕に人の目に觸れたりしも、遂には文庫の奥のかたに、押込の身となりしが多し。要するに、第一期の死灰再燃は、わづかに、稗史熱に導火を與へし程に止まり、なべての文學の上には、殆ど何の影響をも與へざりき。

第二期、即ち小說壇に西鶴熱の熾なりし時の飜刻は、前者とは趣を異に

せり。此のたびは、兎に角に、やゝ判然たる目的ありて物せし飜刻なりき。換言すれば、國文の要素を、過去の文學中に求めんとする心が、暗に此の飜刻を促したりしなり。西鶴、近松は、其の文法の自由なる所に於て、先づ新文人の需要にかなひ、其の或觀念に偏着せずして、普く人性を描けるが如き所、またよく當世の需要に應せり。併しながら、斯くの如きは、むしろ裏面の因緣にして、表面の因緣は、舊書類に疎き新代の讀者が、更に增加せしによることとならん。

第三期、古文學の翻刻は、國語學の興隆に伴ひて起これるにて、一方に於ては、歐化派に對する國粹派が反動の餘響なりといふべく、他の方に於ては、元祿の俗文に對する、雅文派が反動の餘波なりといふべし。夫の珍書熱の如きは、實にまた其の餘波なり。奈良朝の文學、鎌倉時代の文學、足利期の文學、德川期の隨筆など、種々の史料と共に、陸續として梓に上れり。中には、第一期にいでたりしもあれど、今は其の本意を異にして現れ來たれり。思ふに、此の第三期の翻刻は、明治文學の素を作るものならん。

將來の翻刻

從前の翻刻は、おほかたは書肆の手に成れりき。たとひ名家が校正し

たりといふ名義あるも、名家が眞に發企せしにあらねば、之れを書肆の手に成れりといふ、不可なし。吾人は校正の粗漏なるを見る毎に歎息す。夫れ古文の背後には人あり、人の背後には當代の社會あり、今より後古文を翻刻せんとする者は、須からく此の背後の社會を見せしゆん料にとて、翻刻に從事すべきなり、過去の主觀的歷史を編むべき料にとて古文學を翻刻すべきなり。さて、玆かせんとせば、尠くとも左の數箇條を守らざる可からず、

（第一）作者の略傳、若しくは作者のたしかならぬは、其の由來に關する古人の說を擧ぐること

（第二）異書を參照して異同を正すこと

（第三）其の書に關する古人の評の、最も精確妥當なるものを揭ぐること

（第四）假名にて書きたる姓名、地名、官名等は、文章の結構に關係あるものにあらねば、讀者の便宜をはかりて悉く之れを眞名に改むること。

（第五）躰言幷に形容言といふとも、疑はしからぬ限りは、同じ理由によりて眞名を塡すること。

(第六)字躰、字義等の疑はしきには、考を附し、註を加へ、時宜によりては、事實上の註釋をも加ふべきこと。

(第七)これらの事は、總て其の道々に明るき人、即ち信用するに足るべき學者に依頼すること。

德川期には、此の數箇條を實行したる翻刻もあまたありしに、今印刷の自在なる時に當たりて、此中一ヶ條をだに守りたるが尠きは、文運の未だ進まざるによれるにや、將た一時の利を先にするものゝ多きが故か、吾人は中根淑氏の『保元物語』に於て、わづかに我が希望の片影を認めたるのみ。

(二十四年十月)

外國語學と外國文學

方今最も廣く國内に行はれたる外國語は、英語なるべし、獨語、佛語之れに次ぎ、露語は又之れに次ぐ。近年大學の敎課中に、伊太利の語學を加へてより、これも亦修むる者あり。以上四ヶ國の語に、漢語と國語とを加ふれば、既に六國の語具はれり、少數の間に行はるゝ希臘語、羅典語、梵語、ヒブルウ語、支那語、朝鮮語等を除くも、語學研究の道は甚だ不振なりといふべからず、年限の割合には、其の講習の步武頗る進みたりといふ

べし。さはあれ、轉じて文學上に就きて觀れば、語學隆盛の割合には、外國文學の輸入は甚だ微々たりといふべし、就中、外國文學の趣味は、僅に其の皮膚幾分を齎したるに過ぎず。英の美文學は姑く措きて、先づ佛獨の美文學を言はんに、彼等は國文の上に効果を見はせりとは明言しがたし。佛語の我が國に行はるゝや、久しきこと英語に劣らず、今も尙大學に佛文科といふ目さへあり、よし其の初め佛語學は、政治上の需要にのみ應せんとて講習せられたりきとするも、今は既に少くとも二十四星霜に及べるものならずや、其の美文學の趣味も幾分か輸入せらるべき時なり。然るに、今日の文壇を觀るに、吾人が知れる所によれば、佛蘭西美文學の特殊の趣味は、獨り兆民居士(中江氏)の奇想に寓りて、一斑を國文に現じたるに過ぎず。又見よ、獨乙の美文學を。初には政治上の需要ありて、次には孜學上の必要ありしかば、獨語學の隆運、一時殆ど英語學を凌ぎ、今も尙或部分に於いては、英語學の光明を蝕しつゝあるなり、然るに、美文學の壇上を見れば、ギョオテ、シルレルの靈妙なる美文は、僅に鷗外漁史(森氏)の如意筆を借りて、幾分を化現せしに過ぎざるなり。而して露國の美文學の如きは、緻密なる二葉亭(長谷川氏)が飜譯によりて、僅に彷彿の趣味を傳へたるのみ、効果尙微々たりといふべし。

實にや衣食足りて後に禮文は具はらん、實用の具備せざるに、美文の具はらんを求むるは背理なるべし。さもあれ、他の英語學は、其の由來最も古く、其の行はるゝとも最も廣し、前の三國語に望みがたき事も、英國語に向かひては望み得べき筈なるに、然るに、今の國文壇を見よ、著作者、英文の風趣に富めりや、讀者、英文の特質を解せりや。革命の後日尚淺し、吾人は今の英文壇に、マッコーレーなきを怪しまず、カーライルなきを怪しまず、テニスン、ブラウニングなきを怪しまざる也。いかでサッカレーなくエリオットなく、スコットなく、ヲオヅヲオス、バルク、アヂソンなきを怪しまん。況や、ミルトンなく、ベーコンなく、シエークスピアなきことをや。吾人は只外國美文學のイーサーが、讀書寰中に稀薄なるを怪しむのみ。三大外國語の多年瀰漫したる割合には、新文學の中心たる此の東京の太氣の中にも、外國美文學の原素の、甚だ微薄なるを怪しむのみ。試に聽け、多數の讀者の言ふ所を。渠等の耳は頗る英米文豪の名に肥えたり、渠等の口は屢〻獨、露の名家を呼吸す。渠等はミルトンの大詩人たるを知り、シエークスピアの大脚本家たるを知れども、知れるのみ、會せるにあらず。此の故にドラマと小説との別をだに知らず、ユーモルと戲謔との別をだに解せず。ドラマを作れる才子を見れ

今の讀書社會は未だ英文學にだに通ぜず

ば、直にシエークスピアの後身なりと稱し、破格の新躰詩を作るものあれば、ミルトンの沒韻詩を引き來たりて稱ふ。　皆知らざるが爲なり。或はスコットを馬琴に比ぶ、其の故を問へば、曰はく時代小說を作りしが爲と。　或はフィールヂングを春水に對す、其の故を問へば、曰はく敗俗の譏りありしが爲と。　又彼のゾラを排斥するものを聽け、多く彼れが作を讀みたるは默し、一二部を卒讀せし者は目を刮り、拔讀したるは唾棄し、噂のみを聞きたるは、ゾラが作は淫書なりと罵倒す。　今の小說なども讀む者の多數はおほむね斯くの如し。　さて、美文の他の部門にも、亦伯仲の趣あり。　流暢の筆をもて史傳を作れば、詞と想とは如何ばかり彼れに異なるも、其の人は即ちマッコーレーなり。　詼諧の筆に世を嘲れば、其の主義はいかばかり彼れに背ざるも、其の人は忽ちスキフトなり。想高尙にして語、怪澁なれば、其の人一朝にしてカーライル、意たとひ深長ならざるも、語、若し甚だ簡潔なれば、其の人儼然としてベーコンの稱を得。　方今小名家の螽々焉たる、蓋し此の故のみ。　必竟は今の讀書社會は未だ英文學にだに薰染せざるなり、いかでか他の外國美文を知らん。　渠等は只美文學家の姓名にのみ飽食したるのみ。　是れ併しながら、年月の度より言へば、元より當然の結果ならん、吾人は當世を嘲り、兼

ねて吾人みづからを嘲らんとて、無益の辯を費すにはあらず、外國美文學を輸入すべき、一好方便の存在したるを、世人放擲して顧ることなく、爲に美文學の進歩をして遲緩ならしめし跡あるを悲み、其を聊か論せんとて、其の序(はしがき)を作れるのみ。　好方便とは文學革命期の陳套手段なり、然り、陳套手段なれども、陳套手段なるが故にこそ、功を奏することのたしかなるものなれ。　雨の笠、夜の燈、陳手段ばかり奏功のたしかなるは無し。　何ぞや。　外國美文學の縝密なる翻譯是れなり。

論より證據といふこと、稚孩を敎ふる時に最も眞なり。　分析の理論は昧者に益せず。　此の般模範の効用は、前人已に言ひ盡くしたる所また言ふを俟たざらん、而も尙外國美文學の輸入に關しては、再び古言を借り來たらざるを得ず。　チョオサルの詩の、如何ばかり伊文學に負ふ所ありしか、エリザベス文學が、如何ばかり外國文學に負ふ所ありしか、獨逸の新文學が如何ばかり英、佛の美文學に負ふ所ありしかを知れる人は、縝密誠實なる翻譯の、當世に用ゐることを認むるならん。　乞ふ少しく飜譯の必要と我が飜譯の状況とを語らしめよ。

（同前）

外國美文學の輸入

外國文學を輸入すべき方便は、的當縝密なる翻譯を盛んならしむるより善きは無し、就中、外國の美文學趣味を誘致せんとせば、先づ翻譯をもて始むること、穩當にして多効なるべし。

其の理由

(第一)如何なる天禀の才ありとも、緒を得ざるうちは、發くこと能はざるものなり。昧者はヒントを得るも呆然、才ある者はヒントを得て豁然。天才は猶萬斛の火藥を包める袋の如し、滿腹皆火なり、皆詩なり、而して外國美文學の翻譯はこれが導火たるに餘りあるべし。今や批評の道少しく開けて、作を是非すること行はるれど、所詮、空漠たる理論の力のみにてば、美文家を造り得べしと思はれず。短氣なる世間は、已に漸く反響無き空論にくたびれんとする色あり。彼等はひそかにつぶやくらく、混沌たる此の美文界、四面黑うして茫々たり、汝此の裡に立ちて、獨り眉を揚げ、聲を枯らして、解しがたき抽象的言語を用ひて、Unknown X の形狀を辨明し、それが性格を分解すとも、何者か能く其の意を解せん。百度說法の功能は、一日實踐の德化に如かず。汝むしろ火繩を揮ひて、汝が Unknowu X の實躰を示せ、せめてそが一斑をだに示せ、然らば、婦幼とても點頭くべし、況や天才ある作家をやと。こはヒントの必要なる

其の二

を諷するなり。吾人は外國美文學の翻譯を得て、此の需の急塲に應せんと欲す。 蓋し、今の有爲なる文人の中に、和漢の文學には精通したるも、泰西の文學には、殆ど全く通ぜざる人あらん、且此等の人の中には、僅にヒントをだに得たらんには、或は一躍して豹變し、新文學の先導となり得べき人なきにしもあらざるべし。又はほゞ泰西の美文學に通じたれども、和漢の文學に精しからぬが爲に、如何にして、彼れと此れとを調和歸一すべきかを覺り兼ねて、岐路に彷徨ひつゝある人もあらん。若し國文の國文たる所以を失はずして、而もよく原文の思想と、其の章句の美とを傳ふるが如き、良好の翻譯出來せんには、此の後者をも裨益すべし。

(第二)今新躰の脚本、小說、詩歌等を興さんとする者尠からず、然れども、文壇にも習慣の弊まぬがれがたく、假令其の作は善美なるも、見慣れざるはよからぬやうに思ふこと間々あり。 思ふに、自ら信ずること厚からぬ作家は、半途にして惑ふことあらん。オーソリチー崇拜は人間の常情なれば、大家の作を翻譯して、先づ讀者を敎化せば、今は周圍に制せられて伸び得ざる作家も、轍鮒の水を得たるが如く、第三流に止まるべかりしも、或は第二流に上ることとあらん。

(第三)和漢洋三文躰の歸一策は、或は美文學翻譯の最中に於て定まらん、定からざれば、心長く自然の變遷を俟つの外なし。

翻譯の、外國美文學輸入に恰好なる所以を求むれば、尙あるべし、されど今は說くを須ひず。　吾人は只一日も早く、世の技倆ある文學者が、未分の文界を開闢するの手段として、盛んに翻譯に從事せんことを願ふのみ。

外國美文學如來

美文を翻譯して、髣髴原著の現れ來たれるかと思はしむる譯者は、吾人之れをたゝへて如來と名づくべし。　明治文壇幸ひにして已に三如來を得たり。　英文如來を森田思軒氏とし獨文如來を森鷗外氏とし、魯文如來を長谷川四迷氏とす。　輓近内田不知庵、原抱一庵等の諸氏、また大に翻譯に力を盡くせり、文界遠からずして二三の新如來を加ふべし。吾人は他の幾百羅漢が、陸續紫雲に駕して登天し、更に如來となりて來降せんことを待つこと、大旱の雲霓も啻ならず。

翻譯の方法、並に翻譯すべき美文學の種類につきても、吾人多少の思案あり、次に少しく之れを辨ぜん。

翻譯すべき外國文學

文章三種

文章を大別して、智の文、情の文、意の文の三種とす。第一種は學理の文、第二種は情趣の文、第三種は誘說の文なり。夫れ智の本性は、深き井の水の如く冷なり、苟も是なれば、我が是、他の是、分別無けれど、情はこれと異なりて、常に爐火の如く炎々たり。我が情の熾なる時は、他の情悉く非なりとも見ゆべし。水なるが故に、智は能く他と融和すれど、火なるが故に、情は他と相容れず。たま〳〵相容るゝことあらば、爐(いろり)の火の已に滅したる時なるべし。此の故に、重に智力にのみ訴へたる文章は、時と處とを異にするも、智者は能く之れを解すれども、情趣の文は、若し時、處を異にすれば、識者も尙會せざることあり。こは作者と讀者とが習俗境遇を異にし、隨うて風尙を殊にすればなるべし。爰に會せずといふは、風流の眞趣に會通せずといふ義なり、おほむねの情趣をも解し得ずとにはあらず。例へば、絕えて歐文を知らざる者に、ミル、スペンサルの論文とシエリー、バイロンの歌とを、二つながら我が俗言に直譯して示さんに、前者の理は解せらるべけれど、後者の美は解せらるべからず、

好尙の相異大なればなり。併しながら、情美の解せられざるは、尙別に由緣あり、情文の理文よりも詞に依賴する所多きこと是れなり。シエリー嘗て詩想と詞調(情と詞)との間に、離れざる關係の存することを論じて、其の末に曰はく「詩人の作を翻譯せんとするは、猶ヴイオレツトの花を採りて坩堝(るつぼ)の裡に投じ、元(もと)のまゝなる色香を求めんとするが如し」と。げにや情文の美は、想と共に詞、調の二をも翻せざれば、これを傳ふること叶ふ可からず、此の故に、智の文は譯し得べく、情の文は譯し難し。若し夫れ意の文は、半ば智に因緣し、半ば情に由來す、されば、智に因緣する所多きは、意の文も譯し易く、情に由來する所多きは(詩歌と同じ道理にて)譯しがたかるべし。

近年の翻譯文

明治維新の後、最も盛りに行はれしは、智の文の翻譯なりき。ミル、スペンサルの學理、モンテスキウ、ギゾー等の著書は、總て智の文に屬せり。其の他種々ありしが、いづれも大躰の理を傳ふれば足れりとせしなり。譯者が只義を取りて、詞調を取らざりしは此の故なり。其のころ『花柳春話』を魁として、美文の翻譯、就中、リツトンの諸作、處々より翻譯せられて出でしが、それらは皆義翻なりき、リツトンの想の大躰を取りてはし

いまゝに國文に現じたるものなり。　夫の藤田鳴鶴氏(或は謂ふ朝比奈知泉氏の力多きに居ると)の『繫思譚』にいたりては、翻譯の法一歩を進み、リットンが想と詞とを、双つながら移さんと力めたる跡あり、されど、其の調にいたりては、いかにありけん。　ましてや、想、詞、調の關係、元の儘に移されたりやあらずや、覺束なし。　最近の翻譯家、森田、森、長谷川の三氏に至りては、此の三素を併せ傳へんとしたるが如し。　森氏が首となれるS、S、S、社が、『國民の友』に載せし韻語の正翻によりても、ほゞ其の旨のある所を知るに足れり。　又森田氏が『探偵ユーベル』の後に書したる文を讀めば、氏の正翻の苦辛を知るべし。　而して長谷川氏の經營慘憺は、吾人親しくこれを知れり『めぐりあひ』、『あひゞき』等を味へる人は、原文を讀まずとも、其の飜譯の緻密なるべきを覺れるならん。　要するに、三氏先づ緒を發きて、明治の翻譯は漸く智文界より情文界に向かはんとせり、といふ、不可なからん。

美文學翻譯の方案

吾人が渴望するは外國美文の良翻譯なり。　而して美文學の翻しがたき所以は、前に畧いへるが如し。　さらば如何にせば、此の渴望を醫するを得べきか。　此の問題もまた甚だ答へ易からざるものなり。　蓋し良

ジョンソンの說

翻譯に達すべき手段に關しても、古來種々の議論あり。昔しベン、ジョンソンのホレースを譯せしや、原文の一語は一語をもて譯せざる可からずと思ひ、フェルタムもまた、一行の句は、須からく一行に譯すべしと思ひき。又サンディスが『メタモルフォーゼス』を譯せしや、原詩と譯詩とは、其の句の數すらも全じからざる可からずとて、痛く心を惱ましきときこゆ。これら皆直譯風の必要を主張するものなり。デンハム嘗て嘲りて曰はく「直譯家は猶若年の遊子のごとし、自國の語を外國に遊べるうちに失ひて歸る、而してもたらし歸りし語は國人に通せず」と。博士ジョンソンは論じて曰はく

國語の性格の異なる時は、同じ趣にいひあらはせる言葉が常に雙つながら優雅なるにあらず、相ならべて見ることを得る間は、最も密接なる翻譯が最も良きやうに思はるれど、分離する以上は、おの〳〵別におのづからなる道を取らざるを得ず、されば、吻合の望みがたき場合には、稍〻同じきを得れば足るとすべきなり。ドライデン曰はく、翻譯は解釋の如く緩漫なる可からず、又た直譯の如く密接なる可からずと。凡そ上國の國語には、種々の文脉あるものなり、潔、寬、高、下、是れなり、若し文脉の選擇宜しきを得ば、ドライデンが譯者に望める類似ほどは得らるべし。總じて翻譯者は、原作者の想を含味し、若し彼れが用ふる語、英國の語なりせば、果たして如何なる文脉にあた

ろべきを察し、恰も適ひたるを取りて、其の想を表出すべし。　原文粗々しく宏壯ならば、譯文も粗々しく宏壯なるべし、誇張虛飾の文も、格言めかしたる簡潔の文も、皆原の儘に譯するをよしとす。　譯者は宜しく原作者に似るべし、優らんと力むるに及ばず

と。　蓋しジョンソンの意は、原作者の本性を發揮すべしといふにありて、重きを譯文の骨肉に置き、必ずしも皮膚に置くべからずといふ者の如し。　又ドライデンが翻譯論の大意に曰はく

外國文を翻譯せんとする者は、先づ自國の文に精通したる好批評家たることを要す。　且十分に原作者の國語を會得し、兼ねて自國の語に自在ならんことを要す。　例へば、外國の詩歌を翻譯せんとせば、おのれ先づ十二分の詩人たること肝要なり、さて翻譯するに當たりて、善良の英語をもて、詩に用ふべき辭品を用ひ、韻律にしたがひてものすべきは勿論なれども、さばかりにては尚足らず、尚更に大なる難事あり、他無し、原作者の特質を失はざるやう力むること、是れなり。　特質とは、其の作者をして他の幾百人に異ならしめて、汝が通辯せんとする其の一個人と見ゑしむる所以のものをいふなり。

と。　案ずるにドライデンのいふ所は、ジョンソンの說に同じ、語を失ふとも意を失ふこと勿れ、といふ意なり。

我が近年の文壇に於ては、公に翻譯論を示したる人、いと尠なし。　嘗て

『國民新聞』にて、森鷗外氏と三木竹二氏とが、戯曲の飜譯法を說けるを見たり。其の說に曰はく

凡そ戯曲の譯は力めて其意を失はざらむとするものなれば、字を逐ひて原文を寫出ださむとする時は、我國の人の解し得ざる怪僻の語となるべし、されば古より歐洲諸國の民の相互譯述して殊邦文學の趣味をおのれが鄉に遷したる蹟をたづぬるに、一として逐字の譯あること無し

さて例證若干を擧げたる後、又曰はく

盖し戯曲を譯するものゝかゝる自由をなす所以は、戯曲といふもの彼反覆咀嚼して其味を知るべき哲學書などゝはおのづから殊なればなり、哲學書に於ては、作者に人と同じからざる用語例ありて、一字といへども動し易からずその譯者は宜しく字を追ひて、これを譯し、文の或は難澁となるをも厭はざるべきものなれど、戯曲はこれを讀みこれを聞きて、その幻象直に讀者聽者の目前にあらはれざるべからざればなり、かるがゆゑに曰く、戯曲の飜譯はこれを哲學書などの飜譯に比すれば頗る自由なるものなり、と。

云々。これまた美文學の飜譯には、逐字譯の無要なるを說けるものなり。若し鷗外漁史の說をして、爰に見えたるに止まらしめば、漁史はいと〳〵自由主義なるが如く見ゆれど、其の原作者に忠實にして譯文の極めて緻密なることは、漁史の譯を咀嚼したるものゝ知る所なり。只

大意だに移せば可し、といふ放縱なる論とは異なり。必竟、『國民新聞』に見えたる説は、『國會』に見えたる非難に答へんとて述べたるものなれば、固より漁史が翻譯論の精髓を窺ふに足らず、吾人は今の文壇の爲に漁史が説を聽かんことを切望す。さて又森田思軒氏が翻譯を論じたる説も、いづれにてか見たりきと記ゆれど、今は明かに思ひ出ださず。吾人は尙前に擧げたる諸論と私見とを折衷して、翻譯方案數條を作り、大方の敎示を乞はんと欲す。

(此の稿未完にして中絶せり)

文學と安心

文學者はまづ安處を得ざるべからず

人と哲學と相關係して離れざるべくば、文學と哲學との間にも密接の關係あるべき也。哲學が美文學を生むとはいはず、人々安處を哲理中に求めんとするの傾あるをいふなり。美文學の上のみをいふも、哲學の影響の著きもの間々あり。コールリツジの理想は、重に獨逸の超絶哲學より來たり、ヲオヅヲオスの詩には、シエリングの絶對哲理隱見す。或はポープがライブニツツの旨を歌ひ、シルレルがカントの哲學を呼吸し、馬琴が儒佛を奉ぜしなど、擧げていふ可からず。二三年前までは少壯の文人殆どおほかたは彫蟲のわざにのみ心を潜めて、想を重んずることと大ならざりしが、今や氣運漸く變じぬ。思ふに渠等は先づ安心の處を得て、さて後に志を言ふことの必要を認めたるものゝ如し。此に於いてや、啻に哲學のみならず、苟くも安心立命に關係あるものは、

次第に文學と親接し來たりぬ。或意味にていへば、清教がミルトンを造り、羅馬教がダンテを造りきともいひ得べし、さすれば、哲學及び宗教の、新文學に於ける關係、決して等閑に看過すべからず。

歐文直譯幷に訓點

方今普通に行はるゝ歐文直譯法の拙劣にして不便宜なることは、識者の夙に認めたる所なれども、當初の習慣の脫しがたさに、今尙依然として多數の間には行はれる、こは普通に行はるゝ英和辭書の譯語の不當なると其の訓の宜しきを得ざるとに因る。試に英和辭書に見ゑたる訓と、漢和字書に見えたるのとを比べ見よ、前者の訓の奇怪にして不當なるはいと明なり。例へば、會す、食すと訓ずべきを、會する、食すると、形容詞の如く訓じ、To meet即ち會せんとなどあるべきを、會す又は會すべくなど物せる、全く我が國の文語法に背けり。最も必要なる働詞の訓に於てだに、かゝる誤あるが故に、其の餘弊四方に及び、終には國文と直譯文との間に、大なる相違を釀さしむるに至れり。或一端よりいへば、輓近の文體紛亂は、彼の漢文訓讀の誤謬より來たりしと同じ程に、歐文直譯の誤謬よりも來たりしなり。大和田建樹氏は、早くも茲に眼を着けて、歐文直譯の將に未來の國文を紊さんとするを憂ひしが、予は已に

辰巳小次郎氏の新訓法

其の弊の尠からず成り立ちつゝあるを信ずる也。　思ふに、歐文直譯(訓讀)法を改むると共に、英和辭書を一新することは、所謂三文調和策の端緒たるべき方今の急務なるべし。　五六年以前のことなりしか、或有志の人々(其の名を記せず)相圖りて、直譯の方法を改めんとて、そが爲に小冊子を綴りしことありしが、時期の尙到らざりしにや、其の後は噂だに聞こえずなりにき、されども、苟も識ある者は、固より不都合を感じたるが故に、其の人自身だけの範圍にては、種々の方法をも案じたりしなり。予も、此の年ごろ、私立の諸英語學校に出入して、從來の訓讀の不便宜なるを感じ、ひそかに譯語の不當を正し、訓讀の方法を工風したることもあれど、周圍の習慣に壓せられて、兎角に望を得遂げざりしかば、隨うて、整然たる工風もなかりき。　然るに、文學士辰巳小次郎氏、近ごろ『訓點英語讀本』といふ一小冊子を著し、巧に漢文訓讀の法を英文の上に應用して、斷然積弊を破らんと試みたり。　其の書は片々たる方三寸ばかりの小冊子なれども、進んで公衆に示したる著者の深切と着想とは、吾人が贊同して助成せんとする所なり。　左に著者が序文の一部分と凡例とを揭げて、世の訓讀家の參考に供す。

「余が本書を著したる所以の一は正則的語學の進歩を助成せんと欲す

るに在り.　世人の英書を譯讀する,少しくも英人述意の次第,日本語學の法則を顧みず.　故に"何々が何々する事の其事が何々なり""何々が何々する事ほど左樣に何々が何々なり"などゝ云ふ怪しき譯解を下す.　此樣の譯解は英人が先に述べたる意を後にし,後に述べたる意を先にす.　顚倒亦た甚だし.　英語の正則研究之が爲め妨害を受くることゝ少小ならざる可し.日本語學の法則を顧みざればこそ,憲法文面に"天皇の名に於て""立法の權を行ふ"などゝ云ふ文句を見るなれ.　"天皇の名に於て"と云ふは"名を天皇に藉る"と云ふに紛らはし."天皇に代りて"と云ひたし."立法の權を行ふ"と云ふは"立法の力を行ふ"と云ふに均しかる可し.　力は有すとか用うとか云ふ可くも,行ふとは云ふ可からず.　故に權も有すとか用うとか云ひたし.　若し權は事なり行ふを得と云はゞ,議論の限りに非ず.斯く譯解の法亂れ居るは,單に異國語の正則研究を妨害する而已ならず,又た日本語の正則用法を妨害するものなり.故に余は此等妨害の防禦を計る方法を示めさんとして本書をものせり.　本書は英文に就き,名詞にはテニヲハを施し,イヂオムには意譯を加へ,相隔れる句には前後の次第に由て讀むの方法を示せり.　世間此類の書至て少し.　余模範とする所乏しきに苦めり.　本書に瑕瑾の多からんは固より余が認むる所なり.　幸に世間同感の士高評に吝なるなかれ.

明治二十四年十月

編者　しるす.

譯解の凡例

本書に用ゐる記號は次の如し―

(一), 1, 2, 3 等の數字,並ニ a, b, c 等

(二), >

(三), ‾

(四), *

"1", "2", "3" 等は譯讀の順序を示めす; 例へば―

I will^{2} soon return^{1}.
余ハ 可シ 速カニ 返ル

">" は相連れる二個以上の語が次第に下より上へ讀み返るべき者なるを示めす; 例へば―

I will > walk.
余ハ 可シ 歩行ス

"‾" は二個以上の語が相離る可からざるを示めす; 例へば―

It‾is‾true‾that Alexander was>highly‾talented.
實ニ 歷山ハ ナリ 高材

"*" は他の數個の語を介して相離れたる二語が一熟語をなすを示めす; 例へば―

Fuji-san is^{2} so* high^{1} that* its top is^{2} always covered^{1} >with>snow.
富士山ハ ナリ 高山 ユエニ 其 頂ハ 有ル 常ニ 蔽ハレテ 以テ 雪ヲ 』

マクベス評釋の緒言

シェークスピアの
四作劇期

シェークスピアが脚本と稱せられたるうち、確に彼れが作と定まれるもの、およそ三十六篇に餘れり。一千五百八十八年(作者二十四歳の時)より、一千六百十三年までの作なり。作者は一千五百六十四年に生まれて、同六百十六年、五十二歳にてみまかりぬれば、絶筆は四十八九歳の時なりしならん。すなはちシェークスピアが著作の時期は、およそ二十五年なり、そを、彼が作に現はれたる技倆、結搆、着想、等の異同を元として大別すれば、四期となる、第一期は彼が修行期ともいふべき時にて、即ち諷刺詼謔を主としたる喜劇と『ロメオ、エンド、ジュリエット』の悲劇とを作りし時代なり。第二期は史劇と快活なる喜劇とを作りし時代、第三期は深刻なる悲劇と、表、快活にして裏、嚴酷なる喜劇とを作りし時代、而して第四期は沈靜嚴肅にして、しかも優美爽快なる悲喜混交の劇を作りし時代なり。シェークスピアの著作は此の四期に於て著き異同あり、着想の優劣はいふまでもなく、技倆、結搆にも著き差違あり。此の故に、シェークスピアを知らんとせば、尠くとも、此の四期に就きて、おの〳〵一二篇宛は讀まざるを得ず。例へば、第一期の代表としては、彼れが處女作とみづから稱せし『ヸーナス、エンド、アドーニス』といふ敍事の詩、兼

マクベスを評釋せんとする理由

ねては『ロメオ、エンド、ジュリエット』など、第二期の代表としては『キング、ジョン』『ヘンリー四世』『リチャード三世』など、また『マルチャント、オフ、ヹニス』など、第三期の代表には、所謂四大悲劇『ハムレット』『マクベス』『リアー』『オセロー』など、第四期の代表には、『テムペスト』『キンタルス、テール』など。但しこれは只予か卑見によりて選りいでたるのみ、選擇は人々の見る所によりて異なるべし。

シェークスピア研究の方法よりいへば、第一期、第二期と順序を追うて評釋するかた穩當なるべけれど、思ふ由あれば、態と第三期の作よりはじむべし。其の故は、第一期の作には、語呂、口合、等多ければ、解釋すればとて、英語を知らぬ人には到底會得せらるまじき故なり、而して此の註釋は、英語を知らぬ人にも、多少參考になれかしとてするなれば、予が本意にたがへり、さて又第二期の作も、喜劇を置きていへば、英國史に疎き人には、興味甚だ深からず、且は歷史上の管々しき註釋を加へんもうるさし、加之、技倆も、着想も、第三期のに劣りたり、所詮、本釋の主旨は、シェークスピアの本躰のあらましを、普く邦人に知らせんといふにあれば、先づ傑れたるを取るかた至當なるべしとて、終に四大悲劇の隨一なる『マクベス』の劇をえらぶことゝしたり。

或は大躰を知らせんとならば、管々しき註釋よりは、縝密嚴正なる翻譯を掲ぐるかた優れりといふ人もあるべけれど、そは予の如き謭才不文のものゝ企及すべきことにあらず、此の故に、予は重に原文の字句を追うて、意義を解釋することを力め、必ずしも詞美を傳へんとはせざるべし。讀者若し眞にシェークスピアの詞美を知らんとせば、原文に直接して會得せよ、予は只語義を明にするのみをもて甘んずべし。

評釋といふにも二法ありて有りの儘に字義、語格等を評釋して、修辭上に及ぶも一法なり、作者の本意若しくは作に見えたる理想を發揮して、批判評論するも評釋なるべし。予はじめは『マクベス』を義譯して、專ら第二の評釋の法を取らばやと思ひたりしが、又感ずることありて、むしろ第一義の評釋のかたを取るべしと決しぬ。其の故如何といふに、第二義の評釋、即ち「インタルプリテーション」は、若し見識高き人に成れる時は、讀みて頗る感深く、益もあるべけれど、識卑き人の手に成れる時は、徒に猫を解釋して虎の如くに言ひ做し、迂濶なる讀者をして、あらぬ誤解に陷らしむる恐あり。こはシェークスピアの作の、甚だ自然に似たるより生ずることなり。此の點は大切の事なれば、いはでもの論に似たれど、左に少しく辨じ置くべし。

シエークスピアハ造化自然に似たり

予がシエークスピアの作を、甚だ自然に似たりといふは、彼れが描ける事件、人物が、實際のに同じとにはあらず、彼れが作は讀む者の心々にて、如何やうにも解釋せらるゝことの、酷だ造化に肖たるをいふなり。　人々試に自然といふものを觀よ、心を虛平にして觀れば、自然は只自然にして、善惡のいづれにも偏(かたよ)りたりとは見えず。固より意地わるき繼母の如きものとも見えねば、慈母とも見えず。然るに、數奇失意の人は、造化を怨み、自然を憤りて、此の世を穢土と罵り、苦界とそしるなり。　さて又得意の人は、之れに反して、造化を情(なさけ)深き慈母のやうに思ひて、此の世を樂園とも思へり。　必竟、人々の思ひ做し次第にて、苦とも樂とも見らるゝが自然の本相なり、此の故に、造化の作用を解釋するに、彼の宿命敎の旨をもてするも解し得べく、又耶蘇敎の旨をもてするも解し得べし、其の他、老、莊、揚、墨、儒、佛、若しは古今東西の哲學が思ひ〳〵の見解も、之れを造化にあてはめて、强ち當たらざるにあらず。　否、造化といふものは、此等無數の解釋を悉く容れても餘りあるなり、まことに茫として際なきは造化の法相なりと評すべし。　祇園精舍の鐘の聲、浮屠氏は聞きて寂滅爲樂の響なりといへれど、待宵には情人が何と聞くらん。　沙羅雙樹の花の色、厭世の目には諸行無常の形とも見ゆらんが、愁を知らぬ乙女は、

造化の本體は得て知るべからず

シェークスピアの傑作は万理想を容れて餘あり

如何さまにながむらん。 要するに、造化の本意は人未だ之れを得知らず、只己に愁の心ありて秋の哀を知り、前に其の心樂しくして春の花鳥(はなとり)を樂しと見るのみ、造化の本體は無心なるべし。 さてシェークスピアの傑作は、頗る此の造化に似たり、上は審美の見識に富みたる學者より、下は一知半解の者までも、彼の作をもてはやすは、一つは、故人が激賞したるを傳へきゝて、雷同附加するにも因るならめど、一つは、彼の作、度量甚だ廣くして、能く衆嗜好を容るゝと、猶自然の風光の、萬人を娯しましむるが如きに原くならん。 バイロン、スキフトなどの作の、或人に喜ばれて、他の人に嫌はるゝとは、大なる相違なり。 否、たゞ衆嗜好を容るゝばかりかは、彼れが傑作は、殆ど萬般の理想をも容れて餘あるに似たり。是れ最も造化の本性に似たる所あり。 案ずるに、彼れが作に關しての先輩の評論、解釋、今は百を以て數ふべし、而も其の見解はおの〳〵多少相背馳し、甚しきに至りては(ハムレットの人物論の如き)、柄鑿相容れざるものもあり、蓋し造化の捕捉して解釋しがたきが如く、彼れが作の變幻窮りなくして一定の形なく、思ひ倣し次第にて、黑白紫黃、いかさまにも解せらるゝが故なるべし。 此の故にや、ジョンソン、コールリッヂ以來、シェークスピアの作を評して自然の二字を用ひざりしものは稀なり、

予嘗てドラマの本體を底知らぬ湖に喩へしことありしが、近ごろドウデン氏の論文を見れば、シエークスピアとギヨオテとを大洋に比したるがあり、趣はやゝ異なれども、同じ理に歸着すべしと信ぜらる。所詮、シエークスピアは、假令カーライルが評せし如く、一意「地球座」の劇場へ看者を牽かんとて筆を執りきとするも、其の看者を牽くの手段、自然詩人の本領に合ひて、俗文士が阿世の手段とは異なりたりしならん。或は彼れは、衆人心を娯しません爲には、直に人間の本相を描破するに如かずと冥識し、必ずしも一時に媚びず、天禀の詩眼によく人間を觀破し、不偏公平の筆をもて、自然の有りのまゝを描きたりしならん。案ずるに、シエークスピアは我が近松門左衞門の大なるものか、指頭大の明玉と拳大の明玉、二者の差は度にありて質にはあらざらん、たとひ其の質にも差等ありとするも、双ながら自然の寶石、人間の作爲せしものにあらず。自然の寶石なればこそ、能く自然の靈光を放ちて、野人をも駭かし、婦女子をも駭かし、卞和をも駭かすなるべけれ。去かしながら、之れをもてあがめて城にも代ふべしと價つけたるは、人間の好事、贅澤がしたることにて、元をたゞせば徒の奇石なり、色々に値上げするは、人間の好尙が高じてのわざなれば、或意味にていはゞ買ひ冠りあると勿論なる

シェークスピアの大理想家と思はるゝは彼れが作の能く衆理想を容るゝが故にあらぬか彼れ自身の理想の其の作に顯然たらざるが故にあらぬか

べし。　更に喩へて言へば、シェークスピアの作は無心無情の鏡の如し、其の作には何人の面(おもて)も映(うつ)るなり、明にいへば、如何なる讀者の理想も、其の影を其の中に見出だすことを得るなり。　さればゲルヰナスも、其の理想をシェークスピアの作中に發見し、ウルリチーも、其の理想を同じ作中に發見し、バックヒルも、モールトンも、ハドソンも、ドウデンも、各々我が影をかしこに見いだし、シェークスピアばかり高尙なる理想を詩中に描けるは絶えて無し、とめでくつがへりて驚歎するなり。　げにやシェークスピアは空前絶後の大詩人ならん、其の造化に似て際涯無く、其の大洋に似て廣く深く、其の底知らぬ湖の如く、普く衆理想を容るゝ所は、まことに空前絶後なるべし、しかしながら、斯くの如きは、其の作に理想の見えざるが故にあらぬか、これのみの理由によりて理想高大なりといふは信(う)けがたし。　予ひそかに此の點を疑ひ、嘗て近松の世話物を取りて、をさ〳〵先輩の批評法に倣ひて、分析解剖を試みしに、『天の網嶋』『油地獄』さては『戀飛脚』『伊達染手綱』など、いづれも予が小理想を包容して餘れる所尙綽々たり。　當年の予が解によれば、『天の網嶋』の理想は、『ロメオ、エンド、ジュリエット』と兄弟の間にありて、更に可笑しき『油の地獄』の解は、ほと〳〵或理想家が釋したる『テムペスト』の理想をも凌が

自然に似たる作を理想の大なる作とせば近松が作もまた大理想の作と見做しがたきにあらず

んとせり。　勿論こは理想の上のみの解なり、美術家としての技倆の上には、其のころの予とても、二者を同じざまには見ざりしなり。　これによりて案ずるに、近松若しエリザベス時代に生まれて、英文にて世話物を書き殘し、ニコラス、ロウ出でて、そが傳を調べ、ジヨンソン、ポープいでゝ、ろが作を再版し、解釋し、稱賛し、コールリッジ、ハズリットいでゝ、批判し、激賞し、メロン、ワルバルトン等いでゝ、評註し、近松研究會成りて、いよいよ崇め、アボット、シュミット等いでゝ、文典、字彙を作り、レッシング、ギヨオテいでゝ、更に尊く、佛に、獨に、米に、魯に、近松をもてはやすもの増加するに至りなば、たとひシエークスピアに及ばずとするも、此等多人數の功力にても、我が國の淨瑠璃作者にて終らんよりは、はるかにまさりたる位置に上りぬらんかし。　其の故は、近松の世話物も、シエークスピアの作に似て、頗る自然に肖たればなり。　斯くいへばとて、シエークスピアを貶して、淨瑠璃作者の亞流なりといふにあらず、彼れが作は、平凡の石の外ならず、といふにあらず、非凡の寶石たることは爭ふ可からざる事實なれど、只其の値段附は、人々の心々、古人の理解を聞きて其の通りと思ふが愚なりといふのみ。　若しシエークスピアを稱美せんとせば、其人間の性情を活動せしむる技倆を賞するは固より可かるべく、其の比

四八

理想の顯然たる作は大理想の作なりと思はるゝことあり

シェークスピアとても地の文を用ひて事を叙せば或は其の理想を發露せしならん

喩の妙、其の想像の妙、其の着想の妙、これをほめて空前といふも可く、絶後といふも可かるべし、只其の理想をほめて大哲學者の如く高しといふは信け難し、むしろ其の沒理想なるをたゝふべきなり。 然るに、有と無とは二にして一ならざればにや、古人多くは沒理想の作を、やがて大理想と解釋して、其の作者を神の如く、聖人の如く、又至人の如く評したるものあれど、沒理想必ずしも大理想なるにはあらず、小理想もまた沒理想と見ゆることあり。 嬰兒の欲の極めて小なる、是れ有欲(惡)とも見るべく無欲(善)とも見るべし。 鬼貫が一句「なんで秋の來たとも見えず心から」此十七字、強ひて解釋の辭を作らば、或は佛敎をも掩ふべく、或は東西哲學の幾體系をも理むべし。 木内宗吾が一時の義擧も、若し花々しきマコーレーが筆を借りて傳を作らば、ハムデン、ワシントンの輩のと肩を比ぶる義擧ともなりなん。 必竟ずるに、鬼貫等俳人の作には、當人の註釋無く、木内宗吾の義擧には詳傳無く、嬰兒の口には言語無きゆゑ、解釋見る者の心次第なり。 恐らくはシェークスピアと雖も、若し散文にて悲劇を綴らば、悉しくいへば、小說の體にて綴りしならば、幾段か値段を下ざゝなるべし、其の叙事の中に、おのが理想のあらはるゝことを避けがたかるべきが故なり。 例へば、『キング、リアー』の悲劇は、馬琴の作

シェークスピアは讀者の心々にて如何ほどにも高大に釋し得べし

に似て、勸懲の旨意いといちじるく見えたれども、作者みづからが評論の詞絶えて篇中に無きゆゑ、見るものゝ理想次第にて、強ち勸懲の作と見做すを要せず、別に解釋を加ふることも自在なり。 しかるに、曲亭の作を見れば、例へば、蟇六夫婦の性格の如き、頗る自然に肖て活動したれども、吾人はこを沒理想とは評せずして、勸懲の旨に成れりといふ、作者が敍事の間に明に然いへればなり。 芭蕉が『古池』の句に、樣々の解あるも、同理なるべく、『源語』の本意をいろ〳〵に臆斷するも、同理なるべし。 此の例證尚甚だ不足なれども、沒理想の、必ずしも大理想にあらざることゝ、小理想の、時としては沒理想とも見ゆる由は、之れにてほゞ知らるべし。 兎に角に、予は沒理想の作を、理想をもて評釋することの、いと〳〵要なかるべきを信ずるが故に、此のたびの評釋にては、主として打見たる儘の趣を描寫することを力め、我が一了見の解釋をば加へざるべし、但し右とも左とも見らるゝ如き場合には、止むを得で故人の評釋をも引用し、予が卑見をも敍ぶることあらん。 若し夫れ全體の解釋は、讀者みづから之れをなせ、理想、日本大ならん人は、日本國を『マクベス』の脚本中に見出だすべく、理想、宇宙大ならん人は、宇宙を『マクベス』の中に見出だすべく、理想萬古に亘らんは、Eternity を『マクベス』の中に見出だすべし。

人々互ひに小我に拘らはゞ到底大歸一の期を望むべからず

沒理想の詩の無限の興味は、實に其の度量の大洋の如き所にあるなり。

我れにあらずして汝にあり（こは暗に某批評家の嘲難に答へし文なり）

常識（コムモンセンス）無き小理想家の多き程厄介なるものは無し、實際の事に疎き空論家の増加するは、文學の爲にも、憂ふべくして喜ぶべきことにあらず。方今の文壇を觀るに、我が方寸の小宇宙にのみ彷徨して、方十里内の實際をだに、全く知らざるが如き人尠からず。さる人々は、我が思ふ所のみを正しとして、他の謂ふ所を悉くしりぞけ、そが小理想を尺度として、此の大世界の事をも裁斷せんと企つるなり。偏見家、小理想家などいふもの是れなり。彼等は我れあることを知れども、殆ど他あることを知らざる故に、そが平生の行ひ、恰も巨人島にわたらぬガリヷルの如く、未だガリヷルを見ざるリヽピウシアンの如く、豕（いのこ）を抱きながら臭きことを知らず、古井（ふるゐ）の底に棲みながら、天の狹きを笑ふ。此の故に、小我慢の戰ひ止む時なし。競爭は人間發達の大機關なりとはいひながら、かゝる人々が小軋轢の止まぬ間は、文壇は常に麻の如くなるべし。吾人これを歎き、固より其の任にあらぬを知れども、微衷の禁じがたき由ありて、此の『早稻田文學』の卷末に、「時文評論」の欄を設け、これら方寸の宇宙に棲

明治文學大歸一の眞策は汝が小理想を脫却して公平なる眼界を開きたる時に見ゆべし

息して、毫も其の以外を知らざる人に、せめても方百里の現實を見せて、偏見の弊を少うせんと企圖す。吾人が事實の報道を先として、必ずしも評論を旨とせざるは、此れが爲なり、空理を後にして、現實を先にし、差別見を棄てゝ平等見を取り、普く實相を網羅し來たりて、明治文學の未來に關する、大歸納の素材を供せんとする、亦此の故なり。吾人が微意こゝにあり。讀者よ、時文評論の第何十頁に、明治文學の活機が現れたるかと詰問することを休めよ、活機の在否は我が評論の紙上にあらずして汝が公平なる眼中にあるべし。時文評論の第何篇に、明治文學大歸一、大調和の策あるぞと問ふこと勿れ、其の大歸一の無上の良策は、我が文章の上にはあらずして、汝が沒理想の心中にこそあるべけれ。乞ふ、他の方寸の世界に徜徉せる人よ、虛心平氣『早稻田文學』の出づる毎に、文字の無味淡泊平々凡々たるを忍びて、時文評論なる幾項の記事を讀め、二、三、四、五篇を重ねて、汝が心、寸許廣く、十數篇を重ねて、汝が心、また尺許廣くなることあるべし。これ藥の効能にして、明治文學の活機が、汝の肺肝に銘じつゝある證據なり。我が時文評論は劇藥にはあらず、持藥なり、其の効能の徐々たるべきは、そが持前の自然なり。吾人の本願は、大歸納の素材を供せんとするにあり、小理想をもて演繹せる、空漠た

る理論を語らんとにはあらず。されば、吾人は、今後といふとも、敢て獨斷家をもて居らんとはせず、むしろ常識の報道者をもて自ら任ぜんとすべし。表面は尋常の雜誌氏となりて、裏面に暗に批判家たらんと力むべし。博識卓見の學者は、世間に其の人いと多かり、佛人、獨人の長ずる所は、吾人之れを悉く彼の人々に委ね去りて、みづからは諄々として現實の報道を旨とし、偏へにアングロサクソンの着實なる常見を師となすべし。是れ吾人の本旨なり。讀者希はくば此の意を諒して、吾人の評論の評論ならざる所に、評論なるべき所以の存するを知り、其の無効能なるが如き所に、冥々の効能あるべきを知れかし。

文人社會　其の一

古人も、微妙なる狂氣無ければ、詩人たること難し、といひ、又神來(インスピレーション)と狂熱(フイーヴル)との二ッを得ざれば、假空の人物を活動せしめがたし、と、近時の哲學者も言へり。若し天才と狂氣とが相纏綿して行く、といふ心理學者の穿鑿に眞(まこと)ありとすれば、詩人、文人といふ者は、たとひ大家、名家とあがめられて、千古に名を垂るべき運命を有せざる分際とても、多少此の氣ちがひといふ資格には漏れぬなるべし漏れたらんは、甚しき小家中の小家なるべし。よりて案ずるに、文學社會といふものは、遠方より瞥見した

詩文人と奥女中と通人

詩文人は風流なる狐憑柔和なる狂人

る時の如く、愛らしく、樂しげなるものにはあらざるべきなり。何となれば、微妙といふ形容詞は添はりたるものゝ、狂氣又は狂熱といへば、輕くツモリても、短慮疳癪などいふ事件念せらるゝに、彼の想像といふ言葉は、頗る氣味惡き奴なり。　俗人社會にていへば、最も想像力に富みたるは小兒と婦人となるべし。　其の中、小兒の想像は、重に有形の物にのみ關して、詩人の所謂人情には疎遠なれば、假に婦人中の大想像家、御殿女中、又は俗人中の……此の俗人といふ言葉は、詩人に對して用ふ……大想像家、自稱通人といふ者を以て例とせんに、奥女中の想像も、通人の想像も、吾等の經驗したる所にては、下らぬものなり。　奥女中のは邪推猜忌と兄弟の間にありて、その人情に通じたるは、偶ゝ以ておのれが非を飾り、人前を粧ひ、一段嵩じては人をあざむくに足るのみ。　通人のは、一切こんなものでげす、と、人間を安値に見切り、敵手の眉の運動に目安を置いて、想像を自在にし、豫防線を張ることゝ、好兒になることゝに、氣根を浪費する爲めの心の作用なり。　されば、詩人、文人の想像といふも、或は此くの如きものかといふ伴念起こり、例の小想像によりて推測すれば、文人社會とは柔和なる狂人と、風流なる狐憑との集會のやうにも思はるべし。　これはほんの當推量の沙汰なれど、文人社會の、あまり好

我にあらずして汝にあり

デクインシーの說

文學社會ほど厭ふべき社會はなし

ましき交遊會にあらぬことは、眞實の事と見えて、古人が言ひ殘したる言葉の中にも、其の證となるべきものあまたあり、左に二つ三つ掲げ錄せん。

『オピアム、イーター』の著者、デ、クインシー屢〻其の著書の中にて、文學社會の無味平淡にして、人に裨益する所なきを論せり、蓋し、其の所謂文學社會とは、學、藝に秀でたるにもあらず、又固有の才能の長じたるにもあらで、只僅に一二冊の書を著したるか、又は其の身の新聞、雜誌などに關係あるか、そればかりの事にて、早くも文學者と成り得たるが如き者の集合をいへるなり。 クインシーは斷言して曰はく「我が多年の經驗に徵するに、いかなる集合といふとも、文學社會ばかり趣味無く生氣無うして、而も不愉快を人に與ふることの甚しきは無し。 よのつねの徒(ともがら)の、此等文學者の會に臨むや、槪して此等名家(ライオン)に對しては漠然ながら或特殊なる服從の義務あるが如くに感じて、万事を控目にし、言ひたき事あるも遠慮し、己れが心ながら己れが自由には任せざるやうの思あるが故に、おのづから愉快無うして苦勞あり。 凡そ世の中の事は、我れに得る所あれば、彼れに與ふる所あるが常なれど、此等大家(ドン)といふものばかりは、他人の愉快を奪ひ去りて、一方に大なる空虛を作りながら、それを塞が

んための一物をも供することをせず。必竟ずるに、非凡の創才と權力と膽力とを兼ね備へ、衆望の砲門に面することを恐れざる者の出でば知らず、滔々たる世間の文人は、悉く二種の流弊に陷りて、交際の圓滑を失へり。其の一ッは、物躰ぶりて何事をも腹藏することにて、他の一ッは、自己の事にのみ留心して、毫も他を顧みざるをいふ。たま〳〵男らしき心を奮ひ起こして、そが懷抱を吐くかと思へば、其の言ふ所平々凡々にして、いさゝかも自己以上の者の注意を喚ぶに足ることなし。さて又、己れ自ら、我れは珍說奇想を有せり、と信ずる文人の間に、行はるる一種の腹藏あり、此等の輩は思へらく、談論酣なるに至りては、おのづから我が思ふ所を漏らさゞるべからざる塲合に至ることあり、されば、我が金玉の思想を、むざ〳〵と他人に打明かすに至るべければ、むしろ論ぜず語らざるに如かじと。これと同臭味の徒世間に多し。彼の『國財論』の著者、アダム、スミスが談話の則とせし所も同じ原理なりき。彼れは常に「その腦裏の眞珠が、端なくそが唇頭より逸して、油斷なき傍人の中に飛び落ちんかと恐れ、平生其の言葉に轡を食ませ置くなり」と公言せり、ときこゆ」と。云々

クインシーが自己の經驗を基として文學者の虛飾傲慢を論じ、文學社

會の無味索然たることを說きしもの、此の他にも尙幾百千言の長きにわたれるあり、中に就きて、最も味ある一節を抄せんに、クインシーは、古來幾多の政治家が、定式のやうに臨終の遺言とせし「爾の信任を王公に置くなかれ」といふ格言をもぢりて「爾の信任を當代なる智惠の王公に置くなかれ」と言ひ倣し、且曰はく、景慕讃美の太氣中にのみ生息せる徒(ともがら)と、忘れても親密なる交を結ぶことなかれ、彼等の交誼友情は、個人の狹隘ある範圍内に成り立つと稀なり。 汝若し彼れの如く赫(かや)かば、彼れ汝を惡まん、汝若しおろかならば、彼れ汝を卑しまん。 此の如き偶像の立派なるをば、只通りすがりにのみ瞥見せよ、偶像崇拜者の一人となりて、只刹那の間のみ見よ、されど、彼等の立派さが、その人間的弱點によりて汚されざる前に、又は汝が大量なる敬服の、取るに足らざる賜をもて打崩さるゝに至らざる前に、疾く急ぎて通り過ぎよ。 と云々。

おほよそ古今の文人中、純然たる文人の標本ともいふべきものは、英國にてはソウシー(Southey)に越えたるは無かるべし、然るに、件のソウシーすらも、文人の社會を嫌惡せりきと見ゆ。 一千八百一年、ソウシーがはじめてチャーロット、スミス女史に會ふや、彼れは痛くスミス女史が「世の滔々たる女流文學者」といふ者に比して、實に人間らしく、又一層人情

に近きところ」あるを發見して喜びたり。彼れはいへらく、女史は、其の作の上に就いていふも、他の女流に優りたる所元より尠からずあれど、女史は著作の業にのみ全身を委ねずして、別に務むる所あるは感ずべし。女史の文を作るや、稱讚を求むる心無く、其の語るや見せびらかさんの心無し、予は彼の女に於ては、世の文人社會に有り觸れたる屑々たる嫉妬と猜惑とを見ること無しと。

ソウシーは、上流に位せる文人社會に對しては、徹頭徹尾嫌惡の感を抱きたりしが、稍〻下等なる文人に對しては、多少の同感を有せしに似たり。案ずるに、前者は各〻自ら高く標致して、猜忌偏執し、毫も相容るゝ所無きが多けれど、後者は却りてさること無く、間〻甚だ卑俗なる代りには、天眞爛熳として氣樂氣なる交際の、流石に憐むべきものあればあるべし。嘗て此の後派に屬すべき文人十餘名、博士スモーレットの宅に會しぬ。彼等は學問上の議論を避け、只管滑稽を主とし、地口を鬪はせ、頓智を鬪はせなどし、互ひに談笑を專とせしが故に、厭ふべき虛飾若しくは衒學の跡なく、馬鹿氣たる代りには興ありき。さて、偶〻興に乘じて、禮儀の境を越えんとする者あれば、主人博士の權力は、能くこれを制し得きとなり。かゝる會合に對しては、ソウシーも多少興を覺えた

文人社會は最惡の社會

バイロンの説

りしに似たり。さもあらばあれ、彼れがおしなべての文人社會に對する平生の感情は、其の友人に與へし書の中に善く見えたり。彼れは曰はく「予は所謂文人社會(現今のところにては、最惡の社會たらんとする者)よりは、今全く離るゝことを得たり」と。

バイロンが日記の中の一節にいふ「予は概して文人と交はることを好まず、彼等を嫌ふが故にはあらず、彼等が近著を褒め了はらば、また何事を言ふべきか知らざるが故に」と。勿論バイロンは所謂文人に例外あることをいへり、スコット、ムーアの如き通人、又は俗を離れたる空想家、シェリーの如きもの、是れなり。されど俗に謂ふ並みの文人と予とは、到底滑かに交はりがたし、特に外國の文人に於て然り、只その例外ともいふべきは、ジョルダニーと……と……と……予は其の他を指名する能はず」云々。

然るに、バイロンが傳をものせる某が、平生通則なりと斷定せる所によれば、「作の汝を樂ませ悦ばしむることあらば、其の作者に面會せざらんことを力めよ、汝一たび彼等に面會せば、彼等は最早汝を娛樂せしめざるべし」と。此の論者、シェリーのみを景仰すべき例外なりとせり。

アレキサンドル、ヰネーが言にいはく「おしなべていへば、文學者よりも科學者のかた品位に富めり、蓋し、科學者は、おのが私情をもて其の作物の材料とせざればなり」と。又曰はく「文學者は人間の世界に生息し、科學者は神の世界に生息す。文學者の閑居は眞の閑居にあらず、彼れは堆籍の間にありて、古今の文士と同棲し、特に自己と同棲す、而してこは餘りめでたき交遊にあらず」と。又曰はく「六十九名の文人の生涯と六十九名の科學者の生涯とを對照せば、汝等恐らくは前者を嫌惡し、後者をよみするならん」と。いづれも經驗より出でたる言葉なるべし。

文人社會の愛すべきものにあらざること、並に文人社會の一員となることの健羨せらるべきものにあらざることにつきては、大かたの文人之れに幾分か言ひ及ばざるは無し。前に掲げたるもの丶外に、獨の詩人シルレルが、其の廿六歳の時、ライプチッヒより書き送りし書信の中にも、文人の五月蠅（さばへ）做す厭はしきものなることをほのめかし、カーライルもベルリンの文人等が、みづから近代の亞典文人を以て居るとの厭はしきを譏り、コールリッジもまた、文人社會よりも商人社會のかたが、天眞爛熳たる常識に於て秀で、其の智に彈力と爽氣とありとて、彼れが曾てバルミンガムに遊びし折の經驗を語り、デ、クインシーもまた、ケン

専門文客よりも非専門雅客愛すべし

ダル、ブリッジヲータル、マンチエスタル地方に於ける經驗を證として、專門家ならぬ者のかたに、却りて健なる智識、自然なる能辯ありといひ、其の理由を求めていへらく、「おほよそ商業の繁昌なる市街にありては、晝は實務實業の爲に費さるゝが例なり、而して只夜間のみを安息逸樂の時間とす、此に於てや、讀書談話及び作詩作文等の樂一層なり、是れ彼の書に飽き、閑暇に饜き、單調子の生活に爛熟せる專門文人の知らざる所なり」と。　又他の理由を附加したり、其の大要に曰はく、彼等商業界の雅客等は、元來雅客文人を以て居らざるものゆゑ、絶えて談論を矯飾して、名家たるの聲譽を汚すまじと懸念する必要なし、かるが故に、彼等は他の專門文人の如く、口を開くことを憚らず、又口を開く前に咳唾皆珠玉と見ゆらんやうにと、焦慮刻苦して不自然の言葉を吐くことも無し、これ質僕可憐なる所以なるべし、と。

以上は、いづれも文人社會の人にして、文人社會を評したる實驗の言葉なるが、事實を根抵として作られたる諷刺的小說の中にも、文人社會の不愉快を活寫せる者、一にして足らず、レイ、ハントの作、サッカレーの作、アルヸングの作等にも屢見えたり、さはれ餘りに管々しければ省きつ。

内面の不愉快と醜さとは、如何ばかりなりとも、外面の樂しげに美はしきは、人皆の目を牽くならひとて、物知らぬ裏店の女兒の藝妓を羨み、放蕩兒の俳優を羨み、愁を知らぬ浮薄者の落語家の愉快氣なるを羨むと、おなじ理にて、誰れしも始めて文學社會に臨みし時には、こればかり樂しき社會はあるまじと思へど、交遊會としては、こればかり厭はしきはあらず。　元より大詩人大文人と稱せらるゝ分際は、周圍の五月蠅さも、其の心には留めで、奪ふべからざる理想の快樂に、物質的百苦痛をも忘るゝならめど、そは其の人一人の上のとなり、おしなべていへば、文人社會は厭ふべき社會なるが如し、前に擧げたると歸する所は一なれど、誰れしも、そのはじめには、此の社會をめでたき者と思ふよとさとらるゝが可笑しさに、古人の言葉を又引かんに、彼の博士ジョンソンの詳傳を著して、マコーレーに、傳記家の王とたゝへられし、ボスヱルが、親しくジョンソンと交はれりし頃、博士が都會の生活に倦みて、村居の愛すべきを稱賛するを聽きて、退隱をほりしたまふはさることにはあれど、さあらんには、全く文人社會と遠ざかりたまはざるを得ざるに至らん、是れ豈悲しからずや、といひければ、博士答ふらく、君は文人の交遊を痛く悦ばるれど、やがてかゝる談話に飽足る時あらんと。　これ久しうして芝蘭

我にあらずして汝にあり

レイハントの説

エマルソンの説

チエスタルフィールドの説

の室ならざるをいへるに外ならず。　レイ、ハントもまた、交遊に於ける愛敬の、才の秀でたるに優れるを論じたる序に、ハズリットが語を引きていへらく、久しく天才の文人と交遊し、彼等が談論を聞慣れたる者は、他の人の談話は一概に心たゆまるゝものとし、陳々腐々、何の益する所無しと思ふ。　然れども、天才の文人其の人に聞けば、彼等の苦情とする所は、全く之れと異れりと。　これ蓋し、自稱文人の文人臭きを譏りたる語にして、眞の天才は、天眞爛熳たる自然の交遊を愛すれども、生文人は、兎角に矯飾と術學とを事とし、天才にも厭はれ、到底は俗人にも嫌はるれど、多數の人、最初はこれを覺らず、との意なり。　エマルソン嘗て曰はく、剛毅純樸君子に近き人と談話せよ、然らんには、文學は、言葉の、揚足取ることにひとしく見ゆらんと。　又曰はく、かゝる社會に於ける平凡の作家は、金鈕又は金針を盗まんとして、紳士の間に來たり立ちまじる掏摸にひとしと。　チエスタルフィールド卿もまた其の子を誡めて曰はく、學者のみより成れる交遊會は、大に貴むべく敬ふべきものにはあれど、良き交遊會にはあらず、彼等は俗人の如き、安らかなる風采擧止を有せず、俗界に棲息せざる輩なればなり。　されば、希はくは我が兒をしてかゝる交遊の爲に心を奪はれしむる勿れ、何となれば、彼れ若し此の魔界

に足を投せば、彼れは到底專門文人の一人としてのみ遇せらるゝに至らん、而してそは立身出世すべき道にあらずと。　ホレース、ヲルポールの如きも、其の身文人にありながら、文人社會を嫌ふこと甚しかりき。一千七百六十一年、彼れ當時の少壯名家バルクを評していへらく、彼れは頗る慧敏の士なりと雖も、「未だ作家肌を脫却せずして、世に作家ほどcharming なるもの無しと思ひ、みづからも其の一人たらんと思へり。彼れやがて發明する時あらん」と。　後五年、佛國巴里に遊ぶや、當代の文豪ルーソーの事につきて、通信すらく、「我れ如何ばかり彼れの才能を景仰するも、彼れのみならず、總て我が知りたる天才の文人は、一人として其の自任する所の、不當なるを平均するに足るべき程の常識を具へざるや事實なり。　彼等天才は、神官を嫌へり、然れども自家の足下には、祭壇の設けられんことを熱望す、こゝをもて、彼等を知るよりは、彼等の作を讀むかた、眞に愉快多し」と。

ミトホオド女史の如きも、此の外面如樂園の社會を見誤りし一人なり。女史の年若うして文人社會に入るや、多數の著作家」をもて「善良なる贅辯家」となし、甚だ賢なるにもあらず、甚だ機慧なるにもあらず、然れども、十中九までは何の矯飾したる風情も無くて愉快げなり、その著作のみ

ミトホオド女史の説

を讀まば、畏怖の念の起るべかりしも、その談話を聞くに及びては、全くさる念なくなりぬ、といひたりしが、殆ど四十年を經て後に、或友人の許に言ひ越しゝ事は、大に前の意味と異れり。其の大意にいはく、著作家といふ者は、おしなべていへば、天が下の、最も人を失望せしむる人種なりと。さて女史は、老書肆、ジョルジ、ホキッテーカルが此の事に關していへる言を引けり、其の言にいはく、著作家に次ぎて、書肆の主人ほど、目下に頑鈍無識なるものは無しと。又更に後年に及びて、或友人に送りし書の中に、女史はそが病にて打臥せりし時に、深切なりし信友の事どもを語りたる序に、著作を業とせざる雅人を著作を業とせざる雅人よりも、舞臺にあらはれたる俳優よりも聰明なる觀者を、……我れは好めりといへり。

文人社會　其の四

吾人嘗てモリエールが『女學者』を讀みて、トリッタンとヴヂアスが口を極めて相激賞し、やがて忽ち衝突して、互ひに罵詈貶謗する條下に至り、一たびは大に笑ひ、一たびは肅然として容をあらため、我が胸懷中、些の此の影子あらずやと反省し、他人に向かひて之れを語るに遑なく、先づ

我が心塵を掃除せんと力めしことありしが、弱點は猶癌のごとし、甲の局處に治せらるれば、やがて又乙の局處に發す、到底滅盡し易からず、古今文壇の實事を聞見する毎に、轉〻感慨に堪へざるものあり。讀者よ、願はくは、吾人が此の篇の中に言へる所をもて、暗刺とし險語とすること勿れ、聊か以て我が平生の殷鑑とし、兼ねては同感者の參考の料に供せんと思へるのみ。

ゴールドスミッスが假空の人物「全世界の市人」は、數多の國々を遍歴し、無數の市府をも見たりしが、未だ曾て十人又は十二人の小俊傑を出ださゞる市府に入りしことあらずといひ、彼等小俊傑は、おの〳〵其の名天下に遍しと想像し、互ひにその雷名の廣大なることをたゝへ、互に不死不滅の名譽の疑ふべからざるを約せり、といへり。夫れ人と生まれて阿諛追從をよろこばざるものは、極めて稀なり。我れは諂諛を好まずといひし大シーザルすらも、閣下は諂諛を好みたまはずとほめられては、得々としてよろこべる色ありき、とデシアス、ブルータスは嘲りぬ。況や、名を求むるに汲々たる大多數の文人をや。彼等は名聞の餓鬼にして、我れは名聞の爲に詩文を作らずといふ者も、概して名聞を求めざるを名聞とし、その灸所をたゝへられては、恍としてたおろがざるもの殆

多數の文人は名聞の餓鬼なり

ど稀なり。　假令俗衆の爲に歎美せらるゝを屑しとせざるも、名家先輩にほめられては、心眼たちまちに眩む者あり、縱令名家先輩の艶辭には動かされざるも、一たび隱然たる褒辭を得て、心たちどころに驕るものあり、縱令面のあたりの褒辭には動かされざるも、間接に傳へ聞きて、その他念無きを知る時は、……又は、たとひ稱美せられざるも、敵視せられたるを意識しては、則ち心動く者あり。　縱令俗の聲にたぢろがず、先輩の艶辭にまじろがざるも、おのが崇拜せる一二の人にほめらるれば、知己を得たる嬉しさに、其の人の詩眼甚だ明ならず、好尙甚だ高からざるを察するに遑無く、士がおのれを知る者の爲に身を殺し、婦女がおのれをよろこぶ者の爲に粧ふが如くに、俗世界の事と詩世界の事とを混同し、よろこぶ可からざる事をよろこび、滿足すべからざる事に滿足し、我れ已に某に於て一人の眞知己を得たり、他にまた何をか望まん、と、自から其の欲を限り、隨うて、詩魂を無上の理想界に走らしむる能はざるに至る者あり。　眞の天才の、心を理想界に馳する者の外は、到底、或種類の追從に魅せられざる者なし。　尤も、追從の大魔王、全世界古今通徹不變不易の追從を博せんと望みてこそ、古今多數の大作家も、志を立てしなれば、吾人は決して或浮屠氏めく說法を學びて、今の文人に、かゝる大名

聞をも滅盡せよ、と勸むるにはあらず。　讀者よ、誤解する勿れ、吾人は譽(ほまれ)を重ずるの念を除け、と勸告するにもあらねば、吾人が名聞の種類を擧げたるを見て、俄に邊幅を飾り、負惜みの強き老爺が、炙の熱きをこらふるやうに、ウンニャ嬉しくなし、よろこばしからず、と、シャニムにひつこたへて頑張(ぐわんば)り、所謂天が下の、最も氣むづかしき、最も樂しからざる、最も腹藏多き、最も表裏多き、最も氣の知れぬ、最も頑固なる、最も究屈なる、最も交はりにくき、最も邪推深き、最も執念深き、最も意地わるき、最も度量狹き、最も……小(ちいさ)き人となるべしなどとは、夢にも勸告する所にあらず。吾人は名譽を欲するの念は、其の極めて大なる時は、甚だ貴むべき美德なるを信ずるが故に、その大名譽心の素となるべき、小名譽心を除かんとはせず、只今の小のあまりに小なるを悲しむの餘りに、かくはそゞろ言(こと)を口ばしりて所謂墮地獄の罪を釀すのみ。

文學と糊口　其の一

近時地方の文運漸く開け、雜誌の發刊、文學會の設立、殆ど到處に行はれんとす。　思ふに、明治文學發達の兆なるべし。　されど、此等未來の文人の意中を察するに、中には財産豐にして、道樂に文學を嗜むもあらんが、

文學を職業とするは非なり

或は文學を一種の新。職。業。と思惟し、名譽、金錢、地位を得るに最輕便なる者と思へるもあらん。万一にも然るとあらば、是れ一大謬見なり、啻に當人の爲に取らざるのみならず、文學の爲にも嘆かはしき事なり。試に思へ、文運最も隆盛にして、文士得意の時節なりし、文化、文政の頃にても、最初より著作家にして、優かに生計を立てし者は、殆ど絶無なり。京傳が煙草入を鬻ぎ、又は菓子商を兼業として、僅に生計を維持し、三馬が藥を賣りて糊口の道を得たりしが如きは更なり、空前の大家、馬琴すらも、初めは著作の傍に、賣藥と手習師匠とを業とせりき。ひとり種彥のみは、悠々、著作して閑日月を樂みしが、そは其の身旗下の士と生まれて、累代の秩祿ありければなり。明治の今日は、其の頃と異にて、新聞屋といふ賣口のある爲に、文を賣りて口を糊することも、昔日よりは易けれど、さりとて供給に限なうして、需要には限あり、少しく見識を維持し、面目を失はざらんとすれば、一ヶ月の下宿料も、之れを得ること容易ならず、況や眷族を養ふべき料をや。さらばしばらく見識を屈して、新聞社、若しくは書肆の需むる所に隨うて文章を作らんか、勢ひ俗受を主とせざるを得ず。日夜營々として、唯俗受のよからんことをのみ力めんか、眞文學に遠ざかること、日に益〻甚しかるべし。此の理の爭ふべからざ

るは、古今の實例に徵して明なり。今其の二三を掲げん。歐洲文學者の中、第一に擧ぐべきは、詩祖ホーマルが事なり。此の偉人、死後には不朽の榮名を擔ひたるも、生前には物語歌を謠うて、街頭に食を乞ひ、口に詩句を絶たずして、而も屢〻パンを絶ちし事あるは、人の能く知る所なり。さて滑稽詩人プラウタス(Plautus)が、ホーマルよりは仕合せのよかりしは、兼ねて水車を轉ずることを業とせしに因るといふ。蓋し、プラウタスは、文學をもて、娯樂の自用にのみ供せしなり。若し夫れテレンス(Terence)が奴隸たりし、又はボイシウス(Boethius)が獄中に身を終へし類は姑く措き、タッソー(Tasso)の如きも、轗軻落魄、簞瓢しばしば空うして、常に友人の助力を乞ひき。其の猫を詠じたる詩中に「爾の眼光を借りて我が文を綴らばや」とあるにても、燈油を購ふの料だになかりし、貧しき境界を察すべし。

文學者の困窮談は、何處に行くも、珍らしからず。西班牙には、餓死せしセルヴンテス(Cervantes)あり、葡萄牙には、貧民院にて身を終へしカモインス(Camocens)あり。又佛蘭西には、債主に遭ふを畏れて、いつも夜行を事とし、遂には「梟」と綽名を取りにしヴウズラー(Vaugelas)が事蹟あり。さもあれ、尚是等は英の詩文人が、いと甚しき零落には優れり。スペン

サルといひ、オトヱイ(Ootway)といひ、バトラル(Butler)といひ、ドライデンといひ、今より見ればこそ、當時の盛飾とも見らるれ、實際は、此の人々の中、一人として饑寒の苦に遭はざりしはなく、中には、眞に饑死せしもありて、世間よりは國辱を曝すものとまでに思はれしもあり。 されば豆莢を煮て晝餐に代へしハイチ(Heine)、水をもて空腹を凌ぎしヤン、ポウル(Jean Paul)、一日四ペンス半にて寢食せしジョンソン、等の有樣を見聞しては、カーライルは「あな淺まし」とつぶやき、眠るに處なうして深夜龍動の市中を彷徨せしジョンソン、サヴェージ(Savage)、飢うること野犬にも劣らざりしオトヱイ、グリーン、アーボア街にて嚢中一錢をも止めざりしゴールドスミス、等の境遇を回顧しては、ロングフェロウも「あなうたて」と嘆ちき。 げにや、古人も評せし如く、人間の歴史中、最も酸鼻すべき部分は、囚獄日誌にあらざれば、文人の傳紀なるべし。 ドライデン嘗て其の劇曲の序中にて曰へらく「一たび筆硯に從ひてより、齷齪として徒らに他人を樂ましめんが爲に生活し、終日心血を費耗して得る所、僅に饑寒を凌ぐに過ぎず」と。 ソウシー(Southey)もまた曰へらく「世の青年、如何に大なる才能を有し、又如何に忍耐して出精すとも、文學によりて身を支へんこと、迚も爲し得らるまじき事なり、期望の外何等の

文學者といふ業は
粧飾として可なり
專門とすべからず

用意もなくて「名譽堂」に廻國の杖を曳かんとするは、少壯詩人の爲に殊に悲むべし。知らずや、途には「失望の沼」「困苦の丘」「死影の谷」あることを」と。以上は、僅に二三を示したるに過ぎず、吾人は爾後折々の餘白に於て、文學者の逸事、言行の中、尙此の例の適切なるを揭げん　（廿四、十二月）

文學と糊口　其の二

バルナート、バードン(Bernard Barton)は、其の身銀行の書記なりしが、いたく詩を嗜むの餘り、竟には本職を捨てゝ、文界に身を投ぜんとせり、其の時、チャールス、ラム之れに書を與へて、頻に其の不可を諫めき。其の書の略にいふ、用務と就褥との間に、僅々五分時の閑を存せんには、君はそを多なりとして、自ら安慰する所あれ、書估の奴隸とならんよりは優ること万々なればなり。我が知れる文人中には、麪包に事を欠くもの甚だ多し、此の人々は、却つて銀行局裡に實務の椅子を占むることの安固なるを羨み、異口同音に、人生著作者とならんよりは、むしろ織工たれ、裁縫師たれ、と嘆つなり。君は著作して生計を立つることの、いかばかり困難なるかを全く知りたまはぬと見ゑたり。著作者などいへる名は、君にもあれ、我れにもあれ、只附屬物として身につけてこそ良き飾とも

文人は書肆の奴隷

なれ、そを本職とせんとするはいみじき謬見なり。凡そ奴隷といふ奴隷の中、書估の奴隷とあるばかり淺ましき事世にあらめや云々。此の語は長くWould-be文學者のよき誡なるべし。

リットン、スコットの說

リットン卿は、其の著述の中に、自己の成功を以て其の三規則に基けるよしを明かに告白せり。三規則の中、第一に位すべきは、「凡そ勞力を以て成し得らるべき事には、決して天才を賴むなかれ」といへる、是れなり。且リットン卿は、世の文學熱心者に告げて曰はく「文學とても、若しそを本職とすることなく、孜々として其の本を養ふことに注意せば、他と同じく良き職業たるを失はじ、然らざれば、靴磨にだに及ばざること遠し」と。ベランジャル(Beranger)亦曰はく「爾若し著さんと欲せば書を著せ、爾若し作らんと欲せば、詩を作れ、然れども、之れが爲に斷じて其の職を忽せにすることなかれ、只夫れ文學を以て娛樂の具とせよ、職業となさざれ、內職とせよ、本職と爲さゞれ。若し生計上、文學に依賴せば、遂には他人に依賴するに至るべし」と。スコットが「予は文學を以て撞木杖となす、杖とはせず」と言ひしも其の意に於て異りたることとなし。

デ、スタエル夫人(Madame de Staël)嘗てカムベル(Campbell)が貧窮の餘り心落居ず、執筆の勇氣さへに亡くなりたるは、いと氣に毒の事なりなど

サミユエル、ロージャルス(Samuel Rogers)の許に言ひ遣りしに、其の答に「何故にカムベル氏は、書記の業務を執らざりけるぞ、書記となりてあらば、執務の暇に、懸念なく詩を作り得べきに」とあり。是を見たるスタエル夫人も、傍にありしジエームス、マッキントッシユ(James Mackintosh)も「いとつれなき答かなと評しけれども、カムベルはなか／＼に其の言の理あるに服し、ロージャルスの深切を喜びきとなり。

ロバルト、ソウシーが職を文學に擇ぶや、思へらく、以て我が生を安うすべく、以て我が名を揚ぐべしと。而も一千八百五十三年の頃ウィン氏に贈れる書中に「我が職を文學に選びしは、生涯中の一大輕忽なりき、否、無上最大の輕忽とこそいふべけれ」との一節あり。肺肝より出でし言と見ゑたり。

故ミトフオード夫人は、近時英國女流文學者中の錚々たるものなり、女史文を織りて父に奉事せんと欲し、夜を以て晷に繼ぐこと數年なりしも、遂にその滿足を買ふこと能はず、剩へ、書肆の番頭が射利一方の勝手なる注文絶ゆる時なければ、果は得堪へずして嘆ちけるやう「世に文學者ばかり淺ましきはあらじ、又女らしからぬ業はあらじ、我が忍びても尚斯くてあるは、父上世に在せばこそあれ、他年不幸にして逝りたま

ミトフォード女史の歎

はゞ、我れは其の場に筆を擱い遣りて、新に我が職業を擇ぶべし」と。これは一千八百二十三年の事なりき。然るに女史が心の苦は、一年の後も同じかりき、六年の後にも變りたる所なかりき。更に六年を重ねし頃、女史は遂に絶望の聲を揚げていひけるやう「我が憂胸に溢れ、我がかなしみ心に餘りぬ、かよわき女の身の忍び得べしとも覺えず。ヒマンズ夫人の玉の緒はかうやうにして斷たれき、我が玉の緒もまたなからん」と。

アーヰングの歎

一千八百二十四年の頃、ワシントン、アーヰングが、其の甥ピエールに與へし書に曰はく、我れは我が嗜好せる文學の、到底虚浮のものたるを知り、それよりも一層堅固なる土臺を求めて、我が幸福と名譽とを建立せんと欲す。ジオフレー、クレイオンは文學を專業として人も羨む程の身分なりしも、自らは然りとせずして、人生著作家となるなかれ、一生の苦樂他人に賴る、と嘆き、世の人がそゞろに其の足跡を蹈みて「入りて悔やしき文界」の魔道に彷徨はざらんことを願へりき。誠や一期の命運を筆の先にのみ繫がんは、危しとも危き限なり。されば、我れは久しき以前より、文學の外見のみに過ぎずして、適〻以て精神を苛責する所以なるを知り、何卒して、現今の如く、強ひても書かざるべからざるやうの境

文學者とならんよりは廣告屋とならん

界より、此の身を拔かんと望みて止まず」と云々。アーヸングは當初空想に驅られて知らず識らず文學の魔界に足を蹈み入れ、遂に他の平安なる職を選ぶ能はざりしを、終生の遺憾なりとし、折にふれ、時に臨みては、其の事を言ひ出でゝ、自らも悔い、又他人をも誡めき。「額に汗して衣食する人々、我が言を信ぜよ、卿等は腦を勞して衣食する人々に比ぶれば、假令粗末ながらも、屢〻美味を味ふを得」と。是れアーヸングの常套語なりき。

エルスミアー Ellesmere 嘗て人に語りて曰はく「著述家は余が選ばんとする最後の職業なり。著述家に爲らんと思ふよりも廣告を甲冑の如く被て、稠人（ひとごみ）の中を彷徨する廣告男にならんと思ふの念、先づ我が心に浮びぬべし。いかさま、文學によりて生計を立つるは、結搆なる事ならん、我が腦裏に何等か思ひ浮びたる事あらば、直にそを筆に上せ、やがて又印刷に附するを得べし。されど、我れは其の如くにして榮えんとは、ゆめ〳〵思ひ懸けず」と。ミルヴルトン評して曰はく「此の言よく我が心を得たり、所詮、文學は、安固なる報酬を望み得べきものならねば、我れ若し文學にて衣食せんとする人に忠告することあらば、エルスミアーと同じく、文學の代りに廣告男の職を推薦せばやと思ふなり。」と云々。

サッカレーが當時の文學者を誡めし言葉は、バルトンに與へしラムが手翰と共に、一双の良藥とやいはまし。　サッカレーは文學者を以て、其のパンを得ん爲には都合惡しき時にも、氣のすゝまぬ時にも、身の健かならぬ時にも、否應なく硯田を耕さゞるべからざると猶通常の勞働者の如しと爲し、扨文學者に語を寄せて曰はく「卿等若しペガサス(詩神の乘りたる天馬なり、蓋し詩才に喩へたるなり)を使役して財貨を得んとせば、他に賣るべきもののなき人の、恐らく爲さゞるべからざる如く、詩は卿に告別して雲散霧消せん、而してペガサスは彼のグリーン氏の風船と一般、只見物の財嚢の開きたる時にのみ上騰するに至るべし。　我れはあまたゝび、ペガサスが馬具をつけて、粗惡なる道路に車を輓き、時に喘ぎつゝ、戰きつゝ、屢〻御者の鞭韃を受くるを見たり。　嗚呼、ペガサスもあはれなる有樣に沈みけるよ。　さはいへ、浪りにペガサスを愍むを休めよ、造化翁が大神通力に成れるものゝ中にて、ひとり此の者のみが勞働、疾病、零落を免れ得べきよしあらんや。　彼れ若し鞭韃を蒙らば、そは素より自己の罪なり」云々。　世には一種の論者ありて、文學者又は天才と呼ばるゝ分際の人々は、元より其の鄕人等の如く、納稅需糧の營々たる俗生活にはたづさはらでも可し、などいふめり。　是れサッカレーが

其の友ジョールジ、ワーリントンと共に、絶えず論破せんと力めたりし僻說なり。

以上はいづれも文學者を逆境より觀て立言せしものなるが、今サッカレーが、そを順境より觀て、立言せし主意を引かんに、曰はく

世の文學者、やゝもすれば自己の職業の、依て以て世に安處するに足らざるを嘆き、猥りに人に對ひて痛苦困難を訴ふるは、不條理といふべし、こは己れ自ら己れが便利なる地位に立てるを知らざるに因るなり。夫れいづれの職業にても、第一に要すべきは資本なり、醫師の開業するには、一個の外見よき第宅を要し、又成るべく病人に愛想よき言葉を遣ひて、人氣を取らざるべからず、扨又狀師とても、其の法庭に立つに至るまでには、莫大の學資金を要し、且書記事務員を雇ひ、又地方に漫遊するなど、くさ〴〵の費多かるべし。文學者とても、多少の學資を要すれども、いざ世に出でんといふに臨みては、醫師、狀師等の如き煩あることなし、腦を使ひて衣食する職業のうち、此の點に於ては、何者かよく文學にまさるを得ん。と云々。

思ふに、こは不平文學者を慰めんとての言なるべし、然らざれば、其の言や寧ろ窮したりといふべし。げにも資本の一點は、恐らくサッカレー

文人は到底財を貯ふる能はず

の言の如くならん、されど、終日腦を搾りて、徒に俗受のよからんことを力め、苦樂ひとへに書肆の手にあるに至りては、豈また憫れむべきの甚しきものならずや。文筆のみにて衣食せんとする者、到底反省する所なかるべからず。

文學と糊口　其の三

『アラビアン、ナイト』を讀みし者は、必ず記憶するならん、彼の第二の出家カレンダルが、裁縫師に助けられし時、裁縫師の問うていふやう、御身は何か自力にて世を渡り得べき藝能を有するかと。王子いふ、我れはよく神の法律と人の法律とを解す、文法家にして又詩人なりと。裁縫師頭を掉りていふ、それ等は當今にては、麵包一片をだに購ふこと叶はざる藝能なりと。此の言、或は古今の格言なるべし。

サッカレー程の大家と雖も、尙文學を以て生計を立つることの困難なるを說き、懇に世の父兄に對ひて、其の兒童をして、力めて文學の好尙を有せざらしめんことを忠告せり。一千八百四十三年の頃、サッカレーは、假に問を設けて言へらく、英國文壇は、今そもいくばくの貯金を有せるぞ。文學を業とするものにて、一人たりとも、其の所得によりて五千

磅の貯金を爲し得たるものあるか。狀師、醫師、及び其の他の物學びせる人々は、皆能く財を貯ふることを知る、蜜柑賣る猶太の小僧、道掃除する賤女メレーすらも、尙よく財を蓄ふることを得。致富の道を知らざるものは、全世界中、只文人あるのみ。無一物にして世に出で、無一物にして世を辭すること、彼等の通規とやいふべき。云々。

コールリッジ嘗て自己の經驗に徵し、靑年文學者を誡めて言ひけるやう、ゆめ文學を以て職業とするなかれ、古來一人の大才を除く外は、文學を職業として健康と幸福とを全うせしものあるを知らず、文筆に從事せんものは、須からく他に或職業を求むべきなり、卽ち神來の興動いて氣滿ち意到るを待たずとも、健康、精神、智力をそこ〳〵に費して、器械的に爲し得らるべき職業を求むること肝要なり。日々此の如き職業を終へて後、他に顧慮する所なく、欣然として文筆に從事せば、三時間の閑暇は、壓迫の數週にまして、遙に良好なる結果を得ん、と。

逸話(アネクドート)の効用

逸話は文學の奢侈品なりといふ者あり、其の徒(いたづら)に好奇の欲を滿足するに過ぎざると、其の文の簡約なることとが、懶惰なる讀者を悅ばしむるに

史筆を活動せしむる者は逸話なり

足るとを刺れるならん。然れども、大に人間的原素を重んずる史壇に於ては、個人の傳もまた大に重んずべきものあり、カーライル曰はく「傳は唯一の眞歷史なり」と、而して吾人を信ず、逸話は傳の精髓なりと。史談中に一個人の私事に關する原素を挿むとは、大に大事件の感銘を鋭うするの益あり、然るに、其の反對なる時は、史の趣味索然として殆ど人間的色相を失ひ乾燥枯槁の者となる。故に、近世の史家は、殆ど逸話的原素を利用せざる者なし、マコーレーのヒウムに優りて趣味多き所以爰にあり。且逸話話的原素無ければ、史上の人物漠然として著明ならず、例へば、經濟學者アダム、スミスは放心の癖ありき、とばかりにては、誰れか彼れが此の癖を具象的に了知する事を得ん、然れども、彼れが或公文の連署に花押を認むるや、例の放心の餘り、叮嚀に前筆の花押を摸寫しぬ、といふ事實、又は衞卒が兵式にて式退せしとき、例の放心のあまり、我れまた下手々々と其の例にならひ、兵式にて會釋を行ひし事を讀まば、誰れかまた彼れの放心を詳知せざらん。マコーレーの博覽と强記とは、人皆聞けり、されども、彼れが三歲のころ、手に麵包と牛酪とを將りながら、絕えず讀書しぬ、といふ事を聞き、且ホルランド夫人の爲に、突然玩物偶人の濫觴を問はれし時、言下にペルシウスの詩句を引きて、羅

馬時代に其の物ありしことを證しき、と聞くに至らば、彼れが博覽強記は、一層爭ふべからざる事實となるべし。

人は豪傑の弱點を聞くことを喜ぶものなり、逸話はナポレオンの粗暴、氣儘、痼癖をも露呈して、彼れを常人らしくなすが故に、彼れを小になす代りには、後進の期望を鼓吹する効もあり。 又時としては、逸話によりて、大をばます〳〵大にし、卑をば却りて尊うすることあり。 ゴールドスミスが虚飾虚榮を卑しめる者も、彼れが五兒をもてる貧婦を選びて、唯一枚のブランケットを惠み、我れは席(むしろ)にくるまりて寢(いね)きときかば、彼れを尊まざるを得ざるべし。 又レッシングの大なるを知る者は、彼れがヴルヘンブッテルにての赤貧中に、道路に餓死せんとする人と犬とを救ひ、これを我が家に養ひし事を知りて、ます〳〵彼れを敬愛すべし。

逸話は讀者をして古人に見ゆしむ

吾人は逸話によりて大家豪傑と同世に生息する感を生ず、又之れによりて、彼等の性質を明知するを得、例へば、下に擧ぐるが如きは、其の人が自信の深きところ見えてをかしからずや。 或若き學生等『メッサイア』といふ大敍事詩の著者、クロプストク(獨逸人)を、そが晩年の隱棲に訪ひ、彼れが著作中の一節を示し、その意味の解釋を乞ひしに、クロプストクつく〴〵見て、この意味は我れも忘れたり、されど此の一節は我が作中

最妙のものあるを知る。 御身等刻苦して其の意を發見せば、こよなき好き學問となるべし、といひけり。 又英のヲォズヲォスは、文中に詩句を引用するや、自作の詩句の外を用ひしことなく、且思へらく、我れ若し書かんといふ氣だにあらば、沙翁に劣らざる脚本を書かんことも難きにあらず、と。 チャールス、ラム評して曰はく、其の氣が彼れには缺けたりと。

（「北米批評」一八九二、九月 S. Arthur Bent 抄譯）

文學の定義

トマス、アーノルドの定義

Literature is the assemblage of those works which are neither addressed to particular classes, nor use words merely as the signs of *things*, but which, treating of subjects that interest man as man, and using words as the vehicles and exponents of *thoughts*, appeal to the general human intelest and to the common human heart.

—Thomas Arnold. (Manual of English Literature.)

文學とは、下にいへるが如き、諸著述の集合體をいふ、即ち特種の派をなせる人々に對してのみ作られたるものにあらず、將た事物の符號としてのみ言語を用ひたるものにあらず、なべての人の心に興あるべき題目を取りて、思想を傳へ且つ表章するの具として言語を用ひ、普通の智

と情とに訴ふるものなり

トマス、アーノルド

ストプフォドブルックの定義

By literature, we mean the written thoughts and feelings of intelligent men and women arranged in a way which will give pleasure to the reader;........prose is not literature unless it have style and character and be written with curious care.

—Stopford Brooke.

文學とは聰明なる男女の思想と感情とを記錄して、讀者を樂しましむべきやうに排置したるものをいふ。(中略)。散文は、文致と特質とを具へたる上に、精緻なる注意をもてものしたるものにあらざれば、文學にあらず。

ストプフォード、ブルック

Literature, in its widest sense, embraces all compositions in writing or print which preserve the results of observation, thought or fancy; but those upon the positive sciences (mathematics, etc.) are usually excluded. It is often confined, however, to *bell-lettres*, or works of taste and sentiment, as poetry, eloquence, history, etc, excluding abstract discussions and mere erudition.

—Webster

ヱブストルの辭彙に見えたる定義

文學は、其の最も廣き意味にては、總て筆記し若しくは印刷したる著作にして觀察、思想、若しくは想像の結果を保存するものを含む。確實科學(數學等)の諸著は、之れを除くを通例とす。さもあれ、時としては文學の區域を、美文即ち雅趣の作、幷に情感の作にのみ限ることあり、例へば、詩歌、能辨、史傳、等是れなり、抽象的論文及び純粹の學問文は之れを除く、

ノア、ヱブストル

ポスネットの定義

Literature consists of works which, either in verse or prose, are the handicraft of imagination rather than reflection, aim at the pleasure of the greatest possible number of the nation rather than instruction and practical effects, and appeal to general rather than specialised knowledg. e.

—Posnett. (Comparative Literature.)

文學とは、律語と散文とを問はず、考察の作といはんよりは、寧ろ想像の作といふべきものなり、敎化と實効とを期するよりは、寧ろ最多數の國人を樂しません事を期するもの也、特別の智識に訴ふるよりは、寧ろ全般の智識に訴ふるものなり。

(ポスチット比較文學)

文心雕龍

大舜云。詩言レ志。歌永レ言。聖謨所レ析。義已明矣。是以。在レ心爲レ志。發レ言爲レ詩。舒レ文載レ實。其在レ

玆乎。詩者持也。持二人情性一。三百之蔽。義歸二無邪一。持之爲レ訓。有符焉爾。人禀二七情一。應レ物斯感。感レ物吟レ志。莫レ非二自然一。（文心雕龍）

歌はかならず姿を先にとすべし四條大納言の新撰髓腦にいへるが如くは心姿ともに得る事かたくはまづ心を取るべしとあり先達の教定めて深きゆゑあるべき事なれば心をとる事は道を知れるも知らざるも皆同じ其さまを知らざる人の姿を得る事は難きなり況んや珍しき事を思ひねたれども姿は宜しからねばよき歌とせずことなる秀句なけれども歌樣なだらかなるはよみ人のしわざと見ゆるなり何れも〳〵本末のあひ合ひて同じさまに言ひながさんと思ふべし若し本はやさしく末は俗に近く上句は古く下句は新しきたひはねざる時の事なり則世の人これを腰折と名付たり（鴨長明瑩玉集）

中世書籍の價値

印刷器のまだ世になかりし程は、書籍の尊さいはん方なかりき、一冊の聖書を購ふには、普通の會堂を打建つる許の費用を要し、代人より讓り受けんとすれば、まづ其の理由を詳記したるものをもちて寺院にいたり、嚴正なる儀式を經るが法なりき。加之、其を受けたるものは、讓りたる者の厚意に對し、精神休養の爲にとて、日毎に供養するを例とせり。左に掲ぐる所は書籍の讓與に關して、當時行はれたる儀式の一班なり。

余、前の僧正レビンドンのフィリップは、このピーター、デ、アサレリオスといふ書を、今度リンコルン會堂に新設せらるべき圖書館に贈與す。其の使用および所有の權は、一の書記兼法教師ミルトンの牧師リチャード、トライスリーに、終生、存すべきものとす。後日は必ず前記圖書館又は館長に返附し、決して不義遲滯等の事あるまじきものなり。紀元一千四百二十二年自記。

フーラル

クラッブ

ナオツナオス

書籍につきて

いつにても憂鬱を遣らんとせば、走りて汝が書に赴け。彼等はやがて汝が心を緊捉し、而して餘念を汝が心外に驅逐す。彼等は毎に同じ懇切をもて汝を待遇す。

フーラル

書は人生に新觀察を與へ、如何に生活すべきかを吾人に教ふ。彼等は悲しめる者を慰藉し、頑なるものを譴責し、愚者を誡め、賢をしてます〳〵賢ならしむ(原文韻語)

クラッブ

書は汝等が有なり、そが緘默の諸房の裡には、世々に保存したる珍寶存す。彼の土耳古の帝が、必要の日の來らんを慮りて、そが祖廟の裡に藏すといふ、燦たる金玉の蓄積に優りて、貴きこと幾層なり。これら珍羞の寶庫は開かんこと心のまゝなり、而して妙なる音樂は常に汝が指頭の妙技を俟つ。(原文韻語)

クラレンドン
シセロ
コールトン
ミルトン
チャンニング
ダトリー

チオズチオス

おほよそ齢三十歳ならざる前に、讀書を愛せざる者は、後年に至り、それを領會するに足る程に、書を好まんこと、殆どかたし。

クラレンドン

書は少年の食餌（フッド）、老年の娯樂（デライト）、順境には粧飾となり、逆境には庇蔭と慰諭とを與ふ。 家に在りては、娯樂たり、外に出ても、障碍とならず、夜の伴、旅の伴、僻地の伴

シセロ

良友を獲るに次ぎての最良の獲物は、良書を獲ることなり。

コールトン

良書は保存韜襲して後生に傳へられたる、俊傑が貴重なる生血（ライフ、ブラッド）なり。

ミルトン

書に代はるべき物は無し。 書は無聊、病痾、痛苦の際に、我れを娯しませ、又は慰撫する伴なり。 兩大陸の財を以てしても、書の與ふる利益に代はることは能はざるべし。 若し叶ふべくば、各人をして其の家に若干の良書を集めしめ、而して其の身及び家人をして或文庫に出入することを得しめよ。 如何なる贅澤を犠牲としても、此ればかりの事は行ふべきなり。

博士　チャンニング

書は、或者には、只思想の高雅なる結合なりとして愛せられ、他の者には、智力鍛錬の一手段として愛せらる。 或者は、書を以て意見を傳播すべき機關なりとし、或者は事實の庫としてのみ之れを重んず。 然れども、彼の書籍をもて累代

に於ける道義的并に智力的生活の各種方法を記錄したるものと見做し、當代の實際に活動したりし精神(スピリット)を保存し得たることの多少によりて、書籍の價値を定むるものこそ、眞に書籍を利用するの道を得たるものといふべけれ。 此の點より觀察すれば、書は最早孤立せる一詩人又は一思索家の、孤獨の頭腦より生じたる虛妄なる思想の織物にあらず、むしろ嘗て多數の人間の心を動かしし物、生活の要脈を決定せし物の陰影なりと言はざる可からず。 云々。

ダトリー卿

吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、重に書籍の媒介に因る。 而してかゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。 最良の書に於ては、俊豪吾人に對ひて語り、其の最も貴き思想を吾人に與へ、且其の心靈を吾人の爲に吐露す。 此の幸福は天の賜ふ所、書は實に遠者、死者の聲、書は吾人をして過去の精神的生活を承受せしむ。 書は、實に眞成の平等主義者なり。 書は、忠實に之れを用ふる者には、其の何人たるを問はず、吾人人間中の最善最良なるものゝ交際を紹介し、吾人をして彼等俊豪の精神に接することを得しむ。 嗚呼、神聖なる諸著の作家が福音を傳へんとて、我が家に入り來り、ミルトンが樂園の情況を歌はんとて、我が閾をまたぎ、シェークスピアが想像の諸世界と人心の秘蘊とを開示せんとて、我が扉を叩かば、我が身如何ばかり赤貧なりとも、何かあらん。 當今の顯榮が嘗て我が陋屋に臨まざれとて、何かあらん。 我れは智力上の友に事欠かず、よし所謂當今の最上流者流に交はることと能はずといふとも、智を錬り才を鍛ふべき道は、具はらざることと無ければなり。

ギツボン

讀書に就きて

博士　チヤンニング

無差別に取上げられたる書籍は心の疾病をも痛苦をも醫するものにあらず、書を擇ぶには必ず法あり、我が知れる人々の中に大悲愁ある時には走りて或は小說又は當時流行の或洒落なる新版に就くものあり。これをよしとせば疫病の藥に薔薇水をよしとするに至らん、輕き書は心の重き時に用をなすものにあらず、ギヨオテが其の愛兒を失ひしや、いまだ絕えて修めざりし或科學を取りて研究しぬと聞けり、嗚呼ギヨオテの如きは其の何を爲すべきかを知れる醫師なりき、彼れのゝ如き大悲愁の場合に於ては、心をコソグリて樂しませんとするも能はざることなり、須からく心をモギ離し抽き去り吸ひ込み奪ひ去り——深淵の裏に沈め迷殿の中へ驅りたつべきなり、かゝるが故に中年又老年の治すべからざる悲愁に對しては、予は科學を嚴密に引きつゞけて研究せんことを幷にいとむづかしき推理などを專にせんことを勸む、これ相激の法なり、若し科學が(人皆數學的頭腦を有せざれば)其の智力に適せずば鈍根にも學ばれ得べくして而も最上根の人にも興味あるもの——新國語の如き——可なり、例へば希臘語、亞剌比亞語、スカンヂナヸヤ語、支那語、ウエールス語、

リツトン卿

留心して讀むこと、著者の言葉を精密に解釋すること、理由を領會せざる間は結論を容れざること、志ば〳〵停止して反省自問すること、此等は、人に教示す

るに易くして、みづから履行するに難きことなり。 これと同様に行ひ易からざるは、彼の殆ど經典的の確言なり。 曰はく、書を讀むに當りては、友を忘れ、國を忘れ、宗教を忘れ、價値に遭うては、之れに正當の賞讃を與へ、眞理に遇うては、何處にて見出ださるゝに拘らず、之れを奉體せよと。

ギツボン

コリアル

人ハ常に喰うて一層强健ならんを望み得るが如く、常に讀書して一層賢明ならんを望み得べし、さはれ、餘り多きは體質自然を疲らし、滋養を成さずして疾病を釀成す。

ジエレミー、コリアル

コールトン

或者は思索せんとて讀む――これらは稀有なり。 或者は物かゝんとて讀む――これを通常とす。 而して或者は談話の料を得んとて讀む――これ實に讀者の大多數を占めたり。 此の最後の讀者は、往々著書の第一頁のみを見て足れりとす、されば、或は謂ふ、此の般の讀者は、書籍を貴族の如く遇すと。 けだし、其の稱號のみをおぼえおきて親密の知りあひのやうに風聽しまはればなるべし。

コールトン

スチユワート

反省する所なくして、廣く種々の書籍を讀むことほど、工風創作の力を減少し、加之、なべての智力を弱うする傾向を有するもの、他に無し。 心の活動力、その久しく用ひられざるが爲の故に、漸々に毀損せらるゝなり。 而して吾人が主義とする所、並に持論としたる所は、日々に學び得る思想の限無く多數なると、其の相和諧せざることによりて、間々消殺せらるゝに至ることこそ無きにあらず。

ワッツ

ラム

ハミルトン

譬へば、人の終日食ひつゞけたらんには、消化の欠乏によりて毫も滋養を得ざらんが如く、果無(はてし)く書を讀みて、妄に智力的食餌を腦裏に詰め込むとも、何の益なかるべし。

ヂューガルト、スチュワート

何時、又何處にといふこと、書を讀むに當りて肝要なることなり。 配膳の全く整はん前の氣ぜわしき五六分に於て、誰れか退屈紛(まぎ)らしの爲に、スペンサルの神女王(フェアリ、クイーン)又は僧正アンドリュウスの説教の書一巻を取上げんとするものぞ。

ドクトル、アイ、ワッツ

ミルトン(の詩)は、諸子が之れを讀みはじめん前に、殆ど嚴肅莊重なる宗教的音樂の奏せられんことを要する者なり、されは、彼れはみづから其の音樂をもたらし來たる。 其を聽かんとする者は、之れに對して、必ず溫順なる思念と淸淨なる耳とをもたらさゞるを得ず。

冬の夜―塵界と隔離したらん折―ミルトンよりは儀式を要すること尠くして柔和なるシエークスピア來たり臨む。 かゝる時候には『テムペスト』又は彼れが『冬の譚(ウインタルス、テール)』―件の二篇は、諸子之れを朗讀せざらんとするも能はじ―或は自身を聽き手にし、或は或一人を求むるとは無しに聽き手にして、たゞし、一人より以上となれば、忽ち聽衆と墮落す。

チヤールス、ラム

讀むこと多量(マッチ)なれ、多數(メニー)なる勿れ。

サル、井リアム、ハミルトン

アヂソン
コールリッヂ
フォースター
アヂソン
ロック

讀書家は、おのが性質と他人のとを比較して、彼我を對照する時にこそ、最も正當なる愉快を感ずべけれ。

アヂソン

汝が讀む所を、一節毎に、力めて反省せよ。

コールリッヂ

娯樂以上に、ある目的を有てる普通の讀者も、いまだ讀書の尤も大切なる用法即ち力を得る事の價を知らざるなり。彼等の知識は力にあらず、且やまた其の記憶は、書中に充滿したる知識の、たゞ小部分を保存するのみ。されば、重大の目的は、且つ思慮し、且つ分析し、且つ辨判する讀書法によりて、心の礎を固うし、又其の調を高うするにあるべきなり。

ジョン、フォスター

余は我が讀者を二大部に分かつを得。愉快なると沈鬱なるとこれなり。甲は我が徒弟中の快活なる部分にて、頓智、滑稽の意匠を欲し、乙は盛名ある古代の諸作を讀過せん事を欲す、其の書は皆さしも樣々なる數代の檢定に及第しつるものなり。

アヂソン

教育は紳士を作りはじむ、然れども、讀書、良伴侶、反省、以て彼れを完成せざるべからず。

ロック

萬事に就きて讀みたる人は、萬事を解したるやうに思はるれど、必しも然らず。

讀書は、只智識の材料を心に供するに過ぎざるなり。我が讀みたるところを我がものとするは思念の力なり。吾々人間はよく嚼みて後に消化するを得る動物なれば、只徒に寄せ集めたる大なるものを詰込めばとて、益するところなし、幾たびも〳〵、嚼して、又咀せずば、力をも滋養をも得がたかるべし。

ロック

コリアル

讀書によりて、人は前世に生活するが如き趣あり、すなはち、過去の時代の人と世を同うするが如き思あり、かくして生前に遡るば、プラトーの所謂前生（Pre existence）に優れり。

ジエレミー、コーリアル

フオースタル

書を讀むに當たりて、殆ど專に第一流の書のみを擇ぶといふ、節約法の切要なることを、充分に心附けるものはいと稀なり。　或特別の理由あらば格別、最高等の書を讀みも得つべき時に際し、何の故にか、甚だ劣等なるものを繙くべき。

ジヨン、フオースタル

ジヨンソン

普通の知識を增進せん爲には、心の赴くまゝに何書にても繙くべし、たゞし、一科學を修めんとせば、整然と又決然と進まざるべからず。　心の赴く所に隨うて讀みたるは、感銘を與ふること特に強し、若し然らずして讀めば、心の一半は注意の爲に費ゆ。　されば、讀むことに用ひらるべきは、只他の一半のみ、若し一書の中央（なかば）より讀みはじめて、更に讀みつゞけんの念起らば、卷首に立戻るなかれ、この念復び起こらざるべし。

ドクトル、ジヨンソン

アヂソン

苟且(かりそめ)にも美なる著述を賞翫する力あるものは、其の大作者の書を讀むや、毎に其の卓越せる句法より新しき美を發見するか、然らざれば、更に強き感銘を得、其の談話思想の仕方さへも、おのづから彼れに習ふに至る。

アヂソン

ブレーキー

讀書の正確なる法度は、最大緊要のものなり。夫れ他人が焦慮の果(書籍)を讀むに當たりて、必要なる事、二あり。餘りに多量に讀まざることゝ、其の讀む所の事の性質に留意潜心することゝなり。多數の人の書を讀むや、公然明白に時間を消するをもて、其の本意とす。而して此の類の讀者は、所謂讀書社會の大多數を成せり。他の者はまた一層賢明にならんとの嘉すべき懸念(けねん)をもて讀む、而して其の目的の遂げられざるや、其の失望の由緒は、おほむね餘りに多讀するの習癖にあり、否(しから)ざれば、其の見る所に十分の思を潜めざるにあり。

ブレーキー

ボリングブローク

甄別と選擇とを行ひて讀む者は、學ぶところは狹かるべきも、知るところは深かるべし。而してかゝる智識は、方案ありて蒐められ、法度によりて研鑽せらるゝが故に、自家にも、他人にも、常に直接即妙の用あるべし。然るに、かゝる甄別と選擇とをせで、彼の佛人ボータンの門人の如く、敢て天下の書を讀盡せんと欲する徒(やから)は、竟に他事を行ふべき時をも、器をも、得ざるならん。蓋し、彼れは考ふる能はざるべし。考なくして讀まんは、妄なり、又行ふ能はざるべし。而して行はで考へんは妄なり。要するに、彼れは多く苦みて、材を集め、多く費やして之れを購ひ、而して之れを製作して適當の小器となし、又は實用に供すべき問

暇なも、技倆なも、得ざるべし。人或は謂はん、何の爲に、敢て時を節約し、若しくは建築の術を學ぶべき必要あるか、彼れ固より何等の建築方案を有せざるにさ。果たして然らば、そも何の爲に、蒐めたる此等石の巨坑、此等土砂、石炭の山岳、此等松柏の森林は。

ボリングブローク

公共圖書館の利害（米國）

少しく古聞に屬すれどジェームス、ハッバードが、嘗て『北米評論』にて論せし所によりて、米國に於ける公共圖書館の利害を報道して、今將に漸萌せんとする我が公共圖書館設立計畫の參考に供するも、流石に要無きにあらじ。ハッバード曰はく、公衆の縱覽に便する公共圖書館の始めて成りしは、已に四十餘年の昔なり、其の以前にも圖書館はありしが、いづれも株主の所有物にあらざれば、義捐醵金に成り、然らざれば、或結社若しくは學校などに密着したるものにて、專ら學生輩の需要にのみ供せられたりき、夫の文學の寶庫を開いて、之れを商人、職人、工人等にまで縱覽せしむるに至りしは、所謂公共圖書館の各地方に設けらるゝに至りし後の事なり。此等圖書館の敎育薰陶に大益あることは、いふまでも及ばず、若しかゝる便宜なる縱覽所なかりせば、Arkwright たり、Stephenson

たり、Lawrence たり、Lincoln たるべき、望ある少年輩も、竟に其の人たり得べき便宜に、得もあはで終りぬべし。　加之、圖書館のある爲に、惡所遊びを減じ、惡戯に耽けることを減じ、飲食の欲に閑暇を浪費する等の弊風を減ずる効能もあり。　蓋し、圖書館の設立は、大衆敎化の志に出でたること明かなり、然るに、當局者の心中には、敎訓を與ふると同時に多少の快樂をも與へばやといふ志のはじめよりありしかば、多少慰鬱排悶の用に供すべき小說やうの書籍をも供へ、且小童等の入館をも許したり。さる程に、弊風いつしか出來し、七割八割は小說のみ需讀せらるゝ有樣となりて、讀者はおほむね少年輩のみのやうになりぬ。　小說と一概に稱する中にも、無害無邪氣にして高尙美妙なるものも多かれど、彼等少年はかゝる辨別に注意するものにあらず、むしろ不道德なる事、猥褻なる事の記したるを選出て讀む傾きあるは事實なり。　論者或はいふ、たとひ其のはじめは劣等卑猥なるものを喜ぶとも、多く讀みて目の次第に肥ゆるに至れば、自から文學趣味の高上なるを感得し、竟にはスコット、ミルトン等の傑作にも讀み及ぶべし、一時の弊害は憂ふるに足らずと。　是れ實際を察せざる妄論なり。　眼識無きものはたとひ幾百卷の小說を讀むとも、竟に其の文學的優劣を識別する能はざるものなり。

筋の面白きと事柄の卑猥なるとをのみ目的として小說を讀まん者が、いかで一二年にして文學の眞趣を解するに至るべき。況んや良師無く良周圍無き地方に於てをや。今にして救濟矯正の法を行はずば、圖書館は毒流の泉源となり了るべし。而して其の方法は、先づ各地方の敎育會をして嚴に該地方の圖書館を管督せしめ、且有害なるべき小說の貸出しを禁止するにあり、兼ねては圖書買入の方法を整理し、有害の著作は總て買入れぬことゝすべし、又各圖書館の書目は、之れを敎育會に於て檢定する等の事必要なり、云々と。

泰西古今の圖書館

東羅馬帝國の首府なりしコンスタンチノープル(卽今の土耳其帝國の首都)に於ける最初の公共圖書館は、コンスタンシウス帝の創立に係ると傳ふ(帝は紀元後三百五十年卽位)。ジユリアン帝も亦勵精して夥多の謄寫本を增加したり。扨藏書次第に加はりて十二万卷の多きに及びしかば、帝は抄錄係七人を選びて圖書館附とし、新に古本を謄寫せしめ、又校正に從事せしめき、云々。言ふまでも無く、其のころはまだ印刷術開けざりしなり。シリアのアンチオク市にも一大圖書館ありしが、

羅馬帝ジョヸアンの朝取り毀たれき。アレキサンドリアの圖書館は、オウガスタス帝の力にて、一層鴻大なるものとなりしが、耶蘇敎徒が頑狂の爲に滅びき。其の他、羅馬府內にも、幾多の著名なる圖書館ありしが、例の蠻賊の入寇の爲に、多少の災を蒙りぬ。現に第五世紀のはじめには、羅馬國內に二十有九の圖書館ありきといふ。第七世紀に至りては、戰爭の絕間無きが爲に、コンスタンチノーブルはいふに及ばず、總て東方の圖書館は災を受けたり。第八世紀に至り、彼の偶像崇拜の事に關して爭議の起りしや、淸院(モナステリー)內にある圖書は、多く運び去られて空しくなりぬ。第九世紀の中ごろより、並に第十一世紀中に、彼の篤學なるバシリウスとコムメナスの兩家が帝位に上るに及びて、夥多の新圖書館設立せられ、就中、群島海ある諸寺の境內に設立せられき。アレキサンドリアなる諸圖書館は、第七世紀中、亞剌比亞人の爲に燒き亡されき、と舊史には傳へたれど、近代の史家ギボン、ラインハード等のいふ所によれば、此の事いと疑はしきに似たり。後年亞剌比亞人が科學の考究に心を傾くるに至りしや、大に古今の書卷を集め、アレキサンドリアに於ける諸藝術大に勃興し、亞剌比亞寫本の大圖書館成りぬ。第九世紀に至りて、カリフ、エル、マ、ムム(國王)希臘及び其の他の寫本をお

びたゞしく買ひ集め、之れをバグダッドの都に送りき。

西方に於ては、第八世紀の末シャーレマン帝の奬勵によりて、書籍大に蒐集せられ、就中、佛蘭西、日耳曼の兩國には、處々に圖書館設けられき。英國にてもアングロ、サクソン王國のころに、已に圖書館の設立ありしが、就中、有名なるはヨオクの圖書館なりき。 さかれども、十世紀、十一世紀間に、ノルマン人襲來せしが爲に、其の多くは損害を蒙りき。

第九世紀の末より、第十一世紀までの間は、伊太利にて科學の研究痛く衰へたりしため、書籍蒐集の事も振はざる有様なりしが、十二世紀に於ては、亞刺比亞的西班の圖書館頗る盛んにして、其の數七十に及び、寫本二十五万卷を蓄へたりき。

第十五世紀に印刷術の發明せられしや、大圖書館設立の好尙大に增しぬ。 彼のヴチカン圖書館の基礎も、フロレンスなるメヂキアン圖書館の基礎も、共に一千四百五十年ごろに着手せられき。 其の他ヱニスなるセント、マークの圖書館、倫敦なるセント、ポールの圖書館、カムブリッジなるトリニチー、コレージの圖書館等も。

近代の圖書館の中最大と稱せらるゝもの、五あり。 (一)英國博物館內にあるもの(二)ヰンナなる墺帝の圖書館(三)ヴチカン圖書館(四)フロレンス

其の中最も價値に富めりといふヰンナの圖書館の蓄藏は四大門に分かたれたり。(第一)膽寫本(第二)影刻書類(第三)古代藝術書類(第四)近代諸著是れなり。而して影刻書類の集められたるもの凡そ三万種、箱の數八百、其の中二百十七だけには肖像畫を、二十五には、羊皮紙に畫きたる細小肖貌畫を、をさめたり。寫本木版等を除きて活版印刷の分のみを概算するも、三十万卷以上なるべし(此の計算は尠くも二十年以前の調に係る)。

英國博物館内なる圖書館は、あらゆる大陸の圖書館よりも、古寫本の數に富めり、中にも、最も貴きは、其のかみオツクスホオドの最初の伯ロバルト、ハーリーの有なりし、所謂ハーリー古寫本是れなり。此の集中には、殆ど八千卷の寫本あり、別に原本の卷物、特許狀、公文等をはじめとして、種々雜多の古文書類、四万以上添はりたり。いづれも重に大英國と愛蘭土とに關したるものなりといふ。

其の他、專ら探古學の參考にとて集められたるコツトニアン古寫本といふあり。是れ著名なる好古家サー、ロバルト、コツトンの蒐集せしもの、又ランスダウン古書集といふあり、こは重に第六世紀、第七世紀間の英國の歷史に關係したるもの、此の中には、寫本も、刊本もあり、史書研究の好材料これに過ぎたるは無かるべし。尚此の外にも、サー、ハンス、スローム、幷にバルチ博士の古書集の極めて緊要なるあり、又部數に於ては、稍々前諸集

に劣れども、ハーグレーヴの藏書、サー、井リアム、マスグレーヴの藏書、グチチエロードの藏、井リアム、コールの藏書、其の他幾多の藏書が、近代に至りて、皆此の英國圖書館内に集められたれば、其の大なることに於ては、此の圖書館こそ天下第一と稱すべけれ。

詩論雜纂

レイ、ハントの詩論

詩人の階段

Liegh Hnut は近世英國散文名家の一にして兼れて詩伯の譽を得たり。一千八百五十九年死す、下の文は“Selection from the English poets”のうち“Imagination onaFancy”の條下より抄譯せるものなり。

如何なる種類の詩が、最も高きと問はゞ、予は疑もなく、敍事詩と答ふべし。蓋し、敍事詩は、物語の添はりたる脚本の體をも含めばなり、換言すれば、篇中なる人物の言行の外に、作者自身の言をも含めばなり。且や敍事詩家は、飽くまでも其の談話の才を勞して、いと長き間、妙に万事を敍述す。其の興感最も乏しき條を敍するや、殊に工匠の妙なるを見る。さりながら、敍事詩門が、最大の詩人を含畜せりや否やは、なほ未定の問題なり、何となれば、ホーマルが敍事詩人の摸範として立てる時だに、批判は沙翁に遭うて狼狽すればなり。但し、沙翁と雖も、其の壯年の物語

歌 "Venus and Adonis," "The Rape of Lucrece" によりて判すれば、ホーマルの如く、事を叙し得しか疑はし。(中略)。 ホーマルと沙翁とに次ぐ物語の達人は、一層狭けれど、一層峻刻なるダンテ、崇厳なる想像のミルトン、いと廣くして極めて純樸なるチョーサル、次に豐富にして飄逸なるスペンサル――詩歌の最も詩歌的閑處に棲める不滅の兒、――其の次は第二流の大脚本家(予よりも希臘の戯曲家を能く知れる者が、彼等をばチョーサルの前に置かば知らず)其の次はアリオストーの詩の稀微なれど强健に普通なる、シオクリタスの快活に戸外性なる、これもまた普遍家なり。 其の次は最も妙なる抒情詩人(彼等は叙事詩家に比ぶれば、只束の間の翺翔をなすものなり。) 其の次は專ら觀念を旨とする詩人、即ち情よりは思想を多くもてるもの。 其の次は狀物、諷刺、奬誡、警句の作者是れなり。 さはれ、劣等の段階の第一等の詩人は、一層高等の階段の末班なる凡庸の詩人よりも優れることを忘るべからず、然らざれば、バトラルはポープよりも優る、といふに至るべし。 所詮、事の筋と人物の性質とに富める想像力は、最大の詩人を造り、情感と思想とを兼備したるが、第二流の詩人を、空想のみなるが其の次を、さて頓才が其の次を造るなり。 思想のみなるは、絶えて詩人を造らず、蓋し、思慮分別の純粹の

結果は、タヾさばかりの實際智識たるに過ぎざればなり。情感は、よし自覺の思想を缺くとも、思想のみなるには優りて詩を作るに益あり、情感は思索の手續を缺きたる一種の思想なればなり、見ずして眞理を掌握する力なればなり。而して殊に注意すべきは、情感は思想がすなる過失に陷ることいと稀れなり。古來、人はtaste(味感)とjudgment(分別)とにつきて無要なる辯を費やせり。夫れ味感は分別を作る者なり、試に擬製の菓實を取りて汝が口中に置け、又はたゞ其をまさぐり見よ、然らば則ち、味感又は觸感によりて判ずると、分別と稱する空理によりて判ずると、互に相異なると明ならん。後者は揣摩と疑惑との中に汝を投ずるのみ、是れ其の知察力に釣合はざる味感をもてる或嚴格幽玄なる思索家の思想が吾人をして案外を感ぜしむる所以なり。(中畧)。又彼の事物の虛實に拘らず、毎に情感の眞を破らざる詩人の吾人を悦ばしむる所以なり。彼等詩人は、常に其の目的と其の需要とに背かずして、自然の大範圍を馳騁し、他を惑はしむることなく、みづからも惑ふことなく、みづから樂しみ、又他をも樂しましむ。而して今の不完全なる狀態に於ては、人皆他を服從する力を以て他を娛しますする力よりも一層の上位に置かん〳〵と欲するの念あるものから、倖にも樂しといふ

アーノルドの説

事は、必しも偉大といふことゝ兩立しがたきものにはあらざるなり。

詩の効用

詩の効用

次第に人間は、人生の解釋、人生の慰諭、人生の維持を得んために、詩の方へ向かはざるを得ざることを發見すべし。詩といふもの微かりせば、科學も不完全なるものと見ゆべきなり。又思ふに、今宗教と見做され、哲學と見做さるゝもの、大概が、やがて詩に代はりゆく時あるべし。ヲオヅヲオスいはく「詩は諸科學の面(カンテナンス)に於ける情熱的(イムパツシヨンド)表顯(エキスプレツシヨン)なり」と。表顯なかりせば、面はありとても、無きにひとしかるべし。彼れまた曰はく「詩は諸の知識の息(いき)にして一段微妙なる精氣なり」と。蓋し凡俗が信憑する淺々しき證據をもてあがむる宗教も、因果と有限と無限との理に關する推論をはこりがに述ぶる哲學も、必竟ずるに知識の影、又夢、又虚形にあらずして何ぞや。早晩吾人が眞面目に彼等を信じたりしを怪訝するの時來たらん。而して吾人が竟に彼等の空虚なるを知るに及ばゞ、吾人はいよ〳〵詩の吾人に與ふる知識の微妙なる精氣を賞美すべきなり云々。

マシウ、アーノルド(評論稿)

詩の最高資格

最高の資格の、如何にして、何故に生ずるかは、いふこと難し。吾人は只何處に何物のうちに、彼等が生ずるかを言ひ得るのみ。案ずるに、彼等は詩の實質(matter and substance)のうちにあり、又其の風姿(manner and style)のうちにあり。此の二者(即ち實質と風姿と)は高尚なる美と德と力との標章を有す、然れども、其の標章を抽象して、解釋せよ、と乞はれなば、吾人は能はずと答へざるを得ず。

（同　前）

眞正（ゼニユイン）の詩の詞（ことば）

眞正の詩とドライデン、ポープ、並びに彼等の派に屬する者の詩（案ずるに眞正ならざる詩、徒に彫蟲を事させるもの）との差別は、簡に言へば、下の如し、曰はく、彼等の詩は、其の頓才に由りて事物を觀察して作りいでたるものなるに、眞正の詩は、靈魂に由りて事物を觀察して作りいでたる者なりと。ヲオヅヲオスが、嘗てドライデンを評せし如く、彼等の用語は事物に其の靈眼を着せずして作る者の用語なり、されば、彼等の用語は、散文の通例の用語が、事物を憶ひ起こさしむるが如くに、事物を憶ひ起こさしむるに足るのみ。蓋し、其の外形は空想と智力とを娛しましむべき若干の機慧と巧妙とを具へたり、其の由來の智力にあればなり。然るに、眞正の詩の用

語は、之れに反す。 彼等は事物に靈眼を着して詠作する詩人の語なり、されば、其の化醇する手續は、詩人の靈魂中に浸潤したりしものゝ化醇にて、其の出で來たるや、自然にして且必然なり。

（同　前）

詩の大

人生に對して、思想を高尙に深邃に應用する、是れを詩的大の最要部分とす。 凡そ大詩人は、其の主題の何たるに關らず、詩的美と詩的眞との法則に由りて、永久（ひとしなへ）に確定せられたる約束にしたがひ、每に人間、造化、及び人生に於ける思想を應用するによりて傑特の質を得。 ヲォヅヲォスが衆詩人に傑出せる所以は、人間、造化、人生に於ける思想をば盛に其の雄篇のうちに適用したるにあり。

ヴルテールは英國の詩人が倫理（モーラル）の觀念（アイデア）を詩中に寓せり、とてたゝへたるが、思ふに、彼れが所謂倫理の觀念とは、人生に對して高尙深遠に思想を應用することに外ならざるべし、俗に謂ふ勸懲の義ならば敢て稱すべきことにあらざるや明なり。（中略）。 夫れ「如何に生活すべきか」といふ問題は、一種の倫理觀念（モーラルアイデア）なり、而してそは衆人心に感觸を與ふべき疑問にして、又衆人の常に幾分か關係せざるを得ざるものなり。 爰に倫

文學の解

理觀念といふは、いふまでも無く、廣義なり「如何に生活すべきか」といふ疑問に關するものを、總じて倫理觀念といふなり。

詩は所詮人生の批判なり。詩人の大は人生問題、即ち「如何に生活すべきか」といふ問題に對して、其の思想を强盛に、且優美に、應用する處に存す。所謂道義（倫理）は、動もすれば、狹隘虛僞なる方法をもて論述せられ、動もすれば、已に過ぎ去りたる思想と信仰との統系に束縛せられ、概して誇浮衒博の徒の掌裡に落ちたり、此に於てや、人、時としては所謂道義（倫理）に背馳する底の詩歌をよろこび、又は、所謂道義に頓着せずして思ふまゝに抒情したる詩歌を好むに至れり。さはれ、此くの如きはみづからわざむけるものゝみ。案ずるに、此の自騙を醫すべき最良法は、彼の人生といふ偉大不盡の語に（其の深意の知らるゝに至らんまで）吾人の心を注ぐにあり。所詮、道義（倫理）に背馳するの詩は人生に背馳するの詩なり、道義（倫理）に對して冷淡なるの詩は、人生に對して冷淡なるの詩なり。

（同前）

文學

もろ／＼の文學の正的は、若し縝密に考察せば、人生の批判たるに外な

らざるべし、然り、もろ〳〵の發言表白の主（おも）なる目的は、散文と律語とを問はず、人生の批判なり。　但し、詩に於ては、人生の批判をものするに當りて、毎に詩的眞と詩的美との法則に從ひて、之れをせざるべからず。蓋し、實質（マツタル、サブスタンス）の眞と嚴と風姿（マンナル、スタイル）の妙と圓と（意の嚴正と辭の靈妙と）が詩的美と詩的眞との法則にしたがひてものせられたる人生の批判の要件なり。　而してかゝる約束の果たして遂げられたりや否やの別は、古今の大詩人の傑作を知り且感ずるに及びて認むるに至る、云々。

（同　前）

詩人の本分

詩人の本分は、個物を撿せずして類を撿するにあり、通有の性質と大なる現相とに注意するにあり。　彼れは鬱金香の縞を數へず、はた林樹が蓊蒼の濃淡を寫さず。　彼れが自然の姿を描寫するや、衆の心に其の原本を呼起こすべき秀拔顯著なる形象を示せば足るなり、甲は注意したらんが乙は看過したらん如き微（かすか）なる辨別をば棄てゝ、注意者にも、不注意者にも、ひとしなみに明著なるべき特質を取るべきなり。　さりながら、自然（万象）の知識は、只詩人が事業の一半なるのみ。　彼れはまたありとある人生の摸樣に通せざるべからず。　そも〳〵詩人の資格は（第二

各境遇の幸不幸を評價し(第二)諸煩惱の力を其の諸の離合(關係)に就きて觀察し(第三)又人の心が種々の制度、文物、季候、習俗の偶然の影響によりて色々に變りゆき、又は幼年の快活より老年の落膽に移りかはる、順序、次第を追求せんことを要す。　さてまた詩人は、當代當國の偏見を解脫し、善と惡とを其の抽象的不易の狀態に就きて考察し、現在(時尙)の法度、學說を抛ちて、万古不易なる普遍超絕の眞理に達せざるべからず。かるが故に、詩人は其の名の揚がることの徐々たるに甘心し、努めて當代の褒譽を輕じ、後世の裁判に我が權利を委せざるべからず、即ち詩人たる者は、常に造化の解釋者、人間の立法官となりて著作し、未來永々、人間の思想と風俗とを管督するものと自信し、時と處とに超越したるものと自認せざるべからず。　かくても、詩人の力むべきことは、未だ盡きず、彼れは夥多の國語を知り、夥多の科學をも學ばざるべからず。　而して其の文致をして其の思想に相當せしめんがために、不斷の修鍊によりて、詞のありとある精妙と、風調のありとある雅趣とに熟せざるべからず、云々。

詩人とは何ぞや

ジョンソン(ラセラス物語)

詩人とは、人間に對して談ずる人なり、通常の人よりも一層活潑なる感受力、一層廣大なる熱情と慈愛と、人性に關する一層大なる知識、一層廣濶なる靈魂を享有する人なり。おのが情感と願望とを悅び、他の人よりもおのが身のうちにある生活(ライフ)の精氣をば娛しみ悅べるものなり。即ち宇宙間の諸動作にあらはれたる己(おの)れのと同類の願望と情感とを冥想することを樂しみ、且かゝる情感と願望とを發見し得ざるときは、そを自ら創作せざれば安せざるやうの習癖ある人なり。尙件の資格の外に、他の人々よりも現存せざるものを現存したらんやうに感ずるの性あり、又心のまゝに情感を呼び起こすの力あり。固より件の情感は、實事によりて生ぜらるゝ情感と同じからざると勿論なれども、他の人々が偏(ひとへ)に其の智力の作用にのみよりて平生感覺する所のものに比ぶれば(就中、漠然たる同情同感のめでたく且たのしき部分などは)一層實事によりて牽起せられたる情感に類似するもの也。さてこれに由りて、又常にこれに慣るゝに由りて、彼れ(詩人)は其の思念するところと感覺する所とを、他の人々よりも、一層たはやすく表白する力を得たり、就中、直接なる外來の刺擊を待たずして(或は自ら選びて、或は其の持前によりて)自然に其が心に浮びいづる思念情感の若きは之れを一層神

速に表白するとを得たり(中畧)。

我が嘗て聞く所によれば、アリストートルは詩を以て諸の著作中の、最も哲理めきたるものといへりとか。詢に然り、詩の目的は眞理なり、個人に關する、又は一箇處に關する眞理にあらずして、普遍活動の眞理なり、外面(皮相)の證左をば礎とはせで、情感の力に賴りて生けるまゝに心の底に傳へらるゝ眞理なり。(又略)。詩は人と自然との面影なり、夫の傳氏、史氏が原本に忠實ならんとするや、其の前に當たる障碍は、詩人の前に當たる者に比すれば、一段多かり。詩人は只一種の制限にしたがひてのみ著作す。制限とは、或種の知識をもてる人間に直接の快感を與へざるべからずといふことのみ。而して件の知識といふは、法學者、醫師、航海者、星學家、博物家などの資格にてもてる知識にはあらで、只人といふ資格にてもてる知識なり。それはかりにてこと足るなり。此の一制限の外には、詩人が事物の面影を描かんとするに當たりて、障害となるべきものなし。

直接の快感を與へざるべからざる務は、決して詩人の技術を貶するものにあらず、否々、此れは是れ宇宙の美の認識なり。而して件の認識は表向(儀式上)の認識にはあらで、隱然(間接)の認識なれば、一層誠實なるも

のおり、而して慈愛（ラブ）の精神をもて世界を視るものにとりては、いとたやすき業（わざ）なり。又思ふに、そは人間の固有純粹なる威儀に對しての服從なり、彼の宏大なる快感の原理に對しての服從なり。蓋し、人は快感によりて知り、感じ、生活し、動止す。必竟ずるに、吾人は快感によりて傳播せらるゝ同感の外には、何等の同感をも有せざるなり。予の意を誤解する勿れ、人もとより苦感に同感することもあれど、ある同感は所詮快感との幽妙なる結合によりて生じ且長ずるものなり。之れを要するに、快感に基きて成り、又快感のみによりて、吾人が心中に存在する知識の外に、特殊の事實の觀念より得たる知識(即ち普通の原理)を吾人の有したる例なし。所謂科學家も、例へば、化學者、數學家の如きも、其の遭遇せざるを得ざる困難と不快とが如何ばかりなるにもせよ、常に前件の實なるを知り且感ずるなり。夫の人體解剖家の學識する物や、其の物はいかばかり忌々しく又痛ましくとも、彼れは其の知識の樂しきを感ず、而して其の快感を有せざる邊には、彼れ曾て何等の知識をも有せざるなり。然らば、詩人は何事をかなす。彼れは人と物とを考察するなり、即ち彼等が其の周邊に於て、互に相動作し、相反動作して、苦と樂との無限の尨雜を生じ來たるを考察す。詩人の人を考察するや、彼等おのおの

其の自然と性と其の平常の生活とに於て(若干の直接の知識、即ち若干の信認と若干の直覺と、習慣によりて直覺のやうに成れる若干の演繹推理とによりて)此の理を觀じつゝあるものとして考察す。 又彼れ(詩人)は、人はおの〳〵思想と情感との、此の複雜なる光景を視察して、直接に其の同感を呼ぶべき事物を到處に發見しつゝあるものとして考察す。 蓋し、同感は人性自然の必需によりて、樂の素を苦の素よりも一層多く含める者なり。

詩人は所詮は相適應したるものとして人と自然とを考察す、又おのづから自然の最美最旨なる質を寫す鏡なりとして人の心を考察す。(中略)。 詩人の知識も、科學家の知識も、共に快樂なり、然れども、前者の知識は、吾人が生存の必然部、即ち吾人が自然必須の遺傳産にして吾人に緊着するもの、而して後者は個人的、特立的收穫なり。 其の吾人の手に來たるや、徐々たり、加ふるに、其の來たるや、吾れと同胞とを結びつくる、通常且直接なる同感に由る者にあらず。 夫の科學者の眞理を求むるや、之れを遠隔にして未詳なる恩人と見做し、獨居の閑處に於て之れを愛玩す。 詩人は然らず、衆の諸共に合唱し得べき歌を誦して、以て直現の眞理を悦ぶこと、猶目前の朋友、日々の伴侶に對するがごとし。 詩は、諸

の知識の息にして其の一層微妙なる精氣なり。又詩は諸科學の面上なる情熱の色(エキスプレッション)あり。シエークスピアは人をもて「前に後に視るもの」といへり、特に詩人を然りとなすべし。詩人は人間の干城となる磐石也、維持者なり、保存者なり。其の移るや、毎に同類の慈愛を到處に携ふ、地味、季候、國語、風俗、法令、習慣の差別にも拘らず、默々の裡に滅したるものにも、暴滅せられたるものにも、拘はることなく、詩人は巨大なる全人間社會を、古今に亘り、東西に通じて、知識と情感とによりて統括す。詩人の思念の正的は到る處に在り、眼と諸感覺とは、げにや詩人が最も得意なる嚮導者なりと雖も、苟も情感の太氣の存したらん處へは、彼れ翼を羽うつて赴くことを得るなり。詩は諸の知識の最始にして最終なるもの――詩は人の情(ハート)と共に不死不滅なり。若し科學家の努力が吾人の境遇と吾人が常に受くる印象(感銘)とに、直接又は間接の、或物質的改革を生じ來たるとありとせんか、詩人は睡眠してあらざるべし、否、彼れは直に科學家が前進の歩武を追ふべき也。彼れはかく啻に其が間接普通の影響を尾するに止まらずして、彼れ科學家の正的たる、事物の中心に活感情を輸入し、彼れが傍に密接して立つべきなり。化學者、植物學者、鑛物學者の最も緣遠き新發見も、若し此等新事物が、吾人の熱

知する時となり、此等專門學者が觀念する所の諸關係が、此の娑婆に苦樂する吾人にとりても、明白に肝要なるものとなり來らん時とならば、詩人が技術の正的たること、猶其の平生に用ひ得る、他の百般の事物に於けるが如くなるべし。 若し今の所謂科學が普く人間に熟知せられて、殆ど肉と血とをもてる形質を被る(かうふる)に至らん時來たらば、詩人は此の變形を助長せんが爲に、其の神々しき精神を貸與し、かくして產みいだされん現體(ビイング)をば、人間の家庭に於て、愛昵親炙すべき一員として款待せんとす。 果たして然らば、苟も予がこゝに傳へんと試みつる高尚なる詩の義を奉ぜん者は、必や暫且偶然の虛飾に耽りて、其の描く所のものゝ神聖と眞實とを毀ひ、又技巧を弄して虛譽を博せんと力むることはなかるべし。 技巧を用ふるの必要は、其の主題の陋劣なるを假定せるに職由するや明瞭なり。

ヲオヅヲオス

詩の三時代

これユーゴーが其の作『クロムエル』の序文中にいへるところなり、今其の原本を備へざれば、ポスチツトが『比照文學』の中に引抄せるものを譯せり。

詩に三代あり、そはおの〳〵社會の一時期に相應す、ode(オード), epic(エピック), drama(ドラマ) の

三代なり。原始の代は抒情的、上古は敍事的、近世はドラマ的なり。抒情詩は恒久を歌ひ、敍事詩は經歷を傳へ、ドラマは人生を描く。第一の性は質(Naïveté)第二のは單(Simplicity)第三のは眞(Truth)なり。彼の物語歌の作者(Rhapsodist)は抒情詩人より敍事詩人への過渡を表示す、猶物語作者が敍事詩人よりドラマ詩への遷移を表示するがごとし。第二の期と共に史家現れ、第三のと共に編年史家と批評家と現る。抒情詩の人物は怪偉の人――アダム、ケイン、ノアー、敍事詩のは巨大の人――アキリーズ、アトリウス、オレスチーズ、ドラマのは人――ハムレット、マクベス、オセロ。抒情詩の命は理想、敍事詩のは壯大、ドラマのは現實。詮ずるに、此の三樣の詩は、三大源より出づ――聖書、ホーマル、シエークスピア。是れを人と世との異なれる時期に於ける思想の異相とす、すなはち其が三面なり、少時、壯丁、老年也。或一文學のみを、又は諸の文學を總括して撿せよ、則ち汝は每に同事實に逢せん――敍事詩人に先つ抒情詩人、ドラマ詩人に先つ敍事詩人。(中略)。自然幷に人生に於ける万物は、皆此の三程――抒情、敍事、ドラマ――を取るなりと言ひ添ふるも、思ふに誣言ならざるべし、万物皆其の生、其の活、其の死を有すればなり。想像力の空想せる關係と理性の嚴密なる演繹とを混ずることの妄な

らざりせば、詩人はいふならん、例へば日出は頌(ヒム)なり、亭午はかゞやく叙事詩、日沒は日と夜と生と死との勝敗を爭ふ暗膽なるドラマなりと。

其の評

ポスチット此の說を駁して曰はく、ユーゴーの論たるや、啻に抒情、叙事、ドラマの三語を濫用したるに止まらざるなり、かゝる濫用の底には、往々にして推理の誤謬潛伏す。蓋し、ユーゴーの論は、確實なる科學の光明かと見誤らるゝ空想の燐火たるよりも以上なり。それは人性發達の眞の順序を顚倒したるに外ならざる者なり、譬へば、ルウソーの理想的自然の狀態が、吾人が一たび社會改進の眞の根底の、自由なる個人に由來せずして、同族の共同團結に由來すといふ事實を認むるに及びて、忽ち一夢となり去るが如く、ユーゴーの詩に關する妄想も、歷史上の事實に徵するに及びて、立地(たちどころ)に煙散霧消す。史は彼れが所謂「原始」の「怪偉的個人」の假設(ミス)たるを證すればなり。蓋し、ユーゴーは背史的(アンヒストリカル)なる二種の理論間にさまよへるに似たり。彼れ半(なかば)はプラトーの空想を奉ずるに似たり。曰はく、人の性は社會變遷の時期程度を異にするも、其が精髓に於ては相異なるものにあらずと、隨つて社會の境遇は、個人が其の中に棲みて行爲思念するにも拘らず、深くは其の性格に感觸する者にあ

らずと做し、又かゝるが故に、「抒情」といふ語は氏族にとりても、市府にとりても、國民にとりても、將た宇宙國にとりても、常に事實と思想との同じ一束を表示する者なりと做せり。而してまた半は彼の古宗敎的、兼、詩學的理論を奉せんとしたるに似たり、曰はく、人間は神種、英雄種の墮落せる者なりと。此の說によるときは、個人の性格は(疑ひもなく其の形貌も)はじめは「怪偉」なるものなりしが、次第に收縮して、やゝ程よき大さの巨人となれりと――譬へば、彼のタイタンが收縮してニムロッド其の人の如くなれる如し、而して終に更に收縮して吾人が今見るが如き尋常の體格と壽命とをもてる人となりぬ、となり。任他、ヰクトル、ユーゴーが目ざましき誤謬の大原因はルウソーの謬想と同一なり、即ち、個人の主觀的又客觀的自由の太古に存在せりしことを假定したるにあり、然るに、事實に徵して觀れば、太古の世に於ては、思想、同情、行爲の範圍のいと狹きと、おびたゞしき習俗的鐵鎖ありて、社會が一個人の獨立を束縛制限せしとによりて、個人性といふものは、最微弱、最實物的意義に於ての外は、成立ちてあらざりしなり。ユーゴーが「抒情」「叙事」「ドラマ」三進步の論は、ある立脚點より見れば、カーライルの英雄崇拜論にひとしからざるにあらず、而してユーゴーも、カーライルも、原始團躰の純乎た

る客觀的、動物的個人性と後に大に發暢せる主觀的個人主義とを分別する甚深深遠なる差別を發見せざりしが如し。云々。

年首のほぎごと

古人曰はく、文章は經國の大業、不朽の盛事なり。年壽は時有りて盡き、榮樂は其の身に止まる。二者は必至の常期なり、未だ文章の無究に若かずと。まことや、限なき時世に亘りて、日月と共に變らぬものは、文學の神靈なめり。人亡び、國滅ぶとも、人あらん限、此の靈ばかりは失せざるべし。作者は千歳のいにしへに逝りて、そが影だにも追ふ可からずといへども、そが魂をやどしたる詩歌文章は、長永に傳はりて、今もなほ鮮やかなること、嬰兒の嫩かなるが如し。人丸、赤人、貫之、清女、紫女、そが靈は今も存れり、韓、柳、李、杜、そが骨は朽ぬれども、そが魂はいつの日か滅亡せん。年波の寄りに寄るとも、盡させぬものは文學の齢なりけり。これを名づけて靈魂不死といふべくば、古人の氣を享けて其の髓を得たらんは、輪廻の例にやひかれなん。古人必ずしも詩聖ならず、今人必ずしも詞宗ならず、古人が優か今人が劣か、いにしへを文學の兄とせんか、後世を詩文の兄とせんか、優劣長短分ちがたし。無始無終に似たる

文學の、此の究まらぬ壽にとりては、去歳暮れて今年來とも何の關する所かあらん。はぐべき言の葉艸もいひ知らず、延ふ葛のいや遠永きは、文學の行末なりとやうたはまし。

さりながら、それはおしなべていふ文學の上なり。我が明治の文學は、今年二十五年の春を迎へて、ねびまさりたる幸先いとよげなるを、一言祝せずて止まんこと、心無きに似たり。いでや、政海波高うして、沸きかへりたるさま、油の火を得たらんがごとし、澄みたる純文學の美しき水、ことしよりや分かれてまことの清き色を見せん。見よ、多數の新聞紙雜誌を、政事に關したる記事、敍事、論評の文、そが紙面を埋めて、小説戯文のたぐひ漸くに疎ならんとす。是れを祝すべき第一とす。新聞紙をもて最上の文壇となせる間は、眞の文學は生まれざるべしと思へばなり。二つには、政治に關する雜誌と文學に關する雜誌と、漸く全く分離せんとする傾ありて、文學專門の雜誌、遠近に生まれなんとす。こもまた好き搖籃を得たらんにひとし。三つには、地方の人、次第に文學に心を傾け、社を結び、會を設けて、文を作る、往々金玉の響あり。その外、史學界、詩歌界に於ても、機運漸く熟せんとする趣見えたり。見聞の及ぶ所みなめでたし。これ恐らくは、奴婢が身贔負の目に映る和子の生長な

我れはじめて我が論の理に基くこと少くして情に基くこと多きを知る

我れはじめて我が文の拙うして意を達するに足らざるを明識す

らん、幼きころより親しめる贔負眼に、おが佛あがめのみせられて斯くよきことばかり目にとまりて、おしきことの見えぬにやあらん。恐らくはひが目ならん、されど、年のはじめは、めでたづくめを例とすなれば、皆人もろともに、明治文學の幸先を祝せよといふ。（廿五年一月）

烏有先生に謝す

『しがらみ艸紙』に烏有先生といふあり、精嚴なる審美眼を開いて、逍遙子が沒理想の說を讀破し、縱橫辨折して是非を決せり。議論高遠、理到り筆到れり。何者か先生が深邃に服せざらん。逍遙子三讀して自家が非を覺ること一二のみならず、就中、その用語例の浪にして、我れひとり解し、他人をして解せしむる能はざりしことを覺れり。又その論の理に基かずして情に由來する所多般なりしことを覺れり。はた其の論の散漫にして、其の辨の粗碎なりしを覺り、且その議論の兎角に現在の情勢に拘ひて、純理の門に達することあたはざりしを覺れり。そのシエークスピアを評して沒理想なりといふや、シエークスピアの全局を評してしかいひたるにはあらず、シエークスピアを評するに、小理想の解釋の無要なる由を辨じたりしなれど、辭と理と双つながら到らざり

しが故に、先生看て全局の評となせり、而して逍遙子これを否拒すべき詞を知らず、先生の駁論は論理の自然なればなり。夫の記實の重んずべきを論じて、談理の後にすべきをいふや、談理を斥けんとしてえかいひたるにはあらず『早稻田文學』一二册の中に時文の活機勢を看出ださんと望むもの丶、極めて謬妄なるを辨ずると同時に、世の小理想を是れよろこび毫も他を顧みざるものを難せしのみ。逍遙子不敏なりと雖も、輕々しく實と理との優劣を斷定せんや。そが沒理想とは即ち有、大理想の謂にして、そが沒理想を唱ふるは、その大理想を求めかねたる絶體絶命の方便なり、有無の境に迷ひて、有は即ち無、無は即ち有と觀じつ丶、無神主義のユニテリアンと化し去らんとせるなり。所詮、逍遙子が沒理想は方便のみ、目的にあらず。彼れは一切空と觀じたるにもあらず、本來虛無と觀じたるにもあらず。

精覈の論に答ふるに、漠然たる蕪辭を以てすべからず、逍遙子が理想は淺薄浮泛なれども、流石にこ丶に辨じ盡くすべきにあらねば、餘はすべて他日に讓り、姑く筆をさしおき、先生が敎によりて更に談理の尊きを明にし、口を開かざれば我が非を知るに由なきこと、幷びに沈默の頗る非なることを覺りたるを謝す。

我が論の誤解せられしは我が文の拙きに因る

沒理想は一語多義の語なり

沒理想の語義を辨ず

兩義の語を用ふるは、論理の失とする所にして、用語例を明にせずして、浪りに語を造るは、談理の病とする所なり。 我が沒理想の說を唱ふるや、實に此の失と此の病とに中れりき。『しがらみ艸紙』なる烏有先生なかりせば、我れ長く此の弊を覺らざりしならん。 こゝに先生が賜を謝し、あらためて沒理想の辨をつくる。

我が謂ふ沒理想は、沒却理想また不見理想の兩義を含めり。 之れを無理想の義に解しても差支なけれど、我が旨は理想絕無、本來無理想といふとはおのづから別あり。 而して彼の造化に對して用ふると、詩文に對して用ふるとの間に、本意に於て、別を立てたり。 造化に對しては、專ら方便の名目としてこれを用ひ、詩文に對しては目的即ちドラマの本體の一面を代表する名として用ひたり。 其の理を、皮を除き、肉を去りて、最も簡明に辨拆せん。

平生ひそかに思へらく、個々の小理想家、若しくは今人の見て大理想家と倣せる思索家が、斷じて造化の極致なりと定むる所、未だ必ずしも造化の極致にはあらざるべし、個々の庸人が見て造化の心なりと感ずる

我れは未だ立脚地を得ず

所も、またもとより造化の心ならじ。漠々たる大造化は古今の万理想を容れて(沒却して)餘あり、若し理想といふ語をもて今人が思議し得たる極致の名とせば、造化を名づけて沒理想といふも不可なからん。沒理想といふ語は、今人の衆理想を沒却、即ち埋沒して、尚餘地ありといふ義に解せらるべければなり。更に換言すれば、如是理想本來空の意なり。夫れ然り、大思索家の理想すらも、尚且造化を掩ひ盡くすこと能はず、況や庸人の心に思念する所は、悉皆大造化の無底無邊の洋中に沒了して跡無しともいひつべし。然り、造化は(今人の智の及ぶ限にていへば)無邊また無底なり、此の無底無邊のもの、これを名づけて何と呼ばん。大なる心と名づけんか、神在すといふにひとしからん。然れども我れ頑愚未だ神在すと信ずることを得ず。これを名づけて大理想といはんか、我れ不學、未だ其の大理想とは如何なるものなるかを證することを得ず。此に於て右に角あり、左に角あり、假に名づけて沒理想といふ。且これを釋して曰はく、古今の万理想、皆是なり、皆非なり、皆是なりとは、皆此の無限無底的の中に沒すればなり、皆非なりとは、皆此の無限無底的を掩ひ盡くす能はざればなり。如何にせば此の無限無底の絕對に達すべきぞ。曰はく、我を去ッて我を立てん、一理想を棄て沒理想を理想

とし、一理想を固執する欲有限の我を去て、無限の絶對に達せんとする欲無限の我を立てん。其の方便は如何、答ふらく、沒理想。我れ已に沒理想をもて我が理想とす、惟我が理想なり、こゝを以て、無究無限無底無邊の大洋を涉る時の舟筏、即ち方便たるに外ならず。懷疑、我れの如きもの、いかで輕々しく有無を斷せんや。我れは敢て造化を指して絶對の意味にて理想無しとはいはず、また敢て絶對の意味にて無心なりともいはず。たまたま詩文を論せし時造化無心といひしことあれど、そは如是憎愛無しの義にて、人間と同じ心はなかるべしといふ義也。人間以上の心、若しあらば、造化或はこれを領有せん、我れ蒙昧未だ判ずる能はず。

汝、沒理想をもて理想とせば、汝恐らくは、萬理想の敵とならざるを得ざるべし、萬理想皆非なりと信ずるが故に。また萬理想の奴とならざるを得ざるべし、萬理想皆是なりと信ずるが故に。而して若し其の孰れかを擇ばずば、進退究谷し、中有に彷徨して身を終ふるまで前むこと能はざらん。答ふらく、沒理想とは平等理想と云ふに同じ、我は萬理想の中に就いて、其の差別を棄て、平等の理を探らんとするなり。相の差別に泥まざるもの、天上天下、何れの處にか敵を作らん、萬理想の平等なる所

何物なも信じ何物なも信ぜざらんさす

ドラマに對していふ沒理想はドラマの客觀な評したろ語に過ぎず

は、皆我が友なればなり。 理の差別を崇めざるもの、何條萬理の奴となららん、我が主ははじめより平等(即ち唯一)なればなり。 夫れ沒理想をもて理想とすといふは、無主義といふことゝ殊なり、已に主義あれば信あり、信あれば我あり、已に我あり、そが信ずる所、我が往かんとする所なり。前まざらんやは。 我れは「欲無限」と歌ひて「絕對」を尋ね、「沒理想」を理想として「大理想」を求めんとす。 何物の爲に欲無限と歌ふか、我が爲にか、衆我の爲にか、今は說くべき要なければいはず。 これを造化に對して沒理想といふ語を用ふる由緣とす。

詩文に對して沒理想といふ語を用ふるにも、其の義は前に同じ、作家沒却して見えずといふ義なり。 必ずしも作家に理想無しといふ意には非ず。 此段大むねは、造化に對していふ時と異なるとなけれど、聊か差あり。 例へば、シェークスピアを沒理想といふは、勿論無理想の意にはあらねど、さりとて人間以上の理想、若しくは大理想ありとの義にもあらず、多數の批評家が彼れの理想なりとする所のものは、彼れの理想にあらず、彼れが理想は見ること難しの意なり、 されば ドラマを沒理想といふは、ドラマの本體を說きたるにあらで、寧ろ其の客觀を評したる詞とも見るべし。 我れ以爲へらく、ドラマは活きたる差別相と活きた

る平等相とを兼ねたるものなりと。　我が謂ふ活きたる差別相とは、個々の人物、おの〳〵その特質を有し、作家の性情を脱離して云爲するをいふ、活きたる平等相とは、取も直さず、活きたる差別相の裏面をいふものにて、作家の性情を脱離すといふことに外ならず、即ち、沒理想なり、作家の性情を見る能はずの意なり。　人間を支配すべき因縁果報の理法の一貫するを見れども、絶えて作家の小天地を現せずとの意なり。　これを換言すれば、作家能く自己を脱離して個々差別の人物を描けるもの即ちドラマなり、といふ義なり。　自已を脱離す、故に、自已が理想をもて人物が運命を左右すること無し。　此故に、上乘のドラマを名づけて、沒理想といふ、此の活きたる差別相、即、活きたる平等相の中に、衆批評家の理想を沒却するのみならず、作家自身の理想をも沒却すればなり。　尚的切にいへば、此の差別相の裏面なる平等相を名づけて沒理想といふなり。　我れ本誌第一號にて、シエークスピアを評せし時、只單に此の一面を擧げて他の一面に說き及ぼさゞりしは、當時はドラマの全局を評すべき要なかりしが故なり。　シエークスピアを評註するに當たりて、理想的解釋を下すことの、大むね讀者を益せざるのみか、其の人の解釋妄なる時は、シエークスピアの本文をも併せ殘はんを恐るとのみ說き

彼此見解を異にせり

しが故なり。本文もまたドラマの全豹を説き盡くさず、こゝには只没理想の語義を辨ずるに必要なる部分のみをいへり。讀者これを諒せよ。

要するに、造化に對していふ没理想は、方便にして、我が理想のドラマに對していふ時は、目的なり、ドラマの本體の一面をいふなり。以上を没理想辨の畧とす。

歐外漁史が覈精なる駁論に對しては、我が非を覺りたることの由も、我が未だ服し得ざる條々も、我が文の拙きが爲に、漁史をして誤り解せしめしかと思はるゝあたりも、皆次々の號にて答ふべし。こゝには只用語の義を辨ずるのみ。

烏有先生に答ふ（其一）

烏有先生の駁論に答ふるに先だちて、辨ずべきことあり、そは先生と我れと、語の解釋を異にせると、幷びにその本意を異にせること、是れなり。語の解釋を異にすとは、例へば、没理想の解の同じからぬが如きをいふ。本意を異にすとは、先生が談理を重んずる時の本意と、我が『早稻田文學』にて談理を先にせざる時の心と、其の旨のひとしからざるが如きをい

ふなり。沒理想の意義の、先生の解と同じからぬ由は、ほゞ前號の紙上にて辨じつ、いでや、談理といふことに對する、わが本意の在る所を斷らん。按ずるに、先生が談理を重んずべしといふや、毎に絶對の意味にて謂ふか、即ち、古今東西の大なる談理家を、哲學者といふ際をも、そが眼中に置きて謂へるならん、是れ理といふ字を絶對の義に解したるなり。我が後にせんといふ談理は然らず、方今新聞雜誌などに散見する、かたよりたる小議論をば指せるなり。其の根底に、一系の定まれる哲理も無うして、一時の感の浮べるまゝに、或は好惡に驅られて、衆他を排し、或は狹隘の經驗を尺度として、大なる人間を是非するが如き、頑陋偏僻の小理想を謂へるなり。又思ふに、先生が眼中の文壇と、わが懷ふ文壇と、其の名相通じて其の品相同じからざるに似たり。先生の談理を旨とするや、今の文壇を其のうちの俊秀なる人々を標準として觀察するか、我れは然らず、初學後進のなほおさなきを標準として說をたてたり『早稻田文學』の講述を讀まん人々を目的としたり。是もまた先生とわれと解の相異なる一點にやあらん。

わが謂ふ小理想家は、未だ全く河東の地を踏まずして、白頭の豕を異なりとし、未だ全くニウカッスルの坑を見ずして、石炭の多きに誇るが如

き識見の極めて狹きものを謂ふなり。或は筆に儒佛を祖述し、或は口に東西の哲理を談じ、一見博聞なる如くなれども、其の實いまだ一たびもこれかれを斟酌して是非を比べ見たるとも無く、漫に一道の皮相を奉じて、初めより方寸の世界に安んじ、些も我れ以外を見ざるものをいふなり。更に例を擧げていはば、我が師の敎をのみ無雙の靈玉と輕信して、當初より他山の石を求めず、一學派、一流派の偏屈なる小宇宙に彷徨徜徉し、殆どLiterallyに、我れ以外の世界を見ざるものをいふなり。譬へば、熱帶に棲める民の、寒帶溫帶を知らざるが如く、菜食の民の、未だ曾て肉のあまきを知らざるが如し。さもあらばあれ、彼等固より理を會得すべき能力を有てり、能く辨ずる人ありて、懇に溫帶の利益を講じ、若しくは肉食の功德を說かば、彼等或は會得せんか、只彼等をして其の說を聽聞せしむべき機會無からんを如何にせん。彼等は、はじめより寒帶溫帶をもて、魔界地獄なりと斷信して、そが片影をだに窺ひ見るとを屑とせざるなり、又は肉食の主義を邪宗異端と思惟して、そも肉とは何の肉か、如何にして食ふものか、その有樣の大むねをだに知らざれば、そが利害得失の如きは、はじめより聞かんと欲せざるなり。夫れ談理の功德は廣大無邊なるべしといへども、緣無きものは度しがたき習ひな

り、聽く者の心中に、多少迎ふる所なからんには、菩薩が大慈悲の妙音も、牛に對ひての彈琴にひとしかるへし。亞典の民心已に腐りては、デモスゼニースが雄辯も、パトリック、ヘンリーが慷慨の聲に如かず、宗教改革の傾向(テンデンシー)獨逸の國内に漲らざりしならば、ルーテル上人が勇猛の獅子吼も、遂に狂瀾を廻らし得ざりしならん。案ずるに、傾向(テンデンシー)は理に基くといはんよりは、情に由來すといふべく、他力に賴るものといはんよりは、自力に由るものといふべきか、卽ちその人が無意識の中に心の方針を轉じつゝあるをいふか。されば、一旦夕の談理をもて傾向を釀さんこと、いと〳〵かたし。

我が所謂今の文壇の小理想家は、其の見る所の狹隘にして、偏信偏執の甚しきと、頗る前例にいへる所と相似たり。その見る所のいと狹きは、年の尙若うして世故經見に富まざるるが爲にして、その偏信偏執なるは、わが師(書籍の形したる、または人の形したる)が敎へつる所をのみ、天上天下、唯一の眞理なりと輕信し、そを無等々咒と奉じたてゝ、總て他の言ふ所は、佛、菩薩の說法と雖も、これを外道の聲となし、惡魔の姿となし、初めより聞かず、又視ざるが故なり。彼等は猶恍惚たる少公子ロメオのごとし、ロザリン姬の外に、美人あることを信せざるのみか、たとひ人

來たりて有りと教ふとも、そを垣間見んともせざるなり。　さりながら彼等の本心を探るに、強ちに他の美人を見まじ、聞くまじ、と誓へりとしも見えず、否、彼等がロザリンを慕へるは、未だまとの戀にあらず、神聖なる靈火の作用にあらず、むしろ他の衆美人を見ざるが故のみ。　而してその見ざるは、見るべき傳手の無き故なり。　何となれば、彼等が周圍なる幾百の張氏李氏は、いづれも皆ロメオの化生にして、甲のロメオの怪は以爲へらく、小うちぎ被て緋の袴はきたる上臈こそ、是れわが極美のロザリンなれ、天が下にわが佛にまさる美人無しと。　乙のロメオは以爲へらく、金翡翠の寶髻、繍鴛鴦の羅裙、鬢を見ては蟬翼を想ひ、黛を見ては遠山を想ふ、わがこのロザリンにまさる國色無しと。　丙、丁、戊、癸、おのおのそが好める所に僻して、姿態服裝の差別を固執し、審美賞玩の眼は絶えて無く、徒に外形を見て相誹謗し、互ひにわが愛るをのみ、無双の麗質と誇りたゝへ、他のロザリンを貶すると、醜惡なる妖婆を見るが如し。此に於てや、一には此の競爭のあまりに眼くらみ、一には服裝の差別に拘らひて、他を見ること蛇蝎の如く、遂に無心の境に立ちて他の衆美人を見ることを難んず。　滔々たる文海の小理想家、比々として皆是れなり。　是れ些も相見ざるにひとしからずや。　かくてその甚しきは、師父

の說く所をまことゝして、未だ一たびも見ざるうちより、他は悉く蛇蝎と信じて、かりそめにもこれを顧みざるなり、諸學派の末流は概ね是れなり。 夫の極端なる保守主義と、極端なる改進主義とが互ひに枘鑿相容れずして、日に月に遠ざかりゆくを一例とすべし。 それも、一流一派の頭だつ人の上は、よしともせん、その師の說に惑溺して、いよいよ濁流におもむかん人の、身の行末のいと慨(うれた)し。 さてこれらの人は、いづれも、我れ以外の世界を見んとする心無きものと信せざる可からず、我れ以外に關したる理論は、よきもあしきも、絕えて聞くことを好まざるものと信せざる可からず、即ち些も傾向(テンデンシー)無きものともいひつべし。 果たして然りとせば、彼等をして彼等以外の世界に關したる理を聞かしむべき方便は如何。

われは思へらく、先づ傾向を作らざる可からずと。 悉しくいへば、彼等をして先づ遍く彼等以外の世界に目を注がしめて、無意識の間に、美の宇宙に充滿せることを覺(さと)らしめざる可からず。 再び前の比喩を用ひていはんに、天が下の國色を一室に集めて、其の髮の飾をも、服裝をも、ほと〳〵同じさまにもてなさせ、さて幾百人のロメオをして一瞥の下にこを見せしむるに優りたる良策無し。 若し彼等、苟も眞美を知るべき

我れはまづ頑昧の徒をして初發心を起こさしめんと欲す

本能あらば、積年の迷霧此の時に霽れて、爰にはじめてロザリンの外に、天のなせる麗質ジユリエツトあることを悟らんか。假令然か悟ること能はざるも、尠くとも天下に惠心蘭質の乏しからざることを覺るべし。げにやわが佛のみ尊しと思ひこめる心には、田鶴の群にあるわが矮鷄を鶴鳳にもまさると見るらめど、さまでにかたよれるは、如何にともし難し。われぼめの目には、痘痕を笑凹と見るが習ひならば、隣人の味噌をうましと見るも、人情の習ひならん。われは信ずらく、衆美を一堂に集むることは、多少偏信の癖を和げて、尠くとも、美といふもの丶世界に遍きことを覺らしむるに足らんと。是れ豈審美の論説を聞くべき初發心(傾向)を作るにひとしからずや。

更に比喩を離れて明白にいはんに、明治文壇は衆小理想(衆我)の戰場なり、衆小理想の戰は大理想を作るべき楷梯なれば、われ固よりこれを可とす。恐らくは、人間の文明史は、衆我が競爭の記錄たるに過ぎざるべし、われ豈衆我を排せんと企つるものならんや。然かはあれど、小理想と名づくるが中にも差等あり、全く他の理想の本體を見ずして、これを貶斥し、絕えて他の我を顧みずして、ひとりわが我をのみ固執するものあり。彼等は文字の通り(Literally)に他を見ざる者なり。かゝる小理

我れは衆我をして相見ねしめ互ひに相對照するの便を得しめんと欲す

想は理想を闘はするとはせずして、をさ〳〵憎惡を闘はす、即ち、要無きに相衝突し、相踶囓して、他を害ひ、自家を妨げ、前むにもあらず、退くにもあらず、中間にさまよへり。　彼等は文園の雜艸なり、詞林の荊棘なり、猛火を放つてこれを燒かんか、其の理想の美をも、併せて灰燼とするに忍びざるなり。　蓋し厭ふべきは彼れらの偏見と偏執とのみ、その理想とする所のものは皆文學の微分子なり。　これを滅さんと欲するものは狂ならざれば愚なり。　此に於てや、我れは明治の文壇に在りと在る、百般の理想(我)を網羅し來たりて、及ぶべきだけ、其の差別相の目易からぬものを除き、及ぶべきだけ、其の平等の美の在る所を表現し、はた及ぶべきだけ、記者みづからの我を沒して、わが所謂沒理想の見によりて、衆我の實況を記述し、宛然一種の文學的博物場を開設し、幾百の流派をして互ひに端緒を得しめんと欲す。　然り、先づ相見えしめんと願へるのみ、未だ相和せしめんと望むに遑あらず。　若夫衆我をして一和せしめんと望まば、我れに衆我を容れて餘（あまり）ある宇宙大の理想無かるべからず。　我れ豈夢にだにかゝる大任に當ることを得べしと思はんや。　我れは只彼等をして相見えしめんと願へるのみ、眞美の說法を聞かんとする初發心(傾向)を作らんと願へるのみ。　我れ竊に思へらく、公平なる記實

我が談理を後にして記實を先にせし所以

我れ決して談理を棄つべしといはず

は、我が心に愛憎好惡無からんか、これを行ふこと難きにあらず、我れ不敏なりと雖も、此の公平の心無からんや。併しながら、他の談理の甚深、これわがともがらの事にあらずと。わが事實の報道を先にして必ずしも評論を旨とせずといひし所以は即ち是れなり。

然り、我れは記實を先にしたり『早稻田文學』の時文評論欄内に於ては談理を後にすべしと明言したりき。さはれ、いまだ曾て談理を斥くべしといひしことは無し。第三號の時文評論の劈頭に曰はく「博識卓見の學者は世間に其人いと多かり、佛人、獨人の長ずる所は、吾人之れを悉く彼の人々に委ね去りて、みづからは諄々として現實の報道を旨とし、偏にアングロサクソンの着實なる常見を師とすべし」と。是れ豈わが談理を斥けざる明證にあらずや。我れ若し談理を非とせば、何條わが畏敬する同胞に對ひて我が非なりとする務を委ねん。博識卓見といひしは明に推稱の詞なるをや。

これを要するに、談理記實に關して、先生と我れとその見解を異にしたるが如きは、語の解釋の同じからぬと、本意の相異なれるにあらぬか。先生が示敎を俟つ。

其二

烏有先生が記實にあきたらずして談理を重んずる由縁に曰はく

羅馬なる聖彼得寺塔を觀てミケランジエロが作りし雛形の美に驚くは建築を視る眼あるものゝ皆能くするところなるべしこれを美なりさ記さば記實者の役濟むべけれど談理者はそれにて足れりさすべからずかの佛蘭西人それがしが如く高等靜論の算法によりて古人が不用意にして靜性の極處に至れるを看破してこそその美なる所以を知るべきなれ若し美の義を碎いて理に入ることあらずば審美學は起らざるべし逍遙子が記實の文を讀むには大歸納の力を具へざるべからず予が談理の言を聞くには普通の理解力あれば足れりさ

審美的批評家の本分は、まことに先生のいはれたるが如し。わが嘗て『梓神子』といふ戯文の中にて、批評の事をいひたる時、世の搔撫の劇評をそしりて深切ならずと難せしも、全く同じ心なりき。先生の言は科學的にして、わが言は俗の言葉なれど、本意には差なからんか。それはともあれ、我れ未だ嘗て美の義を碎いて理に入る事を非せし覺えはなし。所詮、我が謂ふ沒理想の無理想若しくは無理性の義に同じからぬからは、此の段は解くべき要もなきが如し。さて其の末段なる逍遙子が記實の文を讀むには、大歸納力を具へざる可からずといはれたる、確言なり、若しわが記實の本意が、直接の大感化にあるならば、眞にいはれたる

が如くならん、併しながら、わが第一の目的は、前段にもいへる如く、博く蒐集して文界の實相を記述し、博物場の如き者を呈せんといふにあれば、讀者に片眼だにあらば、そを見るとは容易かるべく、必ずしも大歸納力をば要せざるべし。　案ずるに、先生は、我第三號に云へることを解嘲の辭と思はずして『早稻田文學』の大主旨とやうに解せりとおぼし。　曩にわが第三號に於て、世の大早計なる非難者が、『早稻田文學』の第一二號を觀て、明治文壇の活機いづこにか存したる、次號よりや見れん、といと冷かに嘲りたるに答へて、「活機の在否は我が評論の紙上にあらずして、汝が公平なる眼中にあるべし。　時文評論の第四篇に明治文學大歸一大調和の策あるかと問ふと勿れ、その大歸一の無上の良策は、我が文章の上にはあらずして、汝が沒理想の心中にこそあるべけれ」といひしは、無上無等の良策は、虛心平氣、活眼を開いて此の大宇宙を觀るにしくは無しとの義にて、「汝一讀の下に大歸納せよや」と命じたるにはあらず。　あくまでも「時文評論」は、無意識の間に多少の感化を施して、徐々「傾向」を誘致せんとする一種の持藥たるに過ぎざるものなり。　難ずるもの丶曰はく、何爲ぞ劇藥を投せざると。　嗚呼、彼等は、劇藥のいと〳〵用ひ易くして、人間を益しがたき理を知らず、何ぞ共に醫道を語るに足らん。　所

詮、時文評論は楷梯なり、材料なり、未だ他の世界を窺はざるもの丶爲には、遊意を誘致すべき名所圖繪たり、已にこ丶かしこに歴遊して、畧(ほゞ)山川の地理に通じたるもの丶爲には、曾遊の名所を想起すべき一種の簡明なる地誌なり、地圖なり。 後者、これに臨みては、此れと、彼れと、今と往と、比較對照の便宜を得て、或時はロックカトリンの水明と山媚とを憶ひ、或時は田子の浦ゆうちいでゝ見る眞白なる、富士の高根の風致をしのび、美の無量なるを意識せんか。 わが謂ふ大歸納の素材とは、必ずしも直接の意味にはあらず。

烏有先生はまた逍遙子が常識を尊むを聞きて、これを難じて曰はく

シャフツベリイが内官論はふりたりリイドが常識も今の哲學の程度より見るときはおそらくは取るに足らざるべし常識は基督を生ぜず常見は釋迦を成さず「コンモンセンス」の間には一個の大詩人を着くべきところだにあらざるべしと

われ未だ曾て常識、常見を以て基督を生み、釋迦を成すべき料に供すべしといひしこと無し。 第三號にて「偏にアングロ、サクソンの着實なる常見を師となすべし」といひ「むしろ常識の報道者をもて自ら任せんとすべし」といひしは、其の務とする所の重に記實にあればなり『早稻田文

學』の記事をば公平なる着眼によりて記述すべしといひたるに外ならず、造化人間の事をすべて此の物によりて料理すべしといへるにあらず。　且や、常見、常識の義も、リイド、ハミルトン等がいへるやうなる、之れゝかなる意味にはあらで、其の文字のまゝに、普通の意味にて、愛憎好意を離れたる常人の判斷力といふ程の意味なりき。　按ふに、此段の先生の議論は、わが記實主義をもて、談理排斥の主義と信ぜられたるより、生じたる枝葉の論ならん、先生に取りては、論理的自然の非難にはあれど、記實の本意を斷りたる上は、此の事もはや解きわくべき必要なし。

先生またわが沒理想の論を駁して曰はく

世界はひとり實なるのみならずまた想のみち〳〵たるあり逍遙子は沒理性界(意志界)を見て理性界を見ず意識界を見て無意識界を見ず意識生じて主觀と客觀と纔に分かるゝ所以をおもはず老、莊、楊、墨、孔丘、釋迦、其他古今の哲學者が觀得たる世界を小なりとして自ら片輪なる世界を造らむは果敢なきすさみならまし後天にのみ注げる眼はダルヰンが論を守りても事足るべけれどそれにて造化は盡されず孔雀の羽のいろ〳〵はその翰より受くる養おなじきに、色彩の變化は一本ごとに殊なりその相殊なる色彩の合して渾身の紋理をなすは先天の理想にはあらざるかと

此の段答ふべき必要あるを見ず。　われ未だ曾て世界はひとり實なる

先生は一系の哲理を奉ぜる人即ち積極なり

のみ、といひし事無し、沒理想の義は無理想の義にあらざればなり。只先生の說によりて、世界には想のまた充々たることを聞き知りぬ、沒理想を說くわれは、未だ曾て此の世界に想絕無なりと說かぬものから、想みちたりとも斷言せず、先生は然らず、想の充滿したるを確信せり。先生は

已に理性界を觀、無意識界を觀て、美の理想(Idee)ありといひ又これに適へる極致(Ideal)ありといへり

されば、先生は論じて曰はく

破(われ)がれならぬ祇園精舍の鐘を聞くものは待人戀ひしともおもひ寂滅爲樂とも感ずべけれど其聲の美に感ずるは一なり沙羅雙樹の花の色を見るものは諸行無常とも觀じまた只管にめでたしとも眺むめれど其色の美なりとは耳ありて能く聞くために感ずるにあらず目ありて能く視るために感ずるにあらず先天の理想はこの時暗中より躍りいでて此聲美なりこの色美なりと叫ぶなりこれ感納性(ノチエアブチヰテエト)の上の理想にあらずや

と。よりて知る、先生は、明に一系の哲理(フイロソフイ)を確信せる人なるを。われは然らず、想を無しと斷言せざると同時に、想を有りと斷言して、その想を指すことも能はざるなり。我れは消極にして、先生は積極なり、我れは成心無からんことを勉め、先生は大なる理想を發揮せんことを力む。

我れは未だ確たる哲學的定見なし即ち消極なり

われは未だ大理想を得ざるが故に、徐に記實の事に從ふ、思ふに、是れ我が現境の自然ならん。　先生は已に大理想を得たり、かるが故に、進んで談理の筆を揮ふ、理の當に然るべきものあるなり。　或はわれもまた、更に深く先生が哲學を聽きて、想のみち〳〵たる所以を覺悟せば、之れを信ずるを得るに至らば、此の禿たる記實の筆を擲ち、先生が驥尾に附して、破邪顯正の文を艸せんか、われ不肖いまだ其の境に到らざるを如何にせん。

烏有先生に答ふ（其三）

烏有先生、已に一大系の哲理を信じて、世界は實なるのみにあらで、想も亦みち〳〵たり、となし、孔雀の羽に紋理あるは、先天の理想の然らしむるなり、となし、美の理想あり、といひ、又これに適へる極致あり、といひ、目の色を觀て感じ、耳の聲を聞きて感ずるは、先天の理想の、暗中より躍り出で丶、此の聲美なり、この色美なり、と叫ぶ故なり、となし、感納性の上にも理想あれば、製作性の上にも理想あり、となし、更に進みて論じて曰はく

若し沒理想を說く人のいへるが如く言葉のうちにおのが理想のあらは

れざる戲曲に長ずるためにシエークスピヤ大なりおのが理想のあらはるゝ叙情詩若くは小說に長ずるためにバイロン、スヰフト小なりといはばこれシエークスピヤとバイロンとスヰフトとたま〳〵其詩體を殊にせしために大小の別生じたるのみにてその本來の才分境地には大小なかるべし

と。

さてまた末段に至りて、再び此の論を繼ぎて曰はく

英吉利古今の文士の戲曲を作りしもの幾百千家ぞ、その作りし戲曲幾千萬篇ぞこの幾千萬篇か知れぬ戲曲は戲曲の體裁として作者自らが評論の詞をば挿まざりしならん皆所謂沒理想なりしならんさるに彼數百千家はその名骨と與に朽ちぬひとりシエークスピヤが威靈今にいたるまでもいやちこなるは何故ぞ彼數百千家は小家數にしてひとりシエークスピヤの大詩人たるは何故ぞ又叙情詩と小說とには作者の理想あらはるといひ沒理想に至ることと能はずといはゞ叙情詩に長ずる大詩人小說に長ずる大詩人は果して生ずべからざるか又叙事詩の旨は純粹なる客觀相にあればその沒理想に至り易きことと適に戲曲の上にあらむ又沒理想を說く人の戲曲を取りて叙事詩を取らざるは何故ぞおほよそ是等の問に答ふる人なき間はシエークスピヤに理想なしともいはせず理想なきを大詩人の本相なりともいはせじ

と。

此の段の議論、全く沒理想の字義に就きて、先生と我と解を異にし

たるより生じたり。先生の議論は論理の必然なるべし。若し沒理想といふ詞が、無理想といふに同じくして、我が嘗て物したる緒言の中に、シエークスピアの大詩人たる由緣は、偏に理想なき所にあり、とやうに、明言斷定せしことあらんか、我れ實に答ふべき詞を知らざらんが、われいまだ嘗て無理想といふ意味の沒理想を、シエークスピアの本躰なりともいはねば、不見理想といふ意味の沒理想をも、大詩人の本領なり、といひしことなし。所詮、わが「マクベス評註」の緒言に於て、わきまへたることは、沒理想（不見理想）の詩（ドラマ）を評するに當りて、區々たる「インタルプリテーション」の、益尠うして害多かるべきを陳べたるに止まれり。その言に曰はく

第二義の評釋即ち「インタルプリテーション」は若し見識高き人の手に成れる時は讀みて頗る感深く益もあるべけれど識卑き人の手に成れる時は徒に猫を解釋して虎の如くに言做し迂濶なる讀者をしてあらぬ誤解に陷らしむる恐ありさるはシエークスピアの作の甚だ自然に似たるより生ずることさなり

と。わが緒言の本意まことにこゝに在り。詩を論ぜんとてものしたるにもあらねば、シエークスピアを論ぜんとてものしたるにもあらず。

一意シエークスピアの作が自然に似たる由を斷らんとてなり。別に題を設けて、シエークスピア總論の一班とだに名づけざるを見ても、わが本意は知らるべし、 されば こそ「げにやシエークスピアは空前絶後の大詩人ならん、其の造化に似て際涯無く、其の大洋に似て廣く深く、其の底知らぬ湖の如く、普く衆理想を容るゝ所は、恐らくは空前絶後なるべし、併しながら、斯くの如きは、其の作に理想の見えざるが故にあらぬか、これのみの理由によりて理想高大なりといふは信けがたし」といひ「若しシエークスピアを稱美せんとならば、其の美術家たる技倆を賞するは固より可かるべく、其の比喩の妙、其の想像の妙、其の着想の妙、これらをほめて空前といふも可く、絶後といふも可かるべし、只其の理想をほめて、強ひて高しといふは信け難し、むしろ其の沒理想なるをたゝふべし」といひ、又多少の例を擧げて、沒理想(不見理想)の文章には、さま〴〵の解の下し得べきことをいひたる末に「此の證例甚だ不足なれども、沒理想の必ずしも大理想にあらざることゝ、小理想の時としては沒理想と見ゆる例とはなるべし、兎に角に、予は沒理想(不見理想)の作を、理想(わが理想)をもて評釋することの、いと〳〵要なかるべきを信ずるが故に、此のたびの評註にては、主として打見たる儘の趣を描寫することを力

め、我が一丁見の解釋をば加へざるべし」とはいひたるなれ。わが沒理想論の詩論に關繫する所は、間接にして、評註の方法に關繫する所は直接なること、辨せずとも明かなるべし。またシエークスピアが本領の美は、偏に沒理想(其の理想の見えざる所)にありとしもいはざること、明かなるべし。

先生はわれを難じて、理想のあらはれざる戲曲に長ずるために、シエークスピアを大といひ、理想のあらはるゝ叙情詩、若しくは小說に長ずるために、バイロン、スキフトを小なりといへり、といはれたれど、これはたこなた此方の覺悟せぬ所なり。わが例の緖言の中に、下の如き一節あり、曰はく「シエークスピアの傑作は、頗る造化に似たり、上は審美の見識に富みたる學者より、下は一知半解の者までも、彼の作をもてはやすは、一つは故人が激賞したるを傳へきゝて、雷同附加するにも因ることとならめど、一つはかれ彼の作、度量甚だ廣くして、能く衆嗜好を容るゝこと、猶は自然の風光の、萬人を娯しましむるがごときに原くならん、バイロン、スキフトなどの作の、或人に喜ばれて、他の人に嫌はるゝとは、大なる相違なり」と。こはバイロン、等が作の、その度量に於て、シエークスピアの作に劣れるをいへるのみ、詩人としての優劣此の點にありといふ意味のことは未

だ曾ていひしことなし　必竟は、此の度量の論も、解釋（インテルプリテーション）の難易を思へるより生じたり。　そを詳にいふ時は、ミルトン、バイロン、シエリー等の如くに、おのが抱懐せる一理想を、さながらに打いだして見せたらんは、そをひとつ〳〵分析して、これは云々、それは箇様々々と、解釋批評せんも難きことにあらねど、ひとりシエークスピアが傑作に至りては、上は審美の見識に富める學者より、下は一知半解の輩（ともがら）まで、おのがじゝとりどりに思ひ惑ふことあり、そは作者の理想が、幾重（いくへ）にも見えて、其の本意の所在、ドラマの全局面には顯著ならず、殆ど見えず、との義なり、詩の大小をいへるにはあらず。　若しまた然らずして、かの沒理想といへることが、ドラマの全局を掩ふべき、唯一絶對の妙相なりせば、何（なん）でふその他をいふ必要あらんや。「シエークスピアを稱美せんとならば、其の美術家たる技倆を賞するは固より可かるべく、其の比喩の妙（云々）これらをはめて空前といふも可かるべく、只其の理想をはめて高しといふは信（う）けがたし」と、とりわきていふ必要あらんや。　詩人とは即ち美術家の謂にして、美術家の技倆とは、取りも直さず詩人の本領といふことなるをや。

されぱこそ、第一號の再版（十一月九日版）には此處（こゝ）の文章に訂正を加へて、「美術家たる技倆」といふ文辭に易ふるに、「その人間の性情を活動せ

しむる技倆」といふ稍有形なる詞をもてして、讀者が便宜をば計りたれ。

そはともかくもあれ、わがシェークスピアを沒理想と説きたりし所以の、詩人としてのシェークスピアを月旦せんためにあらざりしことは、これを見ても明かに知らるべし。絶對の意味にては、われはむしろシェークスピアを一個の理想家として評しつ、理想を見さゞる理想家として品しつ。(彼れも一個の人たるのみ、本來理想無かりきといはんや。)さて、その點よりいふ時は、近松とシェークスピアと、いとよく似通へりといひつ。去かしながら、近松とシェークスピアとが、詩人として同じとも、その技倆相ひとしとも、近松の葉の末に置く、露ばかりだにいはざりき。

烏有先生は我れを難じて「近松は戲曲を作りけれども、その客觀相をあらはしたる中に、類想に近きところあれば、到底シェークスピアには及ばざるべし」といはれしが、われも現に、緖言の中にて、近松の沒理想をことわりたる後、更に言葉を添へていへらく「勿論さるは理想のみの解なり、美術家としての技倆の上には、其のころの予と雖も、二者を同じさまには見ざりしなり」と。

このそのころ」といふ詞を味はれなば、我が本意の在る所は知らるべし、即ち、近松に目のくらまんとせし折にすら、美術家(詩人)といふ資格にては、二者を同じさまに見ざりきとい

ふ心なり。究竟、わが近松をシェークスピアに似たりといふは、その沒理想なる一點のみ、理想のおぼろげなるが似たりといふのみ。指頭大の明玉に近松が作を喩へ、拳大の明玉にシェークスピアが作を譬へたるも、その相の相似たるをいへるにて、其の質必等といへるには非ず。緒言にいふ所は徹頭徹尾ドラマを解釋せざる由縁を反覆叮寧したるに過ぎざるを思ひたまへ。然らば何故に「近松をして英國の文壇に生まれしめば、我が國の淨瑠璃作者にて終はらんよりは、負にまさりたる位置に上りしならん」とはいひしぞ、と問ふ人あらんか、その解いと易し。われは、英國の小批評家が、或は宗教上の小理想をもて、或は沒美學的俗見をもて、只管シェークスピアの皮相に拘泥し、或は其の耳を撫でゝ全體を品し、或は其の足を擦りて全軀を評し、或は尻尾を、或は鼻を、おのが短かき身の丈に應じて、手當り任せなる揣摩をほしいまゝにし、恰も全象を知り貌に、理窟評下したるが可笑しさに、わが近松の如き作者も、全く審美的眼光無くして、只管理窟にのみ拘々たる、英國の如き文壇に生まれて、有名なる諸大家に稱せられなば、忽ち大出世するならん、と想像のまゝをものせしなり。今一たび讀かへして、味はれなば、わが意、蓋し明瞭なるべし。

われ、已に沒理想をもて、ドラマの本躰を評し盡くしたる詞とせずして、むしろシエークスピアの作の一面相（ワン、アスペクト）の特質としたり、悉しくいへば、シエークスピアの傑作には、每に此の特殊なる一面相を具へたり、といへり。　夫れ惟シエークスピアが作の一面相をいへるのみ、こゝを以て、沒理想と大戲曲と、同じ意味なりといひしとも無ければ、沒理想の作者は、即ち大詩人なり、ともいはざりき。　さればまた、われは沒理想といふことが、大詩人の本領なる由を發明したり、ともいはざれば、シエークスピアが沒理想にして自然に似たるは、不思議なり、ともいはざりき。　われは只シエークスピアの『マクベス』を評註するに當たりて、わがおさなき小理想によりて、作者を推度するは益なければ、評註は總て修辭學上の評註にとゞめ置くべし、といひしのみ。　辨じてこゝに至らば、わが本意の、戲曲若しくはおしなべての詩の論にもあらざりしこと、瞭然たるべし。

夫れ沒理想といふ造語は、頗る不穩なる造語にはあれども、わが當初の意見によれば、「衆理想を容るゝに足る」の謂にして、必竟は不見理想即ち理想のおぼろげなるを評したる詞なりき。　シエークスピアが傑作の一面相（ワン、アスペクト）を指せる詞にして、近松が傑作の一面相を指せる詞なりき。　さ

ドラマは必ずしも没理想ならず

るからに、シェークスピア、近松が、悉皆の作の一面相にもあらねば、勿論悉皆の戯曲の一面相にもあらず。われ未だ嘗て、總てのドラマは没理想なり、とはいはざりしなり。花形の寳鏡の磨ける一面は、森羅万象を映すと同時に、無形なる妖怪の相をも映せり。これはこれ寳鏡の威德なり、われ豈このいやちこなる大威德を、他の玻璃製の小鏡に望まんや。シェークスピアは、譬へば花形の寳鏡なり、かゝるが故に、其の一面に能く万理想の影を映す、他の千万の戯曲家、豈悉く花形の寳鏡ならんや。恐らくは、殘れる戯曲家の多數は、玻璃鏡に喩ふべく、曇りたる破鏡に喩ふべし。彼等いかでかは万理想を映さん。

われ前號に没理想の語義を辨じて、其の序に、没理想とは、活きたる差別相の表面にして、活きたる差別相は、活きたる没理想の裏面なる由をいひき。この辨甚だ漠然たれども、わが所謂没理想の、大ドラマに伴ふべくして、小ドラマに伴はざることをいひたるものなり。（此の理は他日別に辨明すべし）。詞を換へていへば、大なるドラマ（活きたる差別相の具れるもの）は、没理想なれども、悉皆のドラマは没理想にあらず、即ち没挿評の詩（ドラマ）は必ずしも没理想の作にあらず、との義なり。案ずるに、先生はわが没理想の例證として、鬼貫の俳句と宗吾が畧傳とを引き

沒挿評は必ずしも沒理想にあらず

たるを見て、沒挿評、即、沒理想の意と解せられたるならんが、わが本意は然らず。鬼貫の句と宗吾の傳とは、詩論の例證として引きたるにはあらずして、解の自在なるべき例に引けり。われは俳句の尋常の敍情詩たることを思はざるにあらず、はたまた實傳の曲ぐべからざる由を知らざるにもあらず、左かるに尙これらを引きたるは、敍情詩、實傳の曲ぐ可からざるものすら、時に解釋の自在なるは、本人の評釋なきが爲なり、まして大戲曲の精妙なるに至りては、理想かくれて見ること難きが故に、種々の解釋をも生ずべし、との意なり。こは常識の談にして秋毫の不思議も無きことなり。われ生平此の理を、鬼貫の句に於てよりも、芭蕉の句に於て認め、芭蕉の句に於てよりも、東西の俚諺に於て認めたりき。されども、われ未だ夢にだに、芭蕉を大なる戲曲家ともせざれば、俚諺を戲曲なりと信じたることもなし、わが本意は、沒挿評、即、大戲曲にあらねばなり。沒挿評、即、沒理想ならぬ由も、上文の中に明かならん。われ已に沒挿評、即、沒理想といはざれば、敍情詩と小說とは、沒理想に至ると能はず、といひしとも無し。挿評の理想を見えしむる證據に、曲亭が作を引用したるとは、小說が沒理想たる能はずといふ論の證とはあらず。曲亭は小說家の隨一人なれども、小說家の全躰にあらざればな

り。われ嘗て『梅花詩集』を評せし時、いさゝか此の點に觸れていひけらく、『詩人の筆に上る世界二ツあり、心の世界と物の世界となり、甲は虛の世界にして理想なり、乙は實の世界にして自然なり。理想を宗とする者は、我を尺度として世間を度り、自然を宗とする者は、我を解脫して世間相を寫す。前者は總稱して叙情詩人といふべく、後者を總稱して世相詩人といふべし。前者能く大なることを得ば、或は天命を釋し得て、一世の豫言たらん、後者能く大ならば、或は造化を壺中に縮めて、長永に不言の救世主たらん。理想家の作の大なるには、作者著大にして乾坤を吞み、造化派の作の大なるには、造化活動して作者其の間に消滅す。されば、叙情詩人には、理想の高大圓滿ならんことを望むべく、世相詩人には、理想の全く影を藏して、單に世態の著からんことを望むべし。又太だ小ならば、二者共に現在を離れ得ずして、叙情家は一身の哀觀を歌ひ、世相派は管見の小世態を描かん。（中略）。要するに、理想派の諸作には、作者の極致とする所躍然として每に飛動し、造化派の傑作には、作者の影全く空し。叙情詩人の大なるは、猶雲に冲る高嶽の如く、彌〻高うして彌〻著く、世相詩人の大なるは、猶邊無き蒼海のごとく、彌〻大にして彌〻茫々たり。前者は猶万里の長堤のごとく、遠うして更に遠しといへども、

詮ずるに、蹈破しがたきにあらず、後者は猶底知らぬ湖のごとし、深くして更に深く、終に其の底を究む可からず。是れを二者相異の要點とす」と。これ實に逍遙が理想中にある、叙情詩人とドラマチストとをわきまへたるものなり。此の文を味はん人は、わが叙情詩家を貶せざることを察するに餘あらん。先生が現身鷗外漁史、嘗て此の論の是非を辨析せしことあり、われ、よりて覺る所ありき。「世相詩」といふ杜撰の造語の、甚だ不穩なるを覺ると同時に、わが解の不足にして誤解せらるべきを感じ、且叙情を虛とし、世相を實とし、二者を截然と虛實の左右に分離せしことの非なるをも覺りき。然り、わが當初の理想は、幾分か漁史が教によりて變移したり。われもはや虛實といふ漠然たる詞をもて二者を分かたず、大にわが見處を改めたり。さもあらばあれ、叙情詩人の極大なるは、我れ今も尙豫言者と信じ、ドラマチストの極大なるをば、はた舊に依りて、不言の救世主と信ぜり。救世主と豫言者と、其の間に差別はあるべきが、大叙情詩家あることを認めたるや、明なり。われいはずや、叙情詩家の大なるは、作者著大にして乾坤を呑む、と、即ち有理想、即、無理想の謂なり。是れ豈大叙情詩家はた沒理想家たることを得と云ふに同じからずや。若し夫れ小說とドラマとの關係、幷に小說が沒理想た

るべきかあらぬかに就ては、われ嘗て說きしこと無ければ、不然といひしことも無し、管々しければこゝにては辨ぜず。　先生が詰問に對しては、前文答へ得て餘あるべし、と思ふ故なり。

先生また敍事詩の旨の純粹なる客觀相たるとをいひて、わが敍事詩的沒理想を取らざる由緣を怪しまれき。　是れもまた先生が、わが好尙する唯一點をば、沒理想なり、と思はれたるより生じたる誤解ならん。　こは辨ずべき必要なし。

われ已に先生が詰問に答へ了りにたり。　いでや、先生が審美論の由來を尋ねん。　先生若干の例證を擧げて、先天の理想の存在を說き、更に詩に說き及びて曰へらく

敍情詩若くは小說に理想あらはると云ふは戲曲にあらはるゝ客觀の相は敍情詩若くは小說に於けるより多く、敍情詩若くは小說にあらはるゝ主觀の感は戲曲に於けるより多きがためにおもはるゝのみにして其實は戲曲にも敍情詩若くは小說にも作者の理想作者の極致はあらはるゝなり唯其理想は抽象によりて生じ模型に從ひてあらはるゝ古理想家の類想に非ずして結象して生じ無意識の邊より躍り出づる個想なり小天地想なり大詩人の神の如く聖人の如く至人の如くおもはるゝは理想なきが爲ならず其理想の個想なるためなり小天地想なるためなり太

虚（アブゾルウテ）の無意識中より意識界に取り繼がれずして生れたる造化と同じ無意識中より作者（シェークスピア）の意識界を經て生れ出でし詩（戲曲）と相似たるに何の不思議かあらむ唯無意識中よりの神來には眞の大詩人ならでは多く逢はず是を以てシェークスピアが戲曲古今に獨歩す

と。

叙情詩若しくは小說に、主觀の感のあらはるゝこと戲曲に於けるよりも多く、戲曲に客觀の相のあらはるゝこと叙情詩若しくは小說に於けるよりも多きことは、われも會て會得したり。又戲曲にも、作者の理想、作者の意見のあらはるゝこと、これもまた然りと思へり。必竟、わがシェークスピアの傑作を評して沒理想といへるは、その作の全局が酷だ造化の無底無邊なるに似たりといふ意（ところ）なり。われいまだ造化の本來面目を絕對的の意味にて、見る可からずといはず、ましてや、シェークスピアの本來面目を、絕對的の意味にて、見る可からずと斷言せんや。あらず、われは只古人が經見の結果をいひしのみ。そはともかくもあれ、わが謂ふ沒理想の戲曲とは、シェークスピアの作中にても、最も傑出せるものゝみをいへり、悉皆を指せるにあらず。シェークスピアの作といへども、就中、壯年の作には、作者の影ほの見えたり、中年、晩年の作、はた烱眼をもて見ば、或は作家の影を捉らへ得べきが、只そのかりそめにも異說を容れ、反對の解釋を容れ得る間は、假にシェークスピアの傑

作を名づけて、沒理想と云ふも不可なからん。　例へば『オセロー』なるイアゴーと『キング、リアー』なるエドモンドと、『リチャード三世』なるリチャード三世とを比べ見んに、其の獰惡性の根底に於て、多少の差別ありといへども、その大體の想に於ては、殆ど同類に屬するものあり。　假にエドモンドを除きていへば、リチャードとイアゴーとの間には、差別を立つること頗る難し。　其の故如何といふに、二者の著明なる差別は、むしろ其の境遇と官能的性質とに多うして、その極惡極奸の性情に於ては、殆ど互ひに相通ずる所多く、二者共に實の象にあらずして、想の影なることいちじるし、即ち、作者が理想的極惡人物の結象して現はれたるものなり。　若しかくの如き人物を取りいでゝ、作者の理想見えたりといはば、げに沒理想の說はわろかるべきが、こは全局の評にあらで、作者が理想の一斑を認めたる評といはんのみ。　作者が全局の一面を評して沒理想なりと名づけたる說は、これが爲に毫も增減せらるゝこと無し。テーン嘗てシエークスピアを評して、彼れは人間の根底性を狂と默識せるものゝ如し、人生の全局を夢局と悟りたるものゝごとし、と做し、ハムレット、マクベス、リアー、ヲセロー等幾多の人物を辨析して、その根底の性に於て相類する所あるを證じき。　去かすがに名家の見處とて、他

の曲學が、杓子定規の理窟評にまさること万々なり、さはれ、これを破せよといはば、破すると難からざらん。　そは吾人の力、よくかの批評家を凌駕するが故にはあらず、シエークスピアの作が沒理想なるが故なり。先生が戯曲を評して、理想見えたり、と云ふは、人物の上に理想あらはるゝといふ義なるか、はたおしなべての戯曲の上をいふか、そも／＼またシエークスピアが傑作の全局に、彼れが理想あらはれたり、といふか。他の異說を容れざること、ミルトン、バイロン等が叙情詩の、他の異說を容れざるが如くに、若しくは尋常多數の戯曲家が、理想を著く其の作の全局に現じたるが如くに、理想を現じたり、といふ義なるか。　若し第一の問の如しとあらば、われ先生の說に服す、若しくは第二の問の如しとあらば、われまた先生の說に服す、第三、第四の如しとあらば、われ未だ服する能はず。　敢て先生が示教を乞ふ。

本文の因にいふ、「女學雜誌」の投書家某、暗にわが沒理想論を難じて、シエークスピアを論じ、シエークスピアは、正しく有想理にして大理想家なり、彼れは、例へば、フオルスタッフにはあらずしてヘンリー五世なり、といへり。ヘンリー五世がシエークスピアとは、古人もしば／＼いひしことなり、故いかにといふに、ヘンリー五世の史劇には、幾たびも序曲といふものを用ひて、コーラスに物語をせさせたり、即ち、英王が智勇をたゝへて、當時のシ

エークスピアかと思はるゝ節も、仄かに見えたり、是れ幾多の批評家が、ヘンリー五世をもて、シエークスピアが理想の人物(Hero)なるべしと推度せし所以なり。併しながら、かゝらんは、詩に縁りて詩を判ずるといはんよりは、說を聞きて說を立つるものといはん。彼等に有揷評の拙き勸懲小說と、沒揷評の好き戲曲とを見せば、いづれを取るやらん、兎に角に、三十五六歲の時の作をもて、五十二まで生きたりしシエークスピアを評せんは、早合點なるべし。

わが沒理想の本意は、上來反復して說きつれば、今はもはや餘蘊なかるべきか。且また類想と個想との差別の如きも、嘗て「山房の論文」を讀みて、ほゞその要旨を領會しつ。わが戲曲の說と大に牴觸する所ありとしも思はず。さすれば、沒理想の解釋を除き去らば、先生とわれとの間に、解を異にする論點といふは、殆ど左の二點のみとならん。

(第一)先生は、先天の想といふもの、宇宙にみち〳〵たり、と信じ、われはこれを斷ずること能はず。

(第二)先生は、戲曲家の理想は、結象して無意識の邊より躍りいづる個想なり、と信じ、われはこれを解する能はず。

案ずるに、先生が戲曲の說は、明にハルトマンが無意識の哲學に胚胎せる、必然的系論ならん。げにや、太虛の無意識中より、意識界に取り繼が

先生が哲學の根底を詳示せよ然らざれば我れ會得する能はず

れずして生まれたるものを造化とせば、先生の如くに戯曲を解すること、或は論理の自然ならん。　われは先生が審美論の由來の、深邃にして且幽玄なることを信ぜざるにあらず、只奈何にせん、われいまだハルトマンに通せざるが故に、所謂想と實との關係を審にせず、否、無意識に於ける智と意とが、如何にして全世界(ユニヴルス)を生みけるかは、われほのかに知り得たれど、そが究竟の目的に於ける哲理は、われいまだ解すること能はず、ましてや、先生が意識を經て生まれいでぬる無意識の哲學は、そもまた如何なる形をもてるか、我れいまだ知ることを得ず。　先生が謂ふ無意識の精靈は、客觀の實躰か、そが全世界(ユニヴルス)を造りし究竟の目的は何ぞ。彼れは何が爲にとて意識を造りしぞ。先生乞ふ、これを敎へよ。　われは無意識の實在を證せよ、とは乞はず、又如何にして意識を造りしかを證せよ、とも乞はず、又如何にして一元の無意識が、化して万象となりしかを證せよ、とも乞はず、只その究竟目的の在る所を問ふのみ。　人或はいはん、かゝる質問は、審美學の本領を外れたりと、さかれども、われは此の問に答を得ざれば、假令(たとひ)暗中より躍りいづる、先天の理想が聲音(こわね)は聞くとも、その聲の實在を認むることを得ず、又如何にして戯曲家の個想が、無意識の邊より躍りいでゝ、大なる戯曲となるべきかを悟らず、將た如

君は明く我は暗し君は濟度すべきなり我れは修行すべきなり

何にしてシェークスピアが、ひとり眞成の大詩人と崇められて、古今に獨歩するかを會する能はず。此に於てや、われ大に惑へり。夫れハルトマンは最近哲學の大祖師なり、そが形而上學を『柵艸紙』の限ある紙上に述べよ、と乞はんは、恐らくは無理ならん、しかれども、われは全豹を示せよ、と乞ふにあらず、且われ不學なりといへども、多少有緣境にあり、たとひ直竪一指頭の敎によりて、先生が本領に融會する能はざらんとも、豈一を聽いて其の二を推度するの智無からんや。いかで敎へ給へ。

筆を擱かんとして、熟々思ふに、先生は積極にして、われは消極なり、先生は有也、われは無也。先生は明く、われは暗し。火に比せば、先生は噴火なり、山嶽これが爲に震ひ、河海これが爲に津浪す。われは不住の夕立雲、未だ稻妻のけはひもなし。水に喩へんか、先生は懸空の瀑布泉ならん、直下すること幾千仭、飛鳥おのゝいて墜ち、山鬼驚きて泣く、われは峽間なる湖の、まだ流れゆかん行衞を知らず。先生は猶大明のごとし、紅輪わづかに海角を離れて、群陰皆影を伏す、況んや赫々として雲漢の表に騰る時をや、金をも流すべく、石をも爍すべし。われは、然らず、彌生の空のおぼろ月の、今尚なか空にたゞよへりとも見るべきか。嗚呼、先生は已に立てり、好し、建立門を開いて、大に文を論じ、文界の衆生を濟度せ

よ。われは、やう〳〵學に志せり、今より修行門に入りて、明治文學の爲に素材を蒐めん。

其の意は違へり

鷗外漁史の曰はく「主觀の情を卑みて客觀の相を尊む、これを早稻田文學が沒理想を說きて戲曲を嗜む所以とす、われは其意を取りて其言を取らず、沒理想は沒理想にあらずして沒主觀なればなり」と。答へて曰はくあらず、漁史の言は戲曲論としては是ならんが、その沒理想を解釋する意はたがへり。わが謂ふ沒理想は戲曲を嗜む所以の全理由にあらずして、纔にその一理由たるに過ぎざればなり。かるが故に、われは漁史の言に服するも、其の意は違へりといふ。

鷗外漁史の曰はく「馬琴が筆力能く墓六を寫せるに猶評を叙事の間に插むことを免れざりしは、婦幼のために書を著すといふ志の卑しきが爲なり、早稻田文學が八犬傳にあきたらざる所ありとするは、豈馬琴が叙事の間に評を插みしを以てならずや、われは其の意を取りて其の言を取らず、沒理想は沒理想にあらずして沒插評なればなり」と。答へて曰はくあらず、漁史が言は馬琴の評としては是ならんが、その沒理想を

解釋する意はたがへり。　われは未だ沒揷評、即、沒理想ともいはざれば、また自評をだに除き去らば、八犬傳、即、沒理想詩ともいはざればなり。われは漁史がことばに服するも、その沒理想に於ける意は違へりといはん。

鷗外漁史の曰はく「シエークスピアの作の造化に似たるは、曲中の人物、一々無意識界より生れいでゝ、おの〳〵其の個想を具へたればなり、その作の自然に似たるは作者の才、樣に依りて胡盧を畫く、世の類想家に立ち越えたりければなり。　早稻田文學はこれに緣りて、シエークスピアを沒理想なりとす、われは其意を取りて其言を取らず、沒理想は沒理想にあらずして沒類想なればなり」と。　答へて曰はく、あらず、漁史が言はシエークスピアの評としては是ならんが、かの沒理想を解釋する意はたがへり。　わが所謂沒理想は、沒類想にはあらずして、作者の理想(極致とせる意見)の見(あらは)れざるをいへばなり。　漁史シエークスピアを評して沒類想の作家なりといふ、其の言はまことに妙(たへ)なり、審美に甚深の學者ならで、誰れかは是の如き妥當名目を作らん、われ深く其の言の佳なるを悅ぶ、されど、其の沒理想を解釋する意は違へり。

鷗外漁史の曰はく「悟は大道なり、學は迂路なり。　まことや、成心は悟の

道の稻麻竹園にして、學の路の荊棘なれば、誰れかはこれを破り、これを除かむことを欲せざらむ、然りとて、理を談ずるを聞くことをだに能はざる世の昧者に、成心あらせじと願ひて、唯實を記したるのみを見て悟れといはんは、おそらくは難題ならん。　早稻田文學が大道を說くは善し、われ豈其の意を取らざらんや。　されど、其の言は則ちわが取らざる所なり。　故いかにといふに、早稻田文學は讀者の沒理想を命(いのち)にして言を立つれど、所謂沒理想は沒理想にあらずして、沒成心なればなり」と。答へて曰はく、あらず、漁史が沒成心の言論は、いと高しといへども、その沒理想と記實との關係を解釋する意はたがへり。　われいまだ時文評論を讀まん人に向かひて、頓悟(とんご)せよと命じつることも無ければ、直ちに歸納せよといひつることも無く、はた讀者の沒理想を命(いのち)にしつることもなければなり。　かるが故に、われは漁史の言に服して、其の意を違へりといふ。

漁史は方今の文壇に於ける審美學者の泰斗たり、われは漁史の教によりて、益を得つることを已にあまたゝびに及びぬ、われ豈漁史の說に服せずといはんや。　然れども、ひとり沒理想に對する漁史が解は、われいまだ服する能はず、造語の不穩なるに因るとはいへども、所謂沒理想を釋

するに當たりては、漁史の意とわが意と相背けばなり。われ已に烏有先生に答へて、沒理想の方便にして、わが目的にはあらざる由をことわり、ドラマを評判する語としても、そが全相を評したるにはあらで、わづかに一相を指したるなりと辯じき。かるが故に、こゝには唯〻漁史とわれと、其の意の相違へる所以をいふ。

小羊子が白日夢

第一　小羊子の來しかた

智は毘盧の頂上を蹈むといふとも、信若し不及ならんには、諸理を解しても諸實を證せず、行ひは小兒の脚下にうづくまりて、業火長く消えざるべしとかや、この義を俗解せば、智及びて情及ばずとも謂ひつべし、世に佛智見を開きて悟道を得たり、といふものゝ大かたは、いづれか此の境の衆生ならざらん、併しながら、智だにいと〳〵高うして、諸理を解するに至りたらんは、或は一學派の祖師となりて、他の智不及が足らざるを補ひ、間接に人間を敎化すべきが、若し智も情も不及にして、曇れる古鏡におのが歪める影を映し、これを見て人間の眞面目を看得たりと速斷し、白日青天に眼を開きながら瞌睡し、夢中に夢を說くものあらば、誰

れか正面してこれを聽かん、世にかゝる徒のはびこるこそ慨きことの限なれ、と或人のいへりける、其の言葉いまだ耳のはたに殘れるに、あな笑止や、爰に手細工の管目鏡に、果知らぬ蒼空を窺き見て、漫言さへづる嗚呼の白徒あり、本名をば何といふらん、綽名を羊とも、又唐樣に小羊子とも呼ばれけるを、好名得たりとや思ひけん、さながらおのが表德として宣りあるきけるにぞ、人々かたはらいたがりける、さるは彼れが性の、優柔と意地無げにて、何事にまれ、人に逆ふことを厭へるが、柔毛といふ獸に似たればなるべし、さからずば、彼れが支幹の未なるに、としごろ要無き筆いぢりして、紙あまた喰ひ減らしければなるべし、此のしれもの、生れながらの鈍根にして、何一つ得たるところとては無し、固より博く涉獵して多聞を得んと樂ふ心もなければ、沈潜反覆して心通默識の緒を求むる勇氣もなく、習ひ性となりし大不精、精進の勤日々に怠り、學問大便利の代に生れながら、漢土に名たゝる聖賢の書も繙かざれば、汗牛充棟と數多き、泰西古今の哲學の大寶藏の鍵にも手は觸れず、都の塲末にくすぶりかへりて、日々の閑居に爲すこともなく、流石に不善を作らざれど、いまだ片善をも修したる跡なく、碌々たる大俗のたゞずまひ、春の花の錦繡、夕の風に襤褸となりて軟泥に委し、冬の雪の白光淨土、朝の

日影に溶初めて、またゝきの中に消えゆくを、二十年來目の前に、うッかりぼんと見送りて、花は赤い、とみづからは知りたれど、人に向かうて說くこと能はず、雪は冷し白妙の、妙なる理六花と亂れて、そが鼻の先にちらつけど。あゝ冷いと自知するばかり、唖子が黃檗をねぶれる如く、他人にその理を語る口無し、小兒が羊羹の甘きを知りて、羊羹の何たるかをトンと知らぬと同然の、暗黑座敷を這ひまはりて、こゝらに一理屈ありさうおや、と白痴が途惑ひして早附木を探る、途轍方も無き揣摩想像、いつの間にやら羽を生して、富士の人穴に棲むらんやうの、大蝙蝠と化けおほせ、六疊敷の無人の書齋を、縱横無碍に翔まはり、固より皆目見えざれば、思はずも古今の書箱にぶッつかり頓の響に應ずる瘤を、額に撫でゝ、これを頓悟と我れぼめの苦笑ひ、天井に衝當りて翼を折き、鼻先を痛め、平伏りて腰たゝざれば、これが漸々漸機の妙智力、急いては事を仕損ずる、逆境即ち順境なり、窮すれば則ち通ずる道理、泣く〳〵と我れとわが、心あやしき樂天三昧、次第に我れぼめ增長なし、下手が橫好く戲作者々流の成れの果とて、まことや、古人もいひけらし、遣損ッて批評家の仲間入りし、助言一つ二ついひ習ひ、花の赤いをも得說かぬ口で、詩歌小說の褒貶沙汰、智情不及の悲しさは、人の道も斯道も、その根底の玄妙旨

一知半解

智を以て解するを得たれども情を以て感得する能はず

「訣は、色にも越えたり、聲にも越えたる、其の前一句は、聖も不傳の甚深無量、拈華微笑の玄又玄、と晝夜おちず見る夢の、其の夢の間にもかいくれ見ざれば、象の通りし足跡の尺取りて、見事象を知ッたかぶりの、高慢の鼻ひこつかせ、我れもおぼろの小理窟を、明白にいふ口無ければ、雲握むやうな比喩言葉、明治文壇を碁盤と見たてゝ、詩歌小説の魂膽を、機械的遊戯と混視にし、碁將棋うちませたる入法外のさしで口、五ならべの初身者をつかまへても、初めより八段に、桂馬飛させんと肝を煎り、まだ歩もつかぬ盤面に指ざしして、ソレ王手を、と氣をいらち、嗚呼此の堂々たる手の裡に、金は無いか、銀將無きか、と慨がり、今にして斷らずば、末を奈何、と懸念貌仔細らしく、意味取ちがへて濫用する、圍碁詞の粘、塗、抑、約、いと五月蠅し、案ずるに、詩人は生る、と古人もいひし、天禀ならんは敎へずとも、大なる詩人となりぬべし、野に生ふ花卉の麗しさ、青山の自然の風姿、白水のおのづからなる情韻、豈人間の所爲ならん。その底蘊は天禀にあるべき詩歌小説を、杓子定規の理窟詰にて、作りいださんこと覺束無し、理窟でこねては新粉でも、うまい格好は出來ぬ例、所詮は手錬と胸とにあるを、生悟の指南、邪魔になるとも、盡未來、益に立ちさうな筈もなし、それも敵手の質にこそよれ、當りもつけず、鉤も付けぬ、とんだ氣まぐれの

大公望が、道樂一方の釣を見て、さてはわるし、斯うしたもの、と釣竿のしなひ鹽。梅、潮時の講釋に舌を爛し、大公望には五月蠅がられ、自身の隙はつぶし、願の作用太義になッて、やう〳〵腹の北山風、ぞつと身に染みて心づくとは、譬にもいふ、他人の釣に見惚るゝ白徒、馬鹿の骨頂とは是れなめり、と人にもいはれ、我れも氣づき、あゝ誤ッた、わるかりし、とさばかり我れぼめの小羊子も、少しばかり目が醒め、暫らくの間、おのが名にあふ居所の羊のゑほれかへり、いかさまな、自家が鼻の端の蠅から、先づ逐うてかゝらねば、謎もいへた仕義では無かりき、戒行その身に備はらねば、法を説けども人の聽かぬは、無禮な奴と僻めばこそ、とさう思ふが、此方の大なる僻見なり、活きたる模範を見せぬ說法、古來効のあッたことと無し、道德の根源も、美術の本も、皆情なり、先づ其の情を化せざれば、千日讀誦の妙法蓮華も、花さきばかり身は入らず、何の詮なき諺語なり、夫れ理は唯智力に訴ふべし、傍ら情に訴ふべき、活きたる模範の出來ずあらば、道德界は理窟の鬪諍、宗論の修羅となり、詩文世界の名聞餓鬼は、ますますおのれが誠を沒して、徒に彫蟲の奴となりぬべし、例の偏執の頑機、いつの日にか斷滅せん、さてまた天成の詩人に向かひて、生中の小理窟を指南せんは、猿廻與二郎に、聞かぢりの老莊が敎說き聞かせて、一時の

惑ひを醸す譏、また望無き戯作者に、古代作者の手柄話は、おのが先祖の鍬形兜、土用干の日に着かざッて、我が身の光と誇るに似て、誰れかはこれを敎と聽かん、況んや、我れにもおぼろ月の、此の朦朧たる煩惱の曇背負ッた、其の面に映る諸法相、一つたりとも、眞實とせられうや、我が肉は朽つるとも我が魂は死なじと定めて、限無き大欲の海に浮び、けふより無言の修行門に入らん、物言へば脣寒しとや、我れは脣の寒きを厭はず、我が偏執の胴麻聲に、法はけきやうと鳴く鳥の、其妙音を溺らせて、聞きおとさんかの取越苦勞、さて〳〵我れながらいしくも工風しいだしたり、Silence ; Silence ; と又候や持前の増長菩薩、石の地藏のやうになりて、物もいはねば人も訪ねず、見ざる聞かざる誓願の猿智惠、夜は夜もすがら、晝はひねもすに、方寸海をやりかへし、漕廻り、去年の我れを破しては、今年の我れ一段高く、昨日の我れを説消ちては、今日の我れ傲然たり、絕えて他人に語らざれば、わが大謬を覺るべき傳手も無く、夢にだに文とせざれば、語と意との矛盾に氣のつく機無し、されば其のはじめ、混沌として、海とも、山とも、天とも、地とも、何のわいだめなかりける無盡藏の妄想、いつともなくうづきたち、沸かへりて、やう〳〵に一團の、大團子の如き形したる、妄想の塊とはなれりける、此の妄想の塊を、何と名づけて呼

ぶべきか、小羊子の理に昏き、何を見ても、謎のやうなる名をつけて呼ぶ癖あり、ざるは道理に疎きが故に、自身が感じた儘をいふなり、雪を指して白きもの、花をさして赤きもの、それより外の名は知らず、悉皆稚孩の振舞なり、されば件の塊をも、白日の夢ぢやとばかりにて、名もつけねば、割ッても見せず、見せぬ故に、何とやら、ゆかしいやうに思はれ、何がさて、看るは放樂、遊んでこまそ、と物好の編輯係何のたれ、雪の解ゆくきのふ、雪女の正體でも見屆ける心になッて、米屋と漬物屋の外、入る可からず、と書いて貼ッたる片折戸、邪見無法に押しあけて、頼まう、とこそ音信れけれ。

第二　小羊子の愚痴

來て見れば、富士の高峯も高からず、ましてや、裾野の山々を、究知らぬ雲井の遠きに比ぶれば、賤が屋の障子の棧に積る、ちりひぢにも劣るべし、「白日の夢」と名けたる、小羊子が妄想の塊、正體を見れば、六才の頑童がこせへたる、雪の達摩の生がたまりなるよりも小かりき、電氣の發るまで掌摺りて、懇望して、見せて貰うたはこれか、とばかり編輯員笑止がり、尙念のため、手に取りて見んとすれど、かげろふのやうにて手に取られず、兼ねて用意の顯微鏡、風呂敷解いて取りいだし、程をはかりて見んとす

我れは何故に無言なりし彼等は何故に公言せし

れど、固より幻のたぐひなれば、微分子と微分子との間だ、つながりたるやうにてつながりなく、朦々朧々として、縦からも横からも、根から燒點の据處なし、云ばしこそあれ、編輯員もはうと我を折り、精根きらし、これはまた如何したもの、成らば御主人が不可思議の利劍にて、解剖あッて、後學のため、一通り、内面の組織、構造、拜見許容ありたし、斯やう遠見仕ッたるところ、まことに古今稀有の神品、何だか薩張合點まゐらねど、かたじけなさゝうにて、隨喜の落涙禁めがたし、理由を聽けば、といふ本文もござれば、一段の有難さ、經驗のため、是非に御講釋切望の至極、と小羊子が灸處、すッかり見透しのうらをいへば、それと氣取ッてか、氣取らずか、小羊子そろ〳〵と小鼻おごめかし、隱者好みの咳、二つ半ばかりして、お解りあるまじきが當然なり、これは、やつがれが、一時安心の方便のかたまり、人さまに解らう筈もなく、解ッたとて、益にたたう筈もなし、元來やつがれが、口に蓋を仕まッたは、おのが思ふ所を、方便と思へばこそなれ、これが眞理とみづから信ぜば、緘默して居られた義理で無し、古來、何處の國にも、悟道徹底したやうなというて、跡は野となれ、山となれ、といはぬばかりに、山籠りして果てた人も、多いげに傳聞いたしたが、それは自儘の眞中山、峠まで通り越して、人間の義理の柵、大井河ほどに見殘した、

薄情の骨頂であるまいか、聞きかぢりの名をならべるも耻かしくござるが、釋伽、耶蘇、孔子、マホメット、その他、ひとりとして聖人といはるゝ人で、化益に力を盡くされなんだ人は無し、これはさもあるべき筈、案ずるに、身にそれだけの德は無くとも、みづから善しと信じた上は、手を束ねてあるべきならず、自身が力を惴らずとも、異端雲霞と沸く娑婆の、修羅闘場へ切ッて出て、衝いて衝いて衝きまくり、叶はねば同胞の馬前にて、討死する分のこと、其の時の自信家の心持は、楠廷尉に何劣るべしや、七生まで生れかはりても、此の志を貫くべしといふ、不退轉の意氣込あるべき筈なり、平田篤胤が神道談義、淸淨敎派が偏屈も、かたよりたりといはゞいへ、自ら信ずる所を行へる、其の操の高きとは、天をも摩すべし、カーライルの談命、ミルトンが新敎的天地想、いづれも彼等が理想の談義、恐らくは大造化を掩はざらんが、天上天下、此の理想の外、更に一つの理想もなし、と金輪際より生ぬきたるやうの、自信の獅子吼、いと尊し、苟もみづから信ぜば、げに斯くぞあるべき、そを行ふに當りての、手段にこそ選びはあれ、緩急、疾徐、間接、直接の差別こそあらめ、同胞化益の大誓願の、大自信に伴はざる可からざるや一なり、若し此の大誓願些も無うして、大自信を持ぐされにする輩あらば、そも是れを何とかいはん、人間の廢

論を闘はせ理を闘はせ偏執を闘はせ瞋恚を闘はす

物といはんも誣言にあらざるべし、さればやつがれ、自信といふことの、いと尊きを知るものから、巨獸の尻尾搔撫て、忽ち巨象を知れりと倣し、之れを虎豹と比べても見ず、犀、獅子、水牛、海馬のたぐひ、其の他巨なる獸は、新古大陸に數多かるに、絕えて比照の勞をも取らで、我れもはや大象の筋肉を剖き、骨を拆て、甚深の秘密を證得せり、と我れをあざむき、他をあざむきて、宣りあるき、他の象論と牴觸して、はじめは互ひに理を闘はせ、中ごろは偏執を闘はせ、末には瞋恚を闘はする、如是輕信の荼毒をも知れり、元よりかゝる爭ひは、學者の上にはいと稀にて、其の稀なるだに、爭の闘瞋恚に及ぶは、更に稀なり、若夫純理の闘ひは、智恵啓發の大機關、一日も無かる可からず、わが「白日夢」の塊も、そが盡くる期無からんを望めり、こは後段にて申すべし、さて、自信のいとも尊くして、救世の良藥たるべきことゝ、幷に輕信の極めて毒あることとは、いとも〳〵明白にして、人間醫を俟たでもしるければこそ、古今の物識といふ物識、學者といふ學者は、おほむね懷疑家ならぬは無く、後に大自信の人となりし學者も、多年懷疑の境に在りて、心眼を森羅の法界に馳せ、沈思瞑想の果成りて、漸く理想を作りしなりとか、案ずるに、宗敎家には、顯正破邪の擧、双つながら熾なれど、大學者には、破邪の論ははじめより熾なるも、顯正の說、割合

に後れてあらはるゝは、大自信の成立に、此れ彼れ先後のあればならんか、それは學者の上なれど、並々の詩人文人の上にも、そが持前の異同によりて、信の先後遲速はあり、夙に一道の信を得たらんは、鬱勃たる情懷を、事に感じ、物に觸れて、詠出す、其の中いたく傑れたらんは、ミルトン、シエリーの壘をも摩すべし、これ皆理想の詩歌にして、いと廣き意味にていふ、抒情詩といふは、大むね此のたぐひなるらんかし、そが形は、古しへのエポスの形したらんも、ドラマの形したらんもあるべけれど、所謂上乘のドラマといふ際は、かゝる者流の作には見えず、さてまた信を得かねたるは、八万煩惱の繋きに擊たれて、眼くるめき、天の一月影万水に浮ぶなり、と口ではいへど統括めて、證ずる智惠の繩切れて、無底の井戸にをちこちの、餓鬼惡太郎にも笑はれ、魂の無い奴、と後に目無き一ッ目小僧が惡たい、幽靈のやうにお手前は、腰が無いとぬかさばぬかせ、迷ふといふは悟の裏道、煩惱即ち菩提樹の、此葉の生ひ長ちて、花咲かん日を俟つ間の、內職になふ繩梯子、これは其の後菩提樹が、億万由旬延び〱て、大天井に屆かん時に、えちらおちら攀昇らん、其の用心の方便なり、他人に取りては菊五郎が、舞臺で用ふる竹梯子の、短きよりも短かくして、何の益にもたゝざるべけれど、我等に取りては一葦の葉船の、淺ましきま

でさゝやかなれど、無邊の海を渡らん料なり、夫れものゝ用は、その主の性に應じて成るものなれば、石見銀山鼠取、泥棒猫を禦ぐに由なく、雀を威す山田の案山子、弓ひきしぼりて立ちけらしが、小山田太郎が武者目には、御ッ大將か咳の、一つばかりの効目もなかりき、さればわれらが方便門も、ほんのわれらの犬くゞり、羊が通ふ背戸の小途のむさくろしさ、世の貴人の目に觸れんや、語るとも用なかるべし、いふな維摩の室ならなくに、無言三昧、沸く妄想の凝り成せる、達摩に似たる夢のかたまり、辛氣くさゝにころがして、行くとも無しに往ぬる日の逍遙、松風颯と落瀧津瀬に影映る、蘿月を友に塵の世に、行ひ澄す道士が柴の戸、突きあたッて心づき、やをら見込む竹椽に、琴の音の、いとゆかしくぞきこえける、その時やつがれ思ふやう、我れ若し此の塊をまろばして、かばかりの道來たらずば、此の聲聽くべき便なかりき、さるにても、只管沈默と思ひ込みしは、我れしらず、我れぼめの病を長ずべき、いとあしき緣なりき、斯く心づく上からは、烏有先生が此の琴の音を、善智識の引導といたゞきて、けふよりいでや口を開かん、望みとあらば此の妄想の塊、實驗にそなふべし、眞二つに割ッたらば、金太が出るか、おたよが出るか、そちらにござつて御覧じて、存分に笑はしやれ、とぞしやべりける、　（此の稿故ありて中絶せ

り）

（以上廿五年二月）

『早稻田文學』が谷「時文評論」村の緣起

印度帝、オーランジェーブ崩じて、東洋の古帝國、四分八裂し、紊れに亂れたりしさま、風前の刈こもの如くなりき。　此の時に當たり、英、蘭、佛の諸國民、隨處に地を選び、植民地をひらき、各〻そが故國と通商交易の道を開きしと、利の爲にせしわざとはいへど、流石に全國を奪はんの志、はじめよりもたりしには非ず。　それと志は異なれども、『早稻田文學』が谷に設けたる「時文評論」といふ小村は、三文調和の荊棘を拂はんことを、おふけなき志として、みづから進んで農夫となれるもの幾十人、相集まりて成れる團躰なり、彼れら農を主とすること、猶印度にありし英の居留地、マドラス、コッシンバザーの諸市が、專ら商業を力めたりしが如し。さるからに、必ずしも武を事とせず、耒耟をもて鎗劍にかへ、生垣水田をもて城濠にかへ、平和を主義として開拓に從へり。　とかはあれど、元より庸人の團體なれば、私利の念、恐らくは、其の間にはさまることを免れざりしならんが、常に意識したる本願は、美文の開拓に外ならざりき。　わが黨已に平和を旨とせり、かゝるが故に、敢て敵をしも攻めざれば、敵寄すべしと

もおもはざりき。　曩に「マクベス評註」が岡に、小き旗を押したてつるは、土地測量の標章にして、「時文評論」の牧場に、一たび聲高く叫破しつるは、狼を逐はんための呼ばひなりき。　わが黨不肖なりといへども、事に臨みては、堅を破り、剛を衝き、頑なる巖を碎き、歪たる木根を堀りうがちて、美文の田園を開拓せんの勇氣なきにもあらねど、農略はもと戰略と殊にして、商略ともひとしなみにいふべからず。　强ひて神速を貴ぶべきにもあらねば、はたまた急に進みがたき由緣もあり、如かじ、徐に平和の方法を取りて、孜々として業に從はんにはと、すなはち小羊子といふ者の、いさゝか羊かふことをまねび得たるを、此の開拓地の組頭とし、別に竹のや隱者といふ博識の翁に、深山幽谷に枝折して、後に登る者を益すべき道案內せさせ、かくして日を經ること、二月三月に及びぬれど、開拓地の目にたちて見ゆるは、一段二段ばかりにも至らざりき。

折しもあれや、思ひがけなき千朶木が嶽なる『しがらみ』城の方にあたりて、狼煙さえたる天をこがし、山河を震ふ鬨の聲とゞろきわたり、大軍こなたへ寄來と見えけり。　こはいかに、此の平和なる谷間の村へ、そも何者の寄するやらん、とく物見せよ、といふ端に、幾人か走りゆきぬ。　やがて其の者の報ずるやうをきけば、是れは明治美文壇の驍將軍、智勇兼備

の鷗外漁史が、精錬の猛兵をすぐりにすぐッて、マセドン王が方隊をもわざ笑ひ、シーザルがレジオンをも、蹂躙せんず勢にて、我が「時文評論」村をば、邪宗異端の巢窟と目星つけて、明治美文學天皇のおほんために、征伐の師を送るにぞありける。人々呆れて、言葉なきを、小羊子がいふやう、こは道理なり、前に測量の折、志か〲の旗を押したてしことはあらずや。あの旗の格好は異やうにて、軍旗に似たりしを、よくもことわらで、「評註」山の頂にたてつるは、拔目と云はば拔目なり、又すゝ拂ひの折には、隣家へ斷るが例なるに、さることもせで、聲高く胴廝聲擧げつる、これぞ第二の越度なりけらし。誤ッて、開戰の鯨波ときかれつるも、自然ならじか。案ずるに、御師むけらるゝは、道理至極なれども、と我れよりわびずしては、すむ可からず。われに拔目あればなり。將軍に對して組頭が、口上いはんはなめくはあれど、我れまかり向ひて、といひて、出で行きける、やがて立歸りていへらく、一通り申ひらきつ、大かたは穩にすむべし。さるにても、思ひがけざりき、行末も、何にまれ、我が非分は非分なり、曲げて理とすること勿れ、敵は誰れにもあれ、惡しきはわびざるべからず、などいましむ。小羊子勇無し、など、組の中にてもそしるがありけり。義をみてせざるをこそ志かいはめ、と空うそぶきたる小羊子の

面(つら)いとにくげなりき。

寄手東より西よりせまる

かゝりける程に、東のかた千朶木が峯にあたつて、再び起こる鬨(とき)の聲、天柱くぢけ、地軸も折れんすさまじの物音と共に、沙石を飛ばし、塵煙(ちりけふり)をあげて、彈丸黑子の「時文評論」村をさして、さながら大津浪の寄すらんやうに『しがらみ』城を倒(さかさま)にして、山河といはず、岡をも家をも、突き崩し、押し流し、やうやう押寄せたる鷗外將軍が再擧の大軍、眞名(まんな)、假名(かんな)、片假名(かたかんな)、獨逸文(もん)字(じ)を取りませて、精兵およそ二万あまり、五千餘字。 審美哲學と筆太に書(か)いたる大幟(おほはた)と、破邪顯正としるしたる大流旗(おほながれはた)とを、此の大軍の眞先に吹きそらせ、陣立(ぢんだて)分かちて二段となし、第一陣は、沒却理想を粉碎にせんの軍略、第二陣は『早稻田文學』が谷(やつ)を微塵にせんの兵學の奥義、極めに極めし將軍が軍(いくさ)ぞなへ。 正に是れ東西古今萬卷の經書、曾て讀過し、平生機巧心靈、六韜三略究來精、胸中幾百の戰將を藏し、腹內億万の雄兵を隱し、謀略には、諸葛亮をして舍を避けしめ、才能には、陳平をして瞠若たらしむべき軍配なれば、略、小計を施してだに、鬼神驚かんその勢すさまじく、哲學、醫學、和文、漢文、華文なんど、東西古今の文字にてしたためたる、

旗幾ながれ、或は先陣に、或は後陣に、ごゝにかしこに、翩翻とひるがへし、猛然として、わが村の棒ばな近うなり來るや、どうどッとばかり、更に鬨をぞ作りける。　小羊子を始めとして、わが村の老弱ら、案外なれば、第三役のカーセージが、驚きしほどに驚きしが、流石に些ともうろたへず、いちばやき若者ら、「記實」の社の杜陰なる、秀筆の松が梢によぢのぼり、向かひをきつと見渡せば、寄せたりや、寄せたるかな、晃星にやたとふべき、稻麻竹葦とや形容せん、矛、劍、長刀、鐵棒、十字鎗、なんど、劍の山邊と朝日に輝き、引喩、直喩、隱喩なんどいふ、國文在來の武器は、いへばさらなり、絶對よ絶對よと鯨波を擧げては、敵の胆を寒うすべき、頓旋とかや、高田軍學士が名づけつる、舶來の大戰斧、又は諷刺、冷語など名づくべき、恐ろしき爆裂彈をひまなく發ち、見る〳〵生垣打破りて、はやわが村に闖入せんとす、其の勢破竹の如く、當たりがたうぞ見えたりける、まことに、戎備はとはと無きマドラスの市が、佛の大元帥デウプレーの大軍に、ゆくりなく襲れける時、もしはまた、武にならはざるコッシンバザーが、スーラ、シャ、ドーラの猛兵に、端なく微塵とせられたる、昔物語のさま、目前見るらんやうなり。　小羊子同列をみかへりて、いかに方々、鷗外將軍の再擧は、いふ迄もなく美文天皇のおはんためなめり、われ〳〵の小開柘も、同じ

帝のおほんためにはあれど、善く思念すれど、惡く行ふとある例しにて、わが手段非ならんには、わが効果はた非ならざるを得ざるべし。　將軍審美の眼をもて、わが手段を非なり、と見つ、されぱこそ、根もろ共に、わが手段を滅して、蘖を未だ生ぜざるに絕たまくせり、理いと明かなり。　わが手段果たして非か、非ならぬか、わが黨なか／＼に知るに由なし、されば、われ前に將軍に敎へんことを乞ひつれど、彼れ何故にやこれをいなみつ。　將軍、主義の根底を敎へざれば、彼れが是に適從すべき緣も無く、降るべき理由勿論なし、わが黨未だわが非を覺らず、彼れの是、はた明示せられざればなり。　さはれ敵は寄せたり、わが先の非は辯じ盡くしたり、今はもはやことわるべきことも無し。　是非言ふに及ばず、村人ら擧ッて切ッていで、將軍の大兵と雌雄を決せよ。　ゆめ／＼カーセージの國民にな倣ひそ。　われ武なく兵才無ければ、ロバルト、クライヴに比ぶべくもあらねど、農より起こりて武士となり、屍を戰場にさらさうずる一片の勇氣は、彼れの商より起これる時の志にやは劣らん。　わが黨の奉ずる主義、若し果たして邪道ならんか、進前して死し、肉と共に件の惡業因を斷滅せんと、いと悅ばしからずや。　加ふるに鷗外將軍は、獨逸軍學の師、ハルトマン道士の秘密藏を傳へ承けたる、當世稀有の名將なり、

誓うて飛道具を用ふる勿れ

此の人と戰はんは名譽の至、かしこけれど、神武帝このかた、先例知らぬ面白き軍なり。彼れには東西の哲學、美學、理學などいふ、強の者いと多かり、わが黨にも常見入道あり、雅俗折衷之助あり、一騎千騎にあたらんは愉快ならずや。よき敵とひつくんで、名譽の働きおこたりたまふな。我れまた得たるとゝてもなけれど、英吾、俗吾といふ兄弟こゝに在り、こを左右にひきそへ、敵の本陣に切ッて入らん、さりながら、人々おの〳〵日本刀をもて戰ふ可し、火藥を用ふ可からず。用ひなばなか〳〵に味方をきづゝけて、敵のものわらひとならん。敵將爆裂藥を發つとも、此方は尋常に戰はん。只武器を調ずる遑なければ、打扮の思ひ〳〵は止むことを得ず。必竟、われと敵とはひとしなみにいふべからず、敵はその步卒といふ分際までも、皆老功名譽の武士なり、搆へて飛道具を用ひてそこなふべからず。此の覺悟定まらば、人々皆軍に從はれよ。止まらんと思ふ者は止まれ、去らんと欲するものは去れ、止まらんと纏綿はるとも、わが獅子心中の蟲は、われ先づ軍神への血祭に切ッて棄てん。いざふれ人々、セルモピリーの地の利は無くとも、リオニダスの武勇はなくとも、死を决したる志、やはか希臘の古英雄に劣らん。

Go, gentlemen, every man unto his charge;

Our common sense be our arms, truth our law.
March on, join bravely, let us to't pell-mell;
If not to live, then let's hand in hand die!

かゝる折しも、又ぞろや、城南の方にあたッて、大空にたちのぼる狼煙の、響と共に押寄するは、夙に老莊學の奥旨を究めて、かたはら西洋哲學にも深しときける、星川將軍が破邪の一軍、總勢およそ九千餘字とぞ注したる。　小羊子莞爾と打笑み、揃ひも揃へるよき敵かな、かゝるよき敵の、かゝる小村を棄てずして攻寄するといふは、ひとへに美文天皇の御ン餘光、餘の御惠にあらずして何ぞ。　榮ある軍あり、七年の役に於ける、大王にくらべんはをこのいたりなれど、かゝる勁敵を、東と南とに敵手として、決戰せんことの面白さよ。　いで〳〵軍のようい〳〵。

城南評論城主と逍遙子とのパーレー

城南より猛然として撃ッて出でたる、老莊哲學の勇將、寺山星川が城南評論勢、「讀沒理想辨」といふ大旗をひるがへして、驀地に、わが時文評論村に寄するの由、はやう注進するものゝありければ、小羊の逍遙子、あらかじめ防禦の心じらひをなし、戲文吾易讀といふものを、これに當たら

千朶木ぶりなる折衷紘

せんと企てたりき。さて漸うに押し寄せたるを見れば、思ひ設けたるには似ざりけり。そが陣立の整々として、兵備のいと嚴重なるにもかゝはらず、おとなしやかに見せて、みだりには發砲せんけはひも無し。やゝありて千朶木ぶりなる折衷紘の、いと雅びやかなる鎧に、漢錦の陣羽織を着て、縦横もんじと名づけたる一刀をたばさみつゝ、徐に陣頭にゆるぎいでゝ、物申さん、と呼ばふは、敵將寺山星川にぞありける。偖は、太平記ぶりに系統宜をするならん、先づ言葉戰ありて、さて後に力を角すること、漢土も、御國も、西の國も、むかしは皆しかなりき、と傳へ聞く、優しき敵の振舞かな、いで〱、こなたよりもいで迎へて、一々に應答せん、と組頭逍遙子、わざと長刀をば携へず、俗吾といふ老僕ひとりを將て、畧服のまゝにて立ちいでたり。式禮すみて後に、敵將星川のいふやうは、「いかに逍遙子、足下の目に落ちたる大宇宙は、赤いとも白いとも附かねば、勿論、善とも惡ともつかぬ宇宙なり、何とも詞のいひやうなく、萬理想を體として、尚餘裕ある宇宙なり。嗚呼此の說豈新ならんや。即ち是れ古の無限說なり、圓滿說なり、眞如說なり、純全說なり。近世哲學系統中の、世界皆惡說と、樂天主義と、また一半を裂かれたる萬邦の萬宗教とを除きては、英儒の不可知論なども、足下の說の友達位には至らん。即、

星川は沒理想を宇宙の本體なりと斷說す

ち沒理想は宇宙の本體なるが如し……

俗吾、逍遙子が袂を牽いてさゝやいていふやう「旦那よ、敵の大將は旦那よりも、遙に上手の沒理想論者なり。旦那は沒理想を方便なりとい はれたるを、彼の人は本體なりと斷言す。此の人と和睦して、助を乞ひたまへ、有理想論者と戰ふに便宜ならん」と。逍遙子答へず。

星川言葉を續ぎていはく「又想ふに、足下は此の大宇宙を、大なる心といひても、大理想といひても、語に病あれば、强ひて名づけんとならば、須からく假にすべしといふ意を含ませて、偖こそ沒理想とは名づけつらめ。嗚呼この沒理想、豈新ならむや。卽ち是れ古の無限說なり、圓滿說なり、眞如說なり、純全說なり。我れに相保哲學あり、中に釋して曰はく、大宇宙を善なりとし、惡なりとする見は、その具象界に於ける一塊を尊み、一塊を卑む、古哲學者の言とひとしく、有限智識の妄想に屬す。大宇宙の本體は、これを命名するすら、人間わざにて、こしらへたる語もてすれば、反面の存在を思議しうる故に、眞なりがたき恐れあり。假に反面の義の存在を容さずして名づくれば、純全の語當たらん、無極來と無極往とを一貫して純全たるなり。倘し時間もてせば、一時、一刻、一分、一秒みな純全となさん、前後比ぶべからずと。足下の說頗るこれに似たり。卽

星川沒理想は即ち本體なりと斷說し暗に小羊子を部下に引き入れんとす

星川は信じ小羊は疑ふ星川は大悟し小羊は中有に迷ふ

始の空と終の空

ち沒理想は宇宙の本體なり。　足下とわれと同說にあらぬか如何」

逍遙子答へていはく「あらず、足下は信じ、われは疑ふ。　足下は沒理想を宇宙の本體なり、と斷言して、純全といふ、宇と宙とを貫きたる語の外は、造化に與ふべき名目なしとす。　唯物論者の極致をも排け、唯心論者の極致をも斥け、心物相關の論をも取らず。　所詮、足下の純全は空といふにひとし、沒理想を文字のまゝに、理想無し、と斷言せるものなり。　譬喩をもていはんに、未生の人は空なり、既に生れて有となり、死してまた空に歸す。　又喩へんに、無邪無心なる嬰兒は、其の心に是非善惡無うして、白きこと白絲のごとし、これを空に比す。　已に人となりては是非あり、善惡あり、白絲の染まりたるが如し、これ有なり。　悟道徹底して恬憺如たる、これをまた空に比す。　空、有、空の三大階段なり。　足下は終の空にして、われは始の空なり。　更に、横濱を發して西航し、世界を一周するに譬へんか。　われは、誤りて函嶺を越えたりしを、敎へらるゝ所ありて、また横濱に戻り來たり、こゝより發途せんと工風して、新に方角を案ずるものゝ如く、足下は、已に全世界を周航しはてゝ、横濱に歸り來たり、從容として立てるものゝ如し。　足下は、已に歸着して恬憺如たりかるが故に、宇宙の本體は、純全、即、沒理想と斷言す。　われは、未だ前途に何物ある

かを明にせず、譬へば、西へ西へと進みゆかば、果たして遂に日東にいでゝ、また此處に歸着すべきか、元より知らず、函嶺より立ち戻りて、再び横濱の岸に立つは、幻影を見たるものゝ、一たび瞑目して後に目をひらき、あらためてその物の實否を驗せんと試みるに似たり。　必竟、わが沒理想は、發程の數學點（マセマチカル、ポイント）なり、Starting point なり、足下が、沒理想をもて、立脚地、Standpoint となせるとは同じからず。　わが沒理想は、未來に向かつて動くべき性を具へたれど、尚母の胎内にあり。　足下のは、已に生まれて靜坐したり。　わが沒理想は無なり、幅も無し、長もなし。　此の點を一歩一歩追ひて進まば、或は線となり、或は曲線ともならん、しかれども、終に環となりて、終始相あはんや否や、我れ未だ知らず。　故に本體といはずして方便といふ。　足下とわれとは、小兒と至人との相違なり。　足下も空、われも空なれど、足下は窮理徹底しての空にして、わが何も得知らずして空なるとは同じからず。　按ずるに、足下と鷗外將軍とは直反對なり、足下、われを有縁の者と看做して、本體的沒理想を説かるゝとも、ハルトマンといふ有理想論者が眼界に横れる間は、わが心の惑解けず。　本體的沒理想の敵は、尙あまたあるべしといへども、せめてもハルトマンの一元論をだに破せよ、われ或は足下の轅門に降らん。　われは、宇と

無限旅行無限欲望

幽明の二生涯

宙とにかゝはらざる、文學といふ者は、社會、政治の事と同じからずと思へるが故に、文學の修行に關しては、無限の欲を持し、無限の旅途に上らんと思へり。 我が魂は無限を渉りて、百たびも休息せんと思ひ、また百たびも運動せんと思へり。 現身の、旅中に死なんとは、もとよりの覺悟なり、無限の旅に上る者は、此の肉體にあらずして此の魂なり。 究竟、わが旅といふは、此の逍遙の現身がする旅にあらず、又有限の旅にあらず。足下の本體論に服せざる限は、またハルトマンの有理想論に服せざる間は、此の旅恐らくは無限ならん。 此の無限の旅の、茫として際涯見えざるに比ぶれば、今日小有より立ち戻りて、發端の無に發途點を設くるも、また此の點より諸現象を見直さんと企つるも、大に後れたりといふべからず。 無限の道中双六をまたあらためて振出しより振はじむる心なり。 こはわが「白日夢」の一斑なれば、わが現世に處する主義と誤解あるな。 われは操觚含毫の徒たる資格より此の無限旅行を思ひたち、無限の欲を持せんと願へれど、現在世に對しては、わが欲應分に小なり。 これをわが幽明の二生涯とす。 これらの說、すべてわが「白日夢」にして、一時安處の方便なり。 人に語るべきものにあらねど、沒理想を辨ずるに必要なれば、然ばかりを洩すのみ、再び問るゝとも、或は「夢」は語

我が現身は死ぬとも我が魂は死なじ

らじ、その時迯げたりと誤解あるな。　されば「沒理想を理想とし、一理想を固執する、欲有限の我を去りて、無限の絶對に達せんとする、欲無限の我を立てん」といひしは、わが本意の、横濱の海岸に立往生する心にあらざるを斷れるにて、前の方便といふ語を敷衍したるに過ぎず。　彼の數學點を一ツ二ツ三ツ四ツ、いつまでも蹈み增しつゝ、或大理想に達するまでは、現身は死すとも、魂は休まじ、といふ心なり。　ジヨン、ストルリングいはずや、「吾人知より先づ疑に移り、それよりまた知に移る、しかれども前と同じ形にて同じ限界の下に、同じ知に戻ると思ふは、俗見の誤謬なり」と。されば、若し宇宙の本體が、足下のいへる如く、まどかにして純全ならば、或は端なく横濱に歸り來て、同じ横濱の月を見る哉など、たはれ歌をやくちずさむらん、それはその時の沙汰なり。　そはとまれ、かくもあれ、足下こそ實に、宇宙沒理想主義の皮をはぎて、その核を味ひたまへるに似たり。　一日もはやく、その理を闡明し、相保哲學の勸化門を開き、迷惑のわれを救ひ、無限旅行の艱難を除け。

星川また叱ッて曰はく、「足下、何故に譯語にもあらぬ、出所もなき、新熟語を造りて、俗をおどせしぞ」。

答へて曰はく、「譯語と出所成轍ある詞との外は、用ふべからざるものか。

新思想の浮ぶとも、新熟語は造るべからざるか。本體的沒理想に代はるべき語のあまたあるをば、われも知れり、方便的沒理想の意味にして、同時にドラマの一面を評すべき恰好の語、和漢又は英、獨、佛の語にあるか。（鷗外將軍の沒主觀とわが沒理想とは同じからず）。あらば示せ、われ改むるにたゆたはじ。

星川又いへらく「足下のドラマに對する沒理想を問はん。思ふに、作家沒却せざれば衆理想沒却せず、衆理想沒却せざれば作家理沒せず、足下の意然るか。（答へて曰はく、然り）。果して然らば、宇宙に宇宙以上の理想ありと思議しがたく、又宇宙に大理想ありと斷定することの難きは、殊に沒理想の字を選びて、之れに冠らせたるを見ても明かなれば、シェークスピアに人間以上の理想、若しくは大想理あるにあらず、とことわりて、宇宙に對する沒　想と、詩文に對する沒理想と、義を異にするは疣ならずや。」

答へて曰はく、「あらず、宇宙に宇宙以上の理想云々とは、誰がいひし。われは只宇宙に人間以上の理想（未だ人智の及ばざる理想）あらんか否かを疑へるのみ。シェークスピアの作は宇宙に似たれども、宇宙とは異なり、かれは天工、これは人工、シェークスピアの理想焉ぞ人間以上なら

星川シェークスピアを神明視せんとす

ん。何となれば、若し彼れの理想を人間以上とせば、勢ひシェークスピアを仙、鬼、神、等に列せざるべからず。わが見不見といふ理想とは、作家自身が意識したる理想の謂なり。足下はシェークスピアが作に、人間以上の理想籠りたらんと疑ふ、足下はシェークスピアを鬼神の權化ならんと疑へるものか。」彼れ又いへらく、「足下が沒理想の眞義を按ずるに、作家が筆を下すに當たりて、理想なからしめんとする理想あり、寫す所のものに作家みづからを表題する插評なからんと望むは、まだしも初段のことにて、他の人物、人事を構成する場合にも、作家胸裏の空想にもとむることをせず、只自然の導線を辿りて直寫せんとするにあり。嗚呼この沒理想、豈新あらむや、即ち是れ今の實際主義なり、自……然主義なりといひかけたるに、俗吾つと逍遙子のかたはらより進みいで、「わが逍遙子いつさる事をば云ひし、當推量も程あり」といきまくを、逍遙子叱りしりぞけ「足下の推斷は、何かの間違ならん、明證を擧げられたる後に答辯せん。我れ不學なりと雖も、二三の審美論の片端を窺ひ、若干の批評家が、詩を論じたる文をも見たり、實の模倣を美といはんや。互ひに揣摩の問答せば、春の日永も刹那にひとし「又なからしむる」といふ詞の解わが意とたがへり。「雜錄」なる沒理想の由來を見たまへ。

星川又「沒理想は、少なくとも、シェークスピアが大詩人たる所以の幾部分を示したり」といふ意味は、足下の所論に明瞭なり、詳しくいへば、ドラマが差別相と平等相(沒理想)とを具有するものとせば、沒理想はドラマ必至の形なるが如し、去かるに尚沒理想をもて、彼れが本來面目となすことを躊躇するは如何」と、此の意を長々しく幾段にも分かちて問ひかける。 逍遙子はじめは、鷗外將軍の一。向。記。を學ばゞや、と思ひしが、『去がらみ艸紙』は二段、われは一段、問(とひ)の數凡そ七ヶ條なれば、七行に然。り。といふ字のみ並べ記すは、いたき費(ついえ)に候ふべし、といふ、俗吾の勘定高き諫にとゞめられ、終に大まけに、總〆して然。り。と答へ、さて、少しく註解を添へていはく

沒理想はシェークスピアの本來面目にあらずとは、これのみにて、彼れが本領の美をなさずとの義、第十號「時文評論」第四ページに、「またシェークスピアが本領の美は、偏に沒理想(其の理想の見えざるところ)にありともいはざると明かなるべし」といひたる、偏にの二字、極めて重し、さて又足下の所謂ドラマがわが謂ふ二面相を有る(もて)ドラマならば、沒理想はドラマ必具の一面なり、(第十號「時文評論」七八ページ、)さりながら、そに伴ふべき活差別といふ他の一面なくば、未だわがドラマの本領美となる

星山はハルトマンと戰はざるべからざる論理上の約束を有す

こと能はず。 此の段「雜錄」欄内なる「沒理想の由來」の中にも論じたれば、參へ觀てわが本意を知られよ。

星川また「沒理想はドラマ必具の一面ならば、ドラマの本體にして目的にはあるまじ、目的とは、欲して到らんとする處ならずや」と詰りしに、逍遙子答へて「たがへり、我が造化に對しては方便、詩文に對しては目的といひしを誰がいふとか見られし、わが言ふなり。 沒理想を、方便といふも、目的といふも、わが爲なり、足下が釋全く違へり」といふ。 星川更にまた、逍遙子が主義は、必定實際主義ならん、と推測して、小言いひけれど、そは純然たる推測なりければ、逍遙子答へざりき。 さてまた鷗外將軍が鋒を避けて戰はざるを「心無し」と憾み、且つわが斷語を用ひずして「蓋然語」を用ふるを解し惡しとて責めけれども、さるは斷信家と軍好きの人との非難なれば、逍遙子答ふべき要無しとて、口をつぐみ、やがて一揖していはく「足下、われを敵として戰はんとならば、城南評論城を倒にして寄來よ、われ辭退せざるべし。 さりながら、それに先だちて、足下が相保哲學を仔細に示して、足下が當の敵ハルトマンを折伏し來たれ、さすればわれ、或は一戰に及ばずして足下に降らん。 何故ぞ。 われは向かふ處を知らざる荒漠の旅人なり、誰れにてもあれ、造化の本體を捉く可

からざる哲理によりて、道破するものは、わが爲の北斗星なり、われいかでか渇仰せざらん。ハルトマン、若し沒理想論が唯一の眞理なる由を證せば、われはハルトマンに從はん、足下、若し沒理想論が唯一の眞理なる由を證せば、われは足下に趨かん。"I am standing water. Teach me how to flow." 問答終りければ、逍遙子は陣幕の内に入りぬ。俗吾敵將が背影を見送りて、どら聲に歌うていはく、

與作お江戸にござるときけど刀さしかや片だより、與作おもへは照日もくもる、せきの小万が涙の雨か、雨はふる〳〵そりやいとはねど、情ないぞよ笠さへくれぬ、みやこ〳〵とわしつれてきて、こゝがみやこか山中を

陣頭に馬を立てゝ敵將軍に物申す

逍遙子が爪牙耳目と頼んだる、公平入道常見、添田軍學士が着ふるして打ち棄てつる、ゼボン緘の古鎧を、ギックシヤック、ロジックと着下し、祖父遺傳の大節用集の、表紙ちぎれて正身おひ〳〵ケバだつたるを、縨の代に脊に負ひ倣し、磨墨となん名付けたる東牧駒の脚ゆがみて、格好最も不細工なるを、右に左りに牽き廻して、やう〳〵眞直になつたるに、ゆんらり

ゆたかにザックとまたがり、禿管城子と銘うつたる、細身の鎗を小脇にかひこみ、右手には改良判四郎、左手には英和字典膳をひきしたがへ、筆架のやうに朽ち凹みたる、鞍の前輪に用心して、鞍壺に突ッ立ちあがり、硯池に響く大音聲、敵陣に向かッて呼はッていはく、

嗚呼がましくは候へども、早稻田文學が谷、時文評論村の住人、五人組の肝煎、公平入道常見、破邪顯正軍の御ン大將、獨逸ゆ舶來の烏有先生、又の名カルヽ、ロオベルト、エヅワルト、フォン、ハルトマン大道士が、純美純善純眞なる審美軍學の極意を傳へられたる、完美天皇無二の忠臣、鷗外の朝臣漁史將軍に物申さん。　かく申す入道が此の打扮、大店の埃掃に驅けつけたる、鳶の源左衞門に似たりと見ゆとも、ゆめ〳〵將軍が及に罹りて、敢なく果つる浪花がた、葦分船の怨靈となおぼしめしそ。　將軍の御ン襲來、かう案外にこれなかッせば、絨毛の色はあせたらんとも、鎧兜一通りは調達なし、四角四面に陣を張ッて、尋常の勝負仕るべかッしに、爆裂彈をさへに投じたまへば、われらも防がん策略盡きたり。　不肖なれども、將軍が大審美軍の御敵手仕まつり、屍を陣頭にさらさうずる覺悟、是非選ばんに遑なく、手あたりまかせの此のいでたち、その裝束は賤しけれども、志に二つは無し、無禮の儀御ゆるし下されかし。　さて、わが黨の

無限に對する方便
現在に對する主義

組頭、小羊(こひつじ)の逍遙子、それがしをして、御大將に聞こえしむることのあり、詞をあらためて申し候はんずるを、篤と御聞あらせられ候へ。

第一　逍遙が「時文評論」に於て、談理を後にするは、將軍が『しがらみ艸紙』に於て、記實を後にすると、本意に於ては相異(あひこと)なるところ無し。　逍遙はた世間に向かひては、記實と談理との先後なく、並び行はれんことを願へばあり。　只異なるところは、將軍は記實に慊(あきた)らで談理を宗(むね)とし、逍遙はわが未熟を慮り、わが談理の偏見となり易きことを憚りて、われは記實を先にせんといへり、即ち特に「時文評論」欄に對してしかいへるにて、汎く世間に對ひていはざることと、已に明かに辨へたるが如し。　しかるに、將軍はあくまでも然らじと解したまふ、これ逍遙がしばらく記實の筆を擲ち、然らずといふ將軍に答へんとする所以なり。

第二　逍遙が沒理想論は、逍遙一個人が無限に對する方便にして、またみづからがドラマを修むる時の目的なり。　惟逍遙一個人が修行時の方便なり、かるが故に、世間に對ひては、奨說しつることなし。　將軍は、これをもて、逍遙が時文評論に於て、有限の現世間に對する主義なり、と解せり、これ逍遙が再び答へざるを得ざるに至れる所以なり。

第三　逍遙は、立脚地未だ定まらずして、有無の界に迷へり、即ち消極な

消極と積極

知と不知

り。　將軍は、已にハルトマンを奉じて立てり、即ち有なり、積極なり。　逍遙は、造化の理想未だ見えずといひ、將軍は見えたりといふ。　見えたりといふ將軍に向かひて、何物か見えたると問ひつるに、將軍つれなくも誨へざりき、これ更に質問を起こして、將軍が斯道に無情なるを責めんとする所以なり。

第四　逍遙は、未だシエークスピアの主觀を審にせざるが故に、彼れが作の客觀のみを評せり、即ちその本を明めざるものなり、(消極)。　將軍は個想暗中より躍りいでゝシエークスピアの傑作となりぬといふ、(積極)。逍遙はシエークスピアの理想未だ見えずといひ、將軍は見えたりといふ。　見えたりといふ將軍に向かひて、何物か見えたると問ふ、論理の自然なり、これあらたに質問を起こして、將軍がシエークスピアに於ける解釋を、審に聞かまくする所以なり。

第五　逍遙が、詩文の本體に說き及ばざりしは、わが立脚地の消極にして定まらざるが爲と、わが本意の沒理想の義を辨ずるに外なかりしが爲となり。　然るに、將軍はこれ自家の主義の擴大せらるゝを避けて、詩の質と詩人の技倆とを直評するに至るを免れんとする、卑怯の振舞なり、と解せり。　夫れ記實談理先後の爭は、此のたびの事の本にして、有理

想、沒理想の衝突すら、わが見るところによれば、事の末なり、本未だ決せざるに、その末を是非する何の要かある。われは主觀を見えずと疑ひて、客觀を評せり、將軍わが見ゑずといふものを、何故明に說かざるかと責む。これをしも論理といふべきか。蓋し、わが謂ふ沒理想が、絕無理想の謂にあらで、「不見理想」の謂なるからは、詩人の質と技倆との論は、沒理想を說明するに當たりて、殆ど秋毫の要もなかるべし、不見理想の沒理想は、その根底に於て、未だ必ずしも將軍の有理想と衝突すべきものと定めがたければなり。將軍何の要する所ありてか、根底の是非を措きて、枝葉の談を聽かんと求むる。逍遙つや〳〵解する能はず。

所詮、逍遙が將軍に質さんとするは、造化とシェークスピアとに對して、沒理想(不見理想)の名目を用ふることの可と不可となり、これわが消極的本領なればなり。夫の詩人の質と技倆との若きは、自から別の問題にして、わが未だ證得せざるところ、證得せざるが故に說かざるところなり。說かざるところに向かうて、揣摩して形名を定むる、將軍の政なんぞ佛王が夢を罰せまくせしにいと善く似たる。假に逍遙が夢中の審美論を、妖婆が占言をきゝしときの、マクベスが逆心にひとしかるべしとせよ、將軍の大勇なる、老耄せるダンカンにひとしからず、何ぞその

逆意の發表して實となり。短劍と化して將軍が頭上にきらめかんとき、鐵拳を揮うてこれを微塵にせざる。　逍遙は將軍をもて、未だ夢にだに、源家頭領の位より下には置かざりしに、袴垂が片影を見て、やがて蛛切丸の鞘を拂はんは、かの保昌だに屑しとせざる所にあらずや。　逍遙が審美論はいまだ嫩葉をだに生せざるに、將軍はたけつて黑旋風が大斧を揮ふ、われひそかに將軍の力だめしを、辛氣くさゝの朝比奈が棒三昧(巡島記)に譬へんとす。　要するに、將軍の論鋒は、わが根幹を襲ふより轉じて、わが枝葉を襲ふものなり、初めは「時文評論」の記實論を襲ひ、後には逍遙一個人が、無限に對する方便を襲へり。「時文評論」の記實論は、世間に對ひて公言せるところなれば、將軍斯文の爲にそれが是非を評論する、もとより可なり、逍遙一個人が、無限に對する方便に至りては、假に將軍が指揮を俟つべき義務ありとするも、おのづから別問題なり。　わが沒理想辨に於て、わが方便の由來を說きしは、語義を辨ずるに當たりて止むを得ざる關係のありければなり、これを『早稻田文學』が有限の現世間に對する立脚地として說かざりしこと、青天に白日を懸けたるが如し。　逍遙蒙昧なりといへども、無限に對する方便をもて、有限の現世間に處するが如き、矛盾の方策を取らんとせんや。

將軍眞に斯道の爲に理を談じ、當世の救世主たらんと期せば、逍遙が消極的本領に對しても、先づ根本の是非を決し來たれ。所謂根本とは

（第一）沒理想といふ語を、造化に對して、方便として用ふるとの可と不可と

（第二）沒理想といふ語を、シェークスピアが作の客觀を評するに用ふることの可と不可と

（第三）「時文評論」の記實主義は、特に時文評論の主義なるか、そも〳〵また汎く世間に向かひて、談理を後にすべしと唱へたるものなるか、いかに。

これのみ。この三條こそ、將軍と逍遙との間に、雌雄を決すべき問題なれ。

陳べ終りて入道常見、鐙ふんばり、鞍壺に居直り、再び言葉を改めていはく、逍遙子が聞こえしむるところ、正に此くの如し。此の上は、此の禿管城子の穗先の續ぎ候はんずるかぎり、憚多くは候へども、戰塲は修羅のならひなり、大將軍が目にあまる大兵の陣頭に、雷驚電擊、火花を散らし候はんずるなり。將軍に分析が奇謀、總合が神籌おはしまさば、われにもいさゝか是非の見あり、わが見るところ若し邪ならば、一人も殘さず

此の戰場の鬼となり、極樂の天國に上る能はずんば、われ〳〵一統莞爾と笑んで、手に手を取り、黑暗地獄におもむくべし。さらば候ふ、敵將軍。」入道鞍頭に一禮して、馬の鼻づら引きめぐらせば、英和寺典膳、味方をみかへり、ほしいまゝに名句を翻案して、下手文句となし、剰へ、ゑわがれ聲をふりしぼりて、進軍の軍歌をうたうていはく、

Cannon to right of you,
Cannon to left of you,
Cannon in front of you,
Volleys and thunders loud;
what though storm shot and shell,
Boldly ye march and well!
Into the jaws of death,
Into the mouth of hell,
March ye our brave men proud!

雅俗折衷之助が軍配

"Cease to consult, the time for action calls;

War, horrid war, approaches to your walls!
Assembled armies oft have I beheld;
But ne'er till now such numbers charged a field:
Thick as autumnal leaves or driving sand,
The moving squadrons blacken all the strand.
Thou godlike Hector! (*sheeplike Shoyo!*) all thy force employ
Assemble all the united bands of Troy (*thine*)
In just array let every leader call
The foreign troops: this day demands them all!"—Pope.

蓊々鬱々、老樹古木、重疊して梢をまじへ、森々として深さと、幾里といふ限しらぬ、記實の杜の此方の端に、かたばかりなる、インダクチヴの神社あり、そが寳前の花表の左右に、禿筆の穗先を、幾つともなく染めぬいたる、限ある破幕を打めぐらし、沒理想、と只ひとしほばかりぞ、いとほのかに下染したる流旗を、虚空に高く吹なびかせ、前進如意と聞えたる、方便の床几に腰打ちかけ、歌舞伎座の左中將を、鳥羽繪にしたらん風情にて、味方の注進待貌なるは、わが沒理想軍の俄大將、小羊の逍遙子の、武者振とこそは知られけれ。　かゝりける處へ、彼の佛國にありといふ、乾闥婆

城阿修羅の荒れたる勢にて、馳來たる若武者あり、手痛く働きぬと見え、墨汁なす汗は、白糸縅の紙鎧を浸し、ちと計り手をも負ひぬと覺しく、朱墨の紅のこゝかしこに見えたるが、走りよりざま御注進ざふ、と呼ばひて、そのまゝはたと膝まづき、頓には語も得いださず。　逍遙子きつと見やり、汝は正しく黒丸ならずや、ウンニャ第一陣雅俗折衷之助が郎等、想像太郎元高ならずや、　先程よりぞ待ち兼ねし、軍の樣子は如何にぞ、と床几を離れて問ひければ、元高は頭をあげ、見分きかねてぞ候ひし、疲れ果てたる泅の達者が、二人互にからみあひ、角うたりしもかくやらん、彼の博學なる鷗外將軍――人の身にありとある議論を生むべき學識が、彼れの心に群ッたれば、談理家の張本にはいとふさはしき鷗外將軍――西の國なる哲學より、夥多の論材驅り集め、輕き冷嘲、重き評論、とり〴〵なりけるその行裝、先づ眞先に進んだる、猛兵およそ四千餘字、一度にわはする鯨波、天地も響けと罵るやう

いかに逍遙、汝いはずや、絶對は衆理想を沒却すと、さて、其の故をいかにと問へば、衆理想皆是にして又皆非なるが爲、といはずや。　いとも奇怪なる妄説かな。　常理に依りて考ふるに、是と非とは矛盾の意義にして、其の間に第三位を容れざるものなり。　夫の反對の意義の、着眼點を殊

立脚の地位二つあり

にすれば、皆大皆小とやうに、いひ得らるゝとは同じからず。ましていはんや、その着眼をも轉せずして、皆非皆是といひたるをや。衆理想を皆非といひ、同時にまた皆是といふは、論理の許さゞるところなり。さらば、同一の事物を是とも非とも見るべきは、果たしていかなる境界なるかと、われひそかに考へ見たるに、是も無く非もなき境界には、さしもいひ得ることとあるなり、即ち絶對の境界なり。夫れ絶對には、是非も、彼我も無し、されども、そは能く空間を脫し、時間を離れたる上のことなり。汝逍遙、此の顯象世界の中に立ちながら、能く相對を脫し、彼我後先を離れ、是非善惡を度外視することを得るや。汝は如何にして罪因を裁判せんとするぞ。盜も、不盜も、ひとしなみに見做さんとするか。汝は如何にして文學上の批評を行はんとするぞ。論理を守れるも、守らざるをも、ひとしなみに見做さんとするか。

味方の軍勢かくときいて、諸聲に答ふるやう、「たがへり〳〵、痛くたがへり。將軍ははじめより、逍遙が立脚の位置の、二つあることを見脫したり、これわが論の糢糊たるに原因せずして、偏に將軍が速計にも、わが論の一端のみを見て、解を下されしに原因す、即ち、將軍が誤解なり。將軍が所謂敵智といふものより見ば、斯く二位を混同して、論を立てられた

るは、誤解として咎むべき限にあらずして、寧ろ將軍が應變の神算とやたゝへまし。そはともあれ、かくもあれ、わが所謂二つの位置とは、何ぞと云ふに、絕。對。に對する位置と、相。對。(現世)に對する位置と是なり、專ら當世に處する政治家、敎育家、裁判官、さては新聞紙社會の文客などの上にこそ、或は此の二境界具足せざるべけれ、純粹なる學者文人等は、宇と宙とを離れて、其の手段こそ異なるべけれ、共に事物の絕對を研究すべき天職を有するが故に、他の尋常の人と同じく、當世に對する義務と本分と(例へば國民たる義務、父子たり、師弟たる義務等)をもてると同時に、別に絕對に對して、絕對的に立つべき權利あるや疑ひなし。げにや、時と事情とによりては、相對に對する義務の爲に、絕對に對する位置を棄つることはこれあらん、時としては皇室のおほんために、あるはまた國のために、純粹の學者も劍を提げて起ち、專門の文人も、砲を肩にして、難に殉することもあらん。ジョン、ミルトンが當世の爲に、破邪顯正の政論を作り、バイロンが希臘人の爲に、義兵の將となり、ラマルターン、キョルチル等が、武器を按して世を慨けるたぐひ、是れなり。しかはあれど、これらは皆學者文人が境遇の、變にして權なる者か、常の位置とはいふ可からず。我が明治の乾坤は、維新の後、日尚淺うして、百事安堵に至らず

といふものから、さすがに學者文人の徒が、その絶對の境界を棄て、專ら相對にのみ拘はるべき時にもあらじ、當世の務を怠るべからざるや勿論なりと雖も、傍ら絶對を追求するに於て、何のひがことかこれあらん。逍遙頑冥不學なりと雖も、三寸息絶ゆるまでは、心を文學の事に委ねて、眉間常に絶對を忘れず、長久に無限の旅途に上らんと望めるが故に、あらかじめ我が生涯を二境に分ち、絶對に對するときの我が覺悟と、現世(相對)に對するときの我が本領と、截然區別せんと試みたり。 蓋し、わが此くの如く、我が生涯を二分するは、恐らくはわが所謂沒理想が、未だ本體と得ならずして、方便の境界にあればなるべし。 されば、沒理想の一變して、有理想となるか、さからざれば方便の沒理想が大進化して、本體の沒理想とならん時來たらば、我れ竟に二生涯を打成統合して、一生涯となし、絶對に對する覺悟をもて、相對に對すること、或はこれあらん。さる境界をこそ、將軍が所謂大宗教家、さては大哲學者の境界ともいふならめど、かゝる潛上の境界は、我が未だ夢想する能はざる所なり。 今の逍遙が絶對に對するときの心は、猶夫のデカルトがそのはじめの大懷疑のごとし、なべてを疑ひて、是非をひとしなみに見たるのみ。 前號にて、城南評論城主に答へつる如く、只惡差別見を擲たんが爲に、發途の

平等見に立ち戻りたるのみ。　即ち、絶對に對する時には、我が心の印銘を消除抹殺し去りて、わが心を tabula rasa となさまくするなり。　かるが故に、此の境界にたちて宇宙を觀るは、大智者、大覺者が、宇宙を觀る時と頗る相似て、四圍空々寂々、絶えて是非なく、善惡なく、つゆ沮礙無き點は、彼れ此れ全く一つなり。　知と不知と、覺と無明との大差別こそはあれ、わが心に是非なきからは、皆非皆是といふに於て、何の非かこれあらん、わが立脚の點も、彼れにひとしく、絶對なればなり。　將軍はわが地位を聖教量と看做して、我れが一切世間の法に說き及ばざるを惜むと嘲られたれど、我れは將軍が、ひたすら終の絶對(覺後の空)のみを絶對として、始の絶對(覺前の空)に眼を着けられざりしを見て、かの䌫の一面のみを標準として、黑しといふものゝ非を詰るに似ざるや否やを疑ふ。　未だ沒理想を、本領の信仰とはせずして、現に尙發途點にあらんものが、いづくんぞ法を說くべき緖を得んとすらん。　將軍が注文も少く理なしと云ひつべし。　要するに、將軍は三重に逍遙を誤解したり、『早稻田文學』なる「時文評論」に於て、吾人と名宣りて、記實と、報道と、批評とをものする逍遙といふ雜誌記者と、一個の文人として、當世に對する坪內逍遙とを混同したる、之れを第一の誤解とす。　(此の別明かならざりしか、否か、乞ふ早

逍遙は無限に差別す

稻田文學第一號以下に就きて見られよ)。さはれ此くの如き誤は資格を分かつことを重んぜざる當世の習ひなり、思ふに、此の段は將軍の誤解といはんよりも、むしろ資格を分かてる由を斷らざるわが扳目ありといひつべし。我れ敢て此の點について、將軍を責むるものにあらず。さて其の次ぎには、無限の欲を持して絕對の研窮に心を寄せんとする逍遙と、有限の欲を持して當世に處せんとする逍遙とを、全くわいだめなく見做されたり、之れを第二の誤解とす。さりながら此くの如きも、尙強ちに無理なりとは申すまじ、ひとり彼の絕對に對する逍遙と、吾人と名宣れる逍遙とを、つゆわいだめなく混同して、(第三の誤解)わが齟齬せざるを齟齬なりと誣做し、わが矛盾ならざるを矛盾なりと詰責し、逆に論を搆へられたるは、論理にいと精しき將軍が軍配としては(たとへ敵智の妙算としては服すといふとも)、少しく理なしと感ぜざるを得ず。苟も常識あるらん人は「時文評論」にて吾人と名宣れる逍遙と、「マクベス評註」の緒言に片影をあらはして、後に烏有先生が非難に答へんために沒理想の語義を辨じたる逍遙との間には、(沒理想は絕對に對する方便なりと斷りつれば)差別あることを見出だし得るならん。向に烏有先生に答ふるに當たりて、件の差別あるを說かざりしは、我れはじめより

戰を好まざればなりき、我がひたすらに我が非を擧げて、我が粗漏を自認したるにも拘らず、敵者たる烏有先生が誤解したる廉を、一つだに敵智をもて答めざりしは、能く知る人ぞ知りつらん。然るに、今は平和の策全く破れて、かく旗皷の間に於て、將軍に見ゆるに至りぬれば、入道常見がいひつる如く、戰場は修羅のならひなり、かばかりの正當防禦、まことに止むことを得ざるに出でたり。かくいはば、將軍は武者笑ひに打笑はせて、しからば汝の相對的理想といふ者を聽かん、汝能く語るべきか、とのられんずらん。答へて曰はく、其の儀いと易し、將軍、若しはじめわが沒理想の語義を揣摩し、わが二資格を混同し、臆測の評論をものせられずして、逍遙が對當世の理想はいかに、と正面より問はれたりしならば、われ或は其の質問に對して、未だ語るべき境界に達せざれば、公にする能はざるなりと、「白日夢」以前の逍遙が心をもて答へたりしならんか、或はまた、絶對に對する理想に就きては、有無の界に迷へれども、相對に對する理想は、おほむね正に此くの如しと、「白日夢」の本論をもて答へたりしならん、　蓋し、わが「白日夢」は、すなはち逍遙が絶對相對の二生涯を分別するに至れる因縁より説き起して、現世に對する一時安處の理想をも、その本論として説きたるものなり。　わがさきに烏有先生が偶然

の引導に感じて、一たび口を開かんとせしは、件の「白日夢」の序論となるべき、二生涯の別を論じたる一篇なりき。左かるに、將軍はそが破題をだに聽き果てずして、非難の鋒を向けられたり。大智は一端を聽きて、その他の端をさへに洞觀するがならひなりとはいひながら、將軍が推量も、又少しく鋭きに過ぎたるかな、わが四角四面の正陣を張るに遑なうして、竹鎗席旗の軍裝をもて、此く將軍に對すること、止むを得ざるに出でたりとしも、酌み知りたまへ。さていまとなりて、おらためて語れよとわらば、われもはや語るまじ、とおさないさかひの女童めいたる、すねたる口上は申すまじ、さりながら、かく互ひに吳越とわかれ、敵智をもて隙を窺ひ、吳子の所謂四機をねらうて、虛に乘ぜんと思へる今は、曩に鳥有先生に對せりしときと、わが覺悟左かすがにおなじからず。前には孟浪筆を下して、一向わが心の實況を知らせまく欲りせしかど、今は論證を精到緻密にして、譬へば飛樓雲梯を具へ、櫓轒轀を修め、幾閱月の後に於て、器利く兵强き將軍が審美軍を、徐に迎へまく欲りせざるを得ず。將軍は我が語義の辨を讀みて論とし、又解をもて說とし、わが沒理想を笑ひて一面審美論といひ、わが評注の緒言幾行を取りて、わが形而上論なりといはれたれど、案ずるに、こは是れ將軍が「不學なる逍遙子

を、勵まさん爲の方便戲論か。　われは、かりそめにも、將軍が一面のみによりて全體を推測り、さて物せられつる臆測の批評を、提喩的批評ぞとも、又一面批評とも名づけんとはせざるなり。　箇は智の精とかや、若し果たして然らば、我が如く庸劣にして、わが如く文に嫺はざるものゝいふことは、おのづから冗漫ならんずらんは理なれば、千万言ばかりにては、かりそめにも我が理想の全體を、頓にいひ盡くす能はざるや、將軍が敵智もまた其の分解を容れたまはん。　わが一時安處の理想は、他日「沒理想」と題したる一卷の書をあらはし、その中に於て、事審に解說し候はん。　必竟するに、われ絕對の位置にたちて、絕對を追求せん本願を持し、さて其の立脚點よりいへばこそ、造化の本來の理想見えずといひ、シェークスピアの本來の理想見えずといひ、絕えて方向を知らずといひ、全く歸宿の處に迷へりともいひたれど、わが一時安處の理想―尙未定の境界にある理想―他の衆理想と衝突してそを折伏する能はざれども、尠くとも、ひとりわが一時の心にはかくあるべしと假信したる、目前安處の理想よりいへば、逍遙蒙昧にして不學謭劣なりと雖も、さすがに目前の必要に應じて、造化、人間等に關する、假定の解釋を下さゞるべしや。況んや、平生繙讀する、シェークスピアに對しての假定の解釋をや。　た

将軍の立脚地は唯一、将軍は毎に平等、将軍は或は些の差別を容れざるならん

とひ絶對の宇宙に對しては、有無の境に迷へりといふとも、現在の小宇宙に對しては、逍遙もまた、常にある一種の理想を保てり。　これ逍遙が不完全ながらに、一家の主人たることを得る所以にして、時に幾百人の學生を教授することを得る所以にして、かねては日本國民たるの本分を幾分か盡くし得る所以なり。　夫れ將軍は、ハルトマン先生が一元哲學を奉じて、尠くとも現在に於ては、そを無二の眞理なりと信じたまへるなるべし、相對の當世に對しても、絶對の世間に對しても、こをもて處せんとこそ思ひ入りたまへるならめ。　さればまた將軍は、逍遙が分身して、かく二境界に立てることを、いと心得がたくおぼされんずらん、さはれ、其の理（ことわり）には些の不思議なし。　將軍は已に心の師を得たり、われは未だ得ず、將軍と我れとは其の境界を異にしたり。　我れは我が小經驗が生みいだしたる小哲學をもて、絶對を規するに忍びざるがゆゑに、斷えず絶對に對しては、迷惑の堺にあり、將軍が近世の大哲學者―ヴントいでざる前に於ては、殆ど一世を風靡せりきともいふべき―ハルトマン先生が論によりて、絶對に關する學説を覺悟し、よりてもて絶對と相對との間に、生涯を別かつことの必要を感ぜず、二つながら、ハルトマン先生が一元論によりて、處せんとせらるゝも合理の所爲なれば、わが絶對

を覺悟せざるが故に、假に相對に對する安養の理想を貯へ、生涯を二分して、諸の事に當たる、これはた合理の所爲にあらずや。

かく答へけるほどに、敵軍は忽ち「絶對よゝゝ」と一齊に笑ひぞよめき「あゝ絶對よ、何ぞ汝が名を更ふることの頻繁なる。眞如、大虚、玄、無、靜、空、一、絶對質、絶對我、絶對主客兩觀、絶對理想、意思、無意識、さても／＼煩しきことかな。剩へ、このたびまた沒理想と變名し、やがてまた沒却理想、不見理想、平等理想、如是本來空などゝ頻に變化して、人を惑はす、不埒至極の奴かな」と、いみじうも面白くぞのゝしりける。

これは明かに味方の用ふる、沒理想の語義をば、曖昧模糊なりと打笑ふ奇兵なりき。さてまた敵勢は「因にいふ」と染めぬいたる、さゝやかなる旗を打ちふりて絶叫し、汝が沒理想といふ語は、第六號より前の『早稻田文學』にては、沒主觀、沒挿評、想類想、沒成心の數義に用ひられたり、汝こを得さとらぬとて、他を責むれども、いづれも皆自語相違の過ならずや。汝の所謂沒理想ほど、變化自在なる重寶の語はあらじ、とやうに、五かへり、六かへり、頓旋してぞどよめきける

味方はこれには答へずて、／＼、機を看て變におうむの鳥の、口まねの百轉、儒家が用ふる仁の文字、浮屠氏が使ふ涅槃の文字、老子の道や、カント

恐らくは前人にして此の毀を免かるゝもの尠からん。

が理性、實利教派の實利をも、禱りあげ〳〵、痛はしやな汝等も、若し端なうも早稲田が谷、種マクベスの評註の緒言の中に用ひられ、片影ばかりをあらはせし折からに、此の將軍が目に掛り、さて後に、ゆくりなき質問に應じつゝ、次第に本體を現じ來たらば、必ずや一語數義、不埒至極の怪物よ、と罵懲されしことならん、言語道斷笑止至極、ともろごゑに謠ひ了り、さてまたそれと同時に、眞如、大虛、以下、意思、無意識に至る、諸絕對に向かひて、彼等が立派なる本體的絕對にありながら、宿世わろくして逍遙子が、いとも瑣屑なる一時方便的絕對と同一視せられたるを、近ごろ氣の毒の極みなり、と弔詞をいひ、さて最後には、近代の文人、カーライルの靈と、エマルソンの靈とに向かひて、甚だ潜越にはあれど、或は同患の感あるべし、と推はかりて、取りわきて特別の弔詞をのべにき。　そは彼等の險怪含糊なる文章が、万一將軍の目にかゝらば、徹頭徹尾、數義語と新熟語とをもて充滿したり、とやうに見做され了り、到底かのヘルマン、グリムが、エマルソンの文に於けるが如き厚意と、佛人テーンが、カーライルのピウリタン主義に於けるが如き寛大とにあふことは、盲龜の浮木、優曇華の花の春、逍遙の蕪文に見えたる沒理想が、斥けられけるよりも尙激しく、假借なく、用舍無く、斥けらるべきや一定なればなり。　何とな

れば、彼等は立派なる大論文、さては哲學的著述の中にてすら、曖昧なる語(ことば)を用ひたればなり、決して評註の緒言などいふ、瑣末なる場合にてのみ用ひたるにあらざればなり。

此時敵將軍、黄金の釆配打ちふッて、大音聲にのらすらく、「汝逍遙、汝は敢て形而上論をなさずして、只方便を說けるのみ、といひ、又われは無邊際の大洋を渡る舟筏を造るのみ、といへれども、そはまことにいはでもの分疏(いひわけ)と笑はまくのみ、何となれば、古今の哲學の系統は、悉く是れ方便にして、悉く是れ舟筏ならずや。　愚かなることをいふものかな。

味方の小頭、雅俗折衷之助、此の時陣頭に駒を進めて、鞍壺に居直り、聲高らかに答へていはく、それこそはわが逍遙子が、疑惑してまた疑惑して、未だ斷じ得ざる所なりしに、將軍いみじうも敎へたまひつるかな。　我黨は所謂一哲學系といふものをば、尠くとも、そを奉じたる人の心には、窮極の眞理の宿れる處なり、と確信したるべしと疑ひつゝありけるに、將軍、ハルトマン先生の系統を奉せられながら、古今哲學の系統は、悉く是れ方便なるを、と示敎せらる。　これによりて惟れば、逍遙子が沒理想を唱ふるも、些(ちと)ばかり故ありげに思はれたり。　將軍さへはた、絶對に對しては、方便の地位に立ちたまへればなり。　語を換へていへば、ハルト

五十歩と百歩
而も彼れは斷信し
我れは假信す

マン先生の哲理のみを、唯一絕對の眞理とは斷信せられざるに似たり。有理想が是か、無理想が是か、沒理想(不見理想)が今日の有樣か、あらざるか、將軍も未だ斷じたまはざるに似たり。われは、將軍が古今の哲學を、方便なるべし、舟筏なるべし、とのたまはすを聽くに及びて、此のたびの論戰の、甚だ無用にして、更に無益なるを思はずばあらず。將軍と逍遙子との間には、絕對に對する覺悟に於て、殆ど相違無しと知りそめたればなり。さはいふものから、假に將軍の今の獅子吼を、一時假定の疑案なりとし、將軍はあくまでもハルトマン先生が一元論を奉戴遵守せらるゝなりとせんか、尙此のたびの論戰は果知らぬ無益の軍なるべし。何をもてしかいふぞ、と問はせたまへ、たとひ將軍が Invincible army の力をもてするも、方便として築きたる逍遙子が沒理想城は、到底陷落ることあるまじければなり。そはまた何故ぞ。曰はく、逍遙は理想無しといはずして、理想見えずといへばなり、かゝるが故に、將軍假令見えたり、とのたまはすとも、その見えたる理想が、唯一絕對の眞理にして、古き哲學系はしばらく措く、尠くとも他の幾系の新哲學を悉くしりぞけ得べき價値あること、正に此くの如しと、分明に確實に、將軍の證明する能はざる限は、逍遙が沒理想論は、南山の壽の如く、かけず崩れざるべく、不懷金

逍遙が沒理想論は猶虛空のごとし不滅不增

剛の磐石の如く、芥子刧に亘りて依然たるべし。夫れ逍遙が沒理想は、理想を有りとしも無しとしもせざる方便の論なれば、かの大宇宙とおなじく、万理想はおろか、万哲學系を容れて餘あり。絶對不二の大眞理が古今の哲學を殘りなく折伏し、融會し、若しは悉く併呑統一して、宇と宙とを貫き、太陽系を花鬘ともし、ネプチューンの軌道をば靴紐ともし、無上無比、不增不減の妙光を發ちて、如々然としてあらはれざる間は、此の方便的沒理想の魂魄は、彌勒の世は來たるとも、ミレンニアムは到るとも、時間と共に無終無極、無盡無窮なるべし。わが沒理想は、譬へば猶虛空の如し、將軍にいかなる莫耶の利劍ありとも、恐らくは虛空を斬るに由なからん。

"For it's,as the air, invulnerable,
And your vain blows malicious mockery.

敵將軍はまた、逍遙が詩文に對する沒理想を難じて、こは宜しく沒主觀と名づくべき者なり、といひ、一轉して「逍遙子と烏有先生と」と題したる論陣を押しいだし、沒挿評の餘論に及び、例の精しく議し、博く證して、縱横辨難、莊重森嚴、整々又堂々、まことに呉子がいへりける、車は管轄を堅くし、舟は櫓楫を利し、士は戰陣を習ひ、馬は馳逐を閑ふ、といふ、力機こと

ドラマ、エポス、リヽツク

ごとく具足して、物すごくもまた妙なりける陣立、味方もあッとぞ感じける。蓋し此の沒主觀論は、今回の役にはじまりたるにあらずして、已に山房論文の其の七の附錄「其の言を取らず」の中にも見えたり。そこにては、逍遙が沒理想を說きて戲曲を嗜むは、主觀の情を卑みて客觀の相を尊むに因緣するならん、と推し測りて、さて「所謂沒理想は沒理想にあらずして沒主觀なり」といはれたり、さて、今回の役にては、我が沒理想は作の客觀を評する語なり、といひけるを非難して、「おほよそ詩の上にて觀の主客をいふ者は、大抵作家の感情(ゲフユウレ)を以て主觀とし作家の觀相(アンシヨウング)を以て客觀とす。敍情詩を主觀とするは是を以てなり、敍事詩を客觀とするは是を以てなり。戲曲には觀の主客等く存せりとはいふものから、シルレルが曲とシエークスピアが曲とを比べ見ば、彼れには作家の感情多く、これには作家の觀相多きを知らむ。シエークスピアが作を客觀なりとするは、豈これが爲ならずや。逍遙子若し沒却作家とは、作家の主觀的感情を沒却する義なり、といはば、我れもまた左右なくその客觀を評したる言葉なるを認めしならむ」といひ、かくてまた(逍遙子と烏有先生といふ文の中、一向記の次の段)「逍遙子は美の主觀相のみを指して想とし、美の客觀相を指して非想とすれども、ハルトマンは主客兩

觀相を立つ」とわきまへて、やがて逍遙子が、シエークスピアの傑作の全局に理想あらはれたらずと、思へるは、敍情詩に見ゆること多き能感の情の、彼れの作に見ゆること少くして、敍情詩に見ゆること少き能觀の相の、シエークスピアが作に見ゆること多きを見て、情を想とし、相を非想とする見解より、玄かも理想見えたらずと思へるならん、と推量し、すなはち斷案を下していはく、「わが立脚點より見るときは、感情は主觀の理想にして、觀相は客觀の理想なり、故にシエークスピアの作にも理想見えたり」といへり。 これを敵將軍が第二陣の陣備への大略とす。(くはしくは『玄がらみ艸紙』第三十號につきて觀るべし)。

さるほどに血氣にはやる折衷之助、再び陣頭に進みいで丶、さすがに徐かに答へけるやう、我が小羊の逍遙子、曩に前號「雜錄」欄内に高札を揭げいだし、一わたり沒理想の由來を語り候ひける折には、(沒理想の由來參照)わが所謂理想と將軍の所謂理想との間に、多少の相齟齬する意義あらんか、と疑ひて候ひけるが、今にして思ひ見れば、將軍は正しく、わが謂ふ理想の意味に於てだに、シエークスピアが理想を、見えたり、とのたまへるや、明らかなり。 げにやハルトマン先生が理想論を奉じて、感情を主觀の理想とし、觀相を客觀の理想とせらる丶見解より見そなはさば、

見えたるは如何なる理想か

理想見えたり、とのたまはんこと、理の當然にして怪しむに足らず。げにこそ、その意味にていはば、シエークスピアが理想といふものも見えたらめ、さりながら、吾が黨がかねてしも知らまほしく願へるは、理想見えたり、といふ、抽象の議論にはあらずして、如何なる理想か見えたる、といふ疑問なれば、その答には、分明畫の如きシエークスピアが理想の解釋を賜はるべきなり。こゝもまた、前の絶對に對するときと、吾が黨の覺悟はおなじなれば、將軍が呈出せらるゝシエークスピアの理想が、絶對唯一の解釋にして、他の衆解釋を打破するに足らざる限は、吾黨が用ひたる沒理想の名目は、これを撤去すべき義務なきものとす。吾黨はもと衆解釋を容るゝことの自在なるを稱して、彼れが作の客觀を沒理想と名づけたればなり、理想の有無を斷じたる名稱にあらざる由は今更に繰返すべき必要あるまじ。あるはまた、將軍の所謂理想は、わが黨が謂ふべき理想にはあらざらんか、即ち總合の根本となりたる一種の觀念にはあらざらんか、ドッデンが以てシエークスピアの觀念とし、未詳氏(「沒理想の由來」參照)が以てシエークスピアの理想とせるが如き、理想にはあらざらんか、さすれば將軍は明かにわが所謂理想の語義を誤解せられたるなり。かばかり相論辯せしだに、互ひの徒勞にてあり

けりとやいはまし。　あるはまた、將軍の所謂理想は、ウルリチーが見て以てシエークスピアの觀念とし、ゲルヰナスが見て以てシエークスピア着想の根底とし、若しはテーン、ハドソン、ヱルデル、其の他幾十家の解釋家が見て以てシエークスピアが觀念なり、と思惟したるが如き理想ならんか、將軍乞ふ、審にその理想の本體を總論し、分拆して、尠くとも、彼れが作の六七篇に涉りて、證を擧げ、據を示して、さて以てわが黨の罪を責めよ、わが黨は楯を投じ、干戈を伏せ、先づ謹みて將軍が解釋を奉聽して、これを古來幾百の解釋と照繳對較して、徐ろにそが當否を判せん。若し將軍の解釋が、能くかれら幾百家の解釋に立ち優りて、善盡くし、美盡くし、眞に大詩人が性情と理想とを、看破發揮し得て、餘蘊なかるべく見られんか、吾黨は急ぎシエークスピアに對する、沒理想の破幟を立地に引きおろし、先づ將軍が轅門に面縛して罪を謝し、やがて幸にして赦されんには、一統もろごゑに勝鬨を作りて、五大洲を睥睨し、遠からんは目にも見よ、近からんは音にもきけかし、彼の千魂万魄といはれたりし怪物、わが日の本の鷗外將軍が審美の利劍に劈かれて、竟にこそそが正體をあらはしつれ。　汝、歐米の古今に漲れる幾万人のシエークスピリアン、何の面目ありてか、わが秋津洲の文客に見えんするぞ、と洽く外國

シエークスピアの理想は斷說しがたし

沒主觀と沒理想

人に向かひて宣らまくす。　あるはまた、將軍の所謂理想は、所謂無意識の理想にして、分析してわきまふると固より難く、將軍が見えたりといふは、見ゆべき道理なるが故に、見えたりといはれたるにて、「曰はくいひがたき理想なり」と、万が一にも答へたまはんずらんか、わが黨はやがて太息つきて、ヲォヅヲォスと問答せる、かの童女の頑是なくて、いつまでも We are seven と答へけるやうに、尙ほ依然としておほどかに、Nay, unknown といらへまくのみ。

さてまた將軍が示敎せられし、沒主觀といふ新名目は、打聞いたるところ、いと妙なるが如しと雖も、わが黨が未だ甘心する能はざる、そも〳〵故あり。　夫れ作家の感情を主觀とし、そが觀相を客觀とする由は、吾黨もほゞ心得たり、さりながら作家の感情即ち主觀と、作家が造化人間に關する極致の觀念、即ちわが謂ふ理想との間には、吾黨初めより區別を設けつ。　吾黨は常に思へらく、上乘の詩は叙情、抒事、ドラマの區別を問はず、おしなべてそが私の情を沒せざるべからずと。　此のこと叙情詩に對していはんには、いとも奇怪なるが如く聞かるゝならんが、吾黨がかく論ずるは、吾黨が獨造の說たるにとゞまらず、前人も已に唱へたる所なり。　案ずるに、自家の私情を沒する能はざるものは、正しく私の愛

抒情詩も主觀の解釋次第にて沒主觀の詩たるべし

愴恩怨を語るものにして、私情の爲に吐ける言葉は、よしや私利を目的とするにあらざるまでも、大抵は自家の爲に、同情、同感を呼ばんとするものたる、爭ふ可からず、然るに、彼の詩歌の上乘にあらはるゝ情感は、たとひ抒情といふたぐひといふとも、かゝる狹隘なる利害をば解脱せる者なり。　即ち、前者は直現の情感にして、後者は再現の情感なり、此の故に、平生の談話、愁歎、誹謗、罵詈、辯難、等の間には、吾人が主觀たゞちに現はるれど、哀悼、戀愛、慨世、憂國、等の詩歌の傑作には、吾人が主觀の影（イメーヂ）(映畫)あらはる。　彼方は直接にして、此方は間接なり。　前者に遭ふときは、吾人毎に當の人と同感して、其の怒れるを理（ことわり）と想ひやり、其の怨めるをげにこそと推察し、語の卑しきを聞きては、其の人を卑しみ、論の高きを聽きては、其の人を敬慕崇重す、未だ其の人を解脱して、詞花言葉の美を味ふに至らず。　隨うて、其の人を離れて、搆思着想の巧妙に恍惚たるべき理なし。　詩歌の佳什に遭ふや、吾人の感、かくの如くならず。　吾人はもはらその詩歌に動かされ、その想の高雅なるに感ず、作家を思ふに遑無し。誰れか"In Memoriam"を讀みて、テニスンといふ個人がその友を失ひぬる實感に同感せんや、專らかれが傑作の妙をのみこそたゝふるならめ。猶彼の繪畫の傑作に目を喜ばせ、演劇の絶技に心を娯まする刹那に於

て、應擧の名と圓洲の名とを、いづこにも着すべき餘地なきがごとし。

米人エヴレットが詩を論じたる語にいはく「美術はおしなべて儀型(タイプ)（極致）を料とす、詩もまた然り。 詩は或一個(ひとり)の心の私の喜び、愛憐、又は悲みをいひあらはせども、その表白する所は、衆人心の悲喜愛憐ともなりぬべきやうにものするなり。 すなはち、その詩人が私の執着は消失し、そが一個の感動は、件の普通的(ユニヴルサル)表白(エキスプレッション)の中に幷呑し去らるゝなり」と。 是れ豈没主觀にあらずや。 げにやシルレルが作の上に作家の感情の見えたり、とあるは、さることながら、これによりてシルレルが作には、シルレルが主觀見えたり、といはんこと、いかゞなるべき。 さればわが黨は、ミルトンが作れるドラマにも、バイロンがドラマにも、マアロウが脚本にも、又はブラウニングがドラマにも、理想見えたり、といふことを憚らざるものから、彼等が主觀の見えたりとは、未だ輕々しく斷ずる能はず。

蓋し、吾黨がドラマ若しくは叙事詩に就きて、理想の見えたる、と見えざる、とをいふや、毎に其の作の全局面に就きていふが故に、尠くとも、差別想をいちじるく描かんと力めたる、ドラマの作物を評するに當たりては、主觀見えたり、といはんとはせずして、むしろ理想見えたり、といはんとするなり。 前の見解によるときは、主觀の見えざるは勿論なれば、な

万魂のミルトン

千魂のバイロン

シエールプの説

り。然るに、さはなくて、作家の主觀、其の作の全局に見えたり、と斷言せんか、ミルトンの作れる人物は、何れも皆ミルトンが理想の所生、若しくはかれが主觀(感情)の化現たるに止まらずして、ミルトンが感情の直現、即ちミルトン其の人なりといはざるを得ざるに至らん。さすれば『サムソンの劇』中にあらはるゝ幾個の人物は、なべて皆ミルトンの直現にして、さしも性癖のくさ〴〵なるは何故ぞ。又『失樂園』の叙事詩に就ていはば、アダムもミルトン、イヴもミルトン、サタン、も、マイケールも、悉く皆ミルトンかも。O myriad-minded Milton! 又バイロンが劇に就きていはば、マンフレッドも、サルダナパラスも、和尙も、獵夫も、マルラ女も、悉く皆バイロンにして、ドン、ジユアンも、チャイルド、ハロルドも、其の他幾十個の男女(をとこをみな)、悉く皆バイロンかも。O thousand-souled Byron! 否、誰れかかくの如き、言語道斷の妄評を下すものあるべき。わが黨は、斷じて作家の主觀の(尠くとも上乘の位にある詩歌に於ては)沒却せられたるを信ぜざるを得ず。見よ、かのヲオヅヲオスは、主觀的詩人といふ名、かねて世に高けれども、ジョン、カムベル、シエールプは、これをあらずとして、かれがスコットに及ばざるまでも、能く人性の隱微を闡いて、多様に描破したる技をたゝへき。吾黨はたシエールプのと見解を同

理想は智力に關し主觀は情緒にのみ關す

沒主觀にして見理想なる作

沒主觀にして沒理想なる作

うす。　さるは何故ぞ。　彼の大なる湖上詩人は、わが所謂理想的詩人にはあれども、流石に主觀的詩人といふ狹き境界に立てる者にはあらざるべし、と思へばなり。　所詮、わが理想といふ語は、世に謂ふ漠然たる主觀といふ語と同じからず。　主觀は、若し之れを感情にのみ限るときは、情緒にのみ關する語となれども、わが謂ふ理想は、むしろ智の力に關するものなり、即ち、造化人間に對して、作家が極致と思惟する所の觀念なり。　かるが故に、抒情詩はいふもさらなり、ドラマをものすらん時に於ても、多少總合の礎となるべきものか。　此の段われいまだ明らめ得ずといへども、作家が主觀（感情）の沒却したる塲合にも、此の理想ばかりは、歴々としてあらはれたると、ミルトンに於て、バイロンに於て、其の他幾十の作家に於て、わが平生認め得たる所なり。　よりて思ふに、わが未だ親しまざる、幾百千の作家に於ても、沒主觀にして、見理想ならんは、蓋し數ふるに遑なかるべし、ひとりシエークスピアの如くに、沒主觀にして能く差別相を描破し、兼ねて沒理想ならんものは、五指を屈するがほども無かるべし。　是れわが黨が、特に「沒理想」といふ語を造りて、シエークスピアが作に冠らせたる所以なり。　わが理想の意義、斯くても尚不分明のところあらば、そはいまだ科學的に定義を下さゞるに因ることな

らん、これはた未來の沒理想論に於て、更に說き分くべきものならん、こゝには只、沒主觀の語の、沒理想の語に代用しがたき所以をわきまふるのみ、

かく、互ひに問ひつ答へつする程に、やうく永き春の日も、いつしかに黃昏近くなり來て、矢の的とする、敵勢の物具のきらめきさへ、定かならずなりにければ、敵も味方も引きわかれて、一先息を休めて候ふ。軍の模樣あらましは、一通り斯くこそ、と想像太郎原高、注進にはぶきようの、乘地にあらで氣の乘らぬ、軍物語のいと長き、人にも益なし、われもうるさし。

入道常見が軍評議

時に明治廿五年、四月も已に下つかた、朧に霞む春の夜の、櫻に掛る月影に、落花一しほ風情あり。小羊の逍遙子、記實の杜の本營に、味方一同を呼びつどへ、軍評定とりくの、自分六韜かたはらいたしや。雅俗折衷之助、席を進み、それがし本日の一戰に於て、鷗外將軍が堅甲利兵の先陣を、虛實を兼ねたる采配もて、辛うじて防ぎ侍りつれど、尙敵勢は潮と沸いて、追ひく押寄するとぞ見え侍りたる。第二陣の將校たる、公平の

入道には、如何なる韜略の瓢簟を碎きてか、虛實の鐵甲騎をいだされんずるぞ。　御坊の軍配、後學のためうけたまはりたし、と自慢の鼻おごめかして言ひければ、入道徐かに膝おし進め、古へは仁をもて本と爲し、義をもて之れを治めたる、之をしも名づけて正とは謂ふなり。　正、意を獲ざる時は權あり、權は戰より出づ、中人より出でず。　是の故に、人を殺して人を安んぜば、之れを殺すも可なり、其の國を攻めて其の民を愛せば、之れを攻むとも可なり、戰をもて戰を止むれば、戰ふと雖も可なりとかや。　そもや此のたびの戰は、美文天皇のおほんためにはじまりつることにて、其の間些しの憎怨無し。　攻めらるゝものも、攻むる敵も、潔きこと玲瓏たる雪も如かじ。　されば、其の鬪ふや、力めて卑怯なる軍配を避けて、正々堂々、古聖賢の遺敎に則り、正兵を主とすべきや、言を俟たず。然るに、本日に於ける折衷殿の馳引は、いとも目ざましく見まゐらせて候へども、味方がかねての誓約に背き、多少飛道具類似のものを用ひられき、と見つるは僻目か。　入道が第二陣は、兵法に迂なりとし誹られんずらんが、ひたもの正面より敵に當たりて、わが小羊子の平素の主義に、つゆ違はじとこそ存じ候へ、と憚る色なく申しける。　折衷之助、膝立て直し、異しかる御坊が申條かな、敵權變をもて攻來んときに、われ奇兵

冷語譏刺嘲弄を用ふべき場合

を放ちて、これに當たらんこと、天が下の兵法の許す所ならずや。敵衆くして我れ寡からんか、之れを易に避け、之れを阨に邀へ、一をもて十を擊ち、十をもて百を擊たんに、何の不可か候ふべき。これをしも智といはまくのみ。　御坊の迂もまた甚だし、と色を作して見えければ、年甲斐きなき入道常見、怺へずして膝押しむけ、再びいはんとする體を、小羊子早くも見てとり、双方を押しなだめ、二子のいふ所、おの／＼理あり、われは、折衷之助が用ひつる飛道具は、我が、先に城南評論城主に向かひて用ひつる投矢とおなじく、矢は悉く鏃をぬき去り、砲はおしなべて彈丸をこめざりしを知るが故に、今し常見がいへるやうに、卑怯の振舞とも思はねば、誓に背けりとも思はざれど、精極め、嚴極めたる、堂々の陣に向かひて、割合に飛道具の多きに過ぎしは、入道と共に悦ぶ能はず。　けふの事は、強ちに咎むまじ、以後、若し鏃をもぬかず、彈丸をもこめて、かゝる飛道具を用ふることあらば、必ず先づ敵者の品格を見て後にせよ。　われ思ふに、無法無慚の剛敵にして、到底尋常の手段をもてして、破る能はざるものか、若しくは取るにも足らざる小敵に對しては、爆裂彈も、弩も、地雷火も、弓鐵砲も、これを用ふること、或は可ならん、例へば、ジユエナル、ラべレー、モリエール、スキフト等が、腐敗せる社會全體に向かひて用ひた

るが如きは、是れなり。　一個人に向かひて飛道具を用ふるは、適ゝ以て自家の品位を貶さんのみ。　冷語譏刺を重んずることゝ、われ今は昔日の如くならず、況んや、險語をや。　それはともあれ、第二陣の敵勢は、倚雲霞の如しときく、入道が用意きかまほし、と大將めかしていひければ、公平常見、形を正し、それがしが所存によるときは、先づ眞先に突くべきは、我が「理想なからしむ」といひたりしを、「臨時無理想」と誤り解して、さてこれによりて陣立したる、敵の審美的陣翼と、絶對の見解と相對の見解とを混同して、「時文評論」の欄内にて、記實を先にせんといひけるを、汎稱の義に解釋したる、敵が哲理的陣翼と、「小羊子が白日夢」を、險語冷語と臆斷して、小羊子が本意を惡く見たる、敵が邪推や、わが破るべき正的ならん。かの幾箇處に、柵の如きものを築きて、沒揷評、沒却理想などの區別を辨じたるが如きは、彼れが根本の誤解より派生したる者なれば、こは打棄てゝも置くべうもや、小羊子の賢慮いかに、といふ口さへに、忘かつべらし。　雅俗折衷之助、懲りずまに口とがらせ、是はいかに、入道常見、肝腎の地の利を忘れられたんよな。　烏有先生とは、ハルトマンにして、われにあらず、と敵將軍は逃げつれども、「山房論文」其の七に、「こゝに烏有先生といふ談理家ありけり、理を談ずることを旨とする、一大文學雜誌を發行

ハルトマン船來して文學雜誌を發行せんとす

敵將軍はハルトマンの徒弟のみハルトマンを倒さば彼れはおのづから倒れん

せんと思へども未だ果たさず」とあるを見れば、ハルトマンが船來して、日本に歸化すと思はぬ限りは、鷗外將軍と烏有先生と、同じに見るは當然にて、よし將軍と先生とは、同體ならずとすればとて、自由自在に先生をば、Conjure up する神通の、入雲龍めく將軍をば、かの先生の化現と見るに、何の不都合か是れあるべき。　造化にいかなる理想見えたるか、つれなくも原書を讀め、とはねつけで、われ〱にもわかるやうに、摘掻んで語れといはんは、理の當然の請求ならんを、入道ぼけて忘れたるか、といはれて常見、目に角たて、又しても入らぬ詮索、問ふべくは、詰るべくば、此の入道が詰り申す、そこの御勘合きゝ申さぬ。　前號の物申(ものまをす)にては、此の件につき、再び問はんといひつれども、そは只順序をいへるのみ。　烏有先生とは、世を忍ぶ假の名、まことは碧瞳金髮、フホン、ハルトマンと、正體まさかにわかつたる上は、敵將軍の本城は、ハルトマンの大哲學に外ならぬこと明かなり。　万が一、いよ〱大亂と、相成らんずらん時來たらば、艨艟幾百、印度洋を打ちわたり、地中海を橫斷して、獨逸の本城まで押し寄せて、雌雄を爭はん分のこと、今將軍に歎願して、略解(りやくげ)を賜へ、と泣きつかんは、經傳餘師で四書五經を、通りぬけんとする小學根性、いとおさなし、耻知りたまへ、とやりこむれば、折衷さすがに耻ぢたりけん、われ大に

誤りぬ、と口をつぐみ、頭を低れ、再びは物をいはざりけり。 左右する間に春の夜の更け易く、月も西へと傾きて、無常を告ぐる鐘の音に、散らふや櫻の、ちりやちり〴〵 一同は、翌日をちぎりて陣幕の中ぞさみしきさむしろの

文珠菩薩の剛意見

まろねの夢の端なくも、驚き醒めて見まはせば、怪しやあ、小羊子の枕邊に、三十二相圓滿に具足せる、こはそもいかに、人か佛か、天つ使ひか、端嚴に

"A dream divine appear'd before my sight;
Whose visionary form like Nestor came,
The same in habit, and in mien the same."

そのネストルにはあらなくに、文珠の菩薩と、拜まれたまふかたじけなさに、小羊子、そゞろに隨喜渇仰の、涙にくるゝぞ道理なる。 そのとき菩薩、無垢清淨光を發ち、煩惱の焔を滅除すべき、甘露法雨といふ、專賣の御雨を、親玉が水まき車、一車がほど注ぎたまひ、さて、もろもろの暗を破るといふ、慧日の慈眼を垂れさせて、やをら琉璃咽を鳴らし、珊瑚舌をめぐ

人が讀みてもおかしからず當人にさりては隙つぶし

らし、やがて妙音を洩らしてのりたまはく、わるいぞよ〳〵、小羊の逍遙子、そのはうが今度の論戰、人が讀みてもおかしからず、當人にとりては隙つぶし、取りわきて、此の『文學』讀まんものは、講義の紙數が減ッたのと、雜報が途切れたので、きつい迷惑、よい加減に、負け惜みの言葉たゝかひよしてしまやれ。　おれは汝の守本尊なれば、汝憎いと思ふ筈はなけれども、佛(ほとけ)仲間は知ッての通り、一切平等の規則、慈眼視衆生というてな、トント依怙贔負禁物ゆゑ、おれもずんと公平にいはねばならぬ。　そも此のたび、汝が敵としたる、鷗外漁史といふは、誰れあらう、前生は難陀尊者といひ、强記多聞、第一の佛弟子、知れるが上にも尙知らんと、不休息不退轉、名にしおふ、what? what? と學問したりし功德にて、再び此の世の大導師と生れいでたるものぞかし。　されば、筆をとりて文を作り、論を成すや、情理傑特、氣相宏大、花實具足、圓美粹然、學問大海の水、流れて彼れの心にや入りけん、とは、十指の指していふ所ならし。　汝づれの企及すべき所にあらず。　速に兵器を擲ち、陣幕を疊み、身分不相應の談理を廢して、元の如く、記實の業をもはらにせよ。　汝僻心(ひがみごころ)を起こして、鷗外漁史は記。實。を打破せんとするなり、とやうに思へるらしきが、漁史は繰返りしてしからざる由をいへりき。　されば、汝が談。理。をしりぞけぬ由、やがて漁

管見の宇宙觀、人生觀をあげつらはんこと裏はづかし

史が心におちなんには、漁史もいかでかは戰を好まん。何はともあれ、はたの迷惑、やめることゝ、まだいふべき節澤山ありし筈なれど、おれも當時、いろ／＼多用にて、かうしてゆつくりもしてをられぬ、いづれ土用の休課ごろに、またあはう、さらばぞ、とのらすと思へば、春の夜の、夢は甲斐なし紫の、雲と見つるは老木の松に、懸れる藤の波だてる、煩惱の夢は、醒めにけり／＼。

小羊子が矢ぶみ

その翌るあした、入道常見、小羊子が命によりて、敵將軍が陣中へ、一通の矢ぶみをぞ送りける。其の文にいはく

拜啓、精嚴なる御批評に對し、誣謗まじりの蕪文をもて、御答申上候條、定めし非禮なりと思し召され候ひけん。人身攻擊めく批評の流行し候當節のことなれば、純粹の論戰をも、さもなきにやう思ふ者ども、或はこれなしとも圖りがたく、又二つには、淺薄なる小生が未定の說を、もの／＼しうあげつらひ候はんを、裏はづかしく、一寸のものを一里にいひなすといはれんか、と斟酌の餘、此くは戲文をもて、答辨仕候義に、有之候。何卒、あしからず御諒察可被下候。さて小生儀は、此のたびを以て、沒理想に關する論辨は、一旦、相止め候はん存念に候へども、戲文とは申しながら、本號に於て、くさ／＼御高論に對し、

難駁致し候箇處も尠からず候へば、差出がましき愚念には候へども、正當の御防禦あらせられんこと、勿論に可有之と奉存候。先は論戰中止の御照會までに、如此に御座候。匆々頓首。

四月　日　　　　　　　　　　　　　　　坪内逍遙

鷗外森先生

硯北

！？

浪花文學會員に、天放道人といふ人あり、近刊の『浪花がた』に、「思餘偶言」と題する論文を載せたり。其の論旨を尋ぬるに、まづ今の世は、新文學の起こらんとする時代なるをいひ、次に默過し難き一事ありとて、論ずらく

今や新文學のチャンピオンの中に、動もすれば抽象的議論を尙ぶ風を生じ（中略）深邃なる哲學上の理論を持込來りて、曰はく時間、曰はく空間、曰はく理想、曰はく沒理想、曰はくヘーゲル、曰はくハルトマンと呼號し、以て文學界を攪すに至りては、先覺者の爲に相應はしからぬことならずや。文學を振作せんとして、反りて其の進路を障碍するの虞はこれなきや。

云々。又右の意味を敷衍して、哲學は、昔も今も、解からぬ事は解からずして、到底他の諸學の如く、統一に皈せざるは爭はれぬ事實なり、といひ、蛭蟻の研究に半生を費し、蜂窠の査察に一生を終ふる者さへある時節、白

首碇々、純理の推究を事とするも、亦決して不急にはあらじ。唯哲學者たらん者は、哲學的著書に於て、哲理を講ずべきのみ。

梅花の下に立ちて、其の色の目を悦ばしめ、其の香の鼻に適する所以の理を説くは、迂僻の極なり、と笑ひ、

況んや、一系統の原則を遵奉して、人もなげに百般の事物を論斷するに於てをや。況んや獨逸流の叢脞繁碎を極むる理論をば、我は顔にクダ〳〵しく排べ立つるに於てをや。

云々。又曰はく、文學者と哲學者とは、觀察點元より相同じからず、さるを、哲學上の理論を以て、文學上の生産物を律せんとするは、心得違ならずや。文學者は、必ずしも哲學者の如く、倫理の根本に溯りて、絶對の標準を求むるには及ばず、其の理想上の圓滿は、哲學上推理の結果たる、絶對的のものならずともよし、其の觀念は、論法の嚴査を經ざるものにてもよし、哲學と文學と相渉らざる事、此の如くなるに、今の文學者の中には、一にも二にも、哲學呼ばはりして、計を得たりとなし、哲學上の理論を以て、文學の發達を圖らんとするは、如何にぞや。

予は思ふ、今の文學界に須要なるは、文學の講釋にあらずして、良書の著作にあり、談客の談論にあらずして、學者の撰述にありと。予は信ず、文學者の要訣は、内外に於ける大家の傑作を熟讀するにありて、時間空間の哲理を講究するにあらず、活眼を開きて活世界を觀察するにありて、ドラマ、ポエトリーの定義を考索するにあらずと。

云々。斯くて其の結論に揚言して曰はく、バルクはいたく論理學を忌みたれ

ども、尙英國文學の大家たり、ヂッケンス、サッカレーが名聲の赫々たるは、力を著作に專にせしが故にて、嗽々美の原理を講義して、公衆を煩はしたるが故にはあらず。今の文學界、議論多くして成る事少く、幾ど議論倒れとならんず、と云々。

沒理想の由來

詩文の陣頭に幟を樹て丶、我れはシエークスピアの爲人と、その本來の面目とを、看破して餘蘊無し、と揚言せる者、その尤けくすぐれたるきはのみを數ふるも、尙彼の春秋戰國の、霸者の數にも越えつべし。さばかり數多き檄文の墨、いまだ乾きたりと見えざる間に、我れこそ眞に彼れを知り得たれ、と宣言する者、忽ちその背後より接踵してあらはる。其の狀、形而上論の起伏興廢して、遠くは印度、希臘の古へより、近くは英、佛、獨の今に至りて、尙且窮まらざるに相似たり。予は後の論者と前の論者との間に、必ずしも大なる是非の優劣ありとも斷せざれば、已に看得たりといふ古今の碩學と批評家とを、必ずしも誤れりといふことを得ず。予は只千万の異なる解釋を容れて餘融ある大宇宙と、此の大宇宙に似たるシエークスピアとを甚だ偉なりとながむるのみ。行末は知

大宇宙もシェークスピアも共に依然として大未詳なり

らず、今日までの經驗によれば、シェークスピアは造化と共に一大未詳なり、一大神秘なり。「わが摸倣しがたきシェークスピアは、嚴格なる批評家の全族が、躓きまろぶ障石なり」とは、二百年餘以前に、ジョセフ、アヂソンがいへる所なれど、此の語、着眼の點を殊にして用ふれば、今もなほ十分の力あるべし。希臘の詩式を傳へたりし、佛蘭西文學の劇律によりで、三同の則を破れるシェークスピアを非議せし、王政復古期の妄夢破れて後は、ヺルテールのみまがりて後は、我れまた、かりそめにもシェークスピアを誚りて、醉ひじれたる蠻といひし者あるを聞かず。サミユエル、ジョンソンの頑なるだに、能く時尚の歪みたる標準を脱して、是非を自然の法廳に訴へ、此の大詩人の作を、不壞金剛の巖に比してこのかた、ひとり英國のみに就きて言も、カペムル、スチーヴンス、マロン等にはじまりて、ファルネス、ハドソン等に至れる、校訂註釋の諸名家は、いふに及ばず、コールリッジ、ハズリット以下、ドウデンに至る批評家、微妙を闡明し、幽玄を發揮し、シェークスピアがありとある技倆の妙、着想の美は、殆ど指摘し得て餘蘊無からんとす。況んや、外國にもシェークスピア研究會の設けありて、佛蘭西にも、獨逸にも、英才の批評家輩出し、就中、獨逸に於ては、近くウルリチー、グルヰナス、クレイジッグ、エルデルの如

き、烱眼卓識の學者、多年經營の思を潜めて、此の小造化を闡發するに其の力を致しゝをや。　況んや、アボット、クレイクの輩、むねと彼れが辭學を修めて、文典を編み、作文規を論じ、ダイス、シュミットいでゝ、字彙を著し、クラーク、ファルチッス、チアースの徒、はた此の部門に力を添へ、彼れが用ひし機械をさへに、分析解剖して剩す所なきをや。　苟も讀書の眼ありて、前人が著を讀むに堪へたらんもの、誰れか今の時に當りて、シエークスピアが詩美を解するに苦しまんや。　かくいふだにも、「純金に鍍金し、百合の花に彩色を施す」むだごとなり。　われ淺學寡聞なれば、ハムレット文學ばかりだに、力車に幾車積みあまるといふ、シエークスピア文學の九牛の一毛をも、尙え讀まざるや勿論なり、しかはあれど、廿三年の年の暮、ふと感ずる所ありて、シエークスピアを底知らずの沼に喩へてより、少しく心を此の方に傾け、斯道の先覺が、近ごろ論じたる所を讀み、わが當初の空想の、未だ全く後れたる考にあらで、少くとも當世紀の、未定の問題の一部分たることを知りて、いさゝか慰むる所ありき。　蓋し、シエークスピアといふ小造化の現象界(即ち彼れが作の外面)を掩ひたりし幾帶の雲霧は、今や、實驗理學の前なる謬信の如くに、日に月に薄れゆきて、尠くとも其の現象界にのみ關する因果の理法は、殆ど將に爭議す

シェークスピアは如何にして大ドラマチストたるを得し

べからざるに至らんとす、此に於てや、シェークスピア研究の步武は、百尺竿頭に一轉して、批評家の烱眼は、萃然として此の小造化の形而上に及び、英拔の士、競うて彼れが爲人及びその美術的總合の由來を探らまくし、或ひは歸納の法により、或ひは演繹の式によりて、その本相を知らまくす。假にわが言葉をもて、これら批評家の心事を釋するときは、おほむね下のごとし。彼等はみづから問うていはく、ヰリアム、シェークスピアは、如何なる靈妙の神秘力ありてか、第二の造化翁たることを得し。大なる技術は、無意識にして成るといふを實事とせば、彼れが作もまた甚深不可思議なる夢想の化現にして、その來たるや幻のごとく、その去るやまた幻の如く、作家みづからも亦これを識らざりしか。あるひはまた、彼れは明かに造化の秘密を窺ひ、人間の極相を看、そを啻總合的に默會せりしのみならず、分析的にもまた領解してありしか。あるひはまた、彼れが冥識せしは所謂當代一般の理想にして、自家を解脫し、自然に超越し、複雜と具象とを棄てゝ、單純と抽象とを取るといふ、隱微幽妙のものなりしか。玄からばテーンがいへる如くカラクトルといふ言葉を以てするの外には、殆ど名狀する能はざるものか。そも〳〵また彼れが奉じたりし哲理は、ミルトンの如く高く、シルレルの如く明かに、

ギヨオテの如く大なりしか。平生、造化と人間とに對して、何等の高尙なる概念も無からんものが、筆を操るに及びては、假に太子ハムレットの如き、一種幽玄なる思索家をも描寫することを得るか。若し假にハムレットをもて、シエークスピアが平生を化現したるものなりとせば、彼れは如何にして、同じく圓滿に、同じく純眞に、フオールスタツフの如き性質をも現ずることを得たるぞ。人間を蛇蝎視するタイモンの述懷を、假に作者の感慨とせんか、浮世を一夢と悟り果て、從容として夢に遊ぶ、道士プロスペロは何ものぞ。ある時は世を憂愁の苦界とながめて、悲劇の人物と共に歎くかとすれば、ある時は娑婆ををかしき歡樂鄕と見て、喜劇の士女と共にさゞめき笑ふ。喜、怒、哀、樂、愛、惡、欲、おの〳〵其の皮をさいて、核に至り、仁に及べる、これを彼の大理想詩人が、イルペンセロソーとラレグローとの照對に比ぶるときは、彼れは假對にして、これは眞對、かなたは孤鏡の兩面のごとく、こなたは晝夜の異なるが如し。シエークスピアは霄壤の差別を描き得て、其の妙究極する所を知らず。さるにても、シエークスピアは、如何にしてかくは多樣なる詩魂を領し、コールリツジ、以下、幾多烱眼の批評家をして、千魂の詩人と呼ばしめ、万心の作家とたゝへしむるに至りしぞ。かくの如きは、ひとへに端倪す

如何にして千魄万魂の詩人たるを得し

シエークスピアの理想は斷說しがたし又斷說して正鵠を得たるものなし

べからざる無意識の結果なるか。そも〳〵また平生の見地に因緣する所あるか。一言をもてこれを掩へば、シエークスピアは何物ぞと。作の年代によりて、シエークスピアを研究する方法の行はれてより、前に擧げたる疑問のうち、已に釋けたる者も尠からず、さはれ、其の爲人は、今なほ依然としてエヂポスにあはざるスフインクスの如く然り。されば、テーンの如く、その表は歸納の論式により、その裏は演繹の推理法によりて、シエークスピアの理想を推度したるもあれば、ウルリチーの如く、ゲルヰナスの如く、すべて彼れが作の根底の理想をある一觀念に歸宿せしめたるもあり。あるはまた、近世の或一派の如く、シエークスピアの存在を疑ひて、彼れとベーコンとを異名同人たらしめんと試むるもあれば、エドワード、ドウデンのごとく、シエークスピアをして、浮世の辛酸を嘗め盡くしたる、一個の小菩薩たらしめんと欲するもあり。かれ是、これ非、おもひ〳〵の評釋、分別しやすからず。わがシエークスピアを呼びて、小造化といひ、また名づけて沒理想といふ、蓋し此の現象に因みてなり。

エドワード、ドウデンのいはく、「若しミツケルアンゼロをとらへて、これと力を角することが、摸塑術の世界に於て、批評的想像の爲し得べき至

難至艱の業なりせば、シェークスピアを然せん爲には、尙一層の忍耐と一層確なる志氣と、一層微妙なる智力とを要すべし。　ミルトン、ミッケルアンゼロ、ダンテ等の如き大理想的美術家は、傲然として、能く覆藏するにも拘らず、尙その本體を見すなり、ひとりシェークスピアは、假令理想家なりきとするも、美術上にては、他にぬきんでゝ寫實家なりき。　彼れは、ほと／＼窺ひがたきまでに、そが著作の背後にひそめり、「The secret of nature have not more gift in taciturnity」と。　これ實に、予が當初の想像よりも、更に幾十歩を進めたる評論の冒頭なり。　何となれば、ドウデンは、巨細にシェークスピアが主觀に入り、汪洋幾万言、百川の海に注ぐが如く論結して、われ能く大詩人が爲人と、その技術の由りて來たる所とを看破せりと揚言したればなり。　それはともあれ、こゝにドウデンが理想家といへるは、わが謂ふ理想家の義と相通へるに似てなほたがへり。蓋し、わが謂ふ理想家とは、或一時代に於ける、或一民族の最高の思想、最大の希望、及び最上の想像を現示する作家の義にもあらねば、必ずしも寫實家といふ語と直反對の義をも含まず、われは其の作の表面に、いちじるく作家自身をあらはし、或は其の作の人物の上に、自家が性癖の濃き陰影を見せ、或は其の作の全局に、おのれが形而上論より來たれる、因

當時予が理想といふ詞に表せしめんとせし意は畧〻此の三四年來用ひそめられたる世界觀人生觀の意に同じ、今にして思へば奇異の觀あれど當時は理想といふ詞世間にても種々の意味に用ひられたりき

緣果報の理法を示せること、譬へばバイロンの如く、ミルトンの如く、マアロウの如き作家をいへばなり。　即ちわが謂ふ理想とは、作家一個の理想にして、必ずしも當代の理想にあらざるとあり、またかならずしも作家が最美最高として崇敬すといふ意味の理想にもあらざるとあり。何となれば、わが解によるときは、世を穢土と觀ずるも、一種の理想なれば、世を樂土と觀ずるも、一種の理想なり。　人間は皆狂人なりと觀るも、理想なれば、浮世は必竟夢局なりと信ずるも、理想なり。　所詮は作家が平生の經見學識等によりて、宇宙の大事を思議し、此の世界の緣起、人間の由來、現世間の何たる、人間の何たる、此の世界を統治する勢力、人間の未來の歸宿、生死の理、靈魂、天命、鬼神、等に關して覺悟したるところあるを、多少いちじるくその作の上に現示したる、これをおしなべて理想といふなり。　今の所謂寫實家も、ある一條の學説を、その總合の基礎として、さて實相を摸倣するものとせば、われはこれを理想家の中に加へて、沒理想の中には列せざるべし。　かくいへばとて、作家を分かちて、理想、沒理想の二派に分たんといふ意にはあらず、わが謂ふ理想の、見えたるか、見えざるか、といふ點より作物を觀ば、かゝる格外の沙汰をも生ずべし、といふのみ。　例へば、シェークスピアの如きは、自然の實相(現象界)を

「底知らずの湖」の寓意

摸寫(直寫)せざる點よりいはば、世に謂ふ(むしろ審美學者の謂ふ)理想家なるべし、されど、われは、彼れを以て、沒理想の派に屬するものとす、その現象を實寫せず、また小理法を摸せざるところに、縹緲たる神韻存じて、その器の廣きこと、大海のごとく、他の衆理想を埋沒するに足ればなり。退きて按ずるに、理想(アイデアル)といふ語を、此くの如き義に用ふること、勿論、幾多審美學者が、古來用ひたる先例には、たゞ、が、へるなり、明らかに、ヘーゲルが謂ふ理想(アイデアル)と殊なれば、ハルトマンの謂ふ所とも異なるべき也、さはれ、われはいまだ他に妥當なる代詞を得ざれば、假に用ひてシエークスピアの作を評しつ。尙このことは、森鷗外君に答ふる文中にていふべし。叙してこゝに至れば、事枝葉にわたるに似たれど、わが沒理想といふ詞を、シエークスピアの作に用ふる由來を、今一層明らかにせんために、此の一二年に於ける、わが心の變遷を略叙すること、全くの贅言にもあらざるべし、そも〳〵わが沒理想といふ語を用ひはじめしは、二十四年の春のことなり。そはシエークスピアの研究に倦みはてたる小絕望の結果なりき。即ち「底知らずの湖」といふ一文章は、造化を湖に喩へ、シエークスピアを沼に喩へたるにて、わが沒理想論のはじめなりき。さて、二十四年の二月下旬に至りて、シエークスピアに關する四五の近著

を讀みしが、其のうちに、前に擧げたるドゥデンが「文學の解釋」といふことを論じたる、近業の文を見たり。彼れが古來の傑作のうち、教誨の主旨に成りたる作の外に、何の意とも、はじめは解しがたき作あり、と論じ來たれる續きに、下の文あり、原文は頗る花やかなるを、拙く譯して、そこなはんもいかゞと原のまゝをこゝに掲ぐ。

There are many great works of literature and art from which we learn little or nothing, at least consciously or in set term and phrase; but we go to them as a swimmer goes to the sea. We enter bodily, and breast the waves, and laugh and are glad, and come forth renewed and satulated with the breeze and the brine, a sharer in the free and boundless vitality of our lover, the sea. We have won health and vigour although the sea has only sung its mysterious choral song, and the waves have clapped their hands around us, nor has ocean once straitened his lips to utter a little maxim or a moral sentence. And with such writers we may be trustful and generous, and put aside the petty spiritual prudence which it is well that we should make use of when we go to one who is chiefly a teacher. Such an oceanic writer as Shakespekre or Goethe may contain within his vastness some things that belong to the rankness and garbage of the

earth; but so antiseptic is his large and free vitality. played upon by the sun and breeze, so wholsome is his invigorating saltnessthat we may dash fearlessly across the breakers, and quit his sands and shallows for a gleeful adventure in the deep.

演繹的解釋は正鵠を誤り易し

この意はわが「底知らずの湖」と稍〻同じきに似たり。さてまた、その次には、シエークスピアの作を、或一觀念、又は或抽象の論より成れるものとして解釋することの危險なる由をいひて、三四の批評家の解釋をしりぞけたる、其の言頗るわが意と投せり。もとより演繹的解釋の誤り易きとは、今に始まれることにあらねど、よし一個人としてはさもあらぬとも、社會としては、同じ過失を繰り返すと、人生の弱點なり。演繹法をもて、算數學の特權なり、と斷言せんは、固よりいひ過ぎなるべけれど、尚常人がシエークスピアといふ小造化を讀まんと試むる時に於ては、ドウデンが論もめでたきに似たり。人を狂人と假定して、人間を觀察せば、何れの處にか、その演繹の材なからん。人生を穢土と假定して、宇宙を觀察せば、何れの處にか、その演繹の材無からん。人間の數は、星の多きよりも多く、宇宙の大なるは、海の廣きよりも廣ければなり。シエークスピアは猶造化のごとし、演繹の法のみによりて釋すべからざるや、

まことにドウデンが言の如し。　これわが當時の所感なりき。　ドウデンまたいへらく「大作者の各種の著作を看破し、さてその著作の全體に及ぼし、それよりまた進みて、作者その人に及ぶ、これを批評の正當順序とす」と　この説今はめづらしからず、早うテーンも唱へたれば、サーンブーヴ、カーライル等が批評法、あるはまた十九世紀に於ける、獨逸なる名家の批評法は、大むね此の境のものなるべし。　而も、十九世紀の諸批評家の説が、靡然として同じ方角に向かふを見れば、頗る意を强うするに足るとぞ思ひし。　これと同時に、モールトンが歸納的批評の論をも讀みつ。　よりて十九世紀の批評の法は、いよ〳〵此の方角に向かひたりと思ひしかば、人身攻撃を、批評とひとしなみに思ひ、又は、瑕疵のみをあなぐり求めて譏誚するを、批評と思ひ、若しくは、褒貶することをのみ批評なりと心得たるわが幼稚なる文壇に取りては、一わたり歸納批評を紹介せんも、多少益無きにあらじとて、すなはち「梓神子」といふ戲文一篇を物して、且われを叱し、且世を諷して、思ふところをほのめかしき。されば「梓神子」に見えたる翁は、其の實逍遙に非ずしてテーン、ドウデン、モールトンなどいふ、尤も多く我れを動かしゝ新批評家を代表せる、假作的人物にして、逍遙は單に戲文を艸したる作者なりき。　さてまた、彼

の神子の媼は、明治廿四年の文學を代表したる、假作的人物にて、現代の諸名家をはじめ、未出生の英才をも含め、且は作者といふ資格にては、自家をもその中に加へたりき。　森鷗外君は、わが「小羊子の白日夢」を、險語のやうに解せられしが、もはら他人を嘲らんとて、みづから貶すといふが如き筆法は、わが屑しとせざるところなり。　廿四年以後のわが雜著は、おほむね、自問自答、自難自駁の筆に成りしものなり。

同じ年の十月、はじめて『早稻田文學』を發行するや、われシェークスピアの作『マクベス』を評註せんと企てき。　されど、今は演繹批評の誤り易きを思ふことと、更に舊日に幾倍しぬれば、わが小世界のみを見て我れ以外の世界を見ざるならひとて、わが平生用ひなれて、親しきどちの談莚にては、間々口にせしこともありし、沒理想といふ新熟語は、世の人も、已によく知りたらんやうに獨合點して、何の說明も添へずして、評註の緒言に用ひ、理窟の評判は、正鵠を得やすからず、沒理想の作を評するに、予は理窟をもてせじ、とわきまへにき。　シェークスピアを論ずるが主ならざりしは、前にもいへる如し。　蓋し、われはシェークスピアをもて、小造化と思へるが故に、わが彼れを評し得るまでには、尠くとも尙十餘年の星霜を要すべしと爲し、輕々しく口を開くことを禁めたり。　四十年か

ゝりぬといふ、ハドソンの說にすら、おかぬ思ひのあればなりけり。われおもへらく、理想見えたるか、見えざるか、といふことを主として、シェークスピアの傑作を見れば、猶造化の本相の窺ひがたきがごとく、今日に至るまでの經見の結果は、見えずと答へざるを得ざるべし、即ち沒理想なり、シェークスピアの傑作の一面が、沒理想なるとは爭ふ可からず。よりて思ふに、ドラマの作家たるもの、若しそが性情と理想とを、その作中に沒却して、容易く見えざらしむること、シェークスピアが傑作の如くならば、これを呼びて沒理想たると、シェークスピアにひとし、といふも不可なからん。沒理想のみが、ドラマの本領美をなすにあらねど、沒理想をもてわが修行時の目的となすも妨なしと。こゝに見えざらしむといふは、強ちに玄かする意にはあらず、自から玄かるをいふなり。さて此の沒理想の點より見て、われは近松とシェークスピアとをひとしなみに見做しゝが、尙近松の沒理想のシェークスピアのよりも狹からんと疑へる由のありしかば、彼れを小とし、此れを大とせり。されば、大小の別は必ずしも技倆上の沙汰ならず、さり乍ら、シェークスピアが傑作の面相(客觀的)が、偏に沒理想たるに止まらば、或は鷗外君の非難ありし如く、叙事詩は更也、沒揷評の小說、尋常の戯曲、テール、俚諺など

云ふ者も時としては沒理想と見えて、これらの諸作と、シエークスピアの傑作との異同は、形の上の異同となるか、然らざれば、ふと見たるところ異同なきものとならん。　我れはたゞその考ありければ、沒理想は美術上の技倆をいふにあらず、と緒言の中に斷り、後に鷗外君に答へたる文中にては、活きたる差別相といふ名目を設けき。　これはシエークスピアの沒理想を、最初何故かと疑ひける頃、作中の人物おの〳〵作家の性情(Idiosyncracy)を離れて活動すればなるべし、即ちハドソンの所謂 Disinterestedness (無私不偏)といふことが、彼れが作の全局を、沒理想ならしむる由縁なるべし、と思ひたるを、例の差別即平等、平等即差別の旨に思ひよせていへるなり。　こは廿三年よりも前かた、ポスチツトが『比較文學論』を讀みしときにも、思ひよれりしことにて、Individuality と Generality とを兼ね具ふるが當世紀の小說、幷に戯曲の傾向なり、といへるに因めり。即ち沒理想を他語をもて解せるに外ならず。

Shakespeare (almost alone) seems to have been a man of genius, raised above the definition of genius. "Born universal heir to all humanity," he was "as one in suffering all who suffered nothing;" with a perfect sympathy with all things, yet alike indifferent to all: who did not temper with nature, or warp her

to his own purposes; who "knew all qualities with a learned spirit," instead of judging of them by his own predirections; and was rather "a pipe for the Muse's finger to play what stop she pleased," than anxious to set up any character or pretentions of his own. His genius consisted in the faculty of transforming himself at will into whatever he chose. His originality was the power of seeing every object from the exact point of view in which others would see it. He was the Proteus of human intellect.—Hazlitt's Table Talk.

之れを要するに、活差別といふは、シェークスピアが傑作を其の作中に見えたる人物の性情より見たる客觀の評にして、活平等といへるは、その作を、理想の見えたるか、見えざるかの點より見たる客觀の評なり。活の字を加へたるは、宛然として造化の眞相に似て、個々相離れて獨行し、活動し、捕捉端倪すべからざる、神秘不可思議の妙想を具へたるところ、彼の尋常ドラマの、その作家を脱離せざる、尋常小説が、一種の理想の印象を帶べる、又は物語に見えたる人物の、事件の從隷となれるなど〻、大に異なるを示さんとてなり。　されば、斯くても尚客觀の評なり、シェークスピアの主觀は、即ち、如何にして、彼れはか〻る活造化を描き得たるか、鷗外君がいはれたる如く、個想暗中より躍りいで〻、か〻る作を作

小羊子が「白日夢」の本意

無限生涯と有限生涯

為せしか、われいまだ明かにする能はず、依然として神秘(ミステリー)なり。わが更に十餘年を期しても窮めまく思ふは、正に此の主觀なればなり。

これより先つかた、廿三年の秋、われわが「白日(ひる)の夢」の腹案をつゞりしことあり、これわが無限生涯と有限生涯との別をたてたるはじめにて、無限の生涯に對しては、欲無限なれ、とし、有限の生涯に對しては、欲有限なれ、と定めき。これら空想の辨、こゝに物すべき必要なければ、いはず、只一言いふべきは、沒理想といふことを、無限に對する方便、とせしは、こゝに基けるなり。さしもわが根底は、消極なりしからに、知らず識らず、わが心は退縮して、無底の井におちいらんとせしこと、幾たびといふ數を知らず。こぞの暮に至り、少しくわが非を覺りしかば、此の上は何事に對しても、サタンの如き無限の欲を持して、ヘルキユリーズの如き勇をふるひ、進んで百難に當たるべし、と心やゝ搖きぬる折ふし、端なくも沒理想の語義に關して、鷗外君と衝突せり。消極の夢驚きさめて、緘默の非を覺ること、一層を加へたり。すなはちわが空想を公にして、わが惡業因を斷滅すべき緒(いとぐち)を作らばやと思ひたちしが、さすがに宗々しき文章もて綴りいだすことの裏はづかしく、又二つには、これは只逍遙が一時安處の空想のみ、本來の懷疑は、毫もそが為に消長せずといふことを

シエークスピアに理想無しさは我れはじめより思はず

知らせんためにわざと小羊子といふ憑空の人物を作り、孟浪筆に任せて、破題二くだりを物せしは、すなはち彼の「白日夢」の蕪稿にして、その間に些の他念もなかりき。冷語險語ならぬはいふまでもなし。しかるに鷗外君は之れを酷しき冷刺とせり。

さるほどに、客月二十九日の夜、ゆくりなく見つる書に、未詳氏が千八百八十四年に、シエークスピアを論じたる文あり。其の本文はシエークスピアとプラトーの哲學との間に、密接の關係ある事を詳論したるものなり、其の論、奇怪に過ぎて、疑はしきくだり極めて多し。何となればシエークスピアにプラトーの哲理見えたりとばかりならば、先人も已にいへる所なれば、深く怪むに足らざれども、此の未詳氏は、やがて此の事より推論して、シエークスピアをプラトニック、フイロソフアルなりと論定せんと試みたればなり。此の著は、蓋し、かのベーコン論者の錚々たるものなるべし、其の姓名を署せざる理由は、われいまだ解する能はず。

そのはじめ、われ、シエークスピアに、偉大理想ありきと云ふことをこそ疑うたれ、理想なかりきとは、はじめより思はざれは、彼れはプラトーの説を理想として作しき、といふ論を讀みても、他の演繹的解釋を見し時と、

われに殊なる感もなく、却りて此の著者はた理窟に墮ちたるにあらずや、と疑ひつゝ讀みもてゆくに、こゝにも沒理想に通ふべき論あり。まことや、佛人なにがしが、確言に「幽玄なる發明とおぼしき思想の、ふと胸に浮かべるを養ひたてゝ、成長せさせんとするほどに、やがて其の考は、駄馬の如く用ひふるしたる、爛熟の理たることを看出だすこと間々あり」といへりける、其の議、わが上に、二重の壓力もて墮し來たりぬ。幽玄の思索すら然るを、と一たびは鼻じろみしが、私情すかさず我れを回護し、此の論にも、シエークスピアが作の一面を、總評すべき科語なし、沒理想の新熟語も、全く無用には作られざりき、といへり。さて、件の論は、たとひわが說と背馳せざる迄も、相同じからぬ點あれば〳〵あり。是れ、彼れはプラトーの理想論を本尊として、シエークスピアの主觀を論じ、われはシエークスピアが主觀を見えずとして、その客觀をのみ評したるに因緣す。

著者いはく

プラトーの說によれば、此の世界は、極めて微妙なる性質の作物なり、哲學者以外の者は、その影(幻像)を見て實體となせり。……吾人にとりては、美術と造化との間に、何の相異をも見出ださず、そのいづれにつきても、吾人は原作家の本意を領解せんことを力む。只相異なる所は、人工は有限にして、

天工は無限なり。　さりながら、更に進まん前に、プラトーが常住不易の實體を組成せるものとなし、且創作(クリエーション)の用に必須なりとなせるIdealとは、そも如何なるものをいへるにか、そを會得すべき要用あり。　もと此のIdealといふ語は通例は、何にてもあれ、空想のふと指示することゝ、又は美術家が想像することを好む所のものをいへり。　げにや、Ideal幻像(イメージ)又は顯象(フエノメノン)の第三級に於ける摸倣に關したるよりは、むしろ思想(ソート)に關したるものなれば、上の如くにいはんもよし、蓋し、Idealといふ語の嚴密なる意味は、哲學的眞理(フイロソフイカル、トルース)といふことにして、その眞理は正理論(ラシヨナリスム)の唯一(ユニチー)の底(モト)に多樣(マルチプリシチー)を包容するものなり。　さて人生の外面の性質に、最も近く近似したるもの、幷に理想(アイデアル)の力に據(よ)りて實在(エギシステンス)の最も深邃なる眞理と相合することを得べきものは、詩なり、取りわきてドラマチック、ポエトリーなり、云々。

按ずるに、こゝに見えたる理想といふ語は、鷗外君の所謂理想にはあらざるか。　わが所謂理想も、此の意にても差支なけれど、予は、シエークスピアの理想が、扱くべからざる説によりて、明證せられざる間は、沒理想の名目を取除(とりのぞ)くべき由縁を知らず、と思ふ。　さて、今日までの批評家は、いづれも皆シエークスピアの理想は、此の物に外ならず、とDead lock (死錠)を下すこと能はざるが故に、假令(よし)こゝに擧げたる著者の如くに、彼れの理想は、プラトーの理想なり、と斷言すとも、予はいまだ信ぜざるべき

權利あり、若干の證據を擧げて、シェークスピアの作には、プラトーの理想の外に、他に理想の見えたることを、論證すること、容易なりと信ずればなり。　恐らくは、鷗外君の謂ふ理想と、わが謂ふ理想とは、同名にして異義ならんか。

著者はまた、エマルソンを引きて「彼れはシェークスピアに對して、甚だ嚴重なる告發(チャージ)を呈出せり、シェークスピアは、慰鬱と娯樂との外には、そが技術によりて達すべき、何等の目的をも有(もた)ざりき、と責めたり」とて、かの『リプレゼンタチーヴ、メン』の中なる、シェークスピア論を抄出し、其の末に自家の説を加へて

いでや、かゝる告發は、彼の詩人(按、シエ種クスピア)の美術を研究する思索家たるものが、或は無意識に、或は意識して、早晩一たびは呈出すべきものなり。　嗚呼彼の人(按、シェークスピア)の身の内にありし神靈よ、その神靈は、未だ曾て、彼れが美術と相關したる、哲理的方面を有せざりしか。

と假問し、さていはく

そも彼れが美術創作に關する總合(シンセシス)の秘訣は、如何なる處にか存ぜし。　如何なる意味にてもあれ、凡そ創作といふ名を有し得べき價値あるものには、總合無きことは能はざるなり。　かく問はゞ人は答へん、これエマルソンが、特りシェークスピアに對してのみならず、ホーマル、ダンテ等に對して

も、呈出せる告發(チャージ)なりと。されど、件の責は、ダンテには全くは當たらず、彼れの作多少哲學的なればなり。

こゝに哲學的といふは、わが所謂理想的の義に近し。

さりながら、尠くともシエークスピアの場合にては、當たれりと見ゆ。論者また或はいはん、批評の學進みて此かた、シエークスピアが脚本の倫理的位置と深意とは、次第に指摘せらるゝに至りぬと。吾人は之に答へていはく、シエークスピアに於ける批評の歩武は、いよ〳〵進めば、いよいよシユレーゲルが當初の概念(即ち彼れを美術家なりとせる概念)、并に彼れの智は彼れが無意識の天才に匹敵せりしか、もしからざれば、更に優れりしならん、といふコールリツジが見解を堅うする傾きあり。シエークスピア批評の歴史は、世界の歴史に似たり、そを探鑿することいよ〳〵深ければ、そが發揮し來たるところ、いよ〳〵遂うして、いよ〳〵美し。何となれば、件の歴史の全體は、次第にシエークスピアが本相を發揮闡明し來たり、先づ外面の美よりはじめて、意味深長なる内面の結搆に及び、遂に未だ夢想せられざりし、揣摩だに及ばざりし、一層高等なる唯一(ユニチー)をも發揮し來たればなり。さてかゝる進歩は、彼の大詩人を知らんとする吾人が口實を減却するものにあらずして、却りて未來に於て同樣の進歩あるべきを約束するものなり。

いでや、シエークスピアに近づきて視ん。吾人は、彼の圓滿なる意味に於

て、神聖美術（按、宇宙）を摸倣し得たり、と斷言し得べき、好(よき)道理をもてりや。

按ずるに、「圓滿なる意味にての摸倣」とは、「第三級の摸倣」に對する、第二級の摸倣をいふなり。　鷗外君の所謂個物の實の摸造、物力の實の摸作とは、第三級の摸倣の謂なり。　第二級の摸倣とは、外形の摸倣以上をいふなり、即ち、常住不易なる先天の理を摸倣するをいふなり。　所謂神を師とし、貌を師とせざるものゝ是れなり。

吾人はシエークスピアの美術は、彼の一元二相の性質のものなり、といひ得べきか。　美術と觀念との相關、さしも深く且邃うして、その美術に關しては、吾人を唯物論者たらしむる計りに、シエークスピアは幻(まぼろし)の美に富みたり、といひ得べきか。　そも〳〵また彼れが美術は、real unreality（實にして虛なるもの）か、これによりて、吾人は常に、無言崇嚴なる冷刺にいであひ、嘲弄せらるゝことを免れず。　吾人は此の語逆理順(パラドックス)の言葉を屢々用ふることをことわらじ、何となれば、生活(ライフ)の本體は、單と復との語逆理順、有形の虛と無形の實との語逆理順たるに外ならざればなり。

原文やゝ險晦にして、譯文はた晦澁なり、讀者恐らくは意の在るところを看出だすことを難んせんか。　原文の大意は、シエークスピアの作は、實にして虛なり、かくいはば逆說の如く聞えんが、人生の本相の、虛にして實なる以上は、かくいふこと止むを得ざるなり、語逆理順的に成れる

ものが、造化の本體なり、造化の本體を評する言葉は、語逆にして理順ならざるを得ずとなり。

かくて著者は、古來の大なる英才が、此の語逆理順(パラドックス)に重きを置きたる例にとて、カーライル、ショッペンハウエル、エマルソンを引きて、さていへらく。

此の段領解せられたらば、吾人はいはんとす、若しシエースピアの美術が、造化のさひざしなみに深邃なり、とせば、そが久しく其の本體を韜晦して、衆批評家の詮索を破斥せしこと、毫も怪しむに足らず。吾人は猶未開時代の國民のごとく、絶ゑて無形の美を解することなうして、彼れが著作をば玩賞せり、甚しきに至りては、考察力無き幼年が、有形世界(按、顯象世界)を悦べるが如くにさへ、彼れが著作をもてあそべり。彼れが美術いよいよ深邃にして、吾人がその本意を意識すると、いよいよ淺く、彼れが天才はいよいよ神聖なり、云々。

著者は、云ば〱大造化に虛實の二面あることを說きて、時に單、複の二語を用ひたり。所謂虛とは、鷗外君の所謂想に適ひ、所謂實とは鷗外君の所謂實なり。蓋し、著者は、プラトーに從ひて、所謂實を顯象(幻影)とし、虛、即ち想、即ち理想をもて、造化の實體としたればなり。さてまたシエークスピアを評するには、恰も造化に於けるが如く、彼れの作にも二面あ

りとし、一面を虛(理想的)とし、一面を實(顯象的)とし、所謂虛とはプラトニツク、フイロソフイー(プラトーの哲理)と解釋せり。　鷗外君がドラマの上に用ひらるゝ理想といふ語は、此の著者がシェークスピアの作に對して用ひたると、同じ意なるか、非か。　われ實に此の點に於て、鷗外君の意を會得しかねたり。

されば、こゝにいへる、單複又は虛實の語は、わが謂ふ平等、差別とは同じからず。　予はドラマの客觀を、表裏二面より見得べきこと、一國の、單複二面より見得らるゝが如く、世界の、一地球としても、五大洲としても、見得らるゝ如くに、二樣に觀察し得べしといへるのみ。　差別相とは、著者の謂ふ實相の謂にあらねば、平等相は、勿論、虛相即ち理想の謂にあらず。鷗外君が、わが活差別を個物的なり、と評し、わが活平等を理法的なり、と評せられしは、或はわが差別、平等を、著者の謂ふ虛實の義に解せられたるにあらずや。

さて、此の著書は、一千八百八十四年の出版とすれば、今より九年以前の作なり。　シェークスピアの理想見がたしといふとは、假令大に唱へたる者なかりき、とするも、大がたの人の意識せしところならんを、かの大詩人が生國なる、英國の首府に於てすら、わづか九年前に、かゝる說を長

々しく辨ずるを許せりき、とせば、理窟の批評盛んなる明治の文壇に、沒理想の說を唱ふればとて、罪比較的に少からんか。 又二つには、わが未だシエークスピアの本體を看破し得ざるとのいひわけもたつべくや。 ニコラス、ロウが、一千七百〇九年に、始めてシエークスピア研究の緖を發いてより、英、佛、獨の諸國に、シエークスピア研究會の成りてより、シエークスピアを論じたる書の多きと、汗牛充棟も啻ならず、年を閱すると一百八十餘年、いまだ一人のシエークスピアを看破徹底せりと認められたるはなし、さすれば、わが有無の境にあるも、未だ必ずしも怪しむに足らざる也。

罵の字

諷刺家正直正太夫、曩に『國會』の紙上に、劇評家と題したる短文を掲ぐ、その中にいへらく、「幸堂得知はひたすら先入の形(かた)を說いて、俳優の手足を束り、技藝を擧げて、一の模型の內に入れんとす、未だ以て眞の劇評家といふ可からず。 竹の舍主人は、其の小說に於けると同じく、勉むべし、つゝしむべし、怠るな。たかぶるなの心學的筆法を以て、俳優の技藝よりは、寧ろ行儀を論ず、未だ以て眞の劇評家とはいふ可らず。 思軒居士は、お

何故に俄に罵の字を嫌忌するぞ

のれが嗜好の走する所をのべて、其の極圓州、梅萏に諛するのみ、未だ以て眞の劇評家といふ可からず。三木竹二は、古今の評判記をきりぬきて、體裁よく並ぶるのみ、未だ以て眞の劇評家といふ可からず。やゝ服すべきは、南新二なるも、所謂ウガチに過ぎて、却りて洒落に近く、未だ以て眞の劇評家とはなす可からず。算し來たれば、我が邦一の劇評家なし、孰れか之れを講ずる者ぞ」と。吾人前號なる「劇評界」にて、此の文を評し、正直正太夫、今の劇評家を罵りぬ、と言ひけるを、往ぬる六日の『國會』にて、正太夫わざ〳〵「早稻田文學記者に質す」といふ表牌を揭げて、詰りていはく「罵るといふ語は、不適當の評語なり、われは完全なる劇評家無しといはんため「眞の劇評家」の前後に「未だ以て」「とはいふべからず」の語を置きたり。時文評論記者は、公平の報道者、謹厚の批判者を以て居りながら、罵らざるを罵れりといふは、報道ならば怠慢失平、批判ならば粗漏失當なり」と。

答へていはく、異なるかな、君が詰問。君が諷刺家をもて目せらるゝこと、今にはじまりたることにあらず、善罵劍といふ造語は、誰が爲に作られつる。皮肉家といふ新名目は、誰が爲に、今の文壇に輸入せられし。君が人の爲に、快罵、善罵、嘲罵、諷刺、等の形容詞をもて呼ばれたること、さ

のふけふのとならんや。諷刺とは暗に罵るの謂なり。其の字のみに就ていへば、必ずしも諷諫の意あるにあらず。罵るとは、正面に刺るの謂なり。罵の字のみに就きていへば、正斥の義なり、和訓すれば、ノヽシルにて、高く叫ぶといふの義なり。たとひ罵の字を悪言と訓ずるも、人身攻撃、故意貶詆などいふ悪意なき以上は、罵る人の徳に害無し。されば刺と罵と徑庭なし。しかるに前者にあひしときには、概していの平かなりし君が、後者にあひては顰縮して、蛇蝎の如くにこれを厭ふ。そも〳〵如何なる心なるか、吾人は解する能はざるなり。

假に君が本意は、五家を罵りしにあらざりきとせよ。吾人が罵れりと評するに於て、何かあらん。吾人は猛く道破するを罵るといふなりと答へば如何。假に一歩を讓りて、罵詈の罵の字の外には、罵の義無しとせんか。吾人が罵の字を用ひたるに於て、何かあらん。何となれば、君が五家を評したる文を、諄々たる教訓の文と見るに由なく、正面より説破したれば、こを諷刺文と見るに由なく、さて又のみといふ字を疊用して、すべて一邊のみを指摘したれば、(竹のやはじめ五家、豈悉く一邊のみの動物ならんや)評といはんには、偏り過ぎたり。しからば、何といはんか、といふに、最も穩當なる解釋は、「罵りて激せしめ、さて奬勵せんと欲す

る文」是れなり。故に、吾人報道者は、其の釋を省きて、本字のみを取り、一言をもてこれを掩ひ、罵の字を用ひたるに、何の非かある。

吾人は君が罵らずと分疏するを異(あやし)とす。奬勵せんが爲に罵りたりとせむ、君の德に何の害なく、五家の名譽にも損無きをや。蓋し、君の標準が完全といふ程の大標準ならば、圓滿ならぬが人間の常なるからは、不圓滿といはれたればとて、未熟なりと罵らるればとて、五家の恥辱とし ならねばなり。案ずるに、君は「眞の劇評家にあらず」といふ言葉の裏(うら)には、僞劇評家といふ言葉あり、と思はれたるならん。げにや、不眞は僞(いつはり)なり、されど、僞君子、僞善者の僞にはあらで、不正眞の僞なり。若し君の標準が、絕對の圓滿劇評家といふにあらば、誰れか不圓滿の劇評家ならざらん。君何が故に三木氏に答へて、「然り、汝は僞なり」と斷言せざりし。さて序ながら、三木氏の駁論にも、一つ不審の廉あり。氏は何が故に、正太夫に劇評の標準を質さゞりし。其の標準をきいたる上にて、腹を立つともおそからず、若し彼れの標準が、絕對に圓滿なるものならば、未熟な腕ぢやといはれても、神ならぬ身の是非もなし。

(以上廿五年四月)

一種の批評家

讀まずして他人の論を是非する批判家

『日本評論』に、山邊好文といふ論者あり、「文學上の理想主義」と題して、其の冒頭にいへらく、文學上の事、何となく沈み勝ちに見ゆる今日に於て、幾分の火氣を帶びて、稍々活潑に見ゆるものは、理想、記實の爭論にぞある。その爭端を開けるは、坪内雄藏氏が早稻田文學に、沒理想なる議論を掲げられしを、森林太郞氏が、反駁せられたるに濫觴しけるとなん。云々。又曰はく、二氏の論ぜらるゝ所、隨分長やかなるものにて、一々細讀すべくもあらず、余は事々しくこれを評論すべき必要ありとしも覺ゑざるなり。云々。さて此の批評家は、記實の義を寫實の義に解して、娓々幾千言を費やせり。嗚呼誰れか理想、記實の爭論をなしゝ。鷗外漁史と逍遙とは、談理、記實の先後に關したる、行違ひをこそ相辨じつれ、未だ曾て理想、記實の優劣をも、先後をも、論じつることなし。記實とは「實事を記錄す」といふ義、即ち「時文評論」なる文界彙報の謂なり。評者は誤り解して寫實（リアリズム）の義とせるか。一々細讀は更也、一葉だに、彼の爭論の文を、讀まずしての批評とこそ思はるれ。『日本評論』の紙上にて、かゝる批評家にあふことゝいとめづらし。

解嘲

民友子「雖然人種」といふ題目を掲げて、是否を曖昧に附する者を叱して曰はく、「天、人に與ふるに語言を以てす、語言の中、最も深遠廣大なる意味を有する者は、是非の二語なり。之れを難ずれば、即ち否といふべき也、

之れを諾せば、是と云べき也。千狀万態、旦暮に我が前に陳ずと雖も、我れ唯此の二語を以て之れを送迎するを得。我が心未だ之れが爲に煩はざる也。是れ實に有限の身を以て、無限の人生に接するに方つて、人の心身を保護する皇天の賜也。然るに、世に小賢しき徒ありて、是否の二字、萬類の人事に應ずるに足らざるを慮りて、「然りと雖」の一語を案出して、之れを是非の間に挾さむ、此に於てか、是非忽ちに内に亂れて、好惡交々外に紛ふ。（中略）。彼等は、此の文字のため、保守黨にも、急進黨にも、一時に同意を表し、若しくは反對する也。佛教にも、基督教にも、併せて同意を表し、若しくは反對する也。（又略）。理想と沒理想と然り。自由貿易と保護貿易と然り。貴族主義と平民主義と然り。（又略）。其の狀汲々として何れの覊絆をも脫せんと欲するが如くして、躊躇徘徊、進むこと能はざれども、まゝ止まる能はず。（又略）。自ら得々として以て誇ると雖も、天下最も憐むべきものは、皇天の賜を自由に使用する能はず、撰擇の自由を失したる此の輩にあらずや」。又曰はく「近世の人、多く變通を談じ、寛容を論じ、漫に及ぶべからざる英雄の微權を學び、善を善として、爲す能はず、惡を惡として排する能はず、一生一殺、一握一放、是否を淆亂して邪惡と非行との生命を延べ、而して其の結果、友人に信ぜられ

絶對を研究するの學者はた「雖然」の語を避けざるべからざるか

文學者は當代の奴たらざるべからざるか

ず、天下に信ぜられず、一擧一動、天下に揣摩せられ、臆測せられ。（又略）。一も得る所なく、剩ます所は、慧巧多智、算あつて斷無しの小名に過ぎず。また悲しからずや」。又曰はく「錦繡の内にも醜惡を裹む、寛大利巧の名によりて、曖昧、無主義を包む、是れ也。醜墓の頭にも寶石あり、偏癖狹隘の中に、摯實堅信を藏する、是れ也。近世の雖然人種、飄舞翩々、己を天下に示し、愛嬌を八方に散じ、油斷なく隙間なし。自ら謂へらく、此の如く寛大に、此の如く利巧に擧措す、天下の事爲すべしと。而して天下之れに與せざるなり。」云々。案ずるに、民友子は、當世の通弊、就中、社交上、政治上の大病を慷慨するの餘り、かくは雖然の非を叫破し、溺者を濁浪中に拯はんとせるならん。文學者もまた然りといふ句、其の文中にありと雖も、學者、哲學者もまた然りといふ句、其の文中に見えざるによりて推すれば、民友子が所謂文學者とは、學者、哲學者と伍を同うして、絶對の研究に心を傾くるを指すよりは、當世の爲に鞠躬盡瘁する底の文學者を指していへるか、そも〳〵また、文學者は、すべて當世の爲にのみ身神を致さゞる可からずといふ意か。吾人、此の點に於ては、少しく民友子の意のある所を解するに迷ふ。それはともあれ、「理想、沒理想もまた然り」といふ句の、突如として民友子が文中に挿入せられたるは、如何な

有無は斷じがたしと斷ずるは有と斷じ無と斷ずると同じく斷也

る意か。此の沒理想の文字は、逍遙が所謂沒理想と同じものか、同じものならざるか。吾人これを知るに由なけれど、逍遙が理想の有無斷じがたしといひたるが、頗る民友子が所謂是非を斷ぜざる、利巧曖昧の徒の所爲に相觸るゝ所あるが如く、思惟せらるゝ故にや、暗に民友子が說を利器として、吾人が沒理想主義を嘲るものあり。吾人は民友子の本意は、理想と沒理想とを双つながら是なりとやうにいふものを、非とするにあるべきを信ずるものから、尙これら嘲謔者の嘲を解かんが爲に、辯を好むに似たれど、こゝに一言する所あらん。吾人は曰はんとす、若し學問の社界に於て、斷定を必せんとすれば、勢ひ獨斷に陷らざるを得ず。神秘說を奉せざる限は、尋常修行門にある學者は、絕對の眞理に對しては、概して懷疑の境にあり、スペンサルの不可知論の如きも、その一例也。大抵の經驗學派は、其の奥底に於ては、懷疑主義なるがゆゑに、彼等はた曖昧未定の境にあり。譬へば、こゝに一室あらんに、其の室の錠堅うして開くべからずとせん、人ありて此の一室中に、云々の書籍ありやと問はんに、吾人いかに答へんずらん。有といふべきか、無といふべきか。逍遙端なく此の問に撞着して、有無を斷ずる能はず、且く有無斷ずべからずと斷ぜり。逍遙が沒理想論は、無主義若しは無理想の謂に

もあらねば、是非を斷せざる論にもあらず。さて、逍遙が造化人間を研窮する時に當たりて、此の沒理想を方便とする所以は、已に云ば〳〵辨じたれば、今また繰返すべき必要なし。坐右、幸ひに民友子が近著『人物管見』あり、その序文に見えたる所を移して、逍遙が記實主義の幾分を解釋せん、

人間を知るは容易にあらず、然れども、亦た知らざる可からず。如何にして知る、孔丘の訓言に據りて、之れを知るを得べし。如何にして孔丘の訓言に據るを得むや。直覺の心意、精到深射の眼識、寛裕同感の胸懷、及び謹嚴周匝なる事實の摭拾、濶大包括なる四圍の觀察の如きは、最も必要なる資格に相違なき也、然れども、此の資格を具備したる論評家、果たして幾人かある。獨り、此の資格に於て、闕如たるのみならず、動もすれば、執一の法を以て、錯雜なる人間を律し、既成の偏見に據りて、靈變の人心を斷じ、之れに加ふるに愛憎を以てし、甚しきは、同感と反感とを以て、唯一の標準となすに到る。云々。

逍遙が沒理想を方便とすとは、絕對の研窮にも、件の批評法を用ひんとすの謂なり。當世に處するに當たりて無主義なるべしとの謂にあらず。蓋し、處世の法と學問批評の法とは、同じものにあらざるや、辨を俟たざるなり。

かくいはゞ、大早計の徒、或は誤解して、逍遙は堅信といふもの(廣き意味にて)を排斥せんとするなり、と思ふもあらんが、彼れは現今の多數の人よりも、深く堅信の必要を感ずるものにして、決して堅信を輕ずるものにあらず。 さかはあれども、妄念を誤り認めて、信仰なりとし、吾れわれをあざむき、我れをも、人をも誤らんとするが如きに至りては、逍遙は、其の是なる由を見出だすこと能はず。 信仰は遽に製作(メーキ)すべき器服の類にあらざるを確信すればなり。 大に疑ふは、大に信ぜんとする行路なり、誰れか未だ大信仰を得ざるが爲に、大に疑へるものを棄てゝ、彼の右をも見ず、左をも見ず、兩眼を掩うて直驅する、驛馬車の駑馬を取らんとするものぞ。 吾人は、尠くとも、學問の社會に於ては、かゝる unbacked colts の跳梁せざらんことを望む。 (以上廿五年五月)

大旱雲霓

『城南評論』第三號に、驅馬生が、未來の世界語を論じたる末に曰はく、嘗て英のジョン、ラボック、世界の傑作百種を集めし時、東洋の詩歌の中には、印度の Mahabharata (叙事詩) と Ramayana (同上)と、支那の詩經、等をあげ、道德經としては、孔子の『書經』と、マホメットの『コーラン』とを擧げつれど、我が

世間傑作を渴望す

日本の書籍は、其の一隅にも列せざりき、と歎き、纖巧佳麗なる文字は、已に之れあり、誰れかよく驚天動地の大文字を作りて、我が文學を碧眼紅毛に知らしめ、我が國語をして未來の世界語となさんとするものぞ、」と叫び、二十三階堂もまた『國會』紙上に、ドストエフスキーが『罪と罰』といふ小説が、翻譯せられんとする由を豫報せる序(ついで)に、或人の語をひき、日本の文界に、大著述の良譯なきことを歎き、獅子、大象、猛虎に比すべき、大著述の譯書の望ましきことをいひ、ドストエフスキーをもて獅、象に比せり、これらは著書に大象、猛獅の出來(しゆつらい)を望みかねたるあまりに、せめても、大譯書いでよかし、と呼ばふ聲ならん。　さて又『日本』の妄想子は、纖巧綺麗なる短篇小説にあきたるあまりにや、頻にリットンの美を稱し、彼れはシェークスピア、ギョオテ、馬琴の三大家に及ばずと雖も、現今の如き摸倣的文學時代の模範としては、十分なるものなり、希はくば彼れを學びて、健全善美なる小説を作れ、とて、連日この主意を陳じて、リットンが傑作數種の綱領を紹介すること、頗る懇切なり。　これはた長篇の傑作を求むる聲か。　抱一庵もまた、其の「從吾所好」第十六に於て、『人物管見』を評したる末に、「嗚呼誰れか大呼の人ありて、假令絕大の偉人ならずとも、餘りに小ならぬ、人らしき人を描きいだす小説家を喚び起こし來らんよ

しもがな」と、悲しげにかこち、竟に堪へかねてや、みづから起ちて、『國民新聞』と『經世新報』との紙上に、そが最愛と聞こえたる、ヰクトル、ユーゴーの作を譯しはじめたり。其の他『青年文學』をはじめ、幾多文學的雜誌の上にも、或は隱然、或は顯然、大作の出現を翹望せる風情、いちじるきものあり。嗚呼、今の時に當たりて、生まるゝ天才は多幸なるかな。汝は衆目凝集する底の文壇に生まるゝなれば、人に知られずして、塵に埋るゝの數奇は、万なかるべし、知らず文界の救世主、今いづこの秣槽の裡にありてか眠れる。

大作家の出現を渴望する點に於ては、吾人もまた世間の同感諸子に讓らざるべし、と信ずるものから、最も早く世に現れん英才は、吾人の所謂理想的詩人にして、沒理想的詩人、即ちシエークスピア的ドラマチストにあらざるべきを想像す。讀者よ、誤解する勿かれ、吾人は斯くいふに於て、絕えて理想的詩歌を貶証する意味を含ませたるにあらず、時勢の需要と境遇の必然とが、先づ理想家を生育せんとするの傾あるをいふのみ。皇天わが文壇に福せば、ポープ、アヂソン、スヰフト、ジヨンソン、クーパル、グレー等の後身は或は生まれん。バイロン、シエレーの面影も或は看ることを難んぜざらん。語を換へていへば、衆に先だちて當代

理想詩人の現るべき世態

の趨勢を感得し、おのれ先づ大に唱へて、世を擧げてこれに和せしめ、以て日本將來の理想の礎を作らんとする豫言者的詩人、或は此の際に現れん。已に成れる理想を發揮し、若しくは解釋し、敷衍する底の詩人は、之れを今日に望むべからず。何となれば、我が國人の理想は、今尚混沌として未分なればなり。カーライルいへらく、圓滿成就の詩人の世にいづるは、其の時代其の物が圓滿成就せる徵候なり、後幾ばくもなくして、新時代の來たるあらん、新改革者の必要あらんと。蓋し、理想圓熟して後に、そを歌ふべき大詩人のあらはるゝをいふなり。又理想已に圓滿したるが故に、月の盈ちて虧け、水の滿ちて溢れざるべからざる如く、革命一新の機の到るべきをいふなり。まことや、淸淨敎派の理想、歌はれ了りて、王政復古期の淫靡來たり、エリザ王朝の理想描かれ了りて、スチユアルト王統の神權說盛えたりき。廻國の頭陀著作堂におとづれて『八犬傳』完成するや、三百年の幕府、盛極まりて衰到り、威武當代の理想と共に搖ぎ、綱紀一變し、國情國是と共に革まりき。其れよりこのかた、歐化と國粹と、參差浮沈し、儒、佛、耶、個人、國家、紛々たる觀念、散漫膚淺の理想、正に是れ風前の柳絮、離合常なくして集散規なく、人々大かたは自我を立つるに急にして、大なる我を思ふに遑なからんとす。誰れか能く

此の間にたちて、自我を解脱して淡如たらんや。似而非解脱は望み得べきも、眞解脱は望みがたからん。逍遙、汝また夢の如き沒理想を說く勿れ。わはれ願はくは、天下の重きを荷うて、天下の爲に、わが是とする所の理想を歌ふもの、出でよ。かの大改革家を兼ねたる豫言者出でよ。かの衆に先だちて當代の理想を感得し、獨の大詩人のヱルテリズムを創唱し、佛のヺルテールが革命の木鐸となりしが如く、未だ成らざる物を作り、若しは未だ顯れざるものをあらはす者出でよかし。吾人は沒理想の大詩人を渴望すると、餓ゑたる鬼の水を求むるが如くなれども、死灰の如く活氣なき沒理想の小詩人を得んよりは、むしろ猛火の如き理想家を迎へばやと思はざるを得ず、時勢の必然に克つこと能はざるを認むればなり。且は吾人の執意脆弱にして、目前の出來事に激する所無き能はざればなり。嗚呼、未だ見れざる大詩人よ、汝若し出現せんとせば、上代のおさな名に立戻りて、再び Vates たり、maker たれ。

名著の筋書に就いて

文庫の蓄藏を、和漢兩國の書に限れりし時だにも、古今の大著述の浩瀚なるを、專門家ならぬ者の、眞に通讀せしは稀なりけらし、ましで、幾卷と

編を重ねたる詩文章の讀むにこゝろたゆまるゝ類は、表題のみことごとしう人の口にいひはやされて、本文はよくも知られず、甚しきに至りては、いみじう誤解せられたるも間々あるべし。今は我が讀書社會のもてはやす詩文章、和漢とのみ限らず、英、獨、佛をはじめ、歐洲列國の古今の大作、皆我が讀むべき料となんぬ、尋常の人、尋常の閑暇をもてして、いかでかは此等無數の大作の、片端をだに窺ふことを得ん。英國の名著のみに就きていふも、チョウサルの『カンタベリー物語』、スペンサルの『神女王』ミルトンの『失樂園』等、名のみはいと高けれど、專門家はさておく、世の多數の讀者は、未だ夢にだに讀まぬが多かり。しかるに、ともすれば、此等の諸作は、作家を是非する折の類例として、若しくは證例の尤なる者として、屢ゝ批評家の口にのぼる、原作を知らざる者にして、此等批評家の言を聞かば、果たして何等の感かある。只漠然と『神女王』『失樂園』等の大作なる由を知るのみならば、罪障深き者が天國の尊きを傳へきゝて、徒らに其の詣りがたきを歎くと一般、絕望自棄せざるを得ざるべし、又は實例を些も示さで常に抽象の誨を垂るゝ嚴師父の言をきく頑童と一般、過を悛むべき術を知らじ。或は其の道に熱心なるの餘り、此等大作を繙きて、其の一斑ほどを窺へるもあるべく、或は先輩の批評を讀

みて、その梗概を解したるものもあらめど、此等はなか〳〵に、害多くして、益尠なし。　何となれば、凡そ大著作の美は、しば〳〵其の全篇の上にありて、其の第一篇若しくは斷句片章の上に存せざればなり。　而して幾多先輩の評論は、動もすれば、其の好む所に偏し、甚しきに至りては、全く本文を曲解せるもありて、これはた信ずるに足らざればなり。　然らば、學力尙足らずして、原書を熟讀するに適せざる者、又は長篇を通讀せん餘暇無きものは、空しく時の到るを俟ち、且(しばら)く漠然の中に安んぜざるべからざるか。　吾人は思へらく、泰西に行はるゝ、且筋を語り、且作を評する一種の批評法、所謂解釋的批評法は、頗る此の需要に應ずべき者ならんと。　蓋し、解釋的批評法は、敢て巧拙を論じて沙汰褒貶せんとするものにあらねば、世の所謂批評よりは、偏頗失平の弊、割合に尠し、且や、其の批評を加ふるに當たりて、毎に本文を引證するが故に、假令解釋に誤あるも、讀者若し眼あらば、直ちに本文と相照らして、其の非をたゞすこと難からず。　彼の自家の理論にのみ泥みて、いたく本文と相離るゝ、褒貶的批評を讀まんには勝(まさ)れり。　さはれ、此の解釋も、釋者の心より生ずるからは、一歩を轉ずれば空論となり、寸毫の差(さ)は、遂に千里の差(さ)と化す、解釋的批評はた本文の正解と見做しがたし。　其の故何ぞや。　他無し、

凡そ傑れたる名作は、たとひシェークスピアの作の如く、度量濶大なる能はざるも、尠くとも二三の解釋を容るゝ餘地あればなり、且活眼ある解釋家を得ることの、いと難ければなり。

今一つの方法あり、いと拙けれど、或物(サムシング)は皆無(ナッシング)にまされば、止むことを得ずば、之れを採らん。　即ち筋書を擧ぐること是れなり。　且つ本文を畧叙し、且つ本文の要句を揭げ、幾十卷に亙れるものをば、幾十葉の間に畧叙するの法なり、彼の歌舞伎の筋書法をもて、古今の大作を紹介するなり。　之れを行ふに當たりての注意は、本文の順序を顚倒せざること、筋書する者の冗文を加へざること、人物の性質擧動、若しくは緊要なる山水臺榭等の形容は、本文を抄して其のまゝに揭ぐること、並に有名なる秀句、絕妙好辭等は、前後に釣合よきやうに揭出すること、等なり。　之れを要するに、吾人が本文を走り讀みしたりし後に、心鏡に映じたる程の趣味を、未讀者に傳へんとするなり。　是れ元よりふつゝかなる方便にして、或は間合早學問(まにあはせ)の弊を釀製するものなりなど、むづかしう論ずる人もあらんが、吾人は、專門家を對手(あひて)にして、かくいふにあらず、學力乏しく、餘暇乏しき人に向かひて、皆無に優る或物を與へんとするのみ。

此の方法によりて、紹介すべきもの、尠からざるが中にも、漢土の小說院

本の、其の名高うして其の實のよく知られざるもの、英、獨、佛、伊の大篇にして、其の實の遍くは知られざるもの等、例へば『紅樓夢』の如き『十二樓』の如き、スペンサルの『神女王』の如き、ダンテの『神聖喜劇』の如き。

而して此等筋書も、叶ふべくは、其の道に熟通せる名家の手に成らんことと願はしけれど、筋書の方法妙ならば、大手腕を煩はすとも、耻かしからざる由の、明かならざる間は、今の名家は、恐らくは、かゝる仕事を屑し、とせざるべし。吾人不肖と雖も、普通讀者の爲に、卒先して此の unenviable task に當たらん。幸ひに柳井絅齋子、先づ手はじめとして、次號より『桃花扇傳奇』の筋書を試みんとす、スペンサル、ミルトン、チョウサル等が、miniature となりてあらはるゝ日も、蓋し、遠きにあらざるべし。

角を正さんとして牛を殺す勿れ

『亞細亞』四十九號に語法といふ小題目あり、夢花生が、中古の國文を學びて、軟弱なる文章を作るものを刺り、其の末段にいへるところ、含味すべき價(あたひ)あり。其の言にいはく、現時論文を作る者にして、一意和學者の前に叩頭して、甘(あま)たるき中古の語法を模倣せんと力むる者あり、蓋し笑ふべきタハケの振舞なりと。吾人は今の論文家が、國文の法則を奉ぜんとするを、笑ふべき振舞とも思はれば、語法必ずしも文章を軟弱ならしむべしとも信ぜざれど、牛の角の曲れると

牛の病めるさ、いづれが牛のために非なるべきか、さ問ふものあらば、先づ牛の病をこそ除くべけれ、さ答ふべし。　明かにいへば、語格に多少の誤謬あるも、自然にして成れる文は、本意おのづから明瞭にして、文勢はた流暢なれご、強ちに語法に泥みて製れるは、たさひこゝかしこに正格のテニハを用ひ、三四の鄙俗語を療治し得たるも、要無きゾル、コソレの目まぐろしきさ、聞き慣れぬ活用法の數々なるさの爲に、其の文章は冗漫さなり、又軟弱さなりて、意味の在る所もおぼろげなるが多し。　彼の漢文直譯躰に長じたる人々の如きは、若し生中なる語法に泥まで、筆の行くまゝにものする時は、措辭簡淨にして用語もまた雅馴なるが例なるに、誅すさ現在にいふべきを、誅しき、誅しぬ、誅したりなご、ものするが故に、動もすれば、前後の語路いさ拙くなり、針鐵に溫飩を卷きつけたるが如き文を成す、かくて、幸ひに國文の法に叶はゞ、尙可なり、虻も蜂も取らで、徒らに文意を昏からしめんには、げに夢花生に笑はるべきなり。　吾人方今の時文界に、無要なるテニハの甚しく跳梁し、不穩なる譯訓さ動詞の耳慣れぬ活用さが、大に盛ねんさするを觀て、長を擲ちて短を取る者の多きに驚く。

不平界

人世不平多し、何の社會にか不平無からん。　然れども、假に、不平家を出だすに最も適當なる社會は何ぞさ問ふ者あらば、吾人は之れに答へて、未來の文學社會是れ也さいはざるを得ざらんさす。　蓋し、所謂詩文人は、最も想像に富める

者をいふなれど、其の所謂想像は、動もすれば、推量、臆測、揣摩、想像と並稱する所の想像に外ならざるもの多し。かのシエレーの所謂、入德の具となるべき大想像、滿天下の人と同感し、宇宙の万物と同化するの想像は、尋常の詩人文客に望むべからず。されば、世の多數の小文人、小詩客は、不斷、臆測と揣摩とを逞うし、一を觀て十を測り、十を觀て古今を想像し、不完全なる歸納と演繹とによりて、存在の大哲理を推斷す。彼等齡二十歲にして思へらく、我れ已に命を知り、天を知り、存在の哲理を知れりと。之れを彼等が理想の天地(宇宙觀)とす。彼等已に理想の天地を得たり、思へらく、我れ已に天地の理を知れり、世を渡らんこと易々たるのみと。彼等は其の所謂天地は、彼等が方寸中の小天地にして、眞の大天地とは異なるを忘る、此に於てや、實在の天地と方寸中の天地と、毎(つね)に軋轢し、毎に衝突し、失望と落膽と、憤懣と怨恨と、相接踵して至る。彼等いかでかは不平ならざるを得ん。夫れ事と意と相(あひ)たがふは、常人も平なる能はざる所、況んや、自尊傲慢にして、我が方寸の天地のみを、眞の大天地と思へる者をや。其の世を怨み、人を憤り、誤りて不健全の民となり、猜疑偏頑の人となる、止むを得ざる自然の因果か。嗚呼儘ならぬを浮世とは、俚語にもいへれど、詩人文客の理想とする所は、平常人の望む所よりも高尙なるが故に、隨うて儘ならぬことも幾層なり。例の國民子、已に其の社說に於て、今の文人詩客の前途の生活に懸念して、多少の忠言を試みにき、吾人もまた我が文界の前途に於て、新グラブ街(ストリート)を觀ることあらんかと危ぶみ、未來多數の文客に對ひて、文學を以て處世の杖となし、生活の具とすることの、甚だ失(あやま)れるを諷せざるを得ず。

機械の研究

音韻を研究し、字典を編成する、之れを創作を正的とする點より見れば、共に大詩文を作るの料のみ。詩の新律格を工風し、國文の語法を正し、辭句の雅俗妥否を論ずる、是れはた作詩作文の階梯のみ。其の他、詩文章を類別し、并びに其の究竟目的を論ずるすら、若し創作を正的としていはば、大建築の足場設けたるに過ぎざるべし。いづれも皆機械の研究なり。我が『早稲田文學』の目的もまた是れなり。世間、或は機機の研究を蔑視し、單に目覺ましき離れ業をのみ見んことを望む者あり、かゝるは、楷子を用ひずして屋頂に飛び上れ、と望む類なり。彼等が天才の離れ業を美とするやよし、其の離れ業をよろこぶの餘り、文壇を擧げてチヤリ子の天幕内に投じ、無數の怪我人を生じ、やがて無數の片輪者を作らんとするは笑ふべし。夫れ天才は龍虎の如きか、語格の習、詩律の鎖、何かあらん。假令鐵格子を幾重にし、又鐵鎖を幾條にするも、彼れ若し一躍せば、寸斷せん、若しくは身に鐵鎖幾尋を帶びたるまゝにて、龍ならば、雲表に翔り、虎ならば、深谿に嘯かん。天成の龍虎は、鎖檻の羈絆の爲に、龍虎たるの本性を失ふこと無し。天成の龍虎に害無からんか、吾人は頻に習鎖を製し、檻を作り、ますます凶猛なる犲狼、穢げなる豕、小ざかしき猿猴の放縱を制し、徐かに龍虎の出づる日を俟たん。

禿頭翁去りぬ

好機會といふ禿頭翁は逸し去りぬ。韋駄天の健脚ありとも、今はしも彼れを捕ふるに由無きなり。禿頭翁とは誰ぞ。明治維新翁是れなり。凡夫も大に激すれば、間々數曖問の抒情詩人となる。一家庭に於てだに、尚然り、況んや國を擧げて激昂動搖したる時をや。大革命期には國人皆抒情詩的太氣中に狂奔す、此の時に當たりて大抒情詩出でずば、何れの時にか大抒情詩いでん。明治維新の動亂は、勤王佐幕といふ大題下に、幾多の抒情的人物を現ぜしが、而かも一篇の大抒情詩をだに遺さずして去りぬ。而して政治上の波瀾、漸く鎭定し、文壇の秩序紊亂せしや、歐文海嘯の如く、山嶽を突崩して至り、國文、漢文、殘壞し、顚覆し、濁浪中空に漲りにき。小蛇、若し黑雲を得て、龍と化すべくば、野狐若し狂浪に乘じて天に昇るべくば、天才ならざる小詩人も、此の際小天才と化すべかりし也。何となれば檻鎖の束縛は、決して天才を俗了せずと雖も、大紊亂の風雲は間々俗子をも驅りて詩人となし、小才をも驅りて大才となすの一種の妙作用を現ずればなり。吾人は明治廿五年の文界太平に遭遇して、機械研究の盛大とならんとする光景を見て、秩序の整頓を賀すると同時に、前後二回の好機會が、竟に天才を生まずして、天外遠き處に、フェアヷエルの餘韻を殘したるを憾む。嗚呼我が Storm-and-strain Period は、一のギヨオテをも、一のシルレルをも、一のレッシングをも生まずして去りしか。そも〳〵また『群盜』と『エルテル』と、大批評とシエークスピア熱とは、廿五年の後に來たるか。

（以上六、七、八月）

字義と辭理との奴たる勿れ

述義評釋

工人が、道具の用法を弟子に教へ、且作物の巧拙を語るは、學者が字義を釋し、辭理を論ずると同じ理にて、其の道の枝折を與ふるに過ぎず。　大學、中學にての授業はた同樣の發端のみ。　三年若しくは四五年の課程、いづくんぞ眞成の學者を作るに堪へん。　まして僅々數十冊の講說死記をや。　たとひ悉く之れを諳んずとも、造化といふ大活書と、人間といふ大活書とを讀破するに當たりて、殆ど何の裨益をもなさゞるべし。必竟、述義評釋の類ひは、僅に發端の具たるのみ、長久（とこしなへ）に述義評釋にたよらんとするは、長久（とこしなへ）に字義の奴隸となり、辭理の奴隸となりて、前人の糟粕を啜らんとするにひとしく、害多くして益尠し。　山口已につまびらかならば、また枝折を賴むこと勿れ、勇を皷して獨步せよ。　峻嶺の頂（いたゞき）は、諸子が登高の頂（いたゞき）にあらず、無邊無際の蒼空、諸子、その彌ゝ高くして、更に高きを知らば、竟に獨翔の必要あるを知らん。　古語に曰はく、讀書百遍にして義おのづから通ずと、此の言葉或は訛傳ならん、然れども、多少の眞理を含まざるにあらず。　屑々たる註脚によらざるも、精讀幾回にして大原に透徹すること、或はこれあり。　はじめは極めて解し難しとい

ふとも、力を用ふること久しくば、一旦豁然として貫通するものなからんや、何時まで註釋の煩瑣なるものを賴むべき。　書を讀まば須からく本文を將りて熟讀し、字々を咀嚼して味ひ有らしむべし。　理會し得ざる處は深思せよ、之れを思うて得ず、さて後に註脚を將りて看れば、始めて益あり、人の饑ゑて後に食ひ、渴きて後に飲むが如く、方に味ひあり、饑えず、渴かざるに、强ひて飮食せば、甚だ無味なり、と先哲の敎へしも、訓詁註釋の賴むべからざるをいへるなり。　同じ人また曰はく、凡そ文字を看て、熟讀精思、正文の邊に久しうすれば、自ら細字註解の露出し來たるあらん、此れ方に自家得力の處、只外面註解上に影子話を尋ねば、終に事を濟さずと、これはた同じ理をいへるなり。　多く古人の語を引用せんは、浮誇の誹も如何なれど、我がほのかに思ひ得たる處、彼れの明に道破したる處、故ちに蕪辭を陳ぬるに忍びんや。　博士ジョンソンの、沙翁研究の法を說くや、曰はく、未だ沙翁の力量を知らずして、脚本の面白味を知らんと望む者あらば、日々彼れが作を將りて、第一齣より最後の齣まで、全く註脚を放擲して玩讀せよ、其の興に入るや、訂正若しくは解釋に心を留むる勿れ、又註釋家の名をだに思ふ勿れ。　明晰なる條も、含糊なる條も、正しきも、誤れるも、管せずして讀過し、一意科白の領會と、脚色の

玩味とを持せよ。　さて、好奇の快止みたらん後、始めて解釋の精密を企圖し、註釋家の所說を讀めと。

之れを要するに、述義解釋は、讀書の志を與さしむる發端の媒介にして、評論と批判とは、讀書の與趣を誘致すべき入門の方便なり。　若し此の二點の外に於て、述義評釋の功用を求めんとせば、得る所は乏しくして、失ふ所は大ならん。　吾人が、次第に釋義評釋の欄を縮小せんと企つるは、此の故のみ、敢て悉く釋義評釋を廢止せんといふにはあらず、一層裨益多き方法を發見せば、そを以てこれに代へ、漸次に改善の途を進め、我が『早稻田文學』が本來の志望を貫通せんと期するのみ。　我が『早稻田文學』が、如何に尋常の講義錄と異なりて、每篇皆名家のみづから記錄する所に係り、彼の敎場筆記の粗漏杜撰なるものと同じからざるかを覺り、此等諸名家が、如何に筆硯に多忙なるか、又此等釋義講述等が、如何に經營慘憺の跡を見せたる精錬の作なるか、其の論旨といひ、其の行文といひ、其の解釋の繁簡宜しきを得たるといひ、其の初學者を訓へんの心の溢れたるといひ、都て世の商賣主義を脫し得て餘あるを知り、且吾人が翼々として、細心編輯に從事せる老婆心切の實なるを知らば、是れ能く『早稻田文學』を知るものと言はん。　刷新の發端に於て、いさゝか吾人が

發端の媒介

入門の枝折

志をいふ。

名著梗概と名著解題

吾人の所謂刷新は、形骸の上にあらずして、精神の上にあり。本號の躰裁の、從來のに大差無きを見て、刷新の實無しといふ者あらば、吾人は其の大早計なるを笑はんのみ。且や名著梗概、名著解題等の如きも、僅に刷新方案の一斑たるに過ぎず。『早稻田文學』は、永久に講說死記の倉庫たるに止まるものにあらねば、筋書（エピトーム）の窖（あなぐら）たるに甘んずるものにあらず。喩へば猶體操の法を幼童に敎ふるもの丶ごとし、双手を運動するの法を敎へ了はらば、双脚を運動するの法を敎へ、双脚双手、己に其の活動の法に熟せば、頭を搖かし、體を屈伸し、或は疾走し、或は逆行し、此の五尺の軀を自在に進退するの法を敎へんとす。而して、若し叶ふべくば、古今の諸名家の說を祖として、一片の靈火を世間に傳へ、明治將來の活文學に、多少の利益を及ぼさんと、是れ吾人がみづから揣らざる願なり。此の故に、吾人は常に改進して止まざらんと欲す、改新又改新、是れ吾人が期する所、何となれば、改新を以て改新に繼ぐは、漸進の法に外ならざればなり。吾人の守る所の一なるを知らば、條理の幾改新に貫透するを

知るに難からざるべし。

吾人が梗概と解題とを加へたるには、明なる理由あり。梗概の用は、前にもいひしが、今改めて略説せん。夫れ梗概の用は、ひとり未讀者を益するに止まらず、已讀者の爲にも用あり。古人曰はく、少時閲書、一二張、猶昏然として記せざるごとし、壯年閲書、數十張、竟に皆能く其の大畧を記す。他無し、少時は解する能はず、故に記する能はず、壯年能く解す、記する所以なりと。此言經歷より出て拒むべからず。試みに『失樂園』若しくは『神女王』を例とせよ、之れを通讀せしものは尠かるべしと雖も、其の一二卷を讀過せしものは、或は多からん、然れども、彼等に向かひて、其の筋の大概を語れ、といはゞ、能く梗概を叙し得る者、恐らくは指屈に過ぎざるべし。彼等が讀みき、といふ、虛ならんや、能く解せざりしが故に、能く記せざるのみ。これらの人々に取りては、名著梗概の功用、尠くとも、山河を漫涉して後に、地圖を開き看るがごときものあるべし。或は能く解し得たりとするも、人皆生れながらにして強記なるにあらねば、記憶に便なるものを用ひざるべしや。ロージャル、アスカムが「已に學基の成りたる者にして、他人の著書を讀む、之れを永く記せんが爲に、撮要を作る、裨益多し」といへるは、此の理なり。吾人の幼稚なりしや、劇場

解題の用

の前に佇立して、粗なる鳥居風の畫招牌を觀しに、淨旦の云爲、髣髴として眼にありき、梗概を讀む者、はた此の感無からんや。若しこれが爲に誘はれて、釋義の木戸を過ぎて、親ら詩文の棧敷に上り、神を以て神を賞するに至らんか、梗概の効用こゝに至りて極まるといふべし。若し夫れ單に早學問の料に供して止まんとする者は、吾人の本意を察せざる者なり、

解題の用もまた梗概のに大差無し。彼れを劇場の畫招牌に喩へば、此れは新聞紙の廣告にも喩ふべし。良藥の廣告を讀みて、病を癒せんとする者は、共に語るに足らず。吾人は扁鵲が藥籠を倒にし、ヒッポクラチスが帳中の秘を探り、神丹靈藥の名と其の處方の大要とを報ずるのみ、調製と服用とは、諸子みづから之れを爲せ。

滑稽家

明治の天地は、笑ふべきこと尠うして、悲むべきこと、ひとり多きか。何ぞ黄表紙、以下、三馬、一九の時代に似ざることの甚しき。最初は滑稽と諷諧とを以てあらはれたりし作者も、次第に言葉を片附けて、眞地目なる理窟にひそみ去りぬ。悲極まりて喜來たるといふか。然らば明治

の天地は、未だ悲哀の足らざるか。ユーモアとパソスとは、人情の兩輪なり、其の一を欠ける片輪車、豈明治の文園に行るに足らんや。ベン出でゝウィルの悲惨劇ありき、我がモリエールの出でなん時、或は我がラシーンの上場を覩んか、笑に長じたる者は、大に笑へ、泣蟲の傳染にちゞむ勿れ。笑はば則ち大宇宙を笑倒せよ、然らざれば、現實と人間とを脱離して笑へ。

竹のやの諷刺、幸堂の滑稽、南の詼謔、正太夫の冷嘲、いづれも獨得の風趣あり。皮相を評せんか、竹のやはちやかすが如く、正太夫は訐くが如く、幸堂は胴樂、南は洒落、竹のやは澁味あり、南に酸味あり、正太夫に苦味あり、何の味とも無くて味あるは幸堂が黄表紙ぶりの滑稽か。竹のやの諷刺は婉曲、正太夫の冷嘲は直截、幸堂と南とに至りては、強ち諷刺に拘らぬ所に俳諧あり、好笑の趣味は時としては前二家を凌ぐ。若し恍焉として人間を忘れしむる無心無爲を滑稽(好笑)の體とせば、幸堂、南の詼謔、或は期せずして此旨に合ふものあらん。さて、此の四家の外に、尚一人の滑稽俳諧の人あり、紅葉山人、是れなり。

紅葉山人が諷刺の本事は、吾人之れを『我樂多文庫』時代に些影を認めたりし外には、『都の花』なる「二人女房」に於て、見たりしのみ。其の技倆の如

紅葉山人

何に優なるか、未だ詳悉する能はずと雖も、吾人が見る所、大なる誤なくば、東西の美を折衷せる小說家、戲曲家として、明治の文壇にユーモリストの名を擅にせんもの、此の作家の外にあらざるべし。「二人女房」のみによりて窺ふも、客觀的記叙の簡にして能く盡くしたる、諷刺に皮肉の原素尠うして、愛嬌のこぼれざる、無邪氣なる戲謔の、毎(つね)に人情に纏綿したる、ユーモリストたるに合はんとす。 殊に滑稽の筆の輕妙なる、時としては落語めく嫌なきにあらねど、尠くとも小さん、圓遊、以上の口吻、モリエールが滑稽の間々落語めくを咎めずば、豈ひとり此の作者の筆のみを咎めんや。 吾人は前の四家に、紅葉山人を加へて、今の文壇の五滑稽家と稱し、新しき天才の生まれざる限は、明治のスキフト、サッカレー、デッケンス、ヺルテール、モリエールの徒は、或は此の五家が未來の作中より現るべしと豫言し、且その云からんとを希望せんとす。

モリエールの面影（夏小袖）

春陽堂の發梓に係る、作者知らずの『夏小袖』は、「ラワール」の翻案なり。 翻案者みづから、森盈流の名と、表紙に見せたるモリエールの肖貌(にかほ)とによりて、此の意を示したり。 翻し得て殆ど自作の如く、滑稽といひ、文辭と

いひ、妙々、其の文の輕妙は殆ど原作者の文致に近づかんとす。　讀者恕したまへ、吾人未だ原作を、原文によりて、讀みたること無し、原作者の文章の如何に輕妙なるか、吾人これを品すべき口無かりき。　只英譯の「マイザル」に比べて、少しく鄙びたるとの外には、『夏小袖』の決して劣らざる由を言はんとせしのみ。　かく粗匆なる失言を記せんとするまでに、吾人は此の作に感心せり、竹のや主人が口を極めて、『朝日』の紙上にて、此の作を稱へざりしならば、吾人は尙ほむべきこと多かりしが、本書の知己既に在り、吾人生中に蛇足を加へて、白百合に白粉を塗り、徒に此の書の敵を釀すことをせんや。　さるにても此の翻案は、たゞ遊戲三昧の假面舞ぞ、吾人眼昏うして、觀破する能はざるを憾む。

吾人がはじめてモリエールの喜劇を讀みし時には、思へらく、是れ上がたのニワカの發達せるものなりと。　玩讀六七種に及ぶところまでは、彼の粗放大膽なる詼諧の裏に、銳利深刻なる諷刺の貫通することを察らざりき。　是れ一つには英譯の然らしむる所にして、一つには吾人の目がエリザ時代の喜劇に慣れて、先入の僻見を脫せざりし故なり。　夫の沙翁の喜劇を作るや、槪して性格の裏に滑稽を寓し、或一二作を除く外は、必ずしも錯誤失策、事の齟齬等を骨子とせず、又或一性癖若しくは或

モリエールとシエークスピア

一煩惱を將りて一篇の骨髓としたることと無し。又場所の一致と時間の一致とを守ることと、無し。就中、中年以後の喜劇の如きは、佛の喜劇家の作に比ぶれば、殆ど別世界の觀あり。若し「守錢奴」「女學者」「俄紳士」などを喜劇といはば、「マルチヤント、オブ、ヱニス」「アズ、ユー、ライキ、イツト」などは、むしろ悲喜交雜の劇なりといふべし。吾人は英佛二大家の作を輕々しく軒輊せんと試みるものにあらず、假令我が理性は、茫々たる自然に似たる、英詩人の作を優れり、と言はんとするも、我が好笑の美を愛する情は、縱橫自在なる佛詩人が諷刺に感歎し、滑稽に絕倒し、かゝる喜劇の一大清流が我が文界に瀉ぎ入りて、腐爛を洗滌せん日の愉快を想はざるを得ず。吾人が歡呼して『夏小袖』の新裁を迎ふる所以こゝにあり。名文を攫取せんとする貪婪は、吾人豈アルパゴンに讓らんや。

「ラヴール」と『夏小袖』

『夏小袖』と「ラヴール」とを對照するに、(吾人今原作の英譯をだに机邊に有せざれば、精密に對照するに由無けれど)、同じきは大體の筋と滑稽の要處とのみ。筋も『夏小袖』のかたは、幾段か單純に成りて、ワレール(和七)の父アンセルムの事などは、全く削られたり。金を盜まれて後の狼狽も『夏小袖』にては、極めて淡泊なり。原作にては、アルパゴンの性質、甚だ明著にして、其の猜疑心の深き處も、其の欲の爲に人情を棄却し、我が子を

も、家人をも、皆盜賊のやうに疑ふさまも、幾倍か鋭く現れたりと記(おぼ)ゆれど、此の飜案にては落語めきたり。　又今一つ異なる所を言へば、原作にては、間違ひ、思ひ違ひ、失言、失策の相接踵するにも係らず、人物一層上品にして、且皆眞面目なりと見えたり、尠くとも、當人だけは生眞面目(きまじめ)、又は一生懸命の趣ありと見ゆ、爲にをかしさも一しほ、と感じたりしが、此の『夏小袖』に見えたる人物は、むしろ落語中の人物に似て、德之助の如きは、圓遊、小さん等が得意の若旦那にして、阿そめ、佐助なども亦た其の傾あるを免れず。　若し『夏小袖』の瑕を求めば、尤も大なる無念はこゝにあるか。　案ずるに、德之助、阿そめのクレアント、エリスに異なるは、一つは風俗の殊なると、一つは戀とだにいへば、肉欲の事と解釋する、我が習慣(ならはし)の故障ありて、勢ひ止むを得ざるに出でたるなるべく、此の二人物を眞面目ならぬやうに寫したるも、そこらに方寸のありてなるべし。(以上九月)

小說に於ける二勢力

本篇は『フォーラム』に見えたる、メレー、カッチングが所論なれども、面白き節尠からねば、抄譯して此の欄にをさめたり。　枝葉には肯首(うなづ)きがたきところもあれど、大要に吾人が意と衝突

すべしとも思はざればなり。

超自然說(スーペルナチユラリズム)と心理說(サイコロジー)とは、小說に於ける二種の活動力なり。所謂自然說とは、ウースタル(字彙家)の釋によれば、「宇宙に物理的原因(フイジカル・コーゼス)以上の者ありて活動せりといふ說」にして、小說に應用したる時には、或種類の結果を超自然力の直接又は特殊の作用に歸することを謂ふ。　さて又心理說とは、同じ人の釋によれば、「肉體より分別せられたる、人心(マインド)又靈魂(ソール)に關する學說」なり。　さて小說に心理說を用ふるとは、人心又靈魂に關する或學說を採りて、重きを件の學說に置き、讀者をして專ら之れに留意せしめんとするを謂ふ。　夫の脚色、人物、人生の哲理、人生の倫理、等の、或特殊なる矯正に裨益し、若しくは性質の硏究を表示するが如きは、必ずしも重要とせざるものなり。　勿論、こは、或少數の小說にのみ限りていふを得べきものなり、何となれば、多數の小說大家は、おほむね其の人性を描出するに當たりては、又は之れを評し、之れを論ずるに當たりては、心理學說に因らざること稀なるものから、靈魂に關する學說のみを採りて、之を大爭鬪、大趣味の本領としたるものは鮮ければなり。

先づ超自然說より說かんに、嘗てデ、クインシーが「智は人の心の最劣等なる能力にして毫も信を置くに足らず、事物を觀察するに當たりて、吾

スコットと超自法説

人を指導し、吾人の心を強迫するもの、別に之れあり」と言へる如く、吾人は間々或不可思議力の存在を信ぜざらんとするも、信ぜざるを得ざることあり。　蓋し、常人と雖も、通常の物理に照らして明證し得らるべき事を、不可思議と見做すをば、痴妄とすれども、人智を以てして、如何ともすべからざる、一種止みがたき本能に至りては、吾人は之れを高尚なる能力の一種と做し、詩人の創才、宗徒の信仰に伍せしめんとす。　智力の日に月に進みて、妄信を破壊し、冷かなる常識の直覺を斥けんとするにも係らず、彼の超自然的不可思議作用を信ずるの本能は、到底抑止する能はざるが如き觀あり。

超自然説を利用したる小説家の代表者は、ヲルタル、スコットとシャアロット、ブロンテとなり。　スコットは屢々神秘教、魔史、等に因りて、妖術使ひ、妖婦、幽靈、いづな使ひ、等を作りいだし、巧に吾人が超自然力を信ずる本能に訴ふることを得意とせり。Peveril of the Peak, The Bride of Lammermoor 又は The Talisman などを讀みたる者は、容易く其の明證を想起すべし。さはれスコットは、其の初め超自然と見えたりしものも、實は自然の物なりとやうに、早晩後に至りて説明する癖あり。　彼れが超自然を愛する念は、判別を愛する念よりも劣りきと見えたり。　シャアロット、ブロン

テに至りては然らず。彼れに取りては、前兆、夢、幻影をはじめとして、反響する足音、颯々の風聲に至るまでも、皆活きたる力なり。彼れ、故に曰はく「我等が知る所によれば、所謂徴候(サイン)は、自然が人間に示す同情に外ならず」と。誠に彼れが傑作"Jane Eyre"を觀よ、橡の木が電光の爲に裂かれたりしは、ロチエスタルとジエーンとが不幸の前表にして、ジエーンが其の結婚の前に、夜な〳〵夢に嬰兒の泣聲を聞きたりしは、將に來たらんとする災厄の豫兆なり。其の他此の二人の居る處は、互ひに數里を隔てたりしにも係らず、ロチエスタルが「ジエーンよ、ジエーンよ」と呼びし聲は、不思議にも「やがてまゐり侍らんに、待ち玉ひてよ」といふジエーンが答に呼應せりき。要するに、ブロンテは、眞に超自然の作用を信じたりしならん。吾人ば、スコットの詩歌的想像を美とすると同時に、ブロンテが想像の強く鋭きを稱せざるを得ず。

心理說の、一勢力となりて、小說にあらはれしは、近年の事なり。佛人テーン嘗て「小說家とは何ぞや」と自問して、自答すらく、「予が說によれば、小說家とは、自然に、無意に、心理說を活用する一箇の心理家たるに過ぎず。彼れは內部の傾向と品性とより成れる、不可見の世界を、外部の言語と行爲とより成れる、可見の世界によりて表現せんと力む」と。さはれ、心

理說を小說に用ふる方法に、尙特殊なるものあり、即ち人心又靈魂に關する或特殊の法、又は理を採りて、之れを小說の根底、即ち中心點となすものは是れなり。　斯かる小說は人物の經歷、行爲、等に重きを置かずして、寧ろ學理、學說に重きを置くなり。　佛人は科學思想に深く、分析解剖に巧なれども、割合にかゝる意味の心理小說には富まず。　ヂウマの小說は繪畫的、歷史的、演劇的、バルザックのは社交的、智力的、哲理的、ジョルジサーンのは戀愛的、ドーデーのは寫眞的たるに止まれり。　テーンは曰ふ、英國の小說家は諷刺と敎訓とを挿入するを例とす、是れ英の小說に心理の失はれたる所以なりと。　吾人は曰はんとす、佛人は餘りに技術に耽れるが爲に、其の小說に心理失はれたりと。　若し英國小說壇の心理家が敎訓家(モーラリスト)となりて消失したり、とせば、佛國のは技術家(アーチスト)となりて消失せり、ともいふべし、　前者を說法する者とせば、後者を彩(いろど)る者といはん。　然れども、夫の近世の大家、キクトル、ユーゴーの傑作『レミゼラブル』の若きは、上に謂ふ所の、狹意に於ける心理說を中心とせる好著述なり。此の駭くべき大結構の骨髓は、良心の殘忍なる專制を表示するにあり。凡そ人間の良心を暴露して、見るべく、觸るべきが如く明著ならしめたるもの、彼の The tempest of the brain と Immortal Jeeur との二章に優りたる

ヂッケンス、サッカレー、エリオット

は無かるべし。彼のジャン、ヴルジャンの精神が、一たび牧師ミリエルに導かれて、赫耀たる良心の光明に照らさるゝや、一身の安寧と美德との間に磨消すべからざる爭鬪を牽き起こし、終には道の爲に倒れて後止むに至る、其の間の慘劇の名狀すべからざるに比ぶれば、ヲートルルーの慘劇も、言ふに足らず、ましてや、他の小煩惱の紛糾、政治上の擾亂、父子の衝突等をや。

英國の小說家の中にてはジョールジ、エリオットをこそ、最も心理的解剖と批判とに於て、卓出せるものといふべけれ。チャールス、ヂッケンスは、想像的、美術的、情熱的、矯正的なり。彼れは熱誠者(エンシヤシヤスト)也、心理家といはんよりは、むしろ美術家といふべきものなり。サッカレーは分析的、精緻的、諷刺的にして寫實家なり、心理家と言はんよりは、むしろ諷刺家と稱すべきものなり。而してジオルジ、エリオットは心理家なり、彼れはドラマ的、寫實的にして、每に深遠に倫理的なり。或慧敏なる批評家は、彼れを評して曰はく

心理的分析は、彼れの力(ストレングス)とし喜(ジヨイ)とする所なり。彼れや人物を創作し、事件を工風し、位置を案出す、蓋し、重に其の特有たる、殆ど超人間的能力を縱にすべき機會を得んが爲のみ。特有の能力とは、現に活動せる活人間の意識を分析して、其の顯微鏡的究竟秘藍をさへに暴露し來たる力是れ也。

と、されば、平常彼れが心理說を用ふるや、解釋と批判との爲にせるのみ。著く心理說を用ひたる作といふは、其の夥多の作中に於て、只僅に二篇あるのみ、Middlemarch と Romola となり。『ミッドルマーチ』に於てすらも、提出せられたる心理說(即ち秘密なる罪業には腐蝕力ありといふ事)も全篇を蔽ふものといはんよりは、寧ろ隨時偶然のものといふべし。 吾人が彼の書を讀むに當たりて、吾人が興のひとり Bulstrode が胸中に蟠れる虛言、即ち着々彼れの本善を腐蝕して、終に彼れをして不義卑劣信憑すべからざる小人とならしめたる虛言にのみ集まらざるや明なり。然れども、夫のロモラに於ては、心靈に關する一種定確なる法則、歷々として現前せり、罪業の一たび發しては、累積して其の極に近づかんとする力あることと、善く見えたり。 任他、要するに、エリオットの小說には、心理的分析ありて、未だ心理說其の物あるを見ざるなり。 轉じて米國近世の名家、ナサニエル、ホウソオンの小說を見れば、爰にはじめて心理家と心理說とを見ることを得。 彼れの小說は、人心の機械學なり、所謂脚色は殆ど無からんとす。 夫の The Marble Fawn の如き、掩ひかゝれる隱秘はあれども、絕えて迷殿的脚色はあらず、又彼の The Scarlet Leter に於ては、全篇の筋、その第一章に於て見れたり。 要するに、ホウソオンは、外

を主とせずして內を主とせり、心靈の法則を活寫することを眼目とせり、隨ひて、彼れが描く所の人物は、肉と血とより成れるものと言はんよりは、むしろ傾向の化現といふべし。彼等は、人の如くならずして、影の如し。さはれ、尙存在せるなり、吾人は彼等を見、彼等を知り、吾人が內心の髣髴として幽靈の如くに現前し來たるを認む。換言すれば、吾人は彼れの作に於て、或法則によりて督制せられたる人心の秘密藏を見る、而して件の法則たるや、吾人の意識が、吾人に證して、吾人が心靈を統制する法則に相違なし、と認むる所のものなり。

ホウソオンの心理小說、何れはあれど、就中、The House of the Seven Gables の痛ましき遺傳の理法を明に寫しいだしたる、The Scarlet Letter の後悔はしながらも、尙押藏したる罪業の、如何に心身を蝕するか、といふ事を中心の理法として、矯飾の如何に怖るべき墮落を釀すかを明かに寫したるなど、共に心靈の法則を寫破して餘蘊なきものなり。殊に、最も心理的といふべきは、The Marble Fawn なるべし。彼れは、此の小說に於ては、人間の心靈に關する理論を提出したれども、竟に其の解を與へざれば、此の作はむしろ心理的問題とも稱すべし。罪惡は道義の師なりや否や、最高の美德は、善惡の事に接觸して、彼等の性質を知るに因りて、釀

成せらるべしや否や、是れホウソオンが提出する所の問題にして、讀者の心をして、毎に此の中心に向かはしめ、此の點に於て興を覺えしむ。すなはちホウソオンが小說には、常に心靈に關する根本的理法の現示せられたるを見るなり。

スチヴンソンとベラミー

ホウソオンと同じ派に屬すと思はるゝ、近年の名家は、Robert Louis Stevenson と Edward Bellamy となり、前者の "Dr. Jekyll and Mr. Hyde" を著すや、所謂「人間の普遍的兼原始的二元」を以て、心靈の定說となし、之れを中心として、其の悲慘なる物語を編み出だせり。彼れは此の二元說を名けて、宗教の根底に存する、人生の苛酷なる理法にして、困厄の最豐富なる源泉の隨一なり、と言へり。Henry Jekyll は、此の理法を打破せんと決心し、善惡の兩原素を分離し、兩者をしておの〳〵獨立の成立を得しめ、其の一には、最も高上なる望を與へ、他の一には、最も無制限の放縱を與へんと欲す。蓋し彼れは斯くの如くにして、人間意識の戰場に於ける、件の相背馳する二勢力の爭鬪を止めんと思へるなり。此の計畫を實行せんと試る事を語るに及びて、此の駭くべき物語は、純正心理學の領内に衝入せり、隨うて、全篇の結構も、物語の組織も、すべて具象的とならずして抽象的となれり。

人生を見ずして心靈を見る

ベラミーの諸作に至りても、其の長所の心理にあると同時に、短所もまた之れに伴へり。 Miss Ludington's Sister といひ、Dr. Heidenhoff's Process といひ、Looking Backward といふ、いづれも心靈の研究に近くして、人生の活畫にはあらず。 讀了して思念すれば、 mind を考察しつる感はあれども、 matter を觀察しつる感は無く、人生を見たりき、といはんよりは、むしろ心靈を見たりき、といはざるを得ざる感あり。

因之觀是、超自然說と心理說とは、小說に於ける二種の異力（ヂスチンクトパワア）たり。 此の二者、必ずしも直反對にあらず、といふとも、心の相背ける能力に訴ふるものたるや、事實なり。 超自然說は、想像力に訴ふべきもの、心理說は、分別力に訴ふべきもの、前者は吾人が妄信の本能に、後者は吾人が内心の意識に訴ふべきもの。 超自然說は人を樂ませ、人を籠絡し、心理說は人を困惑せしめ、人を刺衝す、前者は舊派の小說に屬し、後者は新派の小說に屬す。 そも何れか最も有益なる勢力ぞ。

彼の文學の大王(シエークスピア)は、其が寶庫の裏より、新舊二種の材を採りにき。 吾人の『マクベス』を讀むや、超自然力の怖ろしき崇嚴の現示せられたるに驚歎し、其の『ハムレット』を讀むや、啻に一箇の心靈たるに止まらざる、高上なる全人間の無形の實躰が、深遠に考察せられたるに

驚歎す、而も竟に知らず、その何れが、最も多く吾人を歎服せしむるかを。

讀書社會

著作社會に等級ある如く、讀書社會にも等級あるは、明白の事實なり。著作社會の等級に就きては、前人も屢〻之れを言へり、讀書社會の等級に就きては、人皆漠然と之れあるを知りたれども、未だ詳に類別して、説明したるものあるを聞かず。豫めその等級の差別を説明し置かんこと、後に著作社會を評論するの緒として、多少の要用あれば、吾人はこゝに此の乾燥なる題目の爲に、數葉の紙白を供せんと欲す。

所謂讀書社會の最下級にある者を、字を讀む者とす、こは古今萬國に於ける、國人の大多數を含める者なり。始めて師につきて、浪花津、あさか山、いろは、などを讀み習ふおさなき者より、單語若干を習ひうかべたる輩(やから)までをいふ。彼等はいの字のいの字たるを知り、火(ひ)鉢(ばち)、炭(さい)籠(らう)の火鉢、炭籠たることを知らざるにはあらねど、未だテニハの用を知らねば、甲の單語と乙の單語との間に、密接なる聯絡を發見すること能はず。その振假名新聞を讀むを聞けば、中には偶然に句讀の正しげなるもあれど、要するに、半年ばかり英書を學びたる學生の、英書を音讀するに同じく、

何の事とも解せで、徒讀に讀むのみ。十歳以下の兒童等が、振假名物を讀むは、おほむね此のたぐひなり。彼等は字を讀むのみ、文章を讀まざるなり。

それより一段上に位すべき讀者を、通常最も廣き意味にて謂ふ讀者とす、書肆の所謂讀者なり。而して此の等級に屬すべき讀者は、其の範圍極めて廣く、其の種類(又着眼を異にして觀れば、其の等級も)一ならねど、要するに、諸書の文義を能く解して、云々の文は何事を表し、云々の論は何事を表す、と一々に意味を合點し、たとひ枝葉の諸點に於ては、多少誤解することあるを免れざるも、尠くとも、大躰に於ては、諸書の主旨とする所を解し得る者を謂ふ。此の範圍内には、驚くべき異種、異等、異力、異能の讀者を含めり。例へば、彼のなかば振假名を賴りにして、馬琴、京傳、三馬、等の諸作を愛讀し『八犬傳』の面白さ『稻妻表紙』『浮世風呂』の樂しさを感覺する、御殿奉公の婦人より、下は假名文字のみを命の綱とする、草艸紙、振假名新聞の愛讀者に至るまでを、其が輕き方面に於て、有つかと見れば、他の重々しき方面に於ては、シカツベに講堂の上に立ちて、四書、五經はいふに及ばず、諸子、百家の書を講義する、諸學者の幾百人、恐らくは幾千人をも含むならん。斯く言はゞ、怪しき事のやうに思ふもあるべ

文章の皮相の意味と大體の主意とのみを讀む讀者

きが、吾人が所謂、最下級より第二位といふ階段に置ける、讀者は、只僅に文章の皮相の意味と、大躰の筋とのみを解し得るものを指せるなれば、勢ひ斯かる異様なる同胞社會(フラタルニナー)を生ずるなり、何となれば、たとひ韓、柳、歐、蘇の文章を、立板に水のやうに訓讀し、そが意の梗概を會得する力はありとも、絶えて文章の巧拙を看破するの眼無く、毫も隱微を闡明するの識無くば、彼の『神稻水滸傳』と『八犬傳』とを、ひとしなみに玩讀し、『天明水滸傳』と『神稻水滸傳』との間に、逕庭あるとを知らずして讀む者と、何の異なる所もあるまじければなり。　されば、これらの讀者の中には、俗に博覽家、大學者と稱する分際の人々も、尠からず含まれたれば、藏書家、好事家、雜書家、新聞雜誌の愛讀者、小說好、官吏、商人、書生、旦那、若旦那、ぼッちやま、奥さま、御亭主、お神さん、藝者、娼妓、車夫、小僧、小間使、小使、おさんどんまでも含まれたり。　所詮、此の等級に屬する讀者は、古今東西に於ける出版書肆、賣捌諸店の常花主なり。　新著にして、苟も彼等の玩讀に適せずば、其の作者は、名聲百年の後に揚らんとも、存生中には、箸(はし)干乾(ひか)らびて袂(たもと)のみぬるゝことあるべし。　任他、おほよそ人間には、負(まけ)じ魂といふ美德あれば……厭世家はこれを虛飾といふ………一たび其の作者の名聲が高くなれば、名高きを知らざらんことの朽惜しさに、書齋の威嚴を保たんの

念より、評判の著作を買入るゝ者多く、それが爲に、上文の事實を破壞することも間々あれど、そは千萬中に於ける、僅々一二の塲合にして、大かたの新著には、さることも稀なり、殊に情に訴ふるを專とするなる、詩歌小說以外の著書は、尠くとも、前の連名中旦那邊までを含み得ずば、出版書肆の店先寥々たるべし。 小說類と雖も、情に訴ふるものといふ表招牌のあるだけに、若しおさんどんまでを得含まずば、捌口極めてみすぼらしかるべし。 兎にも角にも、よく賣らんと思はゞ、此の等級の讀者を忘るべからざるなり、就中、新聞紙、雜誌、就中、振假名書入の新聞に從事する者は、眼中只件の等級のみを置かざる可からず。 吾人が聞見せるところによりて、振假名新聞に於ける、續物の要訣を語らんか、まづ聞きなれぬ漢語、上品なる雅語、双つながら禁制として、日々話の目先を換へ、單純に過ぎぬやう、複雜に過ぎぬやうにすること、肝要なり、さりとて餘りに變幻窮まり無く、八重襷の如く込入りては、坊ちやまお神さん、その端倪すべからざるとの、深邃なる哲學の如く、老鼠の出沒の如きに困ずべければ、筋は飽くまでも透徹して、注意の散慢にならぬやうに、ものせざる可からず、さりとて最初より惡人善人の分明に解り、生死存亡の較著なるは、興を薄からしむる弊あれば、秘密は十分に具備せさすべきなり、さり

俗受の精靈(ジニアス)は無限のさりとてを需要す

一種の中庸

とて何時迄も秘密なる時は、短氣なる俠婦人(あねご)は丞れッたがり、我儘なるお孃さまは待(まち)くたびれて、他の新聞紙を注文するに至るべし、さりとて……必竟ずるにさりとての積重が、新聞小說の秘訣なり、吾人の經驗が、こゝに幾十のさりとてを積重し得とも、未だ以て至秘訣を說き盡くすに足らざるべし。　俗受の Genius は實に無限のさりとてを需要するものなればなり。　こは單に續物の上にのみいふべきにあらず、新聞紙雜誌、通俗的著書、いづれも此の秘訣を守らざるを得ざる難場(なんば)に立てり、例へば、民黨を賛するは可(よ)し、さりとて民黨に偏するは惡(わる)し、不偏獨立いと好(よ)し、さりとて時としては或黨を賛せざる可からず、大言壯語、甚だ妙なり、さりとて着實なる議論に乏しきは不可なり、眞理の硏究酷だめでたし、さりとて人身攻擊の絕快なるものも無ければ、多數の喝采を博し難し、猥雜なる記事もとより不可なり、さりとて艶種(つやだね)なき時は人喜ばず。以上只その一斑をいへるのみ、さりとての限はある可からず。　此に於てや、久しく新聞紙、雜誌、就中、俗受よきものに從事せる文人は、往々にして中庸を得たる人となる、儒家の謂ふ中庸にはあらず、善にも、惡にも弱く、ドチラ附かずといふ中庸なり。　民友子の所謂雖然人種なり。　之れを通人ともいふ、小範圍に於て臨機應變の機畧に富める者、はた此の中

より生ず。而してこれ大かたは、最下級より第二位に位する讀書社會の間接なる影響の作用なり。讀書社會の勢力も偉なる者かな。

批評的讀者

讀書社會の最下級より第三位に位する者を、批評的讀者と謂ふ。此の總稱の下には、おのづから種々の階段ありて、互ひに錯交してはあれど、全く同類ともしがたきものあり。例へば、書を讀みて文章の巧拙を甄別するも、批評的讀者の一類なれば、脚色の巧拙を批判し、著者が識見を品隲する力ある者も、またその一類なり。さて又ひとしく文章を月旦するが中にも、眼光紙背に透るといふ、炯眼の讀者もあれば、只皮膚の詞美（若しくは詞美ならぬもの）にのみ目を注ぎて、骨髓を窺ふに及ばざるもあり。等級に差あること勿論なり。さりながら、こゝには仔細なる分類の必要無ければ、假に差等には拘はらずして、此の階級の讀者を概括すれば、二種となるべし。例の主觀、客觀といふ語を借り用ひて名けば、其の一は客觀的批評者にして、其の二は主觀的批評者なり。前者は修辭の諸法に通熟して、措辭行文の隱微を知るの明ある者、結搆、配置、脚色、等の苦心を洞見するに敏なる者、後者は作家の本旨、著者の精髓を會得せんとする者。上にもいへる如く、此の二者、截然として相離るゝこ

と能はずと雖も、互ひに其の秀でたる處によりて區別せば、主觀的批評者と客觀的批評者とは、異種の讀者なり、といふを得べし、蓋し、主觀的批評者は、概して客觀的批評者を兼ぬることあれども、客觀的批評者は、必ずしも主觀的批評者にはあらず。　然らば、主觀的批評者は、客觀的批評者の進歩したる者か、といふに、必ずしも然らず、作家の本旨を會する人は、毎に文章の美を審にする人にあらざればなり。

客觀的批評者の最下に位する者は、概して華麗躰の文章(例へば四六駢儷の如きもの)をよろこぶ、然らざれば、粗放膽大の口吻を好む。　議論の直きと曲れるとを問はず、識見の高きと卑きとを問はず、彼等は只開合、照應、波瀾、頓挫、等の、如何に巧緻にものせられたるかを穿鑿す。　器用なる造語にあへば、奇と稱し、見慣れぬ詞を見れば、斬新と褒め、怖しき伴念の生ずべき血、鐵、鬼、魔などいふ語あれば、凄と評し、慘と品し、遂にサブライムと歎美せんとす。　或は柔和なる雅語の割合に多く用ひられて、手爾葉の蔓の如く纒綿せるを見ては、優美といひ、或は佶屈たる、讀み惡き漢語の行列したるを見ては、莊重、森嚴、豪宕、などいふ評語を下す。　或は俗語をまじへたるを、おしなべて卑俗とし、或は俗語をまじへざるを、おしなべて野暮とし、或は用語の眞地目ならざるを見て、其の作家の心を

意を後にして辭を先にする讀者

も眞地目ならずとし、或は文字の眞地目なるを見て、其の作家の心をも眞地目なりとし、滑稽の作を讀みては、作者を愉快の人と思ひ、愁歎の小說を讀みては、作者を泣蟲の化現なりと信ず。彼等は、到底、道義的假面の下に、卑むべき矯飾の面貌を藏し、詼諧的假面の下に、苦痛の愁容を伏することを察する能はず。此等は客觀的批評者の最下級に屬するものなり。さて、其の稍高等なる者に至りても、所謂高等とは、文章の妍媸を甄別する力の優れることをのみいふなれば、作家の本旨を讀破し得ざることは、前者に同じ。彼等は意を後にして詞を先にす。苟くも文章に失病あれば、文を捨つると共に、其の意をも擧げて捨てんとす。彼等に取りては、語格、手爾葉の誤謬、用字の間違、熟語の不穩等が、三四たび重なれば、以て一篇の文章を殺了するに足るなり。彼等は客觀的批評者としては、眼識頗る高し、彼等は駢麗の厭ふべきを知り、乾燥の嘉すべからざるを知り、崇嚴跌宕の何たるを知り、閑雅優美の何たるをも知る。只その文章に、重きを置くことの甚しきが爲に、修辭の法規を準繩として、諸作の妍醜を定めんと欲し、意を酌みて詞の失を償はしむることを知らず。嘗て不知庵主人が、所謂觀念論を提出して、痛罵せしは此の故なり。吾人は、敢て不知庵の如く、文法守るに足らずとまでに、方便

的激語を吐かんとはせざれど、此等一流の讀者の爲に、多少の天才の傑作が、空しく埋沒せらるゝことあるを憾まざるを得ず。

此の失を補ふ者は、主觀的批評者なり。然れども、此の派の讀者はた弊無き能はず。その故は、彼等は作家の主觀的方面を重んずるの餘り、間々文疵を度外に置き、支離滅裂の文章の、唯一片の靈氣の存ずるが爲にのみ取るに足るを、古今稀有の絕妙好辭のやうに褒美し、やがて、意だにめでたければ、詞は、如何程に拙きも、可なるが如く言ひ做し、遂に意のやゝ美なる蕪辭をもて、意の尋常なる巧妙辭よりも優れり、とするに至る。げにや意を主とせば、彼等の言ふ所、道理なるべし、然れども、意と詞との間には、別の立ちがたきにあらず、人間に取りては、何の意味の無き鶯の聲が、耳に酷だうるはしきを思へば、意の取るに足らざる文にも、詞美の存することあるべき筈なり。さて此等の主觀的讀者は、動もすれば、此くの如く作の主意をのみ大切とするが故に、おのづから又他の過失をも釀すことあり、おのれが心をもて作家の心を揣摩臆測すること、即ち我が理想の影を、作家の作中に見出ださんと力むること是れなり。例へば、此の派に屬する讀者が、痛く勸懲奬誡の旨を重んじたりとせよ、其古今の著名なる傑作を讀むや、殆ど一つとして勸懲奬誡の旨趣に成ら

ざる無きを感ずるなり。　或は又寓意を重んずる讀者ならんか、近松の作にも、沙翁の作にも、強ひて或寓意を認めんとす。或は又厭世の感あらんか、大概の各家の作中に、厭世の影子を認め、或は又樂天の感あらんか、大概の傑作の中に、太平の象を認めんとす。　必竟ずるに、主觀的讀者の多數は、其の甲に似たる穴を穿つといふ、無腸公子が同胞なり。　おのれが識見の高きが爲に力負けして買ひかぶるもあり、思念足らで及び腰なるさまの、猿猴の月取らんとするかたに通へるもあり。　さて、此の階級の上に出でたるを、批。評。家。と名く、之れはこれ第一流の讀者なり。第一流の讀者、即ち批評家といふものは、如何なるものか、といふは、やゝ答へ易からざる問題なれども、批評の標準は何ぞ、批評の方法はいかに、などいふ科學的問題に比ぶれば、答へ易し。　さりながら、吾人が讀書社會の事に說き及びたるは、主として著作社會の事を評論せんが爲なれば、第一流の讀者の說明は、後段に讓り、先づ著作社會に於ける、二三の現象に說き及ぶべし、そは讀書社會と密接の關係を有する者なり。（此の稿未完にして中止せり）

海外の文學につきて

我が『早稻田文學』、已に號を重ぬること、二十有五に及びたれど、目前の事實を記することの忙しかりしため、外國の文壇に關する事は、之れを度外に置きて顧みざりき。　然れども、今はやゝ其の面目を改め、次第に文學雜誌たるべき實に近づき、紙面にも幾分かの餘地を得たれば、今より後は屢〻眼を海外の文界に放ち、歐米文學界に於ける趨勢をも報道し、兼ねては評論をも試みばやと思ふ。云ふに及ばざる事なれども、廣大なる歐米列國の文學は、日に進み月に革まりゆくめれば、毎月、わづかに二回宛發刊するなる、斯かる小册子の內に於て、精細なる報道せんは、叶ふべきにあらず、吾人は只、彼の有るは無きにまさるといふ俗言の理(ことわり)を推して、粗より精におもむかんと欲するのみ。　例へば、まづ廣く文學といふ中にても、專ら純粹の文學と稱せられたる、詩歌、戯曲、小說、等に關したるものよりはじめて、其が槪況を報道し、やう〳〵槪況を報道し終はらば、歐米に於ける方今の名家が傑作、幷びにその名家の爲人、等に關する記實的評論にも及ぶべく、そもまたやゝ重立ちたるを評し終はらば、更に純文學の外にいでゝ、史學、哲學、神學、等の上にも及ぶべきか。　さりながら、純粹の文學と限りてだに、歐米とおしなべていへば、尙いと廣く限無うして、之れを詳にせんこと容易(たやす)からず。　英、米、獨、露、佛、伊の外に、彼のイプセンが詩名の轟きてこのかた、スカンヂナヰアの文學も、おひ〳〵盛大とならんとせるをや。　號每に、本誌の全部を、外國文學に供すとも、其が槪略を瞥見せんがために、一二年を空うして、尙足らざるべし。　難きは啻それのみならず、吾人が常に聞視する所は、重に英米の文學に多うして、其の他の列國の文學の如きは、大槪(おほむね)、英米諸雜誌を經て、間接に知る

所多かるべければ、報道おのづから盡くさざるべし。欲する所のみ大にして、得る所鮮少からば、をかしかるべし、故に、吾人は、例の律儀なる方向を求め、まづ英米兩國の文學を主としてはじめ、其の他の列國の事實は、幸にして知り得たらんを機(おり)として、只時々にのみ報ずべし。　且吾人の本意は、重に外國の事に昏き人々が參考に、海外の文運を知らせんといふにあれば、或は其の道の人に取りては、已に數年以前につぶさに知られたらんとも、態と搔摘まみて語ることあるべく、又事の報道の神速ならんを望むよりはむしろ海外文學の大勢を知らせんことを素志とすれば、世の新聞紙などに載せられたるをも、文學の大潮流に大なる影響を與へずと思はば、必ずしも報道せでやむこともあるべし。　例へば、名家の榮枯、病死、新著の目錄、などは、吾人は必ずしも其の度(たび)に報ぜざらん。求めて報道せざらんとにはあらず、吾人が着目の點そこにあられば、おのづから期に後れ、又は見落とすこともあるべきをことわるのみ。

純粹の文學と稱する、詩歌、戲曲、小說の外に、史傳、論評のたぐひは、頗る純粹文學に因(ちなみ)深ければ、これもまた吾人が眼界にあるべきものなり。　さて、報道も、評論も、及ばん限は、穩當にして確實ならんことを望めば、何れも吾人が專斷の觀察のみに據らずして、每に其の道の人々の意見をも叩き、或時は其の道の人々に乞うて、其の人々の說を錄することを、前に我が文壇の現況に關して、諸家の說を錄せしと同じかるべし。　要するに、吾人は、漸を逐うて我が記實的評論の旨意を實行し、九牛一毛の裨益を、明治文學に頒かたんと欲す。　讀者よ、吾人が文字に彩(あや)無く、評論に火(ひ)無きが如きは、是れ我が記實主義の存する所、又吾人が素志の

凝り成せる所なるを知れ。

ジェームス、サリーの小說論

現代心理學名家の一人、ジェームス、サリー氏が、嘗て『フォーラム』に掲載せし「小說の未來」といふ論文は、當時皆人の聞かまくせりし解答なり。此の說彼方（かなた）にては今は普通となりにたれど、又其の說く所、未だ悉く同じがたしと雖も、尠くとも我が國人が參照に供すべき價値あり。吾人はもと美文學の本領の、專ら想像の作に限らるべきを信ずる者なるが故に、詩歌、戲曲、小說等に頗る大なる尊重を置くものなれど、少しく時勢の傾向に感ずる所ありて、今日に至るまでは、故意（ことさら）に小說に重きを置かずして、概して他方にのみ目を注ぎたりしが、本誌も已に二十七號を重ぬるに及びたれば、總躰の平均を整へんために、爾後は時々小說論をも掲錄せばやと思ふ。前號にメレー、カッチングの所論を載せ、本號にサリー氏の論を紹介するは、蓋し、上文の旨に出づ。而して記者みづからの管見を先にせずして、外國の論說を先にするは、必ずしも管見の淺劣をはゞかるにあらず、海外の小說論を紹介せば、小說に關する新智識を讀者に與ふると同時に、彼れが小說の傾向をも、兼ねて知らしむるの益あればなり。

サリーの本旨は、小說の未來を卜せんとするにあり、然れども、近時の小說に關しては、是非の議論まち〳〵にして定まりなく、或は取るに足ら

ずと、一言に排斥するもあれば、或は小說の新著の饒多なるは、遂に新天才を出ださんの前表なりといひ、或は小說は、果たして美術たるに足るべきか否かを疑ふものあり、紛々擾々たるこれらの異論をまづあらかじめ調停せざれば、所詮、其の未來を豫言しがたし、すなはち先づ美術の起原と美術の職分とを明白にして、今の小說は果たして美術たるべきか否かを知ること肝要なり、とて、彼れは美術の特質に論及せり。

美術の特質

サリーは、美術の職分を論ずるに先ちて、辯じて曰はく、予は美術の完全なる攻究を試みんとするにあらず、只已に世に認識せられたる、一二の特質を論せんと欲するのみと。即ち二種の特質を擧げたり。サリーの謂ふ美術の特質とは、遊戯的と普遍的となり。所謂遊戯的特質とは、アリストートル以來シルレル、スペンサル等が認めたりしものにて、美術が人をして其の餘剩の活力を外に發せしめて、以て快樂を覺えしむるを謂ふ。活力とは、形體的活力と精神的活力とを併稱せるにて、餘剩の活力とは、平生嚴格なる勤勞に用ふる活力の餘剩を指す。サリー曰はく「人々の活力は、日々の勤勞の後に、尙若干量を剩す」と。例へば、兒童の講習を終へて、戶外に出づるや、其の遊戯活潑々たり、是れ其の餘剩活

普遍的或は譯して通俗的ともいふべし

力の作用なり。又吾人の美術品を賞翫するや、常に曰はく「眼遊ぶ」と、俗に目の放樂といふ、是れなり。蓋し、目の放樂の多寡は、餘剩活力の多少に因る、詩歌、小說を玩ぶも、同じ理なり、實務に用ひざりし、餘剩の想像力を遊ばしむるに外ならず。必竟、遊戲と勤勞とは、偶と見れば、大なる懸隔ありと見ゆれど、其の作用を見れば、同類の趣あり。遊戲にも腕力を要すれば、又考察を要することもあり、只其の異なる所は、勤勞の塲合にては、常に實物、實事に對して活力を用ひ、遊戲の塲合にては、實物に類似せる、思想と物體とに對して活力を用ふ。されば、美術が智力と感情とを遊ばしむといふは、現實の事物に似通ひたる事物に對して、智、感の働くをいふに外ならず。サリー曰はく

要するに、美術は、狹小なる現實界より吾人を引き上げ、此の現實界の概案を基礎として美術が別に建立せる、一層廣大なる新世界に遊ばしめ、吾人をして或は笑はしめ、或は泣かしめ、或は憫ましめ或は樂ましむる者なり。

と。サリーの所謂、第二の特質は、普遍的(ソーシアリチー)なり。これ亦古來學者の認識せるものにて、「美術の物たる、一個人に訴へずして全社會に訴ふるもの」なる由をいへるなり。サリーは、以上二種の特質を以て、美術の要質なりとし、これを標準として、美術の進化、就中、小說の進化

を窺はんとせり。

美術の進化

サリーは、部分の分脈と、構造の複雑に成行くこととをもて、有機的進化の特質なり、とし、此の原則に據りて、美術の進化を論せり。　即ち音樂の、他の美術(例へば舞蹈)と結合したりし頃は、其が原始の有樣にして、其の獨立して、一種の美術となり、更に若干の類派を生じ、精緻を極むるに至りしは、其の著き進化なり、と說き、件の分脈と精巧とは、世人の能力と好尚との發達の度に由來する者なり、とて、近世の繪畫の、多般精巧なるは、第一に、自然と人生とに關する、吾人の智識の增加したること、第二に、一有機體の部分の中へ、夥しき事物を編入する、吾人の力量の增したること、第三に、其の他、あらゆる事物に對する、吾人の興感の增したること、等に照應す、といひ、さて曰はく

美術の非科學的時代に演する役目と、科學的時代に演する役目とは、同じからず。　吾人の所謂開化文明は、美術が利用する所の智力と情力とを擴充し、變化す、而して智、情の進化するや、美術の傾向の上に、直に影響を及ぼすものなり。　所謂美術の傾向とは寫實、理想の二傾向なり。

世の進化が美術を驅りて、事實又は現實を、有りの儘に模寫せしめんと

する傾あるは、近世美術が何れも皆殆ど科學的ならんとせるに明白なり。而して之れと同時に、智情の進化は、理想的美術の上にも影響せり。夫れ歎美と熱望とは、經驗と智識とによりて、變化す、古代の希臘人は、肉體の美を愛し、近世人は高雅、可憐、秀逸なるものを愛し、一視同仁の情を重んず、即ち、繪畫、彫刻、等の模倣美術すら、其の價値の標準を精神的表現に置くに至りき云々。サリーは美術の發達は、人智の發達の證にして、兼ねて共同的感情の深く成り行ける證なりとし、近世の美術は、次第に國家大の範圍を脱して、宇宙大の境に進化せんとし、社會進化の最近最良の產物たる、四海同胞といふ宇宙的大慈愛の情に訴ふるに至りぬと說けり。

近代小說の特質

サリーは、今の所謂散文小說が、其の外形の上よりいへば、整然たる句法、律呂、搆造、等を具へたる古代の詩歌、并びに古今の戲曲、等と、同地位に立ち難きものたるにも拘らず、其の記、叙、描、寫の如意自在なることに於ては、かゝる羈絆なきが爲に、一層立優りたり、と說き、古代の詩歌は、只人物の儀型のみを描寫して足れりとしたりしに、近代の小說は、更に歩を進めて、之れを個人的となし、活物的となせり、といへり。又曰はく、近代の

美術は開化したる男女の反射的感情（リフレクチーヴ、フイーリング）の内界に於て、一新領分を發見せり、此は是れ、叙事詩の全く知らざりし所にして、ドラマの只僅に指を觸るゝに止まりたりし者なり。たゞそれのみにあらず、今の美術は、往々人生の複雜なる內藏にも衝き入りて、個人と其の周圍との複雜なる關係、そが交々相働ける樣をも會得し、又性質（カラクタル）をして發展せしむる深秘複雜なる手續をも認め得たり。

と。サリーは、今の小說が、美術の二特質に背かずして、能く當今の複雜高尚なる智情を遊ばしむるに適したることをいひ、「吾人は最早古代の漠然たる人生の表現に滿足する者にあらず、吾人の高尚なる智情は、明確、充實、多角的表現法によりて、人生の表現せられんことを要す」と說き、前世紀以來の小說は、此の點より見れば、善く當代の需要に叶へり、と斷言し、「疑ふ者は英のフヰールヂングの作と、ヂッケンス、サッカレー、又は近代の露の名家の大作とを比べ見よ、必ずや前代の美術の單純にして取るに足らざるを感ずるならん」といひ、更に曰はく「近代の小說は、啻に吾人が發達せる智情に相應ずるのみにあらず、別に一層大なる社會的需要に應ぜるものなり。

夫れ人生を社交的生活として描寫する諸著の中、特に小說を以て、其の最も著きものとす、而して小說が訴ふる所は、常に社交的生活に因りて育成せられたる、幷びに之れに附着したる、諸感情の複雜なる圍繞なり。例へば、近代の小說が、社會の生活に、種々樣々の階級あることを認識せるを見よ、チャールス、ヂッケンスが、貧者の複雜なる生活を詳寫せるは、如何に十分に小說が門閥階級の羈絆を脫し、上流生活の金碧燦爛に蹈踏することを無く、熟知せられたる市民的經歷の小範圍に偏頗することを無く、如何に遍く、如何に自在に、無限の枝葉をもてる人生の物語を寫し出だすことに適するかを明證す。吾人はまた小說の、次第に社會的性質を增し來たりたるを見る、こは作者が一個人を描くや、必ず之れと社會との關係を寫さんと欲し、社會の慣習、思想、幷びに最も勢力ある刺戟、等に目を注げるを見ても明なり。此の傾向は、早く已にバルザック、ユーゴー、サーン、エリオット等の作に於て見ゑたりしが、近代に於ける佛蘭西、露西亞、スカンヂナヸアの作家に於て、更に特に著くなりたり。吾人が彼等の作を讀むや、個人の苦鬪（ストラツグル）を見、社交的生活を組成する諸勢力の整然たる總額の作用を認む。今の佛蘭西小說が、人生を社會學的現象として描寫せんとしつゝある由は、近ごろガイヤヵ氏、著くこれを表示せり、云々。

寫實と理想

サリーは、近代小說が、能く美術の二要件を具へ得たること、即ち人間の

複雜なる能力を娛ましむると同時に、人間を社會的人間として表寫せることを論じたる後、小說に寫實、理想の二方面あることに說き及び、先づ近世小說が、著く科學的智識を利用して、觀察を精確にし、描寫を忠實にし、自然と人間との摸寫をして、殆ど準科學的ならしめんとしたるを言ひ、斯く寫實的傾向の甚だしき、或は美術をして、其の特別なる尊嚴を失はしむるに至らずや、と疑ふものあり、と言ひ、次に理想的といふ語が、全く現實界を脫離したる、といふ意を表する者ならば、近世小說は、理想的ならざるべきが、他の一層高尙なる意味にていへば、近世小說にもまた理想あり、と辨じ、且曰はく

所謂理想的美術の主とする所は、日常の實驗と現實の周圍とを脫出するにあり。彼の上流生活を描きたる小說の如きは、當代の讀者をして、實驗の及ばざる仙境に遊ぶの逸樂を得しめしものなり。近くばスコットの歷史小說の如きは、吾人をして農舍、遊戲場の狹隘なる俗界を超脫せしめ、殆ど天外に遊ぶの思あらしむ、又は George Sand の田舍小說、Auerbach の農夫物語など、何れも束縛を脫離して、新鮮の大氣を樂むやうの快感を興さしむるものなり。

されば、novel (小說)は即ち novel (新奇)にして、猶手品師の鞭の如く、揮一揮して(理想派の說によれば)異常の奇人物と奇事情とが存在せる、別世界

美術の一職分

に吾人を導くものたり、去かれども、此くの如くば、理想小說は美術たるに堪へざるべし。ポンチ(團々珍聞)も、見世物も、幾分か此の如き効用をば有すればなり。　理想といふ語には、更に一層高尚なる意義あるべし、即ち、吾人の感情に取りて、特殊の價値を有する諸の原素を、人間の生活中より選出で丶、そを美術的圓滿に、美術的較著に、描寫すること、是れなり。

理想小說は、先づ其の始めには、吾人が經驗の冒險的、怪異的方面を選いでて、以て人生の秘密を現じ、讀者をして、樂しき畏怖の念を生ぜしむることを力めしが、こは感情を滿足せしむべき正當の方法にあらず。　小說の漸く進むや、此の美術の部門(理想派)が、正當なる審美的感銘を生ずるに適したること……即ち吾人が想像を高上にし、吾人が感情を呼び起こし、熱心に人生の尊嚴を豫想せしめ、戀愛と友誼との磨消すべからざる美しさを豫想せしめ、太古純樸の善美を豫想せしめ、外部の言語と行爲とが現示することいと稀なる、天眞爛漫たる內界の複雜を豫想せしむるに足ることといふこと……極めて十分に證せられたり。

案ずるに、現實界の觀察のみにては、到底これら靈妙なる多方面の秘密を描破するに足らざるべし。　何人といふとも、一身の實驗のみによりては、スコット、ユーゴー、トオストイ等の傑作より得るが如き、廣く且深き悲哀の感銘を得る能はじ。　ヂッケンス等が、其の諷諧の力を擅にし

て、人生の痴戯、人性の痴狂、等を描くや、其の間に多少の理想的筆法存す。其の他 Mark Twain の Tom Sawyer を寫し、George Meredith の Roy Richmond を寫せる、共に多少の美術的張大の法を用ひて、人性に於ける審美的價値を明白にしたるものなり。

されども、此くの如きは、未だ小說に於ける理想的目的と理想的傾向とを盡くしたるものにあらず、外に尙大なるものあり。

夫れ經驗は、吾人を敎ふるの特權を有す、而して人間の經驗を描寫する美術もまた、吾人を敎ふるの特權を有すべし。 例へば、一大煩惱の物語、又は複雜なる究困の物語、若しくは或微妙なる德性の發展せる手續の物語を讀みては、吾人これが爲に感動して、多少知證する所無き能はず。 美術の吾人を刺擊するや、素よりかの科學が本領とする講說的職分を簒奪して、訓誡的に刺擊するものにあらず、否、只諷示的に刺擊するのみ、悉(つぶさ)にいへば、事物の外皮を透破して、內界の性質、傾向を發見せんとするより、必然に生じ來たる結果として、暗々裡にかゝる感想を生ぜしむるなり。

蓋し、かく暗々裡に人心を刺擊するは、美術が解釋的、兼、統一的職分の一部分にして、吾人が智識上に裨益する所少小ならざるのみならず、吾人が、感動の力量をも、頗る增大する効用あり。

其の故は、世相を觀測するに當たりて、思慮同情ある人の心中に起こる此

今の小說と古代の詩歌

等の觀念は、單に相結合して種々雜多なる經驗となりて再現するのみにあらず、延いて復雜なる世の衆感情の潮流にも影響を及ぼせばなり。

今の小說は、古代の詩歌に比すれば、人間の經驗を表現すること、一層明白、內部の生活を發露すること、一層大膽、個人の一生をして一篇の史たらしむる手續を網羅すること、一層濶大なり、且之れに加ふるに、人心を刺擊すべき大思想を諷示すること、一層濶大なり。試に古希臘のドラマに見えたる、單純なる道義上の考察と、今の小說に見えたるものとを、比べ見よ、大小の差別著きものあり。沙翁といふとも、今生まれて小說を著さば、更に一層明著に……彼れに對しては、一層明著といはんこと、恐らくは不都合ならめど……人生の秘密を表現し得しならん。

サリーは論じて此に至り、漸く小說の未來に說き及ぼさんとして、又躊躇し、近世小說の豐富なるを驚歎し、「かく饒多なる新版が何れも美術たるに適したり、といふにはあらねど、(たとひ今の作家中に、スコット、デッケンスの天才を見出だす能はずと雖も、)尙夥多の英才あり、とて、創見炳耀たるメレヂッス氏、深刻なる人生の研窮に長じたる Hardy 氏、精緻なる世態の記述に巧なる Howells 氏、等を擧げ、尠くとも新作の豐富なるは、今代の需要に應じたるものなり、といひ、其の故は、讀書的嗜好の著く增

加せること、讀書を以て娯樂の方便とする者の增したること、文學をもて單に娯樂の具と思へるものゝ增したることに原因す、而してかゝる傾向を生せしは、近世生活の多事、多忙、困難なるに由來す、と說き、且曰はく

今代の多事多忙なる人々は、もはや彼の詩歌に見ねたるが如き、婉曲なる思想と、特殊なる句法とを解する爲に要せらるゝ、長々しき智慮の努力に堪へざらんとす、是れ散文小說の大に行はるゝ一因なり。

小說の未來

サリーは、小說の益〻進步すべき兆見えたり、とて、今の小說の種類の樣々なる(實驗、寫實小說、航海小說、冒險小說。戀愛小說、田舍小說、山林小說、外國の風俗を主としたる小說、時代小說、小兒を主人公としたる小說の、思ひ思ひに行はるゝ)と同時に、其の記叙の方法も。また樣々なることを擧げて、是れ皆活力充滿の證なるべく、又進步の條件なるべし、と言ひ、さて之れを說明して曰はく

恰も、彼の物理界に於て、選擇せらるべき形躰の種類が、最も豐富にして饒多なる時は、進化の步武最も神速なる如く、美術界に於ても、實驗の豐にして種々なるは、正に新選擇の行はれて、新調停の成就せられんとする、第一の要件なり。

近世小說に於ける厭世臭味

と。サリーは、かく進歩を豫言すると同時に、今の小說の健全ならざることを認めたり。彼れは以爲へらく、今の小說は、殆ど科學的熱心をもて、人生の秘密藏を穿鑿し、因りて以て、彼等が未だ曾て認識せざりし、人生の新痛苦と新不秩序とを知りたる結果は、おのづから小說の性質をして、厭世的臭味を帶ばしむるに至り、英、米、獨の諸作、何れも此の氣味あることを免れず、佛蘭西、露西亞、諾威の近作小說に至りては、更に甚しき者あり、と言ひ、近年一方に於て、奇怪荒唐なる物語風の小說、只筋の奇なるのみを主とする冒險的小說、(案ずるにハッガードのSheの如き作)の行はるゝは、或は此等厭世的小說の反動ならん、といひ、以て人間の天性が、人生に餘りに醜惡なる赤裸々を見るに忍びざるものなるを證すべし、と言ひ、軈て一轉して論じて曰はく

されど、斯くの如き遁走は謬妄なり、吾人は如何にするも、反省的丁年を解脫して、憂愁を知らざる童兒的心狀を粧ひ、その輕信とその熱心なる好奇癖とを復することを得べからず。彼の荒唐無稽なる小說は、到底吾人の物にあらず、吾人の能力を遊ばしめんとならば、一層高尚なる種類の小說に賴らざるべからざるや明かなり。されば、吾人は、今の高尚深邃なる智識より成れる小說を歡迎することの正當なるべきを信ず。然れども、之れと同時に、今の厭世的小說家に向かひて、其の寫實を忠實にすると共に、事

物の美と、人間の善良と、人間の幸福とに關する少年の樂しき信條を、多少保存せんことを希望すべき權利あり。　吾人は言はんとす、小說の次第に發達して其の知識深遠となり、古ローマンスの荒唐を脫するは可し、其の美しき優しき慰諭の形跡をさへに、併せて失ふは不可なりと……

夫れ實生活は、悉く淺ましく平凡なるものにあらず、人間の經驗は、むしろ打敗痛苦のみが、其の本相ならざるを證し得て餘あり。　所謂寫實派の根本的欠點は、事實と醜事實とを同義視する所にあり。　彼等は世人に看過せられたる、生活の要素と思はるゝを發露せんと熱衷するの餘り、遂に之れのみをもて人生の單一なる原素なりと誤認するに至れり。　將來の小說家は、須からく奮ひ起ちて、此の誤謬を正し、再び彼の善美なる原素を美術中の正位に復せざる可からず、即ち、最も卓越せる位置に置かざる可からず。　善美なる物とは何ぞ。　可憐なる者、善美なる者、想像力を娛しまめて、以て期望と信仰とを鼓吹するに足るべき、人性、經驗の相(アスペクツ)是れなり。

當今の小說に於ける、第一最大の必要は、人性の無限多樣なる美を、一層靈活に、實現することこれなり。　當今の英、米、小說家中、如何に少數が、男又は女の性情を描寫して、吾人が心に愛慕景仰の念を起こさしむるに足るか。人性描寫の事、盛に行はれ、新材料足り、技倆はた之れに伴へれど、ひとり描されたる人物の、吾人を感奮景慕せしむるに足るもの鮮し。　厭世の念透徹して、小說家の心眼眩み、復た人間の善美を見る能はざるか。

小說を高尙にすべき最良の法案は、偏に人間を卑しき者と見做す流行の皮肉主義に代ふるに、人間が善美の方面を認めて、之れに卓越なる位置を與ふを得と信ずる健全なる觀念を以てすることなり。　さて、吾人もまた、當世を以て倫理壞亂、公道湮滅の時代なり、と絕望せずして、奮然此の抑壓的意識を脫離し、社會改善の行はるべきを信仰せざる可からず。　其は如何にして改善せらるべきか、吾人未だ之れを知らず、さもあれ、尙その方法を認得せんと熱衷せざるべからず。　さるにても、小說家は、何故に其の決して輕ずべからざる先例(ベラミーを指す)を學びて、一層幸福なる時代の影を示し、未來の樂しき樣を世人に知らしめ、矯正策の先驅の隨一とならざるぞ。

ベラミー氏の小品の注目すべき奏功は、如何に人々が、一層樂しき日の最初の片影を得んとして目を瞠りつゝあるかを證する者なり。　夫れ美術は人生の理想的表現をもて吾人の情緒を娛しましむるを、其の最高の職分とす、然らば、其の機今方に到れるなり。　吾人をして社會の疾病の觀察より一轉せしめよ、疾病の觀察、已に業に長きに過ぎて、人皆頻に其の治療を望めり。　吾人は敢て小說家に、社會學、經濟學の最も進步したる思想を訓諭的に說明敷衍せよ、と求むるにあらず、否、當代の思想の傾向を捉らへて、人間進步の應有的(さもあるべき)方向を前表せば、新理想的原素を領有すること難か

らざるべし、といふのみ。而して此等諸原素を利用して、巧に物せば、其が描ける人生をして、美しからしめ、以て吾人を悲しませずして、吾人を樂しましむるに足るべきなり。

と。以上をサリーが「小說未來論」の精髓とす。

其の評

案ずるに、サリー氏が此の論、今は最早珍しからぬ者となりたり。我が國に於ても、所謂寫實派の片影の見えてより、屢〻唱へられたる所、ほゞ之れに類する者あり。すなはち實驗寫實主義の反動のみ。吾人は我が國の少しく早まり過ぎたる反動が、片輪なる理想小說を誘致せんことを(舊勸懲小說を蘇生せしめんことを)憂ふる者にありながら、爰にかくサリー氏が、理想小說論を紹介するは、抑〻故あり、他なし、サリー氏の論、頗る公平にして、我が國に於ける多數の小說論者の如く、一向に小說をもて、勸懲訓誡の具となさんとするの謬妄に陷らずして、而して能く寫實派の長所を認め、兼ねて其の失病を洞觀し、小說に寫實、理想の二方面——俗に所謂虛實——の缺く可からざるを論じたるが、我が偏頗なる小說論者——國俗の謂ふ所の理想派、寫實派——を警醒するに足るべし、と信じたればなり。

サリー氏の論は、頗る公平なり、尓かれども、其の寫實派の長所と必然とを認めながら、其の考察の半途中にある、彼等の前進を抑制し、頻に理想小説の必要を辨じ、之れを奬勵誘掖する聲の、稍高きに過ぐるが如きは、吾人をして、氏もまた反動の潮勢に驅られたる一人にあらざる無きか、と疑惑せしむ。　蓋し、氏の論は、學理的説明にはじまりて、奬誘説論に終はる。　氏は小説をして當代の矯正策の一助手たらしめんと欲するに似たり。　氏は謂ふ、「訓論的に説明せよと求めず」と。　何ぞ偏頗なる實驗と狹小なる觀念――吾人の所謂小理想――とに安じて人間相を描破し得べしと妄想する勿れと道はざる。　實驗小説の厭世臭味あるは、觀察の不足せるが故ならざるを知らんや。　氏が小説をもて矯正案の一種の木鐸たらしめんとするの意と、訓誡的に説明せよと求めずといふ言葉とは、氏が論の上にては撞着せずと雖も、實施上に於ては、衝突すべきや必せり、當代の爲にする小説は、其の着想の根本に於て、萬古の爲にする小説と、相同じからざるは自然なればなり。　吾人は素と小説を當代に利用することを非む者にあらず、尓かれども、常に其の利用といふ語を忘れざらんを欲す、利用的小説と小説の本領との間には、區を畫し得べきものたるを信ず。　サリー氏の論には、政治家、宗教家、教育家の口

南翠外史

吻あり。

『おぼろ月夜』と『荒海實一』

此の二小說は南翠外史、須藤光暉氏が著作、春陽堂の發行なり。前者はそのはじめ『新小說』といふ小說雜誌に續載して、頗る時尙に投じ、好評ありし小說にして、南翠外史が精神を籠めた作たることは、本書の緒言に、「實に是れ當年、心密かに大筆名手と伍して遜色なきを期したるもの」といへるにて著し。其の文躰は、一時思軒躰と稱せられたる、森田氏が創意に成れる、一種の飜譯躰の脉を受けて、之れに四六駢儷の原素をまじへたる、極めて華麗なるものなり。その脚色に至りては、方今の文壇、此の點に於ては向ふに前なしと稱せられたる、外史が豐富なる想像を縱にしてものせるなれば、變幻怪奇、髣髴ヴェルネ、ヂュマ等の面影を見る。然れども、吾人の見る所によれば、此は、此の作家が本來の長所を表し得たるものにあらざるが如し。思ふに、外史が眞の長技は、かゝる餘所行きの文躰と脚色とにあらずして、他の匆卒に書き流したる、輕妙洒落なる諸作中に存ずべき由は、吾人のひそかに信ずる所なるに、外史みづからは（作家の自家の作を甄別するに拙きは、古今の恒例ながら）そを知らざるが如き趣あるは、異しむべし。現に『おぼろ月夜』と『荒海實一』とを比べても、吾人は『荒海實一』の文勢といひ、結構といひ、双つながら一層自然に近くして、流麗暢達なるを認むるが故に、むしろ彼れをもて經營慘憺の結果たる『おぼろ月夜』の上に置かまく

す。『荒海實一』は自傳躰にものしたる言文一致風の小説なり、其の前篇といふ『行路難』は、ヂッケンスの作『オリヷルトヰスト』より脱化したる所多きが如く、此の篇はむしろカピテン、マリアットの作などにありげなる趣向なり。 脚色の複雜にして、哀歡悲喜の入り交りたる、面白し。 夫れ作家おの〳〵其の才を異にすること、古今の通例なり、外史若しそが固有の長所に心を注ぎて、注意を二三にし、着眼を二三にすることなからんか、明治の文壇、尠なくとも、ヂウマ、エインスヲオス一流の名家を得ること難からざるべきに、外史大慾貪りて堅かず、恐らくは、近世諸小説家の諸長技を、悉く併せ領せんとするか、是れ外史が最大の弊所なるが如し。 例へば、心理的分析は、重に結構脚色の單純なるホウソオン的心理小説に於ては、之れを行ふこと難からざるべけれども、スコット的若しくはヂウマ的小説に於て、之れを爲さんもの、古今の大作家中にも、其の人甚だ乏しかるべし、まして、尋常の作家に於てをや。 假令絶妙に爲し得たりとするも、恐らくは、繁冗に堪へざるべし。 夫のスコットの大才を以てしても、脚色を重んずればこそ、描寫は、總て客觀的にとゞめたれ、ヂッケンスの大筆すらも、記叙大かたは客觀的なり、必竟脚色の複雜なるより生ずる自然の果なり。 元より彼等の天才が、心理的分析に適せざりしにも因るならめど、一つは其の作の性質を自認しつればなるべし。 然るに、外史はヴエルネ的脚色の中に、ホウソオン的心理をも併寫せんとし、馬琴的趣向の中に、近世の寫實主義をも混用せんとす。 是れ疑ふらくは、外史をして、未だ我國のヂウマたる譽を擅にせしめざる所以ならん。

小說『五重塔』

は嵩山堂の發兌、露伴子が近著なり。　此の作者が特質と長所とは、世間の已に認めたる所なれば、今更に管々しくいふまでも無けれど、本著の如きは、所謂新聞紙の續物として、自然の必要より、匆卒の際に物せられしにも拘らず、首尾秩然と結搆整ひ、已に他の人も評せし如く、主人公、ノッソリ十兵衞が建立せし、五重の塔の巍然たる趣に通ひ、特に著く作者の特質を表現せりと信ぜらるれば、爰に一つ二つ吾人が感じたる所をいふべし。　作者嘗て人に語りて曰はく、人おの〳〵特色無かるべからず。物に觸るゝ每に化せられて、自己の特質を沒了し、譬へば、彼の紺色の如き曖昧雜駁の色となり去るが如きは、人の屑とせざるべき所なりと。蓋し、露伴子はインヂヸヂュアリチーの貴重なるを說き、有爲なるを說き、人間を益し、人間を救ふの力は、一に此の特色といふ者にありと敎ふる者なり。　吾人未だイブセンが個人主義の、果たして露伴子が特色主義と同一なるかあらぬかを明めずと雖も、同子が或一念の力に重きを置き、盤根錯節に遭うて、其の念のます〳〵鋭く、精神一到して百事成らざる無きの意を語る所、頗るブラウニングが情の力を重ずるに似たり。

露伴子

本篇の主人公、大工十兵衞は、俗兒が彼れを嘲りてノッソリとあだなしたるにも似ず、其の心、金鐵の如く堅固にして、其の情、氷雪の如く潔し。彼れ、義理をも知り、人情をも知れゝど、尙其の知らざるが如くに見らるゝは、其が特色主義の然らしむる所なり。　十兵衞の頑然として恩人源太が勸告を斥くるや、其の妻、之れを悲みて諫むれども聽かず、悵然として語る所、十兵衞が肺肝を露呈し來たりて餘蘊なし。　吾人は、十兵衞を以て必ずしも作者の影なりとは言はず、然れども、十兵衞が作者の理想中の一人物たるを證する爲に、少し長けれど、十兵衞の述懷を引抄すべし。　十兵衞、妻の言葉を斥りぞけていふ

あゝもう言ふて吳れるな、あゝ五重塔とも言ふてくれるな、よしない事を思ひたつて成ほど恩知らずとも言はれう人情なしとも言はれうそれも十兵衞の分別が足らいで出來したこと今更何共是非が無い、然しきさまの云ふやうに思案しかへるは如何してもいや、十兵衞が仕事に手下は使はうが助言は賴むまい人の仕事の手下になつて使はれはせうが助言はすまい桝組も椽配りもおれが爲る日にはおれが勝手、何處から何處まで一寸たりとも人の指揮は決して受けぬ善いも惡いも一人で背負つて立つ他の仕事に使はれゝば唯正直の手間取となつて渡されたゞけの事するばかり生意氣な差出口は夢にもすまい自分が主でも無い癖におのが

葉色を際立てゝかはゞた風を誇貌に寄生木は十兵衞の蟲が好かぬ人の仕事に寄生木となるもいやなら我が仕事に寄生木を容るゝも蟲が嫌へば是非が無いやさしい源太親方が義理人情を嚙み碎いて態々すゝめて下さるはおれにも解つてありがたいがなまじいおれの心を生して寄生木あしらひは情無い十兵衞は馬鹿でもノツソリでもよい寄生木になつて榮ゐるは嫌ひぢや、けちな下艸になつて枯れもせう大樹を頼まば肥料にもならうがたゞ寄生木になつて高く止まる奴等を日頃いくらも見ては卑い奴めさ心中で見さけてゐたに今おれが自然親方の情に甘へてそれになるのは如何あつても小耻しうてなりきれぬは。

是れ實に十兵衞の本性にして、五重の塔全篇が、活きて躍る所以は、一に此の特質の活寫せられたるにあり、而して作者が理想もまた、此の點に存することと明なり。人物の中、朗圓上人、棟梁源太、お吉、お波、清吉、いづれも特性の影見えて、髣髴其の人に接するが如き觀あり。さて文章として絕觀なるは、嘗て本誌にて注意せし、第三十二章夜叉の荒れいでたる條、また全篇の神髓を綜括して、疑ふらくは、一種のモーラルをも含ませたりと見らるゝは、朗圓上人が親筆の塔の銘なり。

附錄したる「血紅星」は、作者が走り書の寓言、主として詩文人を嘲倒諷刺すると同時に、主人公皆非を嘲殺したる所、餘韻深し。此の一篇は、彼の

古聖人の所謂、Know-thyselfism の究竟修行を説けるものと見て、大差なかるべし。二著共に露伴子獨得の筆、他人の决して學ぶ能はざる所のものなり。方今の小説壇、人皆紅葉と露伴とを推す、而して前者には徒弟多く、摸倣者多く、後者には殆ど一人の摸倣者を見ざる所以のもの、蓋し、露伴子の作は、內より出づる處多くして、外より假り來たりたる處、尠きに因るにあらずや。即ち其の特質に由來する所多きが爲なり。

小說『罪と罰』

發行所は、大傳馬町の內田老鶴圃にして、譯者は不知庵主人內田貢氏なり。原書は、十九世紀の歐米文壇を振蕩せる露西亞文學の精髓、心理小説家の泰斗、フエドール、ミハイエロキッチ、ドストイエフスキーが傑作なり。案ずるに、十九世紀の初年以來、思索推考の新精神、諸學藝の中堅を襲ひ、就中、小説の如きは、大に其の面目と精神とを刷新し、ローマンスとノヱルとの間に、殆ど越ゆべからざる藩屏を設くるに至りぬ。佛のバルザック、露のツルゲチフ、ゴーゴリ、等は其の先達なるべく、英に於ける新小説の代表者は、ジオルジ、エリオットなどを初筆とすべし。而してツルゲチフの友、エミール、ゾラが、實驗寫實の新名目を、ヲッチ、ヲオドと

ローマンス死にたり

して、佛の小說壇に一旗幟を樹てしや、寫實小說、心理小說の流行、八方にひろがり、多年、玩具的物語に饜き果てたりし讀書社會は、餓鬼の始めて大牢の滋味を得たらんが如く、靡然として之れに赴き、同音にRomance is dead! all the stories have been told! と叫びぬ。 彼等は曰はく、爾後、小說家の筆に上るべきものは、人間の意識界に起こる隱微の變々化々あるのみ、今代の小說家は須からく此の主觀的變動の無形なる波瀾を以て、彼の物語派の得意とせし、有形、異常、荒唐無稽なる大波瀾、即ち戰慄的大事件、紛雜的行爲、動作、暴風雨的煩惱等に代ふべきなりと。 寫實的小說、又の名、心理的小說の氣焰は、これより一層の旺盛を致し、動もすれば勸懲の旨を標準として、文學を論ずる英米の批評家すら、一時は瞠若として言葉なかりき。 此の時に當り、英米なる小說名家は、相繼ぎて逝き、佛、露、二國、ひとり小說壇に文名を專にせり。 近年に及び、其の反動漸く起こりて、曩に本誌にても報ぜし如く、或は口を極めて寫實的小說の弊害を說きて、其の偏寫と不健全とを非難し、理想小說の再興を圖らんとする者あれば、或は此の反動の機に投じて、一時の虛名(又は一層卑しき實物的利益)を博せんとして、舊物語派の筋立によりて、新冒險の事蹟を語るものあり。 或はベラミーの如く(ヱルチの顰に倣うて)百十三年後のユー

トーピアを叙するもあれば、或はワレースの如く、聖書中の古事を敷衍して、宗教小説を著し、億萬の善男女の意を捉ふるもあり。　小説壇は、又もや以前の混沌に返らんとせるに似たれど、要するに、これら浮薄なる反動は、一時の反動たらんのみ。「ローマンス死にたり」といふ神の聲は、動かすべからず。　げにや、今の心理小説と寫實小説とは、其の美術たるの資格に於ては、恐らくは正鵠を誤りたらん、其の描く所もまた偏寫ならん、はた不健全の譏をもまぬがれがたかるべし、只その廣く人間を主題とし、人間と自然との關係に留心し、潜心反覆、人間の定命を活寫せんと熱衷するの點に至りては、蓋し、今代の新精神の然らしむる所、決して一旦夕の流行の果にはあらず。　されば、全世界の精神が、一大頓挫せざる限は、此の小説の潮勢も、決して之れを挽回する能はざるべし。　而して露のドストイエフスキーが作は、露の虚無黨主義の太氣中に鬱勃たる、件の精神の陰影なり。　英の一批評家、嘗て『罪と罰』を評して、散文に敷衍したるマクベスなり、といひたるが、大體の評としては、頗る當たれり。此の書、一種怨世の大學生を主人公として、罪の成立ちゆく順序を活寫し、仔細に、其れに伴へる痛苦煩悶(罰)に及べり。　深刻骨に徹るの筆力、讀者をして悚然、慄然、惻然、又慨然たらしむ。　詢に其の題名に背かず、とい

ふべし。譯文は、未だ原書の三四分の一に過ぎざれば、爰に細評を下さんに由なけれど、第一卷のみを讀みたる時の感は

O dark, dark, dark, amid the blaze of noon
Irrecoverably dark, total eclipse
Without all hope of day!

只昨夜の殘燈の影(或は明けゆく空の薄明?)の、ヅーニャの消息と、主人公が母の言の葉と、信友ラズーミヒンのまごゝろと、主人公がハムレットに似たる半狂亂の行爲中とに隱約たるのみ。譯文は、すべて『浮雲』一流の言文一致にして、剛柔自在、男女、老少、都野、上下の口吻、まのあたりに聞くが如く寫し出だされたり。其の譯文の尤も巧なる處に至りては、讀む者、その譯文たるを忘れて、『浮雲』中の未だ出版せられざる一節に撞着したる思あるべし。不知庵主人の、否、近時の傑作也。若し翻譯の勞苦の、極めて容易ならざるを察せずして、疵瑕を求めば、稱に見出ださるゝ直譯の口氣と、無要なる原語の挿入と、調和せざる雅語の混用とに於て、不諧和の感を生ずべけれども、これはた前にいへる、最も巧妙なるあたりと照映するが爲の故にして、絶對の疵瑕といふ限にはあらず。なべての文が世の多數の翻譯の如くばかゝる

些瑕は、ほと〳〵目にたゝで讀過せらるべきなり。

（以上廿五年暮）

同前卷の二

不知庵主人が經營慘憺の翻譯、ドストイエフスキーが傑作は、諸新聞、雜誌はいふに及ばず、其の他の讀書社會の批評家にも歡迎せられたること事實なれど、買ふものと批判する者とは、格別の社會にありと見えて、好評の割合には、此の書の捌口あし、といへり。思ふに、其の理由種々あるべしと雖も、主なる理由は、此の作の長篇なるを一卷二卷と切れ〴〵に出だしたれば、探偵小說一流を喜ぶ買手の末を危みて二の足を踏めると、叙狀描寫の至精至緻なるがフウハリとしたるをのみ悅べる國俗の嗜好に叶はざると、露西亞名前の記えにくきと、分量の割合に價の貴きと、新聞紙上に廣告せざると、旨味の高尙なると、趣向の陰氣なると、などにやあらん。吾人は、其の他の點に於ては、殆ど讀者社會の歡迎せざるべき所以を看出だす能はず、何となれば、此の書の筋立は、甚だ高尙なる小說讀者をも悅ばすべき心理的旨味に富めると同時に、彼の探偵小說を愛玩する一流の讀者にも、新聞紙の殘忍なる雜報を喜べる輩にも、歡迎せらるべき事件に富み、またひとり譯文の上よりいふも、たしかに

明治の傑作の隨一にて、第一卷はさまでにも覺えざりしが、此の卷に至りては、おぼえず妙と呼ばざるを得ざる箇處數ふべからず。人情風俗こそ露國のものなれ、讀み〳〵て興に入りては、我れみづからラスコーリニコフと化したらんやうの感生じ、其の周圍に談笑悲喜するものは、皆血あり、肉ありと感ぜられ、いつしか譯文たるを忘るゝに至るなり。試に、譯文らしき究屈の跡の殘りたるに、鉛筆もて目印を附しもてゆきしに、讀み了へて後、其の目印のありか容易くは見いだしがたし、さる箇處のいと稀なる故なり。そも〳〵言文一致行はれてより此の派の文章に長じたる人あまた出でにたれど、二葉亭一流(即ち不知庵の流)の言文一致は、東京の俗語を巧に使ひこなす所に特質あり、『浮雲』の如きは、あまり俗間の通言多くて卑しげなり、と或新聞紙は批したりしが、これ『浮雲』一流の言文一致が最も長じたる所を看破せざる評なり。『浮雲』の事はさて置く、本篇の如きは、所謂通言俗語の利用によりて句々活動する者なり。例へば、左に擧げたる諸言の如きは、平生俗間に使用する平々凡々の言葉なれど、譯者が適當に其を用ひて、性情、擧動、風采、等を活現したる腕前、眞に及び易からず『言文一致形容詞範』とも稱すべし。

じやらくら、ゆつたり、こつそり、じつとりと物靜に、ぞろつかせ、ぐでん

言文一致體の好模範

ぐでん、おつとりがうとした、けば〳〵しい、ごんもりどぼけ、皮切、捨ぜりふ、揉上をこてつかせ、すつかり、きつばり、やきもき、きつかけ、もつれ、がなつて來た、むづり、むかばら、おど〳〵、わく〳〵、くさ〳〵する、やつきとなる、のそ〳〵、いきせき、へこませた、どつきりした、汗はじた〳〵、やけに度胸のすわつた、ぼうつと上氣、えこぢ、念入、うつかり、

これらの語の使ひかた、こゝはかうもわらじと思ふところ、絶えてなしとはいはねど、それはいと稀なることなり、全體よりいへば精妙と評しつべし。さりながら、かく一方に於て、俗言の使ひかた巧妙なるゆゑ、たまたま一つ二つ見ゆる新熟語（むしろ英和字彙の譯語）又は稗史言葉が耳立ちて聞こゆ、憤怒をフンヌとふりがなしたる古風之、「虚飾心」と音で讀ませたるは「むら〳〵として來たらしかつた」といふ句の上にはすわらず、V……」をなにがしとは稗史口調なり、「うら悲し」なども餘りに雅びたり。さはいへ、かゝる些瑕を取りいでゝいふは、つまり他が極めて妙なる故也、こゝらが讀者の欲の骨頂と知るべし。されど又思ふに、此の通言の多きことが此の書の賣れぬ一理由なるべし、『浮雲』の如きも地方の人は解しにくしといへりき。

此のたびも譯文の巧妙なるを評してやみつ、本篇につきての所感は完

備の上にものすべし。

（廿六年六月）

韵の種類

旗野、新井、兩氏が韵論を讀みて、予が嘗て修辭論の草稿中にものせりし、韵の類別を思ひ出だしぬ。　そは音韵學又は作詩學の門外漢たる予が一時の走り書なれば、初學者の參考にもなるまじけれど、さりとて韵論の行はるゝ當時をだに機とせずば、遂に匣底を得出でずて空しく反古紙とならんことの朽をしければ、要點を摘みてこゝの埋艸とすべし。

英、佛、獨、等の詩歌には、概してライムといふものゝ必要の附きものゝやうに見做されて詩歌の調律(リズム)に伴へり、近代に至りては沒韵律語(ブランクヴルス)といふものの出來(いでき)て、韵(ライム)はなくとも調律あれば、詩歌の形式には外れず、となりにたれど、其のむかしはライムの無きものをば破格とせりき。　さて此のライムといふものは、歐洲にては、中古ゴシック時代より行はれしものにて、上古の詩人等は絶えてこの物に注意せざりきと聞こゆ。　現にライム (Rhyme) といふ語は、元は Ryme とも Rime とも綴りて、「繼續」若しくは「數」などいふ義の古代の英語なりしが、後に佛語の rime の義と混ずるに及びて、始めて今の句尾同音の義となりぬ。　思ふに、獨語の Reim もまた

此の後の義と同じなるべし。

さて今のライムの定義は如何にといふに、其の釋しかた人によりて小異同はあれど、先づは下の如し。 ライムとは、詩歌の二句の最末の語(ヲオド)又は綴字(シラブル)に於ける聲の呼應なり、而して件の二句は直に相繼ぐか、又からざるも、餘り遠く相離れざるを要す、而して圓滿のライムは、同等に又絕對に、強音を附せられたる一箇以上の最末綴字の相呼應せんことを要す、さて其の最末綴字の中、母字と母字に繼げる部分とは、其の聲同一にして、件の母字に先だてる部分は其の聲全く相異ならざるべからず。例へば bold と told と(一綴) water と daughter と(二綴) cheerily と wearily と(三綴)の如し。 此の中第一例の old は相應じ、o といふ母字に先だてる b と t とは其の聲相異なれり。 又第三例の earily と eerily とは、其の綴りかたこそ少しく異なれ、其の聲は相同じ、然るに e といふ母字に先だてる ch と w とは其の聲相背けり。 新井氏の所謂韵是れなり。

畢竟ずるに、英語に謂ふライムとは、簡略に解すれば、甲乙二個の綴字(シラブル)が頭に相異なりたる子聲(コンソナント)をいたゞき尾に相同じき子聲を具へ(又は具へずして)相同じき母聲(ヴエル)を中にもてる時の名目なり。 爰に母聲と名づけたるはアイウエオの五聲なり、即ち a e i o u なり、又子聲とは其の他

の二十一文字をいへるにて、譬へばウクスツヌ(w k s t n)等をいふ。されば hen (ヘン) ken (ケン)の二詞はライムを成せり、フエヌ、クエヌの聲なれば尾の聲と中の聲とは相同じけれど、頭の子聲だけは相異なり、尾に子聲の添はらざるのみこそ殊なれ、我がカ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワの九聲が其の餘聲おの〱アにひゞきキ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、イ、リ、ヰの九聲がその餘聲おの〱イにひゞくと同理なり。　英國のにも、母聲に終はるライム稀にはあれど、おしなべては子聲に終はるもの多し。

『音韻啓蒙』にいふ、韻とは字音の響をいふ、たとへば、東の韻の所屬通。蓬。等のウ。とひゞき。始の韻の所屬胎。開。等のイ。とひゞき、魂の韻の所屬村。門。等のヌ。とひゞき、談の韻の所屬藍。甘。等のム。とひゞき、合の韻の所屬市。答。等のフ。とひゞき、薛の韵の所屬折。別。等のツ。とひゞき、麥の韵の所屬策。隔。等のク。とひゞける類を韵といふなり、しかれども、皇國にては、韵といふは名のみにて、音韵ともにコ。ヱ。に呼びとれり、故(かれ)按ふに、西土に生れたる人は字音のみならず、言語まで、單直の音に呼ぶこと能はずして、おのづから餘音ありといへり、餘音即ち韵(ひゞき)なめれば、これを匂(にほひ)といへり云々と。又曰はく、韻はヒヾキといへれど、ニホヒといはんかた優るべし、うは金玉及鳥獸びの聲まで餘聲をニホヒといひ、觀物に餘情の添ふをもしか

韻の三類

いひて、いづれも同義なめり、云々と。　旗野氏の礎といひて說ける韻とは此の義なるべし。

予案ずるに、旗野氏の謂ふ韻は、いと〳〵廣き意義の韻にして、同氏自からも斷られし如く、げに礎。としての義なるべし、新井氏のは然らず、所謂作詩學上の韻の義なり、其の旗野氏の韻論と衝突せしは、恐らく標準、立脚地の相異なれるに由來せしならん。　旗野氏の論は、音韻學上の韻の義を取りて、直に作歌學の上に應用せんとせしところに病あり、よし病ならずとするも、誤解せらるべき弱點はありしなり。　又旗野氏のは、英語のＮＫＲのたぐひをも母音にをさまるものなりといふ新しき說を根底としての韻論なれば、子聲(コンソナント)と母聲(ヴエル)とを截然たる分別ありと解釋せる世間通常の韻論が、直に同氏の說にうなづく能はざるも自然なるべし。

それはともあれ、予はこゝに旗野氏の新說の當たれるか否かを論ぜんとするにはあらず、予の本意は詩學上に謂ふ韻の種類を擧げんとするにあれば、直に其の分類に着手すべし。　假に韻といふものを『文心彫龍』に見えたるまゝに、同聲相應と解する時は、其の區域の漠然たるだけに、總名としては都合よし、吾人は左の如き系統表を作らまくす。

韻
- alliteration（アリテレーション）(頭韻)
- assonance（アツソナンス）
- rhyme（ライム）(脚韻)
  - line(間韻)
  - double(二重韻)
  - triple(三重韻)

此の中頭韻はもと英國の上代に行はれ、中ごろ脚韻の行はるゝと共に廢れしが、さりとて悉く廢れしにはあらで、料理法に於ける加藥の如く、近代にも時々用ひられたり。Churchill が戯れて

"Apt alliteration's artful aid"

といへるぞよく其の特質をも示したる。管々しければ例は擧げず。

さて、ライムも人のよく知る所、只其の三類の例を擧げて止まん。二重韻といふは、或は之れを rich rhyme ともいふ、こは佛國に行はるゝものにて英國にては可とせざる者なり。modéle と fidéle との如く、beauté と santé との如し。英國の例を擧ぐれば diploring と roaring との如し、アヂ

ソンが高足駄穿きたるやうなりと嘲りしは此の韻の不便にして醜きをいひしなり。　三重韻はその一層上手なれば下駄穿きての竹馬にや喩ふべき、annuity (アン、ニユ、イ、チイ) と gratuity (グラ、チユ、イ、チイ)との如し。　案ずるに、二重韻の佛國にて美とせらるゝは、母聲に收まる語の多ければなるべし。　又間韻とは

"And then to see how ye're neglechit,
How huff'd, and cuff'd' and disrespeckt"—Burns

又は

"And ice mast-high came floating by"—Coleridge

などの如し。　我が國歌の「夕されば衣手さむしみよしのゝよしのゝ山にみゆきふるらし」又は「みちのくのわさかの沼の花かつみかつ見る人に戀やわたらむ」又は「あふことをながらの橋のながらへてこひ渡るまに年ぞへにける」又は「白雪の八重ふりしけるかへる山かへる〴〵もおいにけるかな」などは、いくらか頭韻と間韻とを兼ね、又は旗野氏の説を用ふれば、(或は用ひずとも)第一の夕されは第四の白雪のとの如きは、脚韻をも有せりといふを得べし、若し脚韻をアッソナンスの義に解すれば。

アッソナンスとは西班牙、葡萄牙の律語に用ふるところにして、其の概して母聲に收まるところが稍、子聲にをさまるを正則とするライムに異なれるなり。　人の知る如く、件の兩國は我が國に似て母音國なり、例へば、ligera と tierra との如く、baby と chary との如く、calamo と platano との如く、mulas と duras との如く、大概二重韻をなせること、前の白雪のの歌にて、ヤマとカナとが二重韻をなせるが如し、

同補遺

前號に韻の種類を擧げたるが、校正疎漏にして誤りたるところあり、アッソナンスの條に西班、葡萄牙の韻は概して母聲に收まるとやうに云る云ゝは多くはの誤なるとは、其の下の例に mulas と duras とを對したるにても知らるべし、又彼の兩國を我が國に似て母音國とおほまかにいひたるも、母音多き國といふ程の義に解したまへ。　さて彼の文を印刷して後、ふとモーレルの文學史を見れば、アッソナンスの義を少しまげて間韻の美に用ひたるがあり、其の道の人の參考の料にもなるべかめれば、重複の嫌を避けずして、またこゝに掲ぐ。

英のドクトル、モーレルのいはく、

律語（ヴルス）にはライムのあるもあり、無きもあり。　ライム rhyme といふ語は「數」と

いふ義もてる古英語 rime の轉訛なり。アルフレッド王の時代には算學(アリスメチツク)は之を rimecraft と呼び星學(アストロノミー)を star-craft と呼びにき、さるほどに rime といふ語は之ば〱彼の希臘語の rhythm (律)といふ語と相並べて用ひらるゝより、いつしか彼の語より h といふ字と y といふ字とを借り來(き)て語形を改め、ふと見れば希臘傳來の語かとも思はるゝやうになりぬ。ライムには三種あり、首韻と間韻と尾韻となり。

モーレルは次に件の三種の特質を說けり、下の如し。

首韻(head-rhyme)は通常アリテレーションと稱す、こは各語の頭に同じ字を繰り返し用ふることに外ならず。古代の英詩は、第十四世紀に至るまでは、殆ど皆此の法を用ひたり。思ふに、此の韻法は記憶に便ならしめん爲に創案せられしものならん、筆記、印刷の行はれざりしころに、例の漂流吟客の工風せしものなるべし。今の尾韻(脚韻)といふものは佛、伊のロマンシスト派の詩人より英國に傳はりしものなり、第十四紀までは無し、チョーサルに至りて盛に用ひそめしなり。アリテレーションの一例は左の如し

"Peter Piper picked a peck of pepper off a pewter plate"

モーレルは尙予が前號に揭げたるチョルチルが秀句をも引きたる後、この法の第五世紀より第十四世紀まで盛に行はれたりしことを言ひ、おほよそ九百年間も流行せしものは、其の根深く生へぬきて、殆ど除き

アリテレーション

がたくなるものなり、とて、沙翁がアリテレーションの嗚呼なるを嘲りながら、みづからも間々

"Full fathom five thy father lies"—

"In maiden meditation, fancy free—"

などやうの句を成せり、といひ、又ミルトンが頗る此の法を好みし證として『失樂園』のうちなる

"Fixed fate, free-will, fore-knowledge absolute;"

並びに『リシダス』の中なる

"Weep no more, woeful shepherd, weep no more."

を引き、更に又スペンサルとテニスンとの句を引き、尚俚諺のやうになりたる句の中に此の法多く見えたり、とて "Love me little, love me long" 及び "Weal and woe" "Rhyme nor reason" "cark and care" 等を引けり。案ずるに、此のアリテレーションといふものは、いづれの國語にも多少あり、其の證は各國の俚諺にいちじるし、我が國の俚歌、就中、淨瑠璃にはいと多し。

アッソナンス

さてモーレルは間韵に說き及びていはく

> 間韵(middle-rhyme)とは母音の相呼應(コレスポンデンス)をいふ、或はアッソナンスともいふ、此の法英の詩にてはあまり用ひられず、こはアイスランドの律語の特質なり。マーシュ氏左のよき例を擧げたり、

Roll, O rill, for ever!
Rest not, lest thy wavelets
Sheen as shining crystal
Shrink and sink to darkness!
Lave with living water
Lowly growing sedges,
Till thy toil-worn current
Turneth, yearning sea-ward.

此の中 roll と rill との如き sheen と shining との如きは「半アッソナンス」といふとぞ。案ずるに、此の意義のアッソナンスは尋常謂ふアッソナンスとは少しくたがへり、予が前號に擧げたるぞアッソナンスの正解なるべき。若し我が國歌に押韻の法を用ひんとせば、西班のアッソナンスの外に法無からんか、彼の法ならば強ちに用ひがたきにもあらじ。現に『八雲抄』の中に、諸式の諸病を擧げたる證歌の中に、此の法に叶へるもの若干あり、アリテレーションに叶へるもあまたあり、此の故に、たとひ正則の韵法はなきまでも、同聲相應ずるは調律の自然なるべきに、と予が嘗て怪しみし折、予は我が國歌に正則の韵(人爲の韵)も變則の韵(自然の韵)も無きことを、匆卒にも、此の人爲の制限にのみ歸せんとせし

我が國歌に韻無きは人爲の制限に基けるあらぬか

ことありき。序ゆゑに一二を引く。

『八雲抄』諸病の條下、同心病のところに

我宿は道もなきまで荒にけりつれなき人を待させしまに(遍昭)

さかざらん物とはなしに櫻花おもかげにのみまたき立らん(躬恒)

なき二ありらむ二ありかゝる歌昔は數しらず今も撰集に多し俊成古來風躰曰八病中是等可去其殘はさりあふべきに非ずと云々、けふふりぬあすさへふらば長月の有明の月などいへるは俊成爲病但不可然歟

とあり。又四病岸樹病(第一句始第二句始同也或は此病可去といへり)俊の條下

夏ふかくなりぞしにけるおほあらきの杜の下草なべて人かる

天の河あさせしら浪たどりつゝ渡り果れば時ぞしにける

夏ふかくのなさなりぞしのなさ也、白露も時雨もいたく秋の夜のなるもしらずなど數しらす

とあり。其の他、風燭病、浪船病、落花病、頭尾病、胸尾病、膞尾病、聲韻病遍身病、など、いづれもライム、アッソナンス、又はアリテレーションを惡めるものなり。頭尾病の例

春ふかみゐての川浪立かへりみてこそゆかめ山吹の花

秋のたのかりほのいほの笘をあらみ我衣手は露にぬれつゝ

春深みのみさゐての河浪のみさ也此等は沙汰の外の事也

又膞尾病の例。

山風にとくる氷のひまごとに打いつるなみや春のはつ花

氷だにとまらぬ春の谷風にまた打とけぬ鶯のこゑ

又聲韵病の例、

足引の山かくれなる櫻花散のこれりと風にしらすな

一えづゝ八重山吹はひらけなん程へてにほふ花とたのまん

さくら花のなとしらすなのなと也上句の字本韻也下句の末同字也俊頼

此病告ありとも不聞といへり誠に可去にあらず

又遍身病の例、(これ『新選髓腦』の禁ずるところなり)、

とこ夏のにほへる庭はから國に織れる錦もしかじとぞ思ふ

白雲とみゆるにしるしみよしのゝよしのゝ山の花さかりかも

これは同字ある事也同字有三は號蜂腰有四は號鶴膝近代不禁上古多

尙アリテレーションの尠くとも一時嫌惡せられたりし證とすべきは、左の例なり

戀しさはおなじ心にあらずとも今夜の月を君みざらめや

秋風に聲を帆に上てくるゝ舟はあまの戸渡る雁にぞありける

秋風のあ天の戸のあなり第一始字第四始字同なり號平頭病云々

涙河いかなる水かなかるらむなと我戀をけつ人のなき

毎句上同字ある也一字は常事三字を禁なり

八千世經ん宿に匂へる八重櫻八十うぢ人もちらでこそみめ

さよめるは高陽院歌合歌なれど是はわざとよめる也、みさふらひみかさと申せみやきのゝなさいふ躰也、住吉歌合に此病倹成難之

國歌の古來韵を嫌へるは道理あり

私に案ずるに、我が國の短歌はわづかに三十一文字、其の間に同韻同聲あらば、あまりに著く耳だつべし、古人が同韻を病とせしもことわりありといふべし。所詮、我が國の歌に正則の韵無きは、國語の性質にのみ因るにあらずして、歌のいと短くて字數に限ありしにも由るなるべし、たとひ櫻坪氏の論ぜられし如く、韻無きをば歌にあらずとするも、尠くとも三十一文字の歌の韻は、英、獨のライムのやうにはあるべからずして、むしろ櫻坪氏が示されたるものゝ如き、曖昧含糊なる隱然たるライムならざるべからざること明なるが如し。英に謂ふライムの如きものが、毎に三十一字中に存せば、なか〳〵に耳ざはりなるべければなり。此の點より見れば、櫻坪氏の說の如きは、或は我が三十一字歌に用ふべき韻を說了したるものか、旗野氏はよく國歌の韵法を知る者といはんも、或は回護の語にあらざるべし。さてそゞろにも岐路に入りたり、前に立返りてモーレルの韵談を繼がん。彼れは尾韵を說きていへらく

尾韻(end-rhyme)は今單にライムと稱す。こは彼の羅甸語の轉訛なるローマンス語、卽ち佛語、伊語より生れしものなり。　ミルトンは晩年に至り痛くライムを賤しみしが、同代なるバトラルは、ライムは詩人の想を導くものなり、とたゝへて、「ライムは律語の舵なり、それによりて舟のやうに律語は前へこがれゆく」といへり。　ドライデンもまたライムの想を助くる由をいへり。(中略)。英語は元來同韻の語に乏し、西班牙語の如きは然らず、平均せば、英語は一語につき同韻なるはわづかに三、西語は一語につき廿五なり、されば西語又は伊語をもて韻語を綴るは、英語もてするよりも八倍がたたやすし、獨語もまた韻に富めり、云々。

これに比ぶれば、支那語の如きは、更に同韻の語に富めるものなり、又西班語のアッソナンス多きをも韻の中に數ふることを許さば、我が國語の如きも、甚だ同音に富める國、所謂語呂口合(パンニング)の如何に比類なく自由なるかを見ば、此の言の眞なること直に知らるべし。　今の韻を論ずる人、概してライムのみを韻なりと見做して、我が國の語には韻無しとやうに説くはいかにぞや、三十一文字に韻を用ふることは單調におちいるの弊もあらんが、新體の長歌には、或はいくらかの要用もあらんか、尙識者の考を俟つ。

驅儺

年男といふ者、米はかる升に大豆盛りて、疫癘の鬼を逐ふことあり、これを厄除のことほぎとせしは昔となりぬ、今は福は内へ、鬼は外へ、といふ呼ばひを年の尾にする家もなし。　かの福や、鬼や、本目に見えぬものなるを、何をさして福と名け、鬼と呼ぶやらん。　かなたの家の名けて鬼といふものと此なたの家の鬼と呼ぶものと同じからずば、節分の夜半の街頭は、如何に奇怪なる現象を呈すらん。　小人の家はありとある美徳をや鬼と名づけておはんとすらん、善き人は醜き行を鬼と呼びて除せんとすらん、福と福と鬼と鬼とが衝突して去就に迷はんはをかしからん、と思ひ〳〵寢るほどに、其の夜稀有なる夢を見たり　譬へば、月宮殿ともいふべき輝きわたる館の大廣間に、銀燭まばゆく點しつらねたるが、其處に、肩衣着け、長き袴ふみしだき、シカツベなる面地したる男、四人も五人も七人も八人も、數限りなく居て、おの〳〵例の大豆盛りたる升を手にもてるは、年男といふ者なるべし。　館の八面に向かひて嚴しき聲して、云々の福は内へ、云々の鬼は外へ、と鬼と福とに形容詞添へて呼ばふが、先づ尋常のとは異ざまなり。　昔の年男は、一人とこそおぼえた

りしに、これはまた珍(めづら)しの追儺よ、と見てあるほど、先づ其のうちの一人(ひとり)が呼ばふ、

文章の末技にのみ拘(かゝづ)らひて、みづから彫蟲の奴(やつこ)となり、剰へ他をも擧げて刻鏤彫琢の死術に役々たらしめんとする小魍魎よ、汝また明治の文壇に跳梁すること勿れ。

又ひとりが呼ばふ、

汝、國文といふことを如何に心得たる、手爾葉といふものは國文の命ぞ、これなくば千万言の文章も魂無きにひとし、係結のかたはしをだに諳んぜぬ鬼、又は苟も文の格(さだまり)を破らんとする鬼は、とう／＼西の海へ。

又ひとり、

明治の文學は創始的ならずばあらず、そもや創始的文學の形式は、勢(いきほひ)不完全ならずばあらず、さるを只管に始めより形のちとばかり醜きをあばきほじくりて、搗(つき)たての鏡餅のやうに感じ易き "Genus irritable" の胆玉を虱の目の玉よりも小さくならせ、さてやう／＼萌芽せんとする新文學の精神を壓殺(おしころ)さんと試みる蜮鬼よ、汝また明治の文壇に横行すること勿れ。

又外の男が呼ばふ、

明治の文學は既に或一定の形式をなさんとこそしたれ、例へば文章の形式を見よ、已に明治の時文といふ特躰を成さんとしたるに非ずや。 汝妄に新精神とやらんいふことを口實にして、放埒杜撰の文躰を創始し、已に

成れる格式をさへに打破らんと試みる魔鬼よ、世の昧俗にすら宿歳の餘(あまり)をさゝめて、新年に至りて、こを街頭に棄つるの習あり、汝また古き滓渣を舊芥溜のうちより拾ひいでゝ、之れを新年の文壇になもて來そ。

又ひとりがいとあらゝかに呼ばふ、

物は極まれば腐敗し、さゝまれば極まる、明治文學はことしわづかに二十有五年ぞ、人に喩へば血氣の少年ぞ、三十にして立たんに後れたりといふべからず、吾人はむしろ其の進みて止(とゞ)まらざらんを祝す、疵あらばあくまでも治せよ、曲りたらばあき足るまで直うせよ、文も質も彬々たらしめよ。

ひとりがたけりて呼ばふ、

咄、汝小摸型を鑄ることを好める種々の疫鬼よ、今の將に發達せんとする文學を拘束してそを支那の佳人の足のやうにし、歐米美人の蜂腰の如くすな、ベッス朝の大自由は多數の詩人を産み、復位期(リストレーション)の杓子定規は無數の俗文人を作りぬ、摸型を鑄て方圓を示さゞるを得ざるべくば、尠くとも十九世紀大の摸型を造れ、希はくは宇宙大の摸型を鑄よ、汝死文格の中に明治文學を幽せんとする鬼、汝死法則の中に明治の美文を禁錮せんとする鬼、汝臨時の勸懲の中に史、傳、小說を押込めんとする鬼、汝大なる瓢を見てその腹中に物充てりと思ひ、蟻の穴の小きを見て其の社會にも一のマイクロコズマスあるを察せざる鬼、汝文學を擧げて政治教育の奴隷たらしめんとする鬼、汝文學をなして庶腹(てかけばら)の哲學たらしめんとする鬼、汝、小說、戲曲

を擧げて一種の寫眞畵たたらしめんとする鬼、汝、文學を擧げて抒情の詩たらしめんとする鬼、汝、文學をもて穢き胃袋をやしなはんとする餓鬼、汝、文學によりて冬のあしたの人の息の如き一時のまぼろしの名を得んとする餓鬼、avaunt! avaunt! avaunt!

頰鬚おそろしくおひたる年男、慨然として叫ぶ、

嗚呼、明治の文學は何としてかく纎弱なるぞ、ジョン、モーレーはテニスンの Idylls をすら such little pictures as might adorn a lady's school と評したり、我が明治の詩文を見ば、何と評すらん。彼等今の文人の眼中には「大」といふ觀念は無きか、彼等が墨汁は二百ページの文を艸すれば乾き果つるか、汝向三軒兩隣に棲む鬼、小刀細工の鬼、箱庭の鬼、エビス切れの鬼、端物の鬼 out! out!

又ひとり、

哲學者は徐歩し、詩人は翱翔す。汝哲學者を學びて理路を傳ひて詩美に達せんとし、鐵のステッキで花崗石(みかげいし)の橋を叩いての無限旅行、クダラもない名所穿鑿に五十年を夢にせんとして迷へる理窟餓鬼、off!

又ひとり、

剖折分類、いまだ以て宇宙人間の玄々を證するに足らず、頓悟直覺、ひとりよく古今を洞觀すと速斷すべけんや。力足らざらんか、しばらく其の一を頼とせんはよし、ひとへに其の一を是とし、他を棄てんとするはいかにぞや。汝頓悟の慢鬼、begone!

大なる男の大聲に罵り呼ばふ、

咄、々、々、汝美の何たるを知らざる痠鬼、絶對に空間時間を解脱したるを美といふを知らぬか。政治を解脱するいまだし、哲學を解脱する、いまだし。汝勸懲を解脱せよと說きながら、人間を解脱せよと得說かずして頻に人間の運命を描けよといふ道德餓鬼、汝と勸懲餓鬼との間の差別は只わづかに度の差別なるを知らずや。人間餓鬼、out!

若き年男憤然として呼ばふ、

嗚呼、何ぞ敬虔眞摯の文字の尠き。汝、浮薄輕佻、一時の戯謔に醉生夢死せんとする孱弱のバチルス、何ぞ汝の色の浮淺にして嚴格ならざるの甚しき。何ぞ其の聲のたはれたるの甚しき。何ぞ其の道戯たるの卑しき

みやびたる年男の玄やなら〱呼ばふ、

ハレマ此の節の文學は何とてかう理窟にこだはることぞ。詩文がことわるものかの。六づかしい貌が大文章ならば、閻魔と久米の平内とが大詩文の雛形でおじやらうぞ。理窟の化物、七里けんばい、さらり〱西の海へ。

又ひとり、

眞摯とは何ぞ、眞摯とは何ぞ。心の眞摯か、形の眞摯か。崇嚴にして眞摯なるあり、優美にして眞摯なるあり、好笑にして眞摯なるあり、形にこだはる眞摯の鬼、out! 形の眞摯にして心の眞摯ならざる鬼 off!

この外、小說、戲曲のたぐひを鬼と名けて除かんとするもあれば、歷々と表に主意のあらはれぬをば、なべて無用の長物鬼と呼びて、逐ふもあり、博覽をむねとするを叱りて、汝古る物を重んずる柳原乃至日蔭町的詩魔よ、汝が腦の古物館のやうなるに慢心して妄に今の originality を輕んずるな、と呼ばふもあれば、汝古人未發のたはごとを言ひ出でたるに誇りて、傍ら人無きが如く、古人を誹謗し、些の階子をだに用ひずして淺草の凌雲閣に攀登らんとする盲鬼よ、とて、天才がる作者鬼をたしなむるもあり、怪溢なる文字を鬼と視て驅るもあれば、俗語を疫癘の神のやうに追ふもあり、寫實小說を魔鬼よと罵り、鰻通めかして、筋は內へ、といひいひ、大豆はら〳〵とまきかくるあれば、下總芋のやうに筋ばかりなる小說、又は觀念小說などいふを戶口まで驅りたてゝゆくあり。入らんとする福と迯げ出でんとする鬼と額合はせしてけしとぶ、やう〳〵福が起ちあがりて入らんとすれば、汝は西の海へゆくべき鬼ぞ、と罵られて、トチまよひ、あわてゝ走りでまくすれば、以前の鬼、福よ〳〵と呼ばれて這入らまくす。夜はやう〳〵ふけても、鬼と福との出入果しなし、はては年男と年男と言葉あらそひを起こし、いらだちて握みあふ。鬼ども、福ども、あるかぎり立ち迷ひ、惑ひありく。其のうちに夜は明けぬ、鬼

がから採み採まるゝうちに、一足づゝ進むも福もそのまゝにゐたり　世の中のさまか、と見るうち、目の醒むれば、けふは廿五年の年の尾と人の知らす。　變はらぬをめでたしといはば、來ん年もまためでたかるべし、と思ふ。

（以上、廿五年十二月）

文學と報酬

英國現代の小說家、ヲルタル、ベザントが嘗ていへるによれば、英國の文學が一種の營業の如くなりそめしは、女皇アーンの時代即ち博士ジョンソンの頃よりなり。　現に博士の如きは所謂賃取著述(ハック、ライチング)によりて好生計を營みきとぞ。　又同國にて、文學に對する報酬の增加し來たりしは、十八世紀以後の事なり、遠くはスコット、バイロン、近くはユーゴー、チウマ、トロゝープなど、皆文學によりて巨利を得たり。　要するに、現世紀に至りては、文學、就中、小說の著作は、相應の產を作るべき、否、時としては相應の金滿家となり得べき捷徑の如くになりぬ、任他、文學旺盛なる國々にても、文壇は決して百發百中の射利場には非ず、就中、初陣の當坐に在りては、艱難なる事極めて多く、假令幸にして其の作は當たるとも、金錢上の利潤の得らるゝまでには、頗る永き歲月を要するなり　英の當世紀

中の二大家、テニスン、ブラウニングなど、其の好例也。散文家にてはカーライルが一例也。さりながら、眞の天才に取りては、利と不利とは問ふ所に非ず、彼のヲオズヲオス、シエリー、ホウソオンなどの作は、いづれも賣口惡しかりしが、彼等は之れに管せずして陸續と著作せりき。所詮、天才にとりては、思ふ事いはざらんは胸苦しき限也、述懷は彼等が性の必至（ネセシチー）なり。スコット、ユーゴー、サッカレー、デッケンス、エリオット等は多少大なる利得を博せしこと、猶シエークスピアが其の作によりて利潤を得しがごとくなれど、畢竟はこれ彼等が望外の結果なりしのみ、彼等はたとひ何の利益を得る能はざりきとも、彼の西班牙のサルワンテスの如く、報酬の有無に拘らずして、著作せしならん。天才は猶噴火山のごとし、其の衷心の熱火を吐くに晝夜晴雨の別なきなり。さすれば、文人と報酬との間には、殆ど何の關係もなかるべき筈なれば、「文學と報酬」などいふ題目を設け來たるは、徒に文學界の清淨教徒に嘲笑罵詈せらるべき種子を蒔くに似たれど、明治の文學界は、決して天才のみの社會にあらず、當世の風潮を觀察する材料の周到綿密ならんことを欲する者は、必ずしも利を言はざらんとするにも及ぶまじ。

我が國にても、文學（廣義）が一營業の形をなすに至りしは、文化、文政度以

後なるべし、而して一葉幾何と價を定むるに至りしは、蓋し、明治以後の事なり。『西洋事情』『日本開化小史』の時代は暫く措き、現今の有様に就いていへば、報酬は殆ど定めなき有様なり。　彼の不可思議の魂膽と隱微なる費用との伴へる敎科用書の原稿料と官省の御用翻譯の報酬とを別物として觀れば、最高價なる原稿も十行二十字金貳圓の上に出づるものは無かるべし、而して快樂の爲に讀まるべき著作、即ち小說類の原稿料にては、櫻痴居士のなどが頂上ならん、彼れが新聞社などより得る所を聞くに、一日分(小新聞の二欄又は一欄半)金二圓ぐらゐ、十行二十字に積もりて、貴きは一圓二十錢位なりとか。　之を最上として貴き原稿料の例に引く程なれば、他は推しても知らるべし。　蓋し、我が國にては、今も尙武士は喰はずとも高楊子ぶりの見識、尠くとも表面上には生存せれば、一葉いくらならば認むべく候と、流石に筆工的公告を屑とせざるが詩文人の常なり、されば方今の原稿料は割合に廉なる者なり、十四行卅五字詰一葉一圓ならば上等のうちなるべし。　而して出版者の方より言はば、一葉一圓の原稿料を拂ひては、今日の有様にては、餘程見込のある著作ならねば、損毛を生ずべきゆゑ、容易くは手を出さぬ事なるべし。　さて最下等の原稿料に至りては、一葉いくらとはトテモ積れ

ぬがありとか、無代にても買はぬといふ限の作もあり。それらは書肆に賣るよりは屑屋に與らするかたが幾分か利かたなるべし。かゝる有様ゆゑ、豫め書肆と協議の上にて著述、翻譯に着手するか、又は我が已に得たる名を頼みて冒險するか、此の二様を除きて粗忽に著譯する者は、幾百葉の草稿を出來上りたる上にて、面倒なる思をして、或知已より紹介書を貰ひ、名ある出版者五六軒へもちあるき、トヾ匣底へ叩きこみ、書肆の亭主を活眼無しと罵り、社會を偏頗なりと罵り、自家の薄倖不遇を憫み、世間多數の虚名家を卑み、人情の浮薄なるを慨し、肝癪を起こし、胃病を釀し、果は厭世の歌一篇を作るに終るべし。内情をよく知らずして看一看せば、德富蘇峯氏は一擧して大名を博し、其の處女作の一小冊子のみによりて天下を驚かせしに似たれど、眞に同氏を知れる人は、『新日本の青年』を讀まぬ前に、已に同氏を知れりしなるべく、詮ずるに、其の成功は突然に似て絶對の突然には非ず。又は村上浪六子は、一朝にして評判よき小説家となりしに似たれど、同氏もまた其の以前報知新聞社にありて且く出世の素を造りき。紅葉の如き、露伴の如き、其の名を博せし源を探れば、由りて來たるところ頗る遠し。出版出肆又は社會は、彼等の名作を見て後に、はじめて彼等を知りしならめど、吾人が所

謂批評的讀者の少數(有力なる少數)は、夙に彼等の才能を認めたりしなり、彼等の今日あるは其の由來長しといふべし。 然かるに今の新文人、多くは此の理を察せずして、絶對的に一擧して洛陽の紙價を貴からしめんと欲し、或は絶望し、或はひがむ、理無きの至極也。
外國にては、大望ある nobody の、先づ somebody とならんとするや、多くは新聞、雜誌社に寄書す、これすら都府のには容れられざるが故に、地方のに投ずるがいと多し。 我が國にても、近來この出世法行はるゝやうになりしが、これだにまづは水邊の厄難を免れず、そは文章、着眼、等の拙劣なるが爲のみにあらず、起艸者の世間を知らざるの甚しきが之れを致すこと十中七八なり。 彼等はみづから信ずるとみづから欺くとに太しく、indifferent の作をいと長々しく認むるが故に、載せたくも載せがたきが多し。 其の他くさ〴〵の理由あれど、其の七八分は起稿者みづからの越度に歸すべし。 こゝに新聞紙、雜誌といふうち、今は新聞紙に投書を載するものは極めて稀なり、雜誌に至りても、第二流に位する者の外は、無紹介の投書をば載せざるが通例なり、然れども第二流以下の雜誌、就中、遊戲三昧の元素多きものには、かゝる珍客を請ずべき餘白之しきにあらず、將來に名を成さんと欲する者は、徐にこれらの餘白に出沒

して出世の素を作るべし、其の究竟目的の高下に拘らず、詩文を以て世に立たんとせば、かばかりの順序をば蹈まざるべからず。其の身の爲には殆ど必至なる述懷を表白すべき處なきに憤りて、自業自得の厭世主義におちいり、不健全なる詩文人とならんは非ならずや。

方今文學を一種の營業として成立たしめんとせば、新聞紙、雜誌の記者たるにますものなかるべし。主筆記者、又は小說の主筆となりて、相應の生計を營める者多し、尤もこれもまた階級はさま〲なれど、最高を百圓とし、尋常を二三十圓の間とす。小說家にては百圓が頂上なるべし、小新聞の續物を休みなくものして、傍ら毎日出社して雜報の手助をなし、而もやうやく廿五圓より三四十圓限なるもあれば、隔月に一くさり宛小說を擔當して、傍ら雜報を助くるのみにて、五六十圓を得るもあり、我が家より原稿を送りて、百圓乃至四五十圓を得るもあり。こは作者にもより、社の大小にもより、社主の料簡にもよるとゆゑ、殆ど大概の標準も定めがたし。百圓などいふは異數なり、而して中以下、即ち普通の例に至りては、十人十色、二十圓以下無報酬までの差別ありと知るべし。そのうち四五十圓以上なるはまだよし、二十四五圓以下二十圓あたりの hack work は、見識の毛ほどもある者には出來ぬことなり。嘗て

本誌にて「讀書社會」を評したる文を參看して推量すべし。かゝるたぐひの新聞小說家とならば、一生poetとはならざらん覺悟肝要なり、何となれば、新聞的續物の太氣は根性を腐蝕せざれば詩魂を腐蝕し、詩魂を腐蝕せざれば身體を腐蝕し、身體を腐蝕せざれば特行の勇氣を腐蝕し特行の勇氣を腐蝕せざれば俸給を腐蝕する恐あればなり。

時文の傾向

吾人嘗て我が明治新文學の、百川が堤防を斷(き)りて一時に汎濫したるが如く、陽春の百花が一時に蕾を破りたるが如くなるを見て、其の不秩序の甚しきと其の英氣の勃々たるとが、彼の文藝復興の大潮に蕩搖せられたりし、大自由大放埒なるベッス王朝の英國文學に相似たるを感じ、前途きはめて多望なるべしと祝賀せしこと屢々なりき、然るに、廿四年、廿五年の經驗は、次第に吾人をして此の樂天的豫望の、大かたは空だのめなりしことを覺らしめたり。明治時代は、理論上よりいふも、實驗上よりいふも、竟に彼のベッス的文學を產するに至らずして過ぎ去るべきなり。

宇宙と人間とに透徹する無聲の律呂(リヅム)は、我が明治の社會にも鳴動せり、

或時は高く、或時は低く、張又弛、揚又抑、動又靜、上下、浮沈す、されども我が明治の音樂は竟に宇宙を鳴動する大音樂たらずして止まんとするものゝ如し。 古へよりの經驗に徵するも、我が皇國の社會的、兼、精神的律呂は、譬へば我が雅樂の律呂に似たり、其の聲律は、たとひ絕頂に達するも、尙且縝重にして溫雅、曾て彼の大オーガンの駭天驚地的神籟とはならざるなり、又、たとひ悲絕痛絕の聲となるも、幾ばくもなくして平穩優美の調に戾り、竟にマルセイルズの軍歌の如き、殺氣勃々、悲壯激越の聲調とならずして止むなり。 德川氏三百年(少くも皇國に於ける)絕長太平の反動は、皇國未曾有の變調なるべけれど、それすら僅々二十有五年にして、怒濤收り、激浪しづまり、不自覺の間に、鷗眠り帆かへる、長閑なる斜陽の好風景とならんとす。 彼のわづかに二百年弱の反動によりて歐米全土をさへも蕩搖せし佛國の革命に比ぶれば、何ぞ其の力の微弱にして其の果の平穩なる。 思ふに、かくの如きは孤島國の本來の性格か。 嗚呼我が無聲の律呂は、これを有聲の樂に比すれば、琴か、瑟か、胡弓か、三絃か。 或はまた國俗の心のびらかにして、不自覺に極端を惡み、常に中庸を愛し、名にしおふ君子の國たるに背かざるによるか。 そもそもまた善にも弱くまた惡にも弱きか。

見よ、維新以後の反動の頻繁なりしことを、又頻繁なることを。政治社交の上は、吾人之れをいふを要せず、ひとり文學の上をだに見よ、假名字主義、羅馬字主義の、さしも一時にかしましくして、何ぞ其の命のさしも短かゝりし、言文一致論の、さしもえばらく甲斐々々しくして、何ぞ其の熱のさしもいちじるくさめ果てたる。寫實小説の芽いまだ寸餘ならざるに、理想小説の疾風文園にわたりて雜艸靡然として萎れなびき、批評家の備はらんことを望む聲、いまだ天の一方に依稀たるに、人大かたは議論の反響に倦み果てたり。青年わづかに三十にみたざる作者に、大詩人の傑作を望まんも、人の無限欲の自然なれば、吾人之れを咎めざるべけれども、只その之れを求むるに急なることの、何ぞ甚しく理にたがへる。世人が其の眼前の作物を評して、苟も容易く許さざるはいとめでたし、さもあれ、好んで大家號を壯年作者に許與し、而してまたみづから之れを嘲罵するは何の心ぞや。世間よ、汝は概して大放任の勇なし。汝は新體の時文を創始せんと欲せしにあらずや、何ぞ又忽ち古文法の奴とならんとはする。汝は瞠若として國文學勃興の潮勢を打ながめたりしならずや、何ぞ遽に痴夢の醒めたらんが如く、再び平民文學の必要を唱道せんとするぞ。要するに、律呂の小變化の疾急に、して、殆ど

ゑばらくも同調に止まることとなければ、醜も絶頂に至らず、美も極端に至らず、明治文學は、譬へば猶跛子の走るが如く、三步一顚、二步一蹉、さきには多望なりと見えたりし放逸自由の文學より、波のうねく〱たゞよひ移りて、今や回顧因循なる覊絆的文學の彼岸に流れ寄らんとす。べッス文學と見えたりし明治文學は、今や明に英のアウガスタン文學の面影を呈し來たる。

アウガスタン時代

吾人は明治廿六年以後の文學を稱して明治のアウガスタン文學といふ。誤り解する勿れ、吾人は羅甸文學に對して玄か名くるにあらず、英國のアウガスタン時代、即ち女皇アーン時代の文學に似たりとて玄か呼べるのみ。夫れ羅甸文學のアウガスタス時代には、ヴルジルあり、ホレースあり、其の他幾多の詩人吟客、星と輝きて輩出したると同時に、上に詩眼ある明主アウガスタスの、懇に文學を庇護奬誘するありしかば、一代の文華燦然として古今に驕れり。英のアウガスタス時代に至りては其の趣異なり、清淨徒が枯禪主義の反動によりて呼び出だされし復位期の荒淫奢靡も、此の時に及びてはやう〱に沈澱し、佛蘭西を經て入り來たりし古文學の死法則はあまねく詩文人の創才を束縛し、ド

ライデンにはじまれる修辭の絶技は當代の一明星ポープの韻語に及びて其の圓滿に達し、律語家おの〳〵競つて其の黄絹幼婦をのみ鬪はするを譽とせりき。ソウシーのいへる如く、こは尠くとも文學上の最惡の時代なりき、又マッソンのいへる如く、崇嚴の滅絶せる時なりき、詩の死に絶えたる時なりき。ジョンソンが『詩人傳』中、Rhymist ならずして Poet たるもの、そも〳〵幾人かある。西人已に當代を評して Prose の age といへり、其の嗜好の俗に偏したるをいふなり。當代は政治論、政黨爭の時代にして、文學は其の一具たるに過ぎざりしなり、隨つて文人は保守黨に屬せざれば民黨に屬し、大かたは政黨の爲に文を作りき。當代は個人を主とし、人身攻擊の盛なりし時代なり、又 Club と Coterie との全盛期なり、而して此等政治的クラブ、文學的コトリイ、互に偏執して相爭はざるはなかりき。是れ此の散文的文學の、一方に於ては、政治文學の泰斗バルク、ピット、シェリダン、ジュニアス等を生みし所以にして、他方に於ては、新聞紙、雜誌の花を開かせ、寫實小說の素を作り、融通文庫の源をひらき、スヰフト、アヂソン、スチール、ストルン等の如き嘲世諷俗の名家を出だしゝ所以なり。當代の人は眞に眞理の爲に眞理に、美術又は文學の爲に美術、文學に熱衷せしこといと稀なり、はた長閑に安心

立命して宗門に歸依したりし時代にもあらず。僧侶の相爭ふや、他の政治家、文人の相せめぐに髣髴たるものありき、蓋し、當代は憎怨、嫉妬、嘲噱、輕蔑、諷刺の世なりき、隨うて當代の文才は他の欠點弱處を訐きてみづから快とし、其の美なる所は大かた之れを看過し、只著明なる疵瑕をひろひて、そを警句秀句となすを、一世の譽（はまれ）としたりき。 教授ワードいはく、アウガスタン文人の諸感情は、其の憎怨の外は、頗る薄弱なるが如し、就中、其の文學に反映せる所然りとなすと。眞なるかな此の評。邦人往々スヰフト、アヂソン、ジョンソン等を評して古今の大文豪の中に列せしめんとす、彼等はスヰフトの厭世主義のいかばかり自己主義の權化なるか、アヂソンの溫厚なる諷刺が如何に淺薄なる哲學と宗旨とに基けるか、ジョンソンが其の咄嗟の作『ラセラス』に於て（其の咄嗟の作なるだけになか〳〵に彼れが眞の情懷を）表白せし厭世的樂天主義が、人間の禍福を見る能はずして、常に一個人の幸不幸にのみ着眼したるかを見ざるか。 彼等は當世を眉間外に置く能はざりしものなり。見よ、批評家としてのジョンソンを、彼れは詩人を評して宇と宙とを解脫せざるべからざるものと敎へながら、みづから起ちて古今の詩を評するや、其の言はと〳〵勸懲主義に流れたり、其の當時當處を解脫する能は

ざりしや明著なり。畢竟するに、英のアウガスタン文學は世間的文學なり、散文學也、俗文學也。

明治廿六年

見よ、廿六年の文壇の將來を、汝が眺望美なるか、遠大なるか、濶然たるか。新聞紙、雜誌は漸く發達して『タトラル』『スペクテートル』『アイドラル』『ラムブラル』に恥ぢざらんもの遠からずして出て來たるべし、否、或は今の雜誌中、已に彼等を凌げるもの、又は凌がんとするもの、一二のみならざらん。蘇峯、碌堂が發企せし文學會は倒れたれども、硯友クラブあり、根岸飲抜無盡會あり、これら皆彼の「土耳古頭（ヘッド）」の會合に優らんとも劣るべからず。大字彙を編まんとする博士ジョンソン、四方に雄視し、彫琢万回のアレキサンドル、ポープ、散文界にあまねく、後に名優たらんとするガーリック、處々に徜徉し、スキフトの卵、アヂソンの面影、フィールチンクの後身、スモーレット、デホー、リチャードソンの血族、方に文界に充滿せり。今の寫實小説をもてゾラの面影なりと速斷せるものはフィールヂング、デホー、スモーレット等が世に廣く聞こえざる諸社會的小説を繙きて見よ、又今の律語論を主張するものは宜しくドライデン、ポープ等が苦心經營の跡を見るべし。諷刺家はスキフト、アヂソン等が

腸を探れ、批評家は『書籍の戰爭』一部をだに味ひ見よ、則ち吾人が、十八世紀の英國アウガスタン文學を度を小にして繰返しながら、揚々として十九世紀の明治新文學を創始しつゝあり、とかたはらいたくも誇れることを覺らん。 嗚呼人間は同事を繰返す動物なり、吾人若し果たして同事を繰返して休する能はざるものならんか、千年もまた一旦夕のみ、前進の望竟に成るべからず。 起きよ同胞、吾人は奮つて似而非アウガスタン文學を抛棄せざるべからず。 蜉蝣は一日に、草は一季に、木は一年に、一生を終ふ、明治文學は僅々二十有五年の間にエリザベス時代よりアーン時代までを經過せざるべからざるか。 何ぞ隆替のさしも速なるぞ。『風流佛』と『浮雲』と『舞姫』と『伽羅枕』とが明治ベッス文學の紀念なるか。 ベッス朝の面影がかくの如くにして止まらば、アーン時代の面影として現れん明治のアヂソン、ジョンソン、ポープはた大に頼むに足らんや、またそに次ぐべきハノーヴル文學も恐らく翹望するに足らざるべし。 邦俗は竟に Grand scale に搖動する能はざるか。 吾人もそのはじめは短氣なる世間を諷して大なる望を後日に繋がしめんと欲せしが、そは進み〳〵て一日も止まらざらんことを願ひしのみ、因循回顧して姑息せんことを望みしにあらざりき、然るに今や我が文壇の風

潮を觀れば、(假に文壇を個人として觀れば)、先には東に向かひたりしものゝ、いつしかに全くその正的を棄てゝ、今は西にのみ向かひ、昨は北に猛進せしものゝ今日は南へとあこがれゆくめり。 こは其のはじめに定めたりし方向の客氣の沙汰に因れりしを、今俄に覺れるが爲の故か、前日の計畫の無識無經見の謬想なりしが爲か、そも〳〵亦今の逡巡が浮氣のわざか、流行の玩具となりたるが爲か。 見ずや、はじめは山に入りて苦行十年に及ぶべしと見えし文壇が、いつの間にか得道正覺して入寂せんとしたるを、又見ずや、無底の井の底におちゆくかとおもはれし思索的文學が、瞑想僅に二三年にして頓悟徹底し、安處立命の地を得たりと吹聽するを。 怒るもせばし、悲むもせばし、悟るも早し、安ずるも疾し、我が國人は、なべて神童といふものに似たるかな。

首府と地方と

が文運の度を同うせざるは異しむに足らぬことながら、交通の便宜を利用する志の地方の人士に乏しきは惜むに堪へたり。 そも〳〵吾人が談理を主とせずして報道紹介をむねとするは、いさゝか地方の人、局外の有志の爲めに、此の不足を補はんの期望に出でたりしが、前一年の

知已を五十年以後に俟つ

經驗は、吾人の望の、例の如く、空望に屬すべきことを證したり。　夫れ平叙的事實は、他の快活なる議論に比ぶれば、興味乏しきことと勿論にして、報道、通信、消息、等の、他の講義、評釋、等に比ぶれば、目前の効用をなさゝることも勿論なり。　吾人頑昧なりと雖も、はじめよりかばかりの理を察せざるにあらず、平叙的報道は、尠くとも五十年以後の讀者の爲の外には、何の裨益をも與へざるべし、と其の始めより覺りながら、尚頑然として記實の主義を取り、多數の讀者の最も悦べる、講義、評釋の欄をも收縮し、吾人の誠意の及ばん限、一意現在の趨勢に留意し、暗に當來の方針を探らしめんと欲したる、此の間幾分の眞摯なる微衷の存したるを信ず。しかるに客秋、以來、四阪八邊より來たる注文を見るに、幾十通に上れるうち、一として講述釋義を需要する聲にあらざるはなし、只一通某が送れるものが講義の廢止を請求したるのみ、それすら記實の廢止を求めたり。　吾人は地方少年の文學講習に志厚きをよろこぶと同時に、その只管に現在有るを知りて未來あるを察せず、文字中の文學を學ぶことに熱心して、文字外の文學を修むるの心なく、死文と活文との差を見るの眼なく、十九世紀の日本が如何に大なる任務を負はざるべからざるかといふ考は絶えて無く、(この語大言に似たれども、尠くとも口にだに

せざるべからず)碌々として死文の似而非講習に拘泥し、みづからおのれをあざむかんとするを歎惜せずんばあらず。 讀者の多數は必ず言はん、吾曹は文人詩各とならんとするものにあらずと、嗚呼誰れか諸子を舉げて文人詩客たらしめんと望むべき、吾人は明治文學の恰好なる讀者を得んことを望むのみ。 或意味に於ては社會が文學を造作するなり、而して之れをなすに當たりては、所謂讀書社會與りて最も力ありとす。 諸子は皆明治大日本文學の恰好なる讀者たらざる可からざる任務を荷へるものぞ、明治の大日本に曠前の大文豪を出ださんと出ださゞらんとは、或は諸子の責なるべきなり。 諸子豈區々屑々として死文の講習に陶冶せられたる死讀者たるをもて安ずべき時ならんや。 夫れ慈親は我が榮をよろこばずして其兒の榮を榮とす、個人時代に生まれたる諸子は、竟に慈父、慈母の献身的快樂を感覺する能はざるか、明治のシエークスピア、ホーマル、ギヨオテ等の母たり父たるの榮譽の極めて大にして且尊きとを感ずる能はざるが。恐らくは個人時代に生まれたる諸子は「我」の必要を提論して吾人が老い込みたるが如き論旨を笑はんとせんが、吾人はまた諸子が果たしてその如き大望あらば、(即ち自ら起ちて明治のシエークスピア、ギヨオテたらんとする志あらば)た

とひ一時山口の粲としてだにも、只管區々たる死記死文の講習に依賴せんとする心の庸劣卑小なるを嘆かざるを得ず。或はまた諸子は文豪の母たらんとも願はず、又みづから文豪たらんとも欲せずして、只一時流俗に投じ、時尙應世の小文字を弄するの資のみを得んとするか、換言すれば、新聞紙、雜誌的文學材料を貯蓄せんと欲するか——現在に適應すべき小文人たらんと欲するか——而して尙現在文壇の趨勢に注意せざるか、吾人は諸子の處世の理に昏きとの甚しきに驚かざるを得ざるなり。そも〳〵前車の顚覆するを見ながら秋毫も顧るところ無き後車の御者あるか、前人の脚を失して陷落するを目擊しながら、絶えて自誡するところなく、疾驅して同じ陷井に陷らんとする粗忽の愚人あるか。吾人いまだ之れあるを聞かざるなり。夫の羹に懲りて膾を吹くは所爲の至愚なるものなり、去かれども、人に同過を再三せざらんとするの意あるところに見えたり、然り、人は皆有形の過失を避けまくす、有形なる者は總て明白較著なればなり、さてひとり無形の過——感而上の謬妄——に至りては、大かたの人再三再四して尙曾て悛むるに及ばず、甚しきは幾百回、幾千回、幾万回にして尙且悔慚の色なきものあり。奇怪の至極ならずや。案ずるに、無形の過失は鏡花水月のごとし、

同過を繰り返す勿れ

有無認識し易からず、只夫れ認識し易からず、かるが故に同過を再三す、慚悔に堪へずといふとも、また奈何ともすべからざるなり、吾人は我が性の不敏なるを浩歎せんのみ、誰れか強ひて之れをしも吾人が罪とせん。　さもあらばあれ、苟も同過を再三せざらんの意あらば、平生眼を刮して無形の前車に注意し、其の覆轍を踏まざらんことを力めざるべからず。　夫の万國の史は無形の前車なり、億萬卷の傳記も無形の前車なり、新聞紙、雜誌も無形の前車の小ステーションなり。　今の歐米は我が國の前車にして我が東京の諸現象は、地方人士の前車なり、知名の諸家は後進の前車にして後進は其の後進の前者なり、而してこれら前車の轔轆として行くや、たとひ全く顚覆せざるも、其の轍正しきはいともいとも稀有にして又更に稀有なり。　俗諺にいはずや、他の風を觀ておのれが風を正うせよと、後に來たらんとする俊英、幾萬顆の明玉が諸子の眼前にちらはびたるを拾ひ、以て巨福を得んとするの意なきか。　諸子はいつまで同事を繰り返さんとするぞ。　諸子は竟に『早稻田文學』の記實によりて寸益をだに得ざらんとするなり。

曲亭的勸懲主義の說破せられたる今日に、曲亭にすら劣れる膚淺なる勸懲小說論を唱ふる、一種の同過を繰り返す者に非ずや。　勸懲論を唱

へんとせば何ぞ馬琴輩の上にいでざる、何ぞ英國多數の批評家の上に出でざる。歐洲にて推論的史傳の衰頽せんとしたる時に當たりて、ドレーパル、バックル、テーン等に劣れる區々たる演繹的史論を唱ふる、これはた同過の再述に非ずや。文明史風を主張せんとならば、何ぞドレーパル、バックル、テーン等を凌がざるぞ。或はマコーレーの瑕疵歷々たるに、さながらに彼れを學べる、或は寫實小說の圓滿ならざる理の明瞭なるに、只管にその末流を酌める、或は——嗚呼、かゝる過は古今の名家と雖もまぬがるゝ能はざるところ、かく論ずる吾人もまた日に月に陷るところ、吾人豈高慢らしく、諸子に向かひて、徒に墮獄の罪を釀さんとせんや。諸子、願はくは吾人が大言の禮に背けるを惡まずして吾人が誠意のあるところを聽け、吾人は諸子が事實の極めて極めて極めて大切なる所以を忘れ、事實の學問の倉庫たるを忘れ、事實が時勢の眞寫象なる所以を忘れ、時勢が過去の歷史と共に諸子の最も深切、最も質實なる教師たるを忘れ、ひたすら書籍のみを良師なりと誤信せるが如きを悲しむ。諸子は和漢の書を多く讀まば、俊傑の文士たることを得べしと思へるか、國文學勃興したる時に國文學を學ばば、當世の文士たるを得べしと思へるか、漢文學の盛行する當時に、諸子百家の書を繙かば、

以て當世に立ち得べしと思へるか。　所謂流行も、或意味に於ては、時勢の愛兒なり、或必要の生む所なり、流行を追ふもあながちに非なりとす可からず、然れども、流行は健脚の兒なり、今こゝにあるかと見るうちに、韋駄天の如く疾走して、忽ち天の一方に逸し去るものなり、而して首都の流行の地方に及ぶは、大抵そが首都に於て滅絶せんとする時に於てす。諸子若し首都の現象に注意せずして只管に流行の臣妾とならば、諸子は長永に時勢の庶子となり、異母兒となり、講習、業成り、修學、事終はりて、はじめて首都に出づる頃には、首都の事情は全く其の豫想と相反し、視るところ聞くところ、皆奇、皆異、リップ、ワン、ウィンクルが山獄より家に歸りし時、浦島の子が龍の宮居より故里に歸りし時と轉た感慨を同うすべきぞ。　嗚呼、十九世紀の新日本は名にしおふ新旭光を放つべき新文明の本地たらざる可からず、泰西の文明に駕して九天に羽撲べし、鷄口たらんとも牛後たる可からず。　而して此の明治の時代は平民得意の時期にして地方は平民の本山ならずや、今日すらヰナカモノといふ侮蔑の語は已に日本の地に絶跡せんとす、諸子は奮ッて首都を凌ぎ、再び奮ッて歐洲全土を壓倒せんとする勇氣なきか。　何ぞ死學に拘泥するとの甚しき、何ぞ活現象を重んぜざるとの甚しき。

始即終

一は數の始、十は數の終。一を聞きて十を知る、始に即きて終を見るをいふ。二を知るは推測の知。彼れや類推の大、此れや因此知彼。標ちたる菓、染めざる絲、彼れ豁然、此れ潛然。病夫のうめく聲、太子心病み、短詩三百、夫子幾たびかうなづく。鳴立澤の秋晩、現世(うつしよ)の姿淋しく、桶は碎けたり、煩惱の雲宿らず。誰れぞ芭蕉葉の破れ易きを樂しめる、誰れぞ泥沼(どろぬま)に君子(よきひと)の影を見たる。眼に靈火あり、六合溶けて一塊、微レ微下、美レ微中、大レ微上、一ファウスト、一猶太爺、大詩人と小詩人と其の差霄壤。露一滴、有爲轉變、艸一莖、榮枯盛衰、一日四季、三刹那過現未。嗚呼ジェルシニー、庖厨の失樂園、汝が過ぎ來しかた何ぞ哀しき。「驚」この片言即ち我が近代の史。

驚

驚は人知の尺度なり、驚つもりて智となる。驚いて驚く所以を知る、知の端なり、驚覺と名く。百驚一知を得ず、驚不覺といふ、Alias タマギエ、野人の驚なり。野人の都に上る、聞きて覩て毎に魂きゆ、其の名を質して

止む、因果を鑿するに及ばず。 太郎左畢竟半知を得ずして高閣凌雲の邊に向つて去る。

何をか驚覺といふ、驚くやその因果を知らざれば止まず、同驚を再びせず。 終生驚くあり、驚けるあり、少時數多驚き、中年量多驚き、老齡驚かざるものあり。 或は淺驚、早く安じ、或は深驚、終に休まず。 極樂蜻蛉彼れに舞ひ、無底の井これにあり。 何爲ぞ彼れ數多驚く、綜べざれば也、一貫せざるなり。 差別即平等、平等即差別、一貫せざらんか、一刹那一驚。

「驚いた」、「魂げた」、彼れ明治革新の流行語、此れ籔ぎはの常套語、相似たるを看ずや。 小兒や、無限驚の胎子（エンブリオ）、カンヂード又ラセラス、彼れ數多驚の權化。 Villain, villain, smiling villain! ハムレット驚き、ロメオ驚き、油屋與兵衞驚く。 父の壯なる、未曾有の澆季に驚く、子の壯なる、又空前の敗德に驚く、而も後世の批判と背馳す。 嗚呼不驚よ、汝の性は不經見か。 驚よ、汝は知の端なり、汝の兒は學か。 驚よ々々、汝人間を襲うて止まざれ、不驚は平氏、安氏、退氏、腐氏、腐氏は滅氏。

佛の王政土崩す、全歐擧りて驚く、驚又驚、變々化々、一化一驚、化、驚を生ず。

驚の盡きざる化の盡きざる也、永刼を望見すべし。

驚、汝は曉か、個人の光明、社會の救主、われ驚の滅を欲せずして同驚を惜

む――而も同驚万回。

（以上廿六年一月）

史論四派

方今史學流行の評判は高けれども、史學研究の實際は、尚混沌未分の有様なり。今の新聞紙、雜誌に散見する史學の素は、概して、臆測の演繹より成れる史傳の評論にあらざれば、史材の考證と批判となり、其の他は、教課用書としての國史又は列國史の、こゝかしこより上梓せらるゝか、然らざれば見聞錄やうの近世國史の折々に世にいづるのみ。史の研究法を論ずる者も間々あれども、それらは、概して飛入の史學者にして專門家は未だ口を開かず、中には教課用書としての國史と科學としての歷史とを混同したるにやと思はるゝ論もあり。吾人が知れる限にて今の史論の派を分かたば、尠くとも四派を得べし。

第一派は史材批判派（考證派）なり。此れは事實を事實として重ずる者なり、彼等は事實を精撿して虛實を甄別するとを史學の第一義とす。彼等は事實をもて歷史の銹または滓なりとせず、否、むしろ事實をもて歷史製作の用に供すべき最も貴重なる金銀のアラカネなりとするなり。彼等が言と行とによりて推測するに、彼等は以爲へらく、史は形而

上の眞理に直接の關係を有すべきものにあらず、又必ずしも實際の政治又は未來の豫想等に關すべきものにあらずと。　此の派は歐米に謂ふ科學的史派の研究法のみを代表して未だ其の實際の効果をば代表せざるものと評すべし。　ベカンズフィールド伯嘗て其の小說『コニングスビー』の中にいへらく、「事件はそも何といふ怪絕驚絕のものぞや、其の最小なるものすら最大最壯の思索(スペキユレーション)よりも更に大に大切なり」と。こは固より誇張に過ぎたる言葉なれど、事實のいと〱重ずべきことは、古より識者の認めたる所なり、理想家とも稱すべきカーライルすら、史家としては、瑣屑なる事實をも重ずること、猶書淫が取るに足らぬ小册子を十襲して珍藏するが如くなりき。　所謂史材批判派の矻々としてひとへに事實の考證にのみ全力を注げるは、蓋し此の同じ心に因緣するならん、吾人の私に訝るは只其の斷定の割合に神速輕忽なることのみ。

第二派は應用史派なり。　此れにはおのづから二派あり、西洋風の應用史派と東洋風の應用史派となり。　西洋派は英のシーリーと共に、固く政治と歷史とは同一研究の殊なる面相たるに過ぎず、といふ主義を執りて、直に史により當世の政治を裨益せんと欲するものゝ如し。　彼

等はジョン、モーレーが擧げたる三種の史家のうちにて、最も經世家的(ステーツマン)史家を喜べるものゝ如し。　モーレー曰はく「平叙史家の本分は事件を撿究して之れを記錄するにあり、而して其の最高の價値は明晰、正確、質實なり、經世家的史家は大事件の外面にあらはれたる直接の因緣を探究するを分とす、而してかゝる歷史は其の判斷の明透健全なるところに用あり、而して、史家的哲學者はをさ〳〵事件の團體、即ち社會を化裁する諸の變動を主眼とし、又かゝる變動を誘致すべき條件の列(シリーズ)をのみ肝要とす」と。　要するに西洋應用派は、史をもて經世家に應用せらるべきものとせざれば、詩人に應用せられて一種の活畫圖とならざるべからざるものとするに似たり。　彼等は、史を、其の文致に於ては、マコーレー又はカーライルを學ぶべきものとし、其の旨に於ては、マコーレー、シーリーの應用主義を奉ずべき者とし、事實を重ずるよりはむしろ思索を喜べり、かるがゆゑに、彼等はモンテスキウ、バックル、ドレーパル一流の推論をも强ちに排斥せざるのみならず、少しく形を變へて出で來たらば、歡呼して迎へんとする者の如し。　案ずるに、テーンはカーライルの註釋的クロムエル傳の殆ど斷簡零章の塊たるに過ぎざる者をも、其の正確なる眞事實の塊なるが故に激賞して、予は「かくの如き歷史を得

べくば、ロバルトソン又はヒウムの幾多秩然たる議論、幾多美麗なる無生色の叙事をば悉く放擲せん」といひたるが、所謂西洋派は善うせずば或は其の反對を行はんとすべし。　方今稍〻行はるゝ人物評論家は、概して此の派に屬するものなるが、彼等の人物を評論するを観るに、其の研究手續の概して明著ならざるにも拘らず、大かたは歸納批判にあらずして演繹批判なるが如し。　彼等は總じて史材の批判を等閑にして歸納するが故に、其の發途の方法は歸納批判なるも、結果は意外に臆測にとゞまることあり。　第一派なる考證派は、譬へば、米搗男の如く、尙長き間同じ蹈磨の上に立ちて自團駄を蹈むべく、西洋派は、當分の間、『ラセラス物語』に見えたる機械師の如く、人工の翼をこしらへて屢〻翱翔を試み、幾たびも古池の中に墮落すべし。

第三派は第二派の別種なる東洋風の應用派なり。　精しく撿ぶれば、此の派のうちに更に小別あり、そは前に謂へる、教課用書としての史と絶待に謂ふ史とを混じ、又は日本國史編纂法と廣義に謂ふ歷史編纂法とを混じたる史論家と國粹顯揚を旨として國史を勸懲奬誡の一具とせんとする派となり。　前者を假に教課用史論派とし、後者を假に國粹派と名く。　前者は概して國粹派なれども、また必ずしも然らざることあり、

蓋し、史の科學的攻究を主張する派の中にも、教課用の史を編まんとする時には、或は斟酌旨義を取らんとする者あるべければなり。　夫れ科學は絶待の原理を重じ、教課は相待の應用を大切とす、立脚地を殊にすれば旨をも殊にすると、勿論の結果なるべし。　さて國粹派は眼中殆ど科學としての史を容れざらんとす、彼等は舊儒學的史傳主義を無上の編史原則とし、國體顯揚といふことに重きを置く、隨つて此の派は考證派を敵視することあり、そは忠臣義士等に關する傳說の抹殺せられんことを患ふればなり。　彼等はジユニアスと共に言はんとす「史家は、若し摸倣すべき儀表を與ふる能はずんば、抑止すべき實例を與へざるべからず」と。

第四派は、一方に於ては、第二派と接近し、又、他方に於ては、第一派にも接近し、若し得べくんば、二派の善美を併せ領して、更にマコーレーの所謂圓滿の史家、即ち詩歌と哲學とを兼用する文學的史家たらんと期するものなり。　此の派はマコーレーにひとしく、力めて一時代の特質と精神とを縮圖（ミニアチユール）として描きいだし、或は叙し或は說き、或は狀し或は論じ、或は粗に描き、或は密に寫し、或は狩野派の畫の如くにし、或はワンダイク、ホガース等の油畫の如くにし、要するに、史傳をして殆ど小說と論文と

のアイノコたらしめんと欲する者なり。彼等は此の故に、口には其の師マコーレーにひとしく、理論の動もすれば事實を曲寫する弊あることを說き、又時としては第一派考證派と共に、史材探撿の大切なるを說けども、又常に其の師と共に「三稜塔裏に一頭の蛇ありといふ事、若しくはハンニバルがアルプス山を越えきといふ事等が其の事ばかりにては」何の効用をも爲さゞる可き所以を主張し、及ぶべくば、ハラム解の剖的史才とスコットの繪畫的史才とを兼具して、おはよくば、科學派をも降服せしめ、西洋風の應用派をも味方とし、尙得べくんば、國粹派をも閉口せしめんと期し、而して更に餘力あらば、詩人、文人、小說家をも悉く其の旗下に歸參せしめんと欲望するなり。此の派の合言葉(チッチオード)は興趣旨味といふことにして、其の武器は通俗平易の文字と頓智警句と大膽奇拔の創見となり。此の派はマコーレー以來英國などには隨分盛なる派にて、彼のシーリーをして史に所謂「多旨的(インテレスチング)」の義を特に解釋せざるを得ざらしめしものなり。シーリー曰はく「史は多旨的(インテレスチング)ならざるべからず、さりながら、予が謂ふ多旨的とは小說的、詩歌的、警絕的(サルプライジング)、――虛僞的の謂にはあらず、あらず、深く吾人の利害(インテレスト)に感觸するの義、即ち密に吾人に關係し且深く吾人に緊要なるの謂なり(中畧)是れ史に用ふべき多旨的の

此の派の代表者と見るべき『史海』氏が前途の功業に着目せんと欲す。

本義なり」と。知らず我が多旨的史派は能く此の虚僞的史傳といふ獘におちいらずして其の本來の企望を貫き得べきか、否か、吾人は倘徐に

文學管見

（荒浪市平氏速記）

諸君、私は公けの席で、演説とか講演とか云ふものをいたした事は、今年で丁度八年振りで御座ります、且つ生れましてから丁度三度目で御座ります。八年前にいたしました時には、マア夢中でいたしましたが、どうか斯うか二度續けてやりました、今日になりましては、學校へ出て居りまして、私立學校へ參つて居りまして、本に就て講義は始終致して居りますが、眞面目な席で、儀式張つて物を言ひます事は、誠に不束で御座ります。夫れゆゑ段々お斷り申しました所が、無論講演であるから講義も同樣だから、講義で宜しいと云ふお話で御座りました、それならば致しませう、とツイ受合つて仕舞ひました所が、眞逆教科書を持つて來て、此所で講義する譯にも往きませぬから、それで少しばかり考へまして、文學が自分の專門のやうになつて居りますから、文學の事に就てお話

を致す積りで厶ります(謹聽)。

英吉利の著述家にカレブ、コオルトンと云ふ人があります。此の人は大した著述も御座りませぬけれども、片言隻句で旨い事を言ひますので、先づ有名な人で御座ります。其人の曰つた言葉に、私が一度讀んで忘れない言葉があります、と云ふのは、私は藪醫者と云ふものは知ッて居りますが、文學者に藪といふものゝある事は存じませんで御座りました、所がコオルトンが曰ひますのに、文學界にも二種の藪文學者がある、どう云ふのかと云ふと、之れを別けて申しますと、先づ一種の藪文學者といふのは、Second-hand sense を筆にする者、是れは諸書を渉獵して色々な事を讀んで知つて居る、それ故に、どうか斯うか聞て爲になるやうな事を言ふ、併し其の言ふ事は自分が發明したのでは無い、古物であります(笑)。それから又一種は Original nonsense を筆にする者、これは Nonsense ではあるが、古人未發の事を言ふ、古人未發の何を言ふかと云へば、則ちう古人未發の Nonsense を言ふのである(笑)。して見ると、一方は古手の旨言、一方は古人未發の囈語、これが二種の藪文學者で。私は、どうか其の兩方の何方にもなりたくないと思ひますが、餘り澤山に本を讀みませぬから、或は Second-hand sense もむづかしい、されぱとて Original nonsense

は嫌で御座りますから、どうか合の子のやうな所へ往きたい、と云ふのが私の考であります。合の子なら Common sense 位でありませう。(此時塗板の側に立ちながら)そこで極く演説は仕慣れませぬから、どうも斯う云ふ物(塗板を指して曰ふ)が無いと寂しくていけませぬ(喝采)之れで遣ります。 お話申しますのは文學管見と言ひまして、あんまり太した事では無い、尤も管見だから太したことは勿論無い(大笑)。 始の所は脩辭學のやうなもので厶ります、それは既に『早稻田文學』に少し書いてありますから、始の所はホンノ端折ります。 中頃から段々詳しく言ひます。 始の所はホンノ端折ります。 (と云ひつゝ白墨を手にして塗板に分類圖を書き)少しお開帳の説明といふやうで厶ります(笑)。 是れを天と見做し、之れを地と見做します、(是時塗板の上端と下端とを指ざし)此の天地の間に衆生が棲んで、其の衆生の中に、

- 衆生
  - 非人
  - 人
    - 智
    - 情
    - 意

人と非人と云ふものがある、非人と云つても乞食では無い。 私の用ふ

る言葉は餘程まづい、良い言葉がムりませぬから、分り易いのを主として用ひますが、若し言葉が粗雜で、おきゝぐるしくムりますならば、どうか意味だけをお酌取り下さい。

人と云ふ者は、何の點が最も人にあらざる者に違ふかと云ふ問題は、餘程六ヶ敷い問題でムりませうが、Common sense で說いた時分には、明らかに智と情と意と、三つを具へたものを人と言ひます。或は人にあらざる石の類ひも、三つとも具へて居るかも知れませぬが、それは明かに見えて居りませぬ。こゝに心理學者が、便利の爲に分けた、三つの心の働きを、便宜の爲に書いて置きます。斯う智、情、意を具へたものを人と言ひます。此の三つがあれば自から人間に思ひと云ふ者が出來る、是れは前に雜誌の上でも說きましたけれども、一と言丈け申します。智は一と口に云へば、物を分別する所以、情は物に感ずる所以、意は物を欲する所以、即ち Knowing、feeling、willing といふのが是れに當たります。人は分別する事もある、感ずる事もある、欲する事もある、此の感ずると云ひ欲するといふやうな事が思ひである。或は智が專ら働くことがあり、或は情が主となつて働くことがあり、或は意が本になる場合もムりませうが、兎に角三つの働きから思ひが生ずる、思ひといふ字は極く

俗な字で、此の三つの働きの結果を代表する字であります。 人として思ひのあらざる者は無い、如何な狂人でも胸に思ひがある、小兒でもある、私もある、諸君もある、其の思ひといふものが、時としては、思ひ中に在れども外に顯はれない事があるかも知れぬ、併ながら胸に思ひがありながらそれを外へ出さなければ腹ふくるゝといふ事がある、(大笑)遂には破裂する。 それゆゑ、つまり顯はれざるものは尠い、として、皆顯はれるとすれば、其の無形の、形の無い思ひが、何に依つて顯はれるか。 何か依るものが無くてはなりませぬ。 其の依つて顯はれるものは、マア大摑みでムりますけれども、言葉と所爲……言葉と云ふのは餘程廣い意味で、言葉といふのは、アーと云ふ聲は一言であるが言葉である、 interje-ction も言葉である、億萬言の議論も言葉である。 又其の通り廣い意味に取つて云へば、所爲といふものは、顏の動くのも手を翻へすのも仕業である、或は又國家を經營するやうな大きい仕業も仕業の中に入れます。 さて此二つのものに由つて思が顯はれる。(此の區別は早く終つて仕舞ひます、是れはザット別けて置きます。) さて其の仕業が其の人の一身に顯はれる時と、外物に依つて顯はれる時とあります。 同じ仕業と云つても、外物へ宿つて顯はれるものは、例へば、硝子の瓶を拵へ

るのに、斯う〳〵云ふ格好に拵へやうと思つて拵へる、其の時には其の人の思ひが外物に顯はれて瓶の形となるので厶ります。又此の建物(會堂の天井を見あげ)とても、さうで御座りませう、さすれば、實用技若しくは美術の作物の類は、皆人の思が物に宿つて顯はれたものである。大凡そ人の思ひが………智情意の結果の思ひが、………仕業に顯れ、物に宿る時には技術となり、身に宿つて顯はれた時には言行となる。言行一致とは、同じ人の言葉にも高尚な思ひが顯はれ、又仕業にも高尚な思ひが顯はれるのをいひます、之れに反して小人の賤しき思ひは言葉となつても賤しい、仕業となつても賤しい、是れは言ふ迄も無い。(此の時塗板に書きたる分類圖を抹して)さうすると此處は抹します。

言………言葉と云ふ中にも、之れを記錄すると記錄しないとの區別が生じます。(此のとき速記者の席の方を向き)私の言つた事を書いてお出でなさるお方が厶りますが、是れは錄してお仕舞ひなさるので厶ります。併し此の錄せられる言葉の中に、幾らも種類があります。例へば私が此處で歌をうたふ、それも言葉の中の一種類であります、又平語で當り前の言葉で、ボツ〳〵描く喋舌る、是れは平語で厶ります。すなはち言葉の形に自然と Prose と云ふ類の言葉と、律のある言葉と(黑板に書

散文と律語

文の殊通

きながら)斯う二種に別れます、即ち言葉を錄した中に、散文といふ仕方で記錄せられたのと律語といふ姿で記錄せられたのがありませう。律語の中には、三十一文字の歌を始め、長謠、端唄、都々一に至るまで、或は西洋のPoetry、支那の詩でも、本朝の發句でも、皆悉く律がある。　散文とは、平かに直なる文章を散文と申します、西洋では之れを平直文、prose と云ひ、支那で散文と申します。　さて律語とは妙な名だと思召しませうが、支那には散文、韻語といふ目がありますが、律語にあたるものがムりませぬ。　律語とは韻を蹈まぬ律のある言葉で、日本の歌のやうなものがありますから、律語といふ科語の必要を感じます。

其處で文……是れに殊と通との區別が必要でムります。　文と一概に申しますが、此の文といふ語は、廣い意味で申しますと、總て人の思ひが言葉となつて錄せられて居る者は悉く文で、私の意味でいへば「何は何々せざるべからず」とあるも、即ち文でムります、或は電信文のやうなものも文でムります、現に電信文と謂ひます(笑)、さうして見れば、どうしても文に相違ない、併ながら文の中に、殊なる者と通なる者とあります。通といふのは、廣く通ずる、殊といふのは或特別な人にばかり分かる、即ち日本の人ならば、日本の言葉で書いたものならば皆解りさうな者で

ムりますけれども、或は分らぬかも知れぬ、分つても Interest を少しも感じない、さう云ふのは通。の中には這入りませぬ。或一種の人丈けに分かる文がある、能く私共もやりますが、覺書のやうに、自分の手帳に何か書いて置く、他人がそれを讀んでも分らぬ、謎のやうでムります、併しそれでも私には能く分かる、それが所謂殊。でムります。通の方は、或一箇人とか一團體とか云ふ者にばかりで無い、廣く通常の智識のある者は皆讀で分かるといふのを、私は通。と云ふのでムります。數學の本の中に書いた文章杯は、少し數學を學んでからでムりませねば、分かりませぬ、私共が讀んでも分かりませぬ。天文學の書もさうである、學んだとの無い者には一寸見ても妙な字ばかりあつて分かりませぬ。さう云ふのは通の中には這入りませぬ。即ち語を換へて申せば、Strictly に、極く嚴密にいふ科學上の文章の如きは、殊。の方で通。の方には這入りませぬ。通なのは即ち文學といふ頭文字を戴く文章……文學的文章といふものである。

是れ迄は既に外のものに書いて置きましたから、ザット申し上げて、是れから今日特にお話をするので、芝居に喩へれば、是れ迄の所は序幕である、是れから二幕、都合三幕で終ります(笑)、終りますが、芝居抔へ往くと、

愁嘆場があつたり、所作(しよさ)抔があつたりして面白いが、私のはさう云ふ譯には參りませぬ、其のお積りで願ひます（大笑）。黑板を拜借したのは此(この)方(はう)が早いからで、口で言つて居れば、どうしても餘計なことを加へねばなりませぬから、筆を借りて書くのでムります、

文學 ｛智・情・意｝

文學的文章といふのでムりますが、畧して文學と謂ひます、前申します通りに、人の心に智と情と意と此の三つの働きがあつて、此の三つの働きは終始纒綿して離れないものに相違ない、先づ知つて後に大に感ずることもあります、或は感じて後に知ることもありませうが、苟くも高尚な感情となれば、知つてから後に大に感ずる譯であります、さうすれば、情感から出た言葉と云つても感情からばかりではない、智が手傳つて居ることは說明する迄も無い。　又意といふものもさうでムります、意は欲することといふことでムりますが、欲するといふ念 Desire の起こらぬ以前の原因は、矢張り智と情とへ尋ねて往かなければならぬ、智を經てからでなければならぬ。　ごく俗な例を擧げて見ましても、寒いと

思へばこそ火鉢の邊りへ寄らうと欲する、極く俗の例で說明してさうでムります。　此の三つは始終離れないが、假りに其の三つの中で、どの Faculty が最も與つて力があるかといふ所から區別を立てゝ見たならば、三つの區別が出來るであらうと思ふ。　それで、智の方から出て來た文章ならば、自から智に訴へるものになる「火は火で消す」といふ言葉がムります、それと同然に、智惠から考へ出したものならば、聞く人の智惠に訴へなければ善く分かりませぬ。　又(黑板を指し)此方の情から生じたものならば、對手の情に訴へなければ、分からぬ、理窟に訴へては分からぬ道理であります。　さすれば智から出たる文章は、矢張り智に訴へ、情から出たる文章は、重もに情に訴へ、又何か意に欲する所あつて書いた文章は、重もに對ふの人の意に訴へるといふことになります。　所で、智といふものが根本となる時には、何が此の文章の土臺になるかと云へば、思索(Thought)といふものが一番おもな土臺になる、……情の方から云へば、即ち、大に感ずる所あつて、其の感ずる所のもの、を他へ顯はさうとすれば、如何なる働きが根底になるかと云へば、是れは先づ想像(Imagination)といふものが土臺になる、想像といふものが其の文章を組立てる時の要具になる。　さて思索するは物を考へると、物を考

へる時にはどうしても分析する、分析ばかりでは厶りませぬが、先づ善く分析して往かなければなりませぬ、其の例は、現に此處に斯うしてお話しゝて居りますのは、分析して居るので、私が考へたことを、思索したことを諸君に傳へやうとする、故に分析してお話する、分析した時分に用ひる言葉は概して抽象的になる。 例へば此の分析と云ふ言葉は、無味淡泊な言葉であつて、少しも諸君に感情を與へない、想像といふ言葉も、思索といふ言葉も、智情意といふ言葉も、少しも諸君にどんなものだといふ感情を與へない、みな抽象的で厶ります。 しかるに情の方は、さうで無い、分析の反對で、重もに總合的になつて來る、隨つて用ひる言葉が重もに具象的になる。 此の區別を、一例を擧げて申しませうならば、例へば富士山の形はどうだ、と智の方に尋ねたら、どう答へませうか。答へやうは色々御座りませうが、極く拙いのがあります、下が大なる環(ソルクル)であつて、其の環線から密接に直線を引いて、一部落し二分落しに、段々中心に向かつて上に登つて往つて、殆どPointに終らんとする二三段前に止まつた形………(大笑)、是れは餘程窮したものである、マサカこんな下手な風にもいひますまいが、マアかうです。 情の方に言はせると、そんな事は言はない、情の方では、さうバラ〳〵に言つて居ない、摺

鉢を逆さに伏せた(笑)、否らざれば白扇倒懸東海天………そんな形といふ。餘程其處に違ふ所がある。　それで又、智といふ者は、重もに闡明啓發と申して、啓いて、説明して、聞かせる、西洋の書物抔に書いてある所に據れば、此の職分を Establish 或は Inform と云ふやうに分けてありますのも御座ります、詰り、説明して聞かせるが職分でムります。　其の結果はどうかと云へば、知るといふのであります、聞いて居る人即ち讀む人の方

智の文の職分

は知るのでムります。　所が、此方の情の方はどうかと云へば、別に説明するのでは無い、宜い言葉がありませぬが、先づ繪を書くやうなもので、描寫するのであります、書いて見せる丈けの事であります。　其の結果はどうかと云へば、感ずるに止まる、情で出來た文章は、決して人に知らせるといふ主意で書くのでは無い、又結果もさうであります、それで色々の智識を得たやうに思ふのは、其の人の讀み方次第である。　要する

情の文の職分

に、情といふものは人に感を與へる丈けである、讀む人がそれで感ずるのみでムります。　日本の三十一文字の歌でも、西洋の詩でも、虚心平氣で讀めば、恍惚として塵外に遊ぶやうな思ひが、讀んだ時に生ずるかも知れませぬが、それに依つてどうしやう、右しやう左しやうといふ考は起こらぬ、起これば其れは外の元素が這入つて來て自分の兼ねて思つ

て居ることを助けてさうさせるのでムります、情の文といふものがさうせしむるのではない。　扨て見れば、智の究まる所は會得して Understand して、即ち自分に合點するに至るので、之れと同じく感ずる方も、究まる所は神遊……自分の心が天外に遊ぶやうな感情が起こる、それ切りでムります。　智の文を讀んでそれから何か一つ事をしやうと思ふ人があらば、それは智の文から得た結果の中に、他の元素が少し混つて居るので、即ち其の會得した事から或 Will を起こしたのであります、此の文の正當の結果たる事を外れて居る。　直接の結果は智識といふものより外はない。　扨て見ると、智の結果は靜 Rest……「成程」などいふ返辭が餘程能く説明して居ります。　又或時には豁然として悟るといふことがありますけれども悟つた切りであります、誠に冷い、冷かであります、哲學上の論文は死んだやうでムります(大笑)。Philosophy といふものは其所丈けに依つて見れば、死んだやうなものであります、解剖をして仕舞ふ、物の道理を解剖して仕舞ふ。　さてまた情の方も、本躰からいふと、空間時間を脱して仕舞つてゐる、どうする斯うするといふのが情の文の本分では無いのである、是れもどちらかと云へば、靜の方であるが、全く靜では無い、何とも言ひ顯はす言葉が無い、マア靜動の間であり

ます。靜かなやうで動いて居る、其の神遊んだ結果は、豁然では無い、恍然である、即ち眠つてゐるやうであります、死にはしないが夢であります、恍然として夢を見て居るやうな感じが御座ります。　即ち夢の時には身躰を撫つて見ると温い、(大笑)死んで仕舞つたのでは無い、水のやうでは無い、大變に違ふ。

それから意でムりますが、此方の方では誠意といふことが一番大事です。　誠意といふ字がよく當りますかどうか知れませぬが、誠意熱信がなくては意の文は無効でムります。　道具は矢張り此の智情の二つを道具に使はねばならぬ、智情を道具に使はねば言顯はす事が出來ぬ。思索して、想像して、分拆して、總合して、誠意を以てそれを發表する、即ち此の智情の二つを使ふので、意の文が一番大ひなるものであります。　此の二つを兼用しやうと思へば、使へる譯であります。　しからばどうするか、既に二つを使ふといふ以上は、兩方の善美を併せて使ふ、或は分拆し、或は總合し、或は譬喩を用ひたり、或は道理を分拆的に說いたりして、西洋に曰ふ Orator や Preacher が辯論或は說教するやうなる者が、皆此の中に這入る。　モット大きく云へば、Prophet が自分の考を發表する時の如きも、此の手段でやつて居る。　是れには今申した通り、兩方の手段を

用ふる、隨つて用ひる言葉も抽象でもあり、具象でもある、二つながら用ひて居る。此の二つを用ひなければ、人の情を動かすことが出來ぬ、情を動かすことが出來なければ人の意を動かす事は出來ない。是れは意を動かすが目的であります、それゆゑ情にも訴へなければならぬ、併し情ばかりに訴へては、古（むかし）はそれでもようござりましたらうが、此の十九世紀に於きましては、此の明治二十六年に於ては、人が承知しない、故に智にも訴へなければならぬ、さうすると、意の文は智に訴へる抽象の手段と、情に訴へる具象の言葉とを以て、或は分拆し、或は總合して、自分の思を言葉に顯はす、是れが意の文でムります。さうすると、此の意の職分はどうかと云ふと、鼓舞奮勵、或は言を換へて曰へば、勸めたり、戒めたり、教導懲戒するのであります。其の結果は人をして證せしむることとなる、言ひ換ふれば、之れを知らしむる事、之れを感せしむる事に止まつたものが、玆に至つて證ずる、只知るばかりで無い、只感ずるばかりで無い、玆に至つては殆ど Convince 以上である。Faith といふ字を以て當ても宜い、……其の結果を實行しなければ眞に證じたのでは無い、其の結果を實施して、始めて證じたといふ、行ひに現はれる、………Action が意の文の結果でムります、前の二つとは大に違ふ、實行させるからであります。

冷温熱
死夢活

故に是れは靜かでは無い、動く、動作でありますゝ動くのが結果でムります。今此の有樣と姿とをいひ顯す宜い言葉が考へ出せませぬけれども、何と言ひますか、蹶然とでも言ひませうか、詰り、道を當時に行はんとする勇猛精進の氣を起こさする力が意の文の力でありまず。さうすると、智の方では死んで居る、情の方では眠つて居る、夢を見て居るものが、意に於ては、活きて居る、是れこそ冷くない、温い、温い所では無い、此處に至ると熱心から出て居る、熱がある、熱い(笑)……冗談のやうでムりますけれども、私は飽くまでも眞面目な積りでムります。即ち此の三つに自然人間の文章が分かれるだらうと思ひます、例を擧げると尚は分りませうませうが、例を擧げると長くなりますから、例は擧げませぬ。

- 文學
  - 智
    - 思索—分拆—抽象
    - 闡明啓發—通知
    - 知(會得)
    - 靜—豁然—死—冷
  - 情
    - 想像—總合—具象
    - 描寫、直傳
    - 感(神遊)
    - 靜—恍然—夢—温

誠意―分拆、總合―抽象、具象

意｛教導奬勵
證(實行)

動―蹶然―活―熱

之れを要するに、智の文は闡明啓發を主とする。何を闡明啓發するのであるか、……Truth。この語も意味がむづかしい。さて情の文は、恍然として人の神を天外に遊ばしむる。何が人をして恍然たらしむるのであるか、……是れも大變な問題でありますけれども、所謂美なるものを見て我々は恍然たるものである、美とは何ぞや、眞とは何ぞや、といふことは、大變な問題である、今私が、此處で說明する場合では無い、又容易に說明する事も出來ない、古來恐らく明に說明して徹底した人はなからうと思ひます。獨逸の大詩人の言葉に「美とは何ぞや、光にもあらず、又暗にもあらず、虛實の間の『Twilight なり』」即ち虛實の間にある薄明りのやうなもので、誠に漠然として居る。さてまた「何を證せしめて行はしめんとするか」……善なり、サア是れ丈けは言へるが、善は何か、といふことは、倫理學の問題でもあらうし、或は神學の問題でもあらうし、大變な問題であります、これも私が今關はる所でない。それで眞。美、善……此れ

が文章の究竟の目的でムります。眞を說明し、美なるものを畫き、善なるものをすゝめて行はしめんとする、此の三である。サテさうすると、修辭學の方から云ふと、智の文章は明かでなくては往かぬ、成丈け明瞭ならん事を要する、さすれば修辭學の方から云ふと、亮といふものが最も必要である、明々亮々として、瑩然として細密に分かることを要する。情即ち美の文章は、修辭學の方から云ふと、圓であつて、もとより明瞭でもなければならず、總て言葉使ひが圓滿に美しくなければならぬ、さうなければ美文にはなりませぬが、強ち智の文にいふ明亮でなくてもよい、即ち隱約含糊といふことが此の文の姿である。又意即ち善の文章では、明かでなければなりませぬ、又力もなければなりませぬ「即ち勁い文章で、表裏透徹して居る事を要します。此くの如く眞と美と善と三つ揃へば、天下泰平ですが、此の三つを備へることはナカ〳〵六ヶ敷い、

文學 {
智―眞(亮)―明暸顯白
情―美(圓)―隱約含糊
意―善(勁)―表裏透徹

次に又之れを人身窮理の上から言つたらば、如何なるかと申せば、智の文は Brain が司る、情の文は俗說でいふと Heart が司る、意の文は Brain と

Heart とを兼ねて居る、

文學
- 智—Brain
- 情—Heart
- 意—Brain＋Heart

其處で又、之れを心理學の方から言ひますと、智の文は理性が司る、即ち Intellect、それから情の文は Aesthetic Sense で美感である、意の文は英吉利語で Moral、廣い意味で Moral、即ち道念と云ふものが司る。其處で智の文の代表者は何かといへば、'Philosophy であります、情の文の代表者は Poetry で厶ります、意の文の代表者は何であるかとお尋にあれば、Religion と答へます、……廣い意味の Moral も這入つて居りますけれども先づ Religion といつた方が一番正しいであらうと思ひます。

文學
- 智—理性—Philosophy
- 情—美感—Poetry
- 意—道念—Religion

此の分類は私の杜撰の分類で御座りますから、大きに不都合な事があるかも知れませぬ、私の考では斯う分ける。併ながら智の文が説明する事は、飽くまでも明瞭といふことを主として説明しますから、其の結

果明瞭顯白、實に明かであるけれども、何やらまだ物足りないやうな感じが起こる、其處に現れて居るだけのものは明かに說明して居りますけれども、まだ如何やら物足りないやうに思はれる、譬へば化學の作用で鷄卵を造つたやうなもので、誠に立派に出來て居りますけれども、何處か拔けて居る所があるやうに思はれる。之れに反して、情の方は畵工の繪をかいたのを見ると同じで、隱約糢糊、先刻申したと同樣に、Twilight、薄明りといふ趣がある。例へば此處に山水の景色があるとして、其の畵いてある景色は、實に眞に迫るやうで絕妙の趣があらうとも、それを見て諸君は實物だとは思はない、矢張り夢に仙境に遊んだやうな心持がする、實際に山水の景色を見て居るとは思はない。さて、意の文になると、情の文と智の文とを兼ねる、即ち此處に至つて、此の(黑板を指し)二つが材料になつて使はれるのであります、即ち意の文は玲瓏透徹、八面玲瓏、曇つたところが無い、

是れから此の三つの細別をしなければなりませぬ、大變早く濟みさうでムります、二幕濟みました(笑)もう一幕です。此の智、情、意を更に分ちまする、今迄申した區別は……代表者を區別したましのは、大いなる意味に就いて說きましたので、小さい意味に就いては、色々な區別がある、

譬へば、智の文の中に差別見の文と平等見の文といふ別がある、……是れは前に申した殊と通との二つとは違ひます。差別見といふ言葉は、或は穩かでないかも知れませぬが、現に今日の有樣に就いて見れば、智の文に限らず、總べて學問の上に就いて見ても、事物を觀察するに、皆自分の一己の見識定見といふものをもつてする、さて其の定見が宇宙を蔽ふ程の大いなる定見かといふに、さうではない、大概自分一己で眺めて見た丈けの狹い考なので厶ります、これが私の謂ふ差別見であります。其の差別見に依つて宇宙の大眞理を闡明啓發しやうとするのが差別見の智の文である。さてそれに反對するのを平等見といふ、それは、平等見といふのは、決して日本人丈けに通じて居る見でなく、宇宙全躰に通ずるといふ大いなる考で厶ります、……即ち極く廣い總べての世界を容れるといふ大きな見（かんがへ）。人は此の二つのどちらかに依つてものを見る、或はものを書く、此の事は何にも免れないことだらうと思ひます。譬へば、或一の事物を取つて、是れを解釋するに、差別見で解釋する時と、平等見で解釋する時とある、……一の事柄を取つて其の來歷（物語）Narration を叙する時にも、差別見を以て Narrate するのと、平等見を以て Narrate するのと區別が厶ります。物を論ずるにも、說くにも、自分一己

の定見の範圍内で、總ての事を取捨し褒貶して論ずるのと、悉く自分の偏見を脱して仕舞つて、古今に通徹する大いなる平等見を以て論ずるのと二つある。若しそんな大きいのがあれば、それが平等見の論でムります。

- 智
  - 差別
    - 解
      - 傳
    - 叙
      - 史
    - 論
  - 平等
    - 解
      - 傳
    - 叙
      - 史
    - 論

此の解、叙、論といふ中に、大概の文章は這入つて仕舞ふ。歷史といふ中にも、色々種類がありますけれども、強ち活かして情に訴へるやうに書かうとせずして、即ちマコーレーが言ふ樣に、繪のやうにして見せる、又は Dramatic に活きて働くやうに書く書き方ではなく、近頃の史類のやうに事實を重んじて書くといふ方の歷史、又は今迄の編年體などの歷史は、皆此の中に這入るのであります。そこで、若し歷史家が、勸善懲惡といふやうな原則や、或一種の Philosophy、又は學說、即ち或演繹的議論を土臺として歷史を叙した時分には、それが差別見の歷史に這入つて仕舞ふ。さて又その反對が平等見の歷史でムります。近世の歷史の

傾向を見れば、どうやら平等見の方向へ向かつてゐるやうに見えます。
次に論といふのは、文章軌範などに載つて居る論は大概差別見の論でありませう、中には平等見の論もありませうけれども、全體の上から見る時には、其の人の Ideal のみといふ所から見たならば、其の論ずるところは、總て其人の理想中の是非である、即ち宇宙に成立つて居る是非、宇宙の Ideal には非ずして、其の人丈けの Ideal で、論をしたり、解をしたり、又叙説して居るやうに思はれます。　さて平等見の論といふのは、平等見で出來上つた論で、其の代表者は完全な Philosophy だらうと思ひます、尤も、是れは今敢て論ずる必要がないから、委しくはいひませぬ……今は情の方を重に論じます。
情の文章も同じやうに分けます、差別見と平等見とある。　所が、情の方の文章には、別に面倒なことがあります、即ち先刻申しかけた律語といふものを、こゝへもて來ねばなりませぬ、

- 情
  - 差別
    - 散文
    - 律語
  - 平等
    - 律語
    - 散文

古代には强ち情の文ばかりが律語で書いてあるのでなく、ありとある人の思ひは、大抵律語で書き顯はされたものである。上代の文學を見れば、何處の國でも、皆 Poetry になつて居る、詩のやうになつて居る、律語になつて居る、蓋し、何處の國でも、上代の民といふものは、Emotion の方が勝つて居る、感情の働きが强いから、自然と律語で以て思ひを顯はす、近頃になりましては散文と律語の區別が判然として、律語で Botany などを書く人はないが（大笑）……現にアレキサンドリア文明の時分には、Botany などを律語で書いた人もある……今の Botany のやうな譯には往きませぬが、兎に角本草學のやうなものを律語で書いた人がある、若し今そんなことをする人があるならば、それは全く道樂でやるのでありませう（笑）。併ながら、情の文の中には、是非此の區別を設けて置かなければならぬ、先づ差別見の方から分けて行きます、

- 差別
  - 散文
    - 抒情
      - 記事
      - 論説
    - 自動—（脚本）
    - 敍事—（小說、物語、歷史）
  - 律語
    - 抒情—(Likric)
    - 自動—(Lyrical Drama
    - 敍事—(Lyrical Epos)

此の散文の中に抒情、自動、叙事の三つがあります、是れは即ち差別見の情の散文、自から動く差別見の情の散文、事を叙する差別見の情の散文であります。 律語も同じであります、先づ散文から説いて行きます。

事を叙するといふのは、前の智の文で申したと同じで、事蹟を叙べる、即ち或出來事をば情の文で綴るので厶ります。 但し智の文で綴るとは違ふ、即ち形容譬喩の言葉を餘計用ひて總合的に綴つて行く、が差別見で叙べる、例へば其の人一個の考へで、人間は斯ういふものだらう、己れがセッカチだから人間は皆セッカチだらう、といふ風に叙べる、是れが即ち差別見の叙事です。 或種類の歴史は此の中に這入ります。 又或小説や、物語も、此の中に這入ります。 其處で、此の中に這入る歴史は、どれであらうかといふと、先づカーライルのやうな歴史が此の中に這入ります。 カーライルを差別見といつたら、先生大いに怒るかも知れませぬ、併し Puritan といふ肩書を離れない、私は Puritan 的差別見の歴史は此の中へ入れやうと思ふ。 何故かといふと、彼の書き方は純粹の智の文とは思はれませぬ、情の原素が餘計ある、人物が活動して居る、夢を見るやうな風に。

それから抒情、情を抒すといふのは、自分の……情といふ字が穏かで御

座りませぬが……自分の差別見から生じた情を抒するのであります。莊子の文は、自身は智の文の積りでムりませうが、どうも智の文よりも矢張りPoetryに近い、散文には違ひないでせうけれども、どうもPoetryに近い。譬へば、マコーレーの歴史のやうなものも、所々に情の文の原素が這入つて居る、殆んど小説のやうになつて居る、差別見の小説のやうにしか思はれませぬ。ワーレンヘスチングスの如きも、矢張り人物をマコーレーが自分で拵へて居る、あれを情の文とすれば、平等見の傳ではない、差別見の抒情文たるの質を餘程持て居る。それからチヨツとした短い記文、或は思ひを逃べた述懐の文章は、皆抒情の中に這入つて仕舞ふ。

自動といふのはどういふのでムりませうか。自動といふのは、其の作者が自身の情を抒して居るやうに書いてあるのでなく、作者がある出來事を傍觀して、見物人の資格になつて書いて居るといふのでもなく、宛ら其の作中の人物が自ら動いて居るやうに書いてある、即ちDramaのやうなものでムります。日本ではマア臺帳といふものが、やゝ其の形を成して居ります、即ち大體は自動的散文で、自から其の者が動いて居るやうに書いてムります。舞臺の塲割りや、舞臺の飾り附、衣裳、道具、

思入れなどは書いてありますが、其の他の事は何とも書いてありませぬ、淨瑠璃には何とやらして何とやらと書いて、それから人物の言葉に成つて居りますが、淨瑠璃のない時には、作者が何とも謂はないで、其の者が自ら動いて居るやうに書いてある。　それで、どうも宜い言葉がありませぬから、止むを得ず自。動。と名けて置きます。　併ながら、自動の積りで作者が書いても、兎角作者自身の差別見が人物の影に動いて居る、作者の性情が顯はれて居る、セッカチの作者が書いたものはスッカリ、セッカチになつて居る、譬へば粗忽かしい人の書いたものならば、是れはハムレットでなければならぬといふ人物が、おそろしい粗匆かしいハムレットになつて仕舞ふ、當人は自動の積りでかいたなれども、本當の自動でない、自動の似せものである。　さういふのが多い。　これでザット Drama の一種類、差別見の Prose Drama をも説明して仕舞ひましたから、此方(こちら)の律語の方は餘程説明し易い。

律語の方の抒情といふものは、强ち韻のある言葉でなくても宜い、兎に角句拍子のある文章で情を抒した者は、總て此の中へ這入る。　西洋、支那の詩歌はいふまでも無く、日本の發句、川柳、都々一、長唄迄も、悉く抒情の中に這入る、即ち日本の短歌、長歌も、皆此の中に籠つて仕舞ふ。　扨抒

情歌の種類は幾らもある、長恨歌、琵琶行などいふ支那の詩は叙事だと言ひますが、叙事ではない、と思ひます、寧ろ彼れは自分の情を抒する爲に叙事を假りたのではないかと思ふ、マア叙事の中へ入れても宜いが、本當の叙事といふものはアンナものではない。それは兎も角も、情を抒べるものは皆此抒情の中に這入ります、西洋の Lyric Poetry は、矢張り自分一個の Ideal を是非の標準にして情を抒したものでムります。

叙事といふのは物を叙するので Epos、Epic でありますが、私の申す Epic といふ語はグリースの意味とは違ひます、六ヶ敷い意味で申すのではなく、總べて律語の Narration になつて居るものを Epic (物語)といふやうに、廣い意味の Epic でムります。Epos (叙事)といふのは、作者に、豫め其の事柄を取捨して此奴を此處で殺させてやらうとか、殺してやらうとか云ふ樣な量簡があつては本當の叙事では無い、作者が虚心でなくてはならぬ、作者が虚心であると本當の公平な報道が出來る、然るに差別見といふ一つの標準がある時には、事件をも、人物をも、それに依て取舍する、其の時には、彼奴は不忠不義の奴だ、憎い奴だ、といふ意味が、或は明に、或は暗に、叙事の間に出て來る、それが甚しくなると、此の人物は嫌な奴だから、打倒して仕舞へ、といふやうになる、逆もホーマルのやうに公平

に書くとは出來ませぬ。さういふのは差別見のEposでムりますから、Lyrical Epos といひます。ミルトンの『失樂園』の詩は、多分ミルトンの傑作で叙事詩に相違ないけれども、此の詩も尚差別見を免かれませぬ、矢張りカーライルと同じ樣に、Puritan と云ふ肩書は離れない、强ち Puritan といふ所から推測して、さう申すのではないが、アダムとイブとを御覽になつても、どうしてあれが神代の人、最初の人間とは思はれない、詰り、ミルトンの見解で拵へた人であります、Puritan の眼を以て祖先の人間を見たなら、彼云ふ風に見えるかも知れませぬが、普通の人の平等見を以て見たらば、決してあゝは見えない。叙事詩といふ事は爭ふ可からずでありますが、眞の叙事詩といふ點から言つたらば、どうあらうか、矢張りあれも、此の差別見の中へ入れなければなりますまい。

自動………律語で Drama を書く人が、西洋には幾らもあります、西洋には一體律語で書くのが本當の Drama でムります。バイロンの書いた Drama も、ミルトンの書いた Drama も、其の他多數の Drama は、皆此の中であらう、が矢張り差別見を離れない、飽くまでも其の人になつて書いた積でありませうけれども、どうも時々御當人が出て居る、其の作に見えたる總體の宇宙といふものが其の人の眼界に映じた宇宙であつて、

所謂 as it is の世界では無い。是等は Lyrical Drama である、Drama には相違ないが Lyrical といふ形容詞を附けなければならぬ。

平等
- 律語
  - 叙事
    - Epos
    - History
  - 自動—Drama
- 散文
  - 自動—(脚本)
  - 叙事—(小說、物語)

平等見と言ふのは、我を大きくして宇宙と我とを同一にしたる時の見、……そんな事が出來るか出來ないか知りませぬが、出來ると假定して思へば、我と宇宙と同一になつた時には、其の人の言ふ事は即ち宇宙大の言になる、さうすると抒情といふとは殆ど言へないだらうと思ひます。幾ら大きくても抒情は差別見の大なるもの………尤も差別見も段々大きくなると、極まる所は平等見に歸して仕舞ふ、差別が究極して平等、……例へば此の親指が段々大きくなつて、是れ丈け蔽へば、一つになつて仕舞ひます、シカシ正則からいふと、平等見と差別見とは、分けなければならぬ。 ソコデ、平等見の方では、叙事と自動と、此の二つしかありませぬ、其の中律語の方で言ひますと此の叙事が純粋の Epos で、是れは全く己を離れて仕舞つたホーマルが書いたやうに書く。 さてまた自動と

いふのも全く己を離れて仕舞つて、其の事件中の人物が自から動いてゐるやうに書く、即ちこれが純粹の Drama である。 Drama といふものは、古人も曰ふ通り、或意味に於ては Lyric、 或意味に於ては Epos と云ふので、事柄が變遷して往く方から云へばエポスです、けれども又、其の作中の人物、例へばハムレット、オテロといふやうな人物が、銘々に自分で Lyric を演べて抒情歌を謡つて居るとも解釋が出來る。 此の二つを兼ねたものが、此の(黑板を指し)自動の所にある Drama でムります。 シエークスピーアを平等見だとは斷言することは出來ませぬが、今までの作では、一番平等見で書いた作らしく思ふ、即ち今迄の所では、先づ眞の Drama の作者は誰れかと言はばシエークスピーアと答へなければならぬ。 又眞の Epic では今迄如何なる作者があつたと尋ねたら、ホーマルと答へなくてはなるまい。 是れは律語の方です。

次に、散文の方から言つても、同じです。 散文で叙事と云へば、此の中には矢張り歴史なり、物語なり、小説なりがある。 己れを脱して、恰もホーマルが律語で物語を書いた如くに、己を離れて仕舞つて、公平に事件を書いたものが出來たらば、則ち散文の叙事詩でムります、 Prose Epic でムります。 小説の事を古人巳に Prose Epic と言つてをりますが、それ

は私の今謂ふ意義で言つたのでは無い、さて自動といふのは、散文で Drama を書くので、古代には尠い、殊に今迄に恐らく散文で Drama を書いて平等見の文章になつたものはなからう、是れから出て來るかも知れませぬ。私が思ひますに、エヽあのエマルソンが申したことに

美術の作物は世界の撮要なり

“An expression of nature in miniature”

といふ言葉がある、丁度其處に往かなくては、此の役目は遂げられない、平等見の自動的散文といふのは、他の語で云へば、Microcosmic です。即小宇宙的といふ形容の言葉がある、小宇宙を見るやうに書かなければ眞の Drama とはいはれない、作者が持つて廻つて書いたやうなものではない、自からそれが動いて居る如く、小宇宙のやうに書く、思ふに將來の小說には此の性質が必要でムりませう。

今の小說は Realistic 過ぎる、今の心理小說といふものは如何にも丁寧綿密に穿つてありますけれども、寧ろ智の產物かと思はれます、筋褄が合ひすぎて、能く見ると、却つて理にかなはない。シエークスピアが Drama を書いたのを見ますに、私の見た丈けの所で考へると、ナカナカ

さうLogicalに、丁度よいやうに行道が分かつては居らぬ、又宇宙の事を見るに、これもさう明瞭に分かるものでは無い、分からぬ所が大變にある。思ふに、人間の事の平等に明瞭に分かつて居るやうに書いてある小說は、按ずるに、智の方の取調べで出來た或一の學理上の法によつて、それを活かして書いて居るのに過ぎないではあるまいか。丁度先刻申した、化學の作用で出來た卵子のやうに、誠に善く眞物に似て居ますけれども、どうも嚙〆めた所の味も違ふやうであり、又之れに觸れても溫くない、冷い、どうも冷い樣に思はれる(笑)、即ち隱約含糊、糢糊として居るのが美術の本領であるのに、其の氣味が少しも無い……シエークスピーアの作を讀んだ時とは感じが違ふ。シエークスピーアのは隱約糢糊として、內に隱れてゐる處に味があつて――宇宙を見るやうに思はれる、其のやうなところが大切であります、其處がヤハリ小說の本領ではあるまいかと思ひます。

通常Poetryと言ひますは、律語丈けのものをPoetryと言ひます、或は廣い意味で是れ丈け(情の文全體)を皆Poetryと言ひますけれども、それは過激な話で、矢張り今までいひ來たッた分別の方がよい。

さてもう一つ殘りました、意の方は詳しく言ふまでもなく、矢張り是れ

にも差別見、平等見といふ區別がある、

意
- 差別
  - 個人
  - 團體
- 平等
  - 個人
  - 團體

例へば、一個人に意見をする文でも、矢張り意の文である……此處に個人とか團體とかいふのは、上に申した殊と通といふことに障りは無い、何故なれば殊通といふことは作者の本意を言つたのでは無い、其の文の効力を言つたのであります。　個人に訴へた文章でも其の感動させる力が衆人に及ぶものならば、無論、意の文に這入ります、箇人に意見したり、或は説得する時に、差別見を以て、自分の善しと思ふ所に據つて懲戒したり、奬勵したりするのは、即ち個人に向つての意の文でムります。而して此の團體は幾らでも擴げられる。　宇宙の國民に向つて訴へる時にも、それにも差別見がある、我が善しとする所に據つて人を奬勵し懲戒する、それが大いに進んだのが平等見である。　若し我を脱するといふ事が不都合ならば、我を大きくして、宇宙を蔽ふ程に大きくして、天下の人の善しとする、古往今來善しとする所を見出して、それに據つて、

カント、シエークスピア佛耶

或は個人なり團體なりに訴へる、而して此の平等見に據つて、人に訴へる所の意の文の、一番大いなるものは何かといふと、Religion、即ち宗教であらう、と思ひます、最も完全な宗教の文は即ち平等見の意の文である。

さすれば此の智、情、意の三つの文章は、即ち古より言ふ通り、文學上の三姉妹、Three Sisters であつて、決して離れられない。是れが三兄弟であつて、智の方は Philosopher が之れを代表し、情の方は Poet が之れを代表し、意の方は Prophet 或は聖人といふ樣な者が之れを代表して居ります。若し又之れを西洋の人に付いて例を擧げるならば、智の文の代表は、大いなる Philosopher、例へばカントとかヘーゲルとかいふやうな人であらう、又情の文はホーマル、シエークスピーア、ギヨオテのやうな人が代表して居る。意の文に於ては、耶蘇とか、或はソクラテスといふやうな人が代表する。東洋の方で言つたならば、意の文を代表して居る人は、釋迦とか孔子とか云ふやうな人で、智と情の所にはどうも代表者と申す程の人が東洋には殆ど無い、即ち和漢には殆んど西洋のに較べて出すやうな人が無いやうでありますのは、實に殘念で厶ります。兎に角、此の三つの者が、皆平等見で、Nature を見て、さうして Nature を Inter

pret した時分には、初めて本當に人間が安心立命の位地を得るだらうと思ひます。既に其の方向に嚮つて居るのか、未だ嚮つて居ないのか、私にはまだ充分に分かりませぬ。

只今說明いたしました通り、正當にいへば、情の文の直接の目的は、決して實用では無い、誰れかゞ曰ひました通り、Disinterested satisfaction である。滿足といつても、決して水を飮むとか、物を喰ふとか云ふやうな Pleasure とは丸つ切り違つた性質のものであつて、目的は殆ど感ぜしむるといふの外はない。智の文もまた、正當にいへば、眞を知らしむるといふにとゞまる、シカシかく人間が、公平に、平等見を以て、眞と美とを認めて表白しやうといふには、甚深の意味があるに相違ない、再言すれば、平等見といふものが必要になつて來る所以は、どう云ふ譯であるか、恐らくナニカ Nature といふものを是非中正に Interpret しなければならない譯があらう。而して Interpretation といふことは、己れを離れてしなければ中正に出來るものでは無い、が、何故に自然の解釋が必要であるか、誰れの爲に必要であるか………から尋ぬると、智の文も、情の文も、人間に極めて密接になつて來ます。シカシ其の以上の事は、今こゝで申し盡くしがたい、只此の三文章を代表する方々に、若し私の說に採るべき

所があるならば、以上の理由があるによつて、平等見の方へ嚮つて貰ひたいといふ事ばかりを、誠實に願つて此の席を下ります(拍手喝采)。

佛の文豪テーン逝く

佛國近時の文壇に、哲學者として、批評家として、盛名ありしHippolyte Adolph Taineは本月初旬易簀しぬ。彼れはSaint-Beuve幷びにNisard等と相比肩して、ひとり佛國にてのみならず、歐洲の文壇に推重せられたりし文豪なりしに、本年齡六十五歲にして、其の友ルナンを追うて他界の人となりぬること、歎惜するに堪へたり。彼れ博覽にして識高く、文辭また極めて瑰麗、句々靈活、其の批評の原則と方法とには、多少の病無きにあらずといへども、其の詩想の豐富なる、其の詩眼の銳利なる、近世の批評壇に稀に見るところなり。其の略歷次の如し、

其の略傳

彼れは一千八百二十八年四月二十一日、Vouzierに生まれ、夙にブルボン學校に入りて學を修め、一千八百四十七年には修辭學秀拔の賞典を得、其の翌年には師範學校文學部に入ることを許され、一千八百五十三年には二大論文をものして文學博士の學位を得たり。其の後大學敎授の職

を辭して專ら著作に從事す、其が中には當時大學に行はれたる敎旨に直反對の論ありて、大に物議を牽起こしぬ、『佛國哲學』の論の如き其の隨一なり。一千八百六十三年 Saint-Cyri の兵學校の文學試驗官となり、又其の翌年には美術學校に聘せられて、美術兼美學歷史の敎授となりぬ。チエールの逝きしや、彼れその候補となりて學士會院に入らんと望みて歷史家エヌリ、マルタンと競爭せしが失敗し、一千八百八十年に至りてはじめて學士會院の一員となるを得たり。之れより先一千八百六十八年、豪商 Dennelle の女某を娶りて妻とし、又一千八百七十三年には英國に遊び、オクスフホオドにて講說をなしきといふ。

著書

頗る多し、こゝに悉く擧ぐるに及ばず、只重立ちたるものゝみを擧ぐれば、

批評及び歷史の論（一八五七）
英國文學史（一八六四）
英國唯心主義（カーライル論）
英國實驗主義（ミル論）

件の後の二著は共に英譯の『英國文學史』中に合篇せり。

美術の哲理　（一八六六）
伊國に於ける美術の哲理　（同年）

これらは他の美術上の評論と共に『美術講說』の第一、第二に合篇せられたり。

智論　（一八七四）
佛國革命
英國記（紀行）　（一八七八）

尙あまたあれど、これらの諸著は以て彼れの識學を窺ふに適當なるものなるべし。

批評家としてのテーン

哲學者としてのテーンの價値は、世間之れを論ずるに適當なる人あるべし、批評家としての彼れに就きては、西人已に之れを論じたるものあり。エドワード、ドウデン嘗て佛國の批評家を評して曰はく、理法を立て丶批評することに巧なるはニザールとテーンとなり、前者の『佛文學史』後者の『英國文學史』は佛人の本色を示せるものなり、但し前者は守舊獨斷派にして後者は新學說を發揮するものなりと。又曰はく、テーンの『英國文學史』の出でしや、人々其の搆思の雄大にして、論理の精嚴にして、千萬錯綜の事實を調理して一々其の宜しきを得しめたるに驚歎せり。

テーンの『英國文學史』を著すや、みづからは稱して毎に歸納論法を用ひたりといへれど、實は始終演繹の法を用ひ、先づ一の定則を立てゝ此の定則より結論を抽出せり、彼れの諸書を研究するや、おのれの學説に證據を加へんが爲に研究したるが如き傾ありと。　トレイルもまた彼れを評して曰はく、佛の諸批評家のうちにて、最も大なるはテーンなり、彼れは如何に勤勉と熱信と文致の絢爛とを周整なる哲學に合體せしむべきかを知れり。　彼れの理論はたしかに濫用せらるべき虞あるものなれども、其の應用の弊を見ずして特り其の論の美なる邊を見れば、歷史、文學、美術の上に耀々たる光明を投ずるものにして學生の爲に一新世界を闢くものなり、蓋し個人は周圍の奴なりといふ説は、眞僞相半するの説なれども、其の斬新なることは爭ふべからず、又斬新なるが故に興を與ふること多大なり。彼れの『英國文學史』は殆ど讀者を魅するの力あり、さりながら未だ妥當とすべからざるもの尠からず、彼れはミルトン、ドライデン、ポープを誤解すること甚し、云々と。

其の批評の長短

吾人が微に見得たる彼れの主義に曰はく、「批評とはひとへに文學美術の諸作物に就きて、其の本質を看破し、其の原因を探ることを謂ふ」と。

テーンは個人の自由意思を否拒せり

彼れが『英國文學史』を綴るや、其の卷頭緒言の中に一長論文を掲げたり、其の要は、一國の文學は人種、時勢、周圍の結果にして其の照影たるに外ならず、といふにあり。　されば彼れの批評家としての功績は、(第一)歷代の文學と同代の他の事業上にあらはれたる人心との間に密着の關係あることを明に世人に知らしめしことゝ、(第二)時好に適へる偏狹なる美術論によりてほしいまゝに古今の作物を軒輊する守舊と頑昧とを矯正せんと力めしことゝなり。　而して其の短所を擧ぐれば、已にドウデンもいひし如く、人間に普通の心性ありて万國民に具通することを忘れ、一國民の知識上幷びに道念上の特質は遺傳によりて其の後裔までも變化せざるものゝやうに斷定し、ありとある美術家、文人、詩人をもて、一方に於ては、件の遺傳的特質に支配せられ、一方に於ては、時勢、周圍の奴たるべきものとし、毫も彼等の特得の能力を認めざりしこと等、其の重立ちたるものなり。即ち彼れは、美術家、詩文人に自由意思あることを拒み、且彼等に時勢に反影響を與ふる力あることを否みたり。　彼れの說によれば、シェークスピアも、ジョンソンもすべて時勢の兒なり、しかれども、ジョンソンのシェークスピアと殆ど直反對なる性質を有して同時代に立てることを論ずるに至りては、吾人まづ其の說の妥なら

ざるを覺ゆ。尙テーンに關する評論は海外の諸雜誌に出づるをまちて、其の大概を報ずることあるべし。

新桂冠詩宗？

テニスンに繼ぎて新桂冠詩人たるべき者は、スヰンバルンか、モーリスか、アーノルドか、と一時は世評紛々たりしが、近ごろ西字新聞紙の報道する所によれば、案外にもむしろ散文をもて盛名を知られたる老畫伯、ジョン、ラスキンが、老主相グラッドストーンに推選せられて、新に桂冠詩人とならんとすと噂す。彼れ已に此の爵を甘受せしか否かは明ならねど、疑ふらくは辭するともなかるべきか。ラスキンはヸクトリア朝屈指の美文家にして、其の近世英文學に小ならざる勢力あることは、下に其の畧傳と批評との條に畧說したるが如し。彼れの美文に巧妙なる、言畫家(Wordpainter)の稱ある程なれば、たとへ詩人(韻語家)としての名聲はテニスン、ブラウニングほどに高からずといふとも、桂冠詩人たるに於て欠當ならじ。況や彼れが作に係る詩集は、近年更に再版せられて、頗る世に行はると稱せらるゝをや。我が某政治家はいへらく、英の主相、老グラッドストーンの同感し得べき詩文人はテニスン逝りて

後は、恐らくラスキンのみなるべし、其の他は假令技倆あるも、新代の詩人なり、老相の推選する能はざる所ならんと。或は然らん。

ジョン、ラスキン畧傳

英國美術批判家の泰斗と仰がれたるジョン、ラスキンは、英京ロンドンの富める葡萄酒商の一子にして、一千八百十九年二月該市にて生まれき。彼れは幼きより自然の美を愛するの性を現し、鋭く其の秘密藏を洞察するの力を具へたり。幸に父の遺産ゆたかなりければ、其の好尚する道を研鑽すべき便宜乏しからで、竟に大名を天下に轟かすの機を成ずるに至りたり。彼れははじめは私師に從ひて學びたりしが、やゝ長じてはオクスフオドなるクライスト、チャルチ大學に入り、一千八百三十九年、Salsette and Elephanta といふ一篇の詩を作り、英詩に於けるニウチゲート賞を得き。さて彼れが竟に雅藝小博士(マスタル、オフ、アーツ)の學位を得しは、同四十三年、即ち其の二十四歳の年なり。其の後彼れ專ら繪畫の研究に從事して當時の名家コプレー、フイールヂング、幷びにハーヂングに從ひて斯道に勉勵せり。さて一千八百四十三年に第一篇を發兌せし『近世畫家』(Modern Painter) といふ名著は、主として近世の英國派景色畫を辯護したるものにて、風景畫に於ては今人古人に優れり、といふ說を主張

したるものなり。此の著次第に敷衍せられて終に五卷となりぬ、其の第二卷は彼れが伊太利に遊びし後にものせしにて、一千八百四十六年に發兌せられき、こは伊太利國の古大畫工を批判したるものなり。最後の卷は一千八百六十年に世に出でたり。其のはじめ『近世畫家』の第一卷の公にせられしや、文學界一時大に振ひ盪きぬ、蓋し、其の論の斬新なると其の行文の鋭利巧妙なるとが、一方に於ては、激しき反對論を呼び起こし、一方に於ては、夥多の歎美者を生じければなり。一千八百六十年より同六十七年までの間に彼れは該著を修正して再び發兌せり、前說を改删したる所いと多しといふ。一千八百六十七年彼れ選ばれてカムブリッヂ大學の Rede Lecturer（講師）となり、法學博士（エル、エル、デー）の學位を得又同六十九年にはオクスフォドの美術教授に選ばれ、同七十六年に再選せられ、同八十年に三選せられ、同八十四年病の故に辭職しき。彼れがはじめて美術教授となりしや、聽者堂に溢れて如何ともする能はざりしかば、止むを得ず同じ講說をばおの〳〵二回づゝ講じて以て初回に聽くことを得ざるものゝ望を充たさしむることとしきといふ。近年彼れ退隱してコンストンなるブラントウッドにありと傳へ聞きたりしに、前項報ずるが如くば、或は掛冠を戴く詩人とならん、さらば、彼れ或は

律語詩人として又更に物する所あるべし。ラスキンの著書は頗る多し、繪畫に關する批評、論說はいふも更なり、建築、彫刻、等に關するものも尠からず。彼れが新聞紙、雜誌、等に掲げしもの幷びに口頭にて講說せしもの、及び詩篇等までも網羅せば、實に驚くべく巨大なる卷秩の書となるべし。左には只重立ちたるもの丶みを擧ぐ、

『近世畫家』	1843―60
『建築の七燈』	1849
『前ラフエル旨義』幷びに『黃金河の王』	1851
『ヱニスの石』	1851＝53
『建築繪畫上の講說』	1854
『畫の素』	1857
『枝術の經濟』	1858
『二　途』	1859
"Unto this Last"	1862 (經濟論)
"Sesame and Lilies"	1864
"The Ethics of the Dust"	1865
"The Crown of wild Olive"	1866
"The Queen of the Air"	1896
"Aratra Pantelici"	1872

等なり。又Prateriaと題したる自傳は一千八百八十五年より着手せられたり。

ラスキンに關する批評

ラスキンの述作は美術と美術論とをして通俗ならしめたり、と謂ひつべし。彼れは自然を觀察するの新眼光を廣く世人に與へたり、彼れの影響は決して繪畫社會にとゞまらずして、文學上にも、社交上にも、殆ど畫の何たるを知らざる社會にまでも、及びたり。蘇人ピータル、ペーンの曾て彼れを評するや、曰はく「夫れ自然の美を感受するの卓越せる力を賦與せられ、自然の眞を認識するの卓越せる力をもてる者は、山岳にも聲を與へ、河流にも音樂を附す。彼れ海をながむれば、其の海たちどころに一しは長閑にうつくしきものとなり、彼れ雲をながむれば、其の雲たちまち一しはきらびしくかゞやきわたる。彼れは神祕に奉仕する神官、自然の慈惠を配分する者なり、而して人々かゝる人を詩人と呼ぶ。ラスキンの如きは斯くして造化の深旨味を解釋して、洽く其の豐なる恩惠を人間に傳へたる、二三の名譽ある俊傑の班に列す。彼れは美妙の魔力ある聲をもて、決して變易せざれども、常に毎に斬新なる、又已に老いたれども、尚毫もすがれず、且そこなはれざる、自然の繪畫に

就きて語りたり。蓋し、自然の美たるや、諸の美術の承認するところ、又諸〻の美術の原因する所なれど、其の吾人の眉間に在るや、幼少の時より不斷なれば、吾人往々輕々しく其のうつくしきを看過せんとす。彼れ吾人に憶ひ起こさしむらく、ホーマルの時代にひとしく薔薇花なす朝の色は、今も尚曉毎に新しく珍しきゑまひを有すと。又曰はく、朝ぼらけが大海原に添うて進みゆくや、海原の水の花は今も尚常に黃金色と薔薇色との新しき刺繡をもて盛飾せられると、彼れはまた何人も得爭ふまじき證を擧げて示すらく「まことに自然美を愛すらん者は、淸水のふきいづるわたり、若葉の繁れるほとりにて陽春の來たれるに遭遇せば、常に未曾見の美を認めざるを得じと。ラスキンの聲に呼び起こさるゝや、吾人忽然と宇宙の美と大とに關する新意識を感ず、宇宙の何たるかを更に明に思念し、如何に宇宙をながむべきかを知る」云々と。ベーンの評をもて多少溢美の傾ありとするも、英の詞壇の寥々たる時に當たりて、此の評を領し得んものは、他に一人もあらざるべし。彼れが勢力は、實に詩人としても、批判家としても、双たつながら大なり、前ラファエル派の畵家の英國に起こりしは、或は重に彼れが影響なりといふことを得べし。さりながらラスキンの論說は、往々前後矛盾せり、而し

て彼れまた常に之れを自覺して安然たり。　彼れいはく「凡そ重要なる事柄は槪して三面、四面又は多々面を有す、而して件の多面體の周邊りを一歩づゝ取調ぶることは、頑なる人々に取りては、ツラキ業なるべし、予に取りては、何事にもあれ、そに關する說を、尠くとも三度ばかり、案じかへたる後にあらざれば妥當なりと安ずる能はず」と。

故テーン

十九世紀の末に於ける佛國の二明星は地に墮ちたり。　ルナンは六十九歲にて客年十月に易簀し、テーンは六十四歲にて本年三月に逝りぬ。ルナンに關する事は、我が國の諸雜誌も已に屢〻之れを報じたれば、今更にいふに及ばざれど、近世の理論家としても、批判家としても、將た新體の史家としても、文人としても、鐵中錚々の譽ある、他の一人の事蹟は、尙之れを傳ふる者稀なり。　テーンの我が國に於ける功績は、其の書の讀まるゝ區域の廣狹を標準としていはば、蓋し、ルナンに幾倍したるならん、彼れが『英文學史』の如きは、現に一二の私立學校の教科用書たり、而して方今我が國に流布したる英文學史中の最も啓發力に富みたる者なり、吾人豈彼れが功績の大要と其の爲人の片影とを我が讀者社會に紹

介せずして可ならんや。

テーンが功績

テーンは、所謂中古派(Romantic School)の運動に繼ぎて起こりし、科學派の一勇將として錚々たる者なり。 そも〳〵中古派の運動といふは、紀元後一千八百二十年と同五十年との間に起こりしものにて、此は是れ其の前代に盛なりし、泥古因循なる古文學派の反動なりき。 案ずるに、中古派の功績は頗る多大なり、彼等は狹隘偏頑なる古文學派の定則を打破して自由なる美術の原理を主張し、十九世紀に於ける文學美術をして新鮮活潑、生氣勃々たる者とならしめき。 彼等は一原則に泥まず、一摸範に拘らず、廣く古今の善美を萃め來たりて、之れを打ちて一丸となすことを奬勵し、取舍折衷の自由門を開きしかば、天才輩出し、傑作相つぎて成り、歐洲の智力史上に古今有數なる盛觀を現せしめき。 然かれども彼等が大なる功績にも若干の過失と弊害との相伴ふことをまぬがれざりき。 彼等の折衷を主張せしや、一方に於て、狹隘偏頑なる謬見を打破し得し代に、他方に於て、放縱不規の弊を釀し、行爲の一致、目的の定確、原理の有機的統系は、之れが爲に紊れ、文學も美術も次第に淺薄浮泛なるものとなりぬ。 此に於てや、更に一大反動の起こらざるを得

ざる機運となり、一千八百五十年以後に於て、所謂科學派の興隆を見るに至りき。

科學派の主義とせし所は、必ずしも悉く中古派、即ち折衷派と衝突するものにあらず。彼等は中古派と共に、古文學派の陳腐なる規律を排斥し、美術の自由なるべきを唱道し、生氣と生色と變化との豊富自在ならんことを渇望せり。然かれども彼等はまた、個人をして、ほしいまゝに其の一個の情感と想像との指定する所によりて、漠然たる主觀的理想を設定せしめ、而して偏に其の方角にのみ逸走せしむることを許さず、否、彼等は人生及び美術に通じて唯一の原理あることを認めたりき。所謂唯一の原理とは、眞理の探窮是れなり。而して彼等の所謂眞理は、彼の想像より生まるゝ漠然たる抽象の空想にもあらず、又主觀的若しくは專斷的の觀念にもあらずして、頗る確實に證明することを得べき客觀的、即ち科學的眞理なりき。彼等は具象的實體に就いて件の眞理を求め、又具象的證跡によりて其の實在を説明せんとしたりき。此の新運動の傾向は一千八百五十年以後の美術にも文學にも歴々として見れたり。Meissonier、Millet、Bastien Lepage 等の繪畫の上にも、Seconte de Lisle、Sully Prudhomme 等の詩篇の上にも、Renan 又は Fustel de Conlanges

の歷史的著述の上にも、Flaubert、Zola、Maupassant等の小說の上にも taine の如き哲學者の諸作の上にも見れたり。

固より此の科學的運動は、一千八百五十年に至りて、始めて現れたりしにはあらず、之れより先、已に其の曙光を洩らしたりし者なり。 例へば Héricault Stendhal、Balzac、Mérimée、Sainte Beuvé、Auguste Comte の如きは、此の運動の前驅として特筆すべきものたるや勿論なり。 さはれ所謂科學的主實旨義が佛國に於ける智力的生活の一大有機的原則となりしは、一千八百五十年以後の事とす。 其のころに至りては、此の旨義何事の上にも貫透せり、詩歌の上にも、模塑術の上にも、此の寫實の氣脈は顯然として通徹し、科學的精緻を重ずるの跡彰々たり。 就中、小說に於ける主實の傾向は最も目ざましきものあり、彼等は其の狀寫する所の現在の事物たると過去の事物たるとを問はず、精を極め緻を究めて、生活風俗の確實なる摸寫を物せんと欲し、實驗を重んずること、殆ど科學家者流に異ならず。 されば Bourget の如きは、其の小說中の人物の性を剖拆するに專門の心理學者を凌ぐべき精細嚴密の筆を以てし、Zola の如きは、更に生理、病理等の科學的研究をも應用せり。 Hérédia 並びに See-onte de Lisle の詩は、半ば學問上の著作の如く、Sully Prudhomme の作の如

きも、殆ど科學と哲學との雜種なり。歷史家の如きもまた然り、彼等の周細に古文書類を考證し、煩瑣なる事實をも綿密に分折し、歷史的現象の秘蘊を闡發せんとせる熱心と銳意とは眞に歎稱すべきものあり。哲學家者流の如きもまた然り。彼等は一層嚴格なる心理學の基礎、一層確實合理なる宇宙觀、一層精密なる思量の原則の知識を得んが爲に、數學をも研究し、博物史をも涉獵し、生理學をも稽査したり。之れを要するに、科學的主實旨義の方向に二道あり、一に曰はく、外に見れたる眞理の研究、二に曰はく內に存したる眞理の探索。

前者は生活の有形可觸的現象を、忠實に、ありのまゝに、表現することを以て目的とし、後者は此等諸現象を決定する勢力の作用と天然の諸原因の相互の作用とを思索推定することを目的とせり。是れ實に近年に於ける佛國文藝の目的にして、詩人も、畫工も、彫像家も、小說家も、哲學者も、はた科學者も、多少之れを以て其の旨とせざるものなし。蓋し、此の科學的主實旨義は、其の漸く極端に流るゝにおよびて、弊を生せしや爭ふべからずといへども、其の志望と努力とが嚴として一致し、恰も大川の堤を切つて一方に橫流したらんが如くなりしを、豈稀有の壯絕觀と稱せざるべけんや。

テーンは此の壯觀中の壯觀なり。 彼れは件の時勢と當代の精神とを、最も鋭く、最も豐に、且最も精密に、代表したるものなり。彼れは、哲學者としても、批評家としても、はた歷史家としても、科學的主實派の驍將たりき。 彼れの說固より悉く善美なるにはあらねど、其の眞理を愛するの念の無我誠實なりしことゝ、其の美術と科學とを兼ね修めて、二者を併合することの頗る有益なると同時に敢て行ひがたからざるものなることを當世に證したりし功績とは、稱して更に稱せざる可からず。 吾人は尙次號に於て彼れが爲人と學說との大要を語るべし。

ラスキンが美の論

ラスキンが美術に關する批判の主(おも)なる價値は、其の美術以外に出でゝ、人生に及ぶところにあり。 換言すれば、一箇の無上なる範疇の裡に倫理的と社會的と美術的とを結合する所、實に彼れば審美論の長處にしてまた短處なり。 ラスキンが美術の職分なりとし且其の功用なりとして證說せる所は極めて高尙なり。 彼れは美術の批判家たると同時に道德論者たり。 彼れの美術品を品隲するや、多少倫理的問題に干涉し、人間の義務に說き及ばざるとなし。 所詮、彼れは美術をもて單に道

義に關するものたるにとゞめで、神聖なるものとし、又道義をもて啻に善且眞なるものとのみせずして更に美なるものとせり。　ヱルノン、リーといふ匿名にて嘗てラスキンの美論を批評せしものあり、曰はく「ラスキンは道義と美術とを相關係せしめて双方を神聖ならしめんと欲し、却りて双方を毀ひ了んぬ。　道義は之れが爲に荒寥たるものとなり、美術は之れが爲に陋劣なるものとなりぬ」と。　恐らく酷評ならん。

プラトーとプロチナスとは有限の無限より發生したるものなる由を說き、所謂美は件の無限の表現に外ならずと敎へたりき。　彼等の此の說に達せしや、直覺悟入の作用によりて上よりせり。　ラスキンに至りては、同じ眞理に到達するに、專ら下よりせりと評すべし。　彼れは主張すらく、圓滿に美なるものゝうちには圓滿に善なるもの存す、かるが故に、人若し眞に美なるものを知りて脫我の情感をもて深くそを愛することを得ば、以て私欲の侵入を防ぎ、其の生活を潔うするに庶幾からん。夫れ美と善とは一ならずして相背けり、さはれ、其の根底を探れば相親和すべき性質を具し、相契合する所ありと。　試に爰に一個の道義論者ありて、左の如き疑問を提出せり、と假定せよ、曰はく、何故に予は此の弊害の瀰漫したる人間界に在りて美の研究に我が一身を委ねんとする

ぞと。ラスキンは答へて謂ふならん、他無し、道義を重ずればこそ美を研究せざるを得ざるなれ、蓋し、道義をして愛重すべく、若しくは鞏固ならしめんとせば、啻に美を知るをもて足れりとせずして、そを研究し、且愛好せざるべからずと。ラスキンが名著『近世畫家』の根底は實に爰にあり、而して其の趣味の湛然たる所以もまた爰にあり。固よりラスキンが美術上の判斷は悉く正確なるものにあらず、吾人が彼れの説を讀むや、首肯し得ざる所屢〻あるべし、然れども、其の天然(ネチユーア)の精神を解釋し、人間と天然との間の契合を論じ、あらゆる高尚なる美術的作物より來たる靈妙なる聲を解釋し、私欲を破し我慢を難ずるの條に至りては、前人未だいはざるの卓見、擧げて數ふべからず。

されどラスキンの美の論は、固より統系の整然たるものにあらず、彼れが與へたる美の定義は甚だ不完全なるものなり。彼れは『近世畫家』第一卷の中にいへらく「凡そ知力(インテレクト)の直接若しくは定確(デヒニツト)なる作用に頼らで、單に其の外部の性質を冥想したるのみにて、吾人が快感を感得する自然の物躰をば、予は多少美なる物と稱し、又ほゞ美なるものと稱すと。且曰はく、美の念は道念的認識の主題にして知力的認識の主題にあらずと。其の他にも彼れが美を評論したる章は『近世畫家』のうちに屢〻あ

ラスキンは善美一致論者なり

れども、到底曖昧にして捕捉しがたし。案ずるに、彼れの大なる失は、第一に其の用語例のみだりなるに在り、又其の說の前後間〻矛盾する所にあり。彼れが美の類を大別して表章(チピカル)美を活動(ヴイタル)美との二種としたる、論者の已に批難したる所なり。所謂表章美とは天然の無機界に存在する美なり、之れを表章美といへるは超絶の美の標章たるが故なりとぞ。件の表章美は、ラスキンの說によれば、石にも、花にも、獸にも、人類にも、見ゆることあり、されど其のいづれに見れたるを問はず、絶待に同一なり、而して其の要素となれるものは每に下の如し、曰はく、無限(是れ神聖なる不可思議不可領會の表號)、曰はく、統一(是れ神聖なる可思議可領會の表號)、曰はく、安靜(是れ神聖なる常住不變の表號)、曰はく平均(是れ神聖なる大道の表號)、曰はく、純正(是れ神聖なる志氣の表號)、曰はく、中庸(是れ法則によれる神聖なる統治の表號)云々。而して彼れはかゝる美は純然たる物質の特性とする所なりと說けり。さて第二類の美、即ち活動美を釋していはく、活動美とは動物に於ける職分の樂しく且めでたく實行せられたるをいふ、就中、人類に於ける圓滿なる生活の樂しく且正しく實行せられたるをいふ、と。

以上は彼れの所謂 Theoretic faculty 即ち審美力に關する說の一斑なり。

彼れは亦想像力を論じたり、彼れ曰はく、外界に存在せる美の本源は、純然たる原形のまゝにて、吾人の前に移さるゝものにあらず、必ずや人心の反射をまぬがるゝ能はざるなり、是れ想像力の所爲なり。さて想像力の何たるかを研究するに當たりて、哲學者等の說く所は何等の裨補をも與へず、蓋し、想像力は全く神秘不可思議にして說明すべからざるものなれば、只其の結果に於てのみ之れを認むべきものなるに、彼等哲學者等は强ひて此等能力の精髓を說明せんと試みつゝあり、是れ其の勞の無効なる所以なりと。ラスキンは想像力をば總じて美術に於ける宏大なるものゝ本源なり、とせり。

之れを要するに、ラスキンは善美一致論者の錚々たるものなり。彼れは美術と宗敎とをもて相離るべからざる姉妹なりとし、兩者に關する眞成の領會の孤立しては得がたき由を丁寧反復して論辯せり。

故テーンの性行

テーンの一生は其の性格と吻合したりき、彼れが一生は嚴格、單純、精勵の生涯なりき。彼れは家庭と交遊とのたのしみ、思辨考索の快幷びに天工、人工の好尙愛翫のうちに一生を過ごしたりき。彼れは深く事物

の眞（トルース）を愛し、且何事に關しても、誠實ならんことを力めき。其の思ふや、其の感ずるや、其の言ふや、其の行ふや、嘗て誠實の外にいでざりき。彼れは質撲眞面目にして正直なると小兒の如くなりき。彼れはまた甚だ温厚にして退讓なりき。善く觀察すれば、凡ならぬ風采の隱然たりしにも係らず、一見したる所にては、其の容貌にだに何等の異采なく、むしろ凡庸の人と見えにき。彼れは、世俗の爲にもてはやされて、一種のミセモノとなることを怖れ厭ふこと甚しく、これが爲に、概して新しき訪問者を避け、公會に臨むことを嫌ひ、又其の肖影を撮せしむることを厭ひき。されば彼れが肖像は只一あるのみ。是れしかしながら、交際を厭ひ、高蹈を願ひ、只管冷然超然として自尊の獨樂にのみ耽ることを好めりしが故にはあらず、何となれば、彼れは倨傲矯飾の失病ありしものにあらず、又苟も有益なる對問を厭ひしものにあらず。否、彼れは追從を離れ、且同等の位置にたちて、誠實に質問し來たる者あれば、悦びて之れを迎へ、談笑懇説、さながら逆（さかさま）に彼等訪問者の口より、何事をか學ばんと熱心せるものゝ如くなりき。

然り、彼れは實に諸の人より何事をか學ばんとしたりし也。彼れの事物の眞（トルース）を尙崇するの厚き、如何なる題目をだに輕視せざりき、瑣々たる

事實、屑々たる想も、其の苟も正確なる限は、彼れの限り無く尊重する所なりき。彼れは商人と商賣の事を談ずるを好み、小兒と翫具の事を語るを好み、加之、雜談をも詼謔をも好みき。只虚空の談は之れを好まず、又反語をば愛せず、但し滑稽と諷刺との能は彼れ必ずしも欠きたりしにあらず。

彼れの温厚退讓は其の性よりいでたり。彼れの哲學上に唱へたりし所は、甚だ人間に酷なるものに似たれど、其の行は寛大慈仁の人たりしを證す。彼れはいたく爭論を忌避せりき、されどこは其の性の優柔なりしが爲にもあらねば、怯懦因循なりしが爲にもあらず。蓋し、其の性固より温和平靜を好めりしに、其の社會發達の法則に關する學說更にそを助長せしかば、急激粗暴なる改革と變動とを嫌惡する念、竟に其の性のやうになりしなりけり。彼れの勇往直進、其の信ずる所を明言して憚らざるの證は、其の大著の上に歷々たり。因循怯懦の人といふべからざるや勿論なり。彼れはゞ〳〵著作し、ゞ〳〵論議し、又ゞば通說に反對し、斷言斷說して憚らざりき。彼れはそを賛する者をも、そを刺るものをも顧みず、亦曾て駁論に答へんともせざりき。彼れは爭論辨駁の、總じて個人の一身に關するものは、啻に眞理攷究の爲に

全國全世界に反對して絶叫せしも一個人に對しては抗論せざりき

穩健なる苦樂同視主義

益なきのみならで、むしろ双方の爲に有害なるを認めたればなりけり。彼れは間ゝ全國若しくは全世界に反對して絶叫せしかど、一個人に對しては抗論せざりき。

要するに、彼れは美德を愛し、且之れを實踐せしものなり。されば或は稱讃して君子的生涯を送りし者といふを得べきも、未だ仁人、達人の生活に近きたりしものとはいふべからず、彼の高大なる熱信と、幽玄なる禪定と、超自然の神聖とを欠きたればなり。テーンが生活の理想はゼノーとエピカラスとより來たりぬ、されば其の理想は或基督教的枯禪主義にもあらねば、或超人間的苦樂同視主義にもあらず、否、彼れはマルカス、オウレリオスの唱へたりし、温和合理なる苦樂同視主義を奉じて、之れを實踐せんと力めたりしなり。

其の技倆

凡そ思索家の理論は、啻に一理論として趣味あるのみにあらで、其の人の性質を反映するものとして興味あり。俊傑の出世に關するテーンが得意の理論は、彼等を擧げて血統と、時勢と、媒介(周圍)との産物とするにあり、此の論や、もとより悉く健正なるものにあらず、又之れを論駁せしものも夥多あれど、尚尠くとも此の理論の原則をテーン其の人の上

テーンは血統と時勢と周圍とに感化せられたり

に應用するときは、吾人は其の殆ど圓滿に適合するを見るなり。彼れは實に佛國人なりといふべく、又眞に佛國的血統を承傳せし者といふべし。彼れは明晰に精査せる思想と和諧平穩なる單純とを愛せり。即ち推理家なり、又合理家なり。彼れは神秘論者にもあらず、感情派の論者にもあらず、否、鞏固忠誠の論者なり。其の事物を講說するや、雄辯滔々、深く形の美と色の美とを樂しめり。若し夫れ其の間〻穿鋭峻刻なる諷刺を好めるはアーデンの地に生まれしが故なり。

彼れはまた、前にも說けるが如く、著く其の當時を代表せしものなり。一千八百四十年以後は、サーン、ブーヴがいへる如く、所謂中古主義(ロマンチシズム)の失敗したりし時なり、衆皆事實其の物の中に、事實の說明を啓發し得べき新系の理論を歡迎せんとしたりし時なり。テーンは實に此の主實的傾向に呼び迎へられし時勢の兒なり。

彼れはまた深く其の周圍の印銘を受けたりしものなり。其の壯年に於て蒙りし不正なる虐遇は、他人の誤れる判斷を度外視し、且之れを介意せざるの習性を誘致し、其の大學に於ける修鍊は、抽象概括の傾向と總合整理して修辭推論するの好尙とを釀成し、其の科學家、生理學家、醫學家との交際は、形而下の因に万現象を歸し、竟に定命の說(デタルミニズム)を確信する

彼れが想像は具象的極彩色なり

に至らしめ、其の美術家を尙崇するの氣禀は、彼れをして最も多く彼等と交遊せしめ、隨うて彼れの着眼をして悉く美術家的、畫工的たらしめき。彼れは、歷史をも、造化をも、畫工の眼をもて觀察せり。其の風俗を記し、服裝を狀するや、筆々活動、宛として繪畫を覽るが如きものあり、即ち彼れが想像は具象的極彩色なり。

然り、彼れは詩人たるの技倆に甚だ富めり、文章家としては、事物を活かして畫き、史家としては、現に動き、現に行爲し、現に談論する人物を畫き、批評家としては、毎に眼中にルーベンズを見、チシアンを見、シェークスピアを見る、而も尙推理の才能、即ち科學的、數學的能力に貧ならざるなり。案ずるに、是れ彼れが甚だ大なる所以にして亦其の大ならざる所以なり、即ち彼れの力量の秘訣にして亦其の短所なり。彼れは何事をも、詮ずる所は、數學的問題なりと思へりき、有形なる宇宙、人間の自我、歷史的事件、美術の作物等、物として彼れが其の源をいと單純なる定理に歸せざるはなし。彼れは此等複雜神秘なる問題をば、數學家が定式を說明するが如く、論理家が三段法を應用するが如くに、穿細明瞭に取り扱へり。彼れの作家を評し、美術家を論ずるや、總て彼等の由來を等しく血統と時勢と周圍との三者に歸す。又其の一疑問を釋せんとする

主實家

や、例へば「美術に於ける極致(アイデアル)を組成する者は何ぞや」といふ疑問を釋せんとするや、彼れは鑿々として美術品の緊要の程度と利益の程度とを(即ち普通的功用を)計算精査するに全力を注ぎ、却りて他の必須なる、而も神妙不可説なる美の原素を遺却して平然たる概あり。要するに、テーンは主實家なり、其の推理は偏に具象的思念を基礎としたり。彼れは、修史に於ても、文學、美術の批判に於ても、哲學上の考索に於ても、每に事實をもて其の發途點となしたり。彼れが「智論」の發途點は符號なり、而して符號とは心像(イメージ)の集合を表する總稱なり、而して心像(イメージ)は感覺聯續の結果なり、而して感覺は筋動聯續の結果なり。畢竟、テーンの見によれば、所謂想(アイデア)はあるまじき經驗の集合躰を表する空名に外ならざるなり。案ずるに、テーンの世に所謂實驗派(ポジチヰスト)に異なるところはたこゝに在り。夫れ實驗派は諸の事實を剖拆分解して其の相等しき所以、又は其の相繼續する所以に着目すれども、敢て必ずしも彼等の間に因果の或確定せる關係あることを假定せざるなり、然るに、テーンに至りては、絶待の定命説を唱へて、事實と事實との間に確定明瞭なる因緣果報の關係あるとを斷了せり。かるが故に、吾人若し彼れを信じて而して彼れの諸著を讀まば、宇宙間の事物一として彰々乎と解釋徹底せ

られざるものなきが如くに感ずべし。

テーンが想像力の結果もまた其の推理力の結果と質を同うせり。彼れは詩人的才能、畫工的想像に富めりといふものから、そは彼の電光石火的想像にはあらず、換言すれば、彼の隱約模糊の間に造化の玄妙と秘密とを映射し、髣髴たる影のうちに人間の靈魂を現ずる底のものにあらで、むしろ講明的、狀寫的、分拆的、浮彫的、極彩色的のものなり。即ち彼れは論理的才能と畫圖的才能とを兼有し、審美の法と科學研究の法とを混同し、複雜靈妙なる造化人生の諸現象を、一種の嚴格なる定規によりて、悉く一樣に律し去らんとしたりき。而して此の杓子定規的攻究こそ回護すべからざるテーンの缺典にして、其の書の往々讀者をして人生の甚だ陋劣なるが如きを感ぜしめ、個人の心性の大に賴むに足らざるが如きを感ぜしむる所以なり。

以上、已に說けるが如く、テーンは形而上の實體を度外視して、只管に形而下の事實を重じたり、かるが故に、彼れの文學を論じ、美を論ずるや、其の之れを攻究するの手續、他の歷史上の問題を攻究するの方法に異なることなし、隨うて、彼れの著述は、彼の『智論』と『ピレニース紀行』とを除くの外は、殆ど悉く歷史的著述ともいふべきものなり。そも〳〵史に

據りて文學を批判するの法は、近世の一進化にして之れを創唱せしものはアベル、フランソア、キルマンなるべし、之れに次ぎて、一層整然たる方法によりて、作家と其の境遇との關係を講明し、以て文學を批判せんとせしものはサーン、ブーヴなり、而してテーンに至りては、更に其の上に一歩を進めし者なり。彼れは文學をもて啻に當期當代の最貴最著なる證文と見做したるのみにあらで、當期當代の必然なる產物なりと思惟したり。されぱこそ彼れのラ、フォンテーヌを論ずるや、其の實は十七世紀の社會とルイ十四世の朝廷とを評論するに外ならざる者となる、又其の英國文學の史を叙するや、其の實は古代より最近代に至るまでの英國の文化の變遷と英國民心の進化とを叙するに外ならざるものとなる、されぱまた其の伊太利紀行と『美術の哲理』に於ては、十五世紀及び十六世紀の伊太利社會を評論して十七世紀なる和蘭の生活幷びにペリクリス及びアレキサンダルの時代に於ける希臘民族の風俗に及びたり。之れを要するに、テーンは文學史幷びに美術史をもて人間の自然史の一部分なりとし、而して人間の自然史をもて宇宙史の一斷片なりとしたり。即ち彼れの人間を考査するや、植物家又は動物家が植物又は動物を考査するに似たる者あり。

テーンは近世の科學的精神を代表す

テーンは最も誠實に、最も著大に、近世の科學的精神を代表したりしものなり。彼れは十九世紀の一大勢力なりき、然るに、ルナン逝りて程なくテーンまた去りぬ、佛蘭西の智識界は一時に二明星を失ひたりと謂ひつべし。

（以上廿六年六七月稿、而して最後の一編は專ら『當代評論』四月號 G. Monod に據りて稿を起こせり）

國文家の新事業

國文家の新事業

明治の文壇、新に擧行すべきこと一にして足らずと雖も、眞に高尚精妙なる性質を有する事業に至りては、一旦一夕の發心によりて成るものにあらず、ましてや局外者の忠告、若しくは批評家の奬勵等の力は、かゝる高尚なる事業に對しては、殆ど何等の効能をも與へざるべし。例へば、現今の文壇の大戯曲を渇望し、大歷史を渇望し、大小說を渇望し、大議論を渇望し、大抒情歌を渇望し、大豫言者を渇望し、其の他種々の大的創作を渇望することは爭ふべからざる事實なりと雖も、此等は皆天才其の人を俟ちてさて始めて實現せらるべきものなり。批判は古より大なる詩歌を生まず、徒に疾呼大號して、此等精神的根源より生ずべきものを禱りいださんと試みるは、眞に徒爾中の徒爾なるに似たり。吾人

もとプロメシウスにあらず、天上の靈火を取り來たりて、俄に天才を揑造し得べしと夢想せんや。　かるが故に、爰に表題して新事業といふものは、世間の唯心的傾向ある血性的讀者に悅ばるべき、花々しき事業の謂にはあらず、局外の忠告と近隣（ネイボルフード）の評論との力によりて、容易く誘奬し得べき類の事業なり、所謂（多少）機械的事業なり。

然り、多少機械的事業なり、然れども、後の精神的事業の有益便利なる階梯となるべき事業なり、乞ふ吾人をして簡畧に之れを說明せしめよ。

方今須からく擧行すべき事業にして割合に容易なるもの夥多あり、其のうち稍ゝぬきんでゝ緊要なるべしと思はるゝものゝ一二をいはんに、殊なる文典と殊なる字彙との編成なり。

殊なる文典と殊なる辭彙

殊なる文典とは『万葉文典』、『源氏物語文典』、『近松院本文典』の如きこれなり、英文學に於ける諸殊的文典、例へば古詩文典、シェークスピア文典にひとしかるべきものをいふなり。　思ふに『万葉集』を詳密若しくは煩瑣なる解釋によりて研究する時代は、尠くとも專門家以外の人々に取りては、近年のうちに過ぎ去らしめざるべからざるなり。『万葉集』、『源氏物語』等、數十冊の爲に、半生を消費するの時代は、明治廿六年後に久しく彷徨せしむべからず、万葉假名は、尠くとも專門家以外の研究者、若し

くは翫讀者に取りては、無用の長物たらしめざるべからず。たとひ万葉の歌は、教授ブルックが其の新著『英國古代文學史』に於て、古代詩を飜譯したるが如くに、潜心焦慮して、詞と調とを具足せさせて、近代の詞に飜譯する必要なしとするも、かりそめにも國文學研究の普遍洽通ならんことを望むの心あらば、就きて學ぶの道を便利にせんことを望まざるべからず。すなはち、已に或場合には行はれたるが如く、万葉假名に代ふるに總て眞名まじりの平假名をもてすべきはいふまでもなし、『源氏物語』の如きも及ぶべきだけは、妥當の漢字を選びて彼の過多なる平假名に代へ、振假名を利用し、以て普通の國文に通じたるものをして一讀了解するを得るの道を開くべきなり。而して之れと同時に、必ず擧行すべきは文法書の編成なり。彼の英のアボットがシエークスピアの語法を闡明せしが如き、勉勵と忠實とをもてせば、『万葉文典』の成る、一年の業たるに過ぎざるべく、『源氏物語文典』の編成、また甚だ難からざるべし。而して後者の如きは、彼のアボットの文法書が、シエークスピアの文典たると同時にベーコンの文典ともなり、またはエリザ文學の文典ともなるが如く、或は『枕艸紙』の文典ともなり、また奈良朝文學の文典をも略示する者とならん。彼の科學思想に乏しかりし明治以前

「雅言集覽」以上の整然たる辭彙を編すべき時來たれり

の學者が、殊文典に着眼せざりしは是非もなけれど、方今の學者にして心を爰に注がざるは、啻に時勢に聰ならざるの譏あらんにとゞまらず、後進を導く心淺きに似たりといふ譏あらん。

第二の事業は殊なる字彙の編成なり。　シユミットがシエークスピアの用語を網羅して、整然に用例を分かちて釋を附したるが如くに『万葉』『源氏』又は近松等のありとある用語を集釋せば、其の簡便にして有益なる、本朝文學手引艸中無双空前の者ならずや。　夫れ『萬葉』『源語』等は我がクラシックなり、其の片言隻句に就きても百の議論あらんと勿論なれど、元錄以來の研究の積果は、もはや斯道の學者をして其の字彙を編することを難（かたん）せしむるには及ばざるべし。　吾人は常に訝る、彼等の營々としていつまでも同じ煩瑣なる研究を繰り返し、後進の爲に殆ど芟除すべからざる八重葎をいやが上に生ひ茂らせ、やがて如何ともすべからざる雜草の迷途を作らんと試みつゝあるが如きを。　明治廿六年以後は學壇多事の時節なり、江戸太平時代の緩漫なる研究法は今や斷として拋たざるべからざるなり。　吾人は斯道の學者の、自己の爲に學ぶことのみに心を注ぎて、國家の爲に學を便にするの意思なきが如きを訝る。

近松文典、近松字彙━━現今の讀者之れを讀みて或は異樣の感あらんか、吾人は五十年を出でずして近松が一種のクラシックとなるの日あらんを豫想する者なり。西鶴の文は已になかばクラシックとならんとす、近松の文の殆ど解しがたき者とならん日遠からざるべし。而して近松の解しがたからん時は元祿文學の解しがたからん時ならん。吾人は浩繁なる近松院本の文典と字彙とをもて元祿文學の字彙兼文典たるに堪べしと信ずるが故に、今の時に當たりて其の編あらんとを誘奬す。今日に於ては、一二年の勉勵、或は其の業の功を奏するに足らん、然るに之れを五十年の後にせば、大頭腦をして空しく機械的事業に五六年を消費せしめん。此れ豈文壇の大浪費にあらずや。

政治家と文學

政治上の現象と文學上の現象とは共に當時當處に活動する國民的精神の照影なり、其の本分と其の形狀とは如何ばかり相背馳すとも、其の相離るゝことは霄壤の如くに甚しからんは、思ふに健全の狀態にあらざるべし。吾人つく〴〵方今の社會的情勢を觀察するに、文壇と政治壇との相隔絕したる、胡越も啻ならざる趣あり。假令英國の十八世紀若

しくは佛國の革命期に於ける二者の關係の如きは、之れを稀有例外の現象なりとするも、現今の如き甚しき隔絶も、恐らく人間相の不具なるものなるべし。　試に兩界の實際を精察せよ、新代の詩文人を以て自任する者の多數は、概して世界大の理想なきと同時に、一國家大の同感にも乏しく、而して今の經世家を以てみづから居る者の多數は、殆ど正當に謂ふ文學の何等のものたるを解せざるなり。　蓋し、今の所謂政治家のうちには、和漢洋の雜籍を博渉して、頗る詩文章の知識に富み、東西の詞藻に豐（ゆたか）なる人々も夥多あらん、漢魏唐宋の文學にも精通し、万葉古今の秀逸をも諳じ、內外幾百の詩文章を愛翫讀誦せるものも或は尠きにあらざるべし、然れども、深く最高義に謂ふ文學の本旨を解して、嚴正に謂ふ文學思想と頗る高尙なる鑑識とを具備せりと見ゆる者は、尠くとも其の言論に見れたる所によりて判ずれば、尙甚だ少數なるが如し。
吾人往ぬる二十四年十月、『亞細亞』記者鈴木券太郎氏が「新聞記者」と表題したる論文の中に、當時世間に知られたる政治的操觚者を論評したりしを記憶す、其の中に見えたる人名は、ほゞ下の如し

福地源一郎、中村武雄、末廣鐵腸、肥塚龍、島田三郎、田口鼎軒、矢野文雄、藤田茂吉、箕浦勝人、尾崎學堂、吉田喜六、高橋基一、犬養木堂、中江篤介、德富猪一郎、朝

比奈知泉、北村紫山、高田早苗、關直彦、竹越與三郎、志賀矧川、三宅雄次郎、鈴木熊太郎、今外三郎、等

此等は政治家といはんよりも、むしろ政治的文士といふべき者なれど、先づ彼等を頂點の粧飾として配置し、更に之れに加ふるに、福澤、加藤、等の如き老學者を以てし、更に末松謙澄、織田純一郎氏の如き、多少輕易文學（ライトリテラチユール）にも因（ちなみ）ある人々をはじめとして、かりそめにも政治的文章に關係ある知名の人々を網羅し（且く宗教論を兼ねたるを除き）假に之れを政治に密接せる操觚者、即ち政治家の口舌と名け、さて件の雜駁なる團躰の上に就きて、其の文學上の理想の高卑と其の審美鑑識の深淺とを撿すれば、吾人は不幸にも彼等の多數が最高義に謂ふ文學の思想に頗る貧なるを認めざるを得ず。　吾人は彼等をもて文章に巧妙ならずとはいはず、詩文の好尚を欠きたりともいはず、然れども其の審美の標準と鑑識の原理とに至りては、吾人未だ彼等の中にローリー、ラムブル、ピツト、シエリダン等の面影をすら多く見出だすとを得ず、況やバルクの審美思想、ベカンズフイールド伯の詩眼、グラツドストーンの餘綽をや。　其の未顯の少數のうちには、其の想の高きこと彼の世間に偏したるベーコンの學說をも凌ぎ、其の識見の幽遠なることと現實に泥みたるマコー

レーの意見にも優らんとする者、或は尠からずあるべしと雖も、已顯の政治的操觚者中には、かくの如きものなほ甚だ鮮し、雲霞の如き政治的操觚者流のうち、僅に二三を除けば、餘は皆滔々として如上の種類に屬する者なり。

顧みて我が方今の詩文壇を觀れば、所謂詩人、(狹義に謂ふ)歌人、(同前)文章家、小說家等は(もとより若干の例外あるものとして)おの〳〵此の小日本の或一邊隅に蟄居して、蝸牛角上に文學界といふ小宇宙を造爲し、或は優遊自適の外面の下に形骸上の樂欲に沈湎し、世に國家といふものゝあることを忘却し、或は別に其の微小なる宇宙の間に苦感樂感の八百八街を作りて、無限の妄想に無終の起伏を成し、常に三世を達觀すべき詩眼は屢〻一我に局集して殆ど些の餘裕無きものあり、此れ其の多數の情態なり。　吾人は固より政治家と詩文人とが其の天職を殊にせるを知る、吾人は强ちに彼等文士の社會より明治のアリストファニーズ、明治のラマルターン、明治のキクトル、ユーゴーの現れんことを熱望する者にあらず、然れども、遍く三世を達觀するの詩文人は、尠くとも一世を觀察して、時勢の活機に通じ、彼等應世的詩傑の肺肝を洞察し、優に其の上に位せざるべからざるに、區々屑々として徒に一我の前後にのみ

眼睛を轉じ、三世大の觀念はいふも更なり、一世大の觀念、否、一國大の觀念、否、一府大の觀念すらも、殆ど時に空しからんとするは、之れを詩眼の健なるものといふべしや、大創作の容易に成る能はざる偶然にあらざるなり。

今の聰明なる讀書社會は、詩歌に、小說に、大創作の寥々たるを歎きて、種々の注文をなし、或は新題目を呈出し、或は新師表を紹介せり。　例へば德富蘇峰氏が、嘗て『國民之友』にて「詩人の新題目」を論じ、近ごろまた「觀察」の方法を說き、高田半峰氏が『讀賣新聞』にて士爵ヲルタル、スコットを紹介して歷史小說の長篇を渴望し、健全なる稗史の流行を誘奬せしが如きは、明に聰明なる讀書社會の願望を代表するものなり。　遮莫、如何に聰明なりといふとも、讀書社會の代表者は、門外局外の知者なり、傍觀八目といふものから、偏に察機を專一とする事業と、必ずや其の素を自家の心に得ざるべからざる文學上の事業とは、其の趣同じからねば、彼等が穿鋭なる批判の征箭も、尙時としては、事の正鵠に的中せざることあり。所詮、何等の聰明なる局外者ありて、何等の精妙なる新方法を工夫し、幾たび詩文人に向かひて指敎すとも、今の詩文人の神我（ソール）にして詩的美に達せざる間は、億萬言の忠告も竟に對牛の彈琴、馬耳の東風ならんのみ。

大作の出でざる理由

吾人の觀る所によれば、今の文學の創作に遲々たるは強（あながち）に其の題目に窮乏したるが故にもあらず、將（はた）好師表、好模範を見出ださゞるが爲のゆゑに舊套を脫し得ざるにもあらず、尙他に幾多の困難なる根本的理由あるなり。　理由とは何ぞ。　手腕の尙稚きが爲か。　然り、若し今の讀書社會の希望が有數の傑作を得んとするにあるならば、其の希望の大なるに比べては、手腕尙強大なりといふべからざるべし、然れども、かくの如きは、吾人が謂ふ根本の理由にあらず。　しからば經驗の尙不足したるが故なりといふか。　否、必ずしも然らざるべし、古今の大文豪に比ぶれば、經驗の足らざると勿論なれども、今の寛大なる讀書社會は、ヂスレリーの處女作、リットンの『所勸當（ヂスオウンド）』を得るも、尙且喝采せんとするものゝ如し、今の作家の經驗といふとも、豈當年の彼等に劣らんや。　然らんには、一念信仰する根本理想の無きが故か。

未だ必ずしも然らざるべし。　夫れ理想の信仰にも眞假あり、而して假信、妄信は決して大創作の要素にあらず。　さはいへど、多數の文士に一定確實不動不壞の信仰の存せざるとは事實なり、これ恐らくは創作の發心を妨ぐる一大因なるべし、然れども、尙之れに先（さきだ）てる一大因あり。　他無し、彼等の宇宙の局小なること是れなり。　彼等の多數は一丶我を解

脱する能はざるなり。爰に脱我といふは必ずしも道義上の意義にてのみいふに非ず、美感上よりもいふ也。即ち、花を見るも、月を見るも、將(はた)山水の明媚を見るも、曾て恍然無私なる能はざるを不脱我といふなり。彼等の多數は花月を觀ては酒食を聯念し、美女を觀ては之れを妻(めとら)んと想ふ、即ち毎に我が欲を脱せざるなり、殆ど一我以外のものに同感する能はざる也。彼等の神我(ソール)は概して一身大なり、一國大となる能はず、一府大となる能はず、況や一世代、宇宙大となることをや。彼等は殆ど常に殊局なる神我(ソール)を表白す、其の表白の最も廣くして大なる時だに、僅に同臭を動かし、同味を感ずるに過ぎざるなり。然らざれば、彼等の一分はポープ以後の英國詩人の如く、只管に古物的詞藻(セカンドハンドエピセツト)を蒐集し來たりて、臨機應變に人生と万有との再三複寫に從事し、其の冷々たる俗懷を温げなる詩文章に表白すること、猶病身の令孃が肉色おしろいをもて厚化粧を施し、巧に其の青白き頬を粧ふがごとし。畢竟、彼等の多數は、神聖なる文學を以て一種の尺八又は三絃に似たる俗樂器と見做し、其の變々化々の聲調は偏に四隣の衆小我をして我が神我の艶福を健美せしむべき料なりと思惟するに似なり。到底彼等の心中に四隣(半峯居士の所謂向三軒兩隣)以外の億萬の衆我と共に天樂の妙音を樂しまん

とする念の起らざる間は、眞成文學の榮光は決して世に現れざるべし。さからば彼等の神我をして四隣大以上ならしめ、一國大、一世大たらしむべき方便は如何。

史を按ずるに、英國のベッス王朝は文學と政治とが頗る相接近せし時代なりき、又彼の十八世紀、所謂アウガスタン時代もまた二者接近の時代なりき、而して前者は二者の相接近せしがために、幾多文豪を獎誘し、後者は同じ因緣に由りて詩文を俗化したり。因りて思ふに、二者の接近は必ずしも文學を益せざるのみにあらで、時としては、不祥を生ずること無きにもあらず。されど更に古代に遡りて、希臘全盛期の文學、西班興隆期の文學、幷びに佛、伊に於ける詩文の消長を案ずれば、總じて詩文人の大なる同感の裡には、常に先づ當國に對する同感を包含せり、換言すれば、其の本國に對してだに熱情を有せざる詩文人は、終に大文豪たる能はざりしなり。シエークスピアが平等同感の著作にすら、尠くとも其の壯年の作中には、愛國の思想著く見えたり。彼れが好みて其の本國の人君を主人公として多數の歷史的脚本を綴りたる、一には其の師マアロウの先例に因緣せるものから、當時(そのころ)政治的觀念が彼れの腦裡に勃々たりしことと想見するに堪へたり。すなはち政治と文學との

接近は、尠くとも文學者の過小なる宇宙を擴充するの効用あらん。よしや假に其の効用をば必しがたしとするも、我が目下の必要は、多少の冒險を行はんことを吾人に勸告す。此の故に吾人は政治界と文學界との間に設けられたる背感を冷情との屏障を打碎して、洽く此の双界を融會せしめ、兩者の間に温き同感を成り立たしめ、多數の文士が狹小なる神我をして尠くとも國家大たらしめんと願望す、かくの如きは之れをして宇宙大、三世大たらしむべき一種の階梯と信ずればなり。而して之れを成就せんと欲するに當たりては、方今政治界に錚々たる人々の文學思想、更に幾段を進めざるべからず。彼等の文學論は、方今の文士をして多少同情を寄せしむるに足る者ならざるべからず、彼等の文學的鑑識は、文士をして多少其の知音を得たりと思はしむるに足るものならざるべからず、政治家の文學思想は、尠くともバルク、アヂソン、ミル、ヂスレリー等のに劣るべからず。要するに、彼等は幾分か審美の旨感に富み、批判の詩眼を具へ、假令傲慢なる少數の文士を服し得ざるも、多數のスナホなる文士をして自家を推重若しくは愛敬せしむるの資を具せざるべからず。讀者よ、みだりに吾人が說を嘲笑し去ると勿れ、此れは是れ二者の間に横はれる冷情背感の屏障を破る鐵槌にし

二者の弊を救ふ善巧方便

て、一方に於ては、偏に只管に高からんとする傾向ある文士の神我をして、且高く且廣大ならしめ、他方に於ては、偏に只管に現在の實利に執着せんとする傾向ある政治家者流の神我に與ふるに、高雅清淨なる天使の翼を以てし、如意に汚濁なる榮利と名聞との外に翺翔せしめ、間接に後世をも益せしむる、一大善巧方便たり。

夫れ最高義にいふ政治家は、エマルソンの所謂能爲者 (Doer) にして、最高義に謂ふ詩文人は、同じ人の所謂能説者 (Sayer) なり。即ち政治家は現在一代を救ふ世間の菩薩にして、詩文人は過現未三世にわたれる不壞常住の眞善美を説る出世間の如來なり。能爲(實行)の世界と能說(解釋)の世界とは、其の位おの〱格別なりと雖も、能爲者にして秋毫も三世の大理想を察知するの明なからんか、彼れそも何を標的としてか現在の世間に處することを得ん。絶えて常住の眞善美を認識するの感想なき政治家は、徒に嚴酷なる偏理、窮屈なる形名、狹隘なる實益、體裁好き私利、陋劣なる名聞、若しくは更に賤しむべき嫉妬偏執の犧牲となりて、假令一處一代を裨益することを得るも、無意識にして後世を損害し、假令一身を裨益するも、一國を毀ひ、假令一國を裨益するも、意外に人間を傷ずることあるべし。最高の準的は彼の常住不壞一切處に遍き眞善

美を除いて外に求むるに由なければなり。詮ずるに、能爲と能説との双界を結合するは、今の時に當たりて、双方の一大利益なるべし。牛峯居士高田早苗氏、近きうちに小説と政治家思想との關係を論せんと企てられたりとはのかにきゝて、不圖與の動くまゝに、日ごろ思ひ寄れりし一斑を表白する、上の如し、尚高田氏の論説を讀みて後に、吾人が論の足らざるを補ふことあらん。

新題目

聰明なる讀書社會を代表して、文學社會に忠言を屢ゝする、政界の名士二家を得たり、第一を民友社の德富蘇峰氏とし、第二を日就社の高田半峯氏とす。前者が『國民の友』第百七十一號に於て、「詩人の題目」を論じたる、其の要に曰はく、

夫の新體詩は、其の希望とする所は、新社會の思想を自由に發表せんとするにあらずや、而して其の歌ふ所は、一二の人を除くの外は、依然として風雲月露戀無常に限らるゝなり、其の思想は毫も人生の實際に觸着せず、其公卿が宮殿の內に蟄居せる時代の思想にして、自然を歌ふか、物の哀を歌ふか、忘慢なる戀愛を歌ふか、然らずんば咏物咏史に過ぎざるなり。

と。さて新體詩家の爲に計りて曰はく「生を進歩の世界に托せよ」と、且

之れを行ふの手段を教へて曰はく「汝の詩題を一變せよ、風雲月露の自然界より人生、自由、社會人物てふ人間世界に移轉せよ」と、やがてハリソンの語を引きて「詩人は今日と未來とに生活すべきものなり」と論じ、且今日未來の義を釋して「今日とは今日の人物、今日の社會を咏ずるを謂ひ、未來とは理想の社會、自由の天國を示すなり」といひ、更に數多の新題目を紹介せり、

曰はく、憲法を破らんとする頑迷の徒に光明を示せ、曰はく、我が國民が進みて到るべき光榮ある民政國を歌へ、曰はく、我が國民を習慣と壓抑より脱れしむる自由神を咏ぜよ、曰はく、四海閑田無きに農夫ひとり南畝に泣くの慘狀を歌へ、曰はく、死生自由と共にせんとする板垣伯に與へよ、曰はく、少年に希望を與ふることロングフヘロウの如くあれと、

德富氏の謂ふ新躰詩家とは、疑ふまでもなく、世に韵文家と稱するものゝ謂なること明なれど、其の論旨の大要は、洽く詩文章（小說をも含みたるもの）の上にも（少數の例外を置く時は）其の儘に應用することを得べし。例へば、今の多數の人情小說は、概して怠慢なる戀愛を歌へる長篇の新體詩にして、徒に過去を夢みる時代物の小說は、同氏が貶したる「歷史回顧」の長篇の歌なり。其の他、俳文クヅシの小品文は、おほむね咏物、若しくは花鳥風月の詩歌に類似す、其の彼等と異なるは、主に字の多寡

と句の長短とにあるのみ。

按ふに、德富氏の本意は、詩人をして現在と未來との間に懸るべき天の浮橋たらしめんとするにあるならん、換言すれば、彼等をして國民の畏友たらしむると同時に、國民の豫言者たらしめんとするなり。さて此の論旨や、或は世の太早計の徒の爲に、或は誤解せらるゝの虞なきにもあらず、と思はれぬれば、當時直に一篇の蕪文を艸して蛇足の解釋を作らんと企てし事ありしが、聊思ふ由のありて中止したりしに、民友子の烱眼は、更に深く文壇の弊源を看破し、『國民の友』第百八十六號に於て、新に「觀察」の方法を論じ、今の詩文人の徒に新奇を競衒して却りて觀察の正準を誤り、靈機を描破するに及ばざるを歎じ、すなはち說きて曰はく、

宇宙に新物なし、然れ共其の眞物に至りては萬古を經るも決して陳腐とならず、誰れか雪の如き芳野の櫻花を目して陳腐と云ふ、誰れか黃鶯の梅枝に吟ずるを目して陳腐といふ、造化は終古依然たり、而して終古清新なり、人間も亦た造化の一部たるを知らば、其の終古依然たるに係らず、苟も其の眞を保たば、終古清新なる亦た知るべし、誰れか父母に孝なるを陳腐といふ、誰れか夫婦相愛するを陳腐と云ふ、誰れか交友相信ずるを陳腐と云ふ、オデッセー、イリアッド、詩經、万葉集、六經聖書の千百載を經るも、尙ほ諷誦欽讀禁ずる能はざる所以のもの、唯其の眞を捉へたるが爲にあらず

や。

と又曰はく、

嗟呼人性は千萬載を經て今日に到るも不思議の迷宮なり、一指を觸るゝも尚ほ妙光を發すべし、人情は不可測の深淵なり、尺鉛を投ずるも尚ほ靈焔を發すべし、汝が觀察の新版圖、總て此の中に存す、何の遑ありてか此の廣大無邊の版圖を棄てゝ、更に他の砂丘に向てベベルの高塔を築かんとする。

と、又觀察の正法を誨へて曰はく、

然らば如何にして明に觀る、斯かる問題は方式的に解釋し得べきにあらず、神靈覺の作用は唯た神知靈覺を以て悟了すべきのみ、然りと雖も已なくんば則ち一あり、曰く、赤心を以て觀るのみ、玆に赤子ありとせよ、彼は病めり、彼は明に其の痛苦を語る能はず、彼の雄辯なる陳訴は、唯だ呱々の悲聲あるのみ、彼の痛苦は明なり、然れども如何に痛苦する耶、如何なる時に痛苦なる耶、如何なる局部痛苦なる耶、更に知るべからず、之を醫師に診せしむ、醫師も亦詳にする能はず、唯だ慈母の愛情の眞なるあり、心誠に求め、之を遂に彼をして其の病狀を解せしめ、遂に醫師をして其藥方を下さしむるに到る、事玆に到れば慈母の眞愛は科學の關く能はざる鐵門をも排し得るにあらずや、吾人故に曰く觀察の金鑰は唯だ一の赤心のみ、

と、赤心なる哉、民友子の此の論や能く獘源を貫けり、今の文壇の欠乏

高田半峯氏の文學論

する所は實に新題目にあらずして此の一の赤心なり。さもあれ民友子が嘗て擧げし新題目は、剖析し論辯し解釋し説明するを得るが故に、或は多少文學の實際を補益するを得べしと雖も、此の不可思議、不可説、不可解釋の靈妙知覺は、そもまた如何にせば、今の文壇に輸入することを得べき。

半峯居士、高田早苗氏、客月十九日の『讀賣新聞』紙上に於て、士爵ヲルタル、スコットを紹介し、其の終に臨みて、小説讀者を代表して今の小説家に三ヶ條の希望を呈出せり、曰はく、歷史小説を作るべし、曰はく、健全なる小説を作るべし、曰はく、面白きタップリしたる小説を作るべし、と。居士いへらく、

> 日本現時の小説家中に大家多しと聞くに、スコットが路易十一世を寫したるが如く、織田信長を畫く者は無きか、獅王リチヤルドを畫ける如くに、不識庵謙信を寫すものは無きか、

と。又曰はく

> 健全なる小説とは卑猥殘酷ならぬ小説を指す、ゾラの筆力は遒勁ならん、然れども其の趣向の淫猥は、或は一層の感動を與へたるかは圖るべからず。ドストエフスキーの作は沈痛なること勿論ならん、然れども其の意匠の殘忍は、幾分か讀者の同情を増す所あるか知るべからず、孰れにもせよ此

の如き小說の社會に好影響を及ほさゞるは明白なり、予は今の小說を指して、必しも不健全さはいはず、只いよ〳〵ます〳〵健全ならんことを希ふのみ、

と。又曰はく、

吾人讀者は小說の多旨なることゝ同時に多量ならんことを欲す、カラスミ、海鼠腸、小松菜のひたしもの旨ならずといふにはあられど、倘喰ひ足らぬ憾あり、泰西文豪の傑作に比すれば、水滸も八犬も長からず、何が故に今の小說家は偏に短篇に力を傾けて大著作に從事せざるぞ。

と。半峯居士の口吻、七八年以前に比ぶれば、何ぞかくも遠慮斟酌に過ぎたるぞ。居士は眞に今の文壇にスコットに匹敵し得べき手腕ありと思へるか。スコットが『湖上佳人』を著しゝや、齡三十有九歲、其のはじめて『ウエーヹレー』を再版するや齡四十有三歲、又シエークスピアが『ハムレット』を完成して諸大悲劇の端を發せしや、傳にいふ、其の齡四十歲と。居士は眞實に今の作家に大歷史小說を作るの手腕ありと信ずるか。吾人は信ず、居士が此の論、七八年以前なりせば、思ふに左の如き口吻にて表白せられしならんと、曰はく、

諸君は英に士爵チルタルス、スコットあるを知らざるか、彼れは諸君が師として耻かしからぬものなり、其の歷史小說に馬琴に駕して上る數等、其の

理想の健全にして高雅なる、これはた曲亭をして歟歩を譲らしむ、其の筆力の自在にして其の想像の豐富なる、殆ど神業(ミラクル)に類す、諸君須からく彼れを師表として一大雄篇を作らんと試みよ、

と。

げにヲルタル、スコットは英國古今の詩文人中、尠くとも無私の寫性と健全なる趣向との上より見れば、小ならざる間隙を隔てゝ、シエークスピア及びチョーサルの二大詩人に次ぐものなるべし、居士が今の文壇に向かひて、彼れを推薦する眞に其の故あり、只其の遠慮と斟酌とは、吾人之れを悅ばず、今の稍(やゝ)固着せんとする文學的宇宙は、柔和遜讓の忠言の得て動かすべき者にあらず、就中、局外より來たる勸告は、邪推臆測の恐なければ、宜しくアイダ山巓より來たるジョーヴ神の霹靂の如くなるべし。居士願はくは再び舊日の居士となりて、其の多忙なる政治上の餘綽を轉じて、時に文學界の他山の石とせよ。

さもあらばあれ、我が方今の文學の弱點は、畢竟新題目の欠乏にもあらず、將(はた)好師表の知られざるが爲にもあらず、其の根本の弊源は作家其の人の神我(ソール)に在り、彼等の心輪一轉して着眼の方針の改まらざる限は、千百の好題目も、幾十個の師表も、眠猫の前なる珠玉なるべし。

新着眼

俗詩人

技巧詩人

上に政治界と文學界との融會を望みて、詩文人の眼界の尠くとも國家大たらんことを願ひつ。　讀者よ、匆卒に誤解すること勿れ、吾人は彼等をして只管に政治上の瑣事を歌謠せしめ、幾多小經國家の小功蹟を讃彰せしめ、若しくは膚淺なる政治小説を作らしめんと願ふにあらず。吾人が彼等をして政治に接近せしめんとするは、其の同感の區域を擴充せんが爲のみ、彼等をして政治家の幇間たらしめんが爲にあらず。蓋し、當世の爲に歌ひ、當處の爲に謠ふ、固より可なり、ジョン、ミルトンが國家の爲に明を失するまで筆戰に從事し、キクトル、ユーゴーが畢生の力を傾けてナポレオンを攻撃せる、吾人豈其の間に大善美を認めざらん。　然れども、彼の一向(ひたよる)に當世の爲に謳歌せんと欲して、最初は公明(オノラブル)の志(モチーヴ)より、後には他の心より、隨時流行の題目を咏じ、世に阿り俗に諛ふ、一種大俗の詩文人の如きは、吾人の取る能はざる所なり。　そも〳〵天才と小詩人との間には、吾人其の取舍を躊躇する者にあらねど、新俗詩人と舊小詩人との間に於て、取舍を決せよといふ者あらば、遽に決すること能はざる者なり。　吾人もまた舊技巧詩人の陳腐爛熟に鼻を掩ふ者なり、膚淺(スキンヂープ)の改革に饜き果てたる者なり、億万回の五十韻の錯列に眼眩(めくるめ)きたる者なり、然れども彼の俗詩人――政治家の幇間、流行の奴隷、社會

の臣妾――に至りては、吾人之れを迎ふるを屑しとせず。

吾人が俗詩人を厭ふは、技巧詩人を厭ふよりも甚し、彼の民友子の本意の甚だ高遠なるにも係らず、其の新題目を論じたる數箇條は、或は誤解せらるゝの嫌なきにしもあらじといへる、此の故也。 吾人は爰に彼の論に對して些の註脚に類似せるものを添へんと欲す。

夫れ自然の風物は平等的實體の醇粹なる表章、美の美なる者なり、唯美なり、かるが故に生を詩歌世界に托したらん者、誰れかは花鳥風月の純美を愛せざるべき。 且や詩人の想像は、現在一世を狹しとして、常に過現未に來往し、有爲無爲の間に馳騁す、懷古咏物の如きも、畢竟は吟懷の自然なるべし、民友子はたゞ之れを非とせざると「觀察」論を得て更に著けし。 蓋し、作家が作る所の詩歌文章の品質高上にして、其の着眼幽遠ならば、自然の純美を歌ふ者は、他の人間の一分事相、就中、現世間の一分事相を歌ふ者よりも偉なるべきなり。 されど詩文人が自然の風物を觀る、花を一の花としてながめ、月を一の月として見るに止まり、其の他に何等の旨味あるか、毫も察すること能はざらんか、吾人もまた自然詩人の天職を疑ふべし。

In vain through every changeful year

Did nature lead him as before;
A primrose by the river's brim
A yellow primrare was to him,
And it was nothing more.

若し夫れ舊詩人が自然の風物を歌ふ、彼のピークルが放心を心として、徒に詞花言葉をもて外部を粉飾するに過ぎざらんか、吾人はむしろ彼等を去りて新俗詩人の稍々醜陋ならざるものを歡迎せん、何となれば沒人情の隱者よりも友情ある商賈の愛らしければ也。然れども吾人の所觀によれば、所謂舊詩人の本性は、未ださばかり墮落したる者にあらず、否、むしろ其の詩統の上よりいへば、彼等は彼の時間と空間とを解脫して自然の美妙を默會す、といふ、太古純樸の遺德を傳へたる者なり。彼等の雪月を咏じ、花鳥を歌ふや、殆ど現在を解脫せんとするなり。彼等の本來は純美を樂しむにあり、彼等は現世界の外に理想の世界あるを(一善巧刺擊を與へなば)瞑々の間に認めんとする者なり。彼等は眞詩人の苗裔なればなり。さもあらばあれ、物の生住久しうして腐爛壞滅するに至るは因果の必然なり、譬へば、石泉の流れ〳〵て山麓に及ぶや、其の水次第に濁りてまた源流の淸かりしをしのぶ能はざるのみな

らず、水勢はた異やうにて、また彼の瀞々たりし石清水の自然なる清韻を聴くに由なきが如く、昔は感得より自然を歌ひし大和歌も、今は課題して月露花鳥を咏ぜんとするに至り、詩人が視線の注がるゝ處は、古人が詞句の姿ならずば、花鳥風月の姿なり、彼等は自然の旨味を感ぜずして自然の形容を描き、形而上の善美を知らずして、形而下の妍媸を用舎す、民友子が太息して、去つて人間を歌へ、といひしは、此の故ならん。

夫れ造化は同一樣の因果を反複して一理古今を貫けりと雖も、事相は嘗て一たびも同一ならず、新事相に由りて同一理を描く、是れ各時代に於ける新詩人の天職なり。 コンコルドの君子は曰はく「新關係は皆新語なり」と、又曰はく「古はおの〳〵の語一篇の詩歌なりき」と。 所謂新事相は新關係の又の名なり、又新題目なり、思ふに、詩文人の着眼一たび新ならんか、新題目の繁きと春林の新綠の如く、念々刹那に在るべし。 嗚呼詩文人よ、古は君等の祖先は無意識にして自然と人間とに純美の旨あることを感得したりき、今や君等一我を意識するに深切なるが爲に、非我の眞善美を感得する能はざるに至りぬ。 一我は十九世紀の善神にして又惡魔なり、無意識の詩歌は、今や殆ど地を拂はんとす、時の潮流は君等をも驅りて、有意識、有自覺の大海に傾瀉し來たる、君等もまた途

に自覺、有意識の動物たらざるを得ざるべきなり。　君等は最早無心にして花鳥風月の美をだに感得する能はざるべし、六塵、君等が能觀を圍繞し、邪見、君等が八識に纏綿すればなり。　君等已に塵欲と邪見とを解脫する能はずとせば、宜しく自覺して清淨の觀念を養ひ、意識して造化人間を觀察すべし、君等が平生心穢れたらば、靈覺も神知も理性も本能も殆ど何の効用をなさざるべし。　假に人間固有の靈覺を至小の明鏡に喩ふ、此の小鏡は鼻頭に近けてはじめて其の裡の照影を窺ふを得、純美來たりて此に其の面影を印す、而して塵欲と邪見とは息の如し、純美の映る時息また鏡を襲ふ、人若し其の息を屏くる能はずんば、安ぞ宇宙の美の影を移すことを得ん。　爰に屏息をもて無私公平の平等見と平等感とに喩ふ、而して無私公平は大自覺の結果なり。

十九世紀以後の大詩人は、大自覺せざるべからず、大覺者の能觀は靜水淨鏡の如し、何物か其の寫影を宿さゞらん。　彼れは造化人間の純美を感得し、理會し、且之れを活書として同胞に示すを得べし。　彼れの造化を觀、人間を觀るや、徒に孤立したる野邊の花卉、又殊別なる現在の個人としては觀ざるべきなり。　彼れは觀ずるならん、此の眇然たる野花は、是れ大宇宙の一微分子なり、神靈の氣脈其が辮蕋の間に呼吸すと。　又

能造者にあらずして能傳者なり、想も詞も先祖の遺產たり

邊街に零仃たる一乞食を觀て感ずるならん、彼れや人間の儀型、宇宙の面影、因緣業の權化と、彼れが一日の行爲にも三世の因果あるべく、彼れが一生の經歷の端緒（はじめ）には失樂園の詩篇あらんと。

詩人よ〳〵、詩壇の習俗（コンヱンシヨナリズム）にしたがうて陳腐爛熟の詞藻を弄び、秋月を見ては感ぜざるの哀を歌ひ、杜鵑を聞かずして戲に虛空なる同感を寄すると勿れ。　君等は概して能造者（クリエートル）にあらで能傳者（トランスミッタル）なり。　君等の思想は、君等の詞藻と共に、先祖の遺產なり、其の想も他の有にして、其の詞も他の有なり。　君等の最劣なる者は殆ど郵便脚夫に似たり、一日の勞働得るところ幾何ぞや。

古人月に綽名（あだな）して嫦娥と呼び、月宮殿といひ、ダイアナと名けき、今の詩人の多數は、能く此の凡神敎的又は多神敎的古人の情懷に同感して、而して、月の美を歌ふことを得るか。　尠くとも彼等古人は、無意識、不自覺のうちに、月を小宇宙と認めたりしなり、今の詩人の多數は、日々に無數の活喩語を翻轉し、口に擬人詞を絕たざれども、其の活喩語の深意と、其の擬人の本來とは、殆ど遺却して顧みざるもの丶如し……

休めよ、休めよ、彼等は僅に一我の周邊を意識し、又偏に一我の周邊に潛心し、國家大の同感をだに有せざるなり、豈大宇宙（マクロコズマス）を察するの遑あらん

や。彼等の多數の想像は極弱なり、彼等に希望するにヲオズヲオスの詩想を以てし、カーライル、エマルソン等の理想を以てし、ブラトー、シエリング等の詩眼を以てせんとするは、顚倒戯妄なり。先づ彼等をして現在の國家を觀察せしめよ、活ける人間相を觀察せしめよ、否、更に近く我が明治の人間を觀察せしめよ、明治の少年を觀察せしめよ、農夫の境界を觀察せしめよ、板垣伯といふ一個人の經歷を觀察せしめよ。蠻人種族の蒙昧なるも、尙具象の一個人を想像することを得、彼等如何に想像力に貧なりといふとも、板垣伯といふ一個人を想像し得ざることはあらじ、試に伯を歌へ、誠を傾けて――赤心を傾けて――伯を咏ぜよ、赤心は眞善美の外郭に近くべき太空の通路なり、否、觀察の金鑰なりと。是れ、察すらくは、民友子が題目論の本意ならんか。

宗教界

宗教漸く社會的問題とならんとす

今や宗教は日を逐うて社會問題とならんとす。基督教徒と佛陀教徒とは、兩々相對して、明治社會の經緯たらざるべからざる秋に近きぬ。『國會』の『評論』欄の記者、時々兩者の關係を短評し、『國民』新聞記者もまた『佛教論』上下を艸したり。『女學雜誌』記者も、間〻佛教の動靜に着眼し、

『六合雜誌』並びに『宗敎』も、また折々佛敎に論及す。佛敎界に於ても、『佛敎』の如きは、次第に其の眼界を擴張し來たる。之れを、彼のはじめより、異旨の宗敎を、悉く取るに足らずとして、片言をもて抹殺し、若しくは全く度外に置きて、ひとへに自家の偏局に安じたりし、舊日の觀にくらぶれば、宗敎界の事、大に面目を變化せりと評すべし、然れども、こは尙宗敎世界の或二三の部分に於て行はるゝのみにて、全分の上より云へば、今尙基督敎徒は同昧の小團躰のみを同胞とし、佛陀敎徒も又同臭の小世界のみを人間とし、其の限界以外にある大多數を殆ど無緣の徒と見做さんとするが如き觀あり。試に多數の佛敎雜誌幷びに基督敎雜誌を開いて見よ、彼等の彙報は自宗の動靜の外には殆ど毫も着目する所非ざるなり、たま〳〵異宗の事をいふとあれば、動もすれば偏見、邪推、譏刺、又は罵詈に流れんとする短評のみ。彼等自宗の正を顯さんとするに急なるはさることながら、社會の他部分に行はれつゝある異宗の運動の、極めて社會にとりて大切なるのみならず、自家にとりても重大の關係あるにも係らず、之れを同胞に報道するの深切に乏しきを怪しむに堪へたり。凡そ宗敎徒は、此の偏頗狹隘なる人種に富める時代に於て、眞先に大度量の活模範を示すべき責任を負へるものなるべきに、却りて

まづ記實し而して後に辨論せよ

蓋ぞまづ互に相知らんとはせざるぞ

其の反對たらんするが如き傾あるは奇異の至極なり。　吾人は兩者の、其の根本の信仰に於て、相容れざるものなるを知るが故に、敢て彼等に向かひて、陽に雅量を粧ひて、調和の假面を被れと勸告するものにあらず（よし勸告すればとて、彼等の之れを屑とせざるべきや勿論なり）、むしろ彼等が、互に正々堂々の陣を張りて、自宗の正眞を顯彰せんことを望むものなり。　如何なるを正々堂々の陣立といふ。　曰はく、基督教の諸雜誌、諸新聞紙は、宜しく自宗の動靜を明にし、自宗の眞善を顯彰すると同時に、佛陀教の動靜をも明にし、佛陀教の眞善と我が眞善とを合理的方法によりて對照批判することに從事すべし、而して佛陀教もまた、同じ手段によりて、基督教の動靜と其の教旨の綱領とを、情感を斷離して、説明し、佛教を奉ずる者の多數をして合理的に基督教を知れるものたらしむべきなり。　吾人の聞見する所誤らずば、今の佛教徒の多數は、殆ど基督教を誤解し、基督教徒の多數は、また殆ど全く佛教の本旨を知らざるものゝ如し。　誤解して非議し、知らずして罵る、二者共に不合理ならずや。　吾人は二教の相知らざるの甚しきを聞見して、之れを彼れらの自信の薄弱なるに歸することを肯せざるが故に、遂に之れを彼等の偏頑と狹隘とに歸せざるを得ざるに至らんとす。　吾人は宗教の尠くとも

間接に、明治の文學に深き關係を有することを信ずるが故に、そゞろに教門外より迂濶の策を兩教會に呈す。　局外漢の言は到底取るに足らざるや否や。

此の稿を印刷に附せんとするや、偶々『國會』なる「評論」記者がユニテリアン教の曖昧を論じたるを見る、記者曰はく「ユニテリアン教は宗教上の一運動にして其の起源と歷史とに於ては基督教たり」といひ、又「基督教の自由的及び進歩的發達なり」といふを以て視れば、基督教內の一部分なるが如くなれど「現に我が國に成立する基督教派は已に三十以上の多きに達し、甲乙互に相鬩ぐの觀あれど、獨りユニテリアン教は全く彼等とは宗派を異にせり」といひ「吾人は常に雙手を擧げて何宗派又は何教徒の方に向かひても等しく協贊を表し居るものなりと雖も云々」といへる所によりて見れば、基督教と只幾分か關係したるのみにて、別に大なる餘緯を有するものなるが如く、若しくは全く基督教を其の大なる宗門理に包含したるものゝ如くにも見ゆ、曖昧の至極ならずやと、記者は次に日本ユニテリアン第一協會々則要領に「吾人は宇宙萬有の大源因を唯一なりと確信し之れに神の尊稱を奉る」とあるを詰りていはく「焉ぞ神を神とせざる大原因は大原因にして可なり、特に神と稱するの要なし、何ほど神と名けて崇尊せんとするも、大原因に外ならぬものと知悉せられなば、そを人間の心情を具へたるものと信じて之れに向かひて感謝の誠を表することと叶ふま

じきなり、云々と、

案ずるに、ユニテリアン教の如きは、特に自家を說明するの責任を負へるものなり、何となれば、彼れは實に佛、基兩教の中間に立てるものなればなり。彼れ果たして其の揚言するが如く、何れの方面に向かひても協賛の意を表し、基督教の諸派をも佛教の諸門をも包含統一するの功を奏するを得べしとするか、然らばまづ其の教門の本願を明にする方角に向かひて、更に幾層の努力を費やさゞるべからず。

佛教と其の說明

基督教と佛陀教とは、方今の社會に對立して、混沌たる明治の日本人の爲に確實なる安養理想界を開闢せんとす、今日の光景に就きて見れば、彼等は倘かたみ代りに世間海の雄波雌波となりて浮沈進退し、彼れの打寄するところ、此れの去るところ、此れの退くところ、彼れの返るところといふ趣ありて、未だ濤瀾相激して大虛空を拍つの驚駭觀に達せざれども、吾人は二者の早晚大に衝突して雌雄を決せざるを得ざるべきを確信す。而して吾人の信ずる所によれば、二者が最後の大衝突は、啻に我が日本の宗教的理想を決定するのみにあらで、實に世界の宗教的

理想に一大變動を及ぼす者なるべきなり。基督教が明に一神教にして、佛陀教が明に所謂一神教ならざる限は、二者竟に兩立すべからざる勿論なり。佛陀教は自家を説明するに二大方面を有す、宗教としての佛陀教と哲學としての佛陀教となり、而して此の二方面を説明するに於て、佛教家が已に成し得たる所は、尚眞に微々たりと言はざるを得ず

佛教は自家を説明するに於て精ならず

吾人は思へらく、自家を説明するに於ては、基督數寔に佛陀教に勝りたり。さて此等の事は、已に識者の論辯せるところ、吾人が今更に言ふを俟たざるに似たれど、宗教の事は深く文學に關係し、決して等閑に附する能はざれば、乞ふ件の二大教の爲に、卑見の一分を表白せん、特に哲學として自家を説明すべき任務ある佛陀教に向かひては、吾人切に懇望すべき箇條夥多あり、其の中の主なる箇條を擧ぐれば、學説と説教との分離是れなり。

學説としての佛教

吾人嘗て三四の佛教家が佛教を説明せんと試みたる著述を讀みぬ、彼等は皆學説として佛教を説明せんとしたる者なり、然るに、彼等が顯正の學説は、其の半途にして破邪の岐路に入り、公明森嚴なるべき論説は、間々憫笑すべき情感上の僻見となり、頗る淺薄なる外教攻撃の言となり、一轉して愚夫愚婦に聞かしむべき唯我獨尊の慢言となり、偶々心ある讀者をして信仰の念を薄うせしむるに足るのみ。

若し夫れ偏に多數の歸依者を得んと望まば、理性に愬ふることを後にして、情感に愬ふるもあしかるまじ、然れども、合理的宗教として世に立たんとせば、多數を感化するよりも少數の識者を折伏し、彼等をして間接に多數を感化せしむるに如くことなきは、知者を俟ちて知らざるなり。而して學理上より、識者を折伏せんとするに當りては、情感の原素は些の裨益をも成さずして、間、學說を不具となすに足るのみ。且又彼等が佛教の哲理を講ずるや、其の法宜しきを得ざるなり、彼等は科語を飜譯する能はざるなり、例へば、第一の隱語を釋するに第二の謎語を以てするが如く、解しがたき佛教の哲理を釋するに、殆ど同じさまに解しにくき佛教的科語、名目、用語例を以てするなり。彼等佛教を說明せんと欲せば、尠くとも泰西哲學を正飜義飜せんとする者の多少佛教を研究せざるべからざる如く、多少泰西哲學の用語例をわきまへ、英語若しくは獨語の適當なる譯語の、若しくは已に行はれたる譯語の穩當なるものを假用して、成るべく簡明に自家を說明することを力めざるべからず。　吾人は今の佛教界に、如上の方法を用ふるもの、絕えて無しとはいはず、然れども已に行はれたるが如きは、未だ吾人の望を滿たしむる能はざるなり。　吾人は吾人が希望を簡明にせんがために、左に思ひいだ

したるまゝに、數箇條を掲示すべし、

（第一）佛教字彙を編成すること、即ち小乘の義と大乘の義とを區別し、比喩的名目と全く抽象的用例に係るものとを區別し、泰西哲學の用語に相當するものには、彼れの原語又は譯語を添ふる事。

（第二）佛教研究の爲に栞を作り、手引艸を作り、順序、方法等を指示し、原書に就きてみづから攻究せんとする者の便宜に供すること。

（第三）合理的宗教、即ち哲學としても世間に行はれんことを望まば、諸種の異教を折伏することよりも諸種の哲學を折伏することを先にせざるべからず、即ち多數を感化することを後にして少數の識者を説破するとを先にすべし、基督教との比照を後にして泰西の諸哲學系統との比照を先にすべし。吾人は未だ小乘の哲理とショペンハワーの哲理との精確周到なる批判的對照を見たるとなく、天台の哲理とシェリングの絕待具足の哲理との對照をも見ず、將たスピノザと權大乘との對照をも見ず、偶ゝ見得たる所あるも、例の一言抹殺的慢言たるに過ぎざるなり。夫の基督教の如きは、次第に比較對照の法をも利用して自家の礎を固うせんと力めつゝあるに、佛教は二重の任務あるにも係らず、最も對照を必要とする學理の方面に於てすら、比較批判の法を忽諸にしたるが如きは、一大脫落にあらずや。

（第四）在俗篤志の青年等の處々に小團躰を作りて佛教の旨を窺はんと

企つるもの尠からずと聞けり、而して智識の之れに臨みて其の教を講ずるを傳聞するに、多くは前にいへる如き、情感的破邪論に流れざれば、教門内の講説に髣髴たる、唯識三年倶舍八年的煩瑣緩慢なる講究法によれりとか。　即ち彼等の講説は字義名目の解釋に聽衆の熱心を冷却し、比喩と正義との辯の明ならざるに彼等の理性を眩惑し、ようせずば多數有爲の青年をして非佛教的唯心論者、若しくは非佛教的万有神教論者たらしめ、佛教より見ても、基督教より見ても、正當なる哲學より見ても、外道異端たるべきものとならしめんとす。　思はざるべからざるなり。

蓋し、十九世紀以後の哲學は唯心論にもあらず、はた唯物論にもあらじ、疑ふらくは心物具足の哲學、主客圓滿の哲學、絶待具足の哲學たるべく、而して佛教は、尠くとも其の揚言する所によれば、絶待具足の哲學たり、然るに其の今尙姑息して、諸哲學系統と最後の格鬪を試み、大世界の面前にて、雌雄を明白にするの準備無きは、機の未だ到らざるが爲か、そもそもまた佛教家が任を全うせざるが爲か。　要するに、佛教は果たして或學派の唱ふる如く、捕捉しがたき比喩の大塊たるに過ぎざらんか、隱語の大妖怪たるに過ぎざらんか、エーヂポス出でゝ件の謎語を解釋し、一日も早く此の妖賊スフィンクスの命脈を斷せざるべからず。　或は

また然らずして三世を救ふべき絕待無上の大菩薩ならんか、此の無等妙光を遮蔽するの罪は、そも何れの邊にか歸すべき。

佛教諸雜誌

多數の佛敎雜誌類のうち、吾人の目に觸れたるもの七種あり、『佛教』『正法』、『明教新誌』、『淨土新報』、『佛教公論』、『佛教文學』、『同學』、是れなり。其のうち最も號を多く重ねたるは『明敎新誌』にて、每丁日の發行にて、已に第三千二百餘號に達し、最も若きは『佛教文學』にて、今尙やうやく三號に達せり。『淨土敎報』は每週發兌にて、今第百四十餘號に達し、『佛教』と『佛教公論』とは、每月二回にて、前者は第七十號に達し、後者は第二十九號に達せり、又『同學』『正法』は、月一回にて、已に第三十餘號をいだしたり。此の外、其の名を聞きて未だ其の實を見ざるもの丶中には、『敎海指針』、『敎海萬報』『大同新報』、『反省會雜誌』、『國教』等の如きもの夥多あり、機關の數は尠少なりといふべからざるなり、而して其の眞に佛教の好口舌たり、社會の木鐸たり、當世の明星たるに耻ぢざるものに至りては、吾人之れを此等雜誌中に求めんとするとの徒勞ならんを恐る。蓋し、我が國は佛陀敎の巢窟たりといへども、彼等佛教徒が數代の懶眠を攪破せ

られて、外、基督教と競爭し、內、滅裂の弊を救ひ、明治新代に於ける一大活力となりて社會を經營せんの誓願を發起せしは、實に近年の事實なりとす、かゝるが故に、彼等が社會に高德の僧侶なきにもあらず、はた鴻學の知識乏しきにあらずと雖も、其の最も秀でたる者は、概して舊時代の遺物たるに近く、其の當今の情勢に疎く、世間の實際に隔たりたる、往々驚くべきものあり。　彼等は頗る文を善くし、又辯論にも長じたり、然れども彼等の文藻は科語的、專門的にあらざれば、甚しき比喩的、卑俗的のものにして、同味同臭の徒に解せらるゝも異味異臭の徒の解し得ざる所なり、しからざれば愚婦愚夫の悅びて讀む所にして識者學者の讀むを屑とせざる所なり。　辯論に至りてもまた然り、彼等の襟を正しうして講說するや、科語又科語、專門語又專門語、比喩を釋するに比喩、多義語を釋するに多義語、敎寰外の聽衆をして殆ど迷殿に彷徨するの感あらしむると巳に前日もいへる如し、而して彼等の說敎壇に登るや、今も間ゝ德川期の世俗に對するの心と語(ことば)とをもて明治の聽衆に臨み、只管比喩上に比喩を架し、方便上に方便を加へ、甚しきに至りては、厭ふべき卑俗の詼謔をさへに放談す、心ある者の聽くことを屑とせざる、理(ことわり)ならずや。要するに、彼等の多數は、尠くとも其の最も秀でたるもの、かゝるが故に最

も戒德あり學植ある者、かるが故に最も尊敬すべく又最も勢力あるべき筈の者の多數は、過去の遺物にあらざれば明治新代の外客（ストレンジャル）なり、彼等の文章と言語とは今の最も有爲なる壯年社會と中等社會とには通用の効を有せざるなり。彼等の當世に密着せざるは尚奈良朝の文學が當世間に密着せざるがごとし、ようせずば或は南洋の珍客をもて遇せられんとするの傾なしといふべからず。佛敎雜誌の數、かくの如く夥しく、鋭意之れに從事する多才の記者はた乏しからざるにも拘らず、其の勢力の未だ甚しく理想的効用に遠くして當世間の木鐸たるに稱はざる、宜ならずや。思ふに、壯年の佛敎論者のうちには、新代の想念に薫陶せられ、泰西最近の學說にも熟通し、明治新代の文章言語をも自在に修めたる有爲多望の士尠きにあらざるべし、さはれ、宗教界の事業は、世間尋常の事業とは殊なり、才學の力と文學の力とのみをもて敎化の大功を奏せんと難し、彼等は能く論じ、能く說くと同時に、能く其の論說する所を實現し、德行をもて世間を薫化せざるべからざる勿論なり。而して其の戒行の能く佛陀の眞旨に叶へるもの、恐らくは今の壯年佛敎家中には希有、否、恐らくは、絕無ならん、是れ佛敎雜誌の未だ理想のに遼遠なる第二の理由ならんか。吾人虛心にして案ずるに、言行一致し

佛徒は世間に密接せず基徒は頗ろ世間事業に努力す

知德具足せる高僧は、所謂前代に屬すべき佛教家の中には尠からざるべく、而して此の點に於ては、發育尚幼稚なる明治の基督教徒の及ばざる所なるべし、然れども或は恐る、舊佛教家の淸淨なるは濁世に接せざるが故ならんと。　小人間居して不善をすといへるものから、遠く六塵の穢を避けて、深く潜み靜に行せば、本來の君子ならざるものも、或はまた君子たるに近きことを得んか、且世間に密接し、且出世間の高きを攀ぢ、而して戒德の偉(おほい)ならんをこそ眞の大德とは稱すべけれ。　されば吾人は方今の基督教信徒中に、基督の旨を實現したる者、現に之れ在りと指す能はざるにも係らず、其の常に當世に密接して勇猛精進、絶えて怠らざるの氣力の歎美すべきを見ては、其の戒行のさすがに理想的ならざるをも、自然の結果なりと思惟せざるを得ず。　且や彼等新基督教徒は、自在に明治の文章を作り、如意に明治の言語を語り、十九世紀の個人的想念をも皷吹し、近代の學說をも收攬し、多義曖昧を避け、方便を退け、上中下の賢不肖老若男女に通じて唯一の教旨を說く。　尠くとも彼等の傑出したる者は、政事家となり、新聞記者となり、講師となり、商人となり、著作家となり、官吏となり、職工となり、勞力者となり、啻に世間に密着するのみにあらで、屢〻世間の骨肉となれり。　彼等は最早中古の淸僧(モンク)に

あらず、彼等は往年の宣教師にあらず、彼等は國民なり、人なり、明治の能爲者なり。　彼等が勢力の多少は、其の教會の盛衰と其の會堂の聽衆の多寡とのみによりて卜すべからず、彼等は顯然と弘教しつゝあるの外に、隱然と人心を薫陶しつゝあり。　基督教の特質は猶其の服裝擧動の如し、彼等はピウリタン宗徒の如くに圓頭ならず、彼等はフライアル宗徒の如くに襤褸を纏はず、彼等は肉食妻帯を禁せず。　彼等は酒と煙草とを惡む、然れども此の二者は世間の或者も亦之れを惡む。　彼等の或者は些屑なる事に笑ひ、怒り、怨み、猜み、嘲り、罵り、悲み、歎く。　彼等は世間に在りて生活す、かゝるが故に世間的醜德をも具足するとあり、彼等の末流は酒をも飮み、煙草をも喫し、若しくは惡所にも來往す。　彼等の末流は爛醉し、漫罵し、毆打す、又彼等の或者は前垂を掛け、天秤を肩にし、商利にかしこく、世辭に巧なり。　要するに、彼等は世間の活民族なり、或佛陀教徒の今も尚圓頭黑衣の舊格を墨守しながら、一身はなかば濁波に穢れ、心は全く俗化しながら表面はあくまでに塵外に超絶し、わざと殊勝げなると甚だ異なり。　さもあらばあれ、吾人は佛教徒が服裝の殊なるをば咎めず、否、佛教徒の間〻長髪常服せるを知る。　畢竟、服裝は儀式的のものなり、而も時に善巧の方便たり。　吾人は長髪常服せる僧侶を指

して開化したる佛教徒と稱美するものにあらず、只幾多有爲なる高僧が、其の服裝の殊なることの世間の服裝に遠きが如くに、其の心の世間に遠れるを惜むのみ。 佛教徒にして眞に當代の活勢力たらんの誓願あらんか、彼等は其の出世間の偉德を具足して更に現世間に密接し來たらざるべからず。

前に擧げたる諸雜誌のうち、『佛教』はしばしば紹介しつ、其の他の雜誌の紹介と批評とは、吾人之れを後日に讓らざるを得ず、只一言をもて蔽ふときは、『明教新誌』と『淨土教報』とは、雜誌といはんよりは新聞紙といふべく、『正法』と『佛教』とは、多少講義錄をも兼ねたる雜誌の如く、『佛教公論』と『佛教文學』とは、一層雜誌の本色を帶びたり、而して例の教育と宗教との衝突問題、幷びに萬國宗教大會の取沙汰は、多少此等雜誌の要素となりて、彼等をして世間に近接せしめたり。『佛教』の如きは、其の第七拾號の「評林」欄に於て「今日は宗教問題の最も盛なる時なり、基督教徒は殆ど全軍擧りて之が爲に論辯せり、佛教徒には未だ之れといふ者出でず云々」と歎じて、基督教徒の吹聽辯護に巧なるを說き、佛教徒の因循を悲しみ、佛教徒の新聞雜誌又は世間万人の眼に觸るべき書籍の上に打つて出でんことを勸告せり。

（以上廿六年六月）

方今の文壇に於ける史的知識の欠乏

英文學史綱領を講述するにつきて

史の講究に冷淡なること、我が今日の學生ほど甚しきはなかるべし。予が爰に史といふは、いと廣き意味にていふなり、國史又は世界史といふ意味にてのみいふにあらで諸の事に關する過去の經見の知識をいふなり。　夫れ史は人間が過去の經歷の記錄にて、其の應用をいへば、現在と將來とを照らすべき一種の明鑑なり、經世經國の大任に當たるものが其の國幷びに他の列國の過去の經見に徵して得る所尠からざるが如く、詩文人もまた其の國幷びに他の列國の文學上の經歷を精撿して人情人智の變遷を審にし、無常複雜のうちに常住不易の統一あることを悟了するの端を發かば、裨益する所小少ならざるべし。　吾人の謬妄の多數は史に明ならざるに因る、異相同理の過失を反複して曉る能はざるは、明に其の一分の因は、吾人が史的知識に短なるが爲なり。　例へば、詩文人が一時の流行に執着し、時尚の題目、時尚の文體のみに拘泥し、詩文の醇粹を察する能はざるも、特り現在を觀るが故なり、又は特り其の國の文章のみを無上の者として外國詩文の美を認むる能はざる、若しくは劣等なる過去の名家を師表として崇尊し、他に一層高大なる

表極は須からく個人に求めずして抽象の理想に求むべし

軌範あるを知らざる、若しくは已に明に前人が失敗したる覆車の轍を蹈みながら、絶えて其の邪なるを覺らざる、若しくは昨と今と時勢を殊にし、それが爲に昨の是なりしこと、今の非となれるを察せざるなどいづれも史に昏きが爲なり、就中、史の比較知識の不具なるが爲也。所謂史の比較知識とは、我が史に明なると同時に、他の史にも明なるの謂なり。 文學の上に就きていへば、本朝の文學の史にのみ通じたる者は、動もすれば本朝の詩文に執着して、そを無上絶待と見做し、偶〻以て國文の發暢を限るの弊あり。 例へば、淸女を知りてスタエルを知らざる者は、『枕草紙』をもて女性が隨筆の表極と限り、式部を知りてエリオツトを知らざる者は、『源語』をもて女子が小說の絕待上乘とせんとす。夫れ表極は高の高、美の美、大の大をよしとす、殆ど及ぶべからざるものを可とす、然るに、かくの如く最大、最高、最美ならぬものをもて表極とせば、國文は退嬰の文とならん。 表極は須からく個人に求めずして抽象の理想に求むべし、或は理想的詩文人を古今に求めて之れを其の表極とすることと、基督敎の基督に於けるがごとく、佛陀敎の釋迦無尼に於けるが如くせんか、予は之れを非なりとはいはず、然れども、之れを成さんとせば、尠くとも東西四五の文明國の史に就きて、洽く其の醇粹なる文

豪を求め、徐に對照比較し、無我無固の心をもてこれを軒輕し、而して後に我が本尊とすべき者を定めざるべからず。耳聞して遽に我が佛を作る勿れ。萬口シエークスピア尊しといふ、信ずるに足らんや、萬口ミルトンを尊しといふ、信ずるに足らんや。人々みづから無我無私の心をもて直に原作に就きて精咀細嚼し、心默通會する所ありて後に去就用舍すべき也。而して此の艱難なる事業の緒は、文學史の比較的講究なり。天才は偶然に生まるゝものにあらず、式部の平安朝に生まれ、近松の元祿に出でたる、因緣相和する所あり。天才は因なり、血統、周圍、時勢の三者は其の緣なり、因緣を審にせざれば、竟に其の人を知るべからず。已に其の人を知ること無く、又其の因緣を曉る所なくして、徒に其の人を崇拜せば、其の弊や虚妄とならん。因緣を知らずして事物を想欲するは、三伏雪を欲し、嚴寒雷を待つにひとし。

近ごろ我が國の文運著く進步し、東西の文學を品隲し、古今の傑作を玩讀し、詩文小說に創作の筆を執る者夥多しけれど、外國文學の史的知識は、今尚甚しく缺乏せり。最も廣く知られたる英國文學の史的知識すら、概して簡疎零碎なり、今の文士の口にする所は、概して片々斷々の史的知識なり。彼等の多數はショウの英文學史すらも熟讀せざるに似

たり、テーンの文學史の如きは、間〻引抄せらるゝるを見つれども、其の論脈によりて察すれば、彼の書すら尚咀嚼せられざるに似たり。予は決して今人を誹謗せんとてかくいふにはあらず、彼等が其の最も愛玩する英文學の過去をすらも、かばかり冷遇するを異しみ、其の明鑑を利用する念のいと薄きを惜しむが爲のみ。されば、予が限ある餘力をもて、此の限ある講述の欄内にて、勢不完全ならざるを得ざる英文學史の綱領を講述せんと欲するは、此の不足の一端を補はんと欲ふに外ならず。予が說く所の史が明鑑なるにはあらず、こは只明鑑の面影なるのみ。讀者若しこれによりて眞の明鑑の價値如何を推することを得んか、予が本意達しぬといふべし。（廿六年五月）

東京專門學校第十回卒業式場にて

諸君、聖代の餘澤にて、世に悅ぶべき事、樂しむべき事、乏しからずと雖も、無私公平なる時に最も悅ばしと感ずるは一個人が利福と光榮とにあらずして一國若しくは全世界の利福光榮なり、また最も樂しきは、ひとり樂しむ時にあらで、多數の人と同感して共に樂しむ時にあり。

本校本日をもて第十回の得業生百二十八名を出だし、朝野諸名士の來

臨を辱うし、めでたく例式を擧行するを得たり、本校の面目、得業生が光榮は云ふに及ばす、彼等得業生諸子が父母、兄弟、親族、故舊幷に保證人等の滿足はた想像するに餘あり。而して得業生一百二十八名は、皆年壯有爲、其の將來の事業、蓋し刮目して觀るに足らんか。果たして然らば彼等一百二十八名の士は將來我が大日本帝國の利福を增し光榮を加へ、以て同胞四千餘萬人に少なからぬ滿足と悅樂とを與ふる者ならん。若し悅樂の分量を以てめでたさの尺度たらしむべくは、本日の式場は頗る大なるめでたさ、尠くとも日本帝國大のめでたさの素を含めるものといふを得ん。

たゞし、此の大なるめでたさの源とならんものは、ひとへに新得業生諸子、一百二十八名が當來の事業なり、彼等が未來の事業、屑々取るに足らざらんか、全國の同胞は之れが爲に案外を感じ、不快をおぼえ、やがて彼等を輕じ、やがて彼等を賤むべく、其の父母、兄弟親族、故舊はた之れが爲に失望し、落膽し、忸怩たるべく、我々本校に密接の關係ある者も、また之れが爲に大なる耻辱を蒙りたりと感ずべし。日本全國の悅樂の因とならんか、將た日本全國の不快の源とならんかは、得業生諸子が未來の功過、ひとり之れを決すべきなり。

專門學校の教育の主旨

腐學者

從來本校の敎育は學問の獨立を理想とせり、これ吾々の屢〻口にせし所、今あらためて辯ずるを要せず。　更に他の特質あり、他無し、其の敎育の機械的ならずして精神的なること是れなり。　徒に强記博覽なる死學者を養成するは本校の理想にあらず、識見卓拔なる、自立特行の操ある、活ける國民を作ること、是れ吾々の本願なり。　即ち煩瑣なる學問の枝葉に役せられずして如意に高尙なる學理を活用するの人、理に偏せず實に拘せざるの人、且出世間の學理を講じ且常に世間に住して、尠くとも心頭に日本帝國の現在と未來とを利益せんの念を忘れざる者、即ち、且知り、且行ひ、且考へ、且働くの人、是れ實に本校が從來理想的とする所の得業生なり。　所詮、吾々は彼の降下すべき裝置を欠ける風船の如き學者、又は漁夫の手を離れたる投網の如き學者、活字典の如き、若しくは古書肆の手代の如き、若しくは無意識にして卵をあたゝむる痴鷄の如き、若しくは徒に桑を貪食して玲瓏透徹し糸を產せずして死する蠶の如き學者を美とせず、若しくは諸の機械道具に似て個人、私黨に役せられ、一時、一處の奴隸となるが如き學者を美とせず。

我が新得業生諸君よ、諸君若し網とならば、願はくは緊括して大魚を獲するが網を投ずるの目的たるを記せよ、若しくは風船とならば、超然と

歳華人を待たず明日ありと思ふ勿れ

して世外に遊ぶと同時に、屢〻世上に來降して利他の大任に當たることを忘るゝ勿れ。學問の奴となるも尙美ならず、況や私黨の奴となるをや、況や名聞利欲の奴となるをや。諸君は、尠くとも我が日本帝國の利福光榮の素とならざるべからず。

さもあらばあれ、諸君が業を本校に受けたる、僅に三年なり、遽に此の理想的生涯に入りがたきや勿論なり。夫れ高尙なる理想は一旦夕に成る者に非ず、諸君は須からく其の志を遠大にし、徐々着々、勇猛精進の功を積みて其の大なる奏功を未來に期すべし。一時の名聞の爲に輕擧して、諸君が理想を辱しむる勿れ、若しくは遽に其の理想を實行せんとして不完全なる當世と衝突し、之れが爲に失望し、之れが爲にひがみ、偶〻以て理想を毀ひ、又以て世を害ふが如きことをなす勿れ。諸君は頗る春秋に富めり、徐に大成を期すべきなり。

しかしながら歳華は人を待たず、白駒の隙を過ぐる電よりも疾し。遙なりと思ひし將來は忽焉として諸君の眼前に迫り來たらん、些子だに油斷せば、其の理想は未だ万分一も成就せざるに、我が耳已に蟬吟を聽き、我が鬢已に霜色を現ずるの悔あらん。明日（あす）ありと思ふ心の仇櫻、夜半にあらしの吹かぬものかは。大なる理想を實にせんの大志ある者

されどまた明日ありと思はざるべからず

宇宙は矛盾の巣窟なり

Butの一字は天國と地獄との關門

は、常に今日を限なりとするの覺悟なかるべからず。諸君よ、明日ありと思ふ勿れ。

然り、諸君は明日ありと思ふべからず、されどもまた明日ありと思はざるべからず。是れ明に矛盾の讖誡なり、然れども此の Paradox は其の語の逆なるにも係らず、其の理の順なると、彼の浮屠氏の所謂煩惱即菩提、平等即差別などいふ語に異なること無し。予や固より宇宙の秘密を談ずるの見地ある者にあらず、而も竊に思へらく、宇宙は矛盾（パラドックス）の巣窟なり、と。不秩序なるが如くなれど、其の中に秩序あり、無常なれど、其の底に常住の大道存す。或は此等無數なる矛盾の深意を會して、其の間に處して宜しきを得たらん者、之れを眞の人間と稱すべきか。案ずるに、古來多數の失敗者は、或は此の矛盾（パラドックス）の Both terms を結びつくる But を會得する能はざりし者にて、其の少數の成功者(所謂聖賢)は、能く此の But を會得したりしものか。此の一字の But や、眞に天國と地獄との關門なり、門の左にも天國あり、門の右にもまた天國あり、然れども其の一に偏する者は墮獄す。明日ありと思はざるは一の天國なり、されど明日ありと思ふもまた一の天國なり。嗚呼、如何にせば可なるべき。因循躑躅して其の中間にさまよはば、竟に無操無主義の徒となりて終らん。」

東京專門學校第十回卒業式場にて

今日は今日だけの全力を傾けて努力精進せよ

諸君が理想は殆ど無限に高大なり、而して諸君が力量と時間とは有限なれば、理想の全分實現を目前に望み難きこと明瞭の理なり。是れ諸君が理想の圓滿成就を永遠終世の事業、恐らくは子孫に遺傳すべき事業となさゞるべからざる所以なり。去かしながら全分は一分の積なり、無限は無限に積まれたる有限なり、諸君若し力めて有限の力を積まずんば、假令天我れに與ふるに無限の力量と無限の時間とを以てすとも、理想成就の日は來たるべからず。諸君は須からく片時も安心せずして理想の實現に從事し、今日は今日だけの全力を傾け、明日は明日だけの全力を傾けて、其の理想に盡忠すべし、蓋し、理想の全分成就は無限の時間と努力とを要すべければ、其の幾分の實現は一日、一時、一念、一刹那の間にも成るべし。人生は無常なり、明日あるを必すべからず。若し夫れ明日は未得の實なり、今日は已得の實なり、諸君は已得の實を利用して日々、時々、念々、刹那、全力を理想の幾分成就に盡くさゞるべからず、然らざれば明日病みて死なんとするに臨み、後悔腸を斷つものあらん。古人曰はく、あしたに道をきゝて夕に死ぬとも可也と。旦に理想する所を、力の及ばん限、夕までに實現し得ば、たちどころに死ぬとも悔なかるべきなり。むかし俳諧師芭蕉は、我が年ごろよみすてたる句

は、皆以て我が辭世の句となすに足る、といひきとか、蓋し、此の覺悟あらければならん、　明日ありと思ふ天國と、明日無しと思ふ天國と、其のいづれに偏するも、墮獄の罪人なり、諸君は此の二國の間を、融會自在、如意不斷に往來して、片時も一處に止まるべからず。

得業生諸君に贈るに物なし、陳腐なる俗談をBitの糸につなぎて一箴言を作り、之れを諸君への贈とす。　（七月）

『靜思餘錄』

は嘗て發兌せられたる『青年と教育』并びに『人物管見』と共に、蘇峰、德富猪一郎氏の著す所、著者のみづから言へる如く、其の最近五六年間の精神的年代記也、以て蘇峯德富氏が平生の理想と文士としての技倆とを窺ふに足るべし。　著者いはく「此の中には哲學者にあらざる哲學、詩人にあらざる詩、宗教家にあらざる宗教雜然として陳列す」と。　げに此の眇たる小冊子は德富氏が人生諸般の現象に對する意見の精英を網羅し得たり。　其の「希望」を說き、「非厭世」を說き、「インスピレーション」を論じ、「天地悠々」を唱ひ、「快樂」「觀察」を語るや、時に哲理の幽玄に接し、時に宗教の神聖に觸る、或は古希臘の哲理を談ずるもの丶如く、或は希望の勝教を

宣ぶるもの丶如し、而して其の所謂詩人にあらざる詩人の詩は、「故郷」「故鄕春色今奈何」「老人と小兒」等の諸篇をもて最とすべきか。　著者が文章の特質は、明晰透徹を旨とするが爲にや、往々講話の體に流れ、餘韻に乏しきこと每にありと雖も、而も其の引喩、譬喩の豐富なる、其の理想のエマルソンに似て淸く高き、優に此等諸種の文章をして散文の詩中に位せしむるに足る。　世人其のはじめ德富氏の文を評して、マコーレーの文に倣へるものとしたりき、今にして思へば、蘇峯氏の文は其の明徹を主とする所と、多く譬喩を用ふる所と、換言反復する所とは、頗るマコーレーの文に似たれど、其の一字を選擇するに細ならざる、否、彼れマコーレーの如く詞藻の選擇の貴族的ならずしてをさ〳〵平易通俗を旨とし、淺近の譬喩をも、卑俗の諺言をも、引用し來たり、唐突に和漢の雅語と相つらね、敢て修辭の規に拘せざる所、即ち平民的なる所、蓋し、同氏が特致なり。　此の特致や、文章の方面より評すれば、同氏が特長にして又恐らくは短所ならん、何となれば、講話の文としては、此の般の挿入は、大に旨の說明を幇くると同時に、俗に謂ふ愛嬌の素ともなるべけれど、嚴然たる美文としては、間々不諧和の調子を成し、或は以て好笑の感を促すに至ればなり。　然れども、有りのまゝに、さながらに、所感と所想とを吐

露する講話の體は、思ふに、著者が故意に雜誌的文致の極體として用ふる所のものならん、若し果たして然らば、反復叮嚀して餘韻を沒するをもて其の文の疵瑕とする者は、著者の本旨を察せざるものなり。
著者は其の理想動もすればコンコオドの君子の幽遠に出入し、時に飄逸として詩人の境界に遊ぶものから、其の最も明著なる傾向は、殆ど純乎たるアングロ、サクソンにして、酷だ其の最初の師マコーレーに似たり、即ち現實を重じ、實踐を尙び、あくまでも positive、あくまでも practical なり此の故に、世間を離れたる空理を惡み、當世に實效ある常識をよろこぶ、之れを要するに庶民的(平民的)といふ系脈は、著者が理想にも文辭にも通徹せり。　其の文致の講話的なるも、其の主旨の庶民的なればなるべく、其の當世を主とするも、まづ庶民の暢達を其が理想の根底とすればならん。　著者已に庶民の利福を主とす、其の論ずる所未だ悉く新奇高遠なりといふ能はざれど、おしなべて公平健正なり、吾人は著者が此の書の卷頭に「不健全なる思想は決して之れ無きを期す」といへることの、竟に人を欺かざるべきを保す。

某に答へて小說不振の因縁を論ずる書

其の一

前略、御尋問の件、なか〳〵小生などが力にて、解釋覺つかなく候へども、方今の小說に關してのお尋だけは、さしてむづかしくも存せられず候へば、思ひつき候まゝを申試むべく候。　尤も是とても、深刻骨に透るなどいふ際はいかにや、總じて議論は、其の人相應と御一笑可被下候。　さて、演繹的論說といふ者の流行以來、世の中ズント手取早く相成、何事も一筋の理窟にて押通し、例へば、文學は社會の反映なり、といふ一理窟出來いたし候へば、一も二も無く萬種の著作を此の摸型のうちに投じ、釋敎も、論語も、シエークスピアも、社會の所造ぢや、と申し、宇宙の秘密など大層らしく申せども、トントはやたはいの無いもの、某が判斷の利劍にあうては、古往今來、不可思議のものは御座らぬ、など大言いたし、かゝる論者にかぎり、歷史をかいても、人物論をいたいても、文學を論じても、小說を作りても、それは〳〵手際も語氣もよろしく、ベシ、ナラン、などいふ曖昧の言葉はおほかた儉約し、斯うぢや、さうぢや、也、矣、おらずや、など、何もいはぬ讀者をキメつけ申候、中には、徹頭徹尾ダラウづくしにて論じ

來たりて、最後に、也、矣、焉、など、だしぬけにキハメをつけて、いつの間にか本阿彌の株相續致すも厶る。　如何さま、世間の事相は、千差萬別なれば、悉皆計算考定の上にて論旨相定め申すべし、といふてゐた日には、相場丈の命にてはおひつき申さぬ、小生もこの儀につきては、たび〳〵そろ盤を取ッたれど、サッパリ勘定が合はぬでござる。　まづ有りあはせの品にて、小體に店を開き、それを資に一仕事、といふが開闢以來のしきたり、所詮、律儀の商法は、わるくすると、一生間口が狹いで御座るが、切取強盜は武士の習ひ、といふ諺はあッても、切取を文士の習ひ、とは、文士も喰はねど高楊枝、といふ秀句を申された高田半峯居士とても申されなかッた故、小生も止むを得ぬでござる。　ハレおひ〳〵言葉使ひがゾンザイに相成ッて失儀千万、さりながら心友と相語るは聲を出して思ふのぢや、といふ名言もござれば、何卒御容赦被下い。　サテ小說不振の因緣、と斯く表題は置いたものゝ、まづ何からお談じ申さうか、因から申すが順當なれど、これは少々むづかしい、緣とてむづかしい、さういうてゐては例の果しが無いゆゑ、まづ有合せを並べ申さう、一山百文ぢやとどこかで申しさうでござるて。

維新後に小說がズント芽をだしたは、屢〻も申した通り、泰平の餘澤、化

政度小說の反動、うそらしい艸双紙にくらべてまことらしい社交小說が物めづらしく見えたからで御座る、然るところ、かやうな小說ならば、某も、くれがしも書く、といふので、一度に八面に鬨の聲が上ッた、言文一致、元祿句調、翻譯ぶり、姿はいろ／＼でムッたが、氣立はあまりかはッたこともムらなかッた、ソコで讀者のひとりが、「千篇引」と號令をかけると、皆口を揃へて「一律引」とうけた、此れが秋の聲といふので、肅殺と形容すべきものでござッた。　兎角いたすうちに、おひ／＼若手の作者が隱居いたす、二十五六、多くて三十五六の作者連が、頻に隱居いたす、此れにはいろ／＼込入ッた理由もござるが、廣義に謂ふ世間の諸緣を申した後でなければ、了しにくい。　トコロデ、此に於てや、でござるて、此に於てや讀者中に、四相を覺る畠山庄司といふ分別男があッて、壯士芝居ほどの思入の後に、ムヽ今の作者は學問經驗が不足ぢや、年が少い、規模が小さい、題目が陳い、愛國心が無い、人物の種類が狹い、目の着けどころが低い、立脚地がわるい、信仰が無い、とマルデ阿彌陀の像を造ッて魂を入れさうなことを申した。　如何さま、かやうな品々持合せが乏しうもござらうが、去かし、かゝる品は、世間にも、あまり多量にはござらぬゆゑ、獨り作者ばかり責めるでもござるまい、又小說の振はぬ因緣は、これはかりで

はござらぬ。　げに、今の作者の多分は、經驗に不足な所ろもござらう、規模も狹小でござらうが、方今小說を讀む者は、槪して年少の輩でござれば、此の他に何事か事情がござなくば、作者の經驗が不足ぢやといふ事に氣が附かう筈がござらぬ。　現に浪六小說について行はれた、探偵小說といふもの、トント規模の小さいものでござるが、千篇一律に讀者の饜がまゐッたまでは、善う行はれたと申す。　コヽデ文章ならば「何故ぞ」とあるところでござる、スルト「何とならば」と答ふるでござる、イヤ「蓋し」でござる。　蓋し、此の六七年以來、人世觀察といふ事、めざましく發達いたいた、兎角に惡い事は先走るもので、先づアラを觀ることが上達いたいた。　昔しは陰言を惡德の一に數へて、小生なども幼年のころ、ウンニャそれがしが申したのではござらぬが、下婢などが折々陰言を申し、他人の容貌擧動などの棚下しを仕ると、老母がにがい顏をいたいて、嚴しく誡め申たを記臆仕る、然るに近年と成相ッては、さん〴〵に他人の弱所ばかりをほじくりだすを穿つと名け、相會へば人の譏訴やうの儀を申しあふを、性情研究と稱し、かやうなる事に熟達いたいたるを、人情哲學者などゝ申すげにムる。　如何さま、左樣かとも存ぜられる、新聞紙などがよい證據でござる、いづれも惡口が達者で、當コスリが上手で、アラ探

しか堪能でござる、随ッて、乙娘が「美いちやんのお母さんは、アノ何なのよ、繼兒だから斯うだ、云々だ、早稻だから米屋の金さんに、云々など申すを聞くと、下宿の小說家から、イヨ觀察銳敏といふ褒詞が掛かる。斯樣に相成ると、陰言にも爵位めいた者が附く、さらば妾の腕前を、と云ふのも出る、「そんなのが觀察なら、わたしのは落籍で有う、と藝者の古いのもえなびた唇を濕す。況や口數の多いのと、邪推と、腰の弱いのに於ては、婦人の本領まで併せて、「如何だ、イヅが出來ぬ前の人間はこれでござる、圓滿具足の人性をごらうじろ、といひさうな無數の善男が、皆擧つて觀察に從事いたす。かてゝ加へたは個人主義といふ奴、昔しは我を立てるのをわるい事にいたしたが、個人主義はそれを善いと申す。さて善いと申すには、深い事譯のあるとおやが、ソコが氣の早いイヤ智の敏い手合は、夢に見てさへ善いと申すと、春駒同然に心得たが我慢繁昌の根本で、銘々に、例の銳敏な觀察も、手前のばかりが黑星と存じ、前申した演繹推理といふ用ひかたによッては至極面倒なれど、使ひやうで至極手輕な料理をいたし、西洋風御解釋といふ無形の招牌を打つて出たでござる。横町からも出た、新開町にも出來る、勢ひ斯くの如くなれば、ソレアノ當時はやりの(少々ハマリがわるいが)觀察衝突せずこゝせんやでム

圓滿具足の人性

個人主義

お手輕西洋風解釋御料理

るて、已に衝突す、いつくんぞ手前方のを揚げ、先方のを抑へざらんやと、辭意共に參るべき手筈でござる。　かやうに觀察炎が嵩じて、鋭敏の額合が盛に相成ると、自然我執と申す病がまかり嵩じる、第一に目が眩むげにござる、人が赤いと申せば、黑いと見え、白いとと申せば青いと見える、ガッと申しやスッとすまし、エヘムかくの如きは人世の常態でござえす、といふうちに、其れは其れ、此れは此れと、油繪の具の白いやつが固着るやうに疑結つて、バリ〳〵となる。　此奴二度と溶すことが出來ぬ、高價の色料ぢやが惜しいことでござる。　ソレこれが作者の方面に就いて申すと、作意と着眼の千篇一律にまかりなる一因である、已に手製の眼鏡のみで觀察仕る、物が同じやうに見えいでやは、と結ぶのが文法である。　これを讀者の方面に就いて申すと、兎角に作者の觀察と和合いたしにくゝ相成る源で、又畢竟申せば、寫實風の小說流行以來、ズント讀者の眼も肥えたでムる。　イッソ艸双紙ならば、其の積で讀まうといふ負けぬ氣の婆樣も、寫實ときいては、チョイと誰れや、そこの子針箱の眼鏡を、と申さるゝ、小姑も、嫁御寮も、女學生であッた時分には、ことでござる、例へば「頗る下婢の性情を穿ち得てゐるではありませんか」とある、「アラわたくしはさう思ひません、奥さんに對して、こんなことをいふ下

小説の寃罪

樂屋落

怖くなうて恐縮す

婢が、どこにありますものか」とある、「シカシ」と嫁御寮も反挑して、二言三言いふ、と事が大きくなる。 婆さまと小姑女との間に以心傳心術のやうなことがはじまる、イヤはじまりはせぬが、嫁御寮ははじまつたと思ふ、思ふから目からエレキが出る、其の反對の方角で、そろ／＼遠雷が鳴りだす。 嗚呼是れ誰れが過ぞや、皆なわたしが惡い故、と、今の寫實小説がいひはせねど、止むを得ないは定業、仲直りの曉にひとり罪を被せられて、當分の間出入を禁ぜらるゝ者は、多分、今の小説でござらう。 さて此れも小説の下火となッた間接の一緣でござるて。 之れに比ぶれば、探偵小説と申すものは罪がござらぬ、謂ふ所小説も人情を穿たぬではムらぬが、惡くすると作者の樂屋落を聞かされるやうな心持がする、時々はこはくなうて恐縮するともある、時々は、如何やら新華族さまの哲理談をきくやうな、又時々は旅行歸りの自慢話を聞くやうな感じがして、所詮追ひ込に入れられた家鷄に對し、同感の念が起こるでムる。 八幡、必ずしも作が拙いとは申さぬ、心をこめた落想落筆、拾うてゐれば嘴のくたびれる事もあるが、ガ、究屈ではムる、同じ眼鏡で觀たとのみが書いてゐるからでござる。 譬へば、田舍へまゐッて馳走にまかりなる心持が致す、ヤレ自由にまゐる、辭義斟酌一切つかまつらぬ、萬事墺國皇子

小笠原の名所話

的御待遇、といふてもきかぬ、是非にも、と無理勸告は、迷惑至極、剰へ甚しきに至りては、おのれ斯ほど申しても屈服いたさぬな、然らば、と、中には、壯士をも使ひかねまじい、權幕の、おそろしい議論が添はッたのもムる。即ち今の小説の多數には、General interest といふものが乏しい、旨味(おもしろみ)が普通でござらぬ、探偵小説よりも旨味の區域が狹うござる、探偵小説が一時行はれたは、强ち讀者が萬筋の品がはりを誂へもすまい、筋のめづらしいのを好むばかりてはござるまい。 探偵小説も阿房らしい事を綴ッたものでムるが、一個人の樂屋話よりは世間ではうける筈でござる。 たとへ一個人の懺悔話でも、失策話でも、其の人次第で有難く聞かるゝものでござれど、小笠原嶋の名所話ばかりしよッちうの聽聞は、首の骨でござる。 然り而して、此の時に當たッて、英雄崇拜の本尊の雛形のやうな福島中佐が、海外から戻ッてまゐッた、郡司大尉の壯擧が起こッた、宛然(まるで)活きた冒險小説の結局と發端とを一度に出版したやうであッた。 折から敎育と宗敎の衝突といふ論文が、尠くとも府下の中流以上の心には書かれた、これは本來は個人的旨味(パルソナルインテレスト)の議論といふべきものでござッたが、宗門に關した事丈に、旨味が廣い、目前の事なれば、何人の心をも牽いた。 續いては相馬事件といふ、榮泉社的翻刻物のやうな艸

双紙兼探偵小説未完的といふのが出來した。　案ずるに、或派の論者が、小説は須からく理想的なるべし、と唱ふるは、現實の世間を狹しとするからでござるに、今の小説は、其の狹い現實の半分をもえ寫さいで、中には悉皆空想から成ッたのもござる、又他の派が、小説は宜しく造化の醇粹を模寫すべし、精髓を捉らふべし、といふも、自然と人間とを直觀して、其の髓を取れ、といふのでござるに、今の小説は此の髓を聞きちがへて、葭のずゐから天井をのぞき、然らざれば、只おのが家の井戸の水を砂漉にして、これが天下の水の粹でござる、と能書が添はッただけに、買ふ人の氣が咎めるでござる。　幸に其の水が、ズント堀ぬきの上々なら、人も賞翫いたすでござらうが、さなくば手近の玉河上水、田圃じこみの水のはうが、直にとイヤリとこたへる、と思ふが人情でござる。　世間に事件が續出して新聞屋が種に困らぬ間は、今時の小説は、かやうにけおされても、怨みがたい理由がござるて。

其の二

本誌刷新の混雜に紛れて、亡羊子が原稿の殘分を見失ひ、百方搜索しつれども、終に發見する能はざりしかば、止むを得ず、同子に就いて、再び彼の稿を起こされたしと乞ひしに、左の如き答書を得たり。　よりて全文のまゝ

を掲錄す

金釘流のゾルコソレ

前略、拙稿紛失云々、あらため起稿すべしの貴書披見、ヤレ惜しいことなされたり、前半こそさほどに御座無かッたれ、後半の愚見は、アノソレ流行の哲學的眼光と申す奴(やつ)を光らせ、的の字ずくめにてまかり物したる一篇なりしを、廢稿と混ぜられて、沒却せられつること殘念至極、然らばとて再度の的の字ずくめ、尙更にイヤなれば、此のたびは何處(どこ)かの雜誌で惡口(わるくち)を申したやうに、大家ぶらず、中家ぶらず、ほんの町家(ちやうか)ぶッて、よろづ一つ書といたすべし。 かう書いても、尙何の事だか解らぬ、といふ手合は、滑稽の滑の字を見て眉を顰め、洒落の洒の字に澁面つくり、神が人間に笑といふ殊能を賦與したは聞こえぬ、とうめき、一切を大偏屈か生(なま)眞摯でやッ通し、金釘流のゾルコソレで眞地目ぶり、方今の聖人と君子とは手前事でござる、と口から先に謹嚴な連中でもあらうか。 但し、かう申したとて、强ちそんじよ何處(どこ)の誰を指して當(あて)こすッた譯ではないぞ、此の諷刺は、そッくり、多分、予を當こすッたな、と存ずる手合に、進上申す。

前日は、小說不振に關する周圍の事情のみあらまし掻い摘まんで申したが、今般は作者の方面に就いて、不振の近緣とぞんせらるゝ箇條を一

大家ぶり

おぢけ

つ書にいたさうでござる。　總括してピカリと哲學的眼光を光らすれば、見事なものに相成る儀でござれど、其の邊は、いつそのこと『國民之友』時事記者の風呂敷的頭腦に一任し、ヤハリ持前の一山百文が早手廻し、と愚案の結果、近縁の棚卸し、ザットかうもあらうか。

一大家ぶりの事

維新後かけだしの作者連、おひ〳〵後連におされ、辻講釋傍聽の閑人のやうに、出世したでもなく、エラクなッたでもなけれど、いつの間にやら目にたつ處へ押しだされ、義損金の請求にメン喰らふと一般、まんざら澄してもゐられず、まづい手も出せず、コソ〳〵と横町へぬけて隱居し「後連の若い手合と同じに、辻講釋でもござるまい、後生怕るべし、よくあの手合は勉強します、我輩の及ばぬところでげす」。これを大家ぶッての隱居といふ。　かゝるたぐひの大家ぶりを大家と思ふは買ひかぶりなり。

一怯氣の事

おいらも明治最先の作家の一人で、頗る名を賣ッたものだ。　間接、直接の門人、かうだによッて、凡そ五十人もあらうか。　景崇者にいたッては、春陽堂の統計によれば、さしひき二三千人もあらうよ、だによッてと、

迂濶に下手なものは書かれぬわえ、估劵が下ると取ッてかへしがつかぬ。まづ／＼見合せのこと／＼。

ひと安心

一　一安心の事

ヤレ／＼、どうかと思うたが、まづはおれも名が揚ッた。「ハイ／＼小生はくれがし新聞社小說專任の記者、別號何のそれ。イヤナニあれはほんの俗受の作です、いづれ一二年のうちに更に一作の所存ですが、サテ兎角俗事が多端でござりますから。

なまけ

一　懶惰の事

何というても乃公の如きは鐵中の錚々だ、惡くいふ口の下からでも乃公を五指の中に數へるが論より證據だ。ナニ／＼「某派の頭領、別號居士は、近來虛したるものゝ如し。」よく叩くよ、いくら叩いても乃公が錚々たる名は明治文學史に上ること請合だ、必しも今狼狽して名譽回復の爲に新作をいだす必要はない。エ何だ、報酬をよこした、と、よろしい、さからば是非が無い、約束通りお附合に日光の楓葉觀か、但しは西京行としやうか。

これは名利共に、當分これで澤山、といふ形にて、前の一安心と似たやうで異なッたものなり。

入念　不平　種切れ　高ごまり

一入念の事

かうでもない、おゝでもない、我れながら如何も氣に入らぬわえ。　ハテ此の句が妙で無い、イヤ〳〵此の字が面白くないわえ。　ホイ一行かくうちにもう日が暮れたか。

これでは一年に一作位の割なり。

一不平の事

べらぼうめ、おれの作をあんな物と一つにされてたまるものか、馬鹿な話だ、社主ほど解らぬ奴がまたとあらうか。　ヘン御注文通りにかいてゐたら小説は何處で立つ。「エ我輩ですか、マア書かん積です、どうせ我輩の作は受けません、ヤハリ探偵小説がようござりませう。　馬鹿々々しい、金錢や虚名の爲に書かうといふのではないが、何だ、おれが百圓の月給取か、呆れが禮に來るわさ、大家もすさまじい。

一種切れの事

ナニ戀愛小説一點張だ、ウヌ今に見ろ、トサいうて見た者の、モウ隣の婆さんの逸事もだめだし、從弟の事もかいたし、ハテ何にしやうかしらん。

一高く占位の事

憫れむべきは我が國の文學の現狀でござる、審美の眼光がとんとござ

らぬ、たとへ拙者が大手腕を揮うても解し得るものがござるまい。名におそれて稱(はめ)る奴の批評は見當ちがひで、却ッて癪に障る、目くらばかりの世間へだして見せるよりは、肚のなかで著作して、自ら評判してゐる方がましでござる。一體我が國の文學界は狹小を極めたもので、批判家らしい奴は、たかゞ一人二人、それすら怪しい尺度(ものさし)の振りかた、よし其の振りかたがおぼつくにいたせ、二三人に見する爲に、態々(わざわざ)閑(ひま)をつぶすでもござりませぬ。そも〳〵常識からいへば、名譽利得は詩人を刺激する近緣でござるが、今の文壇に浮いてゐる泡(あわ)のやうな名利は、敢て競爭して得んとするに足らぬものでござるて。拙者はモウ二三十年間は書かぬ所存でござる。

舞臺なし

一舞臺のなき事

書いたところで新聞社の注文には稱(かな)はず、雜誌には長過ぎて向くまい。本屋は、此の節の不景氣で、買はうといふまい、よし買はうといつたところで、引眉毛の作同樣に、十圓以下五圓以上は情(なさけ)ない。

糊口多忙

一糊口に多忙の事

筆では食へぬ世の中、三四ヶ月經營慘憺の出來榮が、わづかに二三十圓乃至五十圓、厄介物を養ふに足らず。月給十五圓、日勤八時間、アゝから

いそがしうて何が出來やうぞ。

一厭氣の事

あゝつまらない〳〵、こんな譯もない贅書に大切の光陰を暮してしまふは惜しいものだ、まだ高尙な仕事はいくらもある。上せて眞理と思うた事も、今思へば虛妄、至醇と感じたのも一時の感情、人間の實相、宇宙の大道はまだ遠い。寫實といふのも空氣を寫眞に撮るやうなものだ。理想といふのも夢をランビキにかけたやうなものだ。アゝいつそ小說商賣を廢さうか。

一眼ばかりパチクリの事

あゝはあるまじきだ、かうでもねえス、ハテサテ若い觀察。如何にあの連中が初心にもせよ、よう大膽にかうは書いてのけたものだ、盲蛇におぢずとはこの事であらうわえ。此の行文の粗笨さ加減はどうだ、ヤレおッそろしい造語もあッたものだ。本來この手合はトント小說の何たるを知らぬと見える、一論物してこまさうか。ソーレ小說といッぱ、云々云々、何と我れながらエライものか。此の趣意でアノソレかういふ鹽梅に脚色して、まづソノ主人公の性格は、英の『何それ』の主人公と異曲同工に物して、さて夫から佛のカレと獨のナニとの筆で、かやう〳〵

自脉

蓄積

に書かねば、眞の小説とは申されない。　ハイ〳〵、いづれ一二年中には、ハイ〳〵左樣でござい、自作を物して御覽に入れる、云々云々、トサ人前ではいッたもの丶、近來頻に焦慮工夫、夜の目もろく〳〵合はせいでゐるが、如何も思ふやうに筆が動かぬ、思ッたほどにうまく書けぬ、ハテナ中風に罹ッたのではないかな、どうやら手がしびれるやうだ。

一自脉の事

わからぬ容體だわえ、おれは一體詩人、小説家たるの資格があるか。（自惚、お輕の口眞似をしていふ）あるぞえ〳〵。　あるか〳〵、シタガおれも隣席のパチクリにかぶれたか、手がしびれてどうもならぬ。　人のアラもよく見えるが、自身のアラもよう見える。　自身のが見えるだけに、惡口も手ぬるく、斟酌がきゝすぎて、キッパリとまゐらぬ、こゝ一奮發、左隣の蓄積老人へ入門しやうか。

一蓄積の事

まだ〳〵學問、經驗、觀察、一切がまかり足らぬ、傑作は一生一篇でよいものでござる、作せばすなはち三千世界を驚かし、永刧未來に傳ふべきをいだすべきが作家たるものの本分でござる。　片々たる紙屑のやうな作、見たうない、ソレ三年鳴かずばでござるてや。

インスピレーションの拂底

一氣ぬけの事（無感得の事）

詩や小説は感得の自然の結果、求めずして自然に成るのが當然である、名利などの刺擊によって成るのは勿論變則といふものだ。　作家の肺肝に、何等をか表目せんとする必至の勢がない時には、所詮何が外にあらはれやうぞ。　拙者は當分氣ぬけでござる、何のインスピレーションも起こり申さない。

亡羊子曰はく、此の最後の一箇條は、かう俗ッぽういうてのければ、何の旨意も無い事のやうでござれど、其の實不振の元因に密接したるものでござる。　大作家はインスピレーションを俟たぬ、と不知庵老はいはれたが、それは日々時々小使的感得のことで、根本の大インスピレーションは述作以前に成立たねば叶はぬものでござる。　方今の詞壇の連中のやうに、豆殼のやうな狹い社會に閉籠ッて、二三同臭の褒貶に喜憂を決し、影辨度の長刀を揮廻して、宇宙を睥睨した積ばかりすさまじく、斜睨の觀念や、受賣の悟や、哲學史仕込の哲學で、人世觀とか、世界觀とかいふカンドコロを、青檢校が戸まどひしたやうに、探りあてたところが、到底暖いインスピレーションが起こらう筈がない。　彼のシエークスピアというたら、又かと言はれうが、外の事は大概受賣ゆゑ、いはぬこと

チヨコマカ熱

ゝし、多少自身で會得した、といはぬまでも、直に感じた事をいへば、彼のシエークスピアの四大悲劇の如きも、四十年來の、長い〳〵間のインスピレーションの塊が破裂したのでござらう。早く申さば、前にならべた十餘箇條は云ふに及ばず、ありとある浮世の苦味を吸盡くしたおくび、ハテナ少々きたならしい比喩なれど、すいも甘いも其の中に籠ッて、止み難い理由あッて、肚の底から出たのゆゑ、出るのも必然、勢も格別、聞く者爲に酸鼻すとまかりまゐる、換言の仕れば、大詩人の作は Necessity の所生である、彼の鳥飼が、手品で、毛髮は羽變りを製造するとは天から由緒がちがうでござる。それに今一つ、方今の文壇の弊といふは、チヨコマカ熱といふ疫病でムる。このチヨコマカ熱と申すは、輕薄、婦人の仁、輕はづみ、早合點、小滿足、身贔負、輕信、お爲ごかし、などいふザラに流行する感冒と兄弟の間柄のものにて、兎角に作者に取つき易い病でござる。例へば、こゝに一人あッて、或一作者を誹謗いたすと、忽ち横合から淚もろい男達がまかりッン出て「インニヤ、云々だによッて、斯々だによッて、彼の作者は取所がある、と(それが合理ならば文句は無いが)滅法な事をいうて辨護を試みる、これで、譏られて一旦はグッと逆ッた其の作家の疳癪がズイと下る、蘇峰老が遠のむかしにいうた、怒も一種のイ

ンスピレーションというた、其の變則の興奮力も、ツイぐづ〳〵となッてしまふ。これがチョコマカ辯護のチョコマカ慰籍といふものである。譽めるのも其の通り、一寸ほめて、一寸わるくいふ、まるで豆人形の牛若丸が辯慶を苦める格で、これがまた存外にチョコマカ安心の媒となッて、大概の作者は此の小波動に浮沈するうちに、或は早熟の大家となり、或は早稻の彫刻家となり、或はじり〳〵的不平家となる。スキフトが不平と疳癪とで兎に角世間的文豪となッた先例も有ど、凡そ Acute でない Massive の不平、若しくは漸次チビ〳〵的浸潤の疳癪は、到底鹽谷判官をも作らず、スキフトをも作らず、鳩溪をも作らずだしぬけに唐がらしを食はせたほどの興奮をも起こさせぬ。おやによッて、以來大作家をだしたい了簡の新聞屋などは、思ひきッて、惡くいふならば惡くいふがよし、肩を持つなら死身（しにみ）になッて肩をもちやれ、わづか五行六行でのチクリ〳〵は、生中作者をしてチョコマカ苦樂に慣れしめて、遂に無感覺にならしむる階段、たかゞ褒貶とも比較的に相應なところをいふ位のものか。シカシ此の比較的も、かきかた次第で當人は絶對的と心得るから、早稻田記者の褒貶も感心仕らぬ、以來は宗旨がへがよろしからう。トいッても、イヤといへばそれまで、早稻田は早稻田、我れは我れ、

銘々に思ふさまやりめされ。平等一味の文壇も、似而非個人主義全盛の世は是非もなし、以來は大激戰然るべく候。（九月）

『早稻田文學』の刷新に際して

明治廿四年十月、はじめて本誌を發行せんとせしや、吾人ひそかに以爲へらく、我が國人の文學思想は、多。數。の。上。より見れば、なほ甚だ幼稚なり、彼等は文學の何たるをも知らず、文章と文學との差別をも辨へず、泰西の文學と我が國文學とが、如何に相似て、如何に相異なるかをも（文章以外には）殆ど知らず、間〻和漢洋三文學の調和を唱ふるものあるも、其の着眼兎角に修辭の外に出でず、彼等はまた文學の天職をも知らず、又小說と脚本との別をも知らず、甚しきは小說をもて唯一の文學なりとし、且これを以て一種の遊戲事業と同視し、文學をもて最も入り易き、且最も成就し易き、又最も安樂なる學問となせりと。又以爲へらく、此の淺薄庸劣なる文學思想を矯正し、所謂讀書社會をして更に幾層の審美的好尙に富み批判的燗眼を具へたるものたらしめずば、假令天才の士生まるとも、之れを獎誘すべき周圍（緣）なからんと。此に於てや、吾人は此の大體の文學思想を涵養することを以て最も先にすべき事業なりと

確信し、且これを成就すべき第一の手段は、空漠たる議論にあらずして諄々たる講說と誠實なる誘導とにあるべきを信じて、竟に自家の謭劣を顧るに遑あらず、自ら講說の師を以て任じ、其の道々の名家に乞うて其の賛助を得、釋義、評註、講說、談理、記實、等、ありとある方便を用ひて、將に文學界に入らんとする多數の青年子弟の爲に、正當なる將來の方針を示さんと期し、就中、下の數個條を實行せんと企圖したりき。所謂企圖したりし個條とは

第一　和漢洋三文學の精神的調和の緖を開く事、

第二　文學の攻修と作文修辭の修練との別を明にする事、

第三　甚しき語格の紊亂を正して國文の軆裁を整理し(假令新語格を定むる必要ありとするも、そは舊語格に通曉したる後ならざるべからずといふ事を示さん爲に)所謂國文家の學を助くる事、

第四　我が國文學をして將來の一大勢力たらしめんとせば、必ず泰西列國の文學と我が國文とを對照して研鑽せざるべからず、絕えて他の國々のを窺はずして、一に我が國の文學にのみ執着するは、退步敗壞の因緣なり、而して此の弊を救はん手段は、彼れの傑作を翻譯して紹介するにしくことなけれど、そは已に他の雜誌にても行はれたる所なり、又二つには吾人が有限の力は、有限の紙上に於て、之

れを實行せんを期しがたきが故に、せめても海外文學の古今の形勢を報道し、若しくは名作の梗概を紹介し、以て讀者の胸懷を濶大にするの緒を發く事。

第五　杜撰粗漏なる推理は、損多くして益少なし、又個人幷びに些屑なる題目に關する辨難評論は、其の人若しくは其の周圍の小社會にのみ用ありて、廣くは何人をも益する所なし、かるがゆゑに、總じて要なき論難を避け、專ら將來の參考たるべき文學上の事實を報道し、態と評論を附せずして取舍を讀者の聰明に一任する事(これ事實の解釋の如何に大切なるかを、又片言隻句の評も、公平を欠かば、忽ち大謬の緣となる由を諷示せんが爲なりき

第六　文學の本分は廣大無邊にして千古を照らすべきものなれば、一時の遊戲文字、一個人の妄想は眞の文學にあらず、眞の文學は、少なくとも一國大の想念を包含せざるべからず、此の理を解せしめん爲に、現在の宗教及び教育等に關する事件、即ち所謂純文學にやゝ緣遠きことにも注意を呼ぶこと、

是れなり。要するに、吾人は講師をもて自任したりき、かるが故に、本誌の體裁も、其の所載も、其の口吻も、其の調子も、すべて講堂的氣脈を帶べりき。吾人が本志を察せざりし讀者は、吾人が僭越を異しみ、或は生老實を嘲罵し、或は其の活氣波瀾無きに退屈し、或は其の平淡無味なるを

厭ひ、或は其の淺近凡庸なるを笑ひしならん。彼の「名著梗概」の無用を說き、我が文學定義の廣漠たるを異しみ、我が千篇一律を難じ、我が冷々淡々を誹りし者は、いづれも吾人が微衷を察せざりし者といふべし。吾人ははじめより漸を追うて變移改進せんの心ありき、こゝを以て、已に曩には「講義」「評註」欄を縮小して「記實」欄を擴大し、以て主客の位置を轉倒し、之れと同時に、死文死記の講習は學者の第一事ならざる由を論じたりき。今や文運月に進み、世間の文學思想も、最早二年前の比にあらざるが如し。吾人いつまでか僭越の資格を持して講堂的事業にのみ從はんや、死記死文の講說を抛却して、少なくとも演壇的事業に從ふべきの機は到りぬ。只二三講說の未だ完結せざるものを中道にして廢せんこと、不本意の至なれども、讀者の得の彼れにあらずして此れにあるを思へば、斷然割愛して、一旦中絕し、尙其の中の世間に需要ありと思はるゝものゝみは、改革後の誌上に、演壇的事業の一部分として、稿を繼ぐべきものとし、直に進みて左の如き刷新を行はんとす、

第一　「雜錄」欄を廢して「早稻田文學」の欄を擴張し、一層材料を精選して此の欄に採收する事、すなはち此の欄をして泰西の諸文學雜誌と躰裁趣味を同じうせしむる事、

第二　「文界現象」の諸欄は依然として存せしむると同時に、一層材料を精選し、ますます公平と簡明とを力むる事、新著の紹介及び批評はいよいよ中正謹嚴なるべきこと、新刊諸雜誌の緊要なる、若しくは注意すべき論說批評等は、泰西なる "Review of Reviews" の例にならひて、簡明に紹介する事、

第三　附錄なる「講說」欄と「名著梗概」欄とを廢する代りに、附錄として「放言」欄を置き、此の欄内には、時文に關する諸種の放膽文を集錄する事、或は正議、讜論、或は諷刺詼謔、苟も自ら信ずる所を直言して憚らざるを以て此の欄の特質とする事、

第四　吾人は講堂的調子を脫せんといふものから、尙幾分か注入的事業の必要あるを感ずるが故に、多少（程度を高くして）演壇若しくは講壇的調子を存する事あるべし、例へば、古今の哲理幷びに審美論等を評論說明する事、過去の文學に關する叙說に從ふこと等、是れなり、

第五　將來の「早稻田文學」欄の所載は、概ね左の方針によるべし

第一　時文に關する評論
第二　古今東西の詩文人に關する傳記、評論
第三　哲學、審美論等に關する講說、評論
第四　美文の飜譯
第五　美文の創作

なほ委しくは第四十九號以下の事實に照らして知るべし

廿六年九月念五日

同志社講話會

故新島襄氏の創立に係る同志社内に、有志者の組織せる學術の講話會あり、毎年幾回か東京の專門家を招聘して講話を需むる慣例あり。田口鼎軒氏、三宅雪嶺氏、森田思軒氏など、曾て其の招に應じて、數回の講話を物しきと聞く。予もまた過般該社に招かれて京都に赴き、去十六、十七、十八の三日、該社の會堂にて、都合三回の講話をなしぬ、いづれも予が平生の管見を、平話俗談のやうに、說話せるに過ぎざれば、特に取りいでゝいはん價値も無けれど、客觀的にいへば、これはた或は今の文學論の一分を代表するに足るものならめば、あらましを左に掲げて讀者の一粲に供す。　三回の講話の外に、該社の女學校にて物せしもの一回あり、第一回は「評論と創作と」といふ題なり、委しくは「批評と學理との創作家に於ける關係」などなづくべきか。

予はまづ演說と講話と其の形の相似て其の旨の相異なる由を辨じ、演說を日、月、星辰に比し、講話を電氣燈、瓦斯燈、ラムプ、燈燭、等の

他を照らすを職分とするものに比し、さて本題に入りて、批評と學理とは創作家を裨益すべしや否やと問ひ、其の答に積極、消極の二の極端説ありといひ、先づ裨益せずといふ說の大要として(一)詩人は天成也、人力もて作るべからずといふ事(二)醜美の好尚と嗜好とは一定しがたし、かるが故に正確なる批判は成り立たずといふ事(三)よし批判の規律は定め得べしとするも、總じて機械的方案は偶ゝ以て天才を邪道に迷はしむる弊ありといふ事(四)詩人の所謂學問と俗人の所謂學問とは同じからず、俗に謂ふ學問即ち科學、哲學の智識は、偏に分拆解剖を主とする傾あるに、詩人は常に綜合統一を力むるものなり、而して分拆解剖は次第に宇宙の万有を冷にし、死物となし、明瞭なる物となし、竟には其の間に一點の隱微靈妙を着くる能はざらしめんとす、若し詩人にして生中に俗に謂ふ學問に深入りせば、徒に理窟の詩人となり、咨嗟詠歎の本領を失ひ、辨拆證論の外道に入らん(五)人丸、赤人、ホーマル、シェークスピア、近松等、果たして如何なる學理をか修めし、彼等はひとへに直覺頓悟して自然と人間とを描きたり、云々、と述べ、更に轉じて他の裨益すべしといふ答說に移り(一)天才は因なり批評と學理とは緣なり、古來何

物か緣を俟たずして成りし、評論は多少作家を提醒するの力あり(二)尠くとも烱眼の批判は作家に大體の良方針を與ふべし(三)諸の美術と諸の美術の法との關係を思へ、彩色法と畫工との關係、建築法と建築家との關係等を思へ、批評と學理とは多少彼等を裨益したる例證あり(四)而して學理は想像を冷却すといふは淺見の速斷なり、科學、哲學の分拆が万有の隱微を闡明して明瞭徹底せしむと思ふは俗見の惑也、近世學問の進步は人をしてます〳〵一大不可思議の實在を認めしめんとするにあらずや。即ち大想像を皷動すべき大不可思議は今も尙在り、而して此の不可思議は哲學、科學等の高尙なる智識を有するものゝ、却りて著く認め得る所なり、云々(五)作者は直覺と頓悟とによりて半無意識に自然と人間とを描くこと多し、烱眼の批判家は之れを忖度して解釋す、作家をして更を發明せしむる所なしとせんや。　云々。

さて此の兩極端說を辨じて後、予が卑見に入り、此の二說の當否を決せんとせば、先づ作家其の者の能觀が古と今と相異なること、幷びに批判其のものゝ性質の古來甚しく變遷したることを知らざる可からずと說き、凡そ作家の天才は根本の因なれど、周圍の事情

毎にこれが縁となれば、國土、季候、遺傳、時勢等の力は、作家に古今の差を生じ、又東西の別を釀すと説き、古代、人の擧げて半無意識なりしころには、所謂作家も、概して半無意識にして詩歌を物せり(一)古代の詩歌は隨感隨發の抒情詩歌にして純然たる主観の詩歌なれども、其の間に些の私意俗情を交へざるゆゑに、往々にして天地に合體し、万有に同化するの概あり(二)やゝ下りて國風的抒情詩歌となりて後も、尚尠くとも一國の人情を代表し、間〻客觀の性を具へたり(三)さて物語(叙事詩歌)の時代となりても、作家は單に叙事者たるに止まり、自家を示さんと欲せざりき、然るに(四)崇古時代來たり(五)反動時代來たり(六)個人主義の時代來たるに及びて、作家の能觀著く一變し、彼等はおの〳〵著明なる自意識を有し、特殊なる定見を持し、多少の特色を備へざるもの無し、彼等はおの〳〵特殊なる理想を懷抱せり、彼等は皆特殊なる乾坤を作せり、彼等は皆殊なる觀相を持せり、而しておの〳〵其の殊なる自家を發表せんとす、是れ即ち今の個人主義の自然の結果也、彼等已に殊なる觀念と理想とを持す、此の故に差別生ず、差別の弊は天地万有と合體同化することを難からしむ、今の作家の多數は半無意識にして直覺頓悟す

る能はず、彼等は理窟の太氣に圍まれたり、蓋し十九世紀は理窟の時代なり、詩人はた理窟を脱する能はず、彼等の所謂理想は概して個人的理窟の所生也、彼等の描く天地は平等の天地にあらずして理窟の小天地なり、彼等にして再び古代の半無識に復ることを得ば可なり、若し能はずんば此の小理窟を破る爲に大理窟を究めざるべからず、否、万理窟を包まんの志なかるべからず、自意識と理窟とは、詩人に取りては、禁制の林檎なり、彼等已に此の林檎を食へり、今の詩人の務は、理窟に背を見せて天堂の表門へ逃歸るべきに非ず、理窟を破りて進前し、裏門口より天堂に登るべき也。詩人の發途點は大無意識の天門にして其の歸着點は大自意識の天門也、大自意識と大無意識とは背中あはせの天門也、而して所謂學理は此の大自意識の天門に到らん一種の階梯なり、則ち十九世紀以後の詩人に裨益なしとせんや、否、一種の必要なる縁ならん、云々。これより更に轉じて、古來批判の旨の變遷したることを説き(一)嗜好を標準としたる批判(二)古代の作を標準とせる崇古的批判(三)作の美を發揮せんと力めたる批判(四)美學を根據として物する批判(五)歸納的批判、即ち解釋的批判、等の別を説き、第四と第五とは詩人の本

領たる自然、人間、の觀察を助くる力あるものなれば、多少創作家の參考たるに適すと論じ、さて更に前說を繼ぎて、到底今の詩人は、古代の作者の如く、閑居獨棲して世と離るゝことは能はざるべきゆゑに、又種々の批評若しくは議論等を耳にせざることを得ざるべきゆゑに、むしろ大理窟を胸に蓄へて、小理窟に動かされざらん覺悟なかるべからず、而して件の大理窟とは我慢自尊の獨斷說の謂にあらず、万般の小理窟を包藏する底の大觀念を意味す、即ち浩々たることと天地にひとしきものをいふ、云々。

さて第二回の講話題は「歴史小說」なりき、予は最初に小說の種類の樣々なるを說き、古來慣用の種々の名目(稗史、小說、ノヹル、ローマンス、テール、スケッチ、物語など)を辨じ、特にノヹルとローマンスとの特質を辨じ、且近年に至りてはノヹルにもおのづから二派を生じたりと說きて、敍事體の小說と劇體の小說との別を說き、やがて小說の描く所に過去、現在、未來の三相ありと論じて、史的小說、現世小說、未來小說の通俗の區別に入り、正當にいへば、眞詩人は一作の中に此の三相を具足せさすべき筈のものなりと論じ、眞詩人の絶無にして稀有なる所以に及び、歴史小說を奬誘することの今の時に當たりて必要なる理由數箇條を說き、やが

て近松以下淨瑠璃理作者の時代物、馬琴の小說、等に論及し、スコットと馬琴との別を論じ、竟に歷史小說の定義に移り、所謂歷史小說は尋常小說の具ふべき性格を具へたる外に、史的といふ幻影を起こす力をも具へざるべからず、當代及び當國家といふ感を生せしめざるべからず、即ちナショナルといふ形容詞がヒストリカルといふ形容詞に伴はざるべからずと結論しき。

第三回は「東京に於ける現在の文學界」と題する一場の談話なりき。こは同志社の學生諸氏が需に應じて物したるものにて、講話と稱すべきものにはあらず、只予が眼中に映じたる所に基きて、抽象的に東京なる文學界の景況を語りしのみ。予は曰はく、今の東京の文學界は、譬へば新旅行者の雜駁なる團體より成れり、彼等は皆旅行に關する方案計畫等を蓄へたり、彼等はやう〱品川、鶴見邊まで立出でたり、或は滊車旅を主張し、或は陸行を唱へ、或は舟行を最佳と唱ふ、彼等は互に主義を鬪はせり、彼等は概して或理想を作りたり、さはれ其の實現の日はいづれも皆遼遠なるが如し、かゝるが故に、現在の文學を評するに、予は之れを二方面よりせんとす、曰はく、文學の形式(フオーム)に對する理想、曰はく文學の實質(精神)に對する理想、云々と。 予は更に文學といふ語を廣義に用ふる所

以、情の文が狹義に謂ふ文學の本領なる所以、等を辨じ、さて所謂東京の現在文學を智、情、意、三門に分かち、智、意、兩門の文學は專門外なればとて(且は同志社の人々の却りてよく知る所なるべければとて)除き、重に小說、詩歌などいふ情の文の範圍に就きて語れり。予が分類は左の如し

- 現在文學
  - 形式上の理想
    - 和漢洋折衷躰
      - 文章躰
      - 言文一致
        - 新文法派
          - 無意識
          - 有意識
    - 擬古躰
    - 和漢折衷躰……古文法派
      - 圓滿
      - 不具
  - 實質上の理想
    - 世間派
      - 儒教的
      - 基督教的
      - 政治的
      - 教育的
    - 無主義派
    - 名利派
    - 出世間派
      - 美術派
        - 理想的
        - 寫實的
      - 美學派
      - 觀念派
        - 理想的
        - 寫實的

右のうち、所謂和漢洋折衷體の主張者は新思想は新文法を要す、と唱へて多少古格を破らんとす、然れども同じく破らんとするに二派あり、全く古文法を知らずして無意識に破る者と知りつゝ破るものとなり。

有意識にして破るものは、所謂和漢折衷體派の不具派と其の形相似た

り、蓋し、和漢折衷派の不具派は、口には國語の純正を主張して、國文には外國の語調若しくは新造語を交ふべからずといひながら、其の古文法に圓通せざるの結果、往々にして破格の文を成す、これ有意識の新文法派と其の形相似たる所以也、云々。

實質上の理想は、表に示せる如く、諸派に分かれたれど、件の諸派は實際、表に見ゆるが如く、判然分離したるものにあらず、世間派と見做さるゝもの、其の實必ずしも世間にのみ偏したるにあらず、出世間と思はるゝもの、時にまた世間に密接し來たる。　前の表は大體の傾向を本として分別せるのみ。　所謂世間派は、文學を以て布敎化育の一具なりと做し、概して文學に對ひて現在直接の効用を求め、所謂出世間派は、之れに反して、敢て現在の利害を顧みず、超然として世間を離れんことを樂ふ。美術派は畫工的理想に安處して、唯美これを追ひ、或は撮影師を學びて現在の世相を實寫し、或は我が理想の美（若しくは理窟の造りたる美）を追究して之れを描く。　又觀念派は、眞理これ重じ、動もすれば科學、哲學と美術とを同視し、文學に就きて重に理を求む。　此の派にも、撮影的寫實を手段とする者と、個々の理想を描くものとの二派あり。　美學派に至りては、此等と異なり、彼れは俗に謂ふ善、俗に謂ふ眞の、美學上に謂ふ

此一篇は『早稲田文學』に「小說學校」といふ諷刺文及び其れに對する投書の掲げられし後の作也

美と同じからざるを認む。　彼れは、美の哲理の是認する所によりて、美の極致を定め、作の美を寫破するを詩人の本分とす。　若し夫れ無主義派（道樂派）名利派に至りては、敢て詳說するに及ばざるべし、云々。要するに、現在の東京文學は進歩の途中にあり、此等個々の理想は、互に小ならざる勝劣ありといへども、其の中の幾分は大に實現せらるゝの日とならば、以て明治の世を飾るに足るべし。　但し、畢竟は此等諸派の製作をして眞の美文たらしむるとたらしめざるとは、理窟の決する所にあらざるべし、大同感を抱懷するの作家を出ださん派こそ大詩人、大作家を出ださんの派なるべけれ、云々。

小說學校撥鬢科の教則

深刻精透なる小說學校一生徒の寄書ありしが爲、あら胆をぬかれてや、小說學校の報道をつかさどれる牛歩、意氣沮み、殘れる諸科の報道を催促すれども、未だ明細の學課表手に入らずなどいひぬけ、いつ報道せん氣色もなし。　讀者諸子に約束しながら、已に本號の如きは、主筆逍遙の俄旅行の爲に、一二ヶ條の背約を醸しつるに、今また放言欄內にさへ背約の跡を殘さんこと、無念至極の儀なり、同じ硯に禿筆の命毛摺りあは

する中の馬脚生、このところ引ッこんでゐては相すまず、と固より柄にないは承知なれど、只一回だけ身代はりに成らばやと決心はしたれども、所詮面倒なる課程表などは、此の方の畠になきこと、又牛歩的諷刺滑稽は到底企て及ばざる所なれば、只ほんの撥鬢科の敎則ばかり、左にあら〳〵と掲錄す。

撥鬢科敎則

一 本科の生徒たらんとする者は、其の平生の生活に於て、本科の理想を實現せんと力むべきこと、即ち其の言行、服裝、等の撥鬢的たるものにして、はじめて撥鬢的小説を作り得べきこと、

一 奇矯と風流とは本科の大主眼たるべきこと、而して所謂奇矯は、之れを古今の奇人傳中に於て、其の模範を發見し、所謂風流の例は、之れを隨筆、傳記、逸話、口碑、講談、等に見えたる歌妓、遊女、乞食、等の言行中に求むるを通則とすること、

一 人間の性格は剛柔の二大別より成ることを記臆すべきこと、而して男子は、表あくまでも剛にして、内に女子の如き情(なさけ)あるを理想的とし、女子は表あくまでもやさしく美しくして、内に男子を凌ぐべき凜然たる張(はり)あるを理想的とすること、

一 本科の作家たらんものは、筆先にて人を殺すこと、練馬大根を切るが如く心得べきこと、總じて死、自殺、血、美女、意氣地、磊落、不羈などいふ態

條を斷えず念頭に蓄ふべきこと。

一　總じて寬濶なること、すごいこと、すばらしいこと強いことに心を注ぎ、兼ねてやさしいこと、あはれなることに留心すべきこと、所詮剛柔の二面を常住の心得といたすべきこと、

一　「鬼の目に涙」「一寸の蟲にも五分の魂」「武士は喰はねど高楊枝」「柔能く剛を制す」などいふ諺を、毎朝百遍づゝ唱へて、よく〳〵服膺すべきこと

一　言葉使ひはモサ言葉を男子の理想的とすれども、今更に死語を恢復すべきにもあらねば、只精神のみを彼れに取りて、今様の言葉を用ふること、

一　總て奴といふ尾語を添へ用ひて、憎くしげに物すべきこと、「うぬ美人め」「うぬ天人め」「うぬ神め」「うぬ幸福め」「うぬ風流め」「うぬ文學めの類なり、總じて喧嘩口調をよしとすること。

此の教則をよく守りて、一二年間、藝人、俳優、俠客、遊女、歌妓、雅客、等に交際したる者は、たとへ本科に入學して教課を履踐せざるも、一應の試驗にて、直に卒業證書を與ふべきことと、云々。

明治二十六年文學界の風潮（原稿は金子筑水氏の筆に係れり）

歲月人を俟たず、新日本の第二十六年も、已に過去の歷史となりぬ。今讀者と共に、二十七年の端に立ちて、徐に來しかたを回顧すれば、夢の如

く過ぎにし廿六年の現象の、流石に漫然たる一夢にあらざりしを感ず。思ふに、廿六年の文界現象は一見何の注意すべきものも無きが如くなれど、まことは、此の十餘年來の文學的潛勢の結果にして我が當來文學の發端點たり、かりそめにも思想界の水先案內をもて任せんとする者は表面の靜穩なるにあざむかれて海底の搖動を看過すべからざるなり。　夫れ文學の境界は廣大なり、詩歌の世界あり、華文、小說の世界あり、哲學、歷史の世界あり、然れども爰に題して二十六年文學界の風潮といふは、最廣義に謂ふ文學界の風潮にあらず、重に文學の精粹たる詩歌、小說の風潮をいふ、而も此の狹義の文學は孤立特行するものにあらず、多少之れに密接せる他の文界の現象の相纏綿せるは勿論なり。　さて昨年の文學的現象として吾人の先づ指摘すべきは何々ぞ。　曰はく古文の流行、曰はく漢文の流行、曰はく歷史硏究の流行、曰はく傳記の流行、曰はく宗敎上の現象、曰はく哲學上の現象、曰はく批評上の現象、これなり。そも〳〵此等諸現象は如何の影響を昨年に於ける詩歌華文の世界に及ぼしゝか。

顧れば、廿四五年の頃一時中央の文壇を動かしゝ「國文學」熱は、廿五年の後半期より次第に冷め、昨年に入りては、漸く地方に移り、今は只註釋、講

所謂國文學家の功績

義錄の類が其の餘炎の幾分を示せるのみ。　さもあれ所謂國文學家諸氏の努力の結果は、昨年に及びてやうやう現れ、甚しき破格無法の文はおひ〳〵に減少し、且之れと同時に、時文の法格を論ずる者おのづから二派に分かれ、一派は古文法を固守せんと唱へ、一派は新文法を興さんと主張せり。　最も盛なりし國文學の景況だに、已にかくの如くなりしかば、國文の復興に伴ひて流行せし漢文學熱の如きは、一層速に衰退して、現に昨年の如きは、講義錄、翻刻類、學校の敎科用書の外には、何の新現象をも呈せざりき。

修辭上の一進歩

蓋し、國文、漢文の流行は、重に杜撰なりし時文に反動して興りしものなれば、所詮、修辭上以外には、別段の影響を與へざりしなり、而も昨年中に國文、漢文が修辭上に及ぼしゝ影響は流石に注意すべきものあり。　廿六年以前は人々概して流行に驅られて國文、漢文を修めたりしが、昨年に至りては、尠くとも漢文國文を利用して自由表白の便宜を增さんとするの傾向を現じたり、換言すれば、多少古文に役せられずして古文を役せんとするに至りたり。　即ち廿六年の文學界は、只管に文章の形に役せらるゝことなく、若しくは徒に過去の夢想者と化了することなく、(果してゐか意識してか將た意識せずにか、暫くそを度外にして評せば)幾分か新精神を正しく表白せんために過去の文

第一の回顧熱

章を參考せしが如き趣あり。これひとり古文の上のみならず、通俗文學即ち華文、小說の上はた然り。彼の西鶴、近松等、舊作者の諸著の愛玩せられしも、詮ずるに過去の我れを回顧せしに外ならず、即ち半無意識に過去の我れを參照して將來の方針を求めんとせしに外ならず。さはれ其のはじめ回顧者の着眼せし所は、重に過去の表白にありて過去の精神にあらざりしかば、

第二の回顧熱

第二の回顧熱はいつしか隱然として萠し來たりぬ。然り、世間は過去の形骸の裏面に潛める過去の實質をも知らんと願ひき。之れを歷史熱の昂上せし一因とす。

夫れ歷史の研究は、一方より見れば、我れを客觀の物となして主觀を照らすの手段たり。過去の我れを回顧して現當の我れを知らんとするは歷史研究の起こる由緣なり。固より昨年に於ける歷史熱は、必ずしも斯かる判然たる自意識ありて、さて後に興りしにはあらざるべし、恐らくは研究者の多數は殆ど無意識に過去を回顧し、若しくは單調の研究に倦みて、暫く新方面を開きしに過ぎざりしならんか。

史傳流行の因緣

即ち單に過去を慕ふ好古の心より、又は普通の愛國的精神より、或は單純なる學者氣質より、或は歐化主義の反動より、或は浮淺庸劣なる小說類に厭けるより、或は空漠たる好奇心より、或は其の他種々の因緣より、一時の流行

まづpiecemealに過去を知らんとせり

人性を研究すること漸く流行す

招致せしに過ぎざりしならんか。而も昨年の史學熱は隱然過去を參照せんとする念の鬱勃たりしを示す。そは兎も角もあれ、歷史熱は一昨年の後半より昨年へかけての著き事實なり、殊に一昨年の尾と昨年の頭とは此の熱(此の流行)の最も昂上せし時期なりき。當時の雜誌、新聞紙皆多少の史臭を帶びたり、但し、いづれも例の流行の所爲なれば、取りいでていふべき程の出來榮なく、區々たる考證、片々たる反古しらべ、空漠たる史論、獨斷的史評等の、一時接踵していでたりしのみ。而して昨年の後半期に至りては、流行の生みし史學雜誌は、やう〳〵木葉と共に凋落して、此の熱やゝ衰へしが、尙全くは亡滅せず、やがて一轉して人物評となり、再轉して傳紀編纂の緖をひらきぬ。吾人は之れを解して我が國人が先づPiecemealに過去を探知せんと企てし證とせんとす、卽ち過去の社會を知らんとして先づ過去の個人を取り調べはじめたるなり。固より研究者の自識せりし目的は、必ずしも是に存せざりしならんが、しかも昨年の讀書社會は人物評論を歡迎し、著述者はたゞ之れに熱衷せり。要するに、世間は人間の內面を觀察するの必要を感じたりき、Proper study of mankind is manを意識しはじめき、而して其の一方便として、史的人物若しくは小說的人物を解剖せんとせり、傳紀類の流

行は、蓋し此の理に基くならん。若し夫れ民友社の『十二文豪』、博文館の『世界百傑傳』等は、此の流行の結果なり。されば昨年來世に出でし傳紀評論の尤なるものを取りて、從來行はれたる古傳紀、評論と比較せんに、評論の氣脉も、編纂の躰裁も、頗る趣を相異にす、吾人は人生研究の傾向の次第に著くなり來たるを見る。所詮、昨年の讀書社會は漸く外。形。を去りて實質に就き、人。生。の深意に着目せしに似たり。而してかゝる研究は到底或不可思議に到着せざるを得ず、假令研究者は自識せざるも、自然の大勢は彼等を驅りて、暗に或不可思議界に接せしめ來たる。昨年に於ける宗教界の動搖と哲學界の膨脹とは、幾分か此の理に由來せずとせんや。

宗教と哲學とは、共に人生最後の大疑問に關す、一見、純文學と相關せざるが如く見ゆれど、其の人生を究竟の問題となせる一點は、三者其の範圍を同うす。大咨嗟、大畏敬、大咏歎は所詮大なる畏敬若しくは深邃なる思索より溢れいづ。大畏敬、大思索は間接に大咏歎を生むものとも稱すべし。夫れ佛陀敎と基督敎とが兩々相對峙して隱然勝劣を爭へるは、近時の著き事實なれども、尠くとも一二年前迄は、敎界と世間との關係未だ密なりといふべからざりき。基督敎の如きは、夙に世間に接しなが

宗教界と世間と漸く密接し來たる

ら、尙おのづから別寰を作りて、非基督教徒に疎濶なりき、而して佛陀教に至りては更に甚しく(就中、新代の國民とは頗る疎遠なる趣ありて)偶〻新代の世間人にして彼の敎に接觸する者あるも、概して出世間の方面、若しくは究理研學の方面より之れをなし、修道の方面、若しくは敎化の方面より之れをなし〻ものは尠かりしに似たり、然るに昨年に至りては、世間と宗敎との關係大に局面を變じ來たり、尠くとも進步せる思想界は、宗敎界に向かひて數步を進めたり。然り、尠くとも聰明英敏なる新代國民は、次第に敎界に接觸し來たり、敎界はた世間に近づき來たりぬ、換言すれば、所謂文學界と宗敎界との關係次第に密接となり來たりぬ。而して基督敎の如きは、此の際一大動搖を經驗し、自由派と守舊派との間に軋轢を生じ、昨年に及びて漸く鎭定し、自由派は自由派、守舊派は守舊派と相分かれ、おの〱其の根據を堅うせんと力め、隨うて世間と密接し來たりぬ。『六合雜誌』、『宗敎』、『三籟』、『評論』、『眞理』、『自由基督敎』、『心海』、『裏錦』等の調子も稍〻舊日と同じからず、世間と密接せんとするの意は、其の評論記敍の間に隱然たり。佛敎界はた著く變動せり。

佛徒の活動

一二年以前までは、彼等佛敎徒の動靜は、尠くとも新代國民(靑年社會)の注意を牽くに足らざりしなり、然るに昨年前半期以後、佛敎界の生氣頓

に加はりぬ。蓋し、シカゴなる萬國宗佛會議、若しくは歐洲に於ける印度哲學の流行等が、間接若しくは直接に、彼等を刺激せしによるとは雖も、彼等をしてたゞちに懶眠を破らしめしものは、昨年中の一問題となれりし、例の井上博士の「宗教々育衝突問題」に外ならず。こは佛教徒をして世間に接觸せしむるの縁となりしものなり。爾來佛教社會の運動また舊日に同じからず、彼等は鋭意當代に近き來たり、將に世間的側面に於て、基督教徒と勝劣を爭はんとせり、而して世間また佛教の何物たるかを知らんとするの念を生じ、多少此方よりも歩を進めて、小乘、大乘の別を質し、佛陀の本旨を窺はんとせり。佛教講義錄類の俗間にも行はれんとしたる、其の證の第一也、基督教徒だに多少佛教を研究して、佛教の科語を利用せんと試み、其の極や時としては凡神教に流れんとしたる、其の證の第二也。さて宗教界の動搖の此の如くなりし時に當たり、哲學界の狀況は如何と見るに、これはた昨年はやゝ其の版圖を擴張し來たりし觀あり。宗教界を動搖せしめたる原動力は、更に哲學界をも撼動して、曾て專門家の手中に存じたりし哲學は、次第に普通の讀書社會にも入り來たりぬ。例へば、一二年前には曾て見ざりし哲學上の科語、熟語が、新聞紙、雜誌にだに頻に用ひらるゝに至りしが如き、また

哲學的科語俗間に流布し來たる

敎科書以外の倫理論、倫理書、等の陸續公にせられしが如き（重に敎育の勅語に緣由せしものから）やゝ趣を兩三年前と異にしたり。要するに、以上の現象は、いづれも我が文學界が單に事物の形骸にのみ拘泥せずして、漸く事物の精神に着目し來たりし自然の結果とも評すべし。是れ豈前年に比較して二十六年の特象ともいふべき風潮にあらずや。

文學批評の調子

更に轉じて二十六年の批評界を觀察するに、歷史、宗敎、哲學よりも一層純文學に密接したる批評界を觀察するに、上にいへる思想界の潮流は、幾分か批評の世界にも實現せられたり。固より昨年に於ける批評界の活動は目ざましかりしにあらず、其の鑑識はた高上雄大なりしにもあらず、彼等の最高なりしものすら、大抵エマルソン、カーライル、テーン等を祖述したりしに過ぎず、彼等の尤なるものすら、恐らくは獨立の感得、創剏の識見、若しくは必ずしも至誠の感慨ありてさて後に豫言者的批判を下しゝにはあらざるべし、而も尙多少注意すべき運動なかりしにはあらず。創作の寥々落莫たりし割合には、批判の調子は、孰れの雜誌にても、やゝ高遠なりしが如し。まづ目立ちしは多少基督敎的臭味ある批判なり、『國民の友』、『三籟』、『評論』、『日本評論』、『文學界』、『靑山評論』、等の批判は、概して科學的たるよりはむしろ詩的なりき、彼等の中或は

現實に偏し、或は常識に拘し、或は時としては茫漠捕捉しがたきの說に流れたる者も無きにあらねど、流石に一種の情熱を具へたり、又彼等の幾分は世間に迂濶にして、恐らくは『國民の友』の所謂空想派、又は高踏派の綽號を避くる能はざりしならめど、其の思想の根底は、蓋し、頗る高尙なりき、と評すべし、即ち詩的想像と獨斷的見解とによりて人間を料理せんとする十九世紀の潮流に合したるものといふべし。　輕斷速信の弊、時に彼等の說に伴はざるを得ざりしかど、兎に角に彼等は改進的精神を具へたる批判者なりき、たとへ現實に偏するが如く見えたるも、退嬰守舊の論者にあらず、又たとへ現世間に迂濶なるが如くなりしも徒に肉の苦樂にのみ拘らざりき。　所詮、最新の理想を正的とし之れに達せんと唱へたりしは、彼等一流の批判の特質たり、然れども此等向上なる觀念も、皆必ずしも彼等の獨立的感想に由來せざりしが爲に(若しくは早熟なりしが爲に)局外より之れを觀れば、間〻德を衒ひ、道を衒ひ、我れを責むるに急ならずして、むしろ人を咎むるに急なるが如き觀もありしが、さりとて彼等一流の評論は、尠くとも其の表面は感慨の新調子なり、天地、宇宙、人生、靈魂、主觀、客觀などの文字は其の文章の上に滿ちたり。　これ上來論せし二十六年の思想界の潮流に合一せる所ならずや、

人生觀、哲學觀、宇宙觀などいふ新成語頻に用ひらろ

さて、以上は專ら基督敎趣味の批評界にのみ就きて觀察せる所なれど、ひとり之れのみに止まらず、孰れの批評雜誌にも、絕對、相對、眞如、實躰、主觀、客觀、などいふ科語頻に用ひられ、加之一二年前には曾て見ざりし人生觀、哲學觀、宇宙觀などいふ耳あたらしき新奇の熟語盛に行はれしこと、實に昨年の殊なる現象なり、以て精神、思想、內相など名くべき件に係る考察の、漸く文學界に入り來しことの爭ふべからざる事實なるを見るべし。　これを要するに、思想界のみに就きて言はゞ、よし其の範圍は未だ廣からざりしにもせよ、廿六年はやゝ進步の徵候を示せり、といふべし、徒に小著作の文章、形式を評論是非せし時代に較べば、昨年は確に一步を進めたるものといふべきなり、而して特に廿六年の風潮として著かりしも、實に上來列記せる思想界の進步に外ならず。

文學の醇粹たる詩歌、小說以外の、風潮は、槪ね上に記せるが如し、斯かる風潮の隱然圍繞せる時に當たりて、純粹文學の風潮は如何なりしぞ。彼等は充分に件の太氣を呼吸して、進步せる世間の欣求に副へりしか。昨年の著作は十九世紀的(新日本的)文學と稱すべかりしか。　あらず、昨年の詩壇は極めて荒寥たりき、特筆すべき作一も無しと斷言することを得べし、即ち明治廿六年の詩界は思想界に後れたりきと云べし。　そも

千篇一律の戀愛小說に倦めり。

小說家に對する種々の注文

探偵小說浪六小說の流行せし所以

世間が歷史小說を要求せし所以

そも一昨年の前半期より、世間は已に千篇一律の「戀愛小說」に倦めりき、而して昨年に及びては、作者はた倦怠し、讀者はいよ〳〵倦めりき。讀者の或者は欠伸の間に間、注文して曰はく、社會上の問題を書け、政治社會を寫せ、人生の神秘を歌へやと。思ふに、此等の注文は幕間の拍手にひとし、彼等は樂屋の魂膽を知らずして、徒に幕開を催促せしのみ、甚しきに至りては、緞帳に團洲の活歷を見んことを願ひ、春木座に東京劇の粹を望みき。畢竟、世間が昨年の創作界に滿足する能はざりしは、其の思想の調子の、當時の創作の調子と合はざりしに因るなり。世間は小家庭の寫實よりも、更に新鮮なる、更に高遠なる或物を得んと欲しき、戀愛以外の描寫を望みき、而も彼等は此の別種の或物を得ざりしなり。「探偵小說」「浪六小說」の流行せしが如きは、此の長き幕間の interlude（間劇）たりしに外ならず。さて、昨年の末に末に及びて、次第に著くなり來たりしは時代物（歷史小說）を要求するの聲なり、之れより先、新聞紙の續物は常に時代物を「世間受け」よき作とせしが、昨年末の要求は之れと其の源を異にしたり、疑ふらくは、上にいへる回顧熱の結果にして、またこれ自然の要求なるべし。夫れ過去を自在に描き得る詩人にしてはじめて靈妙に未來を描くことを得べし。シェークスピアが歷史脚本を終へて

脚本

櫻痴居士

下卷の我が國の史劇參照

新體詩

大悲劇に入り、ギョオテがギョッツを描いて後に、ヱルテルの憂愁、ヰルヘルムマイステルの傳、フッアストの窮達に移りしが如き、豈偶然の沙汰とすべけんや。　吾人は昨年末の世間の要求の甚だ穏當なるを認むるが故に、本年の詩界に向かひては、吾人はむしろ歴史小説の出でんことを望まんとす、吾人豈一足飛に三世を照らす大作を望む者ならんや。　演劇は昨年に至りて愈〻昌盛を極めしものから、脚本には取りいでゝいふべきほどの新作なかりき。　夫れ演劇の流行は、むしろ太平の餘澤たるのみ、俳優は具はり、觀客は滿ちたれど、默阿彌逝りて以來、劇詩壇はいよ〳〵さびれたり、櫻痴居士此の間に勉强して、屢〻改作し、屢〻新案しつれども、其の世間を滿足せしむる能はざりしは、「我が國の史劇」中に論せしが如し。　私に思ふに、明治文學は尚甚だ幼稚にして、脚本は文學の至高至難なるものなり、今の作家中英才の士尠からざるべしと雖も、彼等は未だ發足の初期にあり、彼等は未だ學習の途次にあり、而して種々なる障碍は彼等の進路を圍繞せり、新脚本の新風潮に合ふべき者のいでざる、蓋し異しむに足らず。　吾人は脚本の將來につきて、更に多少の卑見あり、別に未來の史劇と題して次々の號に論すべければ、今は總て之れを省く。　更に眼を轉じて、律語界を見るに、これはた玆に特筆するに足

内に感想する所は進歩したれど外に發表する技倆を欠けり

るべきものなし、舊律語は舊の如く、新律語(韻文)は氣息奄々たり。詩形につきての評論は、其の社會に行はれたりき、新形式の應用は、こゝかしこに行はれたりき、但し、全體の意氣込より云へば、新律語界は昨年中に一頓挫したり、と評すべし、新律語の成らん日尚遼遠なるが如し。

割合に盛なりしものは飜譯なり、さはれ、これとても、一方よりいへば、創作の幕間をつなぎたるものにして、又一方よりいへば、創作の下稽古たるに外ならざれば、特に記すべきはいと稀なり、即ち指を不知庵主人の『罪と罰』、鷗外漁史の『即興詩人』、など一二に屈せば、他は必ずしもいふに足らざるべし、尤も、飜譯の體裁は、概して進歩せりと評すべし。

上來の論、昨年の文界を概評し得て大なる謬なくば、内に感ずる所(Impression)はやゝ進歩したれど、之れを外に發する事(Expression)は比較的に欠乏したりしなり、就中、詩的表白は殆ど見るに足るべきものなかりしなり。　昨年に於ける文學社會は主觀に關する詩想、換言すれば、抒情的詩想には富みたれども、客觀に關する詩想、換言すれば、叙事詩并びに劇詩的詩想は欠乏せり。　更に詳言すれば、自我の感を先にする抒情詩的情熱はやゝ高まりたりしが、非我を先にする小說、劇詩的想像は尚甚だ振はざりき。　こは吾人が屢〻もいひし如く、個人主義の太氣の然らしむ

る所なるべし。

抒情詩的傾向

思ふに、炯眼の讀者は夙に已に察せしならん、彼の宗教世界の動搖、哲學世界の膨脹、批判世界の情熱の如き、いづれか主觀の詩即ち抒情詩の發達を促す徵候にあらざらん、今や進步せる思想界は、此の動搖不定なる周圍の中に坐して各自その理想を描出せんとし、又之れを分明に發揮せんと努むる傾向あり。　よしやその理想は未だ明瑩ならざるにもせよ、兎に角に、彼等の心の、從來のと異なりたる或感慨と或觀相とに刺戟せられたるは、昨年中に現れたりし評論、漫錄、偶感などに照らしても著し。　彼等の經驗に乏しきや、客觀的に宇宙、人間を知るの力なし、否、彼等の年壯にして氣銳なるや、徐に經驗して歸納的、若しくは直覺的に人生を感得理解する能はざるなり。　彼等は一月、もしくは一年の靜思瞑想(又時としては一二週間の讀書の結果)によりて直に天地の靈妙を會得せんとする也。

十九世紀の思潮

案ずるに、勝劣こそはあれ、斯かる現象は、實に十九世紀の思想界に貫通するものゝ如し、暫く英のヰクトリア朝の現代文學を檢せんか、テニスン、ブラウニング夫妻、クロウ、アーノルド、ロセッチ、モオリス、スヰンバルン、メレヂス等、おの〳〵其の性情と才能とを異にせるものから、大體の上よりいへば、總じて抒情的方面に向かはざるはなし。　シヤープがテニソンの劇詩を評せるや曰へらく、

轉じて彼れの劇詩を見て、第一に驚くは、其の中の思想、感情の殆ど動作を壓倒せるとなり。現代の如き雜駁の論說、科學的發明、政治社交的進步の期に生まれたればこそ、彼れはかくの如く時勢の兒とはなりたれ、彼れの特質は思想、定見、并びに感情を現ずるにあり、隨うて、其作も抒情詩とせられたる時に最も妙なり、而して連絡せる劇詩的動作、活動を畫くに拙なり。

廿七年以後の文壇は主觀詩人の舞臺ならん

と、げに十九世紀の如き思索時代には、實驗の人よりはむしろ考察の人、廣く世情を味へる人よりは、むしろ人情を推測するの人、自然的詩人よりはむしろ理想的詩人、一言をもて蔽へば、客觀詩人よりはむしろ主觀詩人を出ださんの傾あり。　夫れ大詩人の直觀は古(いにしへ)より科學、哲學の考察に先ちて當代の理想を表白し、黑雲漠々の中に未來の進路を示す者なり、明治の社會はた此の種の詩人を要す。　新代國民の幾分が暗にバイロン、シエレー、ヲオヅヲオス、等の革命的抒情詩家を觀迎せんとする、蓋し、此氣運の然らしむる所ならん。　吾人が察する所誤らずば、本年以後の文壇は恐らく主觀詩人の舞臺ならん、たとへ其の形式は叙事詩、脚本、小說、等、總て客觀たるべきものゝ形式を帶びて來たらんも、其の精神に於ては、勢ひ主觀詩(抒情詩)ならざるを得ざるべし、一切の周圍の勢力がひとへに主觀詩の素と養成しつゝあればなり。　吾人が昨年の經驗より得たる結論は實にかくの如し、記して世の識者に質す。

時文二派

文章の體形漸く整理せんとす

維新の當座十餘年は、何事も不秩序と紊亂とを極めたりしが、今や何事も整頓の緒に着かんとし、時文の如きも、早晩、或一定の法格を現せんとす。　昨日までは、千萬の思想、千萬の文法、とも評すべかりしほどに、みだりがはしかりし時文家の千差萬別も、けふは、尠くとも大體の上よりいへば、和漢雅俗折衷派と和漢洋雅俗折衷派との二大派に分かれんとす。前なる和漢雅俗折衷派は、和漢雅俗の文藻を融會折衷して、そを我が在來の語法によりて明治の文章となさまくする者にて、こを正當に名稱せば、古文法派とも呼ぶべき者なり。　後なる和漢洋雅俗折衷派は更に一層自由なるものなり、此の派は常に、新しき思想は新しき語法を要す、と唱へて、或程度までは、在來の文格をば破るべし、と主張す、即ち新文法派とも假稱すべき者なり。　固より此の二派を細別すれば、尚幾小派にも分かるべけれど、要するに、古文法派といふ總稱の下に攝せらるゝは、尠くとも係結、自他の別、テニヲハ、動詞の時并びに活用などは、在來の外に出でざらんを主張し、又第二派(新文法派)は此等の範圍までも、改革を及ぼさんと願へり。

明に表面にこそ見えざれど、此の二派の闘爭は今隱然として行はる。明治將來の文格と文致とは、此の闘爭の結果次第によりて定まるべき者なれば、豫め此の二派の特質を考へ置くこと、無要なる業にあらじ、但し件の二派は、之れを相對峙せる二大團体として見れば、おの〳〵定確なる主義、議論あるにあらず、就中、新文法派の如きは、其の團體中の個人が、思ひ〳〵に各自の定見を主張せるに過ぎざれば、截然二派の說を分別して、古文法派の議論は云々、新文法派の主義は云云、といはんこと、恐らくは事實にかなはざるべし、然れども總じて大體の傾向を論せんとするに當たりては、若干の揣摩と概括とを要すると必然の勢なれば、予は管々しく諸種の枝葉論を擧ぐることを爲さで、むしろ二派の爲に彼等の思ひ〳〵に主張する所を總括して、尙之れに予が卑見をも加へ、二派の說を代表せしめ、相對照して、少年諸子が作文の參考に供せんと欲す。予の推定概括せる所によれば、所謂古文法派の議論は、おほむね左の如し。

(一)世の推移すると共に、語義の變遷を生じ、若しくは新しき熟字、造語、等の起こるは止むを得ざる所なれども、文法、語格は國語の生命なり、之れを等閑にし、若しくはほしいまゝにせんは、國語を亡滅するの媒なり。

(二)漢文の直譯、洋文の直譯、など稱するものは、いづれも我が國語法に背けるものなり、宜しく之れを矯正すべし。

(三)如何なる新しき思想、情感といふとも、古文法をもて表白しがたき謂(いはれ)なし、世の新文法を唱ふる者は古文法と古文章とを混同す。げにや古文章をもて明治の議論を物せんとせば難かるべし、然れども、自在に和漢雅俗の新用語、新文藻を用ふることを許す以上は、單に係結、自他の別、動詞、テニヲハを正當に用ふるばかりは、何難からん、否、むしろ其の思想の表白をして、一層便宜ならしむべきの理なり、何となれば彼等は皆我が國語の必要上より生じたる最便宜なる辭品なればなり。

(四)新文法派は假名遣ひの差別を煩瑣なりとて厭へど、假名遣ひの差別は、猶泰西の綴字法の差別の如し、若し綴字法をほしいまゝにせば、同字面にして義を異にせる文字夥しく增加し、却りて誤解を釀さんが如く、假名の亂用もまた、一方に於いては、動詞活用法の礎を崩し、一方に於いては、同字異義の語を增加すべし。

新文法派

新文法派は曰はく。

(一)新しき思想は新しき文法を要す、所謂古文法は專門の文法家すら誤用すること間〻あるほどに廢れたるを、今更いにしへに遡りて、わづら

はしくも之れを復興し、普通日用の文に應用するの要やある。動詞の活用にもせよ、テニヲハの用ひかたにもせよ、むしろ今人の多數が用ふるものを正格とし、之れによりてこそ新文法は定むべけれ。よし廢れたるを正格なりとすとも、廢れたるは即ち死したるなり、當代の需要に適せざるの證なり。

(二)國の東西を問はず、概していへば、文法、語格といふものは、漸次化醇して成れるものなり、いづこの國の文法も、概して後世に至るに隨うて整頓せることと事實なり。例へば、方今行はるゝ英語の如きも、上代のに比ぶれば、我が國に謂ふテニヲハの如きものまで、幾分か異なれり、即ち上代の語法ははるかに今のよりも亂雜なりしを、次第に後世に至りて整理せしなり。凡そ法格といふものは、經驗の結果に外ならねば、又其の時々の必要に應じて出來すべきものなれば、所詮、後世に出來したるをこそ一層圓滿と見做すべきなれ。我が國の如く長永(とこしなへ)に過去の法格を繼承せる例はいと珍し。こは、一は、何事も萬世一系の尊き國柄にもよるなるべく、又、一には、言文二途の國の特質ならめど、言と文と、雅と俗と、今はやうやう接近し來たりて、二者の一致の要せらるゝ以上は、いつまでか古文法に拘々として、自由表白の障碍を作るべき。今はありのま

新文法を唱ふる者に二種あり

丶なる言葉をすら文章語に代用して、國文を擧げて言文一致體たらしめんとするさへあるに、多少の新格をだに拒まんとするは、保守の至極ならずや。

(三)古文法派の旨に從へば、今人は二重の勞力をせざるを得ず。　二重の勞力とは、思想を言葉としたる上に、更に之れを古文法に叶へる文章となすことなり。　俗に言文一致の國と謂ふ泰西の諸文士といふとも、俗談平語のまゝを印刷して文とするは稀なるべし、蓋し、彼等の文章も、其の語格ほどは俗談平語と同じけれど、詞藻、結搆、等は、明に言葉のまゝにはあらず、即ち俗談を醇化したるものなり。　されば言文一致といふ國柄にても、文を作るは一大勞力なり。　然るに我が國にては(若し古文法家の旨に隨はば)更に件の大勞力の上に、また別の勞力を行はざるべからず、何ぞや、今の文法にて物したる文章を、更に古文法によりて修正する事なり。　是れ豈に二重の勞力にして餘計の業(わざ)ならずや。

二派の論ずる所決してかばかりに止まらねど、主要の點は上に擧げたるに外ならずと信ず。　さて謂ふ所の新文法に、おのづから二派の別あり、甲派を假稱して無意識派といふべく、乙派を假稱して有意識派といふべし。　無意識派とは、おのれ古文法の何たるをよくも知らねど、新思

想は新文法を要す、といふ理論の、其の腦に透りたるが爲に、はじめより破格を主張し、常にほしいまゝに文を作り、實は如何ばかり正格を破りつゝあるかを意識せざるものなり。　即ち我れは新文法を作らんとす、と唱ふるものから、自家の文法にも一定の規律なく、きのふは漢文直譯により、けふは歐文の直譯を用ひ、きのふはタリ、ヌ、ツなどを過去に用ひ、けふは同じ語を半過去、若しくは現在にも用ふるなど、殆ど一定の見解なし。　乙派の有意識派は然らず、これは在來の文法、語格を一わたりは心得たり、且新文法を興さんとせば、兎に角一種の法規を定めざるべからず、といふ也。　彼等は俗談平語の間に行はるゝ語格と、久しく慣用し來たれる語法とを參酌して、以て其の間に一定の規律を發見し、若しくは制定し、而して新語格を定めんとするなり。　彼等はかくして得たる新語格と古文法とを對照し、前者の後者よりも便宜なるを認め、さて新文法を唱へんとするなり。　事の順序よりいへば、有意識派ははるかに無意識派よりも穩當なるものなり、否、無意識派の如きは、あまりに無謀の改革家にして、殆ど論ずるにも足らざるべし。

さらば古文法派と新文法派と、いづれが正當なるといはんに、此の判斷は人々同じからざるべし、その故は、新文法派の改革(破格)の程度如何に

語法と修辭法とを混同する者多し

よりて、大體は彼の派に與したる者も、或は二の足を踏むべければなり。さりとて些(ちと)も法格の變化を許さず、といふ古文法派の説も偏したり、予はむしろ改革の程度次第によりて、有意識の新文法派に與せんとす。

案ずるに、修辭學にいふ「國語の純正」purity and propriety といふ事ほどは、苟も國文を重ずる者の守らざるべからざる事なるべし、是れ修辭上に於ける必要なる第一歩なり。然るに我が國には、文法、語法の書の普通に行はるゝやうになりしすら、やうやう近年の事なれば、眞の修辭書といふべきものは、いまだ一卷だに行はれず、とも評すべし、かるが故にをしなべていへば、教ふる師も教へらるゝ人も、屢ゝ語法と修辭法とを混同し、日常の通信文のやうなる文章を物するにも、小説、歴史、議論、などいふむづかしきを物するにも、ひとり語法をだに心得たらば足れるやうに思ひ、若しくは語格、文法だに正しくば、其の文はなべてめでたき者のやうに思ひ、あるは所謂文法語格をだに知れば、作文の能事終はれりと心得、隨うて文章の妍媸巧拙を、ひとへに語法に叶へると叶はざるとによりて決せんとすめり、こは前にいへる古文法派の社會にありがちの弊なり。さて又新文法派の社會にも同じ源より流れいでたる弊習あり、殊に無意識の破格家の社會に多し、そは修辭の第一歩なる「國語の純

正」といふ事を知らざるに原因す。彼等の鵜の如き蕪文を作りて得々たるは、ひとへに修辭法に昏き爲のみ。彼等は如何なる文章を作るにも「國語の純正」といふ事ほどは、尠くとも或程度までは、守るべき必要あるを知らざるなり、全く「純正」を缺きたらんは、國文といふべからざるものたるを知らざるなり。左に「純正」といふ事を表にして少年諸子の參考に供し、兼ねては新文法派の方向の多少この表に叶へりや否やをもトし、若し新文法派にして、悉く此の表の旨に背かば、予はむしろ古文法派に與すべしといはんとす。

純正國文
- 語
  - (第一)國語
    - 地方語を忌む
    - 外國語を忌む
  - (第二)現に用ひられたる語
    - 廢語を忌む
    - 濫造語を忌む
  - (第三)名家の慣用せる語
    - 俚語を忌む
    - 訛語濫用語等を忌む
- 格
  - 妥當なるを要す
    - 外國の語格を忌む
    - 一地方若しくは俗間にのみ行はるゝ語格を忌む
    - 濫造の語格を忌む
    - 廢語格を忌む
    - 前例なき用語法を忌む
  - 精確なるを要す
    - 時の曖昧を忌む
    - 自他の曖昧を忌む
    - テニヲハのまぎらはしきを忌む
    - 係結のまぎらはしきを忌む

右のうち、地方語とは奥、羽、薩、長、等の地方にのみ行はるゝ俗言をいふ。雅俗折衷の最も自由なる文章とても、滑稽詼謔の文にあらざる限は、かゝる方言をば用ふるを許さず、若し必要ありて用ひんとせば、「薩州の方言に謂ふ云々」などことわるべきなり。　外國語の如きもまた然り、漢語の如きは最早我が國語と化したるものなれば、自由に使用して差支なけれど、獨乙語、英語の如きは、必要なる場合の外は、妄に用ふべからず、即ち譯語の得がたき場合か、若しくは原語を用ふるかたはるかに文義を明瞭、又は勁拔にする趣ある時の外は用ふべからず。

廢語とは古代の語の今は用ひられざるものをいふ、トイフをチフといひトフといふが如き是れなり。　濫造語とは「陰險猛惡」といふべきを「陰猛」と熟し、「優美艶麗」といふべきを「優麗」と熟するが如き、又は「眉間」といふ好熟語あるに、新に「眼間」と造語し、「叱咤」といふ成語あるに新に「叱罵」と造語するが如き、若しくは「試みたり」「掛けたり」と舊の如く活かせて何の差支もなかるべきに、新に「試めり」「掛けり」など活かせ、其の他ほしいまゝに在來の語を伸縮するが如きをいふ。

俚語とは俗間にのみ行はるゝ言葉をいふ、「ベラボウ」「馬鹿〳〵し」などいふ言葉は、多少滑稽詼謔の旨を含みたる場合の外は、ダシヌケには用ひ

がたし。　まして最近の出來に係る俚言は、片假名を用ふるか、又は「俗に謂ふ」とか「所謂」とかいふコトワリを附する必要あるべし。　訛語とは「細謹」とあるべきを「細瑾」と誤用せるが如きをいひ、濫用語とは「ものから」を「ものゆゑに」の意に、「なか〳〵に」を「頗る」の意に、雅文中に用ふるなど。

語格の方は說明を附するまでもなし、其のうち前例なき用語法とは「鳥一羽」とあるべきを「鳥一頭」などいひ「予は鷄卵を食ひき」とあるべきを「鷄卵は予に喰はれき」などいふが如きを指す。

以上はすべて嚴正なる文章の上に就きていへるなれば、滑稽詼謔の文などは、概して例外なり、と知るべし。　案ずるに、國文の純正を重ずるは、文義の曖昧ならざらんことを思ふが故なれば、文義だに明に傳へらるべくば、多少の改革は拒むべきにあらじ、例へば、濫造語の忌むべきは勿論ながら、必要の已に生じたる限は、「せさせ」とあるべきを「させ」と縮し、「確にす」とあるべきを「たしかめ」、「高くす」とあるべきを「高め」など物するも差支なかるべくや。　或は動詞の時の如きも、一定の法規の設け得られん限は、多少の新格を立つるもよかるべくや、これらは皆改革の程度に關する問題なり。　此の事に關して、多少卑見なきにもあらねど、今仔細にいふべき餘地なし、悉しくは他日を俟ちて更に論ぜん、こゝには只今の文

法家のいひのゝじることは、概して修辭法の第一段たるに過ぎざる由を説きわくるのみ。（二十七年一月稿）

讀者評判記

「讀者評判記」は牛歩生擔當の主題にして、奇想天來的趣向油然として沸きいづべき約束なりしが、彼れ近ごろ感ずる所ありて、頻に時事の非なるを慨して、暫く其の口をつぐみ、沈思瞑想を事とせるゆゑ、豫約の評判記紺屋のあさッてと共に遷延し、終に前項にしるせるが如き催促的小言の一原素となり了んぬ。『早稻田文學』の豫約は、概してくはせものと譏られんこと、何ぼう心外の至なれば、ほんのイヒワケの身代はりに過ぎざれど、こゝに思ひついたる讀者評判、上下二種を掲ぐ、餘は牛歩が持病全快の後を俟ちたまへ、としかいふ。

（上）澁面讀者

顏色青白く、頰こけ、目小さく、總躰に痩せたるかた、行住しとかやにして重くるしく、低聲に物いひ、莞爾として笑む。聲をあげて笑ふこと殆ど稀なり。此の人、五分間つきあへば君子の如く、三十分談話すればキザナ人、一時間交はれば世間知らずの如く、一月交はれば愛すべき人、一年交はれば純良の人たるを示す。彼れは道、眞理、德、良心、仁、義、等の文字を

讀むことを好む、彼れは嗚呼、噫、悵然、慨然、等の文字を讀むことを好む、彼れは文章は漢文躰に雅文の敬語の尠からず加はれるを喜ぶ。彼れは滑稽戲謔を忌むこと蛇蝎の如し、而して其の寓意若しくは本意の何の邊にあるかを顧みざるなり。彼れは漢文句調の森嚴は、常に其の作家の謹厚なるを代表す、と信じ、敬語の澤山なるは其の人の禮に厚き證據なり、と信ず。彼れの說によれば、女髮結は最も禮儀厚き淑女なり、何となれば、彼の女は「遊ばす」言葉を用ふると最も多ければなり。彼れは人は屢〻借衣(かりぎ)する動物たるとを悟らず、中村芝翫も金ピカの衣裳を被れば松永大膳の如く見え、團十郎の長面巨眼も、女裝すれば、八重桐然たるの道理を知らず、只管衣裳によりて其の爲人を判斷す。彼れは言葉の穢きをば心事の穢きよりも穢し、とし、口吻の野卑なるをば肚の底の野卑なるよりも野卑なり、とし、犬を呼ぶにも、一切衆生平等の敎に鑑み、犬と呼び附にせずして Sir dog 又は「犬どの」と呼ばんとし、肥料溜の修復を依賴する土方への口上、譬へば宣告文を讀むが如し。彼れは人によりて法を說くを八方美人の策略と卑しみ、且微塵裡に大宇宙あるを信じて針を重ずると鐵の棒の如し。彼れは以爲へらく、突然藪蚊來たりて我れを刺す、無禮至極の振舞なり、世人動もすれば大人(おとな)ぶり、手もて蚊を

おッぱらッて足れりとす、此れ藪蚊をして無禮を增長せしむる所以也、宜しくあくまでも追求して我れを刺しゝ奴を天誅に行ふべし、と、すなはち蹶起して藪蚊を追ひつめ、牛刀を揮ッて彼れが長脚を斷截り、更に其の臟腑をつまみだしてきッとなり、宛然一ツ屋の老婆を氣取り、我がミルトン的眞摯を見ずや、といふ。 彼れは玉蜀黍の燒きて食ふべく、南瓜の煮て食ふべきを思はず、煮て食ふことの本道なるを固信し、强ひて玉蜀黍を煮爛らし「嗚呼これ眞摯の料理」と自賛す。 彼れ苦學十年、尙いまだ釋し得ざる大疑問あり、曰はく、造化翁何の爲にする所あッてか笑。といふ能力を人に附與せる。

（下） 自墮落讀者

天を仰ぎ見ることあれども、雲より上を想像したることなく、足は地を離れざれども、曾て此の地の滅却すべき日を懸念したることなし。 彼れは只現在あるを知るのみ、過去とは單に自家に關係なき生まれぬ先と心得、未來とは我れに損得なき死んだ後と思惟す。 彼れの書を讀むや、常に横になる、以爲へらく、書はすべて消閑、排悶の具なるのみ、と。 彼れは漢文の七むづかしきを嫌ひ、雅文の耳慣れぬをイヤがる。 理窟の長いのは固とより禁物、的の字盡くしは尙禁物、偶〻有名なる學說を讀む

も、冒頭二三頁と結論二三頁を瞥見して足れりとす。　彼れは頗る滑稽を愛す、然れども滑稽を戲謔として愛するなり。　彼れらは笑聲の裏に痛哭の聲あるを知らず、merry masks の底に sad faces あるを知らず、彼れは寓意などいふ面倒なものを探ることを厭ふ。　彼れは只茶かして一生を送らんと欲す、偶〻イガミかゝる者ある時は、茶かし、ごまかし、且ひやかす、是れ彼れの唯一の防禦器なり。　彼等は以爲へらく、衣食住に窮したる時の外は、人には心痛といふものなし、涙といふものは形體上の苦痛を表するの具のみ、精神的苦痛の標章としては、ひとり貧人にのみ要用なり、と。　彼れは哲學を譏りて雲を攫まんとする學と呼び、哲學の哲の字は、宜しく手邊に雲といふ字を作りて、其の音をウンとし「ウン學」と稱すべし、といひ、化學は、讀んで字の如く、バケ學と解して歸天齋が專有とすべし、と主張し、或は審美學の美の字に牽かれて二三の審美論を走讀し、其の理窟詰に辟易して大に失望し、名實何ぞ相異なる、と憤り、或は長き論の一端をのぞいて、其の枝葉の數句を誤解し、且之れを濫引してトンダ迷惑を原論者に與ふ。　彼れは近世の學說によりて、小說の價値の揚がりたるに利し、頻にくだらもなき拙作を著し、小子は詩人なり、美文家なり、と誇稱し、小說ならざるものを不美文と罵り、文學の本義をも

定めずして純不純の別を論じ、所の、載純文學以外にいづる雜誌を妄に文學の外道と嘲る。まことに史傳は美文ならじ、然れども小どもだましの彩色繪と名筆の書いたる書簡といづれ。後者は實用、前者は美術、而も吾人は後者を取ッてこれを一室の額となさんとす。而して自墮落讀者はえかりと思はず、彼等は剝製の鳥獸を求めてこれを其の机邊に安置し、且歎賞して曰はく「嗚呼寫實の妙こゝに至るか、此の孔雀の羽の何ぞ美なる」と。彼等もまた滋面讀者にひとしく其の羽のカブセものたるを察せざるなり。

其の二

輕斷讀者

さら〳〵と讀み流す者あり、くづり〳〵拾ひ讀みの如く讀むものあり、えかれども其の批判の輕忽なるは一なり。彼の用字の畫多きと字音のゴッつけるとを以て、其の文を嚴格なり、と判定し、行文のグニャリとしてぬらりとしたるを感じて、此の文優美なり、といふの徒、はた此の派の血つゞきなるべし。此の派の讀者の詩文を是非するや、おほむね其の皮相を見て其の骨髓を察せず、例へば、こゝに一論文あり、其の前半は

古人の說を祖述し、其の後半は創見なり、とせよ、輕斷讀者は前半を讀み了へずして卷を抛ち、嘲つて曰はく「これ受賣のみ」と。又こゝに一文章あり、或最近の一書を本とし、別に諸書を參考して、或學理を畧述せるものとせよ、輕斷讀者は其の大體の組立の頗る前に謂ふ最近書に似たるを感じ、輕忽にも世間に向かつて公言して曰はく「彼の文はかやう〳〵の書の直譯のみ」と。嗚呼、彼れ果して此れと彼れとを對照して玄かいへるか。否々。あはれ苦心の手續を明言せざれば、彼れら輕斷者流は苦心の實を察し得ざるか、直譯と纂譯との區別殆ど一瞥して明なるを知らずや。さもあらばあれ、所謂輕斷讀者は、實價を計り見ることを好まず、虛浮の噂を標準とすることを好む、彼れは經營慘憺の作と聽いてツマラヌ作にも感心し、聞きなれぬ作家の名前を見ては、常に其の文を讀むことをためらふ。彼等若しサビズキとならば、折紙のついたる贋物を十襲し、由緒を聽かぬうちは、先祖傳來の正宗をも、庖刀の代はりに用ふるならん。彼等は西鶴、近松の稱美せらるゝを耳にしては、あらゆる古本屋をあさり歩きて、誰れも買はぬ西鶴、近松が劣作を買ひ集め、我れ珍本に富めり、と自慢し、シエークスピアの世界一なるを聞きかぢりては、彼れが劣作の一篇を愛讀し、其の最も拙き點を記臆し、喋々他に對ひて沙

翁の妙を說く。其の甚しきに至りては、トントン讀んでも見ずして詩文を批判す、曰はく彼れは云々の男なり、彼れよく妙詩を成し得んや、曰はく彼れは道樂ものなりき、今眞摯めかす、實情ならんや、曰はく彼れは哲學者なり、いかで美文を解せんや、おほむね此の類なり。彼れは阿蒙はいつまでも阿蒙なり、と思ひ、禿（かむろ）はいつまでも禿（かむろ）なるべし、と思ふ。あはれ彼れの隣家にはチヨチ〱あはゝの阿孃無かりしか、彼れは其の阿孃の大きうなりて、ねびまさりて、白粉（おしろい）つけて、高島田に結びて、幾たびも帶を撫するに至りしを見ざりしか。若しくは蠶の化して蝶となり、飛んでいッたを見ざりしか。所詮、彼れは人間を頑石視するケダ物なり、頑石だに多少消長する由を知らざるなり。換言すれば、彼れは近視眼の權化なり、されば風月堂の菓子箱を撫でゝ見て批斷すらく「結構の桐の板かな、西洋の桐と見えて日本のにまして輕きこと數等」と、かくの如きの類なり。

鼻先讀者

鼻先讀者は輕斷讀者の從兄弟なり、後者と異なるところは單に鼻の作用と目の作用との相違にあり。しかれども此の區別十分科學的とはいひがたし。今は只俗說に從ふのみ。蓋し、鼻先讀者は輕斷讀者の一

層偏僻なるものなり、彼れは總じて自家の好尙に適はざるものを抛擲す。 例へば、シャボン臭きを嫌ふものあり、チョンマゲの元結くささを嫌ふものあり、理窟臭きを嫌ふものあり、道樂くささを嫌ふものあり、佛臭き、耶蘇臭き、女臭き、酒臭き、それ〴〵に受持あり。 彼れは頭(あたま)から其のニホヒを嫌ふなり、其の物の本質を窺ふに遑あらず。 彼れの多數は俗に謂ふタベズ嫌ひなり、其の甚しきに至りては、ニホハヌをもニホフと思ふなり。 彼れの或者は日の入を見てシャボン臭し、といふ、何故かと問へば、日の入るは西の方、西の方は西洋なればなり、これによつて之れを觀れば彼れ貴族の奥さまを見て風を引くべし、縉紳の奥さまは北の方、北の方は寒風の源なればなり。 彼れの或者は文章に二三の破格あるを見るや、忽ち非國文臭しとて全篇の旨意を擧げて擲つなり、又或者は片假名、横文字を見るや否や、其の下に解釋若しくは譯語あるを搜索するに遑あらずして、横文字臭し、とて擲つなり。 或者は「アラあなた」と讀みさして顰縮し「此の猥褻卑野の文字」と罵り、或は「アヽ耶蘇基督」とよみさして「此の崇夷的外道文字」と憤る。 彼れは到底研究の爲に(即ち虛心的、科學的に)文章を咀嚼する能はざるなり、否、彼れは常に身づくろひして、武者ぶるひして、劍を按して書を讀むなり、彼れは豫め敵味方の紋

じるしを見定めて讀みにかゝるなり。彼れは名けて演繹的讀者と稱すべし、先天的に原則を假定して讀めばなり。要するに、彼れの目と鼻とは、一定の色と臭ひとの外は嗅ぐ能はず、其の色と臭ひとの外を忌むこと、箔屋の風を忌み、自墮落伜の片意地爺を忌むがごとし。彼れの先達の一人いはく「某が物したる文章中に基佛兩敎の語あり、佛を後にして基を先にす其の耶蘇臭味ふべからず」と、又曰はく「某は好んで十九世紀の字面を用ふ、崇外の臭氣堪へがたし」と。按ずるに、鼻先讀者は最も想像力に富めるものなり、彼の蒲燒屋を想像して總菜を儉約し、麩苦茶のお婆アさんに行きあうて、梅干を想ひだし、口の渇きを忘れし男は、多分彼れの血續きなるべし。

續小羊漫言

隨筆の種類

一概に隨筆漫錄といへるに、おのづから差別あり、文章のいみじく妙なるは、散文の小抒情詩と見るべく、識見の卓拔なるは、大議論の片鱗とも見るべし、清少納言の『枕艸紙』、兼好法師の『徒然艸』のたぐひなり。これらは作家の爲人、性癖、情操を知るのたよりなれば、讀みて又別のおかし

隨筆の價は筆致にあらずして筆者にあり

みあり。又博覽洽讀の餘に成れるは、珍しき知識の緒(いとぐち)に富めり、是れまた用無きにあらず、儒者、國學者の隨筆は、概して此種に屬す。又多年の見聞を漫錄せるあり、これには記傳の補遺たるべきもあれば、奇聞異事の叢たるもあり、時としては好史料となる。其の他隨筆の種類は多(さは)なれど、尠くとも古き世のは、人に見せんとての筆ずさみならねば、筆づかひおのづから自由にて、措辭も時としてはみだりがはしく、記事大抵秩序なけれど、さら〳〵と書き流したるに、得もいはぬ趣致あり、人に見しよとて紅粉(べにおしろい)を施したる、賣女のやうなる作にははるかましたり。さもあれ隨筆といふものばかり、學び易くして、學びがたきはなし、思ふまゝを物するなれば、小學の童兒もえ學ぶべけれど、隨筆としての價(あたひ)は筆にあらずして人にあれば、文章いかばかりめでたきも、其の人數(かず)ならずば誰れかは顧ん。經驗、學植、識見、文章、加ふるに名望ありて、はじめて隨筆は物すべきものか。我々謭劣の徒が、よき人の顰に傚ひて、ふと思ひいづるまゝを、五行六行ほど走りがきすとも、物笑のほか何にかならん。我れは珍しと思ひて錄せし事も、ニウカッスルへもてゆく石炭の、いよいよ多うしていよ〳〵要なし。或は年ごろ深く感じ、これこそは自家の創見と、咨嗟詠嘆し、泣きみ笑ひみ、衷情を吐きたらんとも、心おちゐて

後によく思へば、その感慨さへも、讀書、若しくは他人より得たるものゝ二番煎じにて、藥にも毒にもならぬことあり。よしさなくとも、おのがいと狹き經驗の感慨たるにとゞまり、我れに同じき若輩の注意同感を牽かんのみ。おのれはじめて象を見て、象はかしこき巨獸なりといふとも、上野の獸苑をだに見ぬものゝ外、誰れかこれを讀まんとせん。我れひとり生松魚にあてられたらん時、彼の魚は鰒に似て毒ありといはんも、應ずる者なかるべし。これらの例は比喩なれど、今の新聞紙、雜誌には、かゝるたぐひまゝ見えたり。思ふに、かゝる隨筆家は、近ごろそこゝより飜刻せらし、古人の隨筆を繙き見て、かゝる滅裂の感想をだに、今人はもてはやし、飜刻するか、かばかりのこと、ゑやは我れも、と思ひあがり、餘白ふさげに物するにやあらん。げに古人の隨筆には、淺ましきまでおさなきがあり、文章のよしあしはしばらく措く、識見品くだりて、今人の目もて見れば、如何にしてかゝる人が、時の俊れものと見なされけん、とかたはらいたく思はるゝ、間々あり。されど此れは時勢のわざなり、今の知をもて古を評せば、アダムスミスも中學の少年に笑はるべく、大ニウトンも物理學校の初級生にそしらるべし。よし又古の隨筆家の言、其の時勢にだに珍しからぬがあらんとも、其の今日まで傳はれ

世間はあまき母親の如し、屢〻其の寵兒を濫賞す

虛名もまた多少の功を表す

るは、彼れらが其の世間、又は學問に於ける功績の餘光なり、例へば徂來の『なるべし』の如き、錄したることも庸常の語なり、片々たる斷章零句、もとより事々しくもてはやすべきものならねど、大儒が講學の餘唾と思へばこそ、其の面影もほの見えて、世人の尙得棄てぬなれ。さすれば『なるべし』の値は、其の書にあらずして、其の著者にあり、彼れが功績と彼れが德となくして、此の書に勝れるを物せんとも、竟に世に傳はらざるべし。夫れ名によりて作を取捨するは陋習にあなれど、退いて考ふれば、虛名も尙いくらかの功績の影なり、悉く功績無きもの、未だ曾て名ありしことなし。世俗は甘き母の如し、屢〻其の寵兒を濫賞す。然れども、絕えて功無きを賞する能はず、蓋し、理義といふ嚴父の靈、隱然と賞罰を督すればなり、すなはち虛名も尙多少の功を表す、ましてや名の壽きをや。功なるかな〳〵、功の德や偉なり、といふべし。言を立つるいかにめでたきも、功伴はざれば、傳はらず。そも〳〵功の果は、屢〻有形にして、徒言は常に無形なり、具にいへば、世間の事業に影響するは功にして、既に功を立てゝ後に言はゞ、其の言もまた功となるべし、曾て的中せし强弓の絃音の、よく敵兵を怖れしめんが如し。然るに前に些功無くして、たゞいたづらに立言せんか、猶火器の德を知らざる敵にむかうて、試に空砲

を發たんが如し、其の用いかに怖るべしといふとも、東風の馬耳を拂はんがごとし。　虚名はまことに卑しむべしと雖も、おのれ些の功もなくて、強ちに他の虚名を刺らば、恐らくは嫉妬と譏らるべし、虚名も、尚些功の影なればなり。　古人曰はく、大上は德を立て、其の次は功を立て、其の次は言を立つ、と。　然れども德なければ功を立つる難く、功無ければ言を立つる難し、言を立つるもまた易からざるかな。　これによりて思へば、古人が庸常なる隨筆の、今尙世の人にもてはやさるゝは、孰れも其の功德の餘光なるべし、我々德と功とはさておき、學植も經驗も、人に異なることなくて、隨筆漫錄の人眞似は、鵜を學びて水に溺るといふ、阿房鳥にだに笑はれなん。　すまじきものは隨筆なりけり。

といふ口の下に「續小羊漫言」と題したるはどうぢや、言行相違致し候といふ招牌か、と詰る人あらば、イヤ〳〵これはよい人の眞似して、ほんの謙遜の外題なり、まことは大の不漫言、沈潜反覆の結果、隨感隨艸とは以ての外、と當座ばかりはいひのがれん、かくても尙追窮する剛敵あらば、はかる〳〵と思ひしに、地金のおのぼれ、見あらはされしか、借上の隨筆と譏らば譏れ、おれは知らぬ、此の雜誌の主筆記者、柳井絅齋どのに賴まれた、張本はあちら〳〵、といひぬけて、影をかくすべし。

陳說と奇論

陳腐は、何につけても、人の嫌ふ所なり。議論も陳きは人顧ず、詞句も爛熟といへば「讀まれぬ」の替名なり。此の故に、人は皆新しきを競ひ、奇しきをむねとす、創新といふ二字は、文士に與ふべき最上の贊評なり、鬼の首取り、月桂樹の冠いたゞきたらん時の心も、此の二字得たらん嬉しさには如かざるべし。都人の田舍わたらひして、太古敦厚のすがたをしのび、樵夫、畑つくりの首府に來て、繁華のくらしを羨むなど、孰れか好奇の情ならざる。服食も新しきを佳し、とし、流行の世に窮まらざる、皆同じ情の所爲なるべし。されば才子は爭うて奇說を立て、奇行を追ひ、奇文を屬し、奇語を造る、夫が蒿じては、僻論險語、或は聖賢を飜弄し、或は名著を貶誣し、ひとへに庸常に似んことを恐る。其の弊や鹿を馬と名け、馬を馬ならず、といふばかりかは、奇に渇するの極、善惡混流の世界を擧げて、ひとへに害惡の穢土と倣し、化醇すべき人間を指して、必然墮落すべき動物とし、若し能ふべくば、あらゆる名目を一變し、あらゆる學說を顚覆し、鼻を口と名け、脚を首とも呼ばまくす。夫れ個人は物いへども、人間には口なし、人間は物いふとも、宇宙は竟に物言ふことなし。長右衞門に向かうて、汝はお半なり、といはば、彼れ駭してわれは男なり、と辨せ

奇論僻説ばかり立て易きはなし

ん、ましてやお牛に迫りて、嫁入しや、といはんに、豈に否と抗はざらんや。浩蕩たる宇宙と人間とは然らず、穢土と呼べど應へず、是か非か、と問へど、物言はず。此の返答なく象なき塊に向かうて、命名評論は勝手次第なり。此の故に奇論僻説ばかり、立て易きは無し。人は皆痼疾に罹れるものなり、といはんとせば、浮屠の説を燒き直し、煩惱を「わづらひ」と訓みても、論の素やゝ成るべし。岩石もまた人に同じ、意欲あり、情感あり、といはまくせば、彼等の投ぜられて墮落するは、土を慕ふの意欲にもとづく、情意あるの證なり、と發端せよ、其の足らざるは、ショオペンハウエルを一讀して、やがて補充するに難からざるべし。夫れ覆載は無限にして、人の妄想もまた無量なり、限なきものを釋するに、限なきの妄想をもてす、奇を求めて止まずんば、異釋いつの日にか窮盡せん、奇説の立て易き所以なり。さもあらばあれ、奇は詭なり、詭説の壽きは、殆ど稀なり。落語子いはずや、猫に命名くる者、名の奇を求めて、到底元の名の猫に復す、と。世に謂ふ奇説の成果、おほむね此のたぐひならざるはなし。思ふに、天地間の事物、これを不審なりとして見る時は、悉く皆不審の極、何處より來たりて何れの邊にか去らんとすらん。天地悉く不審なり。謂ふ所の哲學は、齡已に三千歳、而も未だ此の不審を說く能はず、蓋し觀

新奇宇宙に充滿す何を苦しみてか個人の管見中に小新奇を求むる

てまだ審にする能はざるは、其の物尙目新しき也、目新しきはやがて新奇なる也、人奇に餓ゑたるか、何ぞ仰いで天を望み、俯して地を觀、此の偉大なる新奇を歡美せざる。何を苦しみてか、個人の管見に就きて、さゝやかなる新奇を求めんとする。天地はいたく老いたるに似て、其の若く鮮かなること、開闢の當時にひとしく、人間は已に古びたるに似て、其新しきこと、太古の人間に異なることなし。日月長に昭々、天地常に浩々、山翹然、水淼然、花は昔ながら紅にして、柳は今も尙綠なり、吾人の目は、其の外の色にあきたれども、吾人の心は、其の內の理に飽くこと能はず。飽かざるは陳とせざる證にあらずや。英國現在の散文詩宗、ラスキンは曰はく、「今もホーマルの時代に等しく、薔薇色なる曙は、依然として曉毎に珍らしき笑を有す」と。これ自然萬象のいよ〳〵見來たりて、いよいよ新しきをいふなり。すなはち「自然」は擧げて斬新にして珍奇なり、豈個人の管見に就いて、新奇を求むるに遑あらんや。

然りと雖も、自然を斬新なり、とし、人間を珍奇なり、とするは、ひとへに其の根本理體の不可思議にして、今も尙詳悉しがたきが故のみ。新奇の因は、一に根本理體に存す、此の根本理體は何物なるにもせよ、其の唯一にして自然と人間とを貫き、萬古不易、常住普遍なるは明なり。何とな

長永に新奇なる者は唯一のみ外面の色は万古依々

れば、若し此の根本理體にして唯一ならずは、日月何によりてか長に昭々、天地何によりてか長に浩々、山何によりてか、常に翹然、水何によりてか、常に淼然たらん。然り、此の唯一理體、千秋變はらざれども、常に斬新、老いに老たれども、曾て古びず、千古に亘りて新しく又新し。然れども、新なるものは此の一理體のみ。何物か外面の色を新なり、といふ。日月長に昭々、天地長に浩々、山翹然、水淼然、花は昔ながら紅にして、柳は今も尚綠なり。ホーマル時代の曙は、今も尚同じ曙なり。乾坤の間廣しといへども、一のめづらしき色なく、一の新しき姿なし。歐の山水は亞の山水と致異なりといふか、地味と季候とによりて、姿たま〳〵異なるのみ、と釋せば、何の新しき者か存する。長に奇にして新しきものは、只此の季候を役し、此の地味を役し、天地を役するの理體のみ。すなはち浩蕩たる天地の間、唯一の新奇ありて、他の新奇なし。衣食住の新を樂ひ、聞視の新を求め、行の奇、言の奇、文の奇、字の奇、其の他一切の小奇を欲する、そも〳〵又要なきなり。新奇を要めば、專ら根本理體の神怪不可思議なるを玩味せよ、新奇の旨の溢れて盡きざるを感得せん。行や、言や、文や、字や、其の他一切の小奇や、これ皆此の理體の現象、外部の相のみ、豈また大に新奇なるを得んや。言行はいよ〳〵新奇にして、いよ〳〵

人の妄想は無限なれど人の力量は有限なり

古聖賢の言行に遠かるべく、文字はます／＼新奇にして、ます／＼杜撰の詞句とならん。　人の妄想は無限なれど、人の力量は有限なり、いづくんぞ大に新奇なるを得んや。　人或は、行の奇ならざるを見て、彼れ俗物とそしる、然れども君子は常に愚なるが如し。　人また文字の奇ならざるを見て、此の文拙劣なりと嘲る、而も絢爛の極平淡に至るあるを覺らず。　又一の論說あり、言ふ所平々、讀む者思へらく、是れ陳腐の說、と然れども彼の仁義の說、道德の論、いづれか爛熟の論說ならざる。　蓋し、說の新奇ならざるは、或は以て其の陂ならず、險ならざるの證とすべし。　人古き語を奉ずるを卑しとする勿れ、古き語の今尙行はるゝ、或は其の健全なるを證するに足らん。　又舊說を祖述するを卑しむ勿れ、大聖尙述して作せず。　强ひて新奇を求めば、邪路に入らん。

以下予が說かんとする所、說として陳ならざるなく、文また些の創新なし、あらかじめ讀者の嘲を解かんとて、無要の語をつらぬること、斯くの如し。

破格の名文

文は意を以て主とす、意と理と勝るれば、文字おのづから衆に超ゆ、と古人もいはれたれば、文字の彫刻にのみ論ふまじきは勿論ながら、さりと

て腐爛、冗雜、杜撰、粗笨なる詞句は、其の意をも并せて失ふの病あり。眞の絕妙巧辭といふは、詞理兼ね備はり、華實並び茂る者なるは、いふまでもなきことなり。國語の法格、脩辭の規律は、人間の定めたる者のやうなれど、まことは自然の必要によりて成れるものなれば、此の二大法に背くは、自然に悖るにひとし。近年の如く破格の文章の廣く行はるゝ間こそ、破格を破格とも思はず、其の意はたそこなはれざれ、後に法格定まれる世となりて、今の破格の文を讀まば、恐らく太古語を讀むの思ひあるべし。我が國文は、大體よりいへば、文の格（さだまり）古今一系にて、（且言文二途なるゆゑ）文章の頗る古きものだに、其の意義割合に解（げ）し易かれど、近年の文章は此の一系の法格に背き、手爾葉、自他、時、係結、いづれもおもひおもひならぬはなければ、今人（こんじん）の心もて讀みてすら、或種類の文章は解（げ）し難き節しば〳〵あるを、後の人の讀まば如何に惑ふらん。今人の不思議の造語は、これを調べんに字彙もなく、其のほしいまゝなる法格は之れを說明する文法書も無し、所謂國文家がうれたみて語格、文法の弘（ぐ）布（ふ）を唱へし、ことわりの至極ならずや。然れども文に種類ありて、正文の法格は、必ずしも華文の法格とはなしがたし。こゝに華文といふは、詩歌と幷稱すべき小說、脚本、及び滑稽、諷刺、等の文章をいふ。夫れ歌に

は歌の法格ありて、時に手爾葉の規を破り、係結をもほしいまゝにすることあるは、歌人も已にいへることにて、かゝるとは支那の詩にもあり、泰西の詩にもあり、例へば、萩原廣道は其の著『てにをは係辭辨』に「わかれにしたまはかへすにかたけれど、涙のみこそ袖にかゝれる」といふ歌を引きて「れると結ぶは格ながら耳にさはりて聞きよくもあらぬ故にや、古き歌にもをさ〳〵見えず、ゔ。ゔ。る、ゔ。れ。と結ぶも同じき調あしき詞にて、玉の緒一の巻なる三轉證歌の中などにも、一首も見えざるに准へておもふべし、然るをこそといへば必ずれゝととぢめねばかなはぬやうに思ふ人もあるにや、近きころの歌などにおり見えゑらがふめるはいとこちたし」といへり。これはホンの一例なれど、調(しらべ)を重ずる詩歌には、別格を要する由よくいはれたり。さて我が國の小說脚本のたぐひは、皆散文にて物するものから、これまたいくらか口拍子をも重ずるなれば、折々は格に從ふまじき場合あり、また二つには、篇中にあらはるゝ事件の緩急、人物の性質、口吻、動作、等を、さながらに、活現するを專とするゆゑ、只一字殖えても情を損ふの恐(おそれ)あり、而してかゝるたぐひの文章は、殊に情をそこなふを以て最大の病とす。例へば、彼の西鶴が浮世草子の文など、文法の上よりいはば、襤褸(つゞれ)被(き)たる乞食にも喩ふべけれど、なかな

かに其の描ける事件、人物、社會、狀態と相かなうて、一氣呵成の妙至極せり、添削の筆を加ふるの要なし。

默阿彌の文

或は故默阿彌の脚本の文など、其の尤も巧なる世話物のセリフだに、文法の上よりいへば、狂人の囈語に似たるもの多かり、しかれども語呂の必要、及び其の塲の緩急より評すれば、これはた如何ともしがたし。 或は、今人の文章につきて考ふるも、某山人が、至極の彫琢家にありながら、何をり〳〵に誰れも知れる時制を誤れるが如く見ゆる、素人は怪み疑ふべし、例へば「何々しき」とあるべきを、「何々せし」といひすてたるなど、されどこれもまたアマリきまりすぎて餘韻を沒すまじといふ用心なると明なり。 かゝる例限なきが中にも、

淨瑠理の文

淨瑠璃文の如きはもと樂に合はするものなれば、半以上歌の性質を具へたり、其の破格中に妙あること言を俟たず、此は古人もしば〳〵いへることなるをまた引きいでゝいはんは、買ひ藥の二番煎じにも劣るめれど、何事にも二番煎じの流行る世には、かゝるものもまた若干の効あるべし、よし効あらずとも、何度服しても害なきは藥なり、と思ひたまへ。

まづ思ひいづるは『千本櫻』の靜鼓を打つの條なり、

靜は君の仰をうけ、手に取りあげて引きむすぶ、辛氣しんくをなひまぜの調結んで胴かけて、手のうちしめて肩にあげ、手じなもゆらに打鳴らす、聲

清々と澄みわたり、心耳を清ます妙音は、彼の洛陽に聞こえたる、會稽城門の越の鼓、聞き入り聞き居る餘念の體云々

「餘念の躰」とは何の意ぞ。　文の上よりいへば、何の事とも解しがたけれど、情の上よりいふ時は、何者か之れをえ解さゞらん、添削しがたしとはかゝる句なり。　又『大塔の宮曦鎧』齋藤太郎左衞門が邸外へ、其の女早崎が力若を伴ひ來たれる折、父太郎左衞門が俄に歸邸し、門番、近習、等倉皇として出迎ふる混雜の樣を叙したる條に、

北の方より家の挑灯、先走りのうちの者、お歸りと呼ばはる聲に、門番とびいで、貫の木扉、ぐわつたりぴッしり、八文字に、開く地に鼻、手燭かゞけて扈從近習數臺になりめ高なる玄關前、月にきらめく鎗印、父齋藤太郎左衞門利行、お歸りかいのと乘物にとりつけば、驚き「これは〳〵　娘か孫の力若かと飛び下るゝ親子の親しみ、家來も呆れ門番も、撲ちたゝいたら可いものかと、剃下げ頭さかさまに、土にすりつけ平伏せり、云々

就中、批點を附したるわたり、殆ど簡に過ぎて文を成さざれど、其の義はいと明ならずや。　破格の妙文と稱せざるべしや。　尤も、かゝる例は、近松が傑作の文中には、擧げて數ふべからず、これらは正文法家の夢にだもえ學ばざる所なり。　或は『曾我會稽山』第三大廣間の場、蒲殿及傷の條を見よ、

(蒲)これ梶原、入道が受取の割符、紛失せば何とする、(梶)かゝ曾我は伊東の末、天下の御ン敵の引入れ、よい仕合はせで切腹々々(蒲)ムウ入道が切腹には、冥途の供召しつるゝが合點か、(梶)しやらくさい、誰れを供に(蒲)梶原平次景高をつるゝはと、法衣の下の薄氷、一尺二寸拔撃に、ハッと飛びのく梶原が、烏帽子のまねきを切り落とされ後の障子蹴破つて同じく逃げて犬坊に、つゞいて逃げる八幡が肩骨、脇壺まで切り下げられ、ウンと反るを取ッておさへ、心もとを三かたな刺し、死骸にどうと腰うちかけ、一息ついで立ちたまへば、云々

何等の妙文、何等の破格ぞ、自他混同し、支離滅裂せり、而も情理整然として一字の減ずべきを見ず、一字の加ふべきを知らず。 蓋し、かく一筆數事を併せ狀するの長技は、巢林子の特得なり、かゝる不思議の絶妙省筆は、シエークスピアの文中にだに見る能はず、畢竟は我が國文の固有せるフレキシビリチー(自在性)の然らしむる所なり、具にいへば、言葉の曲折の自在なると所謂緣語(ヒキカケ言葉)の用ひ易きによるなるべし。

然れども此の數事幷叙の妙は、巢林子以後には多く之れを見る能はず、否、見ざるにはあらざれど、其の妙彼れに敵すべきは稀なり。 出雲が作『男作五鴈金』の結末、雷正九郎就縛の條の如き、前のには比しがたきも、尙同じたぐひの省筆なり、其の文にいふ、

サア此の上は雷ひさり、雲を分けても尋ねだせ、畏ッたさ猛勢が一所になッて狩りたつる、彼處の局ぐわら〳〵くわッたりびッしやり、そりやこゝそ爰に正體を、見付けられたる正九郎、戸を蹴放して躍りいで、云々

これまた一筆二事を并叙す、同類の省筆なり。　もとよりこれはどのを求めば春の草よりも繁かるべし。

歐文直譯體入りてより、代名詞は一派の文章家の重ずるものとなりぬ、「彼れは」「彼の女は」などめまぐるしく、「たり」「せり」「しぬ」「しき」など必ずのやうに一句の尾に添はれる、文の品によりては段落ハキとしてめでたけれど、華文としてはいかゞはしきとあり。　淨瑠璃作家の段節にみだりなるは、前の例にても知られたれど、主格も、賓格も、自他の區別もことわらで、又明には段節をも設けで、一筆にすら〳〵と書き流したる中に情理玄るけく、紆餘曲折の妙悉く具はれるは巣林子の文なり。　誰れも知れる名文を故に引かんは蛇足なれど、小手巻の繰返し〳〵ても倚棄てられぬは其の詞句の妙なりけり。

兎ても覺悟を極めし上は、小春や待たんさ大和屋の、くゞりの隙間さしのぞけば、内にちらつく人影は、小春ぢやないかさ、待つさしらせの合圖のしはぶき、エヘン〳〵カッチ〳〵、エヘンに拍子木打ちまぜて、上の町から番太郎が、くる〳〵たぐる風の夜は、せき〳〵廻る火用心、ごよざ〳〵も人忍

ぶ、我れにはつらき葛城の、神隠れして遣りすごし、隙を窺ひ立寄れば、くゝり内からそッと開く、小春か、待ッてか治兵衛さま、早う出たいと氣をせけはせくほど廻る車戸の、あくろを人や聞きつけんと、しやくッてあくれば、しやくッて響き、耳に轟く胸のうち、治兵衛が外から手を添へても、心震ふに手先も震ひ、三分四分五分一寸の、さきは地獄の苦しみより、鬼の見ぬ間さやうやうに、あけて嬉しき年の朝、小春は内をぬけいでゝ、互ひに手に手を取りかはし、北へゆかうか、南へか、西か東か行末も、心の早瀬蜆川、流るゝ月に逆ひて、足をはかりに

此等絶妙の文字は眞に我が國文の獨占なり、思ふに、古今海外にも比類なかるべし。巣林子の妙文にくらぶれば、紫女の文も稱するに足らず、ましてや曲亭等、後の稗官の文章は、概して二番煎じの文藻、彼れのかたはらにならべば、月の前なる電氣燈のいと甲斐なし。

文のすがた

譬喩に富めること、英のシエークスピアに越ゆるはなし、と稱す、もとより其の量をいはゞ、或は彼れに勝るものも若干あらめど、其の創新は、げに彼の翁の獨擅なるべし。予曾て脩辭法入門の書を編せんと欲し、其の脩飾篇の材料を國文に求め、殊に巣林子の作につきて、諸種の辭品の例を索ねき。今ふと其の折の下がきども見いだしたれば、少年子の爲

に巣林子が文の姿を月旦せんと思へるが、その前に一わたり文飾の義を講ずるの必要あり。そも〳〵文の脩飾法にあまたの種類あり所謂譬喩は其のうちの一類のみ。通例泰西の脩辭書に擧ぐる所は左の三類なり、

（第一）類似（Resemblance）を本としたる脩飾法
（第二）聯念（Association）を本としたる脩飾法
（第三）照緻（Contrast）を本としたる脩飾法

類似を本とするとは、事物の彼此相似たるを認めて、甲の事物を叙說狀寫するに乙の事物を以てするの法なり、例へば、美人を花の如し、といふは、美人の花とうつくしさを同じうするを認むるよりいでたる比喩なり。此の類は都べて譬喩に屬す、通例分かちて四種とす、

（甲）直喩（シミリー Simile）
（乙）隱喩（メタフォル Metaphor）
（丙）活喩（パルソニフイケーション Personification）
（丁）諷喩（アレゴリー Allegory）

直喩

直喩は「楷書は立つが如く、行書は歩むが如く、艸書は走るが如し」といへるの類、明に其の喩たることを示すもの。『文則』直喩の條に曰はく「或は猶といひ、或は若といひ、或は如といひ、或は似といひ、灼然として見るべ

し、孟子に曰ふ、猶縁木而求魚也と、書に曰ふ、若朽索之馭六馬と、論語にいふ、譬如北辰と、莊子に曰ふ、淒然似秋、と此の類是れ也」と。　隱喩は隱然と

隱喩

隱喩するの法なり。『文則』に隱喩を解して曰はく「其の文晦しと雖も、義は則ち尋ぬべし、禮記に曰ふ、諸侯不下漁色と、國語に曰ふ、歿平公軍無秕政と、又曰ふ、雖蝸譖焉避之と、（案ずるに秕は穀の成らざる者、以て政に喩ふ、又蝸は木蟲なり、譖は中より起こる、蝸の木を食ふが如し、木はこれを避くる能はず、故にかくいへるなり）（中略）此の類なり」と。　「鐵心石腸」といひ、「花顏柳腰」といふ、また隱喩なり。　或は「咳唾皆珠」といひ、或は「名は德の輿也」といひ、「仁は人の安宅なり」といふ、また同類に屬す。

活喩

活喩は非情を有情に言ひ倣すの法、思軒居士の譯名に係る。　蓋し、和漢には此の法の例のみありて其の名目なし、或は擬人法と譯するものあれど、活喩の名の雅にして簡なるに如かず。　「尾花招く」といひ、「山笑ふ」といひ、「風伯怒る」といひ、「祝融狂ふ」といふ、皆活喩なり。

諷喩

諷喩とは隱喩の複雜にして詳密なるもの、之れを比喩と名くるも可なり。　莊子の寓言の如き諷喩の一種なり、『西遊記』の如き、スペンサルの『神女王』の如き、バンヤンの『天路歷程』の如きは、諷喩の巨篇なり。

聯念を本とするとは、甲と乙と相因緣して離れざるを認め、甲乙相換へ、以て文の姿を異やうにするをいふ、譬へば、帆と船とは相關係して離れ

提喩

ざるものなるゆゑ「船の浮ぶ」といふべきを「白帆浮ぶ」といふの類なり。

予は之れを分かちて四類とす。

（一）提喩（Synecdoche）（シネクドキー）
（二）換喩（Metonymy）（メトニミー）
（三）張喩（Hyperbole）（ハイパルボリー）
（四）引喩（Allusion）（アリウジヨン）

提喩は思軒居士の譯名に係る、これを更に二類に分かち得べし、（甲）事物の全分を表するに、一分を以てするの例、譬へば「乞ふ食を與へよ」といふ代はりに食物中の一種たる米を提出し「乞ふ米を與へよ」といふの類、又は「某は我が國の良判官なるかな」と云ふ代はりに、我が良判官中の一人たる大岡越前守を提出して、「某は第二の大岡越前守なり」といふの類、（乙）事物の一分を表するに、其の全分を以てするの例、即ち前例の逆なり、思ふに、有形の事物を表するに、無形の性質を以てする例をも、此の中に攝するを得べし、譬へば「某々等忠良の士」といふべきを、單に「忠良」といひ「彼れは磔刑に處せられき」といふべきを「命を失ひぬ」といふなど、皆總名を以て特稱に換ふるの例也。　此の類尚細別すればくさ〴〵あれど、煩瑣なれば今は省きつ。

換喩

換喩と提喩とは、形の上よりいへば相似たり、提喩は度の異なるものを取りて譬喩し、換喩は質の異なるものを取りて譬喩す、例へば、船と帆とは其の本質同じからず、而も白帆をもて、船に代ふ、此れ異質の物を相換ふるなり。　換喩は、細分すれば、九類ほどに分かち得べけれど、こゝには只大概を掲ぐ、例へば「將軍家」を「柳營」といひ、「兵力」を「劔」といひ、「支那人怒る」といふべきを「支那怒る」といひ、「シェークスピアの作」といふべきを、單に「シェークスピア」といひ、「絹布を身に纏ふ」といふべきを「お蠶ぐるみ」といひ、雛妓を「赤襟」といひ、「紅裙」といひ、「半玉」といふなど、一々に例を擧げんもうるさし。

張喩

張喩は事實とそれに伴へる感動との聯念より來たる、例へば、長堤を望みては、嗚呼長きかな、と感ずるが自然の人情なり、隨うて、一里ばかりなるをも、十里あまりの樣に思ひすごすとあり、即ち深く感じたる時には、事物を大げふに見做す傾あり、「切られたる夢はまとか蚤のあと」の如し、此の感を本として、事物を誇張するを張喩といふ、「白髪三千丈」、若しくは「雪よりも白し」などいふたぐひなり。

引喩

引喩の解は『文則』に見えたり、曰はく「前言を援取して以て其の事を證す、或は古人の言と稱し、我れ聞くに曰はくと稱す、是れ皆援引する所ある

なり、左氏傳に曰はく、諺所レ謂庇焉而縱尋斧焉者也と、禮記に曰ふ、蛾子時術レ之其此之謂乎と、此の類是れなり」と、但し此の解は引喩の一類にのみ適す。予の謂ふ所引喩は、古言の援引のみをいふにあらず、あらゆる典故を援取するものをも含む。さて引喩におのづから二種の別あり、隱然援引するものと、顯然援引するものとの二なり。泰西の修辭に謂ふ所の引喩は寧ろ前者を指す。古歌を暗に援引したる例は、我が物語類にもしば〱見え、古事實を暗援したる例は、古今の詩文にあまたあり、「誰やらが姿に似たり花の春」「梅白しきのふや鶴を盗まれし」など、簡單なる例なり。或は引喩は類似に基く譬喩中に攝すべきものとす、尚考ふべし。

此の外聲喩（Onomatopoea）と稱するものも、或は此の聯念法の一類なるべし、「伐木丁々」「車轢轆」「おどろ〱と鳴る神」「さゝ波」など。

照繳を本とするもののうちに、五類あり。

（一）對偶（Antithesis）

（二）漸層（Climax）

（三）警語（Epigram）

（四）設疑及び感歎（Interrogation and Exclamation）

對偶對喩

漸層法

（五）反語（Irony アイロニー）

『文則』に曰はく、「文に意相屬して對偶する者あり、發彼小豝殪此大兕、誨爾諄々聽我藐々、故謀用是作、而兵由是起、の如し。 事の相類して對偶する者あり、威侮五行怠棄三行、佐賢輔德顯忠遂良、の如し。 此れ皆渾然として成る、初めより媲配に意ありしにあらず」云々と。 案ずるに、此等對偶の外に、尙事の相背きて對偶するものあり、『文則』に對喩と名けたるは是れなり、「魚相忘乎江湖、人相忘乎道術」（莊子）「君子之德風、小人之德艸」、又は「好事不出門、惡事走千里」の如し。 「我が戀はよむともつきじありそ海の濱の眞砂はよみつくすとも」これも一種の對偶なり。 彼の四六駢儷の纖細、英のユーヒウエズムの過巧、皆此の法の濫用と評すべし。「山媚水明」といひ、「春花秋月」といふ、いづれも對偶の法に本く、對偶の法を禁ずれは殆ど文を作りがたし。

漸層法は東西の文章にしば〲見る所、「天時不如地利、地利不如人和」、「知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得」、とやうに一節は一節より高うする、是れなり。 漢文家或は之れを名けて進一層法といふ。

警語とは寸鐵殺人の短句、語極めて簡にして、意頗る長きものをいふ。

警語

正當にいへば、語逆にして理順なるが如き句をいふなれど、往々然らざる警句をも、此の中に攝するとあり。かゝる類の句東西の俚諺中にも往々あり、「負けるは勝つ」、「徐に急げ」、「煩惱即菩提」、「上德不德」など。所詮、長きものも數十言に越ゆべからず、「何と見ても雪ほど黑い物はなし」、「其所謂道道其所道、非吾所謂道也、其所謂德、德其所德、非吾所謂德也」(原道)など、皆警語に屬す。

感歎設疑

古人曰はく、「歐公五代史、其間議論多感歎、又多設疑、蓋感歎則動人、設疑則意廣、此作文之法也」と。感歎と設疑とは、共に文勢を強うするの法、「噫微斯人吾誰與歸」、(岳陽樓記)「人之有牆、以蔽惡也、牆之隙壞、誰之咎也」此の類なり。

反語

反語は陽に譽めて陰に毀るの法、例へば「汝は愚なり」といはんとて、わざと「汝は賢なり」といふ類。

答問 現寫 反復 頓呼

此の他答問(Dialogue)即ち文中に對問を挿むの法、現寫(Vision)の法、即ち過去、若しくは未來の事物を、まのあたりに見るらんやうに、現在動詞を用ひて叙狀するの法、反覆(Repetition)の法、即ち文意曲折の爲に、語を換へて同一事を反覆するの法、頓呼(Apostrophy)の法、即ち感極まり興來たるのあまり、今目前にあらぬ事物をまのあたりあらん樣思ひ做して、突

然と呼ひかくる法など、かゝるたぐひ一々例を擧げば、尙數十頁の紙面を要すべし。夫れ何事にも分類は必要なることなれど、あまりに煩瑣なるはなか〳〵に益尠ければ、修辭の講義はこれまでとして、以下巢林子が文の姿にいひ及ばん、たゞし、以上の說明ほどは、苟も華文を玩味せんとするものに必要なれば、予は其の乾燥なるを惡まで、少年子の記憶せんことを望む。便宜のため例の表とすれば左の如し。

文飾
- 似類に基くもの
  - 直喩
  - 隱喩
  - 活喩
  - 諷喩
- 聯念に基くもの
  - 提喩
  - 換喩
  - 張喩
  - 引喩
  - 聲喩
- 照繳に基くもの
  - 對偶
  - 漸層
  - 警語
  - 設疑幷びに感歎
  - 反語
- 雜
  - 答問
  - 現寫
  - 反覆
  - 頓呼
  - 等

近松の淨瑠理

和漢雅俗折衷の文辭に巧なるもの、我が古今の文壇に掛からずありといへども、眞に豐富とたゝふべきは、近松門左衛門が文章にとゞめたり。えばらく詩人としての彼れが價値を餘所にして、ひとへに修辭家といふ資格より見るも、彼れは我が國有數の詞傑なり。彼れはありとある修辭の美を集めたり、彼れはありとある辭品を利用せり、泰西の修辭書中に見ゆる種々の辭品の例は、總べて之れを彼れが文中に見いだすを得。此の點に於ても、彼れは頗るシエークスピアに似たり、といふべし、但し、シエークスピアは重に上流(朝廷)の觀客の爲に物せしゆゑ(譬へば我國の能の、想も辭も上品なるが如く)、着想も、落筆も、おのづから高雅なる所あれど、近松は專ら中等以下の爲に作せしゆゑ(たとへ其の識見は甚しくシエークスピアに劣らざりきと假定するも)、趣向も用語も、をさをさ通俗を旨として、間ゝかたはらいたき箇處も多かり。彼れはたゞに卑野猥褻の筆づかひ、途方もなき荒唐不稽を避けざりしのみならず、求めて戯謔滑稽して、不自然の笑を買はんとせし跡あり、隨うて趣向にも、文章にも、當時の流行をあていこみたる、所謂場受の着想影し、すなはち叙事詩又は戯曲としての本文には、殆ど何の用又は關係なき文章の仇

花多し。而して世間多數の賞翫家のうち、或は此の本文に用なき仇花のゆゑに、近松が作を稱美し、彼れが美ところにありとやうに思へるもあり、今は文學の好尙も進みたれば、かゝる惑をいだける人も、いと尠かるべしと思ふものから、尙さすがに安んじがたし。意は本也、辭は末なり、文章の仇花は本を離れて末に走りたるものなり、仇花のゆゑに作家を稱美するの弊は、ひたもの彫蟲の末技を奬誘するに至る、即ち摸倣的文學を招致するの媒となる。斥けざるべけんや。

予は近松のいみじき修辭家たるを信ずるものなれど、さりとて彼れの文章をめでたしとするは、云ふまでもなく辭意相諧ふの妙を認むれば也、辭のみをたゝふるにはあらず。又彼れが文はなべてめでたし、彼れが作皆よしと信ずるものにあらず。彼れが作にもいと／＼拙きものあり、平々凡々なるもあり、しかしながら彼れが作のよしあしをいはんとせば、まづ彼れが作の本質を吟味し、彼れは如何なる旨意にて所謂淨瑠理を物せしか、淨瑠理は詩の三體に配するときは、其のいづれに屬すべきものか、叙事詩か、脚本か、又は小說の一體か、此の根本問題を決するの必要あり、何となれば、若し淨瑠理の本質が叙事詩ならんか、淨瑠理を批判するに脚本の規を以てするは、水がめをおほふに釜の蓋をもてす

浄瑠理は叙事詩なり

るのたぐひなればなり。

世人或は浄瑠理をドラマと同視し、(或はドラマを浄瑠理と訓じ)、近松の諸作をドラマと心得たるもあれど、恐らくひがことなるべし、浄瑠理は一種の律語的小説、すなはち叙事詩の一體と見るが至當なるべし。若し其の劇に演せられしゆゑをもて、強ひて脚本視せんとならば、特稱して叙事詩的脚本(即ち Epical drama)など名づくべくや。叙事詩には地の文あり、ドラマには地の文なし、ドラマにも、時としては、序曲又は跋曲などと譯すべき本曲外の文句もあれど、それらは我が浄瑠理の地とはひとしなみに見倣しがたし。或は、かくいはゞ、浄瑠理を挿入するは、我が劇の特質也、現に今の正劇の脚本にも、チョボといふ者あるを見ずや、而してチョボは浄瑠理の地也、泰西の脚本にチョボなしとて、チョボあるは脚本ならずといふは、偏局なる拘泥の説也、といふ者あらん。此の説非也。予思ふに、チョボと、浄瑠璃の地とは、其の質と由來とは同じけれど、其の用は殊也、義太夫、即ち語りものとしての浄瑠璃にありては、地の文は主にして詞は客也、演劇用としてのチョボは單に演技の幇助なり、科介の隱微を説明するの具のみ、されば義太夫語りとチョボ語りとは、其の語りかたに若干の差ありて全く同じき物にあらず。チョボは

廣義に謂ふ叙事詩の本性

泰西の劇に謂ふ傍白（アサイド）の役目をなし、且之れと同時に演技を幇くる爲に、一種の音樂を供するものなり、脚本が本具すべき要素にはあらず、これ少しく劇を知れる人の認識する所なるべし。　畢竟、かゝる名稱上の事は、いづれにてもよきことのやうなれど、彼の叙事、抒情、劇といふ三。詩。體。の區別が、動かすべからざる美學上の區別なる以上は、かりそめにも嚴密の批判を試みんと企つる者は、まづ此の區別を正し、さてのち作のよしあしを論ずべき也、何となれば脚本（劇詩）としては回護すべからざるものも、叙事詩の粗なるものとしては取るべき節（ふし）あるべく、抒情詩としては靈妙なるも、叙事詩としては大に非難すべきことあれば也。

近松が諸作は、尠くとも其の體式の上よりいへば、悉皆叙事詩中に攝すべきもの也。　そも〳〵叙事詩の本性は、過去の事件を叙寫するにあり、通俗にいへば、已に過ぎ去りし或出來事をば、首尾圓合し、前後聯絡し、一まとめになるべきやうに綴りなすにあり。　全篇に貫通せる本尊（主人公）あれば、ひとしは此の圓合を完うするに便宜なれど、よし主人公無きも、事件だによくまとまりて、終始つぶさに圓合せば、之れを叙事詩（もとより廣義に謂ふ）と名づけて差支なかるべし、蓋し、廣義に謂ふ叙事詩は、律語（節奏文）をもて物したる物。語。といふ義にて、此の義よりいへば『源氏

物語』、『八犬傳』、『西遊記』等、いづれも散文の叙事詩也。さて近松の諸作は、三味線に和して謠ふべき一種の節奏文をもて物したれば、上說の如く、叙事詩と總稱して勿論差支なけれど、槪して嚴正の叙事詩にはあらず、大抵彼れが作には、三個も四個も主人公らしき人物あり、むしろ一段每に殊なる主人公ありといはんかた至當なるが如し。就中、時代物の諸作には、此の弊あり、かゝるが故に脚色動もすれば支離滅裂し、事件の聯絡すらおぼつかなきものあり、然れどもかくの如きは彼れが作中のいと〳〵拙劣なるものにして、中年以後の老腕に成りたるは、尠くとも事件はほどは、よく圓合し、流石に木に竹を接ぎたらんやうに思はるゝは稀也。もとよりかく事件のみを主とするは劇。本の理想とはせぬ所なれど、叙事詩の體としては、必しも咎むるに足らざる也、たとへ近松が叙する所は、荒唐奇怪にして不自然なるも、其の人物は、或は一殊能の權化、若しは或情欲を具象にせる如き頗る膚淺なるものも、それらは所詮質。の上の欠點なるべく體。の上よりいふときは、彼れの作の大半は、廣義に謂ふ叙事詩の旨意に叶へり、英の『ビオウルフ物語』、獨の『ニーベリンゲンリイド』、『若しくは希の『イリアッド』と、尠くとも體ほどは同じきものといふを得べし。『ビオウルフ』をはじめ、すべて古代の叙事詩は、をさ〳〵事件

を本として作りたるもの、いづれも樂師が諷誦せしもの也。すなはち、體の上よりいへば、近松はホーマル、ヂルジル等と同じ潮流に漂へりしものと稱すべし。予は屢〻彼れをもてシエークスピアに比したれども、そはもぱら客觀詩人たる點の似たるによれり、我が作家中、此の點に於て最も近くシエークスピアに肖たるは近松に亥くなしと思へばなり。

近松が叙事詩の特質

叙事詩人としての近松が特質いかに、と見るに、泰西の叙事詩人に於て曾て見ざる所の特質あまたあり、それは近松の叙事詩の、啻に音樂にあはせて、謠はるゝものたるにとゞまらで、（即ち耳に訴ふるものたるにとゞまらで）一種の演劇に應用せられたればなり、くはしくいへば、彼れが作は、其の體に於ては叙事詩になれども、其の用に於ては脚本たり、彼れは聽かしむると同時に見えしめんと力めたり。彼れは毎に作と三絃との關係に注意し、又毎に作と傀儡との關係に注意せり、かるがゆゑに正しく彼れを批判せんする者は、ひとり讀むべき文章としてのみ彼れが作を觀るべからず、聽くべきものとしての價値、ならびに看るべきもの

としての効果をも考へざるべからず。而して近松が最も心を潜めたるは、明かに後の二需要に應ずるの秘訣なり。彼れは此の二需要に應せんがために、當時(そのころ)存在したりしあらゆる材料を蒐集し、巧みに之れを混和したり、例へば、聽覺を悅ばしめんがためには、當時唯一の劇詩(むしろ抒情詩的劇詩ともいふべき)謠曲、及び狂言の粹を拔き、或は平家琵琶、或は說經祭文、俗歌、童謠、鄙曲、流行節、その他あらゆる謠ひものゝ要素は、自在に之れを拾收し來たりて、其の作中に利用せざるなし。さてまた視覺を娛ません爲には、已に其のころ行はれたりし尙幼稚なる傀儡はいふに及ばず、能狂言に於ける扮裝、科介、雅びたる舞蹈、俗間の踊の手、あらゆる興行物(見世物)、ありとある pageant(ハジャント) (展覽物)の、苟も人目を悅ばすに足るべきものは、取りて以つて材料とし、之れを其の作に利用せざるなし。實に目に訴ふると耳に訴ふるとは巢林子が常住の目的なりき、彼れは此の二需要だに充(みた)すことを得ば、其の他を毀損することあらんも介意せざりし也。彼れ豈に必ずしも普通の語格文法を知らざりし者ならんや、而も節奏の爲には、わざと國文の格を破り、若しは誦讀の便宜の爲には、わざと通俗の訛語を物し、又衍字をも記(しる)させたり。今に傳はれる刊行本に、甚しき衍字、アテ字あるは、勿論謄寫者の誤ならめど、幾

分かは作者の杜撰もまじりたらんか、例へば「澁面(じうめん)」など記すべきを「十面」と書し、「かくて」を「角て」、「伴ひ」を「友なひ」、「爲り」を「成」、「夫(つま)」を「妻」など物したるは作者のあづかり知らぬ所なりとするも、他の幾多の衍(あやまり)は、或は讀ましむるとを主とせずして、朗誦せしむるを本意とせし、作者巣林子の機轉にあらずや。　且や彼れは常に下等社會をもて正規の觀客とせり、此の故に彼れは每に通俗を本願とせり、これ實に近松を評するに於て、前にいへる二條件と共に、評者の忘るべからざる要點なり、彼れは通俗の需要に應せんが爲に、しば〳〵大なる犧牲を供せり、明にいへば、詩としての彼れが作の失病は、概して此の通俗主義より來たれり。　彼れは無學文盲なる多數の俗衆を悅ばせんとせり、彼れば婦人小兒の耳目をも娯ませんとせり、而して此の約束に從はんとせば、義經も、賴朝も、鎌足も、天智帝も、時致も、祐經も、この花さくや姫も、稻だ姫も、靜御前も、巴女も、自然の必要によりて元祿期の華奢なる流行衣裳を被りて現れ、多少當時の通語を使ひ、時としては全くの元祿人となり、則ち全く世話にくだけて、正當の看客たる下等社會の同感情を呼ばざるべからず。　彼等の言說する所は下等社會の智識以外にいづべからず、菅原道眞の博學なるも、悉陀太子の高上なるも、俗衆の智識以上に論議すべからず、蓋し、俗衆の知

史劇家として近松とシエークスピアとの別

識は、支那の事蹟は、『三國史』、『漢楚軍談』、『武王軍談』、『二十四孝』のたぐひの外にいでずして、本朝の事蹟は、『義經記』、『盛衰記』、『太平記』等を極とす、こゝに於てや、作者も人物も、常に其の口を束せざるべからず、彼等は智者といへば正成、孔明、勇者といへば朝比奈、辨慶、孝子といへば曾我兄弟、忠臣といへば豫讓の古事、只管看にげしやすからんを要とせり、只管解し易からんことを要とす、故に時代ちがひ、風俗、人情の相違、史的事實の甚しき謬寫、若しくは我が神代の人物が、唐宋の古事を語り、保元平治の武將が、元以後の事蹟を引用するなどは、もとより異しむに足らざることなり。思ふに、かゝる不都合は、シエークスピアの史劇にも間ゝ見えたる所なれど、作者の本意に於て差別あり、シエークスピアは幾分か史を活現せんと力めたる跡あれど、近松ははじめより史を活現せんの心なし、彼れは淨瑠理を狂言綺語と信じ、人の耳目心を娯ましむるを主とし、かりそめに史を再生せしめんの念なし。彼れは牛若丸を德壽丸(新田義興)とひとしなみに寫し、勾當の內侍と常盤とを同じ筆にて物し、平然として懸念せる色なし。彼れが如何に『烏帽子折』をそのまゝに『出世太平記』となせるかを撿せよ、思半に過ぎん。要するに、近松は、只管人情を寫さんと力め、個人性を寫さんと力めざりし也、彼れの作の到底史

劇として(むしろ史的敍事詩として)看るべからざるは此の故也、其の世話物に於て吾人を駭かしむる所以は、た此の同じ源に基けるか。乞ふ予をして次第に彼れが作の特質を稽査し、竟に其の傑作たる世話物を批判するにいたらしめよ。

(此の稿中絶、以上二、三月稿)

人生四季

其の一

語の創新なるを愛づるは人情の自然なれども、語は新しきをのみ取るべきにあらず。古くより言ひふるしたる語の今尙棄てがたき、間ゝあり。かゝる語は分外に幽玄の旨を含めることあり、更に敷衍せらるべきことあり、新しき解釋を容るゝことあり。語の創新ならざるを惡むは、自然の風物の万古一色なるを惡まんが如し。如何なる新解釋を容れても餘あらん語は實に不易の妙語なり、其の不抜なるは自然其の物にも比すべし、而してかゝるたぐひは、ひとり賢者、詩人の語に於て見るのみにあらず、俚諺及び俗言のうちにも屢ゝあり、かの人生を四季に配し、少壯を春季とし、老衰を晩秋又は冬季とするが如き、其の一例なり。此の陳腐なる對比は、何人も思ひつくべき平凡なる喩なれど、其の新奇

ならぬ所、やがて其の妥貼なる所以なるが如し。　思ふに、人の一生を物に譬へたるは、東西の詩文章に、いと古くよりあまた見えたれど、かばかり妥當にして旨味の深きは無し、ジョンソンが航海に比し、シェークスピアが演劇にくらべたるなどは、よく人の知る所にて、かゝるたぐひの着想は、こなたのにも見えたれど、これらはむしろ頓才の落想たるに近く、其の寓意もまた皮相ばかりにして淺々し、四季に比べたるものこそ、いよ〱玩味して其の旨いよ〱深し、といふべけれ。

若し自然の氣機を唯一なり、とし、一切の盈虛消長を此の元機の作用に歸し、萬化此れより出で、品彙此れに由りて生まる、とせば、陰陽往來の變はやがて以て進退存亡の理を審にするに足るべし、此の時四季の人生とを對比せんに、何の詩趣かあらん、自明平凡の對照のみ、同一物を取りて同一物に比するの類なり、些の妙旨なし、何の釋をか要せん。　然れども詩人の往々無意識にして天地の靈妙を歌ふとあるが如く、人は屢〻好譬喩を口にしながら其の深意を會せざることあり、而して其の喩の爛熟するや、悉く其の旨を忘却するに至る。　新しきに就きて奇しきを求むるものは多けれど、古きを温ねて新しきを知るものは鮮し。　かるがゆゑに人生四季の比喩の如き、其の旨はいと妙なれども、今人また顧るも

のなし。

蓋し、人生と四季とに相似たるは、詩人の想像を俟たずしてしるけし、紅顔の花に似たるを看、白髮の雪に似たるを觀んもの、誰れか春冬を聯念せざらん。うら若きを「人生の朝」と名け、老いくちたるを「人生の夕」と呼べるにひとしく、翁を指して「幾十冬の霜をいたゞく」といひ、乙女の麗しきを稱して「二八の春の花」といひ、又は(泰西の詩人の如く)「十六の夏を閲しぬ」などいはんは、自然に思ひ寄るべき喩なり。シェークスピアが哀じき人生のすがたを秋と呼び、ヲォッヅォォスが

"Life's *autumn* past I stand in winter's verge."

といへるなど、共に自然の聯念なり。賴政が最後のきはによみたるなどもこしらへたりとは見えず、盛衰榮枯の道理此れ彼れよく通へばなり。かゝるたぐひ一々に擧げていはば、數限もなけれど、これらは皆一點ほどの對比にて、普く四季に配したるにはあらず。さるにても此の比喩はかくばかり妙にして妥貼なるに、想像のいみじき詩人の、などて今一層敷衍せざりし、と心得がたく思ひし年ごろ、いさゝか心して東西の詩文を讀みしに、英國の作家のうちには、四季に人生を思ひ寄せたるもの尠からず見いでたり、しかるに我が國の歌人の作には、四季を歌ひ

たるは限しらぬほどにあれど、いづれも只四季の風物光景をうちながめたるのみにて(恐らくは我が狹覽の故ならめど)深く人生に思ひ寄せたるはなし。物の本には、春秋の景物に人の盛衰を思ひ寄せたるものもしば〳〵見えたれど、夏の季を聯念したる例は絕えて知らず、冬だに、大かたは老人の頭髮(かしらのかみ)を雪霜の白きに喩ふる折にのみ聯念せられて、春秋の比喩ほどには普通ならず、且また總じて色、形を本としたる對比にて、此れの色、形と彼れの色、形とを比べたるが多し、客觀的、すなはち視感上の對比なり。英國の詩人のも大かたは客觀的なれど、キーツの「人生四季」Human Seasons の如き、旨は深からねど主觀的とも稱すべく、二者の精神に相類する所あるを認めたり、

"Four seasons fill the measure of the year;
There are four seasons in the mind of man:
He has his lusty Spring, when fancy clear
Takes in all beauty with an easy span;
He has his Summer, when luxuriously
Spring's honied cud of youthful thought he loves
To ruminate, and by such dreaming high
Is nearest unto heaven; quiet coves

His soul has in its Autumn, when his wings
He furleth close; contented so to look
On mists in idleness—to let fair things
Pass by unheeded as a threshold brook.
He has his Winter too, of pale misfortune,
Or else he would forego his mortal nature."

此の外四季に人生を思ひ寄せたるは、名高きトムソンの『四季の歌』のうちにも見え、ソウシーが四時の詠の中にも、またバルンス、ヲオヅヲオス等の作中にも見えたれど、人生四季と表題してあらはに對比したる例は、けふまでに讀めるうちに、此のキーツの作一篇のみ。さて散文のうちにては、いまだ多くはえ見いださねど、セント、ジョン(ジェームス、オウガスチン、のなどゝ或は同じ例に屬せしむべくや、曰はく

セントジョンが人生を農業の季節に比したる文

人は皆プラトーの所謂大年なり、人は皆其の種蒔時と生長期とを具ふ、又其の耕耘期と灌漑期と收穫期とを具ふ。其が少時に心を入れし主義と思想とは依然として長く存す、恐らくは多年の間、外より見ば不生産のものとも見ゆべし、されど曾て滅盡することなく、暝々のうちに生々化々す、機熟し縁成るに及びては、其の人突爾として强大となる、みづからも其の故を知らず、さながら神業(かんわざ)に因りたらんが如し、されども畢竟は曾て蒔きおきしを收むるに過ぎず。

ど。これは辭の上にこそ春秋なけれど、意のうちには四季見えたり。これら皆あきらかに人生と四季とを對比したるなれど、尚尋常の着想にて特に注意するに足らぬものなり。トムソン、ソウシー等が作に見えたる觀念は、はるかにこれらよりは玄妙なり。ソウシー秋を詠じて曰はく、

"To you the beauties of the autumnal year
Make mournful emblems, and you think of man
Doom'd to the grave's long winter, spirit-broken,
Bending beneath the burthen of his years,
Sens-dull'd and fretful, "full of aches and pains,"
Yet clinging still to life. To me they show
The calm decay of nature, when the mind
Retains its strength, and in the languid eye
Religion's holy hope kindles a joy
That makes old age look lovely. All to you
Is dark and cheerless; you in this fair world
See some destroying principle abroad,
Air, earth, and water, full of living things,
Each on the other preying; and the ways

Of man a strange perplexing labyrinth,
Where crimes and miseries, each producing each,
Render life loathsome, and destroy the hope
That should in death bring comfort : Oh, my friend,
That thy faith were as mine ! That thou couldst see
Death still producing life, and evil still
Working its own destruction ; couldst behold
The strifes and troubles of this troubled world
With the strong eye that sees the promised day
Dawn through this night of tempest ! All things then
Would minister to joy ; then should thine heart
Be heal'd and harmoiized, and thou wouldst feel
God always, everywhere, and all in all."

人は秋季の美しきを只管に哀しきものに思ひなして、年老い精神衰へ、苦痛身に餘りながら尙死にもやらぬ老人の、いと淺ましげなるに思ひ寄すれど、我が目にはまだ見ねず、秋の長閑にして物靜なるは、譬へば、肉躰は衰へたれど精神は尙健なる人の、後世の信心堅固にして老いていよゝ心の花の開けたらんがごとし。　人は秋の景物を暗憺索寞なるものとなし、此のうつくしの世の中に或おそろしき元機活動し、生物のすみかなる氣、土、水の三界は互ひに相呑噬して止むときなく、又人間には害惡と不幸と經

綿し、さながらに八重襷のほぐしがたきやうに、絶えて行末の頼まれぬいと浅ましきものなりと思ふ、あはれ世の人の信念も我が思ひなせる如くならばや、あはれ人の知らばや、死は毎に生を産み、悪は毎にみづから亡びゆくことを、あはれ此のおそろしきあらしのかなたに麗しき天津日のほのぐゝとさしのぼる影を見せばや。しからば何物か喜の種ならぬ、世のうきことゝは悉く忘らるべし、誰れかは常に神明の大徳のいと偉なるを認めざらん。

ソウシーが冬を詠じたる歌

トムソンが四季に道念の籠れるを認めて、暮れゆく年を楽しとながめたる、はた此の旨に髣髴たり、共に基督教徒の詩眼に映じたる秋冬の景色なり。　ソウシーまた冬を詠じて

Sweet are the harmonies of Spring,
Sweet is the Summer' s evening gale,
And sweet the autumnal winds that shake.
　　The many color'd grove.
And pleasant to the sober'd soul
The silence of the wintry scene,
When Nature shrouds herself, entranced
　　In deep tranquility."

春の長閑に和げる、夏の夕暮の風の涼しき、秋の風の錦なす杜にわたる、い

づれ美しからぬはなけれど、寂寞と志づかなる冬の景色の、さながら造化の禪定したらんやうなるこそ、靜平なる心には樂しけれ。

といひ、さて種々の景物を叙したるなか程に、木の葉の悉く凋落せる槲の木の幹に蔦のひしとからみつけるをば、人の其の操にのみはえもたよらで、宗教心といふ、一しほ鞏固なるものに縁りて、浮世の諸々のわざはひを忍ぶに比し、又石清水の、夏は叢かげにかくれて見えざりしが、今はうつくしうあらはれて淸らかなる、さては碧苔の玲瓏と艶やかなる氷にてりあひ、又長き艸の細き鎗のやうになびける、あるは日の光かすかに刺す銀世界のうつくしきなど、くさぐさの景物を描ける後、

"Reflection too may love the hour
When Nature, hid in Winter's grave,
No more expands the bursting bud,
　Or bids the flowret bloom;

For Nature soon in Spring's best charms
Shall rise revived from Winter's grave,
Expand the bursting bud again,
　And bid the flower rebloom.

いでや造化が冬といふ墓穴のうちに潜みかくれて、生ひ出づべき芽をも

我が國の歌人詩人の四季に對する感想

いださず、花一つだに咲かせぬほどぞ、つら／＼に考ふれば、樂しかりける、
かくしばしかくろへるは、やがて又來ん春を待ちて、こよなく麗しう裝は
せ、生ひ出づべき芽をもひらき、花をもさかせん爲と思へば。

と歌へるなど、明に基督教の詩想にて靈魂の不滅なるを說き、怡樂の無盡なるべきを語るものなり。　かうやうの想かなたの作には乏しからねど、和漢のにはいと稀なり、ことに我が國の詩文人の四季に對する感想はおしなべてかたよりたり。　彼等、むかしは春秋の優劣を風流心(みやびごころ)に分けかねけんを、いつしか秋の色をひとへに悲しとのみ見すて丶、秋の七艸の優にやさしき、紅葉の錦のはでやかなるをも、大かたは、哀をさそふ媒とのみ詠めて、秋の心を字のま丶に愁と釋しつ。　此の故に彼等の四時を歌ふや、前半は每に樂しげなれど、後半は每に悲愴なり、これ一つは、和漢の詩歌の、兎角に事物の客觀に泥みて、相を詠ずるを主とせるに因り、また二つには、中ごろ佛敎の渡り來て無常變轉のことわりを敎へ、秋冬の景物をもて其の無常觀の好比喩となせるにも因るならめど、其の觀の兎角に悲哀に偏したるは事實なり。　げにや秋の相(すがた)は、如何なる無私の心もて觀るも、おのづから肅殺の氣を含み、慘憺の色を帶べりとも見えぬべし、秋の言たる猶湫のごとし、湫とは憂悲の狀也、と字彙にもい

へり、かく見るは或は人の審美本能の教ふる所なるべし。彼の宋玉の秋に悲みて「悲いかな秋の氣たるや、蕭瑟と竹木搖落して變ひ衰ふ、憭慄と遠行に在りて山に登り、水に臨み、歸らんとするを送らんごとし」といへる、豈能く秋を觀じたるものにあらざらん。或は潘岳が秋興を賦して「四運忽として其れ代序す、萬物紛として以て廻薄す、花蒔の時に育するを覽て、盛衰の託する所を察す、感ずるに冬索きて春敷く、嗟夏茂りて秋落つ」と打ちながめたる、或は近世の歌人が秋を詠じて

片山や世をふる寺の苔むしろ、おりゐて見ればさゝめけぬ、秋はかぎりと紅葉も、風にきほひておく霜に爭ひかねて白菊も、色ぞ移らふ空蟬の、世はかくこそと瀧川の、はやく見し世をくりかへし、しのびいでつゝ歸るべき家路も問はずゆふしぐれ、袂ぬらせば塵の身の、夢さませとや岡のべの、松にこたふる入相のかね。

（反歌）鐘の音に秋をとぢめて山寺のいはがき紅葉散りはてにけり。

とよめる、其の幾分は文學上の時尙と因襲とに因るならめど、半は審美的本能の沙汰なると、殆ど疑を容れざるに似たり。而も尙退いて思へば、秋は揫なり、揫斂の季節、萬物成熟の候なり、又就なり、萬物成就すと字書にも見え、英語のAutumnといふ語の如きも、本auといふ語よりいでゝ滿足の義を含めりといへば、はじめ此の季節に命名せし者は必しも悲

トムソンが秋を詠じたる歌

觀を感ぜざりしか。よしや秋の相をもて肅殺慘憺たるものとするも、其の洽く萬物をして豐熟せしむるの精神は、頗る樂觀を喚び起こすべきにあらずや。秋の風の淅瀝として以て蕭颯たる、恐らくは人をして悚然たらしめん、しかれども所謂小春日和(こはるびより)の脫々として舒緩なる、なぞて我が歌人の快感をば牽かざりける。トムソンは歌うて曰はく

"The rolling year
Is full of thee (God). Forth in the pleasing Spring
Thy beauty walks, thy tenderness and love
Wide flush the fields, the softening air is balm;
Echo the mountains round, the forest smiles
And every sense and every heart is joy.
Then comes thy glory in the summer months,
With light and heat refulgent. Then thy
Sun shoots full perfection through the swelling year;
And oft thy voice in dreadful thunder speaks,
And oft at dawn, deep noon, or falling eve,
By brooks and groves in hollow-whispering gales,
Thy Bounty shines in Autumn unconfined,
And spreads a common feast for all that lives."

秋を悲しとのみ見るは偏頗ならずや。

和漢の詩人の冬に對する感想は更に悲哀なり。冬は終なり、萬物是に於て終はる、天氣上に騰り、地氣下に降り、天地通せず、閉塞して冬を成す。げに冬は悲想の至極なるべし、盛陰地に在りて陽氣潜み藏れ、地肅し天凝る、万象酸然、黃艸素柯、陰風、寒景、蕩然たり、落然たり、索然たり、闃然たり。誰れか此の間に立ちて悲觀せざらん。山里は冬ぞさびしさまさりける、人目も艸も枯れんと思へば。しかれども若し一たび

"Winter assists us to resign
Since to enjoy it dost deny."

其の絶無、即、發菩提心たるの理を觀じ來たらば、冬の落寞はやがて無言の師にあらずや。此の故にバルンスは特に冬季に於て一種の悅樂を感じ、すなはち其の故をわきまへて曰はく

予が冬を愛するは、多年の數奇不幸の爲に我が心の悒鬱に傾けるにも因るならめど、而も其の落寞たる積廢と凜烈たる風雪とは暗に予が心を高めて偉大高壯なる者に同感するに便ならしむ、覆載の間いまだ陰雲空を掩ふの冬の日に、寒林の蔭に逍遙し、北風の怒つて樹間に吼え、野にわたりて怒號するを聞くばかり、心地よきことなし。冬は予が無上の歸依節なり、予が心は恍惚としてひとへに彼れを渴仰せんとす。ヒブルウ詩人の言

によれば、彼れは「風翼に駕して行く」とかや、予は實に冬に於て彼れに熱誠を感ぜんとするなり。

と。 トムソンもまた上に擧げたる詩の末節に曰ふ、

"In Winter awful thou ; with clouds and storms
Around thee thrown, tempest o'er tempest rolled.
Majestic darkness ! On the whirlwind's wings
Riding sublime, thou bidst the world adore
And humblest nature with thy northern blast."

徒らに悲哀を感ぜずして畏敬を感じ、絶望せずして歸依渇仰す、これ我が詩文中に殆ど曾て見ざるところ、

遮莫、予が四季のうちに見いださんとする旨趣は、此等基督教徒の詩眼中に映じたるものとも異なり、予はむしろ自明平凡の旨を四季の神貌中に見いださんとす、然り、予がいはんとする所は自明平凡の旨なり、然れども人は措いて問はざるの旨なり、措いて問はざるが故に忘れたるの旨なり、忘れたるが故に不明の旨なり。 今新に不明の旨を説く、庶幾はくは蛇足を畫くの譏をまぬがれんか。

其の二

四季とは、もと晝夜の長短、又は地球と太陽との關係に基く乾濕冷温の

度をよりどころとしたる一年の區分なり、北方温帶の地はおしなべて四種の季に分かれたれど、到る處みな然るには非ず、只乾、濕、冷の三季のみを具へたるもあれば、わづかに乾濕の二季のみなるもありとぞ。又春夏秋冬の區畫も、暦法によりて同じからず、若し三月廿一日をもて立春とし、六月二十二日をもて立夏とし、九月廿三日を立秋、十二月二十三日を立冬とせば、三月二十一日より六月二十二日までを春とし、六月廿二日より九月廿三日までを夏とし、秋、冬また同じ順序に從うて定むべきに似たれど、そはもとより通例にたがへり。 予は爰に三、四、五月を春とし、六、七、八月を夏とし、九、十、十一月を秋、十二、一、二月を冬とせり、これはた國俗の定(さだめ)とは異なれど、春は陽にして万物始めて生ずるの候、又開闢の端(はじめ)、養生の首(はじめ)なり、とあれば、泰西の分けかたこそ却りて春の本義にも合ふべく、又陰暦の三月を目して彌生月といへるにも叶ふべけれ。 又曰ふ、春は蠢なり、物蠢(うごめ)き生じて乃ち運動す、と、あるは又英語の春(スプリング)といふ語の發生といふ語に原けるなど、いづれも春の生をつかさどるを表すれば、三月を春首とせんは理無きにあらじ。 さて夏は假也、物假大にして乃ち宣平、万物を寛假して生長せしむ、あるは夏は氣大にして物を育すなどいへり、すなはち夏は化育の最も盛なるときにして發達の半途

なり、六、七、八月の候尤も其の意に叶ふべし。次に秋は就の季、すなはち春夏の生育せし所を成就するの候にして滿足の期なり、滿足は壞滅の端なり、一葉飄零してまづ壞兆を示し、万林やがて蕩然たるに至る、

"The air is damp, and hush'd, and close,
As a sick man's room when he takes repose
An hour before death;
My very heart faints and my whole soul grieves
At the moist rich smell of the rotting leaves,
And the breath
Of the fading edges of box beneath,
And the year's last rose."——Tennyson.

これ實に十一月より十二月へかけての現象也、人此の盛陰に感じて秋に悲む、見るところ聞くところ壞滅の端ならぬはなし、

"The warm sun is failing, the bleak wind is wailing,
The bare boughs are sighing, the pale flowers are dying,
And the year
On the earth her death-bed, in a shroud of leaves dead,
Is lying.

* * * ⁂ ⁂

The chill rain is falling, the night-worm is crawling,
The rivers are swelling, the thunder is knelling
For the year;
The blithe swallows are flown, and the lizards, each gone
To his dwelling;"——Shelley.

断霧かすかに日を通じ、殘雲はのかに雷を作し、蟲哀しみ、魚ひそむ、枯枝にとまる烏、荒磯にたつ鴫、心なき身にも物の哀しる時なり。思ふに、秋は化育の終極、終極の次に來たるものは壞滅なり。すなはち冬は全空を代表す、乾坤閉藏し、草木蕭索たり、幾千の翼、骨ばかりなる寒林中にこゞえ死し、幾万の鱗、石の如き堅氷に閉ぢられてたふる。古人が四季をもて生住壞空の隱喩とせる、宜なりといふべし。

春、夏、秋、冬といふ語の出處

予曾て語學家旗野欅坪氏に我が四季の名稱の語原を質しゝに、居士が懇に教示せられしもの幸に尙存したれば、下に其の大意を抄す。

四季の語原は諸說紛々として孰れを定說とも定め難けれど、其のうち小生の善しと思へるを二つ三つ申すべし、お尋の物先生の說も『釋紀』或は『私紀』の古說に從はれし所多く、四季の說も「飽」(アキ)を除く外は古說也。これらは『日本紀通證』に已に擧げてあり、後の著には秋田如是觀が『嘉都能かゝ奈比』といふものに四季并びに月日のことは論じてあり、其の他いろ〳〵の說あれど、小生はまづ『通證』の說を善しとせり、其の故は古言は見やすきこ

とよりいでゝ成語となりたるにて種々めぐり〳〵てむづかしき事柄より語を成しきといふは後世の國學者の見にて其の實上古の時代に合はざること多しと信ず、因りて小生はむしろおさなげなるを語原とせり。

○春は『通證』に「春之言、木芽發也」とありて『萬葉』にも「春は張りつゝ秋は散りけり」又「青柳の波里てたてれば」又「張流柳を」『古今』にも「木の芽はる雨」又「霞たち木の芽もはるの雪ふれば」など、くさ〴〵ありて草木の芽のいづるをハリ又ハルといひしは著く、よりて張の意義とするを正しとす、しかしながら張出ルといふ說より成りたるにはあらず。尤も張、開、墾などは、いづれも同原よりいでたる語にて、春は草木の芽の張るは勿論なれど、此の季節をことにハルといふは、農家の田畑を墾ることにも思ひ寄せたる名なるべし。

○夏は眞淵翁の說に水無月の上下、即ちミとキとを略けるよりいでたる語とせられしは少し時代に於て前後せり、六月(ミナツキ)七月(フミツキ)八月(ハツキ)などいふ名稱は四季の定めより後のことなるべし、よりてこは「夏之言暑也」といふが正しかるべし、アツをナツといふは轉音の一例にて伴(共合)をトモナヒ、誘(卒逢)をイザナヒといふに同じ、且此の暑熱といふ起原は歎聲よりいでたり、熱にあうてアヽアツと苦聲を發せしより遂に其の物の名となりしなり。

○秋は貴說の如く赤なれど、其の出所はアカリ若しはアカラムの義にあらず、直にアカキといふ語よりいでアカの約音アにて即ちアキ也、物先生の

「飽」といふもと此の秋の語よりいでたり。蓋し、秋は物の足る時節なれば其の儘秋を動詞と變じて「飽」の意となれる也。商(アキナヒ)と云ふも其の原は秋合(アキアヒ)にて、秋はよろづの出來物(穀物)をもちいでゝ市するより成れる語なり、飽を秋の語原とするは前後したる説也。

冬。は冷(ヒエ)也とあるが正し。『古事記』應神卷に「ほむだの、ひのみこ、おほさゝぎ、おほさゝき、はかせる、たちもと、つるきすゑ布由(ふゆ)、布由紀(ふゆき)のすからが、下木(シタキ)の、さや、さや」とある布由を本居氏の『傳』には句讀を誤り、スヱフユとしてフユは振振(フルフキ)などの轉音といはれしは、恐らく誤考にて歌の意に叶はず、よりて此の布由の二字が句にて即ち冷の意義也。冷(ヒエ)といへるは劍の光芒のすさまじき樣にて冷(サビ)などいはんに同じ、俗言のゾットスルほど光る劍といふこと也、此のフユより下句の「冬木の」を呼びいだせり「すがらが下木」は「末枯(すがら)が下木」にて冬の木をスガレといふに同じ、又「さやさや」は冴清(サヤサヤ)にて是れまた劍の光芒の如(ク)冷(ナル)スゴキをいふ也、因りてヒユ(冷)を通音にフユといひしのみ、上世の俗言也、今の世のヒとフとの違ひに同じ、云々。

さて、人の一生を四季に配する前に、古より一生をいかに分かちたるかと見るに、支那にては人生十年を幼と名け、これを學齡と稱し、二十を弱と呼びて冠する齡とし、三十を壯すなはち室有るの齡、四十を強すなはち仕するの齡、五十を艾すなはち官政に服するの齡、六十を耆、即ち指使の齡、七十を老、即ち傳ふべき齡、隱居するの時とし、さて八十、九十をば耄

三十は立志の時、四十以後は成就の期

いづれにしても三十を眞の男となるの時とし、四十、五十の齢をもて全盛の時となせるや明なり、俗にも四十を分別盛の齢とし、三十より四十に至る間を男子の花候とす、グラシアンが語にも

"At twenty years of age, the will reigns; at thirty, the wit; and at forty, the judgment."

と稱せり。又一說には、七十耆、八十を耋九十を耄とせり。

齡二十歳のころには、意力によりて事を行ひ、三十歳のころには、才によりて事を處し、四十歳に及びては、分別によりて進退すと見えたり、これはた四十を大成の時と見做せるなり。若し三四の例外を除きて、古今東西に聞こえたる名士、俊豪の閱歷を考へば、三十を立志の時とし、四十以後を成就の期とせざるもの稀なるべし。孔夫子が三十にして立つ、四十不惑、五十知命といはれたるは、聖人の上なれば、常人の場合にくらべんは不當なれど、大かたにいへば、人みな此の順序に從ひて發暢す。極めて早熟なる例も多くあれど、それらだに不朽の名を成しゝは三十歳以後なり、天稟の大詩人若しは思索家と稱へられたるだに、不死の著を後世に遺しゝは、概して四十以後の筆の力なり。予嘗て專ら詩人、小說家につきて、其の傑作の成りし因緣を探らんと試みしに、稽査の果は

十中八九の作は皆四十前後の業たるを示したり、尠くとも其の世相を描くことといと廣く、陂險偏狹の失尠く、多少普遍的旨味を具へたるは皆四十以後の作なりき。　或は二十前後の作にして、世に傑作ともてはやされたるもあれど、さるは詭異、險怪、氣勝りて誠足らざるもの、あるは纖巧華贍なるものに多く、所謂步驟馳騁、沙を飛ばし石を走らするの概あるも、かの奇を純粹の中に寓し、巧を和易の內に藏め、平淡の間無限の滋味を具ふるが如き趣はなし。　こは詩文のみの上なれど、何事の上にも此の境はあるべし、齡五十にして初めて四十九年の非を知りぬと聞かば、今の英才は恐らく其の知ると遲きを笑ふべし、然れども自ら識るの難きは先賢も屢〻之れを說けり、輕々しく自識せりといふもの、豈能く自ら識るものならんや。　誰れか三十を成熟の時とし、四十以後を老衰の時とするぞ。　三十は化育の端にして四十は化育の終のみ。　三十は猶夏の首のごとく、四十はなほ初秋のごとし、人の智德の大成は明に四十の後にあり、何なれば人生の秋はまさに四十歲の後に來たるべければなり。　然るに國俗は四十をすら初老と呼べり、これ四十以後をもて退却の境とするなり、彼等は化育の、成就の爲にせられ、培養の、收穫の爲にせられたるを忘れ、はじめて鎌を揮ふべきの時に鎌を抛ちて去り、はじ

めて禪慮利他すべき時に飄然として世外に退かんとす。 彼等は何の爲に過去數十年を費したるかを知らざるなり、其の過去の活動は、單に試驗的活動にして、未來の活動のみが眞の活動たるべきを忘るゝなり。孔聖は齡五十六にして少正卯を誅して國政を與り聞き、六十にして耳順ひ、又七十にして心の欲する所に從ふも矩を踰えず、といはれたり、至聖だに年と共に進まれたること明ならずや。 すなはち四十以後七十までは彌、成熟すべきの期也、人生の眞の衰境(冬季)は、早くとも、七十前後にあるべし。 齡いまだ知命前後なるに、我れ老いたり、といふものは造化の隱喩を察するの明無く、みづから人生の大收穫を擲つものなり。大詩人が作中の一青年、メフィストフィリーズに對うていはく、

"Man's life lives
But in the Blood—and the blood, where, in truth,
Stirs it so vigorously as in youth?
The young blood lives, aye! and in eager strife
Shapes to itself a new life out of life.
There all is progress! something still is done—
The feeble falls, the active presses on.
We have won half the world—yes! youthful man

Has won it; meanwhile what have you been doing?
Slept, nodded, dreamed, weighed, thought, plan after plan
Suggesting still, and languidly pursuing?
Old age is a cold fever's feeble flame,
Life's peevish winter of obstruction chilling,
Man is at Thirty dead, or all the same—
"'Twere better kill you while you are worth killing."

智は青年の獨擅する所也、尤も貴むべきは清新活潑なる青年の血氣、青年は唯一の活動期、而して三十歳は青年期の頂點、活動の終期、三十以後は屍と一般、存ふるも何の用をかなさん、徒に陳腐の古死文を講じ、屑々として無用の空想を事とするのみ、と。　蓋し、これ血氣の青年が激語のみ、彼れは年少氣鋭の權化、彼れはいまだ人間の大命を悟らざる者、彼れはいまだ知らざる也、血氣の情火漸く鎭まり、痴妄の煙焔次第に散じ、穢き泡沫の洗却せん時、其の時に至りてこそ醇酒の始めて成るべきことを。譬へば孟夏の候、草木莽々、盛陽滔々、金を流し、石を爍く、これを壯の至極とするは可なり、遙々たる化々こゝに至りて極まる、とせんは誤謬なるべし。　陰と陽とは共に一靈氣の所作、陰窮まりて陽動き、陽窮まりて陰生ず、來往何れの時にか窮極せん。　陰陽師はいふ、五月に至りて陽窮ま

りて一陰生じ、十一月に至りて陰窮まりて一陽生ず、これを一陽來復といふ、と、すなはち萬物の又更に生ぜんとするの時なり。 秋もいつしか過ぎんとして小春、小六月の暖き、疑ふらくはこれ陰陽再び相抱いて和合調諧するの候なるべし、誰れか其の第二の活動期、眞の意識的活動期の此の間に存せざるを斷證せん。 夫れ驕炎の赫々たるは血氣激昂の相(すがた)、之れを青年の情熱に比すべく、又壯時の意氣昂盛なるに比すべし。

夏は大なり、陽威の徹する所、萬物悉く暢ぶ。 丁壯は人生の夏なり、豪氣、斗牛を呑む、大なる乾坤蝸爐よりも狹し、而して彼等妄想の邊なきに耽りて現實界の有限なるを知らず、此の故に挺然勇往し、悍然敢て爲す、又此のゆゑに相激し、相薄り、霹靂又列缺、天を撼し、地を震ふ。 かの六七月の驟雨、何ぞそれ急激なる、猛然屋を發き、俄然樹を飛ばし、海を捲き山を崩す、豈これ壯年客氣の徒が破壞革命を事とするの隱喩にあらずや。

若しくは盛夏陶々、毒炎熾するが如く、

"Nature pants, and very stream looks languid—"

天色紅銅の如く、風死し石煮え、牛あはのき犬あえぐ、終日昏々、居るに懶く、往くに懶く、生きたれども死せるが如く、在れども無きが如し。 此の陽威に撲たれて惘々然たるの境、吾人また之れを迷惑耽溺の青年に見

る。

秋に至りては然らず、「秋の狀たる、其の色慘淡として煙霏び雲斂まる、其の容淸明にして天高く日晶なり、其の氣慄烈として人の肌骨を砭す、其の意蕭條として山川寂寥たり」。すなはち Serenity は秋の意(こゝろ)なり、又「秋聲の賦」にいはずや、初は淅瀝として以て蕭颯たり、忽にして奔騰して、砰湃たり、波濤の夜驚き風雨の驟に至るが如し、其の物に觸るゝや、鏦々錚々として金鐵皆鳴る」と、秋意の sublime なるを見るべし。秋はまた萬物豐足の期、見よ白帝の來たるや、悉く金衣を被りて來たる、

"As though he joyed in his plenteous store,
Laden with fruits that made him laugh, full glad
That he had banish'd hunger, which to-fore
Had by the belly oft him pinched sore:
Upon his head a wreath, that was enroll'd
With ears of corn of every sort he bore;
And in his hand a sickle he did hold,
To reap the ripen'd fruits the which the earth had yold."——Spencer.

沉寥と慄烈とはいまだ秋意を盡くしたるものにあらず、蓋し、此の物足りて綽々たる容(すがた)こそ、別に幾分の秋意の宿るところ、秋は凄慘をのみ其

の意となせるにあらじ。　夫れ春は外あまりに派手やかにして內浮きたり、秋は外しづかにして內しまれり、春は盎然として長閑なれども、內に堅實なる所無し、秋は凄然としていたましげなれども、內和平にして融然たり。　春の詠はめざましけれど、其のさかり何ぞさしも短うしてはかなきや、梅櫻相追うて散りつくし、桃李相ついで代謝す。　沙羅双樹の花の色、祇園精舍の鐘の聲、無常は双方に見えたれども、秋に悲觀するものは多く、春に靜なる心は稀なり、陽、陰に克てばなるべし。　春の時にありては、山笑ひ鳥戲れ、天地讙然として隨處に樂土あり、正に是れ、死にさうな人ひとり無し花の山、

" May makes the cheerful hue,
May breeds and brings new blood,
May marches throughout every limb,
May makes the merry mood,"——Edwards.

* * * * *

"All things rejoice in youth and love,
The fulness of their first delight!"

天地相和ぎ、男女相よろこぶ、思欲滔々として是非空しからんとす。　春の日や達摩大師も尻もだへ。　是れ陽氣覆載を驅るの時なり。　これを

青春は抒情詩人、朱夏は世間の英雄、白藏は哲學者

青年が感情的生涯に比す、近からずや。要するに、春は感動の期、其の相(すがた)は美、情の天地なり、夏は活動の期、其相(すがた)は壯、意氣の天地なり、而して秋は瞑想の期、其の相は肅、理性の天地なり。青春は譬へば抒情詩人の生活、朱夏はかの世間の英雄、而して白藏は哲學者の生活に喩ふべし。知らず玄冬は如何なる生活にか比すべき。

人間頽然として老い來たれば、枯槁骨立して一見慘然たり、而して戚々然として以て死に至る、頗る晩冬の落然たるに似たり。又見よ、寒景の闃然として以て索然たるを、何ぞ人の羸憊して血氣日に衰へたるに似たる。然れどもかくの如きは晩冬及び老境の容貌のみ、かるがゆゑに冬を悲觀し、かるがゆゑに老境に絶望するはいまだ大法を悟らざるものか。夫れ陰陽消長の無始にして無終なるは、猶生活の首尾なきがごとし、冬來たりて陰氣極するや、一陽來復して、年のうちに踏込む春の日(ひ)脚(あし)長閑に、軒端の梅ふゝみそめて一輪づゝのあたゝかさにまた青帝の駕の近きを知る。老は一面より見れば壞空の時、他の面より見れば新生々の起端、すなはち人間一生の大事圓滿成就して再び大元に歸するの時、これ豈無上光榮の期にあらずや。彼の君子人の老後を見るに、煩惱おのづから銷盡して身神塵垢の表に淨く、外樂を非とし世喧を忘れ、

澹然として慮なく、泊乎として爲無く、内に自持する所ありて行住晏如たり、これ決して情感の春、氣鋭の夏、思索の秋に於て見るべからざる所、老いてます〳〵神健(こゝろすこやか)に、智徳よく和合したる、人生何れの時か此の時よりいみじき。誰れかいふ

"All Nature's imps triumph
While joyful May dost last;
When May is gone, of all the year
The pleasant time is past"

紅葉は二月の花よりも紅にして、秋野は春園の浮靡にまさる、北風一たび度りて万象蕩然、大雪頻に降りて山河銀(しろがね)と化するところ、千里一色、天地一味、古今覆載、何物かこれよりも崇巖、これよりも濶大なる、全壤空は崇の極也、冬は大涅槃の面影也。

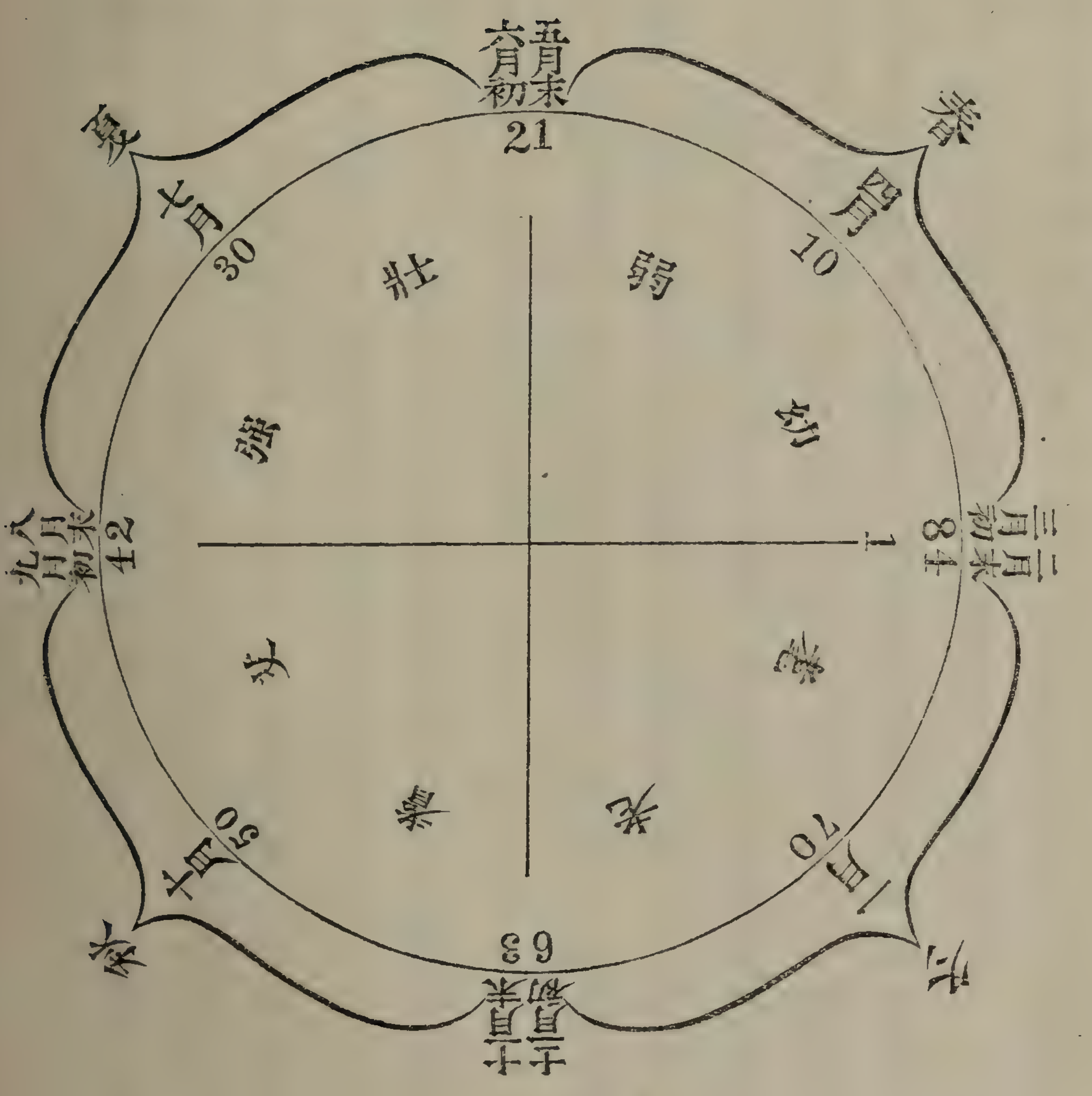
夫れ陰陽の往來に終始無し、生死の終始はたゞ形の生滅によりて決すべけんや。春を端とし冬を終とし、幼を首とし老を尾とする、或は膚淺の見解ならん。まだいとけなき嬰兒(みどりご)とみつはぐむ老い人とは、身も心もよぼ〳〵として、物いふも、思ふも、さだかならず、圓やかにしてうつくしきと皺びてやせがれたるとの差(しな)こそはあれ、心の上よりいへば、其のさかひ分きがたし。譁然として齒の墮ちたる、まだ假の齒だに生ひいで

四時悉く樂時、老少共に樂境

ざる、頭髪の薄れゆきて禿げたる、うぶ髪(げ)のまだ薄うして色赤き、老人が紅顔の童然たる、おさなごの足もとのあぶなげなる、兒(ちご)の我がまゝなる、翁媼のかたいぢなる、兒(ちご)の無邪無心なる、翁媼の惘然たる、いづれか首(はじめ)、いづれか尾(すゑ)、年のうちに春は立ちけり一年(ひとゝせ)を、去歳(こぞ)とやいはん、ことしとやいはん。 人の生まるゝ刹那や、たとへ生氣ありといふとも、殆ど無意識なり、其の息たゆる一瞬、彼れはた殆ど意識なし、共にこれ陽氣潜み藏るゝの時、晻々然たり、暗々然たり、いづれをか春の首とし、いづれをか冬の終極とせん。 あはれ人生は四季に似たるかな。 誰れか此の四の一二を取りて他の二三を棄てんとはするぞ、四季偏く一巡して陰陽和諧し、生住壞空して人竟に正覺す、春に春の能事あり、夏には夏の能事あり、秋冬またおの〳〵其の本領を具ふ、陰陽は往來して須臾だに止まらず、人ひとり退轉す、これ人生の秋冬が屢ゝ索然たる所以にあらずや。 四時悉く樂時、老少共に樂境、予は之れを造化の隱喩とす。

假に人生七十は古來稀なりとあるを標準とし、八十四歳を壽の極とすもとより國土の位置によりて、四季の相異あるが如く、人種の相異によりて、人生の四季おのづから異なり、百歳を壽の極とすべき場合もあれば、春夏の極めて短き場合もあるべし、或蠻族の甚しく早熟なるは春夏

のいと短き例なり、また八十以上にして尚ます〳〵壯なる例もあり、それらは季候の不順なるか、然らざれは閏年なぞに比ぶべし。 大躰について戯に表を作らば、左の如くならん。



式部、近松、西鶴、
馬琴、

まづ我が國の四大作家を棄却すべし

我が國の物語作者のうち、絶群の譽ある者は、紫式部と近松門左衛門と井原西鶴と曲亭馬琴との四家なることは、十指の指す所なるべし、其の他は必ずしもいふに足らざる也。　彼等は其の特質のおの〳〵相異なるにも係らず、いづれも一代を風靡せし文傑にして、殊なる文學系統の中心點となれりし者なり。　假に其の後世にもてはやさるゝの點より、彼等の位置を評價し來たらば、紫式部はチョウサルに比すべく、近松はシェークスピアに比すべく、西鶴はフィールヂンク、アヂソンに比すべく、馬琴は、ヲルタル、スコットに比すべきものならん。　但し、この比較は位置の上の對照也、其の作家としての質を比したるにはあらず。　夫れ英國に於ける古代の叙事詩家、何ぞひとりチョウサルに止まらん、エドマンド、スペンサルを假に比喩の叙事詩家として別格とするも、ケドモンあり、ラングランドあり、ガワーあり、若し散文の詩人をも加へば、リヽー、シドネーの徒、はた一代の雄とするに堪へたり。　而も彼等は皆陪星の位置にあるべきものにて、當代の日輪と見做すべきは、ひとりチョウサルに止めたり。　是れ英國の文壇が重きをチョウサルに置く所以にして、

所謂チョウサル研究會の孜々としてチョウサルの作物を稽査するは、我が國文學者の『源語』を研鑽するに熱衷せるが如し。シエークスピアの劇文壇に於ける、亦チョウサルの古詩壇に於けるが如し。シエークスピアの前後、作劇家輩出せり、而も劇の圓滿なる標本はひとりシエークスピアに於て見出だすを得、猶我が叙事詩的脚本（淨瑠理）の極致の、ひとり巢林子に於て見いださるゝがごとし。フィールヂング、アヂソンの徒は、其の後世に崇尊せらるゝの度、もとより前の二作家の如くならねど、而も謂ふ所の諷誡小說の生命は彼等の作中より闡發せられ、滑稽詼諧の旨、また彼等によりて振興せられき。諷刺の脉を帶べる英國小說は、いづれか其の寫實の脉を、多少フィールヂングに負はざるべき。若しリチャードソンをもて英國に於ける悲哀的寫實の太祖とせば、好笑的寫實の基となりしは明にフィールヂングの諸作なるべし。予はサッカレーの作、ヂッケンスの作、其の他近世の諷刺家の諸作の彼れに負ふ所あるを認めざるを得ず。例へば、サッカレーの如きは、近世第一の諷刺家と稱せらるれど、其のフィールヂングに優る所は、おもに個性を寫描するの點にありて、其の着眼に至りては、必ずしも彼れの上にいでず。サッカレーの諷刺冷嘲せる所は、フィールヂングの諷刺冷嘲せる所也。彼等

サッカレーとフィールヂング

は虛誇虛飾を刺嘲するに全力を傾けたり。此の點よりいへば、サッカレーは諷刺家として新眼を開きたる者といふべからず、猶我が文壇に風俗を叙寫するの作多しと雖も、其の觀風的着眼の、西鶴以上にいづるもの稀なるがごとし。江島屋、八文字舍の諸作の、骨無き西鶴物たるはいふも更なり、京傳、三馬、一九等の、優に一流の特長を具へたるだに、其の觀風の眼光は、殆ど曾て彼の元祿の老通客が百年の昔に洞觀せしものゝ外を洞觀せざるが如し。げに西鶴の主題とせし所は、當代の花柳社會也、當代の肉欲界也、當代の俗界也、彼れはいまだ靈界の消息に觸れざりしものゝ如し。而も俗界は寫實家の本領、現象に因りて實體の消息を窺ふ者の、ひとり現世相に着眼せしは當然のこと也。彼れが色欲の消長を描破し來たる所はやがて移して人間の諸煩惱を描破したるものと見做しがたしとせんや、其の理は一なれば也。若し果たして然らば、彼れの所領は狹局といふべからず、尠くとも俗界に關する限は、人の固有せる諸弱點、鋭く彼れによりて描かれたり、後の諸作家の作は、假令他の點に於て彼れのに優るも、此の點に於ては、恐らく彼れの上に出づる能はじ。元錄文學の復興以來、西鶴のいたくもてはやさるゝは、種々の原因に由るならめど、肝要なる點はこゝにあらんか。すなはち西鶴

西鶴と京傳

は我が寫實家の翹楚にして又諷刺家の祖也、且其の最も大なるものといふを得べし。 而して予はフィールデング全集を抛ちてサッカレー全集を取らんの決心を成すを得れど、未だ西鶴全集を抛ちて京傳全集を取らんの勇無し、蓋し、サッカレーの着眼はフィールヂングの外にいでずといふものから、フィールヂングの着眼もまたサッカレーの外にいでざれど、西鶴の着眼はゝるかに京傳の外にいでたればなり。 明言すれば、サッカレーはフィールヂングの粹を得て別に描性の妙を加へたれど、京傳は他に特長あるにも係らず、西鶴の粹を集め得たるものにあらず、すなはち西鶴は京傳よりも大なる也、すなはち我が國の寫實的、兼、諷刺的小説は(其の皮相の發達はしばらく措き)單に精神の上よりいへば、西鶴以後殆ど進歩する所なかりし也。 吾人はいまだ西鶴と交換すべき好寫實的諷諧家を發見せざる也、

馬琴と近松

世話劇の作家としての近松、歴史的小説の作家としての馬琴、はた同じ位置を占む。 大小の相違こそあれ、彼等の我が古今の文壇に獨歩せるは、シエークスピアが作劇家として、ヲルタル、スコットが史的小説家として、英の文壇に雄視せるにひとしからずや。 日に月に進歩せんとする我が明治の文壇すら、動もすれば回顧し、退轉し、此等四大作家をもて企

理想を高うせよ

理想は無等絶對ならざるべからず

及すべからざる模範の如く思惟し、甚しきは只管彼等の糟粕を嘗めんと欲し、更に甚だしきは、文致も、着想も、結構も、脚色も、彼等に接近するをもて理想とせんとす。あはれ摸擬の原本に勝らざるは列國文學史の明證する所、我が明治の文壇にして模範を過去に求むるの非を認め、理想の世と共に改進すべきものたるを悟り、尠くとも此の四作家以外に理想的作家を建設するにあらずは、我が當來の文學は決して祝賀するに足らざるものならん。予は今日の作家中此の四作家に勝るものなきが故に、かくいふにはあらず、今は尚發達の中途なればなり、予はむしろ今の作家の理想の低きを觀てかくいふ也。今の作家のうち(或は間〻批評家のうちにも)件の四作家をもて極致とせるあり、彼等に企及し得ば能事終はるとなす者あり。彼等は只假鬘と衣裳と顏色とのみを新にして老西鶴を踊らしめんとし、老近松を舞はしめんとす。嗚呼、彼等は彼の四作家をもて圓滿の作家とするか。尠くともシエークスピアの圓滿なるが如くに圓滿なりとするか、或は只比較的に圓滿なりとするか。何ぞ百尺竿頭一歩を進めて、絶對的に圓滿なるものを理想とせざるぞ。文學上の理想は、人智の及ばん限、絶對ならざるべからず、比較的圓滿を理想とするを許すは、恐らく俗世間の方便としての外は非な

るものならん。　理想的美文を生産するの法こそは得がたけれ、美文の理想を鑑定するの道は、今必ずしも得がたきにあらず。　彼等過去の作家を崇拜するの徒は、何が故に審美家の說に耳を聳てざるか。　彼等はかゝる學術上のことにも、安心知足の訓誨を應用せんとするか。　彼等はこゝにも彼の遜讓の美德を應用せざるべからずと思へるか。　甲羅に似せて穴を掘るを文人詞客の本分とするか。　其の器を省し、其の力を揣る、蓋し常に必要なることとなり、然れども凡庸の人誰れか能く我が器能を前知し得といふや。　未だ發暢せざる我が器能を看て我が器小なりと做し、退讓して小さき理想に安ずるは自負して我が器大なりと做し、大なる理想に向かひて勇猛精進するの壯偉なるに如かず。　彼れも人、我れも人、何事か力めて成らざらん、性相近し、習相遠し、人皆佛となることを得、これ豈吾人が修行時の必須觀念にあらずや。　就中、學術上に於ては、吾人は常に此の般の觀念と覺悟と決心とを忘るべきにあらず。蟹は甲羅に似せて穴を穿つといふ、彼れ豈はじめより甲羅に似せんとせんや。　恐らくは其の力彼れよりも大なるを穿つ能はざるならん。吾人の覺悟は此の上もなき大穴を穿たんと決心するにあり、而して之れをなさんとせば、まづ我が過去の四大作家を棄却せざるべからず。

日本昔噺序

此の頭の序といふものばかり、はかなきはなし。名作に添へたるは、團十郎が十八番の藝に、ことさらの口上述べたるが如し、たとへ梅幸が物すとも蛇足のあざけりはまぬがるまじ。ましてや、拙きにはしがきして紹介めいたるは、開業の引札に似てうらはづかし、批評めいたるもこと〴〵しく、講義めいたるもいかゞ、あはれ方今は、など、慷慨の旨をほのめかしたる、そも〳〵物は、など、由緒語りいでたる、あるは昔の戯作者に倣ひて、俳文くづしの駢儷に、をかしき言葉ども、取りしめなく列ねたる、何れも今は廢れたり。中にも、その名、新しき都にも、古りし都にも、打寄するさゞ波の、いとさやかに聞こえたる君が、年ごろ人もゆるす得意の筆に、いみじう物せられしおさな物語集、これに序するは更にかたし。お伽艸紙のいにしへをいはんもふるめかしく、フェーブル、バレブル、フエアリテールスの講釋も、おかしからず、猿蟹、桃太郎の由緒しらべも、燕石襍誌の先鞭あれば、今更の噺き誰れかは聞かん、さりとて寓言の効能を說いてラ、フォンテーヌ、レッシング等の言を引き、アデソン、グレー等の作を紹介せんも物々し、とかう迷ひそめては何事もいふべきなし。

あはれ、此のおどけなきお伽物語、さゞ波君の筆にうつされて、可憐無邪氣の詩となんぬ、寓意の明ならざるを咎むる勿れ、無心は偏僻にまさることあり、詩は理窟のいれものにあらず。此のお伽物語、もし小兒をして無邪の興を感ぜしめて、玄ばしだに肉の需要を忘れしむるの効あらば、著者が此の筆すさび、更に一段の功德たるべし。これを序とす。

日淸事件と文學

韓山の事變は國家榮辱の關する所、如何なる世外の徒も、此の際安閑と優遊し、平然出世間境に逍遙するを得んや。さらぬだに寂寥たりし文壇に一層の寂寥を添へたるは必至の結果也。今や新聞紙の續物すら、緊急なる勝戰の電報に光彩を奪はれ、最も俗衆に喜ばるゝ第三面の雜報、若しくは大歌舞伎の劇評すら、日淸事變の噂話の爲に、其の領分の幾分を削がれんとす。書肆は爭ひて淸韓に關する新著を刊行し、讀書社會はた偏に號外の到るを俟つ。勢ひかくの如くなれば、譯語佶倔なる學術上の論文は、たとへ或雜誌上にあらはれ來たるも、たとへ其の論旨は味ふに足るべきも、讀者大かたは之れを看過し、たとへ端篇の新小說いづるも、其の辭意はゞ見るに足るも、また急ぎて繙く者なし。況や盛

陽滔々炎熱九十度以上に至りて、神氣昏々然たるをや。創作に見るべきもの殆ど無く、評論の咀嚼すべきもの殆ど無き、豈必然の結果ならずや。

そも〳〵此のたびの大事變は、如何なる影響を我が文學界に及ぼすべきか。其の果善なるべきか、惡なるべきか。詳細はかゝる欄内にて論究すべきにあらず、又多少時事に渉らざるを得ざるが故に、吾人の資格は之れをなすを禁ず、爰には、只讀者の參考の料に、ふと吾人が念頭に浮べる所のみをいはん、

一我が國民の敵愾心の、我が國民をして我が國家を明識せしめ、日本國民たることを自覺せしめ、又我が國の朝鮮に對する義擧の如何に高明正大なるかを感ぜしめたる結果は、洽く我が著作社會及び讀書社會の思想感情を高雅ならしむるの効あるべし。

一我が軍の榮譽ある戰勝は、一報到る毎に我が國人の志氣を鼓舞し、所謂國民的自尊（ナショナルプライド）を盛ならしめ、最も多感なる詩人の熱腸を刺戟しては、或は光焔万丈の妙想となり、或は鬼神を感動するの詩文とならん、

一作者及び讀者をして現實に密接せしめ、未來に眼を注がしむるの結果、おのづから彼の死したる過去を徒に回顧し、死事相の爲に死事相を描き、死事相の爲に死事相を翫賞するの風を減じ、彼等をして活社會、活人

間を研究するの必要を自覺せしむべし、

一而してこれと同時に、文學はおのづから現世間的となり、詩歌はおのづから主觀的となり、多くは或一時の感想を歌ふものとなり、小說、脚本にだに當時の輿論の影歴々たるに至るべく、恐らくは個人の一定見を具躰にせん爲に物せられたる小說脚本のたぐひ、今よりも一層歡迎せらるゝ事あるべし、

一一旦凋落せる新躰詩(若し果たして生長繁榮すべきものならば)此の際に於て再び芽し、はじめて其の躰を成就するに至らん。

此の他は今敢ていはじ、さても、我が明治の國俗は英國エリサベス朝の國俗に似たる所あるか、はた十九世紀の英國俗に似たるか、我が陸海軍戰勝の結果は竟にアルマダ艦隊に於ける英國の戰勝に似るべきか、將たウェリントンが歐洲大陸に於ける光榮に似るべきか。 其の國俗の感想に於ける影響は、前者の場合に似るべきか、後者の場合に似るべきか。此の問題閑なるに似たれど、其の答の如何によりて、或は上記の數ヶ條を變化するの力あるべし。然り此の漠然たる閑疑問の答案は、我が文壇の將來にテニスンをいだすか、シエークスピアをいだすか、そも〳〵また十八世紀的詩文人をいだすにとゞまるべきかを决するの力有べし。吾人は今その理を說明するの餘地なし、聰明なる讀者、よく吾人が意を

忖度してこれが解答を與へんや否や。

「ジヨンソン」

民友社出版、不知庵主人、内田貢氏著、「十二文豪」集中の錚々たるものと評すべし。まづ第一章に、十八世紀を評論し、其の如何に墮落したりし時代なるを明にして、此の腐敗中に立ちて毅然節を持せし本篇の主人公が情操と其の汚きバックグラウンドとの照對を叙し、第二章に入りて彼れが幼少期の經歷を詳述し、第三章に其の著作、第四章に其の性行、習癖、及び交遊を語り、第五章、終焉の記に擱筆せり。著書は、其の例言に、頗る博く諸書を參考せし由を語り、且其の主なる目的はジヨンソンの思想を明にするよりはむしろ其の行實を明にするにあり、といへり、然れども、吾人の見る所によれば、著者の意尙別に存するものゝ如し。蓋し、著者は十八世紀の腐敗を論じて暗に明治の今日を諷刺し、ジヨンソンの行實を錄して暗に明治の文士を誡めんとしたる跡歷々たり、随うて、此の傳論は正當の傳論といはんよりは、寧ろ史傳を材料として物したる時論とも評すべきもの也、現世の爲に物したる傾あり。文章も、爲におのづから Oratorical となり、誇張となり、諷刺百出、

慷慨淋漓たり、隨うて、褒貶双ながら妥當を欠くものあり、ゆゑに之れを一種の時論として見れば、文字に活氣ありて面白けれど、嚴正緻密なるべき正當の史傳としては、如何あらんとかたぶかるゝ所尠からず、何となれば、著者は間〻誡世家として激語せるカーライルの口吻を、そのまゝに、採用し、若しくは崇拜家として、ジョンソンに隷侍せしボスウエルの感歎を、そのまゝに、受納し、若しくはテーン等の華文的評論を敷衍して更に之れを誇張せる如き趣あればなり。然れども少瑕疵あるが爲に吾人は此の書を貶す能はず、不知庵主人の二長所の著く此の編に現れたればなり。二長所とは何ぞや、曰はく、逸事瑣談に博通して之れを語るに巧なること、曰はく、事に觸れ物に應じて嘲世諷俗の評論を物するに巧なること、是れ也。讀者若し此の著によりて十八世紀の狀勢とジョンソンの操行とに關して、幾分か事實よりも醜き物と事實よりも美しきものとを見ることありとするも、件の二長所の與ふる興味は此の損を補うて餘あらん、否、讀者は此の小カーライル的誡世論によりて、或は其の懶眠を攪破せられ、尠からず啓發せらるゝ所あるべし。

些末の事なれど、序ゆゑにいふべきもの、一二あり。五六年前かたまでは何事も蕪雜を極めしことゆゑ、著名の人名及び地名すら勝手放題の

發音にてすみしことなれど、今日となりては、紅葉山人を「モミジヤマビト」と讀みてすますはいかゞならん。　不知庵主人の如きは、今知名の著者也、其が校訂の粗漏は讀者幾百人の常住の誤謬を釀さん、大陸の人名地名こそは正音を知ること易からざれ、英米のはウエブストルに據らば容易く知らるべきならずや。　スチーヴンを「ステフヘン」、ソウルズベリーを「サリスバリー」、ゴッスを「ゴッセ」など物したるは、校訂の粗漏に由るならめど、普通の名なるだけに目立ちたり。　又「人生四季」を歌ひしトムソンとあるは "Seasons" の著者のことか、"Seasons" は四季の景物を叙狀するを主とせるものにて、ところ〳〵人生に思ひ寄せたる所もあれど、そは彼の長篇中の一節ばかりにて、本躰は三才間に起る四時の現象を描きたるに外ならず、すなはち比喩的にあらで狀寫的也、こは最も有名なる「冬の篇」のみを窺ひても明なることなり。　若しトムソンに「人生四季」の作あらば、逍遙生如何に祖述を好むとも、殊更に「人生四季」といふ題を掲げて、あの如き華文を物せんや、また彼の文中にトムソンの作を援引せずして止まんや。　吾人は異しむ、著者は何が故に原題名にすら添はらざる人生の二字を "Seasons" の上に加へたるかを。　著者もし "Seasons" を熟讀せし人あらば、人生の二字を加へ得ざるは勿論也、著者或

は彼の作を熟讀せざりしか、何の思ふ所ありてか "Seasons" とのみ題したるものに人生の二字を添へたるぞ。

讀書法を說きて國文硏究者に望む

讀書の法につきては、和漢の先哲が說きおける事ども夥多あれば、今更に辨ふべきことど、殆どあるまじきに似たり、されど、世の進むにつれて、かゝる事だにも改まり行くは、人の着眼の異なればなり。いにしへも、傑れたる人々の書を讀むや、深意を字句の外に索めて、眼光紙背に徹すなど聞こえたれど、それさへ、今謂ふ眞正の讀書法とはおもむきを異にせり。予はこゝに今代の讀書法につきて卑見を陳じ、國文硏究者の參考に資せんとするに當たり、まづ讀書法にくさ〴〵の種類あることを說き試むべし。

素讀法

按ずるに、素讀といふ讀書法も、一種の讀方なれど、此れは殆ど字義をだに解せずして讀むことなれば、讀書法のうちには入らじ。

字句を讀む法

されば讀書法の初歩は字義の解釋なり、此の語は何といふこと、此の字は何といふ意と、一字一句の義を解するを旨として讀む、これを字句を讀む法といふ。小學に在る間は、專ら此の法によりて讀むなり。

意義を讀む法

これより一歩を進むれは、一章一篇の意義を讀む、文章の主旨をも讀みわくるなり、これは高等小學の讀書法なるべし。

文法的讀法

第三段に至りては、語法、句法をわきまへて讀む、これを流行の言葉にていへば、文法的讀法といふ。思ふに、語格、文法を會得せずしては、字句を解するも、一篇の主旨を領するも、なほおぼろげなる所おほく、其の書の本義を誤解することあるべし。テニハ一つの解釋次第にて、意は同じながら、強くも弱くも解せらるべければなり。語學家、文法家の、繰り返して文法、語格の修めざるべからざるを説けるも、此の故なり。

論理的讀法

第四段は論理上より書を讀む法なり、これを論理的讀法といふ。それ文法と論理とは、文章の兩輪、讀む時にも、作る時にも、いづれも必須のものなり。文を作るにあたりて、文法、語格を正しうするは、作家がいはんとする所を明にせんためなり。文法は、譬へば、國語上の通用劵なり。此の通用劵を具有せざる文章は外國の語に等し、同臭の耳には入るべけれど、他人の耳には入りがたし。「一しほの樂み」といへばこそ「一段の快樂」と人皆の解しもすれ、「より多くの樂み」などあらんには、直譯といふもの知らずては、誰れかは解し得ん。其の他、係結、自他、活用のあやまり多からば、意義いかに深しとも、人これを酌まんに由なかるべし、さば

修辭的讀法

文法と修辭法との別

れ意の明らかにあらはれたると、條理のよく通りたるとは、同じきに似て同じからず。例へば「人は萬物の長なるゆゑ獸にひとしき行ひす」といふ句は意は能く通りたれど、理は甚だ違へり。かゝる背理をよくも正さずして讀みもてゆかば、全篇を讀了すとも、何の甲斐かあらん。又かゝる不條理なることを連ねて文を作らば、千篇萬章も譫語にひとしからん。この故に、文法以上に論理の必要あり、文法、語格を領解するかたはら論理をも領解する必要あり。萬卷を讀破すとも、其の字義、主旨を領解するのみにて、其の主旨の論理に叶へりや否やといふを會得せずば、一卷をだに讀まざるにひとし。

さて已に文法、論理を領し得ば、更に修辭法に着眼して讀むべし、これを修辭的讀法といふ。世には往々文法と修辭法とを棍同する人もあれど、二者全く異なるものなり。文法は純正なる國語法によりて文章を作る法を敎ふるもの、即ち所謂國文を作する法を敎ふるもの、修辭法は美しき國文を作する法を敎ふるものにて、又美辭法ともいふ。正しく言はんと欲する所をいひあらはしたるは徒の國文なり、例へば、當用のよく整ふやうに書ける手紙の文言と一般にて、實用には足れど、いまだ讀者の心を悅ばせ又は驚かして感奮せしむべき力なし。たとへば荒

高等讀書法のくさ〴〵

削りの木材の如し、たゞ雨露を凌がんかりそめなる屋などの料とはすべけれど、瓊樓金殿の柱桷とはしがたし、修辭法は文に木犀をかくる法、いはゆる「仕上げ」を敎ふるものなり。　さればまた修辭的讀書法は、此の彫琢の鹽梅を鑑みて、細工のよしあしを評價し、一段劣れる讀者等がえも心附かぬあたりに文句の旨を味ふことを敎ふ。

さて此の上に、尙幾多の讀書法あり、假に分類して名を附すれば(第一)全体の隱微を讀破する法(第二)作者の品性を讀破する法(第三)時勢の特質を讀破する法(第四)人生の意義を讀破する法(第五)造化の妙理を讀破する法、これなり。

文章の批評は、もとより批評法の第一段として、甚だ大切なることなり、又講堂若くは講義錄やうの者には適當なれど、若しこれのみにて讀書法の能事畢れりと思ふときは、弊の生ずるを免れざるべし。　例へば、文章軌範風の批評は往々讀者をして文章を細工物のやうに思はしめ、一篇の眼目よりも一字一句の妙に目を留めしむる處あり、修辭のすぐれたるに心を奪はれて、議論の是非をさへわきまへずなることあり。　もとより韓、柳、歐、諸家の短論文などにありては、さる弊も尠けれど、源氏物語、枕艸紙、つれ〴〵艸など、又は史記、春秋、老、莊、韓、荀など、やゝ複雜なる大文章

こゝに本誌とあるは『國學院雜誌』を指す

に至りては、日ごろよく讀み明らめたる人さへに、作全体の特質はいかに、と質さるれば、具にはえ答へざるもあり。　よし答ふるも、おしなべて森嚴なりとか、幽玄なりとか、優美なりとか、義理透徹とか、只漠然と數言もて答ふるのみ。　あるは長々しく答ふる人あれど、大かたは同じ意を、語を換へて繰り返すのみにて、些も質問を啓發するに及ばず。　よくせずば、其の冗長なる答すら、なほ文章の批評にて、作全体の中に籠れる思想、觀察、觀念の特質は、おぼろげにだに、說かぬもあり。　こは必ずしも其の人の識見淺きにはあらず、我が國從來の習ひとして、何事もおほらかに其の大體を會得するか、又は箇々の枝葉を吟味するをよしとし、近ごろの洋學者などのすなるやうに、總合歸納するをよしとせざるゆゑ、よく心得たる人々も此のならはしに妨げられて、くはしく說明することを難んずることあるべし。　近ごろ流行する古書の評又は古文人の評などは、甚しく杜撰なるも多かれど、中には國學、漢學の諸先輩の「よく論じたり」とうなづかるゝもあらんか。　但し「よく論じたり」とは其の論の立てかたにありて、其の主意及び結論は、かねても人々の心得られたることにて、殆ど別に珍らしきふしはなかるべし。　例へば、本誌「發刊の趣旨」中、將來の國文研究法につきてもほゞ述べられたる如く、こゝにいみ

じき評論家ありて、源氏物語、枕草紙、萬葉、古今などを精査して、古今集に貫通せる思想は云々なり、當代の人々の戀に關する普通の思想は云々、物の生滅といふことに對する觀念（さとり）は云々、但し其のうちの幾分は文學上の慣はしなれば必ずしも當時の人の實情とは見做しがたし、只云々の觀念などは、全く當代の人の確信せし所、すなはち當時の特質、これを哲學史上よりいへば、某々等の懷抱せし觀念に似たり、又萬葉の歌人は、概しておぼろげながら造化といふものを、云々の物と思ひなしたるに似たり、其の證は云々、神とはかく〳〵の物と思へりき、其の證は云々、其の一代に透徹せる理想ともいふべきは云々、これらはひとり萬葉に見えたるのみならず、紀、記にも明らかに見えたる所、其の證は云々、さて又源氏物語は、當代の風俗人情の反映、之れを同代の正史に徵して若しは他の物語類、今尙傳はれる建築物、衣服、器具等に照らすに、現に云々の符合あり、又之れを理論上よりいふも云々、要するに、源語は當代の反映なれば、これ所謂主觀的歷史、すなはち藤原氏專權期の目に見えぬ事實の影を映じたるもの、更に精しく之れを案ずるに、當時は云々の時代なり、當時の人々はいはゆる人間とは、かく〳〵の動物なりと思ひたるに似たり、社會といふものはかやう〳〵にして轉移するものと信じたるに

似たり、其の證は云々、これ一つは佛教の影響、又一つは儒教弘布の然らしめし所、否、畏（かしこ）き神ながらの道の光なり、こはたゞ此の物語のみが證する所ならんや、當時の史にも見えたり、枕草紙にも、狹衣にも、はた今に傳はれる器具、服裝、繪卷物などにも見えたりなど、滔々億萬言をつらね、博引旁證、いとつまびらかに評論したりとせばいかに。　又別にひとりの批評家ありて、兼好法師といふ題にて同法師が著をあまねく讀み、つぶさに咀嚼し、古博識が注釋評論をも玩讀し、さて同時代の正史をも稽へ、時勢のいかなりしかといふことをも、事實と道理とによりて、精査し、さて後徐に筆をとりて、同法師が著につき、一々證を擧げて評論し、兼好の觀念の如何なる點が我が國の博識たる特質なるか、其の人間、生死、仁義、禮智などいふことに對しての解釋はいかに、總じて兼好は、いかさまの人柄なりし、歌人としては如何なる階級に立つべきか、文人としてはいかに、今謂ふ哲學者としてはいかに、たゞ人としてはいかになど、大かたならず謹嚴縝密に論評したりとせばいかに。　又は普く和漢の名著を讀破し、これに對照するに、泰西古今の編著述作を以てし、かれに通貫せるところと此れに透徹せる所とを比較し、周細精到に論評し、或は有形無形の事實に徵し、或は最新學理に據り、所謂人生とは如何なる深義を含

めるか、所謂大道とは何をかいへる、普く人間を統御する大勢力とは何ぞ、天とは何ぞ、命とは何ぞ、と、例へば、古今の大哲學者が演繹歸納して論斷すらんが如く、過現未三世に亘るべき大なる眞理を發揮したりとせばいかに。　これ皆高尙なる讀書法より得らるべき結果なり。　思ふに、今の國文研究者中、或は此等論評を讀みて後に、はじめて作及び作者に關する隱微をさとり、又は尙心得ずとて打かたぶく人もあらめど、其の論評の(近ごろ世間にありふれたる)杜撰疎鹵のものならぬ限りは、眞理は奇ならざるならひにて、別段に驚き怪しむべきふしもなければ、人々も、時勢に後れざる限りは、げにもとうなづき、所詮は「よく論じたり」とうなづかるゝに過ぎざるべし。　何となれば、其の評論にして正鵠を誤らざる限りは、件の人々も夙にさとり得られたることにて、只いまだ明らかに表白（いひあらは）すること能はざりしか、又はいひあらはさん方法の知られざりしため、今まで躊躇せられしに外ならざればなり。　かゝれば我が國にいまだ此等高尙なる讀書法の行はれざるは、必ずしも其の道の人々の識見ひくきが爲めに非ず、むしろ周細綿密、深刻、徹底など形容すべき批評法の知られざりしが爲のみ。　具にいへば、從來の國文研究者は洋學者の謂ふ所の詩人といふものに似て、天地間の森羅萬象をも、文をも、歌

をも直覺風に觀、または讀む癖あり、　直覺風とは、理窟にすがりて觀察又は玩讀することをせずして、只一瞥、又は只一讀の下に感得して、おのが心に領解する所あれば足れりとしたるなり。　其の人ひとりの上よりいへば、げに是れにても事足りぬべし、浮屠氏の頓悟とやらん、はた此の意なめり。　されど、若し他の蒙昧なる同胞をも敎化せんの願を抱く時は、此の直覺法はいかゞあらん。　わが一心の安堵を求めんためには頓悟もいとめでたし、されど一切衆生を化益せんと願求せば、世尊が反覆丁寧の大說法も、必ずや已むを得ざるべく、西洋風のくだ〳〵しき長論文も必要なるべし。　曉者こそは、拈華微笑だにせば、げにとも悟らめ、庸人昧者には、一々古名著を分析解剖し、云々の故に何の書は貴し、云々の故に某作家は私淑すべし、又云々の故に某書は咀嚼すべき價あり、と說明品隲せざるべしや。　總じて古文學を研究するは、現在及び未來の鑑とせんためなれば、書は決して死物、死記錄として讀むべからず、過去の活ける事實の記錄、我が祖先同胞が心の歷史、人の思想感情の如何に變遷しゆくかといふことを示す鏡、吾人が未然の進步、未來の發達の必須なる階梯として讀むべきなり。　若し夫れ仔細に字義を解釋するは、一句の意を明らかにせんためなり、一句、一章の義を說くは、全篇の大旨を

領せしめんためなり、語法、文格を講ずるは、全篇の大旨を明瞭ならしめんためなり、論理、修辭の詳細を講ずるは、其の全篇の旨の是非曲直を明らかにして、同感すべきには同感し、反對すべきには反對し、さながら原作者其の人と感慨を同じうせんためなり、而して原作者と感を同じうするは、原作者の隱微を闡明し、其の特質を知り、性情を知り、其の觀念、理想を明らかにし、これによりて當代の時勢をも窺ひ、これを今日の時勢と對比し、人間進步の跡を考へ、榮枯盛衰の理を稽へ、大道の流行、造化の妙配劑を瞑想し、以て大覺悟の緒をひらかんためなり。　これ之れを眞の批評ともいふべく、眞の讀書法ともいふべく、眞の解釋ともいふべく、又眞によく道を求め學を好むものとも稱すべし。　此の心をもて讀むときは、萬葉、古今、等、諸種の歌集は、いづれも無上の正史なり、たゞしかくいふは、例へば萬葉の或作が史上の大事蹟に關係したるが故のみにあらず、又往々にして國事に關したる御製などのある爲めにも非ず、はた鎌足等、三四の史上人物の詠あるが爲にも非ず、寧ろ全集にこもれる思想と感情とが當時の人情風俗の反映なるが爲なり、正史上には決して見る能はざる無形の事實を表示すればなり。　彼の集に見えたる思想感情を分析解釋し、更に之れを綜合して概括すれば、顯然として當代の

國俗を現前し、まのあたりそが言動するさまを想像するを得ればなり、史家とは、乾燥零碎なる死事實を記憶する者の謂にあらず、史を讀むとは、徒に過去の事實の皮相のみを讀む謂にはあらず、過去の人及び社會を心の目もて活ける如く觀て、其の肺腑に入り、零碎なる史上の記錄には見えがたき榮枯、治亂、興廢、消長の由りて來たる所の、所詮は當代の人心に基き、史に所謂原因由來の如きは、畢竟は、近緣若しは有形の因たるに外ならざるを察るをいふ。　こは只一例のみ。　この法をおしひろめて、一層複雜高尙なる書に及ぼさば、其の裨益豈啻一代の風俗を髣髴するに止まらんや。　然しながらかゝる高上なる讀書法は、もとより口に言ひ易くして實際に行ひ易からざるべし、然かも必ずしも行ひがたきにあらず。　總じて學問の本義は、有形無形の事物に因りて、宇宙間に流行する無上の大眞理を會得するにあり、若し此の本意を餘所にして書を讀まば、よしや億萬の書を諳んずとも、譬へば、守錢奴の徒に財を積みて、全く其の用を忘れたるが如く、我が一個の慢心を悅ばする外には、秋毫の得る所もなかるべし。　古賢人又は今の諸博識はいふに及ばず、普通の國文研究者とても、いづれかかばかりの理を知られざらん。　只其の平生のならはし、前にもいへる如く、專ら直覺を重んじ、剖折綜合し

て説くことを志りぞけらるゝ故、心ある人々は日に月に温古知新して、いよ〳〵ます〳〵賢ならめど、考淺き人々、又は其の門に遊ぶ後進は、性來利根ならざる限りは、啓發せらるべき機を得ること遲く、時としては十年猶一日の如く、徒らに死記死誦し、或は身の終はるまで、訓讀註釋の末に拘泥して止むものあらんか、歎ずべき至りならずや。　此の病を治せん策は如何。　予はまづ專門の國文研究者たる人々が、忍びがたきを忍びて、今の粗笨杜撰なる臆測の評論をも精讀し、其の專門の學植もて深切に其の論證の誤謬を指摘し、又或時は彼等大胆なる評論家者流を誨導幇助して材を供するに吝ならざらんことを望む。　これ短長相補ふ法なり、若し短長といふ語を不倫不當の語とせば、分業相補ふ法といはん。　但し維新以降受授の法頗る亂れ、禮をわきまへざるもの甚だ多し、例へば、若干の好材料の、極めて得易からざるものを專門研究者に負ふ所ありながら、其の著作するや、さながら何の負ふ所無き者の如く、僅かに卷頭に三四言の感謝を錄するか、甚しきは他人の持說をも、ほしいまゝに、我が議論中の一節として、これに若干の粉飾と推度とを加へて、揚々として說き去り、片句のことわりをだに添へざるがあり。　此等は沙汰の限りなり、諸專門家をしてます〳〵彼れが論の粗笨陋劣を賤ま

しむるに至る所以なり。さばれ世の學問を喜ぶもの、豈必ずしもかくの如き者のみならんや。一字を教ふるも尙師たり、まして諸評論の生命たるべき事實、實例、證文、材料、等を供して理を考ふべき根底を垂示する人をや。夫の造化や、天道や、森羅萬象を化現して、普く世人に考察と瞑想との材を供す、如何なる至賢、大賢といふとも、天に負ふ所なくして何事をかえさとるべき。此の故に頑愚の俗衆は曉らずして獨り自ら傲れども、聖賢は毎に〳〵天の德の偉なるを稱ふ。大日輪は曙出晩沒して普く宇內に光臨す、如何なる動植といふとも、日光の澤に浴せずして生きんや。日の恩かく偉なりと雖も、大陽は其の恩を認めざる者を惡まず。夫れ學者は、一視同仁、德光は大明に、餘澤は造化に等しからんことをこそ、其の表極とはすべけれ。專門研究者、もし此の雅量をもて今の學壇に臨み、斯學の奬掖に從事せられなば、獨り國文の隆運の期すべきのみならんや、古今未照の眞理の光り、我が日本の大帝國より發して、世界列國の將來を照らさんも、また期して俟つべきにあらずや。此の故に、予は我が國の專門諸家の、常に世の評論家を扶掖し、教諭誨導せられんことを願ひ、又みづからも之れと同時に、次第に推理概論の習慣を養成し、頓悟直覺して深くみづから益する傍ら、且つ説明し、且つ解釋

して、廣く他を啓發せられんことを望む。要するに、吾人は常に書を讀むにあたりて、讀書法の階段の層々として、只一二段のみならざるを思ひ、其の頂に達せざる限りは、曾て休息せざらんの大決心あるべきなり。蕪辭冗漫、意と言と相伴はず、讀者よく説者の主旨を領せられたりや否や。

（廿七年十二月）

小説家は實驗を名として非義を行ふの權利ありや

小説作者の主題は人なり、人の性情行爲なり。非義醜德も、實感を挑發せざるやうに描かるゝ限は、小説脚本の品題たり。かるが故に小説家は、其の材料を得んが爲に、非義醜德に接觸するの權利ありや。

一を聞いて十を知るものはあり、一端を經驗せずしては二をだに想像し得るもの稀なり、かるが故に、小説家は其の主題の素を自家の實驗に求めざるべからざるか。

所謂實驗とは如何。非義醜德を觀察するの謂か、みづから之れを行ふの謂か。若し後者なりとせば、竊盜の內秘を描かんとする時は、みづからまづ竊盜たり、姦夫の心術を寫さんとするときは、みづからまづ姦通

詩人小説家の不義醜徳を觀察するは醫博士の惡疫を診察するが如くなるべし

を試みざるべからず。然らば惡虐を描かんとしてはみづから惡虐し、殺人を狀せんとしてはみづから殺人すべきか。若し果たしてかくの如き理ありとせば、非義醜徳を主題として小説を作する者は、最も恐るべき世間法の賊なり。彼れは、文壇に於ては如何なる功あらんも、吾人が一日も共に齒することを屑とせざる者なり。吾人はかゝる小説家に向かっては、特に警察の嚴重ならんことを願はざるを得ず。

或は所謂實驗の義は、單に醜徳を觀察するの謂なりとせんか。吾人は所謂觀察の、科學者等が謂ふ所の觀察にひとしかるべきを信ず、アヂソンの『スペクテートル』に於ける觀察者の義なるべきを思ふ。即はち觀察者は須からく淸淨無垢の傍觀者たるべきなり。彼れ必しも冷々水の如くならざるべきも、潔白雪の如くなるべきなり、情は時に動かされて同悲同喜の涙を灑ぐも、身は常に卓然また超然、汚穢の外に立つべきなり。然り、同悲同喜するも、審美上若しくは倫理上、若しくは人情の上より同悲同喜すべきのみ。些の實感をだに挑發せられんか、彼れは觀察者の資格を失ひ、又詩人たるの威嚴を損ふに至らん。思ふに、小説家の不義醜徳を觀察するは、譬へば醫博士の惡疫を診察するがごとくなるべし、些少たりとも其の毒に冒されたりとせば、彼れはもはや健全な

名譽ある失敗

恥づべき失敗

る醫師にあらずして、憫れむべき患者の一人たるべし。　吾人は深く斯の如き醫博士を傷まん、而も醫師みづからは其の職分に對して幾分の恥辱なき能はざるべし、自家の攝生術の不足を表示すればなり。　さりながら疫毒の感染と不義の薰染とは、日を同うして語るべからず。　前者の傳染するや、或は偶然にして不可思議なることあり、後者に薰染するや、其の人あらかじめ之れを意識し、多少自致せずんばあらざるなり。人情の上よりいへば、吾人はかくの如き道德的病者をだに、憫み且傷まざるを得ず、蓋し、其のみづから揣らずして、おろかにも極めて危險なる地に臨み、道德的孱弱の心を以て、敢て道德的疫毒を診察せんとし、却りて之れに感染し、遂に世間をも害毒するの道德病者となれるを傷むなり。　醫師の場合に於ては、(若し毫も自招自致の影なき限は)吾人は之れを名譽ある失敗と名く、詩文人の場合に於ては、到底自致の影なき能はざるの理あるにより、吾人は之れを憫むべきの失敗といふ。　而して若しはじめよりみづから意識し、研究の爲と號しながら、尚且此の失敗を招きたりとせんか、吾人は之れを恥づべき失敗といはんとするなり、其の人のおの惚れの極めて甚しかりしを證すれば也。

さかしながら更にこゝに一作家のあるありて、多少疑はしき破廉恥罪

を行へりとせよ、其の行爲の果たして法律上の罪なるか、又は尙疑似の間にある破廉耻罪に類したるものなるか、そは暫く別問題としてさし措き、兎に角明白なる辨解無き限は、尠くとも一種の破廉耻罪たるの影は掩ふべからずとせよ。　此の時に當たり、一新聞紙の、歷々件の罪又は醜行の始末經歷を摘發して、其の紙上に公錄したるありとせよ。　吾人は此れに對して如何なる評判を下すべきぞ。

吾人はまづ其の記事の實なりや否やを疑ふべし。　其の新聞紙の平生の主義、道念、着眼、特質、等をも考査せんとすべし。　其の記事は首尾圓合して毫も予盾撞着する所なきか、其の記事とその記事の主人公の性質とは相適合せるか、件の主人公の爲人はかゝる記事を牽起すべきものなるか、若し假に事實なりとすべくば、此の記事中に見えざる如何なる隱微の弱點が、彼れをしてかゝる悲しむべき、若しくは憫れむべき境遇に陷らしめたるか、其の外に見えぬ悲劇の因緣は如何、若しかゝる因緣ありきとすれば、該因緣は特り彼れをのみおとしいるべき性質のものなるか、齡を同うし、境遇を同うし、其の他種々の點に於て、彼れと同樣なる狀態にあらんもの丶、概して陷るべき惡因緣なりや否や、吾人はまづ此等諸點につき十分の考察を加へざるべからず。

詩文人の小なるものは最も憫然なる動物なり

夫れ詩文人は、固と多情多感なるが故に、詩文人となれるものなり。彼等は最も感じ易き者なり。一國民を一大氷海に譬ふれば、所謂詩文人は件の氷海中の最も凍れること薄き部分を代表す。一陽來復するや、南枝まづ綻び、薄氷まづ溶く。詩文人は衆に先ちて陽氣の來復を知るものなり、是れ其の大にしては一世の豫言者(プロヘツト)たり、理想の能說者(セイアル)たる所以なり。彼等は極めて多情なり、かるが故に、一切万物に同感す。是れ其の大にしては花鳥風月にも思を寄せ、森羅万象をも有情視し、動もすれば万有神敎の旨に流れ、宛然たる小造化翁となり了する所以なり。又彼等は想像の力に富む、彼等は無より有を作る、是れ其の大にしては理想の別乾坤を作り、大宇宙を縮小して小天地畵を作り得る所以なり。しかれども此等は皆其の高且大なるを得たるの塲合のみ。詩文人の小なるものは最も憫れむべき動物なり。彼れらは多感なるが故に文弱女兒の如く、文弱なるが故に、多病、多病なるが故に孱弱、孱弱なるが故に心ひがみ、心ひがめるゆゑに度量狹小、おの惚れの心强く、我意私情尤も盛なり。すなはち私慾多くして多情なるがゆゑに、煩惱念頭に滅することなく、煩惱胸に滿ちて想像多きがゆゑに、臆測邪推息む時なし。こゝに於てや、所謂多感は放埓自恣の緣となり、所謂多情は放蕩遊惰の

小說家は實驗を名として非義を行ふの權利ありや

古來の詩人は概して世間人としては失敗せり

源となり、所謂多想像は偏癖邪推の根となる。彼等はひとり自家の爲に多感し、ひとり自家の爲に多情し、ひとり自家の爲に多想像す。されば彼等の筆をとりて作するや、主人公は毎に作家みづからなり、其が描く所の社會は自家の眼中より見いだしたる小社會なり。彼等の諷刺は自家の私憤也、彼等の人生觀は特り自家にのみ宜しき人生觀なり。其の作のたとへ一世の一分を動かすも、久しく衆人を感動せざる、宜ならずや。古來多數の小作家は、かくの如くにして失敗せり、よしや文壇には其の名を留め得たるも、世間人としては著く墮落し、汚名を後世に遺したり。大作家と稱せらるゝ者だに、概して世間人としては失敗したる、皆此の品性の病の故也、其の性の弊に勝つ能はざりしに因るなり。古今幾千万の詩文人中、能く此の多感、多情、多想像の病に打克ち、否、むしろ此の病毒を翻轉して、起死回生の神劑たらしめしものは、シェークスピア、ギョオテ等數人を除かば、恐らくは多く算ふること能はざるべし。見よ、彼の釋迦無尼を、彼れ最多感なりしが故に厭世し、最多想像なりしが故に一切衆生に同感し、遂に之れを救はんの大願を起こしゝならずや。ギョオテ、シェークスピア等大詩人の終を全うしたる、これはたゞ其の想像の絶大なりしに因らずとせんや。之かれども、かくの如きは、只

少數に於てのみ見得るの例なり、尋常小作家に向かつて、此の大想像を望まんは、家鴨をして鴨の如く飛ばしめんと欲するが如く、理の許さゞる所ならん。　吾人は小作家の墮落と失敗とを見ては、只長大息して自ら戒むるの外を知らざるなり。

然れども、若し件の小作家(若しくは大作家)にして、其の耻づべき行の摘發せられたらん時、尙毫も耻づる色なく、揚々自得、我れは小說研究の爲に實地經驗を行へるのみ、不義醜德に接觸せし、何の非かある、多少汚行ありし何の耻辱ぞ、と公衆に向かつて辨じたりとせば如何。　吾人は更に論辯する所無き能はざるべし。

社會の罪と個人の罪惡

世間或は社會の罪といふことを口にして、個人が罪惡の原因を其の人の境遇若しくは當時の風俗及び社會に歸し、彼れが云々の破廉耻罪を犯しゝは、其の周圍の腐敗したるが爲のみ、彼れをして前に擧げたるが如き不條理の分疏を吐かしめたる、將た當代の腐敗的道德の結果なるのみ、特に其の人のみを咎むるは酷の至なりといひ、或はまた吾人が上にいへる說を敷衍し、詩文人の特質の極めて誘惑せられ易き者なるを

性の罪

說き、すなはち彼等が罪惡を庇し、是は彼等が性の罪なり、其の人の罪にあらずと爲し、其の最も不條理なる分疏をすら悉皆不問に附し去りて

吾人は社會の罪を責めて個人の罪惡を庇護するものを惡む

冷々然たるものあり。彼等は温乎たる君子人の雅量を學びて然るか、はた冷然たる哲學者の識見を氣取りて然るか、吾人は之れを知らず。但かゝる說を學問上の說として說かずして、公然世間に向かつて一種の說法として唱ふることの、彼の優勝劣敗の學說、若しくは腕力是れ權利の學說を、一種の世間法として說くことの危險なるがごとく、危險なるを信ぜずんばあらず。性は善惡業の因なり、境遇社會は善惡業の緣なり、因緣相會して善惡の業を成す。罪をひとり社會に歸するは、學說としてだにいかゞあらん。ましてや之れを世間法として世間に向かつて說かんとするをや。奈翁が壓制の下、大革命の餘弊積重したりし時、ヸクトル、ユーゴーの之れを唱へし、けだし、酌量すべき道理あらん、我が明治の天地に立ちて、專ら社會の罪を鳴らし、强ひて個人を回護せんとするは、却りて個人及び當社會を害ふものにあらずや。個人をして自戒、自責、自省、自懲の念を殺がしめ、自力特行、天を怨みず、人を咎めざるの氣概を亡せしむる所以にあらずや。吾人は深く社會の罪をのみ責むるものを悅ばず、彼等は壓世、憎人の徒を釀生するの傾を具すればなり。罪を性に歸するの說、これはた說く宜しきを得ざるときは、多少弊の生ぜざるをまぬかれじ。蓋し、其の性を惡みて其の人を憎まざるは、君子

人の高德なるべしと雖も、こは疑ふらくは私の利害に關したる場合にのみ應用す可きものならん。世間に對ひて廣く此の寛典を布かんとせば、社會の平穩は遂に期すべからざるの恐れあらん。惡人を憫みて一種の精神患者とし、犯罪人を傷みて一種の道德病者とする、哲學家若しくは科學者の立脚地よりすれば、當然の觀察たり。吾人は之れに對して何等の異論をも挿まざるのみならず、此の難治病を根治すべき道德的大國手の出世せんを、彌勒を俟つが如く、翹望せんとす。而もこれ釋迦、基督等、諸聖人の夙に看破したる難治の症也。殊に、釋尊の名けて煩惱といへるものは、いとよく罪業の病痾たるを表示せるにあらずや。古聖人の口を揃へて、自省、自責せよと敎へたるは、此の精神病痾を醫治するの唯一方法を說けるものにあらずや。汝が敵を愛憐するは大なる美德なり、然れども之れと同時に、自誡自省の必要を奬說する所なくば、そもまた義に伴はざるの婦人の仁とならん。吾人は偏頗なる理論の世間に向かッて唱道せらるゝを聞く每に、危險の之れに伴ふを感せずんばあらざるなり。

さもあらばあれ、人誰れか過失なからん、ましてや最多感、最多情にして誘惑せられ易き詩文人をや。吾人は罪を社會若しくは性に歸して、人

を咎めざる學說の漫然世間法として唱へらるゝを悅ばざると同時に、一個人としては深くかゝる過失者の不幸を傷まざるを得ず、いまだ其の人を憎み、若しくは罵り、若しくは嘲るに遑あらざるなり。たゞし、こは其の人の無意にして(又はよしや有意識なるも)其の抑ふべからざる情に驅られ、所謂騎虎のいきほひ、自ら制するに由なくして、愴然犯罪せし塲合のみにいふなり、はじめより罪惡と意識しながら、文學研究の爲に故意に之れを行へりといふ者に向かッては、吾人いまだ遽に同感若しくは寬恕の意を寄する能はず。

そも〳〵詩文人は一世の豫言者たり、理想の能說者たらん爲に、罪惡を犯すの權利ありや。假に其の作物のいみじき價値は、此の罪惡を償うて餘あるべしとせよ。功過相償うて餘ありや否やは、疑ふらくは後世の裁判に一任すべきものならん。罪惡を行ふ者みづからは(殊にいまだ作せざる時に於ては)、かりそめにも之れを口實とするの權利なかるべし。若しみづからかくの如きことを口にする者あらんか、人の之れを目して、智は以て其の非を飾るに足るものといはんも、之れを否拒すること難かるべし。思ふに、惡をなすに當たり、道德若しくは理義の假面を蒙る者は惡人の最も卑劣なるものなり、又惡をなせるの後、之れを分

最卑怯なる過失者

山田美妙齋氏

疏するに、高尙げなる口吻を藉る者は過失者の最も卑怯なる者なり。嗚呼、人誰れか過失なからん、已に誤ッて過失を行ひぬとせば、遂にまた廻らすべからざるなり。　此の失を償ふの法は二あるのみ、曰はく悔悟、曰はく將來の淸淨なる行爲、是れのみ。　若し一たび我が非なりしを悟らば、其の善に向かひ義に就く、須からく水の低きに就くが如くなるべき也。　六尺の五躰を泥土に委し、鬚眉の面を塵埃にまみれしめ、頓首萬拜して罪を謝する、是れ豈義を知るの勇にあらずや。　吾人は僞善の大疫毒なるを知り、此の疫毒の恐らくは今の社會に彌漫したるが如く感ずるが故に、不義を粉飾するに高尙げなる道義又は理論を以てする者を憎むこと、啻に蛇蝎を忌むが如きに止まらざるなり。

あはれ、詩文人は實地研究を名として不義を行ふの權利ありや。　吾人は之れを細論するの要あるを見ざるなり。　以上の數百言、已にほゞ其の非なるべきを示し得たりと思はるればなり。　讀者或は本論の甚だ唐突なるを異しまん。　吾人をして由來を語らしめよ。　このごろ社友某々二氏、いぬるころ『万朝報』の紙上に見えたる山田美妙齋氏の辯解を讀みて、頗る憤慨する所あり、或は之れを倫理上より、或は之れを審美學的觀察點より、巨細精刻に論駁し、おの〳〵長篇の論文を寄せにき。　其

の論双ながら精讀するに足るものなりと雖も、其の個人に關する所、やゝ多きに過ぐるが故に、聊か思ふ所ありて今はこゝに之れを掲げず、隨うて多少辯ずる無き能はざるに至れり。　吾人は美妙齋氏の性行の、果たして彼の『万朝報』が報じたる如くなるか、若しくは其の記事の大概は、甚しき事實の相違なるか、固より之れをわきまふる能はず、吾人はむしろ彼の面白からざる記事のなかば以上を謬傳と信じ、尠くとも罪惡らしき黒き影の美妙齋氏の令名に伴はざるべきを信ぜんとする者也。而も美妙齋の氏辯解の下にわぐるが如くなるを見ては、其の黒き影の果たしていかばかり薄かるべきかはいまだ之れを明にする能はず、氏は辯じて曰はく

妖艶の巣窟たる淺草公園地にても殊に腕前の凄しさいはれし石井おさめ其人の人さ爲りは初より知りて之れを種にせんさ思へばこそ近づきたれ觀れば玆に三五年其間の研究にて人事千百その怖る可くその悲むべくその笑ふべき所もいさゝかは覺ねつ竊に枯骨に肉する感、世暮れて夢寒く今や殘月雲を離れ覺悟の禪味漸く深しイザヤ久しぶりの筆を染めんかさ心竊に期せし際料らざりき御社新聞の記事に由つて早く之れを世に紹介され端なくも御社新聞は奇妙の前觸太鼓ならんさは、夫故にこそ此場合御社の記事の誣妄なるをのみ責めず又腹きたなく怒りもせず、已に昨日を以て其小説の稿を起し破題まづ御社の記事を其儘に轉載せり小説中の人物も亦更に詐らず懸さず總て現存の人を其儘に描き出

だして事の眞僞を一擧に示すべく近くは淺草最寄の酒樓茶席などに奉侍する婢女下僕の類に至るまでも筆に任せて列擧せん兎に角に事情右の如し杓子定規の條例に由れば貴社の記事の可なり誤れる點は改まつて取消を望むのみ

と。

いにしへ戰國の士人は、汝虚言すといはれてだに、怒るや烈火のごとく、敵者を兩斷せざれば、まづ自ら死なんと欲しき。　これ士の自然の情操ならずや。　然るに今公然新聞紙の上に於て、法律上の罪人と罵られながら、其の「可なり誤れる記事」をも明には正誤せしめんともせず、又敢て其の「誣妄なるをも責め」んともせず、又殆ど「怒もせず」恬然又冷然、否、むしろ揚々として自得の色ある山田美妙齋氏の心術は、之れを稱して大人の雅量といふべきものなるか、はた何と名くべきものなるか、吾人は頗る惑はざるを得ず。　夫れ美妙齋氏の名は、尠くとも地方の青年讀者に向かつては、方今文壇に著明なるものなり。　氏が一身に負へる醜名は小説壇全躰の醜聲惡名とならざるを期せざるなり。　たとへ氏の雅量は、一身の爲に、『萬朝報』の誣妄を忍ばしめきとするも、氏が文壇の一名家たるの責任は、氏をして文壇の爲に怒らしむべき筈なり。　而して氏は冷々然たり、否、却りて得々たり。　吾人は怪訝して更に怪訝せざるを得ず。　吾人は固と文學を論ずるを旨とし、必ずしも詩文人の性行を

是非ずるを好まざる者なり、去かれども今や『万朝報』の記事八面に喧傳し、而も社會の耳目たる新聞紙は、何故にや、冷然之れを看過し、たま〳〵批判の語を下すあるも、例の數言の冷評にとゞめ、甚しきは其の記事を實としながら、尙且醜行者を辯護せんとするものあり。　殊に其の甚しきものに至りては、「明治の所謂〇〇者中には汚行醜德なるもの何ぞ必しも美妙に限るとなさん」といひ、且かゝる汚行者の爲に同情の熱淚を灑ぐと自白す。　嗚呼、これ何の心ぞや。　假に彼の記事を事實なりとせんに、彼の記事に匹敵すべき破廉耻罪を犯しゝ文人、知らず何の邊にかある。　過失を行ひしものは、或は恐る、今の文壇に尠からざらんを、たゞし罪惡を行ひしものにして今現に揚々自得、我れは研究の爲に犯罪しぬ、と公言するもの、尙果たして多くあるか。　若し多くありとせば、之れを恕すべきの道理あるか。　吾人はかゝる似而非雅量者の意外に尠からざるに慨する者なり。　又吾人は切に美妙齋氏の、若し果たして不義の實なくば、明白火を覩るが如き辯解書を作らんことを希ふ者なり。吾人豈强ひて辯を好まんや、文壇全體の名譽の係る所、默止する能はざるを奈何せん。

（廿七年十二月）

明治二十七年文學界の風潮

（金子筑水氏起稿）

新陳代謝して、昨二十七年はやゝ眞正なる哲學講究の時代、兼ねて宗教心勃興の時代に入りにき、すなはち、二十七年の文學界に最大勢力を占めたりしは哲學また宗教なりき、二十三年の交、文學壇の最前面にありし詩歌、小說、廿五六年のころ最前面に進みし史傳、評論、其の間に或は左右の翼となり、或は時に最前面に進まんとせし國文、漢文も、昨年は漸く壇後に退き、宗教と哲學と整々として前面に進みいでき。蓋し、苟も心あるの徒は、或は眞に舊信仰の根據なきに心づき、心は眞に安心立命の止むべからざるを感じ、或は眞に新宗教の必要を認めたりしなり。こゝに於てや、一昨年中、專ら回顧して前生の同胞を研究せんとせし歷史熱は、果然自家研究、人生研究、之れを大にしては、一層嚴密なる意義にていふ、哲學的精神、宗教的精神となりて現れ來たりぬ。

一昨二十六年後半期のころより、哲學及び宗教に關する評論文の次第に盛行するに至れる由は、吾人屢〻當時の「文界現象」に之れを報じぬ。また其の大要の傾向は昨年の初刊に於て之れを論じき。爾來此の同じ潮流は月と共に駸々として進みたり。もとより過ぎ去りし年間にも、

基督敎の弘布、之れに對する佛敎徒の反抗、基督敎部內に於ける衝突、懷疑、佛敎的哲學の流布等、此等注意すべき現象も見えざりしにあらねど、そは社會の甲の部分、又は乙の部分にのみ勢力ありし事實にして、普通全分の社會は、概して物質上の文明に眩惑し、又は外面形骸の準備にのみ汲汲として、事物の內秘、精神を顧ることなかりき、や丶有識と稱せらる丶社會の部分にだに安心立命の大事は殆ど忘られたりし觀ありき。されば基督敎の一時隆盛を極めたりしも、必ずしも人々が安心立命の必要を感じたりしが爲とはいひがたし、むしろ佛敎の腐敗と歐化主義の氣運とが其の昌盛を助けきともいふべし。固より當時の基督敎徒の中には、眞實の宗敎家も尠からざりしならめど、尙眞に自、省、自、識、して後に信徒たりしもの丶多數ならざりしは拒むべからざる事實たるに似たり。當年の國俗は未だ自省自識するの期に達せざりしなり、隨うて、當年の社會と宗敎、哲學の世界とは、嚴密にいへば、殆ど關係なきもの丶如く、互に別々に發達せし趣ありき。所謂識者中にも「日本人は宗敎に淡薄なる者、むしろ無宗敎の國民」なり、もしくは「社會の具眼者には宗敎は無用なり」など放言するものありしが如き、此の潮勢の證也。さはれ、人は皆自然の數によりて宗敎的動物たり、智見の進むに隨うて更

社會やうやく自意識の途に上れり

に高大なる宗敎を求欲す。　一昨年後半期の末より、宗敎界と社會と相接近するに至りしは、此の自然の需要に基く。　昨年に至りては、泰西の科學に心を奪はれたりしものも、物質的文明に惑溺せりし者も、又哲學を一種の閑學問として煩瑣の攻究にのみ耽りたりし者も、やゝ昏睡の覺めたらん感ありしが如し。　若し一國民を一個人に譬へば、數年前までの國俗は物質的文明に恍惚たりしと、聲色に耳目を奪はれたる小兒の如し、未だ自家を認識するの力なく、隨うて、絶大不可思議なる關係の自他の間に存在するを覺らざりき、これ彼等の宗敎心なかりし所以也。されどいかなる國俗かいつまで依然として稚兒の境にあるべき、若し夫れ保守的運動の興起せし、國家主義又は國家敎育論の盛行せし、又は近く對外思想の勃焉たる、往々にして極端に走るの弊を生ぜりといへども、大躰より言へば、いづれも社會が自識の途に上れるを證するものなり、然り、我が國俗の心に自省自識するの傾は生じたり、其のやがて一轉して自他の不思議、自然の玄妙を瞑想するに至らんは自然の順序ならずや。　思ふに、これ昨年に於て宗敎問題の更に熱心に考察せらるゝに至りし所以ならん。　さてまた哲學的精神の普く通徹するに至りしも、蓋し、同じ動機に基けるならん、これはた社會が漸次自覺の途につけ

るを證するもの也、要するに、昨年に於ける社會の運動は維新以來最も注意すべき一大轉步なりき。そも〳〵過去十餘年間の歷史は僅かに革新發端の史たりしのみ、新日本大成の史は察すらくは今の青年及び其の兒孫の手に成らん。最も注意すべき新哲學と新宗敎とが重に今の青年の社會より成りいでんとするは其の兆を示すに外ならじ。それ今の所謂青年社會は人生崎嶇の經驗こそは少けれ、其の想と感とは將に起こらんとする新大日本に適切なるもの也。彼等は眞個に新日本の土に生まれ、新日本の雨露に育てられ、新日本の太氣を呼吸する者也。彼等は過去の理想、老朽せる學理、時勢に後れたる情操等に拘束せらるゝものにあらず、彼等は半生を維新前に半生を維新後に送り、半陳半新の感想に彷徨流轉するものにあらず、彼等は普通の科學を修めたれば、謬信少なく、新倫理にも通じたれば、同感局せず、十九世紀の美術、文學、宗敎、哲學の一端をも漸々窺ふに至りたれば智情双ながら舊國俗とひとしからず、實行の上よりいへば、彼等は尙何事にも拙劣也、粗鹵也、迂濶也、然れどもこれたゞ經驗の不足なるが故のみ、其の理性の劣なるにはあらず、其の感情の卑なるにはあらず、否、彼等は此等の諸點に於て舊國俗に優りたり。彼等の早熱なる者は已に明に自省安心の必要を

認めたり、去かれども遽に不合理の信仰を奉じ、妄に背理の論を體するは、英氣鬱勃たる新國俗の決して屑とせざる所也、これ廿七年において哲學的精神の彼等の社會より發生せし所以ならんか。　又思ふに、彼の保守的運動、又國家主義、又對外思想の如きも、當初こそは概して政治上の意義のみにて發表せられたれ、其の漸々暢達せしや、轉じて一種の精神的勢力となりぬ、これはた舊思想の捨つべきを棄て、取るべきを取らんと熱衷する新國俗の參考の料となりしか。　而して他方に於ては、佛敎及び基督敎やゝ面目を新にして隱然件の取舍に與らんとするものゝ如くなりき。　新國俗の心中に幾多緊要なる大疑問、生ぜざらんとするも得べけんや。　蓋し、兩敎共に世界的宗敎を以て稱せらるゝものから、大疑問に指を染めたるものゝ、之れを取りて自己の信仰となさんとするや、其の事咄嗟にして決せらるべくもあらず、彼等は合理的信仰を得んと欲せり、疑問又疑問の繼起して哲學的研鑽の時代をなしゝ、理ならずや。

昨年中最も著かりし佛敎及び基督敎の活動は暗に此の需要に副はんとせしものゝ如し。　已に數年前にはじまりし基督敎内部の衝突は、昨年に及びて、截然進歩、保守の兩派と分かれたり、就中、保守派の稍〻識見

あるの徒は、表に進歩派の操なきを憤りたれども、心竊に舊神學のもはや維持し易からざるを感じたりしものゝ如し。情は尙依然たれども、理性は已にゆらぎそめたりし也。彼等の信仰は漸く理性と隔離せんとせり、彼等は苦悶しはじめたり、いづこともなく聲あつて、「人生牧師となるなかれ」と嘆ずるものあるが如くなりき。此時に際して進歩派の本領は更に明を加へたり、曾て無主義の徒と擯斥せられたりし者も、昨年に至りては漸く得意の秋に入りぬ。蓋し、彼等は保守派と異なり、情をもて教義の本とせず、否、及ぶべくは人生の實相に據り理性の眞義に基きて、磐石の信仰を建立せんと努めたり、すなはちいへらく「新神學」と、又いへらく「舊神學抛つべし」と。大日本基督教を建設すべし、と叫びしも彼等なり、獨斷、偏頗、情實、謬信、等の諸獘を破して、合理的信仰を建立すべし、と叫びしも彼等なり。「佛教は我敵にあらず」といひ、儒教、神道共に可なり、あらゆる宗教を綜合して合理的基督教を建築せよ、といひしもまた彼等なりき。隨うて、彼等は、一方に於ては、幾分か一神教を唱說しながら、他方に於ては、間ゝ萬有神教の色を帶びたり、然らざれば、やゝ之れを默許たるの傾ありき、甚しきに至りては、直に佛教の一部に結托せるが如く見えたりし者もありき。其の是非はしばらくさしおく、兎に

角基督を道德の標準として、眞理の崇拜、合理的信仰を以て唯一の根本となさんとせしは、其の過去の改革論に比すれば、幾段の進步といはざらんや。而して此れ皆時勢の必然より生まれたる哲學的精神の基督敎に及ぼし丶影響也。

此の哲學的精神の佛敎界に及ぼし丶影響、はた頗る注意するに足る。佛敎哲學の新國俗の間に流布せしは一昨年を端とすべし、昨年はや丶その盛頂に近きたるの時なりき。さて佛敎界の現象中、最も著かりしは、其の進步派が發せし佛敎革新の呼び聲なりき。從來佛敎は、よしや圓滿完全の宗敎と信ぜられざりしも、殆ど批判すべからざる玄妙不可思議の怪宗敎、若しくは端倪すべからざる一種の哲學と思ひなされたりしに、昨年初よりは攻擊、懷疑、批判の聲、漸く此の敎に向つて起こり來たれり、佛敎はた會て基督敎が遭遇せし理性の辨難を經驗するに至りしなり。但し、佛敎の範圍もと極めて大なるが爲に、其の攻擊の徹底するに至らざりし、勿論なり、隨うて佛敎の運命は毫も左右せらる丶に至らざりき。されど主なる辨難の點ほどは略ゝ指摘せられたり。新國俗は其の非經驗的(非科學的)なるを、其の非進步的なるを、其の人生の實相より離れたるを難じはじめたり、たとへ之れを口にせざるも皆心に

難詰せんとしたり。　こゝに於てや、佛教徒は、就中、其の進歩派は起ちて辨ずるなき能はざるに至りぬ。　或は新佛教的哲學を組織すべしと發案し、或は史によりて此の教を講究し以て其の眞理を闡明すべしと唱へ、或は自由批判を盛にして新佛教を起こすべしといへり。　中には理性の辨難に畏縮して、曾て我が教は無上哲學と唱へし舌を飜し(古來幾多の覆轍をも顧ず)信仰は理性以外のものなり、と漸く逃足になりて唱へたりしもありき。　本來佛教的革新の聲は、昨年前後より高まりそめしとなるゆゑ、其の所謂進歩派も、彼の基督教の進歩派の如く、旗幟鮮明なるものにあらず、又整然たる科學的思想を根據として佛教全躰を講究するには至らざりし也。　これ、蓋し、其の全佛教界に對して其の勢いまだ振はざる所以ならん。　さはれ、當來に於て佛教界に覇たらんものは、或はこの進歩派なるべし、彼等は佛教の枝葉にこそ數多の弱點を見出だしたれ、其の根本は無上無等と信じ、世界唯一の圓滿宗教と確信し、ひとり佛陀の大慈悲によりて永劫未來の世をも感化悲引せんと願求するなり。　此の故に彼等は耶蘇退治の愚を學ばず、否、及ぶべくは理性に訴へて、其の取るべきは取り、捨つべきは捨てゝ、名實共に圓滿なる合理的宗教を建設せんとするなり、すなはち彼等は佛教徒が長夜の昏睡

哲學思想の流布

宗敎も哲學も日本な地盤として大建築に着手せんと希望せり

東洋哲學の研究

を攪破するの曉鐘たるべきものなり。要するに、佛基兩敎界の動搖は眞正の安心を得んと欲する哲學的精神に基けり、故に彼れの進歩派と此れの進歩派と、假令其の法相異なるも、其の期するところは殆ど一なり。宜なるかな兩敎接觸の徵昨年に至りてやゝ著かりしこと。識者は説明せざるも已に我が當來の宗敎を推測し得たるならん。

哲學的精神もまた廣く社會に波及せんとしたり。況や其の名にし負へる哲學界に於てをや。たゞし、專門の哲學家といへども、昨年已に報せしが如く、いづれも研鑽の半途にありしこと勿論なれど、所謂研鑽は頗る精密なるものなりしがゆゑ、疑ふらくは未來の新哲學の前驅かと思はれしもの、時に隱見せざりしにあらず。蓋し、宗敎界に於て、日本帝國を地盤として世界的宗敎を建設せんの願望見えたりし如く、哲學的に於ても東西未見の大哲學を成せんの希望ほの見えたり。たゞし、其の成否の影はいまだ絶えて現れざりし也。

哲學界の現象中、特に注意すべきは、東洋哲學、就中、支那哲學の盛に研究せられしことゝなるべし。此等研究者は思へらく、西洋哲學の攻究もさより必要なれど、東洋哲學も亦等閑視すべからず。實驗的科學は彼れの長、多かれども哲學は此れ必ずしも彼れに讓らんや、否、往々にして彼

純文學上の評論批判次第に科學的となり來たる

れを凌ぐものあり。未來の大哲學は、蓋し、東西の精髓を融會渾成するによりて成らん、これ東洋哲學攻究の必須なる所以、と。先に專ら西洋學理に心醉せし我が國俗が、自ら識る、精なるに及びて、まづ漢文學の流行を致し、竟にまた其が精髓を發揚し、以て東西學說の總合を企圖するに至れるを見るべし。固より東洋哲學の名及びその研究は、聞こえて已に久しけれど、儒學の哲理として、ほゞ科學的に、且八面にて、考察せらるゝに至りしは、重に昨年に屬す。老子、孟子、韓非子、王陽明、朱子、等は屢〻研究者の主題となりぬ。これ皆後の大哲學の資料たらんものなるべし。

哲學的精神の盛なるにつれ、純文學に關する評論もおのづから科學的となり來たりぬ。美學は哲學の一部門として歡迎せられ、尠くとも我が國にては未曾有の現象を呈したり。數年前までは、美學といふ名稱すら珍しかりしに、昨年に入りては、文學專門の雜誌に美論幾篇も見えしのみかは、あやしげなる雜誌にだに、審美の論しば〳〵見えき。而して此等論者は、たゞに哲理上より美の性質を論せしのみにあらず、詩歌小說をも批判評論し、又屢〻他の特殊なる純文學的問題をも論じき。此の哲學、美學の流行につれて、純文學上の評論も、總じて科語的となり

批評の文章講說的となれり

學理的となりぬ、蓋し、此等評論家は、自然の順序として、概して講學の當座、即ち校堂より降りたる當座なるが爲に、二つには、他に向かつて新學理を說明せんの念盛なるが爲に、行文措辭概して講說的なり、所詮、此等新評論者は從來の詩人的批評家とは精神を異にしたる者なり、すなはち科學者若しくは哲學者的批判家也。 彼等は哲學的なるだけに論理の明晰なることは夐に從來の批判家に勝れり。 又其の標準を哲理に置けるがゆゑに、其の旨おほむね高遠なり、たゞし、其の文章は往々にして佶倔聱牙、やゝもすれば生硬乾燥、間ゝ宣告文を讀むに類するものあり、これ意に專なるが爲に辭に專なる能はざる也。 止むを得ざる結果といふべし。

廣義に謂ふ文學界にて、哲學宗敎のかくの如く盛えたりし時、純文學界の振はざりし、止むを得ざるの故あるなり。 詩歌、小說の一時壇後に退きしは再擧して壇頭にかへり來たらん其の準備中にありしが故なり。夫れ文學は哲學、宗敎と密なる關係を有す、吾人は哲學的精神を指してやがて文學を興隆すべき因とはいはず、たゞし、大なる思想の大なる文學の緣たるや疑ふべからず、昨年に發端せりし自然及び人生に關する瞑想思索の潮流は必ずや詩人小說家をも其の渦中に卷きこみしなら

思想界進暢したれど創作界之れに副ふ能はず

ん、否、吾人は已に其の緒の隱見しつゝあるを窺ふなり。　昨年の潮流豈必ずしも純文學に無情なりきといはんや。

しかれども、昨年のみについていへば、詩歌、小說類は依然として振はざりき、去二十六年にひとしく、思想界ひとり進暢して創作界は之れに副ふ能はざりしなり、否、前者は二十六年よりも進みたれど、後者は二十六年よりも振はざりき。　夫れ大人は小兒と嗜を同うせず、二十七年の哲學的精神に薰染せる新國俗は、ひとり彫蟲の技に於てのみ進步せる詩歌、小說をよろこぶ能はず、これ昨年に至りて作家に大思想、大信仰なきを難ずる聲の一層甚しくなりし所以か。　曰はく、天地人生を歌ふの大思想なきか、曰はく、大信仰を具象にして社會を感動する能はざるか、と思ふに是れ所謂新國俗の聲なるべし。

征清事件

且や二十七年は特別の年なりき、其の後半期は征淸事件のために擧國振動し、殆ど他を忘れたりし觀あり。　文學はたゞ此の忘れられたるものゝ隨一とならんとせしが、幸にして我が軍連戰連捷のめでたさに辛くも命脈を維ぎたりき。

かく寂寞たりし文壇に、やゝ注意すべきもの二ありき、曰はく、前半期に於ける脚本論、曰はく、後半期に於ける新躰歌の流行、並らびに戰爭に關

新体詩人の小活動

する記事及び小說これなり。演劇の流行は昨年に入りて甚しきに達したり、その因緣は一二と限るべからざるも、近緣は太平の餘澤に外ならず、二には繪入新聞紙等の劇評及び劇に關する報道の過當に繁多なるに因りしならん。故に其の近緣は必ずしも文學に關係なけれど、其の結果は多少文壇の生氣を添へたり、新脚本論の如きは其の一なり。これ一昨年の後半期より昨年にかけて盛なりし現象也。演劇改新論これが爲に起これり、讀むべき劇詩の論これが爲に唱へられき、これらは昨年の本誌を讀みし諸子の熟知せられたる事實なり。然るに此の激烈なる希望も、竟に之れに伴ふべき脚本を得ずして年は暮れにき。創作界全般の萎靡せりしを思へば、これはた異しむに足らざる也。若し夫れ後半期にやゝ生氣ありし新躰歌は韓山事件及び日清事件に催されて現れしものなり。總じて戰爭の當時に兵士國民を鼓舞すべき戰場の美事、尙武の感慨を歌ふは、もと人情の自然なり、況や我が敵愾心に富み、意氣軒昂せる國俗に於てをや。所謂軍歌は更なり、戰爭に因める諸種の新躰歌續出せし、數量の上よりいへば未曾有といふべし、後半期の文壇は、殆ど全く新躰歌に占領せられたるの概ありき。而して此の新體歌人中、或は之れを機として國詩の新形式を一定せんと摸索せ

る者もありしが如し。　總じて想、形共に、前年に比すれば、幾分か進歩せし色あり、されど題目の恰好なるもの殆ど無し、彼等の多數は恍惚春に醉うて櫻花を詠ずるものと一般、いまだ肺腑より感慨して至誠を歌ふには至らざりし如し。　尙此の他、征淸事件の爲に現れし無數の戰爭實記、又普通の戰爭物語の如きも、多少將來の文壇に影響すべきものなるべし、而も二十七年の文學界には何等の功もなし、彼等は一層純正文壇をさびれしめしものなり。　此の間現れし戰爭に關する小說類の如きは、美術品としては、殆ど取るに足らざればなり。

尙廿七年文學界の風潮として記憶すべきは、所謂國文學の狀態なり、昨年に至りて普通文の體裁はやゝ一定せりともいふべし。　例へば、新聞紙、雜誌の文章の如きは、昨年よりも一層雅馴(文法的)となり來たれり、すなはち明治普通文の大成せん日遠からざるを示したり。　これらは前々年以來の國文學者の功蹟と稱しつべし。　然はあれど國文學者の事業は尙あまた成されずして遺れり、例へば、昨年來對外思想の盛なると共に、諸外國に對して、我が國語を確定するの必要は衆の認むる所となり來たりぬ、こゝに於てや、心ある者は皆思へらく、國文典を如何にせん、日本語を如何にせん、そも〳〵また國語と外國語との語學上の關係を

二十七年は信仰追求の時代なり

如何にすべき、と。　此等の諸點に關して國文學者は尙功を成せずといはざるべからず、吾人はたゞ僅に大學出身の二三學士が、日本語學の必要を唱へ、且其の研究に着手せしを聞きしのみ。

此の際歷史界には何等の大なる變化もなかりき、尤も思想界の進步につれて傳論法の進步は幾分かこれありき、而して此等史傳家は概して所謂文學上の批評家なりき、蓋し、現代の作物には、殊に批評を加ふべきものなく、又靑年批評家に取りては此の事業割合にたやすしと見えたればなるべし。

之れを要するに、二十七年の文學界は二十六年の文學界の自然の進境たるに外ならず、即ち理論と思想とのみ發暢し、實踐と創作とは振はざりし年なり。　哲學的精神の發達は暫く措き、ひとり純文學をのみ觀測するも、總じて理論勝を制したり、脚本も、新躰詩も、論に作の副はざりしを見るべし。　國文、史傳等に關しても、はた然りき、所詮、廿七年は智を專としたる自覺の時代なり、之れを靑年が在大學期に譬ふべし、進みて倦まざるの概はありしも、いまだ何の爲し得たる所もなかりき、むしろさる餘地を具へざりしなり。　すなはち二十七年は信仰追求の時代なり。此の追求の緊要は竟に純文學を驅つて普く文壇後に退かしめたれど、

而も文學的思想は、當年に於て一層の弘布を經驗せり、海外現時の文學だに次第に普通社會に歡迎せらるゝに至りぬ、これらは前年に見ざりし所なり。

眞正の國文學興らんとす

最後に、昨年末にほの見えし最も祝すべき一大現象の記すべきあり、他なし、眞正の國文學即ち國民的文學勃興の兆候これなり。只其の兆のみ、而も尙大に賀すべきにあらずや。其の最大緣は何ぞ。之れを言ふを要するか。征淸軍の連戰連捷、及び之れによりて全世界に對する國民的大自信の煥發是れなり。夫れ大戰捷の後に大文學の興起するは古來列國の史の證するところ、蓋し、大文學を成就せん國民にして始めて能く大戰捷を成就し得べければなり。吾人は信ずらく、我が新國文學興隆の運は今回の大戰捷によりて催促せられたるや疑なしと雖も其の主なる素は已に數年前に成されたり、と。彼の保守的運動や、國家主義の弘布や、對外思想の普及や、皆我が國民が自識自尊の實を表示せざるなし、あはれ、幸なるかな、此等政治思想の漸進脫化して、まづ漸く精神的となり、又漸く信仰的とならんとし、世界的哲學、世界的宗教を成就せんの念、我が新國俗の念頭に鬱勃たるの時、忽然未曾有の大現象天外より降り來たつて、此の大精神に光を添ふ、絕大國文學到底勃として起

こらずして止まんや。 吾人は讀者と共に此の兆の竟に煥發して世界的大現象と成らんの日を俯仰渴望して止まざる也。 (廿八年一月)

戰爭と文學

緒言

人間太古の記錄は、相屠相殺の歷史なり。 いづれの國の史か、其の最初の國土の、血をもて固結せられしを證せざる。 生存競爭の原理は、理の上より、鬪爭の人間に止むべからざるを示し、歷史は、事實の上より此の理の動かすべからざるを證す。 戰爭は實に人間の大現象なり。 總じて人間の事は有形無形の鬪爭、各國民の起伏は皆此の鬪爭の生む所、而して有形の鬪爭(謂ふ所武力の角鬪)の全國に係るものは、此等鬪爭中の最も著大なるもの、孫子の所謂、兵は國の大事、死生の地、存亡の道なり、隨うて其の國民が精神の消長隆替に關係するや、眞に驚くべきものあり、こゝをもて、政治と戰爭と、實業と戰爭と、風俗と戰爭と、藝術と戰爭と、文學と戰爭と、此等諸種の關係、皆精査の價値あり、其の相影響する所重大なればなり。 世人或は思へらく、他はしばらく措く、ひとり文學、藝術は太平謳歌の餘業、靜穩なる民心の反映、すなはち精神的靜止を代表す、固

と物質的動亂を代表する武力の鬪爭と相容れず。　且や文藝は愉樂の具、戰爭は極慘の活劇、彼れは虛、此れは實、而して古來此の實の非なるや、たま／＼以て國民の元氣を損じ、屢ゝ亡國の端となる、幸にして事是なるも、譬へば、スパルタの昔、羅馬のいにしへのごとく、只管國俗を擧げて實利の民となし、現世の俗となし、虛靈に遊ぶことを難(かたん)ぜしむ、すなはち戰爭の文藝に於ける影響は消極的なるのみ、と。　是れ只一面を觀たるの說なり。　夫れ文藝は國民が思想感情の反映なり、人間の事何ものか反映して文藝に入らざらん。　詞客、吟人藝術の徒は、國民の最も多感なるもの、尋常の國俗を動かさゞる些屑の事、尙よく彼等を感動し、想像の靈火の來たり添はるや、忽ち化現して美術となり、美文となる。　果たして然らば、擧國的武鬪の彼等に於ける影響、豈必ずしも消極的なるの理あらんや。　思ふに、戰爭と文學との關係は頗る複雜、一概に說き去るべからず、其の利害もまた輕忽には斷じがたし、思ふに其の解答は戰爭の性質によりても異なるべく、文藝の範圍如何によりても異なるべし。　予は此の故に此の問題に入るに先だち、あらかじめ戰爭の何たるかを辨じ、又所謂文藝の範圍及び種類を檢定するの必要あるを見る。

戰爭とは何ぞや

通俗の解によれば、第一、「戰爭とは勝敗を爭ふ軍隊の決鬪」、第二、「平和を期する軍隊の決鬪」、若しくは「平和の爲に勝敗を爭ふ軍隊の角鬪」なり。第二の俗解は所謂「聖王號兵爲凶器不得已而用之」の意也。げにや兵の凶器にして爭の逆德たるは、識者の夙に認めたる所、佛のゴーヂンは曰はく、「戰爭は蠻夷の遺習、人道の敵、德義の賊、須からく文明の世界より驅逐すべきもの」と。英のモーアもまた其の『無何有島』の叙事中に、自家が理想の良國民を描いて曰はく、

> 無何有の島民は兵爭を惡みて野獸のふるまひとす、而も其の人間によりて行はるゝことの、あらゆる野獸にもまして屢〻なるは、豈人類の大辱ならずや、こゝに於て彼等は天下列國のならはしに背き、凡そ兵爭より得たる榮譽はすべて賤しむべきものとなす。思ふに、彼等は敵國民と戰うて勝つことあるも、其の結果慘酷ならんには、慚愧苦惱措く能はざるべし、所詮彼等は鮮血を流さずして、ひとへに熟練なる進退により勝利を收め得るを以て無上の榮譽とす、

と。これまた戰爭をもて社會の害毒と認めたるなり。然れども、此等は上に擧げたる俗解第一の註疏と見るべく、未だ第二の義を説破するに足らず、何となれば、絶對に平和を擾亂するの戰爭は、社會の害毒たる明なりといへども、絶對の平和の期望しがたく、又敢て希望すべきもの

モーリスの說

絶對の平和は進歩の停止、退嬰の緒

にあらざるの理あらば、戰爭は一種必要の具、輕々しく排斥すべきものにあらじ。　モーリスいはずや「所謂平和は懶惰、奢侈、私慾、等、總じて道念の頽廢に媒するもの、所詮、其の社會をして住するに堪へざらしめ、或は内より荒み、或は外より亂れ、到底破壞なきを得ざらしむ」と。　案ふに、絶對の平和は、苟も現人間の狀態よりいへば、進歩の停止、知足安心の狀勢を意味す、而して停滯は退嬰の緒、知足は無欲安逸の端、やがて退轉、腐爛するか、然らざれば居然冷却、破壞死滅するの外あるべからず。　吾人は絶對の戰爭を惡むと同時に、絶對の平和を恐れざるを得ざるなり。　平和と戰爭とは人間の晝夜、社會の明暗、兩ながら缺くべからず、要は此の晝夜の序を保つにあり、又其の殘虐の度を減ずるにあり。　絶對に此の暗黑を絶跡せんと望むは、恐らくは腐儒の理想、少年詞客が迂濶なる白日夢、いづれの日か其の實現を見るを得ん。　バックル等は思へらく「世の文明に進むや戰爭は漸く消滅せん」と。　げに甲冑劍戟の鬪爭は消滅せり、史的小說の材料となり了んぬ。　思ふに、硝煙彈雨、砲雷劍電の戰爭も、或は消滅する時あらんか。　さはれ武器の消滅は戰爭の消滅と同じ意義にあらず。　誰れか理化學の進歩の、更に驚くべく簡便なる新戎器を製らざるべきを保するぞ。　誰れか人間固有の（且殆ど必要なる）鬪爭

戰爭は現世の不可避的現象なり

義戰

スペンサルの説

呉子の説

心の、竟に滅却すべきを豫想し得るぞ。 夫の疾病災厄の、所詮、斷滅する能はざるが如く、懲治刑罰の、容易に全廢すべがらざるが如く、苟も人皆の聖賢ならざる限は、戰爭の種子は絶つべからざるに似たり。 然り、戰爭は現世間不可避の現象なり、又時としては眞に必要の作用をなす。 司馬法曰はずや、「古者以仁爲本、以義治之、之謂正、正不獲意則權、權出於戰不出於中人、是故殺人安人、殺之可也、攻其國愛其民、攻之可、以戰止戰、雖戰可也」と。 戰を止めんとする、是れ實に文明的戰爭の要義也、すなはち大に戰ふは、大に和せんとするに外ならず。 それ社會は正邪ならび存するの巷、時あつて邪魔跳梁し、正靈扭屈せらる。 戰はざるべけんや。 正義の爲に横邪を討つ、これを義戰といふ、義戰は道義の闘爭、すなはち吾人が理想の戰爭なり。 さればハルバルト、スペンサルの如きも、戰爭を大別して攻守の二種とし、自衛の戰爭(即ち守戰)を名けて義戰といひ、求めて干戈を動かすもの(即ち攻戰)を不可となせり。 呉子もまた兵を論じ「暴を禁じ亂を救ふを義」兵といひ、「衆を恃みて以て伐つを强」兵といひ、「怨に因りて師を興すを剛」兵といひ、「禮を棄てゝ利を貪るを暴」兵といひ、「國亂れ人疲れたるに事を擧げ衆を動かすを逆」兵といへり。 これ皆義戰の已むべからざるを謂へるなり。 但し、スペンサルが所謂攻守の義

は漠然たり。例へば、歐洲中古の十字軍の如き、若しくは我が目下の討清軍の如き、こなたより進みて兵を出だし、彼れを攻擊したる點より見ば、恐らく攻戰とも名けられん、而も十字軍の本願は、基督敎の正當防衞、若しくは我が討清軍の高明正大、誰れか其の世界大の義戰にあらずといはんや。およそ戰爭に限らず、何事にも手段は種々あり、積極や、消極や、守や、攻や、破邪や、顯正や、皆これ手段の名のみ。或はスペンサルの所謂攻守は戰爭の本意に就きていへる名か。戰爭の目的にして正義にあらば、手段の攻守は、もとより問はずして可なるべきなり。むしろ研究すべきは正義の實なり。何をか正といひ、何をか義といふ、是れ緊要の問題なり。

吳子の所謂「禁暴救亂」、はた以て義戰の解とするに足らず。俚諺に曰ふ「喧嘩兩成敗」と、又曰はく「戰に正當の因なし」と。何を標準としてか暴と亂とを判たん。味方は我が軍を義軍と呼び、敵は彼れが兵を義兵と呼ばん。英のバルクが兵を論ぜるや曰へらく「人類の血は人類の血を賠償せんが爲の外決して灑ぐべからざるものなり。我が一族、我が朋友、我が神明、我が國土、我が同類の爲に灑がんは、至正至當、其の他は悉く名聞、虛誇、罪惡、と。この說また漠然たり、いまだ人をして去就を決せしむ

靜勢と動勢

人間の歷史は我と衆我との長久の戰爭

るに足らざるなり。凡そ事物の道徳的是非を判ずるは、自然の大道を標準とするよりよきはなし。此の大道にしたがふものは善正、背くものは邪惡、此の大道に關する所いよ／＼大なれば、其の人生に關する所はたいよ／＼大なり。蓋し、人生の常態にして、固と平靜寧和なるべきものならば、鬪爭は悉く害毒なるべく、隨うて其の自然、大道との關係、恐らくは僅に消極的たるのみならん、然れども、上に已にいへる如く、平和と戰亂とは人生の晝夜の如し、平和は物理上にいふ靜勢、社會の勢力を保存し、戰亂は所謂動勢、千變萬化の社會的活動を代表す。兵戰や、虐殺や、征略や、いづれも活動の原因、而して活動は生活其のものなり。兵亂あればこそ平和、爭論あればこそ眞理、貪欲あればこそ企業冒險、情激すればこそ美德、戰あればこそ同悲同喜の念も生ずべけれ。國亂れて忠臣顯れ、家貧うして孝子いづるの謂なり。戰爭の意義を廣最義に解すれば、人間の歷史はわれと衆我との長久の戰爭たるに外ならず。されば近世の哲學者等、或は人生の史を名けて「自由發展の歷史」といひ、或は「絕對の進化史」といひ、或は「崇敬的良心の發達史」といへり。皆此の理を認めたるなり。何となれば、自由は不自由に對するの語、絕對は相對に對する語、良心は邪念に對するの語、自由、絕對、良心の進化は不自由、相對、

邪念の退化、いづれも勝劣の結果、すなはち闘戰の結果たり。希のサラミスの激戰や、英國清淨敎徒の内亂や、全歐三十年の役や、慘はすなはち慘なりと雖も、苟も其の一面に表せられたる本意は、いづれも皆此の精神的義戰なり、自由、良心、絕對、等の進步を代表する階段なり、無限向上の必然なる順序なり。嗚呼、此くの如きは眞個に歎息すべきの事實なり、しかるが故に世の君子人は慨然として歎じて曰はく、何ぞ及に虾らずして此の段階を攀ぢざるぞ、と。嗚呼、誰れかかくの如きを願はざらん、然れども是れ殆ど詩人が迂腐の空想のみ。地球の無形的大回轉は、古今の史の證する所によれば、鮮血の大潮勢によらざるよりは、殆ど如何ともすべからざりしにあらずや。嗚呼、これ眞に悲むべき事實なり、而も其の動かすべからざる事實たるを如何せん。彼等東西古今の厭世論者は、審に此の事實の否拒すべからざるを認めたり、彼等は此の故に厭世論を建てたり、彼等は此の故に人生を穢土視したり。吾人は彼等の厭世說を奉ずるものにあらず、而も其の戰鬪を必然とするの觀察を不動の眞理なり、と見做さゞるを得ず。思ふに、戰鬪なき世界は、譬へば、流れざる池沼の如きか、沈滯の次に來たらんは腐敗、腐敗の次に來たらんは旱魃、旱魃の次に來たらんは滅、空、無。進みて擊つべきの敵全く蕩盡

せられたらん時は、恐らくは世界の史の息止窮極する末期ならん。さくならく、マケドンの歷山王は攻伐の土盡きぬと見て、泣下數行、と、吾人はた無限前程の窮盡を意識せん時、能く此の浩歎なきを得んや。

ナポレオン一世の威武全歐を震駭し、列國纍卵の崩るゝ如く、普國の危き、また旦夕に逼らんとす。當時の碩學、哲士フイヒテ、蹶然卷帙を投じて起ち、慨然として國民に訴へて曰はく

「こゝに人間の無限に進步すべきを確信し、就中、人道(ヒウマニチー)の進步發達すべきを確信し、且件の人道の秩序價値に關する大觀念の、決して空想にあらざるを確信し、其の竟に實現せらるべき豫言的神宣なるを確信せるものあり、あはれ、此れ正義の徒か。 またこゝに卑劣なる植物的、叉動物的生活に安心知足し、懶惰放逸、絕えて高尙の世界あるを知らず、却りて他の高尙世界を景仰熱望する者を嘲る者あり、あはれ、かれら正義の徒か。 此れ正か、彼れ邪か、此の疑問に對して、最後の確答を與ふるは、一に卿等が目下の急務」

と。

其の言簡なりと雖も、所謂正義の意知るべきにあらずや。

戰爭は人生の賴りて以て進むべき天然の形式(フオーム)なり、已むべからざる自然の約束なり。 人生の運命の常に或奧妙不可思議の配劑によりて左右せらるゝの理を知らんものは、戰爭を排拒する能はざるべし。 吾人はむしろ肅然として形を改め、襟を正うして古今の戰亂史を讀むべき

なり。　吾人は彼のカーライルと共に、戰爭の嚴然として長く世に存すべきを認識す。　たとへ往々にして無意義なるが如き戰爭ありと雖も、嚴然たる造化翁の大步武に過誤あるなし、彼れは必ず步すべきの途を步す「造化は大なる二元界の大審判官なり、彼れ曾て人間を害毒せざるなり、自然の根底に存するものは眞理のみ、最大眞理のみ」

然り、自然の大道に副へる武力的鬪爭は、一面より觀れば、最も高尙なる意義にいへる文華的鬪爭、すなはち精神的向上努力なり。　これを大にしては、人間全般の躰力、心力の消長、否、人間の大道、眞理の行藏のかゝる所、これを小にして一國家の隆替、其の國民が生命、理想、信仰、氣魄、情操、等、すべて貴重すべきものゝ消長存亡の係る所、すなはち國家的武力鬪爭は、該國民が身躰、精神の動勢的活動を代表す。　此の故に其の結果は、大にしては全天下に影響し、小にしては全國家に影響す。　而して所謂文學藝術は此の同じ身躰、精神の靜止的活動を代表するもの、彼れは猶一玻璃鏡の凸面の如し、此れは猶其の凹面の如し、相關する所甚深ならざるを得んや。　古來史家の戰亂を叙述するや、おほむね眼を其の近接緣に注ぐ、此の故に兵の起を論じて、或は爭名に歸し、或は爭利に歸し、或は積惡、內亂、困饑、等に歸す、又は戰の類を分かちて、專橫の攻伐、商業的競爭、

若しくは宗教の軋轢等、幾種とす。これ皆編年史氏的観察のみ。深く其の由來する所を探らば、いづれか有意、無識の間に行はれたる大道の苦闘(ストラッグル)にあらざるべき。よしや、假に太古の爭戰は、總じて利己盲目の生存的競爭に外ならざりきとするも、文化漸く開け、仁義やゝ具はりし後の大兵爭は、二三の專横なる兵爭を例外とすれば、概して大道の苦闘(ストラッグル)なり。徒に其の弊跡の慘憺たるに驚愕して其の遠因の崇高偉大なることを忘るべからず。若し夫れモハメットの詬忍慘酷、殺人劍を揮つて歐亞に臨み、鮮血を海と流れしめ、死屍を山とそびえしめし、蓋し、その新宗教の無上眞理たるを確信せしによるなり。若し其の眞動機を探らんには、大道の實現を希圖せし外、豈また些の他念あらんや。若しくはガスタヴス、アドルファスの國家を犠牲にして義軍に從ひ、奮闘苦戰、竟にリッツェンの露と消えたる、若しくは大英清淨教徒が慨然として王師に抗し、クロムエルの旗下に一死を鴻毛と輕じたる、若しくは北米南北の役、若しくは現今我が師の大義、いづれかかゝる兵爭の已むべからざるを證すると同時に、其の大道に聯關することの甚深なるを證せざる。此の故に獨のフィヒテがナポレオンの暴慢を怒るや、慨然其の國民に訴へて曰へらく「卿等倒れんか、人道(ヒュマニチー)はた卿等と共に倒れ、復た蘇活せん望

戰爭は國民に對して大吐劑たり

なからん」と。　義戰の關する所、重且大なるを知るべし。

戰爭の影響

以上說明せる如く、義戰、即ち國家的武力の鬪爭は、一方に於ては、國民の元氣精力の、外、即ち宇內に向かつて動勢的に表發せられたるものなると同時に、他方に於ては、內、即ち國民に對して一大吐瀉劑たるの用をなす。　これ其の好影響の一なり。　フイヒテ曰はく「國民は戰爭即ち協同の努力によりて、はじめて眞正の國民たるを得」と。　即ち大協同の必要は小憎怨、小嫉妬、小憤懣、小悲憤等、一切の瑣屑なる惡德を蕩攘するの好結果を養成す。　語を換へていへば、國民の氣魄を擴大し、其の情操を洗淨し、最も卑劣なる者、最も怯懦なる者だに、國家的危機に鼓吹せられ、身を思ふゆゑに國を思ふの念を生じ、其の結果、國家あるを知りて一身あるを知らざるに至る、況や志操高潔、見識卓絕なるものをや。　忠君愛國の至誠の、此の大動機に動かされて燦然として煥發するや、社交の道義も、家庭の美德も、はたおのづから鬱勃たらん。　蓋し、國家的戰爭は國民の心をして唯一ならしむるもの、國民をして自家の他と異なる所以を確識せしむるもの、即ち國民的自意識を鞏固ならしむるもの、國民的自尊心を覺悟せしむるもの、啻に國民をして團結を鞏うせしむるのみな

大戰亂は歷史の紀元を作る

らず、所謂國粹の何たるを意識せしめ、此の國粹を擴大するは普天下を利益する所以なるを意識せしめ、人間の大天職の如何に偉なるかを瞑悟せしむるもの、其の小惡德を洗滌するの効ある、異しむべけんや。夫の歐洲中古の十字軍や、たとへ其の原因は宗教的狂妄に出できと雖も、たとへ其の大目的に於ては失敗しきと雖も、尚且尠くとも全歐に於ける幾多小不德を洗滌し、王侯士庶の希望、思想、情操を擴大せしに於て効ありしなり。凡そ大戰亂は常に歷史の紀元を作る。ペルシア役はアゼンスの文明を作り、東攻西伐の大勝利は羅馬のオウガスタン文明を作り、佛國革命は秩序的新歐洲を、獨立戰爭と南北大亂とは、二たびまで北米聯邦の新紀元を作りぬ。思ふに、世間の奢侈放蕩、浮靡淫逸に流れ、救治矯正するの道なからんとするや、識者憤激して、或は慨然として長息し、鮮血なるかなと叫び、却りて戰亂兵爭の脚下に起こらんを望むが如き、畢竟は此の妙配劑の利を知ればなるべし。彼の德川三百年の懶眠を破りしものは、維新の大亂、スチユアルト朝の大墮落を救ひしものは、清淨敎徒の反逆、古來大衝突は大調和の必然前驅にして、差別的努力は平等的協同の基本なり。これ實に悲しむべき現象なり、而も其の爭ふべからざる事實なるを如何せん。

國家的義戰は、大體に於て、國家、否、到底は人間に有益なりと雖も、其の功の成否によりて、當國家に影響する所一ならざるべきは勿論なり。勝戰の結果と敗衄の影響とは、日を全うして談るべからず。然れども、これだに且らく差別を脱し、人間全體の消長より見ば、或は益する所、損する所よりも多からんか。但し、予の意、もと文學と戰爭との殊なる關係を論ずるにあるゆゑ、今これを詳査するの遑なし。請ふ、此等の精細は、之れを哲學者、國家學者、若しくは政治家の卓識に問へ、予はむしろ單に文學との關係を觀察せん。

文學に於ける直接の影響

一國の文學は、他の藝術にひとしく、該國民の思想及び感情を代表するもの、即ち國民の靜勢的活動の代表也、而して戰爭は、上にもいへる如く、同じ國民の動勢的活動也。さて此の象（かたち）を殊にして根を一にせる二者の關係は、說明し易きが如くにして說明し易からず、簡單なるが如くにして複雜也。蓋し、二者に相通せる理は簡單也、實質に必然の關係なき故、抽象的に其の相關の理を示すは難きことにあらず、而も箇々の條件につきて、仔細に具象的關係を示さんとすれば、說明おのづから複雜となり、隨うて多數の讀者にとりては、心たゆまるべき煩瑣の談となるべ

「此の誌」とは『太陽』をいふ

し。如何なる場合及び事情に、如何なる戰爭起こり、其の戰爭によりて如何なる文學起こり、若しくは如何なる變動を釀しゝかなどいふは、事實上の問題にして、其の事若し現在の戰爭に緣遠きときは、讀者の大かたは倦厭せん。此の誌には最も不適當の稽查也。予は此の故に只文學との關係を總括して、本題目の要旨を盡くすべし。

文學といふ名目は、廣くも狹くも解せらるべし。廣く解せば儒家の所謂文の義ともなるべく、禮樂までも含ましめば其の區域いと〳〵大なるべし。又狹く解するときは、專ら想像力によりて作りいださるゝ物、即ち詩歌、小說、戲曲、等に限る。或は通俗の解にしたがひ、總じて書籍の形をなして、普通の人智、人情をよろこばすべき一切の著述をも、しか名け得べし。正當に解するときは、狹義の文學こそ眞正の文學なれど、本論は總じて要旨を論ずるにとゞめたれば、必ずしも此等名目の解を嚴にせず、主として美文學(詩歌、小說、戲曲)との關係を說くものから、尙時宜に應じては、廣義の文學との關係にも說き及ぶことあり、よむ人此の意を諒すべし。

文學と戰爭との關係は二樣也、文學の主となれる場合と、客となれる場合となり、文學が戰亂の因緣となれる場合と、文學が戰亂の果報となれ

る場合となり。　固より、文學も戰亂も、共に當代の思想、感情の反映、即ち殊相同源の發動なれば、互に動機を一にし、相因果すべき筈なれども、尚細(こまか)に分かつときは、主客因果の差別あり、例へば、佛國革命にさきだちてルーソー、ヺルテール等が唱道せし社會革新的學說は、たとへ因たるに足らざりしも、其の一緣たりしや明なり。　又我が國の史に徵せば、水戸藩の如き、諸勤王家の述作の如き、いづれも明治革新の間接緣となれりしなり。　此等は文學を主としたる場合也。　たゞし、嚴正にいへば、かくの如きは、畢竟、天下の大勢の然らしめし所、文學はわづかに大勢爆發の一導火たりしに外ならざるなり、一二文學の力、能く天下の大勢を動かし得べしなど思ふは、例の白日夢(デイドリーム)の譫語也。

戰爭の文學に及ぼす影響は、前者に比すれば、利害や〻複雜、一層綿密なる觀察を要す。　夫れ戰爭は每に現代にのみ關するものにして、文學の本質は尠くとも數百千年に亘るべきもの也。　若し其の緣起、影響の上よりいはゞ、如何なる戰爭も、前後數代に關係すべけれど、其の實際の作用上よりいへば、專ら當代にのみ關係するものなり、其の全國の人心を震駭し、奮發激昂せしむるもの、所詮、其の當代の得喪に聯關するところ甚深なればなり。　然るに文學の活動する範圍はかくの如くならず、文

戰爭の文學に於ける直接の影響

學の醇なるものは、現世間に關係すると共に、未來幾千年後の世間にも關係すべき特質を具ふ、これ純粹文學の價値の不易普遍なる所以なり。かの戰爭、又は實業の、特に當世にのみ關係せる、若しくは應世文學の專ら當時の利用にのみ關係せると同じからず。然れども所謂普遍の義の、超世若しくは出世間の謂にあらずして現世兼未來世の謂なる以上は、如何なる文學も所詮は、現世に聯關せざるを得ず、くはしくいへば、間接若しくは直接に、當代の大事件によりて動かさるゝことなき能はず。ましてや國家的鬪爭の如き大現象は、必ずや若干の大影響を文學の主題及び性質の上に及ぼすべきの理也。然らば其の影響は善か惡か。

「此の影響もまた二段に分かちて觀察せざるべからず、直接の影響と間接の影響となり。さて如何なる場合にありても、其の直接の影響は苟も純粹文學の標準より觀ば、必ずしも悦ぶべきものにあらず、何となれば國家的大鬪爭の激昂は、國の諸制度を擧げて、多少實際的、利用的、物質的とならしむる傾あるが故に、其の中の隨一たる文學藝術の如きをも、幾分か同じ臭味に薰染せしめ、兎角に現在的、應世的とならしむる虞あればなり。例へば、文學の如きは、多少現在の鬪爭、然らざるも、殺伐の事蹟を、敍狀記錄するものとなり、音樂繪畫のたぐひさへに、士氣を皷舞す

べきたぐひのものとなるが如し。　戰爭の當時は、概しては詩靈藏れ、天馬蟄するの時也。　蓋し、國家的大鬪爭は、國民をして已に其の全生命をだに犧牲に供せしむ、況や其の他をや。　國民の當の敵は人道の大敵、其の理想の障碍、其の信仰の賊、其の一切本願の仇なり。　まづ彼れを倒さゞれば、一切の欣求、竟に遂ぐるの期あるべからず。　こゝに於てや擧國の心、翕然としてひとへに戰爭にむかひ、擧國の眼粹然として一にこゝに集まる、また他を顧るの遑なし。　固より種々の事情、種々の狀態、一概に律し去るを得ずといへども、若し概していふときは、一國民の消長の、當の戰爭にかゝはると、彌〻重大なれば、其の全精神の戰爭に吸收し去らるゝと彌〻大なり。　啻に文學藝術のみならんや、敎育、農、商、等、片時も欠くべからざるものさへ、或は時に等閑視せらるゝことあり、これ實に其の國の危機なればなり。　夫れ不定不斷の狀態は、每に人間をして大に爲すあるを難せしむ。　國家大に定まり、國威宇內に王然たらば、志氣おのづから激昂し、或は天地鬼神を驚かすべき三世相通の大詩篇を作るべく、また國家大に挫敗せば、一も爲す能はざるの極、或は絕大絕望の歌曲をなさんか。　然れども首鼠兩端、安危いまだ決せざるの時、衆目皆天の一方を望み、衆口皆勝敗を語るの時、此の時誰れかよく現世以外に

戰爭の直接影響は文學をして應世的ならしめ主觀的ならしめ抒情詩的ならしむ

逍遙遊の別天地を見いだし、且現在に歩し、且未來に歩するを得んや、戰爭の直接影響は、文學をして應世的ならしむ、すなはち其の範圍比較的に縮まるべし。 醇粹なる審美的想像は、多少これが爲に壓倒せられ、現實的感情文學の要素を成すに至る。 そも〳〵文學は固と一種の遊戲、戰爭は最も嚴格なる實際事業、此の極慘なる實際的活動は人心をして最も現在に傾かしむるもの、最も利己的、即、差別的たらしむるもの、彼の優美なる遊戲三昧は人心をして一種の別天地に逍遙せしめんと期するもの、最も無私的、即ち平等的たらしめんと期するもの、其の枘鑿相容れざるの性、一朝混ぜられて一となる、文若し武に勝たば文弱、武若し文に勝たば殺伐、よしさからざるも、文學を擧げて現世的たらしめんは必然なり。 然り、普遍平等なるべき文學をして、特殊差別の文學たらしめ、三世相通の奥妙を沒して、世間一時の好尙に供す、これ純粹文學を裨益する所以にあらざる也。 就中、文學の最も高尙なるもの、すなはち醇乎たる客觀の詩、劇詩、小說のたぐひは、しばらくは此れが爲に影を藏さん、ひとり主觀の詩、すなはち抒情、述懷の作は、或は實感に動かされたる多感の詩人が不可思議靈妙なる繡腸より成りいでゝ、至誠、鬼神をして哭せしむることあらん、而もこれ偶然の結果、恐らくは戰爭の必然的直

接影響にはあらざるべし。予は此の故に戰爭の直接影響は、概して醇文學に不利なりと斷言するを躊躇せず、國民の實際に專念するは其の想像の縮少すべきを豫示すればなり。

國民已に其の想像を差別の時と處とに限り、平等の夢幻界に遊ばしむるを得ず、こゝに於てや、最も歡迎せらるべき文學は、現世的實錄、若しくは現世的事件に緣故ある、若しくは類似したる記錄、又は想像の作、是れなり。すなはち文學の形式上よりいへば、所謂寫實的なるもの、最も喜ばれ、質の上よりいへば、勇壯悲哀、若しくは殺伐なるたぐひ、又精神の上よりいへば、總じて主觀的、抒情的、就中愛國の思想感情を吐露する底のもの、最も悅ばれん。而して其の國の過去の光榮の記錄、若しくは過去の英雄、豪傑、忠臣、孝子、節婦、烈女、等を描寫したるも、はた同一精神に協ふべきものなれば、史に關する抒情歌、敍事詩、小說等、一層の繁昌をなすことあるべし。これ予が揣摩の說にあらず、列國の文學史を見るに、例へば、大英島の太古に於けるサクソン軍歌、又は三十年亂の昔に於けるオピック、グリフィウス等の愛國的詩歌はしばらく措き、大アル・マダ擊退の當時に於ける英國の歷史熱、同じく內亂期に於ける王黨（ロイヤリスト）の勤王詩歌、マルボローが凱旋を謳歌せし諸種の抒情詩、若しくはフリードリヒ大

帝が治世、七年戰爭の前後の詩歌、戰勝を謳歌し、士氣を鼓舞せし愛國の作、何ぞそれ盛なりしや。　大帝が德を頌せしケストリン、プルシア兵の勇武を唱歌して竟にクネルスドルフに戰死せしクライスト、又同じ七年戰爭を歌ひて「プルシアのホレース」てふ榮名を得しラムネル、又同じく「プルシアのピンダル」とたゝへられしゴットリーブ、并ラモオ等、殆ど枚擧に遑あらず。　就中、クロプストックがフリードリヒ大帝の頌、又クロプストックの顰に倣ひ、文豪レッシングが助を得て、盛に勇武の物語を綴り、又壯烈なる軍歌を物して、普く國人に稱贊せられしグライム其の人の諸作の如き、尤も鏘々の譽あり。　若し夫れナポレオンが歐洲を蹂躪せりし時には、獨逸國民の竟に忘るゝこと能はざるべき「ファーテル、ランド」の作者、エルンスト、モリック、アルントあり、又彼の燃ゆる如き愛國の熱誠凝りて幾多の詩篇となり、やがて義勇兵として陣に臨み、遂に戰場に命を殞しゝテオドール、キョルネルあり。　知らず、尙擧例するの要あるか。　我が維新の前後に徵せよ、幾多の小アルント、幾多の小キョルネル、幾多の——思ふに、維新の史にくはしき我が明治の讀者は、其の名を列擧するを要せざるべし。

戰爭と詩文人

若し戰爭當時の文學は、概して上に說明せるが如くなりとせば、戰爭以後に於ける文學、換言すれば、戰爭の間接影響は如何。予は此の最も趣味深き問題に入るにさきだち、少しく岐路に入りて辨ずべきは、戰亂當時に於ける詩文人の覺悟なり。蓋し、間接影響の性質は、此の覺悟の如何によりて、よしや他の約束(條件)は同一なるも、大に異なることあるべければなり。具にいへば、假令戰爭の間接影響は、毎に文學を高尙偉大ならしむべきものなりとするも、當時の詩文人其の者にして、毫も此の影響を領取するの約束なき、所謂無緣の衆生たらば、要するに、對牛彈琴、また何の甲斐かあらん。

或は、詩人は平等の理想界に逍遙するものといへることを解して、超然高蹈、ことごとく世間と相へだゝるの義となし、國家の安危、同胞の存亡、すべて棄てゝ顧ず、優遊自適、安居放吟、もッてみづから高しとするものとなせるあり。是れ甚しき謬解なるべし。固より箇々の塲合、箇々の進退、殊なる機會、殊なる去就、親を滅すべき大義あれば、平等を擲つべき差別あり、時と處と事情との鹽梅は、詩人の進退を是非するを得べく、詩人が賦才の大小と、其の作の巧拙とは、また以て其の去就を褒貶するに足るべし。假に例を設けていはゞ、若しエリサベス朝の當時に、西班(スペイン)の

カントの説

大軍いきほひ破竹の如く、長驅してロンドン市に迫りたりとせんに、此の時大詩人シェークスピア、彼れ死を怕るゝが爲ならぬも、尚其の孤憤の益するなきを感じて、直にストラトホオドの故山に退き、終始曾て役に臨まず、さて事果てたる後、陸續靈妙の脚本を作し、古今空絕千歲不易の詩を遺したりとせんに、吾人は彼れが行を非とすべきか。論者或は獨の大詩人ギョオテが、佛軍來寇の當時に於て、平然劇に遊び、冷々然たりしを咎め、此の故にしば／＼其の德を疑ふ。これ果たして確評なるべきか。所詮、此等は特に考査を要すべき殊別希有の場合なるべし。よしやギョオテ、シェークスピアの如き希有の天才の場合は、之れを批判するに難からずとするも、如何なるが大天才、如何なるが絕大の作、之れを確定すべき標準なき限は、又殊なる事情、殊なる境遇の、頗る查察し易からざる限は、かゝる場合の判斷は、蓋し、輕々しくは下しがたし。予はむしろかゝる例を除き、しばらく大概の場合に就きて、大事に際會したる一般個人の覺悟を檢せん。而して此の爲には、近世哲學の祖師カントが講說を聽くよりよきはなし、彼れは曰はく

こゝに國家の爲に殉したる一勇者ありとせんに、是れ果たして其の人の絕對的本分なりや否や明ならざる限は、人之れを稱贊せんとして、尚幾分

古の大文學は皆當代の勇士

> か猶豫無き能はざるべし、然れども、若し其の行爲にして、全く疑ふべからざる本分の爲に、性命及び名譽利福を犧牲となしたるに外ならずば、(すなはち件の本分を全うせんとせば、勢ひ身命を擲たざるを得ず、又身命を維がんとせば、必や非義に陥らざるを得ず、かるが故に決然國に殉死するに至りたるものならば)人皆其の行の是非に關して、些の疑惑をも感ぜざるべく、且必ずや聲を揃へていはん、是れ善なりと

と。 所詮、大義の在る所、個人無く、大道の指示する邊、豈些の猶豫を容れんや。 我が理想の本地たる國家、國粹の大危機は、我が理想、信仰の大危機なり、否、我が確信する絶對眞理、無上大道の大危機なり、此の際いづくにか彼此我他の差別あらん。 已に個人無し、詩人非詩人の別あらんや。敵はすなはち眞理、大道の殘賊、味方はすなはち理想、信仰の干城、去就何の踟蹰をか要せん。

今其の去就の當否を別問題として、古今の詩文人が行實を檢するに、或は直に軍に從ひ、或は間接に兵戰を援助せしもの、擧げて算ふべからず。中古以前に於て、其の例ことに多し。 是れ一は時勢、境遇の然らしめし所とはいへ、其の作の壯大雄渾、夐然として後の彫蟲の徒に卓越する所以のもの、蓋し、またこゝに在るか。 見よ、大文豪として其の名内外に喧傳せる諸作家は、概して當代の勇士なりき。 全國皆兵なりし太古激鬪

時代の吟客はしばらく措き、特に開明時代に於ける純粹文學の名家、即ち詩人のみに就いていふも、希臘の上代に於ては、エスキラスあり、ソホクリーズあり、共に古劇の巨擘として雷名を數千歳の後に知らるゝと同時に、いづれも、ペルシア戰爭の勇士なりき。劇詩家にして已に然り、ましてや抒情詩人にありては、みづから軍歌を作りて從軍し、陣頭に提身して士氣を鼓舞し、且戰ひ、且歌ひしもの、啻に二三にのみ止まらざりき。降りては羅馬オウガスタン時代の詩人、就中、詩宗ホレースの如き、西班牙全盛期の文豪、就中『ドンキホーテ』の作者サルヴンテスの如き、皆若干の軍功あり。ことに後者の如きは、或は土耳古征討の役に從ひ、或は屢〻九死の冒險を閱歷し、僅に身を以て免れしことあまたゝび、彼れ嘗てみづからいへらく「文壇より移されて武人となりしばかりよきはなし、彼等は必や精良勇敢の士」と。而してサルヴンテスが文壇の敵者ロープ、デ、エガ、はた當代の一武人、但世人大抵は彼れが著名の脚本家たりしを知り、其のアルマダ艦隊の一員として、英を征せしを知らざるのみ。さてまた英國の詩壇にては、假令尚武のサクソン時代を看過するも、又其の名の廣く知られざる(例へば内亂期の王黨詩人の如き)を除き去るも、尚佛國のレチエーにて、敵の虜となりしチョウサルあり、蘇國に

佛國に將となりて、偉勳多かりしサリーあり、十七歳にして初陣し、佛に和に新敎徒を防禦し、武名一世に高かりしローリーあり、ジュトヘンに陣沒して、芳名四海に轟きしシドニーあり、十九歳の初陣に、敵兵の首を擧げしベンジョンソンあり。 或はミルトンが破邪の筆、或はシエレーが革命論、ヲルヅヲルス、バイロン、コールリッジ、よしや劍を拔かずもあれ、皆これ當代の義勇兵、其の橫溢する敵愾、其の燃ゆるが如き熱誠、彈雨の下にあるものと何ぞ擇ばん。 思ふに、彼等孰れか機一たび到らんとき、彼のバイロンにひとしく、劍を提げて役に投じ、一死主義に殉せんと欲せざりし。 また佛の詩壇を見よ、彼の「佛のバイロン」と稱せられ、屢〻軍に從ひ、中ごろ英國に謫せられしシャトウブリアン、又彼の詩人にして政治家、兼ねてまた武人たりしラマルチーン、又役にこそ從はざれ、身は巾幗の女性乍ら大ナポレオンの勁敵たりし夫人ステエル、若しくは自由の干城たりしキクトル、ユーゴー、若しくは上に擧げたりし獨逸愛國の幾詩人、いづれか戰爭に關らざりし。 蓋し、大義の將に危からんとするや屢〻平等の說敎師たる詩人をして差別の說敎師たらしむるの證は、彼のレッシング、クロップストック等一代の詩宗が七年戰爭の當時に於て、常に目を現在に注し、しば〳〵愛國の熱誠を吐露せしにもし

るけく、又シルレルが陰に陽に全國協同の必要をほのめかし、ナポレオン一世、對獨逸大戰を豫言せしにもしるけし。　あはれ、詩人已に差別の說教師（セイアル）たるべし、寧ろ差別の實行者（ドウアル）、すなはち戰鬪者たらざらんや。　畢竟詩人が超然として平等の理想界に住するは、平時修行地の覺悟なるのみ。

戰爭後の文學

以上、重に戰時の文學を論じたり。　さて戰爭後の文學は勝敗によりて利害を殊にすべき、勿論なり。　名譽ある大勝利を得て、威武八表に振ふ國民の文學と、挫敗沮喪せる亡國の文學とは、日を同うして談ずべからず。　しかしながら、若し大失敗の爲に大悲憤を生じ、大絕望によりて新敵愾心を生ずる等のことあらば、大敗もまた或は意外のインスピレーションとなることあらん。　獨逸近世文學の興隆の如きは、一面より觀察すれば、挫敗によりて生じたる大憤慨の結果たるの觀あり、人間に於ける因緣果報の理の複雜なる、ひとり一戰爭の勝敗のみによりて、當來の利害をトすべからざるなり。　しかりと雖も、大挫敗によりて大憤慨を生ずるは、個人に於ても、一國に於ても、常には望み得べきことにあらねば、よしまた假に望み得べしとするも、かゝる場合には、必ずや幾多特

大勝利を得たる國民は大文學を產し得べきもの

殊なる因緣の相伴はざるを得ざるがゆゑに、予はしばらく大戰敗後の文學は、之れを別問題として取除き、こゝには專ら大戰勝後の文學に就きて、聊か思ひ得たる所を陳ぶべし。

おしなべていふときは、大勝利を得たる國民は、大なる文學を生ずるを得べきなり、但し、戰勝其の物がやがて大文學興隆の原因なるにはあらず。　前にもほのかに論じたる如く、先づ一國民に高尚偉大なる精神の存するありて、英氣外に奮發し、さてこそ大勝利を博するの道理なれば、凡そ大文學を成ずるの素は、未だ大勝利を博せざるの前、已に該國民が心裏に成立てるなり。　時の順序よりいふときは、實質上の勝利は、常に虛靈、即ち文物上の勝利に先つの例なるゆゑ、文學の興隆は、概して大戰勝に次ぐと雖も、其の本原はもと同一なり、二者は相招致するの緣となるも、共に相因果する能はざるものなり。　此の故に、大に戰うて勝つといふとも、絕えて文學には益なきことあり、さるは件の國民の精神のひとり現實界に對ひて偉大にして虛靈界に對ひて偉大ならざるの場合なり。　例へば、古の羅馬國俗の如し、彼等はオウガスタスの朝に至るの前、已に幾たびも大なる勝利を得きと雖も、嘗て大なる文學を生せざりしなり。　すなはち嚴密に論ずるときは、戰勝は文學興隆の機緣たるを

得るも、該國民固有の精神にして偉大ならずば、たとへ偉大なるも、虚靈界に向ッて偉大ならずば、眞の大文學は興起發達するの便宜なからん。さはれ若し大なる戰勝をば、單に文學興隆の機縁として見ば、換言すれば、現實、虚靈の兩界に向ッて偉大の精神ある一國民が偉大の戰勝を博したらん時、其の文學に於ける影響は果たして如何なるべき、と問はゞ、予は信ず、其の影響もまた頗る偉大なり、と答へざるを得ざるべしと。

夫れ人間の世界は日に月に進化發達す、人は駸々としていよ〳〵大なる精神界に向ッて進歩せんとす。 優勝劣敗の旨を當來に應用せば最も高尚なる意義に謂ふ絶大精神あるの徒こそ最後の最勝者、至適の生存者たるべきなれ。 而して所謂絶大精神とは、現實、虚靈兩界に向ッて絶大なる精神の謂なり。 虚靈界に向ッて絶大なる精神ありとは、向上無限の大理想を持して、片時も退轉せざるをいひ、現實界に向ッて之れありとは、千障萬險を排除して、此の大理想を實現するの勇猛力あるをいふ。 大戰勝を倫理大道の爲に博するが若きは、すなはち其の實現法の一なり。 大なる文學に件の大理想の影現るゝが如き、はた此の勇猛力の自然の結果なり。 すなはち文學は戰勝の因なるに非ず、戰勝はた文學の因なるに非ず。 彼れは動、これは靜、共に根底に横はる大理想の

影なり、而も甲の影の、いよ〳〵乙の影を濃かならしめ、乙の影の、更に甲の影を密ならしむるの例は、理も明に之れを證し、事實もしば〳〵之れを證す。　蓋し、大戰勝によりて、其の大理想を現實界に實現し得たる一國民の悦喜は、溢れて更に其の英氣を皷舞すべき也、彼等は自家の理想の現に顯はれたる面影を見て、勇氣更に幾倍すべき也。　彼等の胸宇は之れが爲に擴大すべし、彼等の志望は之れが爲に膨脹すべし、彼等は戰爭といふ大事件によりて、曾て經驗せざりし幾多の大事相を瞑悟するに至るべし、曾て學ぶ能はざりし若干の大教訓を享受するに至るべし。要するに、彼等の頭腦は新精神の爲に活動すべき也。　而して新文學は毎に新精神の生む所なり、戰勝と文學との關係こゝに於てや生ず。　これ大戰爭と大文學と不可思議にも調和する所以なり。　加之、戰爭は詩人騷客に供するに無數の生氣ある好材料を以てす。　案ずるに、之れを內にしては、戰爭といふ一大事に遭遇せる國民は、或は驚き、或は怒り、或は喜び、或は憂ひ、或は慨し、或は恐れ、榮辱禍福のさながら其の頭上にふりかゝれるに會して、七情發露、殆ど之れを抑止する能はず、其の美なるもの、其の醜なるもの、其の高きもの、其の卑きもの、擧げてありのまゝに露呈せられん。　最も多感なる詩文人のみづからもまた此の情熱者の

一人となり、親しく此の激昂せる熱情を觀察するや、其の得る所豈尠しとすべけんや。所謂國粹の骨髓、否、人情の精英、否、人性の奧秘、平時に窺ふこと能はざるもの、この時豈知りがたからんや。さてまた之れを外にしては、殉國の義烈、百挫不撓の大勇、當難沈毅の膽畧、慘絕悲絕の活劇、快絕壯絕の決戰、落寞たる戰後の城市、悽愴慘憺たる戰野の景、いづれか詩歌に入らざるべき。詩人騷客たる者之れによりて美妙の神髓を會するの緖を得ざるべしや。要するに、戰爭は詩題を一新すると同時に、詩人を誠にするの効あるべし、彼等をして尠くとも死事相を詠ずることを抛ち、虛僞の思想を反覆することと止め、活きたる題目に向ッて至誠の情感を吐露せんの念を起こさしむべし。予嘗て『早稻田文學』(文學現象欄)に征淸事件と現文壇との關係を論じて曰はく

(上略)そも〳〵此のたびの大事變は、如何なる影響を我が文學界に及ぼすべきか、其の果善なるべきか、惡なるべきか、詳細の利害は、もとよりかゝる欄內に於て論究すべきにあらず(中略)爰には只讀者の參考の爲に、ふと吾人が念頭に浮かべる私見の一班を列擧せん

一 我が國民の敵愾心の、我が國民をして我が國家を明識せしめ、日本國民たることを自覺せしめ、又我が國の朝鮮に對する義擧の、如何に高明正大なるかを感ぜしめたる結果は、洽く我が著作社會及び讀書社會の思

想感情を高雅ならしむるの効あるべし。

一我が軍の榮譽ある戰勝は、一報到る每に我が國人の志氣を皷舞し、所謂國民的自尊(ナシヨナルプライド)を盛ならしめ、最も多感なる詩人の熱腸を刺戟しては、或は光焰萬丈の妙想となり、或は鬼神を感動するの詩文とならん。

一作者及び讀者をして現實に密接せしめ、未來に眼を注がしむるの結果、おのづから彼の死したる過去を徒に回顧し、死事相の爲に死事相を描き、死事相の爲に死事相を賞翫するの風を減じ、彼等をして活社會、活人間を研究するの必要を自覺せしむべし。

一而してこれと同時に、文學はおのづから現世間的となり、詩歌はおのづから主觀的となり、多くは或一時の感想を歌ふものとなり、小說、脚本にだに當時の輿論の影歷々たるに至るべく、恐らくは個人の一定見を具體にせん爲に物せられたる小說、脚本のたぐひ、今よりも一層歡迎せらるゝ事あるべし。

一一旦凋落せる新體詩(若し果して生長繁榮すべきものならば)此の際に於て再び芽し、始めて其の體を成就するに至らん。

此の他は今敢ていはじ、あはれ我が明治の國俗は、英國エリザベス朝の國俗に似たる所あるか、將た十九世紀の英國俗に似たるか、我が陸海軍戰勝の結果は、竟にアルマダ艦隊に於ける英國の戰勝に似るべきか、將たエリントンが歐洲大陸に於ける光榮に似るべきか、其の國俗の感想に於ける影響は前者の場合に似るべきか、後者の場合に似るべきか。 此の問題閑

なるに似たれど、其の答の如何によりて、或は上記の數ヶ條を變化するの力あるべし、然り、此の漠然たる閑疑問の答案は、我が文壇の將來にテニソンをいだすか、シエークスピアをいだすか、そも〳〵また十八世紀的詩文人をいだすにとゞまるべきかを決するの力あるべし。吾人は今その理を說明するの餘地なし、聰明なる讀者、能く吾人が意を忖度して、これが解答を與へんや否や。

と。

こは特に我が此たびの戰爭に關してのみいへるなれど(且や其の幾分は、專ら戰爭當時の文學にのみ關したるものなれど)尙其の或部分は廣く戰爭後の文學にも適用すべきものなり。また甞て我が方今の文學の兎角に纖弱に流るゝを慨き、ひそかに以爲へらく、其の因緣種々あらめど、其の一は

政事と文學との懸絕の甚しきに因るならん、更に正當にいへば、詩文人が宇宙の局小なるに因るならん、彼等の多數（マジヨリチー）は、瞬時も一我（セルフ）の念を解脫する能はざるなり、爰に脫我といふは、必しも道義上よりいふにあらず、審美上の意よりもいふなり、すなはち花を見るも月を見るも、將た山水の明媚を見るも、曾て恍然として無私なる能はざるを不脫我といふなり。而して今の詩文人の多數は、花月を觀ては酒食を聯念し、美女を觀ては之をめとらんと想ふ、すなち每に我が欲を脫せざるなり、殆ど我（セルフ）以外のものに同感する能はざらんとす。彼等の神我（ソール）は概して一身大なり、一國大となる能

詩文人は國人中の最多感最聰明なる者也

ばず、一國大一府大となる能はず、況や一世大宇宙大となることをや。 彼等は殆ど常に殊局なる神我（ソール）を表白す、其の表白の最も廣くして大なる時だに、往々同臭を動かし、同味を感ぜしむるに過ぎざることあり、然らざれば彼等の或者は、ポープ以後の英國詩人の如く、只管に古き詞藻を蒐め來りて、臨機應變に之れを翻用し、人生及び萬有の再三複寫に從事し、其の冷かなる俗懷を漫げなる詩文章に表白すること、猶病身の令孃が肉色おしろいもて厚化粧を施し、巧に其の蒼白の頬を粧ふがごとし。 畢竟彼等の多數は、神聖なる文學を以て一種の尺八又は三絃に似たる俗樂器と見做し、其の變々化々の聲調は、偏に四隣の俗衆をして自家の艶福を健羨せしむべき料なりと思惟するに似たり、思ふに彼等の心中に、四隣以外の億萬の生靈と共に、天樂の妙音を樂しまんとする念起こらざる間は、眞正の文學は決して世に現れざるべし。 而して彼等の心をして四隣大以上ならしめ、一國大、一世大たらしむべき方便は、予は思ふ、彼等をして政治家に接近せしめ、政治家をして彼等に接近せしむるより捷きはなしと。

今にして之れを思へば、其の第二の好方便は彼等をして、擧國的、義戰に接觸せしむること是れならん。 戰爭は國民に與ふるに、更に大なる自由を以てし、更に廣大なる同情を以てす。 戰爭後の彼等の精神は其の以前のと同じからず。 而して詩文人は彼等の最も多感なるもの、正當にいへば、彼等の最も聰明なるべきものなり。 詩常の國俗すら、自

由と同情とを擴大せんの時、詩人騷人の徒いかでかは依然たらん。而して大自由と大同情とは、由來大文學の保姆なり。思ふに、大戰爭は一國の文學をして眞の國民的文學たらしめ、兼ねては宇宙的趣味をも含ましむるに至るの効あらんか。そも〳〵自然人間の諸現象の中、最も人意を牽き易き者、即ち最も著明なるものは、生と滅となり、而して大戰爭は億萬の生靈を滅却し、時としては國家、國民を滅却す。若し夫れ聰明なる詩人、思索家、等は、一木一艸の生滅によりてだに、廣く一切の無常を觀じ、衆に先ちて大覺大悟すといふものから、周圍悉く迷溺して、機緣いさゝかも熟せざるときは、彼等よく大覺すとも、口を開かんの便宜なからん。然るに大戰爭といふ人間の最大事(人間の最も嚴格なる現象)が全國民の目前に、絕大なる無常の實例を開展し、如何に有爲の露の如く脆きか、如何に壞滅の電の如く疾きか、如何にカーセージの亡滅の、トロイの亡滅の速なるに似たりしか、如何にあらゆる國家の末路の、トロイ、カーセージにひとしかるべきの理あるかを示すときは、いかばかり魯鈍の輩といふとも、爲に幾分か詩人となり、また哲學者とならざるを得ざるべし。彼の大革命の、或意味よりいへば、全國民を擧げて情思激昂の人とならしめ、一種の抒情詩家とならしむるにひとしく、大戰爭の

影響は、往々全國民を刺戟して、人生の秘密、自然の奥義に留意せしむ。戰爭は、上に已に說ける如く、人事の最も眞面目なるもの、進化の最も必要なる條件、人間を導きて其の至正の標的へ進ましむる所以のもの、曲れるを直うし、邪なるを正うし、諸の汚穢腐敗を洗滌して、社會の全大氣を新鮮ならしむるものなり、よしや彼等、其の初は、此の理を自識するの明なからんとも、屢々直接に相接觸し、屢々身みづから相撞着するや、早晩這般の感無かるべしやは。　彼等の氣格と情操とは、自然にして感化せられ、多少高雅の度を加へ來たらん。　大勝を得たる國民にして、幸に驕謾浮誇の弊に流るゝなくば、這般漠然たる感想は、やがて一轉して眞摯なる瞑想となり、醉生夢死のあさましきを感じ、利欲名聞の卑しむべきを意識し、人生は無意味の輪廻にあらずして、其の間何等かの不可思議ありて存するに心附き、若しくは至靈至妙なる一大道の、嚴然として此の混沌たる人生を貫き、永劫に亘りて渝はらざるを認むべし。　常俗已に然るべしとせよ。　況や其の代說者を以て自ら任ずる聰明多感なる詩文人をや。　彼等の詠歌する所、全く前日と異なるべきなり。　而して其の周圍には知音あらん。　こゝに於てや、其の旨は深遠となり、其の調は高大とならん。　彼等の哭するや、人間の肺腑より哭し、彼等の笑ふ

大戰勝は國民的自尊心を昂起せしむ

や、人間の肺腑より笑ふべし。悲しむときは天地をも動かすべく、喜ぶときは鬼神をも驚かしむべし。至誠溢るべければなり、瞑悟の餘業なればなり、畏敬信仰の結果なればなり。

さりながら戰勝の影響中、最も著明にして重要なるは、上に已にいへる、國民的自尊心の昂起すること是れなり。國民は戰勝によりて、いよいよ自己を認識し、いよ／＼自己の力量の恃むに足るべきを確信すべし。而して此の國民的自信は、一面に於ては、敵愾、愛國の熱誠となり、一面に於ては、創意、創作の端とならん、すなはち舊套を脱却し、摸倣を拋棄し、百般の方面に向ッて自己の新創意を試みんと欲すべし、大戰勝後の狀態にして健全ならんか、新機軸の時代繼起すべきなり。而して新國文學はた此の新機軸期の一產物として現れ來たるべし。夫れ摸倣と因襲とは、双ながら文學墮落の媒にして、創意は新文學を生まん第一の原因なり。眞正の國民的自尊の念は、到底大文學を成就せんの大願を惹起すべく、且因襲摸倣の陋しきを棄てゝ、新に國民的文學（ナショナル、リテラチユーア）を成就せんの決心を喚起すべし。所謂國民的文學とは、世に謂ふ狹隘局小なる國文學の義にあらず、特殊なる一國に成りいでゝ、特殊なる性質と特殊なる趣味とを具へながらも、尙廣く眞文學たるの趣味をも具へて、普く天下の

人間を感動するに足る大文學を謂ふなり、即ち差別にして兼ねて平等なる文學の謂なり。例へば、英の國文學としてのチヨウサル、スペンサル、シエークスピア、ミルトン、獨の國文學としてのレツシング、シルレル、ギヨオテ、佛の國文學としてのラシーン、モリエール、ユーゴー等、いづれか差別兼平等の文學ならざる。彼等は儼として其の自國の文學たると同時に、普く全世界の文學たり。彼等は其の國人をして悲喜哀歎せしむるの力あると同時に、あらゆる人心を感動するの力あるなり、彼等は一面より觀れば、一國粹の凝りなせる所にして、他の面より觀れば、自然及び人間の美妙の會なり、すなはち全天下の美術たり。かくの如きの文學、之れを眞正の國民的文學といふ。譬へば、個々の文士に、殊なる文致と殊なる機軸とありて、はじめて大文士たるを得るが如く、殊なる國民には、殊なる國文學あるべきの理なり、すなはち殊なる文學を有せざる國民は、いまだ以て眞の大國民と稱すべからざるなり。さて、古來大國文學の成りいでし蹟を見るに、概して大なる戰勝の後にあり、又概ね國民的自尊の念と愛國的熱誠との旺盛なりし時にあり、予は此の點に於て、戰爭と文學との關係頗る密なるを認む。

ペリクリーズ時代の希臘大文學は、勁敵ペルシアの擊退せられしにつ

ぎて起こり、正に小聯邦の統一せられしと時を同うす、而して是れ實に希臘全國に普通なる國民的文學の成りし時にしてエスキラス、ソホークリーズ、ユーリピデーズ等、前後相つぎて輩出せり。エスキラスの、如何に勇壯を歌ひしか、ユーリピデーズの、如何にアゼンスを頌せしか、ソホークリーズの、如何に國劇を圓成せしかは、苟も希臘文學史を繙きたるものゝ、夙に知了せる所ならん。或はまた羅馬のアウガスタス時代、ヴルジルや、ホレースや、プロウタスや、テレンスや、名家巨匠、燦爛として、宛として綺羅星の輝くが如くなりし、これ如何なる時期なりしぞ。恰も其の國威內外に顯揚し、古今未曾有の大帝國、さながらアトラス其の者の如く、長靴半島を脚底として立ち、四圍八表を瞰下睥睨せし時にあらずや。よしや時勢の必然は羅馬當年の詞客を驅りて、希臘の文學を摸倣せしめきといへども、ホレースや、ヴルジルや、彼等大作家、さすがに摸倣の臣妾にあらず。古人謂へらく、ヴルジルが精神は羅馬の壯大に鼓吹せられ、世界的大帝國の絕大榮光に感奮せりと。さればこそ其の『エニアス物語』は彼の『イリアッド』が希臘古代の大國民的敍事詩たるにひとしく、羅馬大帝國の大國民的敍事詩たるに適へるなれ。或はまた西班文學の全盛期を見よ、サルワンテスや、ロープ、デ、ヹガや、カルデルン

や、彼等はそも如何なる機會にか生れいでし。　正に是れ大チャールズ五世帝が、諸新教王國を克服して、西班牙帝國の威名、全歐洲を震駭せしの時にあらずや。　サルワンテス、ヱガ等はいふも更なり、當代の史家、抒情詩人、脚本家、小說家、等、或は直接に、或は間接に、自國の光榮を頌歌せざるはなかりき。　若しくは英國のエリザベス朝、彼の新文豪の群起せしは、大アルマダ艦隊の粉韲せられて、大ブリテインの威武、歐洲大陸を驚倒したりし時なり。　純客觀詩人たるシエークスピアだに、當時の潮流には逆するを得ずして、頻に國史劇に筆を揮ひ、其の理想の國君ヘンリー五世を描畫しては隱然愛國の情思を抒せり。　若しくは佛蘭西文學の全盛期、コルネーユ、ラシーヌ、モリエール、彼等世界的大國人の輩出せしは、其の王ルイ十四世が、殆ど全歐に覇たらんとして、武威諸隣邦を懾服せし時代ならずや。　若しくは獨逸の近世文學、其の勃焉として興隆せしも、またこれ兵爭に因緣せるなり。　彼のフリードリヒ大帝が、小プルシアの君主として、强大列國の間に孤立し、前後七年間、殆ど歐洲全體を敵手として、勇名天下に轟きたりし時は、正しく獨逸新文學史の發端なり、此の時レッシング、クロプストク、其の他幾多の新文豪漸く相ついで世に現れ、前者は國劇の興隆を促し、後者は祖國語を愛育して、はじめ

文學に於ける戰爭の弊

て新國詩の形式を定めき。

以上戰爭と文學との最も親易き、但し最も重大なる關係なり、然れども、讀者若し之れによりて、戰爭は毎に大文學の保姆なりと解せんか、そは大なる誤謬なるべし。前にも屢〻いへる如く、戰勝は國民が志氣希望を皷舞するの一機緣とならんのみ、因は常に國民の性、すなはち其の固有の精神に在りて存す。此の故に、大戰勝の結果は、或は場合によりては、文運を害することなきを保せず、例へば、戰鬪的精神の反動を生じたる場合の如き、是れなり。餘り久しく兵爭動亂に苦惱したる民心は、時としては、其の反動の作用によりて、干戈漸く收まるに隨ひ、甚しき反對の方向に退轉することあり、すなはち怯懦優柔の極端に流れ、社會之れが爲に腐敗し、國家之れが爲に衰亡するの厄あり。夫れ戰ひて勝つは易し、守りて勝つは難し、かるが故に五たび勝つは禍、四たび勝つは弊、三たび勝てば覇、二たび勝てば王、一たび勝てば帝たり、と、古人も謂へり。勝ちて兜の緒のゆるみたるは、擧げて國家をば殘ひぬべし。ましてや其の文物藝術のたぐひをや。彼のアウガスタス文學の如きは、所謂戰勝の弊禍によりて、終には腐敗し了はりたりき。こは去ながら國民其の者が性の罪にして、文學其のものゝ科にあらざるや勿論なり、以て國

民性の涵養の極めて大切なるを見るべし。　文學は到底、當代當處の國民的精神を反映し、又毎に人生の當に進むべき正路大道を示すものなり。　國民が精神にして勇猛不退轉ならんか、其の文學はた長永に退轉せずして進暢すべし。　若し夫れ文學の隆盛は、亡國の徴なりなどいふは、殆ど事理を解せざる者の譫語のみ。

最後に臨みて、再び言ふべきは、戰爭の人間に於ける最も著き現象たることなり、其の人心を衝動刺戟する力の、極めて大なることなり、こゝをもて、最も多感なる詩文人の思想と想像とを感奮するの力の、他の百事件に比して強大なることとなり。　凡庸の小詩人こそ、目前の戰爭には目前の利害のみを觀、過去の大屠戮には漠たる殺伐の觀念のみを得れ、感慨高潔なる大詩人に至りては、古今の特殊なる鬪爭によりて、人間遍通の大妙相を學び、差別の人物を觀察して、不易平等の性情を瞑悟す。　地の東西を問はず、時の古今を論せず、大戰亂は毎に大なる人物を呼び起こす、驚天動地の大事業はた大擾亂と同時に成る。　文學の好材料は世間毎にこれありと雖も、其の最も著大なるものは、戰亂の當時にこそ顯然たれ。　古今東西の文學を撿せよ、若し戰亂に關する事と勇武の諸現象とを除かば、世界の文學は、恐らく其の過半を沒了せん。　シエークス

ピアの傑作も殆どなかばは戰爭の記事にあらずや。シルレルの大戲曲も、半ば戰鬪の談にあらずや。彼等は皆戰爭に關する事件、人物の、平等遍通の妙相を闡くに於て、極めて適當なるを教ふるなり。近くば我が征清の義軍、日に刻に吾人に向かひて、偉大の教訓を與へつゝあるにあらずや。

以上、總べて大躰の論なり、若し夫れ特殊の戰爭と特殊の文學との關係は、更に格別に考察せざるべからず、殊に目下の征清軍の如き、如何なる影響を我が國文學に及ぼすべきか、是れ最も大切なる問題なれども、予は今こゝに附論する能はず、上來の所論の直に移用すべからざる勿論なり。他日若し閑を得ば、或は更に此の殊なる問題を考査するの時あらんか。

（廿八年一月）

文學者と政治家と貴族

文學は、其の本質の上よりいへば、一種の高尚なる美術なるゆゑ、當世間の利用に相關せざる者なり、すなはち科學、哲學、等にひとしく、出世間の地位を占むる者なり、かるが故に、若し專ら其の本質の上より觀ば、文學と諸種の世間的事業とは、何等の因緣もなきものゝ如し、しかれどもこ

は單に一面を觀たるの說のみ、若し深く文學の由來を考へ、其の影響の及ぶ所を察すれば、世間と文學との關係、深くして且重きを知るべし。今はあらゆる世間的事業と文學との關係を觀察するの餘地無ければ、こゝには世間に活動せる二種の大勢力に就きて、此の理の槪略を叙說せんとす。所謂二大勢力とは何ぞ。政治家と貴族となり。夫れ政治上の現象と文學上の現象とは、共に當時、當處に活動する一國民が精神の照影なり。其の本分と其の形狀とは、如何ばかり相背馳すとも、其の相離るゝこと霄壤の如く甚しからんは、思ふに健全の狀態にあらざるべし。然るに、我が方今の社會を觀察すれば、文壇と政治壇との懸絕、啻に胡越のみにあらざる槪あり。新代の詩文人を以て自任する者の多數は、槪して世界大の理想なきと同時に、一國家大の同感にも乏しく、而して今の經世家を以てみづから居る者の多數は、殆ど正當に謂ふ文學の何等のものたるを解せざるが如き姿あり。これ豈健全の狀態ならんや。

史を按ずるに、英國のエリザベス王朝は、文學と政治と頗る接近せりし時代なりき。又彼の十八世紀、所謂英のオウガスタン時代もまた二者接近の時代なりき。たゞし、前者は二者の相接近したりしが爲に、幾多

文豪を奬掖し、後者は同じ因緣に由りて幾分か文學を俗化したり、是れに因りて之れを觀れば、二者の接近は必ずしも文學を裨益せざるのみならず、時としては不祥を生ずること無きにもあらず。されども更に古代に遡りて、希臘全盛期の文學、西班牙興隆期の文學、幷びに佛、伊に於ける詩文の消長を案ずれば、總じて詩文人の大なる同感の裡には、常にまづ當國に對する同感を包含せり、換言すれば、其の本國に對してだに熱情を有せざる詩文人は、終に大文豪たる能はざりしなり。政治と文學との接近は、尠くとも文學者の過小なる宇宙を擴充するの効用あらん、現に目下の征清事件の如き、其の事廣く全國の利害榮辱に關するが故に、洽く俗衆の心をだに鼓吹し、延いて一隅に偏局せし詩文人が心をも刺戟し、漸く文壇の局面を革變し來たらんとするの兆あり、若し此の機に際して、政治界と文學界との間に設けられたる、背感冷情の屏障を除くを得んか、我が明治新文學の、我が武威と共に異域八表に發揮せられんこと、豈必ずしも期しがたからんや。

夫れ最高義に謂ふ政治家は、エマルソンの所謂能爲者(ヅーアル)にして、最高義に謂ふ詩文人は、同じ人の所謂能說者(セーアル)なり、すなはち政治家は現在一代を救ふ世間の菩薩にして、詩文人は過現未三世にわたれる不壞常住の眞

貴族は其の名に負へる如く一民俗中の最も貴重なる種族

善美を說る出世間の如來なり。蓋し能爲(實行)の世界と能說(解釋)の本領とは、其の分おの〳〵格別なりと雖も、能爲者(實行者)にして秋毫も三世相通の大理想を察するの明なからんか、彼れそも何を標的としてか現在の世間に處することを得ん。絕えて常住の眞善美を認識するの感想なき政治家は、徒に嚴酷なる偏理、窮屈なる刑名、狹隘なる實益、體裁好き私利、陋劣なる名聞、若しくは更に賤しむべき嫉妬、偏執の犧牲となりて、假令一處、一代を裨益することを得るも、期せずして間〻後世を損害し、假令一身を裨益するも、一國を毀ひ、假令一國を裨益するも、或は人間を損害することあるべし、最高の處世の準的は、彼の常住不壞なる眞善美を除きて、他に求むるに由なければなり。所詮、文學と政治との接近は、双方の小ならざる利益なるべし。

政治家に就きて上にいへる所は、また、我が貴族社會にも適用し得べきものゝ如し。しかしながら貴族社會と文學との關係に就きては、更に別にいふべきことあり、過去の文學に於ける貴族の功勞の、世界いづれの國に於ても、極めて偉大なりしを感ずればなり。

貴族は其の名に負へる如く、一民俗中の最も貴重なる種族を代表す、幾多の進化變遷を經たる今日こそ、貴族の名、間〻單に門閥因襲によりて

貴族は一民俗中の最も餘裕に富める者

文學は一國の餘裕の生む所

のみ作らるゝことあり、隨うて所謂貴は、ひとへに門地、爵位、等の貴重なるをのみ表示するともあれど、上古及び中古に於ける貴族なるものは、國土、民俗の差異を問はず、おほむね眞成の貴族なりき。すなはち嘗に門地、爵位、財力、權力、武力等の上に於て、其の國俗中に最上位を占めたりしのみならず、學問、經驗、識見、好尙、その他種々の點に於ても、眞に上流社會たるの實を具せりき。彼等は當時の民俗中の、最も發達して、又最も開明せるものなりき、劣等の庶民が、尙齷齪として只管生存の爲にのみ競爭奔馳せるの時、彼等は已に衣食ゆたかに足り、仁義の重ずべきを解し禮樂詩文の愛すべきを知れりき。之れを要するに、彼等は最も早く餘裕に富めりしものなり。

夫れ文學は、他の美術にひとしく、一種の高尙なる遊戲なれば、民俗が專ら生存の爲に苦鬪するの間は、固より美術を容るゝの餘地なし、されば文學の最も純粹なるもの、すなはち美術と稱せらるべき種類の文學は、一國の餘裕の生む所にして、該國民中の、最も餘綽に富める者と相俟ちて發暢すべきものなること、殆ど自明の道理なり。蓋し、各國民族の詩歌文章を喜ぶは、人情の自然に因るとはいへども、之れを生むもの、必ずしも之れを育せず、其のかみ列國に、彼の綽々たる餘裕に富める、所謂貴

族なかりしならば、燦爛たる文學の花は、竟に滿發するの機を得ざりしあらん、貴族は眞に醇粹文學の、最も深切なる保姆なりしなり。彼の希臘三千歳のいにしへに、千古無比の傑作『イリアム物語』の作られしも、其の直接の機緣を問はゞ、當時の諸貴族が力なりき、と答へざるを得じ、何となれば彼の『イリアッド』は、大詩人ホーマルが古今空絶の天才になりぬとはいへども、其の根底の本體は、當時の諸種族間に行はれたりし、幾種の英雄譚の纂集たるに外ならず、而して件の諸英雄譚は、いづれも或一種族の長者、若しくは俊傑(すなはち當時の貴族)を讃稱するの意より作られしものにて、ホーマルが之れを蒐め、陶汰取舍増減して、一部の渾然たる靈篇となしたりしや、何人が最も之れを愛玩せしかといふに、これはた重に當代の貴族なりき。彼の名作の庶民の爲に作られずして、重に王侯貴族の爲に作られしは、『イリアッド』全篇が王侯俊傑にのみ重きを置き、細民小農の如きは、殆ど木偶人と一般、輕視したるを見ても知るべきなり。例はひとり此れのみならず、今に傳はれる上古の名篇は、概して貴族の爲にとて作られ、又貴族によりて傳へられたり。和漢の例はいはずもあらなん、少しく列國の史に徵せよ、羅馬のオウガスタン文學は、當時の最大貴族たりしオウガスタス帝其の人の奬勵によりて

貴族は古來文學の大檀那

芽を發し、ヲルジル、ホレースの花を開きたり、乃至は英國のエリサベス文學、佛のリシエリウ、ルイ十四世期の文學、近くば日耳曼新文學の勃興、いづれか貴族に負ふ所尠かりし。或は歐北蠻族中のミンストレル、或は中世紀に於ける歐洲大陸のトルバドール派、トルーベル派の諸作家の如き、皆これ貴族に寄食したるもの、然らざれは彼等の常顧客(じやうとくい)としたりしものなり。其の他ボッカチオの傑作『一句物語(デカメロン)』、リーの名作『ユウヒウエズ物語』をはじめとして、列國に名高き古傑作の著さらるゝに至りし由緣を問へば、王侯又は貴族が其の動機たらざりしはいと稀なり。和漢の過去はいふに及ばず、いづれの國の史に徵するも、貴族が文學の大檀那(パトロン)にして、其の最も深切なる玩賞者たりしは、歷々として其の證あり。就中、歐洲中古の世、兵馬倥偬、學藝悉く地に墮ちしや、詩文學術の辛うじて餘喘を維ぐを得しは、ひとへに僧侶と貴族との賜なり。詩人、文學者は、其のころ概ね王侯の殿中に寄食し、一種の幇間者流となり了せり。彼の侏儒、フールと稱せられたる者の、詩人、兼、專門の幇間たりしはいふも更なり、樂師、伶人など名けられたりしも、其の實は當時の詩人なりしなり。彼等は、戰鬪狩獵の間に於て、王侯貴紳の無聊を慰むるを職分とし、或は新に軍談の歌を綴り、或は風流公子の情事を歌ひ、以て春秋

貴族は詩文人の直接なる奬勵者なり

の慰藉に資せりき、是れ小説、傳奇類の、必ず貴族を中心とし、貴族を主人公とし、專ら上流社會の事件をのみ叙説描狀するに至りし所以なり。近世、殊に十九世紀の作にこそ、庶民に重きを置き、平民を主人公としたるものもあれど、近古以前の作には、下等社會に重きを置ける作、殆ど鮮し。シエークスピアの作は、遍く人間社會を描破せりと稱せらるれど、それだに平民社會を寫せるや、殆ど小兒、野蠻を寫すと一般、漠然輕々しく叙狀し去りて、彼等はすべて何等の特質をだに具へざるものゝ如し。我が國の物語、又は小説類の如きも、德川氏にいたるまでは、常に上流社會にのみ重きを置き、平民は只其のアシラヒにのみ描かれたり。これはた時勢の然らしめし所とはいへ、文學の最大顧客の、專ら貴族、すなはち上流社會たりしが爲なり。

以上は只漠然と貴族といふ名稱を、上は王侯より下は中流以上の社會を包含せる大團體の上に適用して、大体に於ける文學との關係を概說せるものなるが、文學の發達に於ける貴族の功蹟は、更に一層特別なるものあり。彼等は、殆ど何れの國に於ても、或時代の間は、詩文人の最も直接なる奬勵者なりき。英のダント公のチョウサルに於ける、ローリー、シドチーのスペンサルに於ける、ベムブローク卿、サウサムプトン伯

デヂケーションの起源

のシェークスピアに於ける、ケント伯夫人のバトラルに於ける、サマルス卿、ゴドルヒン卿のアヂソンに於ける、若しくは佛のリシエリウ、ルイ十四世王の當時の諸文豪に於ける、ヴイマルの君の當年の衆詩伯に於ける、いづれも直接の保護者、奬勵者、大檀那たりし者なり。　十八世紀のころだに、尚然り、それよりも以前に於ては、總じて詞人文客は、貴族の奬勵によりて著作に志しゝのみならず、彼等の庇蔭ありしによりて其の著を出版することを得たりき。　例へば、英國の諸名著中、十七八世紀以前にいでたるは、概して此くの如くして世にいでにき。　是れ歐洲の文壇に、デヂケーションと稱する一種の習慣の行はるゝに至りし因縁なり。　デヂケーションとは「献呈」の義、新著の卷頭に感謝の辭を物し、此の書は某伯爵、又は某公爵に献呈す、と記する儀式をいふ。　近世こそ、いづれの國にても、詩文章を職業として糊口衣住するの便を得ることゝなりたれ、其のかみは文學のみをたつきとして、世を渡りしもの殆ど無し。　なべて詩文章は殿上人の徒然の筆すさびにあらずば、前にいへる王侯貴紳が慰鬱消閑の具として作られしものにて、世間にひさぐべきものにはあらざりしなり。　然るに、干戈の聲漸く靜に、世の中次第に推し移るにつれ、文學は名譽の業となり、詩文によりて名を博せんと欲する者、年

々に増加するに隨ひ、著作の途やう〳〵開くるに至りしかど、印刷術發明せられざりし間は、否、其の行はれし後と雖も、やゝ浩繁なる著述の如きは、みだりに之れを上梓するも、其の費を償ふこと容易ならざりしかば、毎に必ず王侯貴顯、すなはち權門の庇蔭を乞ひ、かくして上梓するを例としたりき。　デヂケーションとは此の庇蔭者に對する禮儀にして、献呈といふ羅甸語に起源せり。　案ずるに、此の慣例は、最初は權門豪族の幇間たりし詩文人が、其の平素の恩寵を感謝するの意より、其の作に云々と附記せしに濫觴せるならめど、後には若干の金額を支出して、詩文人の「献呈」を買ふのならはし起こりぬ、こは大詩人を庇蔭せりといふ聲譽を買はんとする貴紳權門の名聞心と、貴紳の庇によりて自家が得意の作を後世に傳へんとする詩文人の功名心と、偶然相會して成りしものなり。　而して此の習慣の弊極に達せしは、佛にてはリシエリウ專權の時代、英にてはチャールス二世、及びジエームス二世の朝なりとす。當代の詩文人は、貴族の恩寵を得んが爲に、甚しき諂諛の辭をつらね、溢美の詞を作るを愧ぢざりしなり。　これらはむしろ保護の弊となれる場合なれど、過去の文學に於ける貴族の功勞は、決してかゝる弊ありしが爲に沒すべからず、何となれば彼等はまた之れと同時に、文學をして

貴族の文學に於ける功績及び感化

高雅優美ならしめし功勞あればなり。例へば、我が國の古文學の、總じて優美高雅なるは、風土、國語、及び國俗の然らしめし所とはいへ、一は其の玩讀者の、專ら貴族なりしが爲なり。同じ戲曲にありながら、謠曲は依然として高雅の致を損せざるに、歌舞伎は漸くに野卑に流れ、文學藝術としては、進步したるの跡あるも、間々忍ぶべからざる陋俗の素を混じ、識者をして眉を顰めしむるに至れる所以は、其の聽者の品質の然らしめし所なり。　外國にては、貴族と文學との關係、今日に至るまで密接なるが故に、總じて詩文章の精神、其の外形と共に高雅なれども、我が國に於ては、德川氏以降、貴族と文學との關係、一種奇異なる狀態を呈したり。　一二の例外を除く時は、貴族はなべて古文學の玩讀者となり、平民はすべて新文學の顧客となれりき、而して所謂小說、戲曲等、眞個醇文學と稱せらるべき者は、總て新文學中に含まれしがゆゑに、文學の最も大切なるものは、絕えて貴族の庇を受けざることゝなりぬ。　彼の水戶藩の有名なる奬學の如きも、ひとへに和文、漢文國史、國學の奬勵にして、文學の最も醇粹なるもの、すなはち小說、戲曲のたぐひは、啻に度外視せられしのみならず、恐らくは無用有害として唾棄せられたりしならん。　當時最も文學に厚かりし水戶藩の着眼已に

然り、社會の好尚豈靡然たらざらんや。是れ作者の識見あるもの、偶ゝ小說傳奇を作するや、自ら謙して「戲作」といはざるを得ざりし所以なり、隨うて、讀む者もまた往々戲作といふ名に愧ぢて、公然之れを讀むを憚りしが如き趣あり。なべて戲作者の著述は、專ら中流以下の好尚を標準として作せしが故に、文辭おほむね卑俗、旨意また猥雜に流れざるを得ざりしかば、上流の之れを讀むを憚りし、そも〳〵故なきにあらざるなり。此等奇異なる因緣によりて、我が國の醇文學は、截然古今、雅、俗の二流に分かれ、雅文學は專ら上流に偏し、俗文學は槪して下流に偏したり、德川氏の醇文學壇に、古くは西鶴、近松、近くば三馬、一九、春水等、夥多の醇文學者輩出しきと雖も、彼等の長所は中流以上を寫すにあらずして、中流以下を描くにあり。好んで上流の事蹟に筆を着けし曲亭馬琴の作だに、其の上流を描けるは、直覺若しくは觀察より描けるにあらずして、多くは自家の想像より描きいでたる者なり。蓋し、彼等が上流社會の事に親密ならざりしは、其の作を精査すれば、之れを認むるに難からざるなり、去かしながら貴族と醇文學、就中、小說、戲曲との懸絕は、明治以後に至りて其の頂に達したり。方今の諸作家は、四隣を宇宙として跼蹐せるが故に、其の觀察の狹隘なること甚し。彼等の作は、彼等同臭

社會を描くも、一國大の社會を寫し得ざるなり、是れ固より作者其の人の罪なりと雖も、又一方よりいへば、所謂上流社會の、あまりに醇文學に疎遠なるが爲ならずとせんや。　かくいへばとて、予は今の華族たる人々をして、彼のデヂケーションを買ふの人たらしめんと欲するにあらず、又今の詩文人をして阿諛巧笑の俗物たらしめんと願ふにもあらず、否、予は只我が國の貴族をして、眞に國俗中の最貴族たるの實を具せしめ、其の高雅なる好尚と同感とによりて、直接若しくは間接に、今の詩文人の詩思を皷吹し、新大日本の文學をして、眞に新大日本を代表せしむるものたらしめんを願ふのみ。　此の論尚盡くさゞれども、蕪辭あまりに冗漫となりにたれば、且くこゝに筆を擱す。（一月）

正直正太夫に與ふる書

拜啓仕候、手紙ばかりは肩の張らぬ書きものと存じ居り候ひしに、うたてや、近ごろは內證の一通もだしぬけに生捕られて、とんだあかるみの曝しものとなる慣はし、其の流行の上をゆき、新聞紙の埋草に、といふ斷つきの返書の催促、さて〳〵けうとい御注文かな、恐縮とは一定かういふ句取の次ぎへ入る文言、と發明はしても、廻らぬ筆のおとやさきが案

じられ、成らうことなら、といふ名聞も混り、磨る墨は雲を流せども、龍はさておき蚯蚓がきも紙にはのぼらず、何故といひたまへ、度々噂ばかりにだまされし疳の蟲が、今更の出陣を、すなはにお目でたいと申すべきか、さりとてポープ、スキフトとの比較も、二度の勤はさせたくなし、善罵劍といふ表德も、ことふりたり、といふ文句と共にことふり、結句言ふとのないは久しい知交の君なればなり、但し、いふとのないとは、申分がない、との義にはあらず、君ほど申分のある人はなし、苦情屋といへば、申分そつちもちなれど、皮肉な男、といふときは、申分こつちもち也、いづれにしても申分の本山、狷介といふ熟字は、君の爲に作られしか、と思ふほど、さツても七むづかしい人かな、誰れやらが君を文壇の三猿とはよい見立、三つ子の魂百まで、あはれ、僕がはじめて君を知りしころは、さて／＼氣むづかしいお孃さまの、おゝでも無い、斯うでもない／＼の好嫌ひやかましく、他人のあら見通しの、其の身じまひも念入にて、文章の艶ぽいこと、舞子の如く、げにはじめは處女の如し、といふ本文通りなりしに、いつの間にやら、ずんと垢ぬけした洗ひ髪、ざつくばらんの大姉え、廣い世間に、おれの氣に入つた野郎、ひとりばちもない、といふ權幕おそろしく、口の悪いこと此の上なかりしが、色氣はまだえたゝるばかり、と見る／＼

廣袖を、ひきぬいた善罵劍、かんぬきざしの町奴、強きを挫き弱きをすくふ、一通俠となりひら文治、と語呂の都合にていへば、優美に聞ゆれど、高慢と、我儘の華族臭さは、さしづめ松平長七郎の格也、されば馬子觸るれば馬子を嚙む、譬へば、人の下につくことゝ、びやくらい厭だ、と額に銘打たるじやく\馬にひとしく、乘せるが職分でありながら、まがきでも小栗でも、でんぐりかへすを專賣の身勝手作者、所詮、文を賣つて世を渡ることの出來ぬ皮肉男、若し此のまゝで、青山天王寺に埋葬とならば、見識と狹量等分の男なりし、といふ墓碑銘が至當なるべし、さてこそ這入つたといふや、否や、飛びだし、書くといふかと思へば、中止し、面白さうな題目と、面白さうな趣向ばかりちらつかせて、つひぞ正體を見せぬ人じらし、此の變幻出沒を龍と見立つれば、『二六』は差詰め雲の如し、今此の雲を得て、あらためて正太夫をあらはし、尙何のなす所なくば、君が狷介は、けんくわかひと下落し、君が高慢は、ほんのわれぼめの高慢たるに止まらん、おはれ此んな返事を得るは、日ごろ惡口の因果せうとない、と思ひたまへ。

評釋天の網島

此の評釋は、明治廿三年十二月初旬、予が不倒子、酉蹊子、月中子、等四五の同

好を會して、はじめて巢林子が作を評判せし折、手はじめの一例として物したるものにて、嘗て『日本評論』に掲げ、後に『小羊漫言』に轉載せし『女殺油地獄』の評と同時の筆なり。回顧すれば、已に滿四年の星霜を經たり、當時の所感と今日再讀して思ふ所とは、もとより多少の逕庭あれども、今尙此の名作に對して、死錠を下すべき精評いでたりとも思ばれざれば、かゝるそぞろごとも、或は以て一種の他山石となすに足らんか。舊稿をとりいでゝ廿八年初刷の附錄とす。

此の淨瑠璃は、巢林子が作中にても、明に傑作の随一なり。文辭の妙は、今さらにいふを要せず、複雜なる戀を寫して、かばかり自然の致を得たる、我が作物中稀に見る所也。予嘗てシエークスピアが『ロメオ、アンド、ジュリエット』を讀みて、切なる戀のおのづからなるに感ぜしが、今此の作を評釋するに及びて、彼れと此れと、戀の質の甚だ殊なるを認めながら、尙大と小と光異なる二箇の明玉をならべ見たらん心地あり。シルレルが『たくみとなさけ』、チューマが『椿の佳人』などに比しても、多く劣るべしとも思はず。此の作は我が情の悲劇中の錚々たるものなり。

一篇四章、第一章、新地河庄の塲は、女主公小春が戀の由來と其の爲人とを見するをもて主眼とせり、此の故に、肝要ならぬ由來經歷は、すべて人物の口を借り、又は地の文もて簡叙せり。作者が當時の心は知らず、評

釋の方面よりは、しか解してもよかるべし。　さて時候を十月のはじめとしたるは、思ふに、此話の事實にも據れるならんが、假に作意にいでたりとすれば、いみじくもえらびたり。　女主公の名にしおふ、小春日和のなま暖きは、人の心春に復りて、情火の燃え易き時なり、季候も、風物も、いとよく此の悲劇の背景を作るに足る。　秋はすべて肅殺と、氣のメイルとのみ思ふはたがへり、たゞし、小春空の裏面には、さびれゆく秋の哀れも籠りたれば、一轉せば無常をさそふ因緣とも成りぬべし。

河庄の場に「此の十月云々」とありて、第二章、紙治宅の場に、治兵衞の兄孫右衞門が「起請まで返して見せ十日もたゝぬに何ぢや請けだす」云々といひ第三章蜆川大和屋の場に「十五夜の月冴えて光は暗き門行燈」とあり、さて其の次網島の場も、同じ夜の出來事なれば、即ち十五夜が此の悲劇の結局なり。　又第二章、宅の場に「外は十夜の人通り」とありて、河庄の場、小春の言葉の中にも「十夜の中に死んだものは」云々の語あるを思ひ、上に擧げたる「十日もたゝぬ中」云々の語あるを思へば、河庄の場は十月五日（十夜の初日）にして、第二章以下は十五日（十夜の最終）なることしるけし。　さすれば、紙治が產を破り、妻に離れ、いよ〳〵情死と決せしまでに、凡そ五日の間ありしことを想ふべし、これ些末の事に似たれど、心

の變動に關係あり。

此の作、戀を主因とせれば、まづ戀の質を剖拆するの要あり。たゞし男女兩主公の間に、おのづから主賓のけじめあり、因果の關係よりいへば、小春は主、紙治は賓なり、紙治が戀は小春を得て成りたれど、小春が戀は必ずしも紙治を俟たざりしに似たり。小春が戀は意氣地が元となりての戀なれば、いはゞ分別の伴へる戀なれど、治兵衛の戀は、諺通り、思案の外也。小春は是非を分別して迷ひ、治兵衛は譯もなく惑溺せる姿あり。小春は、張の爲には、治兵衛ならぬ人にも、或は其の命をさゝげしならん、戀よりも意地が主なればなり。治兵衛はひたすら小春を慕へり、此の戀に、我れをも、家をも、妻子をも、忘れんとせり。戀の質をいへば、治兵衛の戀は醇粹なり。之れに反して、小春ははじめより其の心たしかにて、我れを忘れしとなく、切なる戀慕の間にも、自他の毀譽を思ひ、前後の利害を思へり、必ずしも情の冷なるにはあらじ、苦海に久しく浮沈したる自然の結果なり。夫れ傾城の意氣地に於けるや、士の名節に於けるが如し、彼れらは、意氣地の爲には、間〻戀をも命をも拋たんとす。良家の女と傾城とは同じさまに見るべからず、良家の少女が戀は理由なきを正例とす、何が故に彼の人を戀へるかと問はば、良家の女は答ふる

能はざらん。心だてをやさしとほめ、ものごしを愛らしといひ、目、鼻、口等をほむるは、畢竟いひわけのみ、後にこしらへし理由のみ。說明すべからざる一種の電氣に觸れて、憒然として戀慕す、其の間に何の理由かあるべき。彼等心すなほにて表裏なく、分別なく、遠き慮もなく、疑懼の念もすくなし、されば戀するに先ちて、是非利害を分別せん必要もなく、必要なきゆゑに理由を求むるともなし。傾城の思慮あるは然らず、いつはり多き浮川竹に浮き沈みして、我が心の浮きたるを、又は其の周圍の輕薄なるを目安として、人大かたは誠すくなしと計量す、されゆゑ、やゝ意地あり、分別あるは、狐疑邪推の念いと深く、たとへ肌はゆるすとも、心はゆるさじとす。其の閱歷と經驗との然らしむる所なり。所謂傾城の意氣地は、一種の自尊心なり、轉じては献身の美德ともなり、化しては任俠の行爲ともなることあれど、其の原は、所詮、自我の念の強さにあり。意氣地に富める傾城の心には、自意識殆ど滅することなし、このゆゑに、其の戀にも、必ず多少の理由あり、因緣あり、只一夜相あうて、やがて相思ふに至る例も、事實に、小說に、あまた見えたれど、何等の理由もなきは、まづ例外と見做すべし、然らざれば、その傾城が意氣地乏しきならん。予は、此の點に於て、梅川と小春との間に、いたく性の差異あるを

見る。 それは兎もあれ、世に傾城のなさけにほだされ、身をも家をも失ふもの多きは、戀のかく複雜なればならん。智の伴へる戀なるゆゑ、其の根の深く且堅きゆゑなり。

小春と治兵衛との戀中は、一朝一夕にあらず。 治兵衛が言葉にも、「三年先よりあの古狸にみいられ」とあり、小春もまた「紙治さんと私が中さほどにも無いことをあのせいこきの太兵衛めが浮名をたてゝ言ひちらし」それがにくさに深くなりぬ」といへり。 是れは朋輩への表のみならじ、さまでもあらぬに浮名たてられ「客といふ客はのきはて内からは紙屋治兵衛おぢやとせくほど〳〵文の便も叶はぬやうになり」、せかるゝほど意地にもあひたく、廣き世界に、我が身の外に女なげなる治兵衛が心中をいとしらしと思ふにつけ、其の邪魔となる太兵衛を憎む心漸く切になりしならん。 此のいとしらしと思ふ心は、いまだ戀とは稱すべからず、同感といふほどの情にて、此の同感よりも強きは、太兵衛を憎む心ならん。 曾根崎は意氣地の府なり、彼れ此の地に來たりて金びらをきり、黃金もて傾城の情けを買はんとや、金の光に目のくらむ小春と思ふか、「小判のひゞき」「聞きともない」。 是れ小春が意氣地なり、張なり。 よし前にいへる同感を戀の芽とするも、こゝまでは意地が主にして戀は

客なり。さるほどに叫はぬ首尾してやつとあふ夜の睦言に、互ひに泣いて貌見れば、情もあり、氣前もよし、才覺も、男ぶりも、と芽出しの戀へ助太刀の分別が加はれば、もはや遊女の戀も畵龍點睛なり。情こゝに至れば、雅俗賢愚生乙女玄人の界無し、分別も無し。理窟も無し、理窟よりいでゝ不理窟に歸るなり。但其の由來を問へば、あくまでも理窟なり、思案の外で無く思案の内なり。其の系圖は

(緣)治兵衛の眞實 ｝治兵衛へ同感(因)
小春(主因)意氣地——
(緣)太兵衛の金びら ｝太兵衛憎し(因)
治衛兵の爲人(緣)
他人の邪魔(緣)
｝戀

治兵衛の戀に至りては、趣を殊にす。「年三十に垂とし勘太郎おさえといふ六歳と四歳の子の親」とあり、又網島の場に「十九と二十八年」の文句もあれば、妻もちてより尠くとも六年を經たるならん、さすれば、世のさが知らぬ際にあらず、などてさしも迷溺せし。六年前に妻を娶りさとすれば、其のころは二十二なり、今の時勢にていへば、二十二歳は稍々分

別のつく齢なれど、太平無事の世に、所謂をんばの日晴傘すぼめると同時に、若旦那ともてはやされ「六間々口の家」ゆづりうけし身は、何の分別もなき雲の下の華族也。さて小春を買初めしは、三年前とすれば、二十六の春か、二十五の冬なるべし。是れ人生の春、最も色に迷ふべき年ごろなり。其の初會は友達の參會くづれか、年若きうちより子澤山にて、世帶じみし女房の正直一方、誠一方を女と思ひこみたる心は、忽ち「妓が情の底深き戀の大海」に溺れたり。治兵衛の初心なる心は「心中よし意氣方よし床よしの小春」のもてなしにとろけたり。彼れが戀は「Love at first sight なり、且はじめは肉の戀也、而も肉の戀より情の戀へは其の間只一歩のみ。小春が「さまで思はぬ」に通うてゆきしは愛せし證にて、かはゆきゆゑ愛す、といふ理由の外には「意氣かたよし」とか「心中よし」とか「床よし」とか、誰もいふ理由ありしのみ。かくて太兵衛とのさやあて、又はせかれし事、又は小春の心中のやゝ見えたるなど、皆戀をつのらしめし緣ならめど、皆緣にて因にあらず、いはゞ、反動の作用、すなはち理窟の沙汰にあらで情の沙汰なり。所詮、治兵衛の戀は、理窟を離れたる思案の外の戀なれば「兄の異見をうくるとかは、舅は伯母聟、姑は伯母、親同然」の剛意見も「一家一門の悔み」も、女房の心づかひの諷諫も、糠に釘ほどの

きゝめなし。然るに、小春の戀は思案の内に意氣地が生みし戀なれば、阿さんが切なる頼みには、山海に誓ひし心も動けり。くるわの張(名譽)は身の爲、浮世の義理に男と切れるは人間の張(名譽)、前は私欲、後は公道、切れともなさは山々なれど、こゝ小春の苦みは、大小の相違こそあれ、彼の小松のおとゞに劣ることなし。阿さんの文を讀みし後數刹那の苦惱思ひやるべし。くるわの張は何のためぞ、人の身の恥を思ふゆゑ也、死ぬとも治兵衛どのを思ひかへじ、添ひとげんと焦るも、太兵衛面に恥かゝせ治兵衛の面たてさせん爲のみ。所詮は、これを道と思ひ、人がましいかれと願へれば也。然かるに、若し義理を棄て、人情を忘れ、此の頼をきかずもあらば、何面目に人に面をあはせん。切られぬを切る、傾城の張ならずや。此の果斷も意地の所爲、彼の戀も意地の所爲、心始終たしか也。さて一たび胸を据ゑては、治兵衛にあひたし、と、かりにもいはねど「若しや太兵衛にあはうか」といふ氣づかひはなほやまず。太兵衛面憎しといふ念は戀の因なり、戀は思ひ切ても、此の念ばかりは切れぬあり。爰が女氣の本體なるべし。さて武士が太兵衛をこらして後、「紙屋〳〵とよしあしの噂をきけば身に應へ思ひくづをれ恍惚」とある、これを切れともなさの苦惱とのみ見るは當らず、我れは死ぬより外に分

別無しと分別したれど、夫には何として分別させう、と切れぬ思案のなみだ也、小春が十死一生、阿鼻叫喚の相也。　はじめてあひし侍士に對ひ「同じ死ぬるにも十夜の中に死んだものは佛になるとは定か」とは、苦惱の爲に我れを忘れたる譫語と見るべく、「定めし此喉を切るかたがたんと痛いでござんしよの」とは譫語の頂點と見るべし。　作者恍惚の二字を點じて豫め此の無意識を表す、二字千斤の力あり。　されば小春の斷末魔は「風誘ひくる念佛に彌陀の利劍と貫かれそりかへりにし曉の見果ぬ夢」の刹那にあらで、此の恍惚時の前後にあり、かの網島の韓くれなゐ、血汐に染みての四苦八苦は、偏に肉の苦痛也、こゝは魂の七顛八倒、眞如無明有漏無漏の界、此の世あの世の瀬戸なれば、さすがの張も切れ、意氣地もちぎれ、胸も腸も寸々にならんとす、　されど此の數刹那を過ぎては、心たしかなると山の如し。　見知りある脇差に突かれぬ胸は貫けど「醉狂のあまり色廓にはあるならひ沙汰無しに往なしてやらんしたらナア河庄さんわしやよさそうな」とおちつきし口吻「此喉をきるかたがたんと痛いてござんしよの」とおどけなく問ひしとは霄壤の差なり。情ありげなる侍客を得て男を救ふべき思案成りしに度胸のきまれる也。　畢竟、意地が元なれば、賴の通り男と切れ、其の命を救ひ得べしと思

奥の巨燵にうたゝれの心の解剖

へば、其の俠魂晏如たり。

治兵衛の戀は然らず、我を忘れ、身を忘れ、思案分別をはなれたる煩惱なり。　曰はく「可愛や小春が背けた貌の瘦たことわい心の中は皆それが事」と。　女の心には義理も意地も戀もあるをや。　又只一言の心變りをきいて「扨は皆僞か腹のたつ、二年といふもの化された根生腐りの狐め」と齒を切りて怒り、數十度の剛意見も馬耳の風ときゝし身が、此の時ばかり大地を叩き「誤ッた〳〵兄者人」と後悔し、たちどころに起請を寸裂す、是れ分別の後悔ならず、一向に情の反動なり。　惜し怨めしの情が此の英斷をさするなり。　小春が阿さんに義理をたて、世間に義理をたてゝ思ひきりしは意地にて、意の作用なれど、これは情の作用之、愛せしもいとしといふ情のわざ、切れるも惜しといふ情のわざ、其の間に分別なく思案なし。

第二章、紙治宅の場には治兵衛の本性を見せたり。　小春と切れて十日に垂とす、懊惱たる物思ひ、忘れんとして忘れがたし、さりとて「ふつゝり心殘らぬ」といひ放ちて起請を裂き棄てしは兄の手前ばかりならず、我が心に對しての誓言なれば、破らんやうもなし。　「三年の間いひかはしゝ女、此の心變あるべしや、と他人ならば疑ふべきが、現在女の口より明

に不實の證據はきゝたり、疑はんによすがなし。奥の「巨燵に轉寐」は我れながら譯のわからぬ物思ひのせうことなさにて、分析すれば、此の物思ひは、小春憎く且戀しく、且怨めしく且戀しく、且妬く且戀しく、且忘れたく且忘れともなく、且棄てたく且棄てともなしとの心之。然れども治兵衛自身は、戀し、忘れともなし、棄ともなしの三原素の心に在るをみとめぬ之、みづから其の心に問ひて、認むべからざるを知れば之。而も影のやうに、幻のやうに、みとめらるゝが苦しく、遣り所なく、何事も手につかず、只譯もなくむしやくしや鬱々として轉寐す、是れ情、火の靈なる所也。世の中は道理ばかりで押されず、道理はあくまでも「女を狐とし狸としヤジリ切」と定めたれども、一片の靈火なほ存じて道理の礎を動かさんとす。道理は磐石の如しと雖も、其の礎はすわらぬ也、戀の力の廣大無量にして間合せ小説に見えたる煙のやうなものにあらぬを見よ。

されど、これは情の上のみ、理性上にては、已に醒めたり。されば其の毅然たると丈夫たるに恥づる無し。其の伯母、兄に對ひての分疏の如き、玲瓏として内に蟠れる所無し、就中、誓紙かきても誓ふか、といはれしに答へて「何がさて千枚でも仕らう」と斷然と言ひ放ち、神色自若たる所孩

しき心ある者の得て粧ふべきにあらず。一時逃れの口上ならぬことたしかなり。伯母兄の「門送りさへそこ〳〵に巨燵の中へもぐりいり枕につたふ涙の瀧身の浮くばかり泣き」たるも「人の皮着た畜生女」に名殘をしみてにわらぬ事、げにみづからもいへるが如し。かの一片の靈火の胸にこだはりて、我れを泣かしめんとせしことは、前にもいへば〳〵ありけめども、理。性。ゆるさゞりければ、泣かまくして泣く能はざりしに、今や其の理由なき苦惱に一條の理。由。出來たり、理。性。のゆるす理由いできぬ、されば鬱勃たりし滿腔の痛哀堤を裂いて迸りいでたり。爰に至りては鬼神といふとも泣くべし、まして情感の塊、紙治其の人に於てをや。　理由とは、分析すれば、左の如し

一小春に心は殘られども、彼れが誓を破りしこそいと憎し、いと口惜し、さかれどもこれは尙忍ぶべし

二我が戀の因緣ともなりたる、仇敵太兵衛に請けだされて、我れを愚にす、憎し、口惜し、さかれどもかゝる四足女に心は決して殘られば、これは尙忍ぶべし

三只太兵衛めがインゲン吐き、治兵衛身代息ついての、金に手詰つてなんごく、大坂中を觸れ廻り、問屋中の突合にも、面をまぶられ、生耻かく、胸が裂け、身が燃える、口惜し、無念……

是れ豈理性のゆるす理由にあらずや。而も其の實は「名殘惜しや」の一念が形をかへて發したるに過ぎず。如何ばかり無分別の者といふとも、其の情を外に發せんとするや理性のゆるしを俟つこと、おほむね斯くの如し。

さて、女房阿三が一伍一什を、明かすに及びて、治兵衞の大夢はじめて醒む。前に醒めたるは夢中の夢の醒めたるに似たり、眞に醒めたるにあらず、玆に至りては四方豁然たり。十日の間畜生よ惡魔よと罵りし小春に對して、此の時一片の疑ひをだにさしはさまざるを見ても、此の間惡魔と罵りしは、畢竟、情の反動にて、本心は依然小春の誠實をみとめたりしやゑるけし。加之、前に醒めたる時は小春を罵れども、我れを罵ることなく、女の非を擧ぐれども、我が非を數へしとなかりき。此の時は然らず、「あまりに冥加恐ろしい此治兵衞には親の罰天の罰佛神の罰は當らずとも女房の罰一ッでも將來はようない筈兇してたもれ」と手を合せ、現在の妻に詫ぶることを耻ぢず。前には小春を忘れざれば、彼れの非を口にし、今は我より非を覺りたれば偏に我が非を數ふ。さきには女が主にして今はおのれが主なり。是れ豈醒めたるものにあらずや。

治兵衞已に醒めて是非を知る、故に、俠婦小春を見殺しにすることの人情にあらず、又義にあらざるを知る。　おさんはもとより義を知れり、一家の爲に人情を犧牲にせざる可からざるを知りて、忍びて小春に依賴する所ありき。　但し一家の安寧とは、重に我が身に關する事なり、我が身の爲に俠婦を殺すは道のゆるさゞる所なり。　阿さんよく此の理を知れば、今また泣きて實事をあかし、夫に小春を救へと乞ふ。　當下治兵衞の心中に一私情と二公情と相鬪ふ。　一私情とは小春を愛する情にて、二公情とは俠婦救はざる可からずといふ心と此の義ある妻も犧牲にす可からずといふ心と也。　若し治兵衞の心中第一の公情のみなりせば、阿さんの金を取りいでゝ與ふるに「始終さしうつむき」躊躇するを要せじ、又以前の如く醒めずして偏に私情のみならば、又何ぞ躊躇すべき。　されど今は是非の分別あきらかにて、私情の胸にあるを知れる故、此の第一の公情を、或は私情ならずや、と疑へり。　若し私情をもて公情と誤り、第二の公情に背かんには、即ち此の憐れむべき妻、此の至誠なる妻、此の義理がたき妻を犧牲にせば「佛神の罰おそろし冥加おそろし」、小春救ひたしとは私情ならじか、公情なりや否や。　よし私情ならじとも、第二の公情といづれか重きぞ。　勿論、かう明に辨へしにはあらざらめ

ど、此の剎那の躊躇を分析せば、紙治が良心の安んせざるに歸すべく、また其の安せざるは私情と公情と相鬪ひて、私情のやゝ重きに偏れるを認めたるに歸すべし。而も紙治が私情は純然たる私情にはあらで、公情をも含めばこそ、醒めたる紙治の本性も、終に此の情を退くる能はず、煩悶して此の私而公情と第二の公情(即ち妻を犠牲にせざるべしといふ心)とをして兩立せしむべき道を求めて以爲へらく、たとひ此の私情にしたがふも、此の義ある妻を犠牲にせずば、公情の並立を得べし、只其の方法を如何にすべき、と。即ち涙の中に妻に對ひて曰はく「手附渡して取とめ請出して其後圍ふておくか内に入るゝにしてから其方は何と成ることぞ」と。私而公情たる小春に對する心と公情たる妻に對する心との間の苦鬪なり。

さて竟に至誠なる妻に勵まされて、私而公情の指圖にしたがへるは、私情に溺れ、愛に溺れ、第二の公情を忘れ、即ち義を忘れたるに似たれど、紙治の心中を分析すれば、必ずしも然らざるものあり、何となれば、彼れ此の咄嗟の間に丈夫的決心をしたれば也。彼れは果たして此の決心を實行し得べかりしや否やは、命つたなかりしかば知るに由なけれど、尠くとも此の瞬間には、彼れの良心平にして、私情公情並立の方を案じ得

てたしかなりき。曰はく

譬へば治兵衛乞食非人の身と成り諸人のはしの餘りにて身命は繋ぐともおさんは急度上に居ゑ憂目見せず辛い目させず添ねばならぬ大恩あり其譯は月日もたち私の勤方身上持直しお目にかくれば知るる事云々

と。是れ豈兩立の法を案じ得たる者にあらずや。此の刹那には治兵衛が心天地に耻づる所無し。されど舅五左衛門が此の言を信けざるも理あり、三年の遊治郎の言の信けがたきは其の筈也。此に於て、治兵衛の進退は谷りぬ。俠婦も救ひがたく、義妻にも報いん望無し、人情もたゝず、義理もたゝず、ましてや我が私情をや、戀をや。戀一つ遂げがたきも治兵衛を氣死せしむるに足らんを、ましてや、人情もたゝず、義理もたゝざるをや。望悉く斷絶せり、靈氣悉く死に了んぬ。魂已に死せり、肉豈惜しむに足らんや。「オゝ治兵衛が去狀筆では書かぬ是御覽ぜおさんさらば」と脇差に手をかくるは自然の所爲にて、治兵衛が心に於ける唯一の業果也。此の時の決死は、情の沙汰のみにあらず、理性もまた沙汰する所也。

治兵衛已に其の妻と斷縁し了んぬ、妻に對する公情は最早繋がんに由なし。「おさんは舅に取りかやされ暇をやれば他人と他人離別の女になんの義理」もある事無し、只剩す所の情は俠婦に對する公情と情婦に

對する愛とあるのみ。前者は義理也、後者は人情也。更に又一つの情あり、二人の子に對する愛情也。而して前の義理と人情とは、其の目的一つなれば容易く合して一となる、即ち小春と共に死なば、一は人情に適ひ、一は義理に稱ふべし、即ち情死すべしと決心す。只夫の幼兒をいかにせん。我れ死なば孤兒となることの哀れさよ、罪なき貌の名殘をしさよ。さらばとて、生ながらへば、情に背き、義に逆き、而も我が子の顏を見んよすがなし。死なば、情もたち、義もたつ。嗚呼死ぬべきなり。すなはち陰ながら兄を拜して「猶此上のお慈悲には子供が事を」と、涙にむせびて此の兩支の情の一端を棄て、偏に小春にむかはんとす。蓋し、二十八年の大夢はじめて醒め、義理をさとりたる今となりては、もはや情の爲に存ふる心なく、義の影だにある所に就きて、命を終へんと願へるなり。曰はく「心に物をいはせては十惡人の此治兵衞」と。一生の災はすべて皆我が心より生じたり、自業自得の業果のみ。天を怨みず、人を咎めざるもの、豈悟れるに近からずや。將に死なんとす、一言だに太兵衞に及ばず、人を怨みざること明か也。些も身のつれなきをかこたず、人を怨みざること明か也。治兵衞豁然として因果の止む可からざるを悟りぬ、其の將に情死せんとするに臨みても其の心泰然としてお

のづから樂める色あり、他無し、悟りたる所あれば也。此に至りては小春の心と相背く、小春の心には安んぜざる所あり。

第二幕の小春は泰然として死を決せり、我が情を棄てゝ義を取れるを自識したれば也、情夫に對する私情を棄てゝ浮世の義理にしたがへる事の公にして貴きを意識したれば也。然るに今や大に趣を異にせり。命の必然とはいひながら、事外より破れて、我が義全く破れたり。救はざる可からざる治兵衞を今は救はんに由無し。曰はく

おさんさまより頼みにて殺して呉れるな殺すまい挨拶切ろと取替せし其文を反古にし大事の男を唆しての心中は流石一坐流の勤の者の義理しらず僞者と世の人千人萬人よりおさん樣ひとりのさげすみ恨み嫉みも嘸と思ひやり未來の迷ひは是一つ

げに此の一ツの迷あり、唯此一ツの迷ひあるのみ。最愛の男と死を共にす、味氣無き世に此の上の願ひ何かあらん。死ぬる命は網島の艸葉の末に置く露の、つゆばかりだに惜しからず、此の世に思ひ置く事なし。「心殘りの事あらばいふて死ねよ」といはるゝも只「何も無し何もなし」、今世の我が樂は成就圓滿したれども、只、只一つ迷ひの種は、そもや二人がなれそめの、其の因縁の因縁の、意地を破り、張を折り、義理を得たてで死ぬると、人でなしといはれんと、つらし、口惜し、胸苦し。此の一ツの迷ひば

かりは、いまはまでも離れぬなり。小春の戀は意地にはじまりて意地にをはる。戀の成らざりし前に意地ありて命の終らんとする時尚意地あり、而も其の意地を成せずして逝く。小春は意地の私情たるを其の最後までもえ悟らざりしなり。小春の戀は純粋の戀といはんよりは意地と戀との混淆なりといふべし、故に、戀は遂ぐれども安んせざるなり、治兵衛の戀は純粋の戀なり、故に、我が情婦と共に死ねば戀の目的は圓滿せるなり。彼れに迷へる實ありて此れに樂める實あるは、此の相違に基けり。元より肉體の上よりいへば「丸三年もなじまいで此災難」にあへること、戀の圓滿とはいひがたしといへども、之れを魂の上よりいへば、娑婆に心を殘さずして愛する女と共に死ぬるは、戀の圓滿成就なり、而して紙治の心中、已に八界を棄て去れる悟あり。「夫よ〳〵此からだは地水火風死ぬれば空に歸る、五生七生朽せぬ夫婦の魂放れぬ驗」と黒髮を切り棄てたる刹那の治兵衛は、まことに發菩提心なり、其の心水の如く淡く、其の胸月の如く明し、毛頭肉情の影も無し。嗚呼、治兵衛は、肉情よりいでゝ戀に入り、戀よりいでゝ一種の覺に入れるなり。されば第二幕までは、小春賢にして治兵衛愚なるが如く、小春分別ありて治兵衛分別無く、小春意識して動き、治兵衛無意識にして動きしが、此

に至りて局面倒に一轉す。見よ、意地を義なりと誤解して、中有に迷へるは小春なり、形體已に死なんとして魂未だ死に得ざるものは小春なり、四大空に歸らんとして尙有漏無漏に迷ふものは小春の心なり。小春は、迷へる故に、愚痴なり、治兵衞は、悟れる故に、義理分明なり。「良人髪を切ッたれば出家の身三界の家を出妻子珍寶不隨者の法師、おさんといふ女房なければおぬしが立つる義理も無し」心を安うして死ねや、といふ、是れ小春を安んせんの方便なり。治兵衞の安心は、死を決したる前にあり、何條此に至りて髪を切りて此の如き口實を細工するを要せんや。「捨身の品も所も替へておさんに立拔く心の道」云々といひ、男女死場を異にしたるも、是れ亦小春を安めんとてなり、我が安心の爲にはあらじ。其のはじめ無意識所動的の治兵衞が、終に爰に至りて有意識能動的の丈夫となりて、無明の暗中にたゞよへる憫れむべき小春を救へるを見よ。

治兵衞の安心は自力にして、小春の安心は他力なり、治兵衞を得て安心瞑目す、男女の性別躍如として紙上に跳る。「こなさん夫で死なしやんすか所を隔て死ぬれば側に居るも少しの間此處へ〳〵」と手を取りあひ、及で死ぬるは一思ひ嘸苦痛なさりやうと思へばいとしい〳〵」と止

めかねたる忍び泣き。嗚呼、是れ何等の悲哀の聲ぞ。安心は得つれども悟らざること明らけし。

縊くるも喉突くも死ぬるにおろかあるものかよしない事に氣をふれ最後の念を亂さずさも西へ〳〵さ行く月を如來さ拜み目を放さず只西方を忘りやるな

毅然たり、玲瓏たり、此の聲已に人間の聲にあらず。父親の「今死ぬるとも何心なくすや〳〵と可愛や寢顔見るやうな忘れぬは是ばつかり」と小春の愚痴にさそはれて、最後に殘す只一言、子に對する煩惱の暫らくさまよへるを咎めんや。蓋し、治兵衛の覺は精進勇猛の果にあらずして、戀。よりいでし菩提心也、戀。より得たる頓。悟。なり。元より絕。對。の悟にあらず、相。對。の悟なり、即ち、小春を得て成れるなれば、少しく小春を離るれば、再び凡夫に歸らんとす。此の最後の慟哭は小春に離れたる油斷に因す、「定めておふたりの子達の事氣にかゝろ」と不意に小春にいはれたる、是れ晴、天、の霹、靂。此の刹那は小春。客。觀となりて、我子。主。觀となれる時なり。相對的菩薩たる治兵衛其の人にあらざるも、或は晴天の霹靂には愕然たらん、其の不意の聲たるは「アレひよんな事をいひだして」と治兵衛が叫べるを含味して知れ。然れども是は只一時の迷のみ、「泣

顔殘すな殘さじと莞爾と笑顔のしろ〴〵と」おちつきて女を殺し、羽織打きせ、死骸をつくろひ、從容として死につける、最後のふるまひ男たるに恥ぢず。巣林子終に男の男たる本性を寫破して餘蘊無し。一男一女の煩惱をさ〳〵戀に因緣す、滿篇の悲哀其の根底を叩けば皆此の戀に因緣す。彼れの痴、此れの愚、彼れの非、此れの惡、一つとして此の煩惱に因らざるは無し。而して紙屋治兵衛は此の戀に纒綿せる他の煩惱を解脱し去り、純一の戀を成就して大覺し、小春は此の戀に纒綿せる俠氣を棄て得ずして尙迷へり。思ふに、戀は情の靈明なるものなり、其の濁る(雜駁)や迷裏に迷を生み、其の淸むや(純一)迷裏に如々を現ず。巣林子此の理を覺悟して、此の相を寫破せしか、將た知らずして瞑識せりしか、我れもとより之れを知らず、恐らくは竟に之れを知るに由なからん。

思想の三世

前代と後代と相接する處、思想に潮汐の二流を現ずるは、今古常に見る所、只我が現代の思想海の潮流の如き、之れを大別するも、尙明に三時代の潮流を現ず、殆ど過現未を併觀するの概あり、豈驚くべからずや。一

流は退流す、之れを過去の流とす、所謂退潮也、天保(舊幕)思想。　一流は停滯動かず、若しくは只搖動するのみ、これを中流とす、嘉永(維新)の思想也、一流は進んで休まず、明治新代の潮流也。　明治の潮流の動くや、天保は呆然解する能はず、然らざれば外道潮と罵る、而して嘉永潮は間々其の急躁を笑ふ。　二者共に明治潮の眞意を知る能はざる也。　明治の潮流に駕するの青年よ、自信せよ、猛進せよ、彼等の罵るは汝を解せざるが故也、國文學の旨も形も將に革新せられんとす、其の期正に迫り來たる。

第二の反動

吾人が古文學、古文法の復興を歡迎せしは、文學をして奈良、平安、若しくは元祿に復らしめんが爲にあらず、亂後のはツたて文學を一掃して地ならしをなし、新に大國文學を建設せんが爲なりしのみ。　暫く過去の文學を講修せしは、地盤を平にし、基礎を固うせんが爲なりしのみ。　然るに世の騷人、いつしか古文學に魅せられて、漸く地ならしを終へたる今、新大伽藍を建立せんとはせずして、却つて大極殿の摸造にのみ從事す。　嗚呼何の心ぞや。　新文法は今正に創唱せらるべきの機と知らずや、新詩形は今正に創始せらるべきの機と知らずや、新脚本、新演劇、はた

やうやく唱へらるべきの時也。 即ち第二の反動機咫尺にあり。 新改新說を以て過去の改新說(例へば羅馬字論、假名論、新體詩論、演劇改良論など)と同視する勿れ、彼れは楯の一面を見たるの改進論、これは兩面を觀了せるの論。

陋又醜

文人の小なるもの、其の多感にして多情なるは往々にして大文人に讓らず、其の放縱と身勝手、はた大詩人の壘を磨す、幸にして利欲の奴とならざる時だに嫉妬、猜忌、名聞、虛誇の弊、曾て其の胸懷を脫せざることあり、これ已に十二分の惡德、十二分の汚辱。 しかるに世の漸く澆薄に流るゝや、みづから意識して此の汚辱に上塗(うはぬり)し、此の惡德に輪をかくるの徒あり、彼等は恬として褒貶を賣り、Literally(もじのまゝ) に評論を賣る。 嗚呼、苞苴の陋やうやく文壇にも入らんとするか。

吾人は世間の浮說を信ずるを欲せざるもの、而も黑煙空しく颺らず、音響は物なくして聞こゆるの理なし。 新聞文壇に於ける收賄沙汰、誰れかはじめて之れを口にし、誰れか之れを世に傳へし。 奇々怪々。

不潔者盛に物いふ時、少數の潔者皆口をつぐむ、不潔者に同じて言はゞ

其の班に加へられんを怕れ、反抗して説を立てば、仲間はづれを怒るなりと疑はれん。是れ彼等の默する所以か。 咄、今の新聞文壇、一人の道義の爲に發奮する男兒なきか。

名聞（二三）利欲、正に是れ陋文人の極致。 名聞は尙恕すべきも、不義は默視すべからず。 善にも弱く、惡にも弱き、眞に是れ女性的操觚者。

名聞偏執の文壇に瀰漫するや久し、今や更に金錢的利欲の念を加へ來たる、陋又醜。

絶望狂憤の徒は、間〻口を開いて此の般陋醜を罵る、他は默々、憎まれざらんを是れ力む。 不潔の徒すなはち平然、曰はく、甲某が疾罵するは絶望の故のみ、其の雜言は讒謗のみ、他の面を見よ、一人の余輩を譏刺する者なきにあらずやと。

俗謠的新躰歌

七ころび八起きして、所謂新體詩の調子、漸く俗謠に向かはんとす。 万葉的詞藻も高古に過ぎて用ふべからざるなり、新古今的詞花言葉も今日の思想には適せざるなり、此に於てや、新體詩人の或者は、俄に博文館物の俗謠俚曲集に眼をさらし、若しくは俚歌俗曲に耳を傾け、〝玄やんせ、〟

戯曲作者等の襲用し來たりたる語は概して京坂の狭斜語なり

「ござんす」「何ふじや」「何ふわいな」の文句を學び、以て新感を寫さんとす、其の例比々として近刊の幾雜誌に見えたり。或は之れを美とする者あり、曰はく「新體詩を作らば當にかくの如くなるべし」と。吾人は其の想と調と語との不諧和を感ず。吾人を以て見れば、所謂俗謠的新體詩は、かたはら痛からざれば幼稚(おさな)らしく、幼稚らしからざれば ridiculous なり。之れを譬ふれば、良家の子女が媚を遊冶郎に賣らんとする妓輩の口吻を學ばんとして未だ熟せざるを聞くが如し。彼の妓輩の語や、仇ッぽきことは是れあり、男の氣に入ることは是れあらん、可憐多情はた或は是れあるべし、只其の浮靡と狎褻とを如何。

夫れ語は情思の影、吉原詞の嚴肅の情思に適せざるが如く、『源氏物語』の對問は到底カアライルの辭たるべからず。彼の俚歌の語や、俗曲の詞や、彼等はそも如何にして成りいでたる語ぞ。花柳狭斜の通用言にあらずや、媚婦等が情感に至適せるの語にあらずや　夫れ花柳狭斜は下流の肉的極樂、平民的蕩子が淫樂(ラスト)の巷(ちまた)、そこに生誕し、そこに發育せし俚言卑語には、げに通俗の質はあらん、げにや天眞に近きものあらん、又洒々たらん、粹ならん、華ならん、即ち庶民的趣致は是れあり、即ち通じ易く即ち人情に入り易し、さもあれ、要するに、浮靡狎褻の語、眞摯の致、深刻の

趣、かくの如きものいづこにかある。　嗚呼、何者ぞ、此の「浮いた」を理想とする狹斜語に就きて、明治の新詩語を求めんとするぞ。

同じ下等社界の俗言にも、健なる情思を表するものあり、不健なる痴情を表するものあり、其の間差等幾階、又買ひ手の位置に立てる嫖客の語と媚を賣る娼婦の語と、品位相等しからず、俚語を採るはよし、何ぞ彼れを取らずして此れを取れる。

詞譜は語を擇ぶを第一とす、今此の般の注意なくして妄に娼婦の卑語、幇間の野言を取り、これをもて今代の情思を吐き、以て得々たるが如きは、通か、紫痴か、半可か、駄洒落か、そも〳〵また盲蛇(めくらへび)か。　俗語を用ふるは妙、其の無差別は長歎すべき也。

Pun(ポン)、地口、かけ言葉

英語に pun(ポン) といひ play(プレー) upon(アツポン) words(ワオヅ) といひ、quibble(クイツブル) といひ、equivocation(エクイヴオケーション) といひ、paragram(パログラム) といふ、皆殆ど同義のもの、我が地口語呂の謂なり。　同音を利用して異義を含ませ、一言兩意を兼ぬる所、一種の着色となすに足る、而も畢竟は劣等(ロウ)才思(コンスート)、所謂「地口(ポン)は是れ(イズ)最下等(ロウエスト)文才(ヰツト)」なるもの、文人の好みて用ふべきものにあらざるなり。　彼の大詩人シェークスピアの作

すら、其の中年前後の作に於ては間〻此の物に富めるが爲に、或嚴格なる批評家等をして屢〻其の眉をひそめしむ。 アヂソンが其の『觀察者（スペクテートル）』にいたく諷刺せしも此の物也。 苟も眞詩人たらんもの誰れかすさみて此の物をよろこばん。

遮莫、こゝに一人の論者ありて、以上說く所を擴充して、これを我が緣語、かけ言葉の上にも及ぼさんとせんか、吾人は遽に賛同する能はざる也。地口又は pun（ポン）と、我が所謂かけ言葉とは、一見酷似して其の用間〻異なればなり。 pun（ポン）は地口なり、地口は語（ヲオド）の上の頓智（ウイット）、概して一言兩意なるが爲に興あるのみ、他に何の用をもなさゞるを例とす。 我がかけ言葉は必ずしも然らず、一語をして兩意を兼ねしむるを眼目とせはせず、否、語を簡にすること、語呂を滑にすること、語を美にすること、此の三者を目的とす。 もとよりかけ言葉にも然らざるものあり、又巧拙あり、歌人が用ひたる皆必ずしも巧なるにあらず、近松、馬琴、等の、はた屢〻拙劣なり。況や近時用ひらるゝものをや。

而も其の拙劣なるものだに、前の三目的に副へる限は、所謂地口、quibble とは同じからず、否、隱喩、直喩、等に比すべきもの、吾人は斷として其の一種の figure たるを信じ、尠くとも叙事詩躰の風調文に於ては、國語の性

質の太變せざる限は、輕々しく棄つべきにあらざるを信ず。蓋し、我が國語は外國語と性を異にし、頗る同音の異語に富む、これ疑ひもなく我が國語の幼稚なる所以、又其の素撲ある所以なるべく、國語學上よりいはゞ、恐らくは悲しむべき缺點ならん。而も類例なき一種の詞姿(figure of speech)は、かくして我が國に成りいでたり、眞個に是れ我が國文の特質、かなたの修辭則を以て輕々律し去るべからざる也。かのpun(ポン)を難ずるの舌を以てやがて我がかけ言葉を譏るの徒は、蓋し、いまだ我が國語に通せざるの徒、共に國文を談ずべからず、彼等はまづ士子文學士が『洒落哲學』を一讀し、さて後近松が作五六十篇を讀破し、而して後に說を立てよ、吾人また耳を新にして之れを聽かん。

滑稽

笑と涙とあり、時に暗黑面を見て涙下り、時に光明に浴して笑聲洋々、すなはち樂みて淫することなく哀みて傷るに至らざるに庶幾からん。詼諧の才なき作家の、古來大劇詩を成さゞる由緣、論を待たずして較著ならずや。　かのひとへに暗黑を愛し、又はひとへに光明に溺るゝの徒、若しくは厭世若しくは愛世、是れ孤翼の鳥、彼れ片輪の車。

笑と涙とはあざなへる繩の如し、笑ふとき必ず樂ありとする勿れ、笑極まりて涙流れ、涙盡きて皺がれ聲の笑となる。彼の端、此の端、相つらなる環（たまき）の如し、無始にして無終。人若し此の理を解せば、語の輕やかなるが故に、想輕しとする勿れ、辭の滑なるが故に、感淺からんと推する勿れ。

Sad faces under merry masks ― 悲憤激越、言々壯烈なるもの、いまだ必ずしも大悲憤の人にあらず。大悲憤は默す、大哀傷も默す。スヰフトの大狂憤のいかに平板の語に洩らされたるかを見よ、バイロンの名聞心の其の慷慨の底に隱然たるを思へ。彼のクウバルの「ジョン、ギルピン」や、其の底に何等の餘感なく、又何等の寓意なきも、眞個詼諧の醇なるもの、三讀、尚あくを覺えざるなり。何が故ぞや。其の成りしや哀傷の間に成り、些の汚き混和物なし、然り、哀傷の篩を經て自然に成りいでし笑なればなり。

涙を知らざる者の笑は、小兒の笑にひとし、沒義又沒風韻、同感の涙を知らざる者の笑は、高慢の笑、自負の笑のみ、共に詩中の物にあらず。ひとり大に泣き、大に笑はん者、是れ我が理想の詩人、また理想の人。

新思想と險晦の語

想斬新なるときは、語も時としては奇異ならざるを得ず、新詩人の作の往々にして含糊晦澁、解讀せらるゝを難んずるは止むを得ざるの結果なり。　近くばブラウニング其の例たり、而も語の晦澁は新詩人が長所にあらずして短所たることは論を要せず、然り、恨むべき瑕疵と呼ぶべし。　蓋し、所謂新詩人は新感を抒するに忽にして辭を擇ぶの遑なきなり、否、想を錬るに忙しうして語を求むるの餘裕なきなり。又自家の感熾なるが爲に、意餘ありて語足らざるに氣づかざるなり、大に怒る者の自家の是非を忘却し、大に溺愛する者の他の美醜を判じ得ざるが如し。こゝを以ての故に、新詩人が作する所は、概して其の想の見るべきものあるも、其の辭侚醇ならずして、想此れが爲に埋沒し、全章爲に索然たることあり、或は幾分か現るゝも作家の期する所遂げられざることあり。即ち百度以上の情熱もわづかに六十度以下となりてあらはるゝなり、惜しむべきにあらずや。

此の弊を救はんものは何ぞ。　修辭學か。　曰はく、否。　千錬万鍛か。　曰はく、いまだし。　曰はく、如何せば可ならん。　曰はく、Know thyself.

『尋常小學讀書教本』

は今泉定介、須永和三郎兩氏同編にして普及舍の發行なり。緒言に曰はく「此ノ書ハ兒童經驗ノ及ブ範圍ニ就キ廣ク材料ヲ求メ以テ其ノ興味ヲ多方ニ開誘シ其ノ知識ヲシテ品性ヲ陶冶スル資料タラシメ特ニ國家ヲ愛シ實業ヲ重ズル精神ヲ養ハシメンコトヲ務メタリ」と。げに全篇中收むる所、すべて修身、地理、歷史、理科、其の他日常生活に必須なる事項に渉り、文體も平明、插畫も卑俗ならず、假字遣、送假字なども一定し、音便、拗音、促音、及び變體假字等の敎授法も備はりたり、近刊讀本中の錚々たるものなるべし。聞く所によれば、此の敎本は、已に六七ヶ所の小學に採用せられ、且頗る好評ありとぞ、編者が勞空しからざりき、と稱すべし。さはれ、若し余輩をして十分に所思を吐かしめば、余輩はいはん、余輩は今日行はるゝあらゆる小學讀本に對して平なる能はざる者と。

余輩は今の諸讀本の、五六年前のに比して著く進步したるを認む、其の主題の配置と選擇との頗る宜しきを得たるを認む。其の敎授上の注意の或點までは周到なるを認む、其の文體の平明なると同時に其の語法文格の正しきを認む。然れども主題の宜しきを得たると該主題を表明するの法の宜しきを得たるとは一ならず、語法、文格の正しきと文章の功妙なるとは一ならず、且敎授法の整然たる未だ必ずしも啓導

開發の力の大なるを意味せざるなり　夫れ十頭の馬を水涯に誘はんは難からねど、其の中の一頭にだに水を飲ましめんは殆ど難し。桃太郎の譚は好主題なり、然れども其の談説の法拙からんか、稚童よろこびて聽くべしや。余輩近時の諸讀本を見るに、文章の correctness はこれあり、interest を惹起すべき魔力は殆ど空し、憚なくいへば、美文たるの價値殆ど絕無なり。此の點に於いて、我が讀本と泰西のとを比べんか、恐らくは我れは彼れに三舍を避くべし。我が讀本の文章はおしなべて無味乾燥、ひとり文法語格のみ正しきが如き觀あり。但し、こは此の『尋常小學讀書敎本』に就きていふにはあらず、從來行はれたるすべての普通小學讀本に就きていふなり。本書の如きは、他の多數に比ぶれば、蓋し、此の點に於ても、やゝ勝れるものならん。要するに、余輩は世の敎課書作家がひとへに主題の選擇のみに汲々として、其の主題を活用あらしむるの點に心を注がざるを異しむ。譬へば、三絃は好樂器なり、彈じて其の宜しきを得ば、鬼泣き神駭かん、彈じて拙からんか、一人の耳を傾くる者なからん、同じ理によりて、千百の良樂器一室の中に合奏せらるゝも、其の技いと拙からば、いたづらに懶眠を促がすに過ぎざるべし。世間の敎課書家の再考を乞ふ。

將來の國語法と將來の國字とを如何にすべき

新文壇の二大問題

日清和議已に成り、我が大日本の版圖膨脹し、文運いよ〳〵興隆す。此の物質的、兼、政治的擴張と共に、新に擴張せらるべき事業、二三にのみ止まらざるが中に、新國文壇の事業として、急に(但し愼嚴なる)稽査を要すべき二大問題あり。こは今日にはじまれる問題にはあらねど、國家の新膨脹は其の確答を促すこと、更に急なるを加へたり。所謂二大問題とは何ぞや。曰はく、將來の國語法は如何にすべき、曰はく將來の日用文字は今日のまゝにて不利なしや、多少改正を加ふるか、若しくは新文字を創作するの必要なきか、是れなり。

何故に此の二問題が文壇に於ける目下の急務なるか。吾人は此の問に對しては、多く答辯するの必要あるを見ず。試みに(國運こゝにあらたまりたれば)我が未生の同胞の、如何に多事多忙なるべきかを想へ、如何に彼等は最短なる時間に於て、尠くも通用語と通用文字とは、成るべく簡便に學び盡くし、全餘力を傾けて種々の大事業に着手すべき必要あるかを想へ、又國文學を新版圖に弘布するの曉を想像せよ、如何に今日行はるゝ如き泥古的國語法の不便利なるか、如何に學び易から

ざる夥多の漢字を混じたる現用國字の不簡便なるか、若し、今日のまゝに推しゆかば、如何に當用の文章法だに之れを教ふるの易からざるか、一見明瞭なる事實ならずや、否、多少現國語法を改正するの必要と、多少現日用文字を改むるの必要とは、殆ど爭ふべからざる必要たるに似たり。若し果たして然らば、國語法の改定は、何を以て標準とし、何等の程度まで行ふべきものなるか、是れ第一の問題たるべく、又國語法改まる上は、普通用の文體はいかにすべきか、是れ第二の問題たるべし。又現國字を不便と定めば、果たして如何さまに改むべきか、嘗て「羅馬字會」の唱へたるに從ふべきか、若しは「假名字會」を再興すべきか、はた新國字を創作すべきか。若しは漢文字を制限して幾分の簡便を圖るべきか。若し新國字を作るとせば、横行字とすべきか、縱行字とすべきか、悉く音字とすべきか、意字、音字、併用すべきか。若し漢文字を制限すべしと定めば、單に漢字の使用法のみを制限すべきか、又は其の字體を簡便にすべきか。此等諸種の問題は必然接踵して起こり來たるべし。さて此等諸問題は、孰れも將來の國文學に重大の關係を有するものなれば、私の好憎のみによりて、輕々しく是非すべきものにあらじ、就中、新國字論の如きは、頗る大膽なる書策なるがゆゑに、一見奇を好むの企圖たるが

如く、恐らくは世の譏を牽き易かるべし、世人或は之れをもて舊羅馬字會、假名字會の死灰再燃と大早計して、輕々看過すると無きを保せず。但吾人が見る所は然らざる也。　夫の舊假名文字會は、一見改進的運動なりしが如くなれど、其の實は保守的運動にして、或は古代に退歩するの縁とならざるかの嫌ありき、又彼の羅馬字會は、たしかに改進的運動なりきと雖も、其の運動の精神を察すれば、頗る歐化的臭味ありて、國語は國粹の宿る所、國字は國風の存する所、此の二者を保存するは愛國的情操を保存する所以、そを悉く破壞するは國家の大不利となるべき所以を殆ど忘れたりし趣あり。　即ち二者共に簡便のみを主として、一は前進の策に疎く、一は國粹に注意せざりき。　思ふに、今回の新國字論は彼等とは精神異なるべし、蓋し、國運の擴張に伴はんの精神は進取的なれども、羅馬字採用の影なきは國粹國體を忘れざるが爲めならん。　又目前に新代國民及び新版圖の國民をば教化啓導するの必要あり。　かた〴〵今回の國字論は國文の前途を重ずる者の眞面目に考査するの價値あるべし、單に現代の得失のみによりて未來千年の畫策を速斷せんは國家に忠實なるものゝ所爲にあらじ。　吾人がつぎ〴〵に報道する所(幷びにつぎ〴〵の號に於て紹介若しくは評論せんとする所)はす

こゝに本欄といへるは「早稻田文學」の本欄なり

べて國家的問題なり、讀者願はくは虛心平氣、徐に其の利害の在る所を檢せよ。

新文法論

は夙に活眼家の目を注げる所、これを唱ふる者、唱へたる者、已に二三にのみとゞまらざれども、如何なる程度まで改正すべきか、之れを精査して示したるは、いまだ曾てあらざりしが如し。本欄に掲げたる、關根正直氏の語法論は眞に新國文法の緒を發くもの、切に讀者の精讀を望む。

吾人はもとより新文法の必要を認むるものなり、世人がしばらく舊國語法を研究せしは新國語法制定の準備たりしことを信ずるもの、又蕪雜なる時文を掃蕩せし所謂國文學家者流の盡力は維新後の假小屋を排除して新國文壇の地形を平にしたるに外ならざりしを信じ、地形のやゝ成れる今日は新樓臺を建築すべきの時、而して件の新樓臺は決して奈良、平安の建築物、即ち大極殿的家屋にはあらずして新日本的家屋たるべきを願望する者なり。比喩を離れていへば、明治國文の語格は新に今日に於て一定せられざるべからず、而して所謂新文法は日進月化する新思想に最も便宜なるものたるべしといふ、是れ吾人の本願なり。其の原則及び細則の如きは、もとより人毎に異論あるべし、而して

所謂新國文法は此等異論を調停してはじめて完成の功を奏せん。種々の原案の提出と種々の異論の調停と、吾人はこれを總稱して新國文法問題といふなり。

新國字論

につきては、羅馬字會、假名字會などいふ團體の外に、箇人にして論をたてし人尠からず、殆どふた昔も前に『日本新字の發明』と題する小冊子を著し、其の特殊なる文法をも定め、世に公にしたりし人(小島某氏)あり、又矢野文雄氏の明治十九年に著したる『日本文體文字新論』あり、共に國字の不簡便に心附きてその改善を工風したるものにて、就中、矢野氏の論の如きは、一段穩當にして周細なれども、當時は著き反響も聞こえず、果は噂する者だに絶えて、全く世間には忘られたり、然るに輓近文學博士井上哲次郎氏、文學士嘉納治五郎氏、其の他二三の學者、又國字論に心を傾け、就中、井上博士の如きは、最も熱心に國字の不便利を證論し、口に筆に其の意見を公にし、今尚其の考査に力を盡くせり。　井上氏の意見は、嘗て『東洋學藝雜誌』にも掲載せられ、其の口演の筆記は當時諸新聞の紙上にも見えたり、さればそのあらましは、世間の已に知る所ならめど、新に世の注意を呼ばんがため、左にあらためて紹介す、本社員が同博士よ

り親しく聞得たる所をまじへ記せは、過般の口演よりは一層詳細なるものなりと知るべし。

井上博士の新國字論

は『東洋學藝雜誌』に見えたる「文字と教育の關係」に端を發けり。氏近ごろ社員に語りて曰はく。

予が新文字制定の彌ゝ必要なるを感ぜしは獨逸滯在中なり予がかしこのベルリンにて東洋語學校に日本語の師たりしこと三ヶ年間、予に就き日本語を學びし者の多數は大學々生及び大學卒業生若しくは語學に熱心なる學者輩なりきフローレンツ氏の如きも當時は大學に在りて予に就きて日本語を學びしものゝ一人なりき即ち皆優等の學識ある人々なり然るに彼等の智識をもてして三年就學の結果辛うじて『東京日々』の雜報位を解讀するに止まりき當時予が用ひし教課書は圓朝の人情話（『牡丹燈籠』の如きもの）又附與したる字書は『明治玉篇大全』やうの書
何故にかくは成業の遲々たるか其の最も著き原因は
（一）假字遣のむつかしきこと、同聲にして假名字を異にするもの多きことクワン、カン、テフ、テウ、チヤウ、チヨウ、など又はワロナ、ワラフ、ワロウ等の辨別し易からざること
（二）語法、文格のむつかしきこと、現用語法と文章語法と相異なるがごとき其の他總じて語格上の規則の整然たらずして習熟によらざる限りは諳

ずるに難く教ふるに難きこと

(三)字書の不完全なること、我が國には佛のリトリレー英のエブストルなどいふが如き好字典なきゆゑ獨修せしむるの法なきこと、又字音の假字遣などに至りては從來行はるゝ字典類のいづれも十分には信用しがたきこと

(四)物名等には往々にして宛字を用ひたるもの多く又は支那の名目を應用し剩へ物の名にあてゝ種々の支那成語(所謂異名)を兼用したれば振假名を離れては學者も讀み惑ふほどに困難なること

(五)假字不足にして r を分かちがたく v 等を示すに由なきこと

(六)字數の驚くべく夥しきこと

夫れ西洋諸國にてば二十六文字と其の綴方とを學ばゞ一切の文とい はぬまでも通用文ほどは自由に讀むを得べし然るに東洋にては支那字のみにても大約五萬あり初は壹萬に充たざりしが漸く增加せしなり歷代の字書を按ずるに

訓纂(揚雄)	五千三百四十〇字	前漢の末
說文(許愼)	九千三百五十三字	紀元後二世紀の初
玉篇(顧野王)	一萬六千九百十七字	梁
廣韵	二萬六千一百九十四字	唐
集韵	五萬三千五百二十五字	宋
韵會	一萬二千六百五十二字	元

小補韻會　仝上
篇海類纂(宋景濂)　三萬八千四百有字　明
字彙　三萬三千一百七十九字 ⎫
續字彙補　一萬二千三百七十一字 ⎭ 四萬五千五百五十〇字　明
康熙字典　三萬九千七百五十三文 ⎫
仝補遺備考　七千四百六十三字 ⎭ 四萬七千二百十六字
正字通　略〻同前

右によりて支那字字の數を大約五萬と見ば大差なかるべし此れを英語の字數ヱブストルの辭典　大約十二萬

（千八百六十四年米人ポルタ－氏が增補の際其の序み中に十一萬四千とあれど爾後數回の增補あり）

に比すれば半數にだに足らざる如くなれど字數と語數とは自ら別ありと支那には此の外に熟字ありて其の數『佩文韻府』に集まれるもの幾十萬あるかを知らず但し此の書に漏れたるもの多く日本、朝鮮、安南等にて成れるも多し。さて日本語の數は

言海(大槻文彥)　三萬九千一百〇三言

これに漏れたるを合すれば凡そ五六萬なるべし加ふるに尠くとも五六千の漢字及び平假名片假名を學ばざれば普通の書を讀む能はずとは不便の極ならずやまして其の文字の書法、文躰はた種々あるをや若し將來言語文章一變せし後に今日の文章を見ば其の錯雜せるに驚かん且つ吾

人の特に憂ふるは日本人が支那の文字を用ふる間は多少支那文學の支配を受くることなり凡そ一國の獨立に因り思想の獨立は文學の獨立によるものなれば支那の文字を借用する間は支那の文學に支配られ思想の獨立全からざる也

顧れば十年前の文字改良論に三派ありき(一)羅馬字にて日本の言語を書せんとの說(二)假名をもて漢字に代へんとの說(三)漢字削減說是れ也第一、は國民の感情に反する爲(此の感情こそ國家の元氣なれ)第二、は冗漫に流れて不便なる爲第三、は言語の自由を害する爲孰れも成功せざりき吾人は羅馬字會、かなの會の方法をば賛成せざりきと雖も其の改良の精神は終始保持せざるべからず、さてまた文字の改良は本來行ひ得べき事か否かといふに古來語は偶然にして成りいで字は常に人爲に成りぬ蒼頡の漢字に於ける弘法のいろは、に於ける(假に傳說に從ふ)其の例也、今の所謂アルハベットは古フィニシア人が埃及文字によりて作りしならずや更に精しく之を先例に徵せんか舊來の文字を捨てゝ他國の文字を用ひたるは(い)馬剌加半島にては印度文字を廢して亞剌比亞文字に更へ(ろ)印度は古昔一般に梵字を用ひしが回々教の浸入せしや一部の地方(ヒンドスターニ、ベンジャービー、シンチ)は亞剌比亞文字を取り(は)獨逸、丁抹、瑞典、ボヘミアの古代文字はルーニックなりしが後羅馬字に改めたり但し歐洲にての文字變更は皆文學未だ盛ならざりし時なり(に)波斯にてはチェンド、バーラビー、亞剌比亞文字と次第に變轉し(ほ)埃及にてはハイエログリフィクスよ

りコプチック文字次にアラビア文字に改めたり。

又新に文字を製して舊文字を廢せし例は支那にて初は

蝌蚪の文字（着頡の作なりと傳ふれど未詳）　上古

籒文、即ち大篆（史籒）　紀元前九世紀より八世紀

小篆（李斯）　秦

隷書（程邈）是れ今の楷書なり　秦

草書（未詳、史游或は張伯英ともいふ）　漢ノ初

行書（劉德升）　後漢ノ初

（此の三は今並び行はる）

右によりて考ふるに（一）新文字を製するか（二）他國のものを利用するか（三）舊文字を改良するかの策によらば日本文字の改良また成し難きにあらざるべし然るに過去に徴して羅馬字を用ふるは國民の感情に反し、假名に改むるは不便なりとせば吾人の取て實行すべきは唯だ一策のみ即ち從來の平假名を改良して單純なる文字を製出するにあり即ち全然音字制度となし或必要なる部分を除くの外は同音字は皆同假名を用ひ又RLBV等すべて足らざる音の假字を作り思想表白の便を圖ると同時に之れを學ぶことをなして容易ならしむべしと我が國俗は自尊心に富みて頗る創造をよろこぶの性あり、新假字を作るの案は或は之れを實行するを得べしと思ふ

日本語の假字遣も面倒なれど尤も無要にして面倒なるは漢字音の假字遣なり夫れ所謂漢字音の如きは專門の音韻學者にあらざれば學者だに

辨じ能はざる所なり今本邦にて眞に音韻學に通じたるは木村正辭氏又は黒川眞頼氏など僅々二三のみにとゞまるべしかくまで辨じがたき漢字音を依然守らんとするは無要ならずや假に字音を辨ずるの法或は定むるを得べしとするも今國文の爲に何の益かあらん蓋し我が字典などに傳へたるは勿論我が音韻家の敎ふるものだに嚴密にいへば正音とは信じがたし彼等は韻脚を標準として平上去入を辨じ得べしなどいはんが所謂通韻の夥しきを思へば冬東もとは別なかりしかこれはた甲斐なき穿鑿たるに終はらん且や今本邦に行はるゝ限は已に發音上に區別なし何の要ありてか筆記上にのみ其の區別を維持せん且や原音をよくよく取調べば今日正當と思惟せられたるもの存外に不正なるを發見することあらん波。細。の如きは元はパ、ザイなりし證種々あるに國人はハ。サイ。と清みて發音す、すなはち原音には戻れるなり云々

さてかくの如く考へ來たれば改正の必要はいよいよ明なり後、世、子、女、の爲を思ひ敎育の利益を多からしめんとせば普通用の日本語日本文字は一段簡易なるものならざるべからず語學專門の學者輩は勿論舊文字を研究すべく其の他或種類の文客等が舊文字を使用せんは隨意のことたり但し普、通、用、の、文、字、などは簡便なる音字に改むるを可とす

さていよいよ音字に改むべしと定めば其の書きかたは如何にすべき平假名を改正して一層簡便のものとせば其の字形は頗るフィニシア文字に似るべしとされば縱行に物せんよりは横。行。に物せんかた便宜ならずや縱

ろにもまた便利なり讀むにもまた便利なり此のことに關しては嘗て口演の折に細説せり即ち横視の縦視よりも其の範圍廣く且視力を勞すること尠き由を説けりこれにつきては二三の反對論もありしが元良博士過般來横縦の視力を試驗し此の春やゝ功を奏し横視のかた便利なる由を證せり云々

さて新音字を用ひて横行に書すさせば句讀を明にすること必や肝要なるべし句讀なきは太古未開の文章なり太古はいづこにても一文完はなして書し又句讀なし(希臘の古文はた然り)これと同時に漢語は成るべく滅じ文體もなるべく言文一致にちかづくるやうにすべし云々

嘉納治五郎氏の新國字論

は近ごろ社員が訪問して親しく聞得たる所、たゞし、其の一斑に過ぎざるゆゑ、こゝに記したる所のみによりて、氏が説の全豹は窺ひがたしと知るべし。氏は曰はく

漢字は一見して何等の意義を包容せるか之れを知るに容易なれども最初多數の漢字を學ぶことが困難なり假名文字は僅に四十八字なれば之れを學ぶは易けれども一見綴字數のみ多くして其の何の義なるかを見分くるに便ならず、若し學ぶに易く且一見して讀み易き文字あらば之れを用ふるは學問上教育上の大利益ならん

さりさて羅馬字を以て國字に代へよさいふ説は賛成しがたし羅馬字は

決して完全なる假名字にあらず其の缺點は夥多ありむしろ新に一種完全なる新假字を創製して之れを我が國の通用文字とし諸外國をして之れを輸入せんとすること嘗て國人が羅馬字を採用せんと欲せしが如くならしむへし

よりて思ふに新に假名文字を製作するの必要ありたゞし件の新文字は舊來の平假名若しは片假名を補修又は改善したるものたるにとゞむべきかはた全く音韻上の原理より得べき純然たる音字たるべきか

若し夫れ最小の勞力を以て筆記し得べく又最もたやすく學び得べき文字は音響を原としたる文字なるべし例へば速記法の文字の如くなるべし(早稻田文學記者曰、小島案の『日本新字の發明』と其の旨ほゞ相似たり)かくいはゞ音のみありて語なきに至らんと恐るゝもあらんが決してさる虞はなし「ふで」「とけい」などいふ名詞は勿論動詞形容詞のたぐひも或一定の綴字法を定めておの〳〵特別の語(ヲオド)とすべし但し所謂一定の綴字法は字典、著述及び一切の正しき文章の上に用ひらるゝもの、而も假字ほどを知る者は皆之れを讀むを得べし何となれば其の綴字法ほどは無學者のと異なれども總じて音字なる限りは之れを讀むに於てとしつかへなかるべければなり

此のあたりの說明少しく聞き洩したる所あれど、察するに、嘉納氏の意は下の如くならんか、曰はく

譬へていはゞ今日の假字遣のテフとちようとの如し無學の女子などは

蝶。の假字を或ばチ。ヨ。ウ。とも物すべし、されどテ。フ。と物したるを見て蝶と解するに害なきなりかくいはゞ綴字法に種々の別を生じ今の假字遣の如く複雜に成りゆかんといふ人あらんが今の假字遣の差別とは精神に於て異なる所あり今の假字遣は學者の用ふるものが必しも無學者の用ふるものより簡便なるにはあらず、然るに新文字の綴字法は大躰・速記法の精神によるとなれば學者の綴字法(即ち正しき綴字法)は俗衆のよりもはるかに簡便なり例へば無學者は懷中時計(くわいちうどけい)と綴るに八筆を用ふさせよ、而して學者は只三筆とせよ、繁簡大差あり夫れ簡便は人するの欲所若し學者のが便利上遙かに無學者のに勝らば學者のが早晩普通となるべし且かたはら教課書若しくは新聞雜誌其の他の有力なる諸著述の力を借らば學者の逕庭は排除する難からざるべし

さて此の新文字を作るには無論音聲學上の精査を要す眞成の原音を查定し最も必要なる音數は果して幾何なるべきかを考へ而して後に假字の數を定むべしさすれば多くも一百位にてこと足らんか、しかし最も考究せざるべからざるは綴字法なり歐洲文字は便宜に似たれど實際彼等中の文盲者が物する所を見れば案外に不便を極むるなり我が國の平假名などは如何なる文盲者の手にて綴るも片言ならざる限りは其の意味ほどは解し得らるゝ例なれど彼なたの文盲者アテ綴りは殆ど全く解しがたし彼等はKの音のク。なるを知り又Iの音のイ。なるを知るもキ。といふ音は如何にして綴りいだすべきか教へられざるは知らざるなり故

にShouldと書すべきをSwedとも物しかれず此の點は我が假名彼れに優れり新文字を作らんもの此の邊によく／＼注意せざるべからず

さて書きかたに至りては横行のかた便利ならん兎に角讀むに便利也(此の理井上氏に同じ)蓋し横視の便利なるは天性による、人は常に横視を主とす又目は横視するを主として作られたるに似たり見よ宇宙の萬物皆縦には並びてあらずして横行にならびてあり

但し横行に書することゝならば多少身躰を子ヂて書せざるを得ず衛生上如何ならんか、たゞしこれは大害にはあらず云々

尚嘉納氏の豫備的改善策あり、こは加藤博士なども唱へらるゝ所なりときこえ、新文字論よりははるかに平穏なる議論なり、別に次號にて評論する折あるべし。新文字論者は右二氏の外、思ふに尚夥多あるべし、舊羅馬字會員中にも其の人あるべし、或は舊假名會員中にも其の人あらん。大西祝氏もまた多少改正の必要を認めたる人なり、元良博士はた同樣の意見ならんか。思ふに「標準的國語を定めよ」と叫破せし上田萬年氏もまた多分相似たる意見を抱かるゝなるべし。さはれ、新文字に關する議論は、ほゞ前の二氏の説に於て、其の要點ほどは知るを得べし、他に異なる説あらんも、大かたは枝葉の異論にして、疑ふらくは大同小異ならん。吾人はこゝに新文字論の紹介をとゞめ、以下には其の反

對論の重なるものを擧げ、且詳に双方の得失を比較し、此の問題に關する吾人が意見をも陳錄せん。

音字の便益

非新國字論を紹介する前に、更めて新國字論の要點を再說し、且其の實行せられん日に於て實現せらるべき便益を列擧すべし。　新國字論の要點は、思想表白の法を簡便にするにあり、詳言すれば、文字を學ぶことを容易にし、文字を讀み且筆することを容易にし、且其の意を解することを容易にするにあり。　今日行はるゝ國字は、漢字と假名とより成れるがゆゑに、千万の語を學ぶの困難の外に、千万の字を學ぶの困難あり、是れ彼の二十六字のアルハベットをだに學べば、(發音と綴字法とを學びて)、あらゆる語を讀み且筆し得る簡便に比べて、著く劣る所なり。　又我が國字の一種(眞名と稱するもの、即ち漢字)には、毎に音訓の二讀法あるゆゑ、一漢字音を學ぶ毎に、おはせて其の訓をも字形をも學ばざるべからず。　假に字形を學ぶの勞は、綴字法を學ぶの勞にひとしとするも、また其の訓を諳ずるは、語の意(ミーニング)を會得するに外ならずとするも、常に音訓の二者を諳記し、讀み且筆するの瞬間に、機に臨み變に應じ、二者を運

用せざるべからざる面倒は、古今曾て見ざる所なり。　例へば「現」「亂」などいふ文字ありとせよ、「現」の訓は「アラハル」なり、「亂」の訓は「ミダル」なり、吾人之れを讀みて「あらはる」「みだる」となして可なるか、否、必ずしも然らざるなり、「現然」又は「治亂」と熟し、又は「現に」、又は「現(うつ)」、又は「胡亂(うろん)」など、場合に應じて讀まざるべからず。　夫の「矛盾」の二字を讀みて「ホコトン」となし「ボウジュン」となす、之れを邦人の心をもて見る、洵に笑ふべきの至也、但し、音字國の例より推さば、むしろさもあるべき誤讀にあらずや。　所詮、我が國に於ては、一語を學ぶごとに三様の勞苦を經ざるべからず、音を學ぶの勞と、訓を學ぶの勞と字形を學ぶの勞と、是れなり。　而して時としては、一語にして數音なるあり、（呉音、漢音、清音の數様に發音せらるゝ場合の如き）又語毎に尠くも三四様の異訓あり、甚しきに至りては、字形はたゞ二三なるがあり、かくの如きの不便は、前古絶えて見ざる所なり。　試に今日普通以上の教育を受けたる者をして曲亭等の稗史、又は爲永輩の戯作本の傍訓を拂ひ、さて後一瞥下に朗讀せしめよ、彼等の大概は、數行ならずして幾たびか誤讀し、若しくは殆ど讀下する能はざることあらん、甚しきに至りては、啻に讀む能はざるのみならず、其の意をも明解し得ざることあるべし、所謂湯桶(ユタウ)讀又は宛字(アテジ)の推讀し易からざるものゝ夥多

あればなり。單に讀む時に於て不便なるのみならず、自家の感想を表白して、之れを筆記せんとする時にも、はた屢〻不便なるを感ず。例へば、其の人普通以上の知識あるも、尙時としては單に音訓のみを記臆し、其の字を忘れたる場合あり、字は記したるも音又は訓を忘れたる場合あり。後者は尙忍ぶべし、前者の障礙は大なり。印刷業に緣故ある人は、試に近時の劣等なる印刷物の原稿を取りて撿せよ、劣等なる新聞紙、劣等なる雜誌の文章の、如何に活版童兒輩の骨折によりて其の不體裁を蔽へることの多きぞ。原稿のまゝを印刷せば、誤字、衍字はいふに及ばず、『康熙字典』中に見いだしがたき文字、恐らく算するに遑なからん。又原稿者をして件の原稿を朗讀せしめよ、彼等の十中五六は、自家の綴りたる文中の語を、或は誤讀するなきを保せず。彼等の或者は正音を知らずして漢字を用ふることあり、訓を會得せずして漢語を用ふることあり、ましてや、字形の如きは、間〻推當に筆し去るなり。苟も新聞、雜誌等に上るべき原稿に、かゝる不體裁のことあるは、甚だ奇怪なることに似たれど、また翻りて我が國字を撿し、其の眞に學び惡きを思へば、かゝる不體裁と不都合とは自然の結果なりといはざるを得ず。而も此の自然の結果は國家多事となるにつれて益〻其の量を加へ來たらん。今日

すら已に然り、我が未來の同胞、又は新版圖の國人等は、此の自然の結果の爲に、いかばかりの不便を經驗すらん。　假に大なる不便なかるべしとするも、かゝる面倒なる文字を學ぶ爲に費す時間、及び之れが爲に勞する心力は、他に利用するに適せざるか。　徒勞と不便とを感じながら、曾て改善の策を立てざる、これを忠實なる國民といふべきか。　漢字を全廢して表音字を用ふるは、此の徒勞と此の不便とを一擧に掃蕩する良策にあらぬか。　非か、何ぞ其の非を證せざる。　是か、何ぞ其の是を證せざる。　と、是れ思ふに新國字論者の眼目とする所なるべし。　今こゝに諸家の說に憑りて漢字全廢せられ、音字のみをもて感想を表示するの曉、實現せらるべき便益を列擧せんに、音字のみとならば

(一)音、訓、字の三樣修業を經、且一語每に此の三樣を暗記するの煩を脫し、單に音字若干と各語の綴字法とを諳せば、あらゆる語を筆記するに差支なかるべく、又其の語義をだに會得せば、あらゆる感想を表白するに差支なかるべし。（大西祝氏說）

(二)字の數は、羅馬字風の純粹なる音字を用ふるか、我が國の假名の如き聲字（シラブルより成れるを矢野氏の前例に倣ひ假に聲字と名く）を用ふるか、其の決着次第によりて結果同じからざるべけれど、何れにもせよ、二百字以上を越ゆべからず、さすれば字は多くも二百內外を學ばばことたるべし、即ち僅々二百字內外の文

字を諳ぜば、讀み且筆するに於て故障なかるべし。

(三)音字、若しくは聲字を用ふると同時に、内外の人名、内外の地名、物名等を讀み難(なや)み、讀み惑ふことは全然一掃せらるべし。

(四)完全なる音字を製すべしと假定せば、r. l. f. v. 等はいふに及ばず、天下列國の發音は皆これを表示するに差支なかるべし。

(五)止むを得ざる必要の存せざる限は、總て同樣の音は同樣の綴字法をもて表示すべきがゆゑに、名のみ存して實の存せざる「クワン」「カン」「チヨウ」「チヤウ」「テフ」等の區別又は「ワラフ」「ワロウ」等の煩瑣なる區別は、悉く之れを一掃するを得べし。

(六)自然の必要によりて普通文は次第に日常口語に接近し來たり、隨うて珍らしき漢語を用ふるの弊は、求めずして減少すべし、蓋し音字は耳に訴ふるを主とするがゆゑに、聞慣れざる語は誤解せられんの恐れあり、又全く解しがたからんの恐れあり。又同じ道理によりて、杜撰なる熟語を濫造するの弊も減少し、文章おしなべて平易通俗となるべし。

(七)文章語の口語に近づくと共に、文章法と口語法との差別も今日の如く甚しからずなりて、遂には、外國にての如く、文章と口語と全くは同一ならざるにも係らず、其の語格(グラムマル)ほどは、甚しく異ならざるものとなるべし、即ち二重語格(ダブルグラムマル)の不便利を除くを得べし。

上には機を得て說き洩らしたれど、我が國語の不便は、單に文字の上のみならず、所謂文法と口語法との間に大なる逕庭あることと、及び所謂文

法の不整頓なるがため、太古の文法、近古の文法、現時の文法などいふ頗る辨じ易からざる區別ある、いづれも甚しき不便なり、近來新文法論の起これるは、皆人の明に此の不便を認めたるに因る、新國字論の此の文法問題に及ぼす影響は、殊に注意すべき價値あるべし。

(八)今日の文章は、兎角に漢字の爲に掣肘せらるゝが故に、外來の新語、科語等を譯するに當たりて、不妥と知りながらも、已に漢譯あるものはそを採用する傾あり、「ケミストリー」の譯語を「化學」とし、「ジオメトリー」の譯を「幾何學」とせるなど、皆漢譯を重ずるの致す所なり。(井上博士の説)、かゝる例穿鑿せば尚あまたあるべし、又場合によりては、學術上の科語の如きは、到底譯し難きもの多く、或は生中に譯するときは、徒に解し難く讀みにくきのみにて、何の益をなさゞるのみか、却りて誤解と臆測とを促すの弊あり、かゝる語は、むしろ原音のまゝ用ふるが便利なれども、從來の習慣上、已むを得ず不妥なる漢譯を塡し、若しくは漢字もて其の音を表す、醫學上の科語、病名等、是れなり、これらは生中に漢字のあればなり、漢字全廢せらるゝに至らば、蓋し大抵の科語は原音のまゝに採用せらるゝことゝなるべし、總じて科語、專門語は、一聞一見したるのみにては門外漢には解しがたきもの、而して專門家にとりては譯名は不要のもの、到底無用の長物たる漢語譯の廢せられんは必然の理なり、これまた徒勞を減ずるの一端なり。

(九)音聲字のみを用ふることゝならば如何なる場合に於ても、振假名を用ふるが如き厄介を脱すべきがゆゑに、筆記の手間もまた減ずべし、空間(スペース)の

上よりいはば、或は一語の充塡する場處、一漢字に比して長大ならんとも思はれんが、畫の多き漢字を筆するに比せば、其の難易辯を俟たざるべし、若し井上博士の唱へらるゝ如き横文字の聲字(シラビック)ならば、羅馬字よりも更に簡便なるべし、(是れ博士が最も得意とせらるゝ論點なり)例へば「濱」と筆するに、羅馬字ならば、hamaと音字四箇を要すべけれど、博士の新字にては、僅にはまの二字にて足るべし、而して若し嘉納氏の說によらば、速記法の文字を用ふるが故に、更に更に簡便なるべし。

(十)音聲字によりて表示せらるゝ語のみとならば、字彙を製するにも尤も便なり、上田万年氏の所謂標準的國語を精査し、且發音と綴字との法を正し、一々に語原釋義を附記し、而して日本大字典を編成せば、豈ひとりリトレー、エブストル等をして完備を誇らしむることあらんや、是れまた新國字の賜なり。　今日の有樣にては、殆ど完全なる字彙を得んの望なし、よしや完全なる字彙成るべしと假定するも、畫によりて引くべき漢字典と音訓によりて引くべき音訓字彙と、此の二種を備へざるべからざる不便あり。　要するに我が國語には兎角に二重といふ不便纏綿して累をなす、之を一掃せんものは新國字なり。

以上、未だ精ならざれども、ほゞ新文字論の要點を悉したりと信ず。　もとより(前號にもいへる如く)新國字の性質につきては、人々見る所同じからず、例へば、舊羅馬字會員、又は上田万年氏の如きは、羅馬字採用を是

とするの論者なり。　傳聞する所によれば、上田氏の如きは、以爲へらく、新字論は尙早し、然れども、若しいよ〳〵字を改むるの機とならば、羅馬字を改善補修し、之れを我が國字に代用せんこそ最も穩當なる策ならめ。　蓋し、新に文字を製らば、音字たるべきや勿論なり、而して所謂アルハベットは完全なる音字にはあらずと雖も、其の不完全は重に音の不足にあり、件の不足だに補ふを得ば完全ならしむること必し難きにあらず。　さらばたとへ國人をして、新に音字を製らしむるも、其の多分は彼のアルハベットと全く差等なき異形同質のものたるべし。　異形同質の新音字を製して徒に蛇足を畵くと、在來のアルハベットを利用して之れを增補すると、いづれか利なる。　新音字を作るは國家的感情に制せられて疣贅を作るに近からずや、と。　尤も上田氏の說は、全く傳聞に係るゆゑ、多少の謬傳無きを保せず、讀者其の心せらるべし。

非音字論

音字を非とするの議論は未だ多く聞かざるなり。　左かるは反對論者の世間に乏しきが爲にあらず、新字論の尙昨今なるが爲に、精密なる駁論のいでざるのみ。　吾人は矢野文雄氏の『日本文躰文字新論』を以て今

日までに見えたる比較上詳細なる反對論とす、然れども矢野氏の說は、大躰に於て頗る穩當なるだけに、枝葉動もすれば薄弱なり、且や證例として揭げられたる文語、口語、英文、英語のたぐひ、概して正當の對照に資せず、隨うて反論者を伏するに足らず。　矢野氏の外に吾人が訪問せし反對論者一二あり、されどもそれらの人々の說はた矢野氏と伯仲の間なり。　別に三宅雄二郞氏の『漢字利害論』あり、曾て『太陽』の紙上に見えたり。　もとより氏が詳細の意見は、近刊『太陽』に載せらるべき「國字論」を見ざれば知りがたしと雖も、其の音字論に同意ならざる影は、かの『漢字論』の中に見えたり。　吾人は此の故に三宅氏を以て、有力なる反對論者の一人に數へ、下に他の反對說と共に氏の意見をも紹介せんとす。　但し、諸說を參酌して揭ぐと雖も、以下大抵は吾人の卑見、すなはち假に反對者の位置に立てる早稻田文學記者の意見也。　蓋し、吾人は思へらく、此の國字問題は、眞に重大なる國家的問題なり、個人が私の好憎によりて取舍を決すべきものにあらず、心を平にし私見を去り、徐に得失を精査するの要あり、と。　吾人は此の故に當分の間、敢て斷案を下さゞるべし、否、むしろ此の問題をして究極の輸贏を決せしめんが爲に、或時は音字論者の遺漏を補ひ、或時は反對論者の足らざるを修し、双方をして十

分其の利害を表顯せしめんと試むべし。　かくして相砥礪するの間、或は眞得失の光明を發揮するを得ん。

案ずるに、國字論は其の關する所重大なれば、單に實用の一面のみより見て、利害を斷ぜんはひがことなるべし。　吾人の見る所によれば、國字の得失は、一には其の現在及び未來に於ける實用上よりも見るべく、二には其の殊なる國語學上の關係よりも見るべく、三には其の殊なる國文學に及ぼすべき影響の上よりも見るべく、四には其の殊なる國俗の過去に對する關係上よりも見るべし。　第一は實際の便不便に關し、且將來千萬年に利害を及ぼすべき問題なり。　さて第二は日本語の運命に關係し、第三は日本美文學の消長に關係し、第四は間接に日本國體及び國風の上に利害を及ぼすべき問題なり。　吾人は此の四條の問題の、同時に、稽査せらるべきの價値あるを信ず。　譬へば、第一點に關する限は、音聲字の便益、はるかに從來のよりも多大なるべしとするも、後の三點に關する不利、之れに敵するほどに大ならば、如何の權衡か成立つべき。　若しくは後の三點は、必しも介意するに足らずとするも、第一點の利害の尚甚だ瞭然たらで、且之れに加ふるに、後の三小不利の伴ふあらば、苟も國家を重んずるの徒は、多少躊躇せずんばあらじ。　いづれにも

せよ、國字に關する問題は、件の四點につきて精檢細査するの必要あらん。

實用上の利害

音字又は聲字の、象字又は意字よりも簡便なるは、殆ど自明なる事なれども、聲字、意字、併用の國字と音字又は聲字のみを用ふる者との優劣は、なほ精檢を要すべき問題ならん。　夫れ言語といふものは、或は擬聲に濫觴して、專ら耳の爲に成れるものならめど、字は必しも然らざるべし。史の證する所によれば、字はもと目の爲に製作せられ、をさ〳〵目擊に便なるを旨とせり。　古埃及の象字、古支那の象字、メキシコの象字は其の例なり。　かくはいへど、吾人もとより象形字の不便利なるを知る、また專ら音聲を礎として成れる語の、到底象形字のみによりて、(完全には)表示せられがたきを知る、然れども、我が國に行はるゝ文字は、古埃及又はメキシコの象字の如き、蕪雜幼稚なるものにあらず、否、所謂漢文字は、象形字の頗る發達せるもの、即ち象字の漸く化醇して一種の簡便なる意字となれるもの、或は意字としてはほゞ完全に近きものか、これもいまだ知るべからず。　よしや假に一歩を讓りて、漢字の不便利を許認す

るも、我が國には別に假名といふ一種の聲字あり、恰も漢字の不足を補ひ、所謂テニハの如き、一語づゝ引離せば、殆ど沒意義となるが如き語、若しくは外國の地名、人名、物名の如き、音聲のみを傳ふる要ある語は、別に之れをもて表示するを得。此の意字と聲字とを併用して、名詞又は形容詞の如き、カピタルを要すべき緊要語は、支那傳來の意字をもて、僅に一二字に表示するを得ると同時に、外國語に謂ふ前詞、接詞、歎詞などの如き、殆ど無意義なるパーチクルは、之れを聲字(即ち假名文字)をもて表示するの利便は、思ふに、今昔に其の例なき所、我が日本文字の特得なり。之れを彼の「白鳥火を吐く」の粗畵によりて、白人來侵の旨意を表示せし北米の象字、若しくはナポレオン、アレキサンドルの發音を表示せんために、那翁、歷山の字面を用ふる支那字、若しくは Osiris の音を示さんために、Os (帝座)と iri (眼)との二象字を用ひし古埃及の象字に比せば、其の差霄壤とも評しつべし。勿論、我が國の假名文字は、純粹の音字にあらざるゆゑ、音を表示する上よりいへば、具足せざる所夥多あるべく、恐らくは改善の要あるべし、されども假名改善の說と漢字全廢の說とは、おのづから旨を異にす、こゝには重に漢字、假字併用の利害を說く、故に假名改善の件は敢て論ぜざるべし。只一言注意すべきは、我が聲(シラブル)を礎

として成れる假名文字は、子母音を別かちて成れるアルハベットに比べて、其の不具なるは爭ひがたしと雖も、尙彼の埃及の準聲字の、同一聲を表示するに、其の種類四五乃至二三十の多きに及び、同じくLの音なるも、國王又は神祇などの名には龍の象字、皇妃などの名には蓮の象字と、一々別をたてし迂腐に比し、又之れを現今の支那文字が同樣の迂遠に陷れるに比すれば、夐に優れりといふことなり。これは敢て現在の假名を強ひて保存せんための回護にはあらず、今の假名だにも、アルハベットを除くの外は、比類多からざる好聲字たるを示すのみ。

さて更に立戻りて論ぜんに、字は讀まん爲のものなるゆゑ、目に關すること多大なりとせば、綴字組織の音字と、一字にて一意をあらはす意字と、何れか目に見るに簡便なるか。　意字、殊に支那の意字は、學ぶに勞多きは爭ふべからざれど、一たび學び得たる後に於ては、認むるに易きことも爭ふべからず。　思ふに、歐洲の文章に屢〻カピタルを用ふるは、音字の目擊に便ならぬを證するにあらぬか。　又無用なる默字（サイレントレタル）を棄てかぬるは、判知に便なるが爲にあらぬか。　學ぶの便と讀むの不便と、其の得失如何。　是れ第一の疑問なり。

かくいはば、音字論者は必ず曰はん、綴字は見わくるに便ならずとする

は、目に習熟せざるが爲のみ。　歐人の綴字文を讀むや、一瞥數行、我が眞名、假名併用の文を讀むの神速なるに劣らず。　mountainの一字は嶽の一字と、其の認め易さに於て何の差かあらん。　吾人が嶽の何たるを知る、必しも一畫々々を認めて後に然るに非ず、英人の mountain を解する、はた之れに同じ。　彼れ豈一字々々を判知し、さて後に其の意を領解せんや。　綴字を見わけにくしといふは妄説のみ、と。　此の駁論に眞理あるは拒むべからず、但し、かくいへるは、一を見て二を察せざるの説にあらぬか。　乞ふ、第二の疑問を聽け。　音聲を礎として成れる綴字語は、比較的に同聲同音の語に乏し。　然れども支那國の如く、夙に豊富なる象形字を作りいだしたる國は、目を頼みとすること多きが故に、比較的に同聲の多きを忌まず、此の故に支那語に在りては、同聲の語の多き、驚くべし、而も讀むときは目に訴へ、聞く時は四聲の別をもて操り、從來大不便を感ぜしことなし。　然るに此の多同聲の支那文字が、一たび我が國に入り來たりて、次第に其の正聲を失へるや、全く同じ聲に讀まるゝ語、幾何といふ數を知らず、殊なる字形によりて、目に訴ふるにあらざるよりは、區別しがたきもの比々是れなり。　之れを音字もて表示せんか、エブストル大の大辭典の數葉は、毎に同綴字、異意義の字もて充塞せられん。

加ふるに我が在來の日本語(雅語及俗語)も、頗る同聲の詞に富めり。地口、懸詞の自在なるをもても、其の然るを證しつべし。思ふに、かくの如く同聲に富める國語は、必や音字國には見ざる所。若し果たして然らば、此の無數の同聲語の、同樣若しくは類似の綴字をもて、一々表示せられん時、見るもの紛らはしきを感ぜざるべきか。錯誤の恐れなきか。是れ第二の疑問なり。

音字論者は答へて曰はん、自然陶汰は無用なる同聲語を排除すべし、必要は紛らはしき同聲語を掃除すべし、と。

この論また道理あるなり、然れども、同聲を嫌ひて舊語を斥くるや、漢語を訓讀し又は新熟語を造るの要、必ずや生ぜざるを得ざるべし。例へば「恐」「怕」「畏」「怖」「懼」等は漢字もて之れを物する間は、字々皆格別の意義を有す、之れを「オソル」と物し、又はosoruと物せんか、五箇皆同一義となるべし。又例へば「資」、「志」、「四」、「死」、「詩」、「市」、「肆」、「耆」、「師」、「史」、「私」、「旨」等は我が國語に於ても、屢々音によりて通用するの語、若し之れを同綴字もて表することゝならば、「詩」は「史」とまぎらはしく「市」は「肆」とまぎらはしく、「志」は「旨」とまぎらはしく、自然の必要は筆者を驅りて、「詩」といはん代りに「詩歌」といはしめ「詩は志なり」といはん代りに「詩はこゝろざしなり」といはしむべし。

又「恐る」といはん代りに「心配す」又は「恐怖す」「畏懼す」などいひ、果は五六年前に行はれし如き杜撰なる熟語の流行を來たすべし。 例へば、文章上にては、「賛す」といはば足らんを、「賛成」といひ、「資す」といふべきを「資料となる」、「幇く」といはば足らんを「幇助す」などいへるは更なり、強ひて字を疊みて「正直」といはば足らんを「正廉剛直」などと、無理に語を引延ばすの弊は維新後いと盛に行はれて、今も尚其の跡殘れり。 これ一つは近來演説の流行につれて耳に聞取り易きを主とせしが緣となれるなり。 論者或は維新後の文章の冗漫を刺りて、西洋文の模倣なりとすれど、其の實は此等新熟語の然らしめし所なり、演説句調、即ち耳に訴ふる語の殖えたると、外國語を譯するに當たりて、をさ〳〵口授を主とせしより、聞取り易きを選めるとに因る。 彼の「資す」など譯せば足るべきを、「用立つ」と長く訓じ又、「證す」と訓まば用足らんを「證據立つる」と訓せるなど、皆同じ理に基くなるべし。 さて此の同じ冗漫の弊は、更に一層の度を加へて、音字的文章の上に現れ來たるべし、換言すれば、言語はいちじるく長やかになるべし。 譬へば、今も口語にては「師を訪ふ」といはで「師匠(又は先生)をたづねる」といひ、「詩は志なり」といはで「詩とはこゝろざしといふこと」といふが如く、音字的文章は(上にもいへる如く次第に口語調に近づ

くべければ)かならずや聲の數を增加すべし、さすれば從來の文字に比べて、空間(スペース)を掩ふの廣かるべきは、殆んど多辨するを俟たざるべし。よしや習熟の結果として一瞥數行字を讀み得べしとするも、其の數行に記せる意義は、從來の半行のに劣るとせば、何れか便、孰れか不便、是れ第三の疑問なり。

且や自然陶汰の力も、我が多數の同聲語には、恐らくはもてあまさん。あはれ、思想表白の便宜を害せずしてよく同聲語を排除し得べきか。これはた容易くは斷じがたし。

實用上の疑問はしばらくこゝにとゞめ、吾人は更に

國語學上の利害

に移らん。

國語及び國字の特質は其の國の智力上に於ける獨立を表するものなり。國語のことはいふに及ばず、國字の如きも、種々複雜なる遇會を經て、今日に傳はれるものなるゆゑ、多少國粹の宿る所なり、字の形の如きはしばらく措くも、其の假名遣、綴字法の如きは、輕忽に改めて可なるべきや、多少稽査すべき要あるべし。 音聲字論者の本意よりいへば、漢字

の聲韻はいふに及ばず、我が國語の假名遣も、已むを得ざる必要なき限は、總て同綴字に物せんこと、勿論の目的なるが如し、すなはち所謂 phonetic spelling（主音綴字）の說を我が國語に應用せん宿志なるが如し。主音綴字論は、早く歐洲の語學者間に唱へられ、曾て英國にも其の論ありき。 こは本來の音字國にありては、直にも英斷せられつべきことのやうなるに、今尙實行の緖に着かぬは、如何なる故ぞといふに、其の重なる故障は語原に關する利害なり。 例へば、Europe の發音、俗には Urup なるに、之れを六音字に長く綴るは、極めて無用なることに似たれど、Urup と改むると同時に、Europe といふ語が二箇の希臘文字「廣」と「面」とより來れるの史は亡滅すべし、猶 jaw（頤）の昔は chaw なりしが、jaw と主音的に綴らるゝに及びて、chew（即嚙む）と同語原たるを忘られたるが如し。 英獨の語の如きは、本來表音字に物せられて、人皆音に慣れたるべければ、少しく綴字法を改むるも、甚しき不便利はなかるべきに、尙且語學者は口を極めて、語原滅却の害を唱へ、種々の點より見て抗論せんとす、彼等をして我が國語と音字との關係を論ぜしめば、何とかいはん。 我が假名遣と語原との關係は暫く措くも、從來主と目によりて記せられたる支那文字が、俄に一變して主音綴字に物せられん時、其の結果如何ある

べき。支那語は同聲に富みたるだけに、其の語原は全く探りがたきものとならん。今日は意字を見るが故に、語源、典故、等を知るも知らぬも「俑を作る」「胡越の如し」「亡羊の歎」「單刀直入」「陣勝呉廣」「張三李四」などいふ熟語、成語、等に會する毎に、多少明に其の意義を認む、然れども主音綴字に物せられば、此等一切の隱喩、引喩は、いづれも沒餘韻の語となるべし、隨うて誤解濫用の弊も、殆ど測る可からざる者あらん。語原を知るといふことは、ふと思へば專門語學家にのみ用あるに似たれど、語原を知るの必要は、むしろあらゆる操觚者の上にあり。蓋し、語原を明にするは、語の眞義を明にするなり、修辭學上よりいへば propriety と precision とを全うするの階段なり、又記憶に便なり、是れ稍々高等なる學校に於ては、語原を語意と共に諸生に知らしめ、正しき領解に資する所以。然るに只音聲のみ頼(たより)として無數の語を學ぶことゝならば、我が國の如き多同聲の國語に於ては、彼の「判然」と「憫然」とを混同し、「無理ならぬ」を「無理からぬ」といふが如き間違の外に、尚夥多の有害なる濫用を生ぜん、試に方今の雜誌上の文章の、青年者流の手に成れるものを撿せよ、彼等才思餘あるも、間々詞藻に貧なるあり、或は彼等の速成なるや、語に貧ならざるも、字に貧なることあり。蓋し、彼等の語を學ぶ、耳よりするもの多くして、

目よりするもの尠し、否、語義を精しくは解せざることあり、こゝに於てや、典故のひきちがひ、引喩の不妥當、熟語の杜撰、衍字、誤字、等屢〻瑕疵となりて其の文を汚す。若し夫れ衍字、語字の失は、主音綴字によりて除くを得べきも、他幾種の失病は、音字の行はるゝと共に幾倍ならん、何となれば、漢語の領しがたき度は漢字を廢すると共に幾層を加ふべく、而して漢語全廢說は到底行はるべしとも思はれざればなり。例へば「狐疑」「惑亂」等の語は、二字を別々に知らんものは、熟字を解するに苦まざれど、これらの語一たび主音的に綴られなば、解を俟たずしては知りがたからん、語の成れる源（みなもと）見がたければなり。

此の他語原の埋沒するが爲に生ずる不便は、尙一二のみならざるべし。例へば、語は一種の小國史なり、而して主音綴字は、此の小國史を破却するの虞れあり、恐らくは主音綴字の行はるゝと共に、外國語と日本語との別は、殆ど一見して見わきがたきに至らん。英の學者某嘗ていへらく「英國上古の史は或遇會によりて全滅するとありとも、此の英國語の存せん限は、其の語原を繹ねて過去を髣髴する、必しも難からず、サクソン人の消長、ノルマン人の盛衰、彰として國語に跡を印す」と。是れ或は專門語學家の誇張の言、而も尙其の一分の理は否むべからず。所詮、語

原論は新國字論に關係せる一の大切なる問題なるべし。
同じく國語學の上より見て、今一つ注意すべき事といふは、國語の轉訛變遷なり。從來の國語は、言文二筋に發達し來たれるゆゑ、口語の變遷の激しきにも係らず、一面に文語の嚴然たるありて、始終國語の標準を指示し、語の雅俗を辨ぜしめ、正に復せんと欲せば、容易に之れを爲すの便を得しむ、こは他面に向かうては甚だ不便利なる二重國語が特に供給する一大便利なり。然るに、若し二重制度を廢し、言語双ながら聲にのみよらんか、所謂文章語も、彼の歐洲に於ての如く、又我が國從來の俗語にひとしく、歳月と共に變遷し、其の綴字法の如きは、主音說を履行しゆかば、これまた年と共に移り變はり、恐らく數百年も經たらんころには、明治の文章の如きは、吾人が今日『万葉集』を讀むよりも一層解しがたきものとならん。然り、尠くとも今日の地方語に見る如き大轉訛を、文章語の上にも、見るに至らん。其の時に於て、言語の雅俗、純雜を斷ずるの標準は如何。此の答はた語原論に接觸すべきものなるべし。

國文學上の利害

詩文章に及ぼす影響の一は、前の語原問題に密接す、他なし、語原を知る

は其の語に含まれたる一種の詩趣を解すると同義なるに、主音綴字に物するときは、言外の餘韻殆ど悉く滅ぶといふ、是れなり。例へば、花卉の名を見よ、女郎花、木蓮、鷄頭花、などは、實用上より見ればこそ、甚しく不便なれ、詩文に用ふるものとしては、多少言外の餘韵を表示す。何となれば彼等は皆隱喩(メタフォア)なればなり。其の他「崔嵬」「嬋妍」「燦爛」「皚々」などいふ語の如きも、其の意義の外に餘情あるは、主音綴字と同じからず。論者は曰はく、これまた習慣の然らしむる所のみ、英語の Alas!、rugged、soft、smiling などの如きも、またおのづから餘韵存して、其の字を見ると共に感動くにあらずや、と。此の論いまだうなづきがたし。若し英語の Alas に含まれたる餘韵あらば、そは我が「あはれ〳〵」又は「アヽ」などいふ語に含まれたるものにひとしかるべく、soft、smiling、rugged 等に、若し言外の風情あらば、そは我が、「さゞなみ」「おどろ〳〵」「ガヽ」(峩々)「サッ〳〵」(颯々)等に含まれたるものにひとしかるべし、即ち概して擬聲又は準擬聲より來たる風味なり。吾人が上にいへる漢字の餘情とは、此れにあらず、其の意の外に、聲の外に、又概して字形の外に、一種特得の添物(そへもの)ありて、讀む者の詩思に觸るゝをいふ、前例に於ける「嬋妍」「皚々」「燦爛」等の偏を見よ、「女」「白」「火」の三者は、一種の風韻を添ふるにあらずや。又は假に一歩を讓

りてかゝるホマチの如き風韵はいふに足らずとするも、意義を認知するに便なるや明なり。從來の經驗に徵するに、或程度まで學び得たる後は、漢字は割合に推知し易き文字なり。こは雪嶺氏も其の「漢字論」中に謂へる所。字彙にも、師にも、たよらずして、自然に學び得たる漢字の、如何に多きかを思へ。例へば「皚」の字、「燦」の字の如き、必しも敎へられて後に「ガイ」、「サン」と讀み、且其の意義を知るにあらざるなり。大多數の人は、大抵偏旁(へんつくり)によりて推知せるならん、是れ世に推讀の漢音多き所以、また誤用の漢文字多き所以。畢竟、弊もまたこゝに存し、利もまたこゝにあり、其の輕重明かならぬうちは、輕々しく漢字は棄てがたかるべし。詩文上に於ける第二の不利は、語の冗漫になりゆくべきによりて、簡淨の美を失はざるを得ざることとなり、或は簡淨は尙ほ得らるべし、簡勁は望みがたからん、一聲一意の漢語は、上にいへる同聲上の不便よりして、大抵廢滅に歸し去るべく、而して我が國語は、優美と冗長とを特質とすればなり。　前の實用論中の第三疑問を參照せよ。　詩文上に於ける第三の不利は、「雲泥」「胡越」「酸鼻」などいふ、尋常用ひ慣れたる隱喩的用語をして、悉く其の詩趣を失はしめ、恐らくは後の青年詩人をして、「我れと彼れとのコエツなることと、水と火との相かなはざるが如し」、又は「二者の相異

のウンディなる、天と地との相異なるが如し」などいふ、架上に架を架する奇句を物せしむるに至ることあらん。　蓋し、音字國に隱喩の跡かたなく忘らるゝ例は珍らしからぬことなれども、象形字の音字と變はれる場合ほどに、其の甚しきはなかるべし。　要するに、かかる錯誤は實用上に於ても不便なるべく、而して詩文上に於ては甚だ哀しむべき瑕疵なりといふべし、

尙一つ注意すべきは、音字國の文章に於ても、多少字形を利用して文を行り辭を措くことあり、例へば vast を取らずして stupendous を取るはひとへに其の發音の量と度とのみを準とせるにはあらじ、一は後者の綴字形の長きが讀者の視覺にも影響して感を著ならしむる効あればなるべし、英の詩文人が莊嚴重大の意を著鋭ならしめんと欲するとき、間ゝ好みて羅甸源の英語を用ふるは、一は羅甸源の語の槪して其の字形長きに因るか。　say といふと pronounce といふと、其の音の度量にも差あり、其の視覺上の感にも差あり、詞容の彼れを取らずして此れを取る、故なしとせんや。　果して然らば、我が國語のすべて音字をもて物せられん時も、尙字形上の問題は多少詞文人の稽考を要すべし。　然るに漢音の著く減少して、訓讀的漢語の大に流行する曉には、我が國語の情

態は、恐らく英國などのとは直反對ならん。彼れにありては、土語たるサクソン語簡短にして、外來語いと長し、我れにありては、土語は皆長く、而も羅甸源の英語の如き強きアクセント無し。すなはち我が國にては、意味の重大ならぬ語を、却りて長々しく綴る如き反對の結果を生じぬべし。是れまた美文家の一顧すべき問題ならん。

過去との關係

この問題に關しては、三宅雪嶺氏の論之れを悉せり、曰はく

人の智識現代に限るべからず既往千古祖先以來生出し來りし事實は知らざるべからざる所又知らんことを欲すべき所なり我の史あるや記するに漢字を以てせる者十に八九中古以後間々傍ら假字を用ゐしものあり蓋し寥々として數ふるに足らず其他は則ち奈良平安の古より中ごろ北條足利を經て下近世德川の時に及ぶ國史私記公文典册は論なし乃ち文華詞藻赤本草双紙雜著漫筆の瑣屑に到るまで苟も事の躰裁を具ふる者にして漢字を用ゐざる者はあらず古を稽へ往を徵するに志ある者漢字を知らずんば渡るに舟筏なきが如きことあらんか

と。氏はまた「人の智識は竪に今古に亘るのみして足るべからず又横に東西に涉らざるべからず」と說きて漢字が東洋の事情を知るの必須

の媒たるを論じ、

かの支那に在ては詩書經子の舊より汗牛充棟五車二酉篇籍の富、萬億を以て數ふさ苟も漢字を學ぶ讀で而して會すべからざるなく我邦に在て普通修得する漢字の智識に賴るも亦甚だ理會すべからざるの困難あるこさなし漢字の東洋智識に於る其用の廣くして且つ便に實際欠くべからざる者に屬する此のごさし

といへり。案ずるに、人間の vanity は抑へ盡くしがたし、たとへ古史、古文學の類は常人に不要なる智識なりとするも、虛誇名聞の心は、彼等を驅りて、古史、古文學を窺はんの念を起こさしむべし、但し、かゝる vanity は或は轉じて高大なる ambition と化すべきもの、強ちに抑ふべきものにあらじ、さすれば古史、古文學を窺ふの枝折は、常人の爲にも豫め備へおくの必要あらん、換言すれば、重なる古史、古文學などは、表音字に翻記するの必要あらん、然れども其の面倒は彼のチョオサル、スペンサル、又は十八世紀の英詩文を、多少綴字法に修正を加へて、後人の便に供するに比して、更に幾層の面倒ならん。蓋し、音字國となりて後の國人の目より見ば、明治以前の詩文章は、殆ど今日の英國人がサクソン最古代の詩文を見るよりも解しがたからん、翻譯せば知らず、元のまゝにて示さんとせば、註疏釋義の煩瑣、實に驚くべきものあらん。所詮、音字のみと

なりて後は、一切の舊國文、及び一切の支那文字は、殆ど英獨語に劣らざるべき、頗る學びにくき文字となるべし、随うて日本の紳士(ゼントルマン)(學者とはいはず)たらん者は、尠くとも尋常教育の外に日本太古文學、(今の所謂古文學)日本舊文學(明治以前の文學を總稱す)支那文字、及び英(獨又は佛又は魯)文學を多少修せざるを得ざるに至るべし。何となれば、今日の事情をもて推すも、所謂日本太古文學は歐洲人の希臘語、羅甸語に於けると、殆ど關係を同うしたるに、所謂日本舊文學(明治以前の文學)の彼等に於ける關係は、更に幾等か緊要なるべければ、取りも直さず我が未來の同胞は、今の歐米の紳士よりも、はるかに重大なる負擔を負ふべし、疑ふらくは時の學者といふとも、多く外國語を學ぶの餘裕殆ど得がたきに至らん、是れ果たして祝すべきの結果か。

以上諸種の不便利と彼の學ぶの簡便と、其の輕重如何。

謹みて大方の稽査判斷を待つ。

(廿八年五月)

「英文評釋」緒言

方今、我が國に行はるゝ、英文學の教授法につきては、おかず思ふことゞも一二のみならぬなかに、最も歎ずべきは訓讀法の宜しきを得ざるこ

現今行はるゝ英文學教授法の三欠典

となり、第二は敎授者の鑑識の乏しきとなり、くはしくは、只管字句の解にのみ泥みて、趣致と風調とを餘所にするの弊あることとなり、第三は敎課書選擇の無差別なることとなり、すなはち一詩文を講ずるに當たりて、其の感想の健不健、文致の新古、措辭の雅俗等、これら緊要なる辨別をもなさで、一切無差別に敎授することと、是れなり。 もとより中央首都の敎授者中には、已に此の弊に心づきて、改善に力を致せるもあれど、そは尙極めて少數にて、多數の敎授者の着眼は、今も從前に異なることなし、まして地方なる敎授者等は、かゝる改善の必要なるべきをだに認めずして、死讀に泥めるも多しといふ。 かくの如くにして續かば、十年英文學を修むとも、其の眞の趣味は解するに由なく、偶〻國文に累せんのみ。

直譯法の改正

案ずるに、此の獘習を矯治するの一策は、まづ所謂直譯法を改めて新訓讀法となすにあらんか。

英語學と英文學とは修學の法を異にす

夫れ英語學を修むると英文學の趣致を味ふとは、其の法おのづから一なるを得ず、單に英語のみを學ばんとせば、前後六七月が間、外國人の家に同棲するも、或は一斑を學ぶを得ん、さはれ英文學を味はんとせば、更に幾歩をか進めざるべからず。 すなはち英語の意を解するにのみとゞめずして其の風趣をも領せざるべからず、及ぶべくば、我が國文と對繳して彼の詩文の趣致を玩味し、彼れの圓轉

滑脱は我が圓轉滑脱を以て迎ふべく、彼れの森嚴莊重は我が森嚴莊重を以て迎へ、能ふべくば、響の音に應ずるが如く、影の物に隨ふが如く、原趣を髣髴するをもて要とすべし、拗くとも從來の不妥拙陋なる直譯法を全廢し、語を訓ずると同時に、多少原文の風趣をも傳ふべきなり。こはもとより行ひ易からざることなれども、只一歩を前進するも、また一歩の改善なり、ひたすら守株するの愚なるには優らん。予が嘗て『國學院雜誌』に掲げたる英文評釋は、この訓讀法に對する第一歩の改善を表するもの、或は以て參考に資するに足らん。下に其の一端を轉錄するを見よ。

今日英文を讀み習はんとするものゝ不便二あり、英和對照字彙の尙甚だ不完全なること從來行はるゝ訓讀法(所謂譯讀)のいと〳〵ほしいまゝなることなり。其のかみ行はれし『薩摩字書』などいへるに比ぶれば、今日行はるゝ英和字典の優れること數等なれど、譯法宜しきを得ざるもの尙あまたあり。例へば、專門にのみ用ふる語にして已に殊別なる名稱の定まりたるに、孟浪杜撰なる譯語を塡し、間ゝ讀者をして一物を二物かと疑はしむることあり。且『薩摩字書』以來の因襲にしたがひ、甚しき俗語をも、こちたき漢字をも、殆どわいだめなく譯語としてまじへ用ひたれば、國文を讀む心もて英和辞典を見るときは、動詞を形容言と誤り、意義殆ど無き接續詞

にも、深き意義あるやうに思ひ誤ることあり。例へば、Thatといふ語は接續詞として用ふる時は、概して國文の「と」といふ語（又は「を」といふ語）に相當するのみなるを、辭典には「何々する事」と譯したるゆゑ、初學者は此の語に必ずしも「事」といふ義伴へるやうに心得

He said that he would not go.

といふ語を訓ずるや、よしや逐語譯にものすとも

「彼れはいへり彼れはゆくまじと」

などいはゞ足るべきを

「彼れは彼れが行かぬであらうことをいひし」

とやうに訓ずるゆゑ、所謂譯讀に慣れぬ者は、みづから訓じながら何の意とも解しかぬるなり。或は「いひし」とは連用言にやといぶかるもあらん。總じて今の英和辭典は現在動詞を譯するに常語（つねのことば）の使用法によりたれば、「刑す」、「稱す」などありて當然なるを、「刑する」、「稱する」と譯して、連用言かと疑はしめ、過去動詞を一概に「刑せし」、「稱せし」、「殺せし」、「そしりし」と譯して國語法を紊したり。

畢竟、これは國文法の一定せざりしに因ることなり、即ち正當なる英和對照文典の成りがたかりしに因るなり。或は明治新文法の制定せらるゝの時來たらば「刑する」「稱する」等は現在動詞として許認せらるゝに到るならん、而も今行はるゝ文法上よりいへば、破格の言たること勿論

なり、すなはち俗語上には許さるべきも、文章上には許さるまじきものなり。

又英語の代名詞はくさ〲にて、非情、有情の別あり、男女の別あり、又主位、賓位、領位などいふ位置の格あり。男性の代名詞はhe、his、等にして、女性の代名詞はshe、her等なり。字典之れを譯して、男性は「彼れは」、「彼れの」、「彼れに」など、女性は「彼の女は」、「彼の女の」「彼の女に」など、管々しく物せり、これ又訓を冗漫ならしめし一因なり。國文の代名詞もくさ〲なれど、「彼」といふに男女の別なければ、男をも、女をも、「彼れ」と稱すべく、又うがもてる物を指さんに、必ずしも「彼れの帽」、「彼の女の帶」といはずともあるべく、皆おしなべて「其の」若しは「そが」などいはゞ足るべくや。多くは、かゝる代名詞さへも、省かれても至當なるが如し。例へば、今の直譯法によれば「彼れ帽をとりて起ちぬ」といはゞ足らんを「彼れは彼れの帽をとり而して起ちあがりし」と訓むなり、冗長の至ならずや。かゝる例一々説かば限なからん。

さて又所謂譯讀法の不都合は辭典の杜撰よりも甚し。例へば、I（予）を「わたくし」と俗訓しながらyou（爾）を「なんぢ」と雅に訓じて「わたくしは爾を愛する」などいふ不等（ふつりあひ）の訓を成し、若しは接續詞のandを、いつも同じに、「ソウシテ」又は「而して」と訓じて「蟻と蛛」又は「蟻と蛛と」とあるべきを「蟻とソウシテ蛛」と訓み「廉且正なる」若しくは「廉正なる」と訓じて妥當ならんを「廉直なる而して公正なる」とやうに冗長なる熟語を繋ぎ合はせて訓むなどは

いふも更なり「足下がそを知らざりしは不思議なり」といはゞ足るべきを「汝がそれを知りなさゞりしことのそのことが不思議である」と讀むなど、笑ふべきよりはむしろ我が國文を害ふものとして憂ふべきなり。よしや聰明なる讀者輩は、かゝる拙譯に拘らずして、原文の趣致を解すとするも、其の會得の遲かるべきは、多く辨ずるを俟たざるべきなり。思ふに、維新以後國文の法格のみだりがはしうなりたるには、種々の由縁あれど、所謂直譯法もまた與りて力ありしは明なり。奇性なる熟語、耳なれぬ造語の用ひらるゝに至りし、若しは文のおしなべて冗漫になりし、皆此の直譯法の弊なり。

予甞て或國學の學校に聘せられて、英文學を教へたりしことあり。かしこの學生は、なべて國文法には通じたらん筈なるに、尙英文を譯するには、所謂直譯の法によりて、甚しき破格の言葉をつらね、屢〻正しつれど、其の甲斐なかりき。一方に於て矯正するも、他の教授法舊の如くならば、且直うして且曲ぐるのたぐひなるべく、國文家が、一方に於て、頻りに國文法を講ずるも、他方に於て英學家が、あやしき直譯の句法を教へば、國文の一定は到底行はるべき時なからん。正當なる和英對照文典を編纂すること、明治文壇の急務の一なり。

更に一例を擧げん、「我が愛する同胞」といはゞ足らんを「我が親愛する所の

同胞」といふ。親の字に必ずしも深き意あるにあらず、所詮は、譯讀口吻のうつれるのみ。又此の所のといふ語の維新以後いたく行はるゝに至りしも、思ふに英語の關係代名詞 that, who, which などをあしく訓じたるが、遂に筆癖となれるにやあらん。此等のことわり、一々にいへばくだ〳〵し（中畧）もとより予の訓讀法とても、悉く妥ならざらんは勿論なれど、從來廣く行はれたるに比せば、國語を害ふこと尠かるべしと思ふのみ。またかゝる訓讀法行はまほしく思ふ同感の士、今は世に乏しからず、辰巳小次郎、岡倉由三郎の二氏をはじめ、雜誌やうの發兌物にては、『日本英學新誌』、『英學』、なほ其の他予が知らざるあたりに同感の士あまたあらん、只久しき因襲を破ることの難くて、世に新訓の行はれぬなるべし。

右は予が新訓論の一斑なり、其の例は『國學院雜誌』に毎號ひきつゞき掲げたれば、一讀して其のやうを見らるべし、尚本評釋の本文によりても、予が旨の在る所は知るに足らん。

さて、以上に說ける所は、只訓讀法に關する改善の一策のみ、此の策もとより萬全なるにあらず。或はいはん、英語と國語とは、到底語の脈を殊にせるもの、かゝる國語法に拘泥したるの訓は、却りて英文の眞意を害ふ。英語を解するには宜しく大意譯を主とすべし、若干の語をひきくるめて俗語をもて綜譯し、全體の眞義を傳へんを要とし、強ちに語脈に

第二の弊

泥むべからず。　足下の所謂新訓は、幾分か逐語譯の趣あり、又恐らくはひとり文章家の教授者を俟ちてのみ行はるべきことにして、尋常の教授者には望みがたからんと。　或は然らん。　但し、予は英文學の教授を論ずるにあらず、主と英文學の教授法を說けるなり、而して英文學の教授者は、多少國文に通達し、幷びに文章に達せざるべからず、然らずんば爭でか英詩文の趣味を講ずるを得ん。

さて第二の弊といふは、英文學を教授する者の美文上の鑑識(批判力)乏しきことなり。　悉しくいへば、ひたすら一語一句を解釋するにのみ汲々として、一篇の眞意と風趣餘韵とを傳ふるに力めざることなり。　げにや英語を教ふるをのみ主とせば、必ずしも風趣を談ずるに及ばざるべし、然かれども、かりにも英文學を講ずとせば、作家の精神のこもれる所、其の文致の殊なる所、其の風調の妙、其の餘韵の多少、若しくは其の作家の特質なども、併せて講ぜざれば不具足にあらずや。　例へば、アヂソンの文の如き、若し之れを單に語義の解釋にとゞめば、大かたは平々坦々、其の何の邊に詼諧の妙あるか、其の何が故にジョンソンの小品と異なるか、其の如何なる特質がゴールドスミスの散文に異なれる、殆ど見分くるに由なからん。　若しくはシエークスピアの劇詩の如き、已に演

伎すべきものとせば、たとへこれを口譯するも、幾分か其の科介(みぶりこなし)との關係を示し、其の語の緩急鹽梅、若しくは輕重の度合、等を示さずば、其の何が故に古今空絶の傑作なるか、いづこか人情の精髓なる、其の近松、竹田、等に比して、如何なる著き逕庭あるか、殆ど判知するに由なかるべし。蓋し、アヂソンも、ベーコンも、シエークスピアも、テニスンも、方今行はるゝ直譯法によりて譯せられ、而も語義以外の風趣につきては、殆ど何の傳へらるゝ所なくば、共に是れ異風の怪文字、重くるしく、まはりくどく、然らざれば言ひまはしいとおさなびたる、舌たらずの言葉に似て、其の何が故に妙なるかは、殆ど片影だに知らんに由なし。もとより英國の詩文章は、我が國文に比するときは、全く語の質を殊にすれば、ひとり訓讀の方法のみによりて、趣味と風韵とを傳ふるは、所詮、望みがたきことなれども、さりとて教授者の着眼にして、をさ〳〵風韵を傳ふるにあらば、其の法必無とは斷ずべからず。例へば、一詩文を講ずるに先だち、まづ該作家の略歷を語り、其の境遇時勢を叙し、又其の作家の特質を說き、其の作の由來を述べ、及び其の作の趣味を指摘し、或は和漢の作物につきて類同を求め、或は和漢のと對照して其の感想の異なるを示さば、多少眞趣味を髣髴するに庶幾からんか。然るに從來の教授家は、概して

かゝる點に留意せざるなり、彼等は森嚴なる論文をも、輕妙なる戲文をも、同じ口吻にて譯し去り、同じ着眼にて講じ去るなり。甚しきは第一リードルの文章とシェークスピアの句とをだに區別せざるなり。

Ant and spider. (蟻とそうして蜘蛛)

To be or not to be! that is the question: (あるべく或はあらぬべくよ、それが問題である)

二者共に殆ど何の義とも解しがたし。而して教授者は曰はく「後者はシェークスピアの傑作『ハムレット』中の名文句、デンマークの太子ハムレットが父の讐を殺さんとして殺すを得ず、煩悶苦惱のあまり發したる獨語なり。 即ち「生きてゐやうか又は生きてゐまいか」の義即ち「死ぬるがましか、生きるがましか」若しくは「存らふべきか、但しまた、存らふべきにあらざるか」など意譯すべきか。 何等の妙文句ぞ。 是れハムレット太子が生死の間に苦悶する時の劈頭の警句」と。 讃歎幾百言、聽く者杳然恐らくは只イハレを聽いて不精々々感服するの外なかるべし。何となれば所謂意譯を聽くも、尙其の妙を認むるに由なければなり、蓋し、「死ぬるがましか云々」を聽くや、人恐らくはまづ地方の盆歌を想起すべく、「存らふべきか云々」をきかば、其の七五調の悠長なるに感じて、原

語の風調をさとらざるべし、すなはち千百言の講釋も、到底風韵を傳ふるに益せざるなり。然らば如何にせば可ならん。無上の良法は最良の意譯を施すにあれども、そは大文學者を俟ちて成るべきのこと、尋常の教授者の能ふべきことにあらず。要は教授者をして批判家、賞鑑家たるの資格を具へしむるにあり、たとへ具象的に眞趣味を傳ふる能はざるも、抽象的に之れを講ずるの能なかるべからず。前の例についていはば、此の劈頭の苦悶の語の、如何に簡潔なるかを說き、如何に獨語(ひとりごと)の冒頭のかくあらざるべからざるかを說き、拙き意譯を施さんよりは、むしろ忠實なる逐語訓を下すべし。例へば

存せんか　存せざらんか　これ　也　疑問
To be (or) not to be! that is (the) question:

この譯もとより何の風韵をも傳へざるなり、されども原意を增減するの弊はなし。蓋し、こゝのtoに必ずしも應、當、須などやうの「べシ」の義はあらず、まして「孰れか勝れる」とやうの强き意はなし。名優の此の段を演じたる型(かた)によるも、此の一句は極めて靜に言はるべきものにて、意譯にもせよ、直譯にもせよ、一語たりとも增減すべからざる筈なり。これ只一例にとゞまれども、總じて鑑識なき講釋ほど、原作の眞趣味を害ふものはなし、到底、說明する能はずば、忠實なる逐語訓を施すが、却りて万全

に近き策なるべし。 所詮、英語の教授ならば知らず、苟も英文學を教へんとせば、賞鑑の識ほどは具へざるべからず、

第三の弊

さて、第三は教課用書選擇の無差別なることなり。 從來の教授法によれば、英國十八世紀の名家も、現十九世紀の名什も、殆どわいだめなく採用せられ、而も授教者は其の新古の說明をもせず、二百餘年前の名家の詩文の、語法又は文脈さへ頗る今とは異なれるをも、現時の英文の樣に講じ去り、些の注意をも施さゞるなり。 或はまた破格の名文を採用して、之れを教課書となすことあり、例へばカーライルの晩年の作の如き、これなり。 其の議論の是非はしばらく措く、其の破格文たるは爭ふべからず、例へば、我が西鶴の作の如し、其の破格の甚しきにも拘らず、美文たるの價値はこれあり、而もこれをもて國文の模範とし、教課に用ふべしといふものあらば、眉を顰むる者十中八九ならん。 いはんや、何等の說明もなくして、尋常の詩文の如く講じ去るをや。 但し、予は英文學の教授法を論ず、故に、カーライルの晩作といふとも、これを排除せよ、といはんとはせず、只其の教授者の粗放と不深切とを非とするのみ、カーライルの如き情熱者の所論は、論としても、若干の批評を附加するの要あり、況や、文としては、一種特別の性質あり、十分の評釋を加へずんば、徒に

初學の讀者を惑はし、單に英文學の本質を誤解せしむるのみならず、尙他に歎ずべきの弊を生ぜん。　かくの如きはまだよし、甚だしきに至りては、其の文辭こそはめでたけれ、其の論述せる事柄は、尠くとも彼なたにては、已に陳腐に屬したるを、今尙新き說のやうに誇張附會して講ずるため、我が年少の子弟をして、圖らずも時勢に後れしむることあり、若しくは不健全の感想を傳へて、感じ易き頭腦に累することあり。　例へば、バイロン、シェレー等の詩は、をさ〳〵時運に胚胎して成れるものゆゑ、そを講述するや、毎に歐洲の當代を併叙し、何故にバイロンの憤激の、しかく猛烈ならざるを得ざりしか、何故にシェレーの感想の、さしも理想界に逸したりしか、佛蘭西革命の狂暴が、如何に人心を震盪せしか、個人と社會との軋轢の、如何に極端に達したりしか、此等密接せる大事件を、併せて叙說する所なくんば、ひとり彼等の詩篇をして幾分の氣燄を減ぜしむるのみならず、感じ易き年少の子弟をして、間〻不健全の感想に感染せしめ、不測の弊害を釀すことあるべし。　今や我が思想の潮流は、將に泰西の大潮に合流し、相ならびて理想の大海に向かはんとす、否、或は泰西のに駕して眞先に理想海に注がんものは、我が日東の思潮ならんか、電の如き今日の潮勢より觀れば、いまだ遽に圖るべからず。　時勢

裸美人畫

己にかくの如し、然るに退潮とも名けつべき過去の感想を代表せる、彼なたの詩文章を講讀するに當たり、此等緊要の說明を怠り、或は語義のみを講じ去り、或は甚しく誇張敷衍し、更に甚しきに至りては、作家が不健全の感想をさへ讃歎稱揚して措かざる如き、敎授者の沒鑑識に因るとはいへども、頗る歎くべき弊にあらずや。　バイロン、シェレー等は例として擧げたるのみ、ジョンソンの『ラセラス』、アヂソンの『スペクテートル』、ポープの『人間論』スヰフト、エマルソン、ギョオテが壯時の作など、皆注意して講ぜずんば、不測の失弊を釀すの虞あらん。　英語のみを敎ふるには、かゝる虞なきことなれど、總じて文學的講習は、幾分か情操上に影響を及ぼすものなり。　思はざるべけんや。

好尙の墮落

片々たる一裸美人の畫、あはれ公衆を驚愕せしむるか。　而して今の大俗沒趣味の演劇の日々に嗜好を墮落せしむるは、却りて彼等を驚かさゞるか。　裸美人の畫は果して俗衆の惡感を牽くか、或は假にさることとありとせん、而もそは彼の裸美人畫其の物の醜なるが爲にあらずして、觀者の俗感の醜なる爲のみ、吾人は、世の聰明者が、何故に此の俗衆の

劣鑑識に驚かずして、裸體畫の陳列に驚くかを驚く。　見ずや、方今の演劇には、惡感を牽くの素も（警視の戒きびしきため）尠けれど、審美感を牽くの眞詩趣もなし、一見害もなく、利もなきに似たれども、日々に觀者を俗化して、彼の恍焉として理想に遊ぶ、高潔の嗜好を亡せしむるの緒は、今や已に彰々乎たり。　之れを指して出世間的弊害と反論する勿れ、世間的嗜好の墮落は明に世間の弊害なり。　世の聰明者は、此の消極的弊害に氣附かざるか。

影を追ふは誰ぞ　（某の說を駁す）

誰れか演劇論流行すといふぞ、吾人はいまだ正鵠を得たる演劇論の世。に流行するを認めざるなり。　新聞劇評の盛なるは、以て眞の演劇論の流行を證するに足らず、近松論の流行、はた演劇論の流行にあらず、眞の演劇論の流行は尠くとも世の新聞紙などが、今の演劇の不具を認め、其の何故に不具なるかを（審美的に）論辨し、而して改善を唱ふるの時、はじめてこれありといふを得べし。

近年の新聞紙いづれか此の般の論をなしゝ。　何處の新聞紙か彼の活歷論と勸懲說とを脱して今の演劇の不具を說きし。　櫻痴居士の秘密

談は談のみ、論にあらず。吾人は曾て少しく論じぬ、而も『六合雜誌』記者の同感を牽き得たるの外、何等の反響をも聞かざるなり。之れをしも流行といひ得べくば、社員一二人が馬より墮ちたる、尙且落馬の流行と名け得べし。アナ鳴呼なり。

今の文壇の詞客中、誰れか此の非流行に動かされて、心を劇に傾けつゝあるか。誰れか禁止をいゝいゝ要するほどに劇の方面に浮身をやつせる。自ら影を作りて之れを追ふ、已にケブなり、影を追ふ者に向かつて其の勞を謝す、更にケブなり、鳴呼、之れを難ずるはケブの更にケブなるものか。

慢と漫と

小我慢の徒は漫然者なり、何物を見るも何事に遇ふも、漫然として評して曰はく、是れ何の奇かあらん、Old old story のみと。彼等は往々にして人智の進歩を拒否し、人間の事は一切反覆に外ならずとす。故に、新思索家の說を聞くや、冷然として曰はく、是れ三百年、若しくは一千年以前に、獨の、佛の、英の、印度の、支那の、日本の、何の某が學說と同根、殊なるは其の用語のみと。彼れ慢者の締の如き頭腦は、新學說の間に呼吸する、精微エーテルの如き新精氣を漏洩す。形貌相似たるの間、徐々之かし

ながら着々進んで休せざるの神あるを察せざるなり。　其の弊や、新現象を見ても刮目せず、注意せず、かるがゆゑに、考査せず、かるがゆゑに、輕侮し、かるがゆゑに、看過し、かるがゆゑに、世に後れ、かるがゆゑに、退歩し、又かるがゆゑに、老朽し了はる。彼の神、儒、佛、耶、をかいなでに見て、其の歸一のみ、其に一大不思議を神とするなり、といふ吾人未だ必ずしも其の非なるを見ず、さはれ、其の此の掻撫説を前提として、一切の教義皆精査するの要なし、と斷言し、悉く差別を度外視し、剰へ、更に歩を進めて、古今の哲學者の努力を嘲り「哲學家は此の到底知るべからざる一不可思議を摸索するの徒、System 又 System、瓦解又瓦解、一々精査するの要あらんや、いづれもウヌボレの無駄骨のみ、古くばアリストートル、プラトー、老、莊、儒、佛、近くばカントや、ヘーゲルや、ショオペンハウエルや、ハルトマンや、同様失敗、異様説明、人間の事は反覆のみ、無限同轍の反覆のみ」といふに至りては、吾人其の説の甚大不合理を認むると同時に、延いて世間を毒すべきを思はずばあらず。　かなしむらくは、今やかくの如きの徒、論壇に、詩壇に、教壇に、社會壇に、又は政治壇に、無きを保せず。　彼の詩文の形を見て、此れ某故人の模倣のみ、といひ、絶えて其の感想の新を讀む能はざるの徒、若しくは今日の新精神を見て、舊歐化熱の再發なり、と看過

し、若しくは今日の新國字論を見て、舊羅馬字會說の再燃とするの徒、いづれも同班の漫然者にあらずや。蓋し、彼等は自家の識量を高う見せんために、漫然他の所爲を輕侮するか、すなはち慢心の然らしむるところ。吾人は其の慢の小なるを憫れみ、又其の無限進歩の妙光を認めずして退歩を自招するの愚を哀しむ。（以上、五月）

詩人と飄逸

我れは詩人なり、と自稱して、放肆みづから可とし、俗間の交際に於て、得々、飄逸を名として濫し、果は世間の禮法を紊るものあらんか、是れ果たして合理なるべきか。

詩人たるの資格は、嚴密にいへば、ひとり作する瞬間にのみ存すべきものなり、若しくは獨坐瞑想、又は閑吟漫歩の間にのみ存すべきなり。其の他の時處に於ては、詩人もまた一箇の俗人のみ、日本國に住まば、日本國民たり、東京市に在らば、東京市人たり、父母に對しては兒たり、妻子に對しては父たり、其の間の談話交際、いづくんぞ些の飄逸をも容さんや。然るにこゝに一詩人あり、彼れ詩人の名を濫用して、妻に對しては夫たるの務を怠り、子に對しては庭訓の任を忘れ、長者に對しては禮を缺き、

正賓に對しては儀を失せんか、誰れかこれを合理の行爲といふ。　眼中一切の差別なきは、大理想に對する其の瞬間の覺悟なるのみ、即ち出世間の覺悟なるのみ、世間に履行すべきものならんや。　世間は世間也、理想は理想也、兩者の別、截然たるを忘るべからず。

世人或は詩人を評して「狂に類す」といふ。　吾人は史的事實に於て、また心理的理論によりて、此の不名譽なる又の名の詩人に附帶して離れざるを認む。　但し、是れ耻づべきの事實なり、眞詩人たらん者、誰れかは此の綽名を除却せんと力めざる。　然るに驚くべきは、古今の詩人中、往々にして此の名に甘ずる者あり、否、間ゝ名譽とする者あり。　すなはちみづから公言して曰はく「予は詩人なり、故に飄逸、狂に類す」と、吾人呆然、之ばらくして長息し、やゝあつて其の人の爲に、其の自尊心薄さを憫れまずんばあらず。

文學者の謙讓

有爲の士は、謙々として足ることを知らざるべきなり。　夫の卑小なる理想を奉じ、其の幾分を成じたるが爲に、我が事はや成りぬ、と安ずるの徒、若しくは自知の明に乏しく、われぼめと自信とを混同して、ひとへに

自家が美と妙とを信じ、唯我獨尊を唱ふるの輩、彼等は謙徳の闕如たる者也。　吾人は深く信ず、人皆謙徳なかるべからざるが中にも、詩文人は殊に謙徳を要す、と、何となれば、詩文人が理想は三世相通の大理想にして、其の大なること、世間人が理想に越ゆる一等なればなり。　たとへ其の作する所、當時の文壇の現況よりいはゞ、或は比較的に傑作なるべしとも、そは只比較的價値あるのみ、無上の大理想を標準とせば、平々凡々たらんのみ、否、自信必ずしも天の聲にあらず、自信して大雄篇となせるものも、時としては平々凡々の作、然らざるも情餘ありて辭足らざるもの、若しくは些瑕滿面の作たるとあり。　若し果たして然らば、かゝる作を傑作と自信し、自賛自負し、世の之れを認めざるを慨せんは、むしろ謙徳の乏しきにあらずや。　最高上の意義にいふ謙讓の徳は、之れが爲大に損せらるゝにあらずや。　自信は自慢にあらず、自尊なり、自敬なり、抱負の大なるなり、然れども自信は謙徳に伴はざるべからず、謙徳なき自信は、俗に謂ふプライドのみ、自信と自慢との間、其の差一髪、謹みても更に愼まざるべけんや。

學者、往々他に對ひて、我が學菲薄、我が才譾劣、若しくは我が著陋俗、我が詠膚淺、といふ、聞く者如何にか之れを解する。　彼れを指して、俗にいふ

謙退の辭をなす者、高慢といはれざらん爲の豫防線を張る者、若しくは交際上手の語、如在なき弁口、うぬぼれを包む鼻先卑下とするか。嗚呼或は然らん、只悉く然らざるのみ。苟も學者の有爲なるは、常に眼中に理想を忘れず、理想は彼等の神也、God 也、佛徒の佛に對して景仰の念禁じ得ざるが如く、基徒の神に對して humble 更に humble なるが如く、學者は其の理想に對して、毎に常に我が卑小にして卑小なるを認む。謙々たらざるを得んや。彼等の謙するは、理想に對して謙するなり、人に對してにはあらず、對話者に對してならんや。所謂理想は無限絶對の極致的文學を指す、古今未曾有の物をいふ。シェークスピア偉なりといへども、詩人の理想たるに叶はず、ギョオテ大なりといへども、詩人が極致とする所にあらず。今人が大理想は過去にあらず、未來にあり、過去にあらず、未來にあり。

反覆す、學者は謙々たるべし、詩人は更に謙々たるべし。詩思欝勃、夢寐恍惚の際、神明來たりて告げて曰く、汝が作絶唱、と、而して世間認めざらんか、憾むものは大詩人にあらじ、況や憤慨するものをや。省みて汝の足らざるを補へ、世間の認めざるは、偶、以て我が反省を促がすの良媒、すなはち我れをして轉歩一階段たらしむるの端にあらずや。よろこぶ

べきなり。然るに認められずして怒る、胸宇何ぞ小なる、思ふに、認められずして怒るの徒は、認められて忽ちよろこぶの徒、バイロンに於て前例炳焉。是れ抱負小なるの徵、憫むべからずとせんや。

天下の絶作は、或意味よりいへば、眞に鬼神を哭かしむるの力あり、批判解釋を俟ちて後に哭かしむるにあらざるなり。自讃自釋して自作の妙を語る勿れ、世の速に認めんを急ぐ勿れ。汝が作に眞個天來の妙あらんか、早晩之れを知るの炯眼あらん、ヲォズヲォスの想の美、誰れかたゞちに之れを認めし。ブラウニングが險晦、たれか速に其の怪謚の間に美を認めし。

時に批評家の資格を持し、他の作物を是非せんはよし、自作を釋せんはいかゞ。如何なる劣作か、作者が釋を添へば、價を加ふること一等ならざらん。商賈が店頭に大告して客を牽くの例を見ずや、古戲作者等が勸懲、勤王を表に唱へて、如何に其の作を塗飾せしかを思へ。若しくは我が劣等の演劇臺帳、そを机上に繙く時は、殆ど讀むに堪へざるものあり、而して劇に觀て其の醜なかば沒す。何が故ぞや。優人の白と科とよく之れを塗飾すればなり。自評は商賈の所爲、新聞紙、雜誌の如き、半商賣的紙面に於ては、一種の方便として之れを恕すべし、文士が清談の

間、誰れか覺醒漢の自評語を容さん。

見ずやシエークスピアの諸傑作を、又見よギヨオテの『ファウスト』を。之れを研究する者幾萬人、而も作家自家の評語は殆ど之れを知るに由なきなり。三百歳前のシエークスピアはさておく、ギヨオテは近世の名家にあらずや。吾人は其の自傳をすら讀むを得たり、其の崇拜者の言をも聽きぬ、而して其の大作『ファウスト』に關する作家の自評は、其の零碎なる斷片だに、只かすかにきくを得るのみ。今の詩人、ギヨオテに耻ぢざるか、シエークスピアに耻ぢざるか。

謙讓の不利

誰れか謙讓は處世の好方便なりといふものぞ。例へば、談論の際などには、謙讓は說者を益せずして、每に敵者を益することと明なる事實なり。不謙者の論ずるや、自家の長は悉く之れを表示し、且甚しく之れを誇張す、其の論の鞏固らしく見らるゝ所以なり。謙者の論は然らず、彼れは常に理想を畏敬す、苟も理想に副はざらんか、敢て自讚するに忍びざるなり、否、回護をだに敢てするに忍びざるなり。即ち敵者の我れを難じて、頻に我が短を數へ來たるや、唯々悉く皆之れを領し、只其の不合理をのみ辨破せんとす、其の論の利ならざる所以なり。吾人は、此の點に於

て、詩文人と世間的論者との差別を見る。　前者の理想は遼遠、後者のは目前、前者の他と文を論ずるや、其の大抵は世間に關せず、すなはち目前に勝たんを要せず、後者の論議するや、利害目前にあり、我が善と信ずる事は、たとへ其の枝葉に些瑕ありとも、大體當代に有益ならんか、詭語若干、豈必ずしも顧るに及ばんや、敵者を論破して全勝を我れに收めざるべからず、假にも敵に利器を假すべけんや。　例へば、政治論者の如きは、特に然らざるを得ざるものとす。　もとより文學の問題にも、多少當世間に關するものあり、かゝる種類の問題は、多少政治問題と趣を一にす、否、尠くとも敎育上の問題、宗敎上の問題と、其の旨同等と見做すを得べし、例へば、新文體論、新文法論、新律語論、新演劇論、脚本論などの如き、いづれ當世間(當文壇)の利害に關する者なり、若し此等問題に對して、人其の新意見を呈出せんか、百艱難を排除しても、之れを實現せんの決意なかるべからず。　但し、前段に謂へる所は、かゝる塲合を指すにあらず、出世間的理想としての詩文、又は自家一身の上に關係する談論なり、例へば他人の我が作を刺りて大拙陋といひ、我が才を嘲りて謭劣といはんの時、時と塲合とによりては、我れ若し理想を畏敬するの念淺からば、彼等刺嘲する輩(やから)をして、慚羞止む能はざらしむるの言、我が口に多々あるな

り、而も之れを洩らさゞるは如何。　自慢、自讃といふ他の評を恐るゝが爲か。　何ぞ然らん。　敵者は其の作を自讃自負し、以て我れを責むる要具となす、measure for measure、five for five、何の憚かこれあらん。　然らば何が爲に憚る。　曰はく、我が毎に景仰する「理想」其の物に耻づるなり、「理想」の思はくを如何。

ミルトンの政論に明を失へる、レッシングの終生論戰せる、ギョオテの自評せざる、テーンの默して辨ぜざる、嗚呼此れも理なるかな、彼れも理なるかな。

强ひて放言の題を求むる勿れ

大言壯語は必ずしも說者を高からしむるものにあらず、大に口あく豕兒の如何に馬鹿げて見ゆるぞ。　蝦蟇の大開口、彼れいたづらに自家の肚裏に物なきを示すに過ぎず。　罵らんと欲せば、大に罵る可なり、人身攻擊はた必ずしも咎むるに及ばざるなり。　只輕々しく罵るの徒、强ひて大言壯語するの徒、腹ふくれざるに辯を好むの徒、楯の兩面を觀ずして匆卒に斷言するの徒、字の儘に一斑を窺うて全豹を評するの徒、嗚呼、彼等は眞摯の徒か。　吾人はかゝる輕薄兒の老朽社會に充滿せるを見

て平然たるを得るも、新代國民中に此の同じ現象のしば〳〵見ゆるに遭ふや、彌勒の世までも澆季の歎の到底盡くる期なからんを歎ず。天眞爛熳はよろこぶべし、直情逕行はよろこぶべし、輕薄と虛誇とは不倶戴天の仇敵にして新代國民の最も忌避すべきものと知らずや。

いづれか罪ある

長論文には Recapitulation と稱するものゝ必要あり、Recapitulation とは、前に評論せるを總括して簡說するの謂なり。こは前の長論文の要旨を明にするを主とするが故に、一々用語例等につきて細說を施さゞる勿論なり、前の詳論の熟讀せられたるを假定すればなり。爰に一批評家あり、些も本論を讀まずして、ひとり Recapitulation のみを走讀し、語の簡なるを咎め、說の盡くさゞるを難じ、論旨紛糾、殆ど解しがたしといふ。前に詳論ありしを知らざればいざ、前に詳論ありしを知り、且我れは之れを讀まずと明言し、而もはしいまゝに誤解と臆測とをなし「此の論紛糾解しがたし」と言ふ。知らず、解しがたきは、讀む者の罪か、下筆者の罪か。

さてまた術語に解を下すべき必要ある者と然らざる者とあり。已に

數年來行はれたるは、場合によりては、解を要せざること間々あり、例へば、化學、數學上の尋常の科語が、數學化學の社會に於て解を要せざるが如く、又所謂通言の、通人社會に於て、解を要せざるが如く、美學上の科語の如きも、美學のやゝ弘通したる社會ょ於ては、(はじめて用ひらるゝもののゝ外は)解を要せざると勿論なり。 若し然らずんば、科語、術語を用ふるの便利はなかば滅せん、蓋し、科語、術語は尋常語と混同せられざらんが爲に用ひらるゝのみにあらず、一目科語たるに心附かしめ、解の附せられざる場合に於ても、特殊の意味あるを讀む者に知らしめ、万一其の意義を解し得ざる場合には、其の道の人につきて解を聞くに便ならしむる者なり。 例へば、類想美などいふ美學上の科語の如きは、數年以前、鷗外漁史がはじめて『しがらみ草紙』に用ひしころにこそ、皆人其の解を聞くことを要しけめ、今日に於ては、總じて美學的知識進みて、かゝりにも美文を論ずらん者は、ハルトマンが美論のカタハシほどは知りたり、すなはち類想若しは個想などいふ科語は、一々解説する要なきものに屬す。 或は讀者のうち之れを解するを難んずるものあらんか、彼れは宜しく其の美學に昏き由を自白し、「乞ふ我が爲に之れを解説せよ」といふべきなり、おのれが知らざるを咎めずして、偏に下筆者の説明無きを責

むるは、やゝ無法に近からずや。

其の他、再讀せば明瞭なるべき論旨を、勝手に走讀して誤解しながら、矛盾撞着のやうに論者を誣ふるは、不深切もまた格外なり。　吾人はかゝる論者に向ッて辨説するの閑暇を有せず。

只一言いふべき事あり、何事にもあれ、やゝ專門めく事柄に對して、是非の評論を下さんとせば、作の專門に關する知識を、多少得たる上のことゝすべし、然らざれば折角の評論も正鵠を外れ、被評者を服するに至らざるべし、假令該被評者の論旨が眞に紛錯せるものなりとも、かゝる批評者に對しては、幾らも辨解の道を見いださん。　多數の俗人がエマルソンを解しがたしといふとも、エマルソンの文章の美は減せず、婦幼が探幽を嘲るとも、探幽が畵の妙は減せざるなり。　吾人は、かくはいへど、敢て我が徒の文章をもて、明晰至極なりとするにはあらず、只專門的論文に於ける明晰と不明晰とは、新聞紙の論説とは異なるがゆゑに、一概に通俗、不通俗をを以て決すべからず、といふのみ。　譬へば、微を觀るに顯微鏡を要し、遠きを見るに望遠鏡を要するが如く、專門的論文を解するには、一通り要具を備へざるべからず、といふのみ。（以上、六月）

國文學の將來（演說の体に倣ふ）

讀者諸君、こゝに一君子人ありとせんに、其の君子たるの實は、如何にして知るを得べきか。　其の現行の美なるは必ずしも其の意の美なるを證せず、其の現意の美なる、また必ずしも其の恒の心の美を證せざるべし。　孔子は曰はく「其の以す所を視、其の由る所を觀、其の安ずる所を察せば、人焉ぞ廋さん」と、然れども所以と所由と所安と、此の三者を知るは甚だ難し、君子人の世に知られざる、宜ならずや。

こゝに絶美なる一君子國あり、吾人は深く其の俗の美なるを信ず、これ其の過去の所以の美なりしを視、其の現在の所以の美なるを視、其の過去の所由の美なりしを觀、其の現在の所由の美なるを觀、又其の安ずる所の、過現共に、純善純美なるを察したればなり。　然り、吾人はよく此の君子國を知る、其の所爲の常に美なるを信ず、さはれ碁布星羅の外邦、彼等はいまだ之れを察せず。　まして知ることをや、信ずることをや。　彼等は多年此の君子國を誤解したり、彼等の此の君子國に臨むや、優者の劣者に對するが如く、長の幼に對するに似たりき。　然るに突如として異大の現象こそ生じたれ、意外なる一大偶會は、彼等をして目を刮せし

めたり。　彼等ははじめて此の君子國の壯擧を見たり、其の所以の壯なるを視たり。　彼等は思へらく、是れ驚くべき武力の國と、又思へらく、其の忠君愛國の念、烈々火の如し、今古空絶、驚くべく怖るべし、と。　然れども彼等の眞に知り得たるは、嚴密にいへば、僅に此の二者のみ、君子國の眞相は未だ曾て知られざるなり。　蓋し彼等は單に武力國としてのみ此の君子國を見るなり、只其の以す所の雄なりしを視るのみ。　いまだ其の所由の美なるを見ず、又其の所安の美を察する能はず、此のゆゑに、彼等の或者は小人の心をもて君子國の心を揣摩し、猜疑忌憚し、曩の輕侮はやがて一變して敵愾となり、嫉妬となり、狐疑となり、恐怖となり、漸く此の君子國の伸張に累せんとす。　然り、曾て君子國を誤解せし彼等は又更に君子國を誤解せんとするなり。　故意の誤解は今論せず、若し彼等の誤解にして全く知らざるに基くとせば、力めて其の無知の惑を攘ひ、此の君子國の實を示すは、吾人が至當の務ならずや。

敢て問ふ、日本の君子國たるの實は、全世界に知られたりや。　彼等は小人の心をもて、日本の心術を推度せざるか。　彼等は征淸の本意を誤解せざるか。　彼等は此の畏敬すべき日本を、一の好林泉と見做さゞるか。

・彼等は日本をもて陽に美術國と稱し、陰に一玩具肆と見做さゞるか

彼等は尙武國と我れをたゝへ、暗に暴虎憑河をもて目せざるか。勇餘ありて智足らざる血氣の壯漢に比せざるか。げにや今回の絕大なる壯擧は、全世界の視聽を聳動せり、彼等の多數は驚歎せり、敬服せり、寒心せり、而も此の壯擧の由ッて來たる所は、いまだ明に知られざるなり。武國としての日本は、今や漸く全世界に知られぬ、文國としての日本は、尙曾て知られざるなり。蓋し、武の功は現行の一分、文の功は現行の一分たると同時に現當諸行爲の源たるもの、人と國とを問はず、其の所由と所安とは、此れに由らずんば知るに由なし。

思ふに、國風の妍媸は、猶個人が性情の美醜のごとし、國風と性情とは、有形の言動にも見はれ、また無形の意欲にも見はる、而して主觀すなはち心內にあらはるゝ事實は本にして、客觀、すなはち心外にあらはるゝは末なり。且や客觀の美は或は偶然にして成ることあり、不易常住の美は常に其の性の美なるに由る。國風若しは國粹は明に國、の、性、なり。此の性をして炳焉たらしむる者は何ぞ。果たしてかゝる者あらんか、之れを掲げて我が國粹を發揚する、我が國人の分ならずや。

夫れ最廣義に謂ふ文學は一國粹の影なり。一國民が思想、意欲、情感の影なり、又其の理想の影なり。其の國民が思想の、剖析せられて現れた

國文學の現當世に對する職分

る、之れを智の文(學說)といひ、其の意欲の見れたる、之れを意の文(敎訓奬誡)といひ、其の情感の畵の如くありのまゝに見れたる、之れを情の文(美文學)といふ。　文學をいと〳〵廣き義に解せば、智の文の代表者は哲學、科學の諸著、意の文のは宗敎、敎育の諸著、第三のは詩歌、小說、戲曲のたぐひ、此の三者の傑作は明に其の國粹の凝り成せる所なり、かるがゆゑに當代にありては、或は一世の豫言者たるべく、或は一世の批評者たるべく、或は一世の解釋者たるべく、隨うて其の進步の緣たるべし、又後世より之れを見れば、過去の國粹(即ち風俗、人情、理想、等)を明說するの史、又外國の讀者に取りては、外に見えぬ內部の美醜、即ち一國人の所由と所安とを語る者なり。　文學の貴重なる所以明ならずや。　ましてや今日行はるゝ文學は、明に現在國粹の影にして、直接又は間接に、常に現行爲の動機となる、或はこれによりて現行爲の所由を說明すべく、或は之れによりて當來の方針を卜すべし。　其の國粹と相因緣する深く、遠く、且大なり。

美文學と國粹との關係

文學の三大別のうち、所謂美文學の領域は尤も大なり。　蓋し、美文學は、情に訴ふるを旨とするが故に、其の讀者に限界なく、又情を抒するを旨とするが故に、其の國粹の天眞の美は、尤もよく此の者のうちに現る、猶

個人の眞性の、其の飾らざる、粧はざる、喜怒哀樂の間に爛熳たるが如し。殊に外國人の心に入り易きものは美文なり、眞の情致の美は普遍平等なるが爲なり。倫理の人に具はらん限は、誰れか忠孝の美に同感せざらん、仁義の德に景仰の感なからん。人に審美の性あらん限は、誰れか風月の美に雅懷を寄せざらん、花鳥に塵俗を忘れざらん。造化の幽玄を歌ひ、人情の微妙を詠ずる作は、千古相通、東西無差別なり。苟も情あらん者は、皆讀みて解するを得べく、解して同情を寄するを得べし。老幼、男女、賢愚、曉昧、學不學を問はざるなり。彼の專ら智に訴ふる學說の、概して俗耳に入り易からざる、又いと妙なる敎誡の、動もすれば差別智に阻めらるゝと、其の差いと大なる者あり。試に思へ、基督の敎、其の旨豈儒佛の旨と大差あらんや。而も我が國人の多數は、之れを邪敎として斥くるに非ずや。又我が儒、佛の旨や、其の善美仰ぐべき者あり、而も基督を信ずるの徒、或は之れを異端として貶斥せんとす。又思へ、學說の弘布し難きを。維新以來、泰西哲學の論は、日に月に盛なるに似たれど、其の專門家以外にして、眞に哲學書を繙くもの、果して幾何ぞ。又能く解し得るもの幾何ぞ。之れに反して、英、佛、獨、魯の詩歌、小說、戲曲のたぐひは、或は英文によりて、或は重譯によりて、如何に廣く玩讀せらる

ゝぞ。　學問無き男女すらも、飜譯又は飜案を經て、幾回か他國の人情に觸れ、知らず〳〵の間、彼方の國粹を呼吸しつゝあるなり。　ましてやみづから意識して彼なたの美文學を讀める者をや。　彼等は之れによりて種々の新感想を得、中にもやゝ聰明なる者は、之によりて彼なたの國粹を觀、すなはち彼なたの所安を察し、彼と我とを比照し、彼と我とを上下し、ひそかに前程をトしつゝあるなり。　讀者諸君は今の詞壇に、カーライル、マコーレー、エマルソン、アルキング、スコット、サッカレー、ヂッケンス、アヂソン、スキフト、ジョンソン、ゴールドスミス、ミルトン、バイロン、シエレー、シエークスピア、テニスン、ヲオヅヲオス等の名の、一日幾十回といはんほどに、目まぐるしく散見するを見て、單へに作文家の誇衒なりとするか、名聞の所爲とするか。　げに作家が名聞虛誇も、或は其の緣由の一なるべし、但し、かゝる名の用ひらるゝを、ひとへにそれが爲と思ふはたがへり。

外國粹の我が國に入れるの證

予は思へらく、かゝる英國美文家の名(又は獨、佛、魯、等の美文家の名)の、しば〳〵讀書界に傳へらるゝは外國粹の我が國に入れるの證也、隱約の間、外國粹が我々同胞を薰化しつゝあるの證、と。　予は此の理の說き易きを信ず、予は維新以後の事件に就きて、又種々の現象を例として、之れを證するの難からざるを信ず。　而してかゝる薰化は、

もとより美文學のみの力にはあらず、其の因由を探るときは、複雜幽遠なるは論無けれど、美文の俗耳に入り易きは、今俗間に知らるゝ名の、哲學、科學の名家よりも、詩人、小說家に多きを見て、ほゞ其の然るを知るを得べし。　且や詩歌小說のたぐひは、尤も同感を牽き易きものなり。　例へば、我が國人にして、最も英國人を惡む者あらば、そは世間(即ち政治界)に立てる人なるべし、最も英國人を愛する者あらば、そは詞壇及び讀書界(即ち出世間)の人なるべし。　何となれば、詞壇及び讀書界の徒は英國人の國粹の美、即ち至醇の情感に觸れたる者、政治界の人は、彼れが現行にのみ接するの徒、差別の現行より見れば、人大かたは大疵小疵あり、平等の情感より見れば、人大かたは醇美なり、愛憎の一ならざる所以なり。

但し、詞壇(出世間)の徒といふとも、世間人として立たん時には、或は彼等英國人(若しくは魯人、若しくは佛人、若しくは獨人)を不倶戴天の敵となすこともあらん、而も其の平等の美は忘れざるなり。　干戈聲收まらんの時、又相和するを得べき所以なり。　尠くとも予輩の經驗によれば、過現の外國人の情操は其の文學にあらはれたり、特に其の醇美なる情操は、其の美文學にあらはれたり。　予輩は之れによりて彼等の性を知れり、又之れによりて彼等の妍媸を知れり、たとへ彼等に非行あるも、そは

其の差別の非行なるを知れり、彼等が平等の情感は、萬靈の長たるに耻ぢざるを信ず。あはれ、かゝる自明の論、今人の耳には異樣の感を與へん、只翻りて維新の前を見よ。我が同胞國人は、英、佛、列國の國人を何とか評せし。異人、夷人の稱は尊稱として與へられたるか。否、國人は彼等を見て、倫理ある動物とせざりしなり。然るに後幾年、國人の彼等に對する情感は俄然として一變せり、國人は俄然として彼等外人を長者視し、師父視し、今回の大事件の成就せしまでは、殆ど崇拜せん傾ありき。

是の局面の變化は、重に何物の力なりしぞ。予は之れをもて、單に社會上、又は政治上の變遷にのみ歸する能はず。思ふに、彼等の所由と所安とを現せる文學、藝術の入來たれるは、此の大變化の因緣にあらずや。

就中、其の美文學の傳播弘布は、彼等の爛熳たる天眞と、我が爛熳たる天眞とが、相觸接せし發端ならずや。美文學は至醇の情感を描きいだせるもの、而してひとへに至醇の情感をもて讀誦せらるべきものなればなり。

然り、彼等の文學、就中、美文學の弘通せざりし間は、吾人は殆ど彼等の眞相を誤解したり、甚しきに至りては、彼等を禽獸と同視したり。而して今にして思へば、彼等は我れよりも優等なりしなり、公平に評すれば、恐

頂に存する故意の誤解と底に存する無知の誤解

らく幾等も優等なりしならん。今や我が大日本の文化は燦として大明の天に中するが如く、尠くとも內面の善美よりいへば、彼等に勝るとも劣るべからず、而も外面の整頓は尙幾步をか彼等に讓らん。さもあれ、此度の大成功は、彼等列國の視聽を聳かし、遽然其の懶眠を攪破したり。吾人を劣等視したる彼等も、初めて我が侮るべからざるを知りたり、彼等は我が國を目して一の怖るべき武力とせり。然り、怖るべしとするが故に、彼等皆猜疑忌憚し、漸く臆測を逞うし、すなはち我が國の眞相を誤解せんとす、猶維新の前に當たりて我が彼れを誤解せしがごとし。かくはいへど、彼等の我れを忌むは、もとより誤解のみに基かざるべし、所謂國際上の政策に因るともあらん、若しくは今こゝにいふを欲せざる、他の種々の原因にも由らん。但し、かゝる故意の誤解は、重に國家の頂(トップ)(政治界)にのみ存する所、國人全體には存せざるものなり。而して頂に存する故意の誤解は、其の政策の一轉すると共に、釋然蕩然たると、殆ど反掌の如く速なるは、吾人の常に聞覩する所なり、然るに底に存する無知の誤解は、其の根固うして且深し、譬へば、我が僻村の民の、今尙外人を忌憚すること、殆ど蛇蝎の如くなるを思ふべし、蓋し、今の諸外人は、はじめて我が武力を知りぬとはいへども、其の我が國を誤解せるは

恐らくは嘗て我れの彼れを誤解せしに勝るものあらん。　彼等の或者は、恐らくは我が國俗をもて、侵掠攻伐の人種とせんか、或は武餘ありて文乏しき國民とせんか、甚しきに至りては、倫理の存在を疑はんか。　我が外部の整頓の、其の內部の美に伴はざるを思はゞ、かゝる不當の誤解あらんも、強ちに咎むるに由なからん、何となれば、彼等をして我が眞相を察せしむるの法、いまだ殆ど備はらざればなり。　強ひて彼等を咎めんか、彼等の或者はいはん、我れは汝が武の偉なるを見つ、其の他は知らざる也。　夫れ武は兇器なり、武力を有する者を指して危險なりとする、人情の自然ならずや。　汝は只武力のみを示しぬ、汝が心術は察するに由なし、汝が所由と所安とは我がいまだ知るを得ざる所なればなり、と。此の言に理あるは否むべからず、國人は如何にして此の反駁に應せんとするぞ。

曩に吾が國人が諸外國を誤解せしや、諸外國は無意識にして種々の方法を講じ、竟に我が誤解を釋きぬ。　而して其の方便中、尤も勢力ありしものは(已に前にいへる如く)最廣義に謂へる文學なりき。　彼等は其の思想の、如何に緻密にして精嚴なるかを示さんとて、科學、哲學、政治、經濟の諸名家を紹介せり。　又其の意欲の、如何に壯偉にして博大なるかを

示さんとて、上は基督の教より、下は諸德行家の訓誡を傳へき。又其の情感の、如何に高雅にして靈妙なるかを示さんとて、古くは希臘のホーマルより、近くは獨、魯の諸作家に至る、諸種の美文學を示したり。もとより此等諸作のうち、今にして之れを見れば、服するに足らざる者夥多あるべく、又彼等の國粹を圓現せざるもの夥多あるべし。而も統括して之れを評せば、彼等の過去はいふに及ばず、現歐米の國粹、理想は圓に現ぜられて餘ありといふべし。若し國文學は當の國粹の影なりとし、其の天職は當の國粹の美を天下に發揮するにありとせば、歐米列國の諸文學は、頗るよく其の天職を盡くし得たるものにあらずや。
さからば吾人が現在の處分は如何。吾人はたゞ外國に向かひて、我が國文學を示す、可ならずや。否、文學を示すにあらずば、日本を知らしむるの道無きなり。好し、我が國文學の粹を拔いて、之れを諸外國に表示すべし。只問ふ、吾人は如何なる作を取りて、之れを現日本の文學なりとし、現日本の國粹なりとし、廣く萬國に公示すべきぞ。然り、孤弱なる鷄林を擁護し、暴慢なる大淸を膺懲し、義名を全世界に轟かし、更に進んで西歐の文明と相馳騁し、東洋の君子國をして、天上天下、千古不動の君子國たらしめんとする現日本、此の大日本の國粹を發揮し、兼ねて其の大

現日本の國粋を發揚するに足る文學ありや

理想を表示するものとして、如何なる作をか海外列國に示さんとする、(文學の義は廣し、今繁雜に流るゝを恐れ、假に美文の上のみをいはん)。單に美文學の上よりいふも、尚三種の大別あり、抒情の美文(即ち詩歌)敍事の美文(即ち小説)劇の美文(即ち脚本)總て詞形を問はざるとし、更に此の別を詳説せば、我が所謂物語、小説、稗史、草雙紙、敍事淨瑠璃はいづれも皆敍事の美文、謠曲、狂言、敍事淨瑠璃、臺帳のたぐひは、多少形式上に不足あるに係らず、我が劇の美文なり。　又短歌、長歌、俳諧發句、抒情淨瑠璃、薩摩琵琶歌、其の他卑歌、俗謠、新體詩の類ひ、若しは華文的隨筆の類ひは、いづれも抒情的美文なるべし。　此の三詩體の極致として、諸君は何物をか呈出せんとする、　吾人が英國の美文を求めしは、此なたも半無意識、彼なたも半無意識、ゆゑに其のはじめに取りしもの、必しも彼方の傑作にはあらず、否、此の六七年このかた、漸く彼方の傑作は知られたり。此は彼れに取りて不利なりしなり、何となれば、英國には仁義忠孝の情操なしといふ、甚だ理(ことわり)なき批評などの行はれしは、彼れが最初示しゝ作の善美恰好ならざりしが故にあらずや。　吾人が今我が美文を示すは、もとより意識して示すなれば、ゆめ／＼かゝる不利を自致すべからず、眞の良好の傑作を取りて、之れを彼れに示さゞるべからず。　諸君は何

物をとりて右の三美文體の極致なりといはんとするぞ。

再び問ふ、吾人は如何なる作を取りて、之れを現日本の文學なりとし、現日本の影なりとし、廣く萬國に公示すべきぞ。 孤弱なる鷄林を擁護し、暴謾なる大淸を膺懲し、義名を全世界に轟かし、更に進んで西歐の文明と相馳騁し、東洋の君子國をして、天上天下、千古不動の大君子國たらしめんとする現日本、此の大日本の國粹を發揮し、兼ねて其の大理想を表示するものとして、如何なる作をか海外列國に示さんとするぞ。

此の問に答ふるに先だちて、吾人はまづ我が國俗の現時の狀態を察せざるべからず、其の智、情、意の、如何なる程度にあるかを察せざるべからず。 蓋し、我が國を稱して君子國といふは、其の先天の固有性をたゝふるのみ、周圍と時勢とは更に性をして化醇せしむ。 我が君子的國俗は曾て其の性を更めざると同時に、每に發暢し、每に化醇す。 現に維新前の日本と征淸後の日本とは甚だ著き逕庭あり。 若し果して然らば、今日の日本國は如何なる精神的狀態にあるぞ。 歐洲列國に比して優劣如何。 語を換へていはんに、我が國人の感想は海外人の感想に比して高きや卑きや。 思想を潮流に喩へんに、我が思潮と彼れが思潮と、其の流れを異にせるか、將た同じ流なるか。 若し同思潮に漂へりとせば、彼

等先じたりや、我れ先じたりや。

まづ彼れが思想界を瞥見して、彼なたの思潮が、今如何なる狀態にあるかを檢せしめよ。

歐洲の思想海は、最近一百年間に於て、前古未曾有の大動搖を經たり。

歐人の四大驚

我が國人のみが近年の大動搖(前古未曾有の開化)に驚愕せりと思ふ勿れ、彼等歐洲人も、所謂學藝復興(リナイサンス)に於て一たび驚き、北米發見に於て再び驚き、佛國革命に於て三たび驚き、つゞいて最近百年間の急灘の如き思想海の潮流に驚歎の聲を絕たざりしなり。彼等は且驚き且悟り、且絕望し且希望し、七顚八起、遂に今日の文化を致せり。

近世歐洲思潮

就中、最近百年の急思潮は、彼なたの思想海を震撼せり、恰も彼の山嶽を顚覆して江河となし、海洋を倒にして平地となせるの概あり。所謂十九世紀の文物制度、即ち現世紀の諸文物は、悉く最近數百年間の產物なり、否、其の最も勢力ある諸特質は、最近百年の所產といはんも、殆ど爭ふこと能はざるべし。

見よ、彼の自由主義や、民權主義や、社會主義や、平民主義や、個人主義や、宇宙主義や、國家主義や、財政の整理や、憲法の確定や、女權論や、勞力者問題や、凡そ政治上、社會上、經濟上にあらはるゝ諸精神は、悉皆當世紀の結果ならずや。若しは學藝にあらはるゝ所を見よ、驚くべき科學上の進

歐洲の十八世紀

社會と個人との軋轢

步、驚くべき哲學上の進步、驚くべき神學上の動搖、驚くべき工藝上の進步、彼の超絕哲學や、經驗說や、審美論や、社會學や、心理學や、進化說や、新器械や、新製造法や、寫實主義や、專美派(アートフオアアートスクール)や、いづれか當世紀の所產にあらざる。 然り、最近一百年は歐洲の全局を一變せる前古空絕の紀元期なり。

此の驚くべき大變動は、そも如何にして起こりしぞ。 思ふに、近世史に通じたる讀者は、此の答を聽くを要せざるべし 彼等は歐洲の十八世紀が、如何に一大革新を促しつゝ有しかを知れるならん、如何に十八世紀の全歐洲が、腐爛の至極に沈滯して百事悉く非なりしか、如何に惡習慣が重疊して社會百般の事に累をなしゝか、政治上の惡習慣が如何に固著して王侯門閥の專橫となりしか、宗敎上の惡因襲が如何に殘敗して僧官等の墮落となりしか、如何に虛儀虛式の盛行して僞善矯飾のよろこばれしか、文學の如何に擬古に泥み、彫蟲をよろこび、塗飾是れ力め、濃厚是れ事とし、ひたすら纖巧にのみ流れたりしか、如何に惡習俗が全權を握りて各個人の志望を拘束せしか、如何に虛謬が跳梁して誠意を抑へしか、如何に人工が跋扈して天然を妨げしか、要するに、不正なる習俗、即ち當世の輿論、輿情と、輿情、習俗に反挑せる正直なる個人が意思と

の間に、如何なる激烈なる軋轢ありしか、而して其の結果は常に個人が失意に終はり、天道是か非かの歎、世を怨み俗を憎むの聲、如何に全歐に充滿せりしか、これらは近世史に通じたる者の、説明を俟たずして知れる所ならん。所詮、歐洲の十八世紀は僞善、矯飾、沒誠實の時世なりき、即ち假面の時代なりき。政治家は、表に公衆の利福を唱へながら、裏には私福是れ求め、僧侶は、陽に天道の崇敬すべきを講じながら、陰には卑しむべき塵欲に耽り、言行背馳、而も恬として耻づる色なかりき、如何に當時の文學の諷刺嘲罵に富めるかを思へ、又如何に諷刺嘲罵を事とせる文學の世に歡迎せられしかを思へ。是れ豈當社會の腐敗せる好證左にあらずや。諷世嘲俗の文學を讀みて、毫も發憤せざる社會は自家を嘲けられて平然たるの社會なり、即ち虚謁に慣れて之れを怪しまざる厚顏の社會なり。彼の十八世紀の名家たるポープを見よ、スヰフトを見よ、若しはボリングブロークを見よ、又は轉じてルーソーを見よ、ヺルテールを見よ、やゝ降りてフヰールヂング、スモーレット、ストルンを見よ、いづれか世を嘲罵し、俗を諷刺せしを以て其の名を一世に博せざりし。之かも彼等の行爲せし跡を見るに、ほとんど一人の爲の、其の言に副へりしものなし。チエストルフヰールドの其の兒に矯飾を庭訓せし

自家を諷刺して恬然たり

を思へ、ルーソー、ポープ、ストルン等の、如何に俳優に似たりしかを思へ、彼等はた假面時代の兒にして、自家を諷刺して恬然たりし者なり。先輩尙然り、其の末流の腐敗は推して知るべきなり。全社會の墮落はます／＼惡習俗をして其の毒を逞うせしめ、たま／＼正人君子あるも、此の惡周圍と戰うて每に敗れ、數奇不幸を歎せざるはなかりき。かゝる惡社會と正しき個人との衝突、並びに其の衝突より生ずる幾多の弊害は、到底看過せらるべきものにあらず、こゝに於てや、十八世紀のはじめより、其の末に至るの間に、激烈なる社會對個人の激論は沸騰せり、即ち「社會罪あるか、個人罪あるか、罪は人にあるか、罪は習俗にあるか」といふ疑問、自然に識者間に囂然たるに至りぬ。まづ英にありては、哲學者ロック夙に政治、及び宗教の弊習を道破し、個人が固有の自由を唱へ、其の弟子シャフツベリー、ボリングブローク等、つゞいて頻に其の説を敷衍し、彼の有力なる自由思索家、トーランド、モルガン、コリンスの徒、半無意識にして他面より之れに聲援し、ポープ、スキフト等の諷刺家はた其の旨意を承けて惡習俗を攻擊せり。

社會對個人の激論

試に英國十八世紀の文學を繙き見よ、其の最も傑出せる諸作家は、いづれも皆聲を揃へて、政治的組織の流弊を攻擊し、敎會及び神學の惡習を非難し、僞善を罵り、謬信を嘲り、不自

然と不道理とを喝破せざるはなし。而して社會の壓制、即ち惡習俗の最も甚しかりし佛國に於ては、此の般の論難も竟に其の極頂に達せり。彼の『萬法精理』に惡制度を說破し"Persian Letters"に惡習慣を罵倒せしモンテスキウ、嘲難家の大王と稱せられて後の大破裂の緒を發きしヴルテールの徒は、孰れもロックを愛讀せし論客にして、明に當社會の勁敵なりき、若しは『民約說』に一世を震蕩し『新エレナ』に鋭く醜俗を諷刺せしルーソー、System de la Nature を著しゝドルバック『精神論』を唱へしエルヹシオス、若しはヂデロー、ダロムベルの徒、其の他所謂「エンサイクロピヂスト」と稱せらるゝの徒は、皆是れ多少「社會對個人」の疑問に對して、新解說を與へんと試みし者なり。若しくは『人權論』を著しゝ英のトマスペイン、若しくは『政治的正義』を著しゝ英のヰリアム、ゴドヰン、其の他枚擧するに遑あらず。蓋し、十八世紀の後半は思索討議の時代なりき「個人に罪あるか、社會に罪あるか」之れを明めんと力めたりし時代也。此の討議思索の結果は所謂人間科學、即ち人間を研究するの學をして驚くべき發達をなさしめたり。心理學、社會學、政治學、經濟學などいふ、總じて新しき學問にして、就中、人間に關する者は、皆此の思索間に芽をいだせり。眞理を追求し、自然の狀態を考察するの傾向は、すな

はち此のときより盛になれり。今日に所謂科學的精神、哲學的精神、人權論、自由論、平等論、自然論、平民主義、個人主義、社會主義、改進主義、信仰の自由、學問の自由、研究の自由などいふ思想は、すべて此の間より生まれいでたり。而して其の結果はすべて社會の惡習俗の非を鳴らし、各個人が薄運の不當背理なるを認定せり。

更に前段にいへるを總括して略說すれば、十八世紀の後半におよび、社會と個人とが軋轢の究極せんとせしや、「社會と個人といづれか罪ある」といふ疑問起こり、自然に討議の時代を釀し、所謂純理論盛行し、其の結果「個人に罪なし、社會に罪あり、人間其の物は本來善美なり」といふ結論生じたり、即ち各個人には罪はなけれど、惡習慣、惡制度、及び之れを代表せる當社會に罪あり、所詮、此の惡制度、惡習慣の行はるゝ間は、個人の幸福は得るに由なし、個人の權利と自由とを伸ぶるに由なし、惡習俗は悉く蕩攘すべし、惡制度は悉く破壞すべし、所詮、大改革は必要なり、といふ結論生じたり。彼の革命の煽動者として知られたるヺルテール及びルーソーの二人が、バスチル破壞前にみまかりながら、共に大革命の方に旦夕に逼れるを豫言して逝りしをもても、此の潮流の轉ゝ急なりしを斷定するに足るなり。

然り、十八世紀の末に於て、歐人は皆現社會の甚だ醜惡なる所以をさとれり、當社會の厭ふべく、憎むべく、嫌ふべく、忌むべきとは殆ど衆目に瞭然たりき。　惰者、怯者は悄然として落胆し、強剛なる者は憤然として慷慨せり、已にして憤慨の甲斐なきをさとれり、彼等は天を怨み、世を怨めり、怨世、憎世、厭世の念は次第に絶望を促したり。　人々皆迷へり、苦惱せり、煩悶せり、狐疑せり、躊躇せり。　進まんか、習俗の壓制の打勝ちがたきを如何せん、停まらんか、此の惡世間に呻吟苦惱するの耐へがたきを如何せん。

就中、最も多感なる青年者流は、此の狂潮の爲に無限の大苦惱を經驗せり。　彼等のやゝ柔性なる者は、現在の世間に絶望せるも、且、深く世を憤りて、憎怨悲憤の念禁じがたしと雖も、到底一個人が微力をもてして、此の擧世的大濁浪の、如何ともしがたきを意識せるが故に、苦惱常人の比にあらず。　彼等は劇(ドラマ)に所謂不能(インカパビリチー)の悲劇(トラジテイ)を實演せし者なり、彼等の尙いまだ世の濁流に觸れざりしや、心淸きこと雪の如く、其の物に觸れて感じ易きこと、はた雪の日に融け易きが如くなりき。　彼等は自家の淸きをもて他の心を忖度し、世は擧げて淸く美なるべしと思ひき。　然るにやゝ長じて世間に觸るれば、濁流又濁流、汚穢又汚穢、前後左右、惡臭紛

々、其の所期にたがふことと萬々なり。　彼等もと多感なるが故に、世の惡を感ずる極めて深く、激し易く、沮し易く、折け易し。　彼等は自制克己の勇なし、所詮、活潑なる生活を送るに適せず、又發憤して勇進するの志氣なし、小心翼々たり、憂心悵々たり。　彼等はもと沈思瞑想の生に叶へるもの、到底濁れる潮流を排して彼岸におよぎこすの健兒にあらず。　されば此の輩の現世に絶望するや、常に世を避けて閑地に退き、自然を友として山水に遊ぶ。　或は詩歌の別天地に、ひとり同感の涙を灑ぎ、或は靈妙なる音樂を聽いて、しばらく塵寰の痛苦を忘る。　或は書に遊び、或は花月に遊ぶ。　要するに、彼等の心は此の現實の天地にあらで、常に理想の天地にあり、即ち出世間の境にあり。　英のクーパルの如き、少時のギョオテの如き、正に此の者流の代表なり。　さもあれ、斯くの如き孱弱の性、いかでか惡社會の狂暴のうちに、長く其の命を保つを得んや。　彼等の世故に疎く俗に迂なるや、單に大世間と衝突するにとゞまらずしてまた毎に其の家庭とも衝突す、蓋し、家庭もまた現世間の一分、すなはち究屈なる一小世間たるに外ならざればなり。　憫れむべし、彼等が狹小なる理想の天地は、たちまち此の小世間とも牴觸す、彼等は父と爭ひ、母と爭ひ、姉妹兄弟と爭ひ、叔伯師友と爭ふ、而して其の結果は彼等を人

間の無宿とす。憫れむべし、多感多恨の彼等は、其の生命とする小さき理想の、無慚や、到る處に粉砕せらるゝを見る。剰へ彼等が唯一の娯樂、自然を友とするの樂しみだに、彼等が世に處するに拙きため、忽ち赤貧といふ魔鬼に襲はれ、一朝忽然として奪ひ去られたるを知る。彼等はもはや世を避けて閑地に退き、風月を愛するの特權をさへ失へり、彼等豈生活するに堪へんや。よしや衣食住に事かゝざるも、其の唯一の安居、理想の天國の壞れたるからは、彼等の生命の源は涸れたり、いかで長く世に存ふるを得んや。彼等は自殺の必要を念ふ、自殺の已みがたきを信ずるに至る。悲しむべきかな。嗚呼、かくの如くにして英のクーパルも自殺を念ひ、かくの如くにして獨のギョオテも自盡を念ひき。之れを世に「エルテリズム」と稱す。

而して此の悲慘なる潮流は正しく前世紀の末に於て、全歐洲を横斷して流れしなり、之れを主觀詩人的思潮とす。

さもあれ此の潮流は、自然に二派に分脈して、忽ち二道となりて流れたり、即ち此の詩人的潮流に添うて他の哲學的潮流ありき、そは、理想の別天地に、此の現身の安宅を求めて、現世の穢濁を避けたりし點は、頗る前にいへる主觀詩人的思潮に似たれど、前者の感情に委ねたるとたがひ

て、專ら思索力に其の身を委托し、專心一意、天地人三才の講究に從事し、超前として學理の別乾坤に遊び、一は以て現世間の痛苦を忘れ、一は以て人間の究竟的運命を覺悟せんとせり。此れはた其のはじめは、動もすれば退轉して其の女々しき傍潮に混流せんとせしが、流石に其の依賴する所、情にあらずして智にありしが爲に、疑は却りて信を生じ、みづから自暴自棄の非を悟りて、多くは安立の彼岸に達せり。之れを超絶哲學の潮流とす、又客觀詩人的思潮とし、若しは大なる主觀詩人的思潮とす。此の思潮と、エルテリズムと下に語らんとする「ローマンチシズム」の思潮とは、因となり、果となり、互に密接なる關係あるゆゑ、今引き離して此の思潮のみの例は擧げがたきも、假に彼れ此れを混同して例を擧ぐれば、彼のヘルデルの如き、ギヨオテの如き、シルレルの如き、ヲルツヲルスの如き、近くばテニスンの如き、ブラウニングの如き、アーノルドの如き、スヰンボルンの如き、モオリスの如き、若しくはフィヒテ、シエリング、ヘーゲル、ショオペンハウエル、ハルトマンの如き、多少此の流に浴したるもの也。彼の宇宙文學論や、專美派 (art for art school) や、神秘主義や、萬有神敎論や、厭世的哲學や、世界觀といふ觀念や、理想といふ觀念や、其の實は必しも新奇ならず、其の名必しも創新ならずと雖も、其の全歐

回顧的思潮、ローマンチシズム

に瀰漫せしは、蓋し、此の思潮の力なりとす。

此の時に當たりや、着實にして温和なる者は、半無意識にして思へらく、已みなん、已みなん、天なり、命なり、進まば破壞あらんのみ、停らば自殺あらんのみ、と。　又同時に半無意識にして思へらく、政治、社會の上に改革を實行する能はずんば、せめても思想界の改革を圖らん、現世間のみを世間なりと信じて今の習慣にのみ跼蹐せんは、蓋し、眼界の狹きものにあらずや。　現在の社會穢しとも、一は以て十を推す可らず、過去の世間は如何なりし、萬一過去の世間にして善美愛すべきものなりきとせんか、當來の世間の善美、豈必しも期しがたからんや。　まづ吾人をして過去を檢せしめよ、遽に人生に絕望せんは、大早計の譏をまぬがれざらん、と。　もとより此等のともがら、はじめより斯くの如く自識し、さて過去を檢せしにはあらざりしが、兎に角隱然たる厭世の魔風は、世の多感兒の多數を驅りて、回顧の潮流に乘せしめたり。　是れ英に於て、獨に於て、はた佛に於て、所謂「ローマンチシズム」の勃興せし所以也。　ローマンチシズムとは、後に種々に變態せしため、一定の解釋は附しがたきも、其の當初の本質よりいへば、排擬古主義、若しくは文學的自由主義とも名づくべきものなり、即ち十八世紀の陳腐爛熟なる擬古的、文學に反動し

て起こりたる新文學者の主義にして、其の老朽文學を喝破せし勢ひは、彼の政治的革命家の熱衷に劣らず。　蓋し、文學上の虚儀式に對する彼等の主義は、幾段か激烈なる桂園派の主義也。　彼等は精神上、形式上、共に太古文學に倣ふの非を鳴らし、盛に中古文學の質撲をたゝへ、彼のありのまゝに至情を叙せる中古文學の天眞を激賞し、なべての文學的慣例、あらゆる詩文上の格式を罵倒し、只感ずるまゝ、思ふまゝを、自由に眞實に叙寫すべしと唱へき。　是れはたゞ實に、或意味よりいへば、今の所謂寫實主義、及び自然主義の先驅なりき。　獨にありては、早くヘルデル、ギヨオテの行爲に其の影見え、シユレーゲル兄弟、チーク、ノーフアリス等出づるに及びて其の全盛の域に達せり。　さてまた英に在りては、多く論ずることをせずしてクーパル之れを導き、多く論辨してソウシー之れをひきゐ、ムーア、ヲルヅヲルス、コールリツジ等、皆多少之れを帮け、ヲルタル、スコツトに至りては、其のやゝ沈澱せる情態、即ち文學的自由主義の一變して純然たる文學的回顧主義となり果てたる情態を代表す。
按ふに、此等文學者の多數は、はじめ脱兎の如く、終は處女の如き革命家者流也。　彼等はもと此の現世間に平なる能はで且らく過去の世を回顧せりしなれば、早晩現世間に復歸すべき筈なるを、いつしか、回顧熱の

奴隷となりて、ひたすら中古期若しくは他の過去の復寫にのみ從事し、例へば、ヲルタル、スコットの如く、殆ど往昔に心醉して空しく封建の舊夢のみを語れり。是れ玄かしながら勢の止む能はざりし所ならん。彼等は現世間の墮落と腐敗とを諦見するの沈勇なく、又之れを改革するの力量なかりしかば、半無意識にして退歩姑息し、過去に安立の居を求めしなりけり。

因に曰ふ、同じくローマンチシズムと呼ぶと雖も、同時に獨逸に起こりしもの、及び後にユーゴーに先導せられて、佛の文壇に起こりしものは、幾分か結果を異にしたり、英のローマンチシズムは自由にはじまりて保守に終はりたりしが、獨のは化して愛國主義、國粹主義となり、佛蘭西のはやがて極端に走りて甚しき放縱に終はりしの觀あり、蓋し是れ國人性の然らしめし所ならんか。すなはち彼等は文學上の大自由を唱へて竟に大蕪雜の文學を生みだせり、こは三國相通の弊なりしが、就中、佛國に甚し、然り滅、法破格の詩文はローマンチシズムの結果として普く文壇に瀰漫したりき。是れ後に折衷主義、即ち科學的文學主義が彼のバルザック、サーンブーヴ、コント、テーン等に導かれて此の唯情主義、桂園派の所謂「誠主義」の一層大げさなるものに反動し、更に學理を根據として新格式を定めんと試むるに至りし所以なり。

ヱルテリズムとローマンチシズムと、此の停。退。の二潮流は、其の名目の上よりいへば、重に文壇のものたるに似たれど、其の實當代の普遍的大潮流にして、苟も情感を欠かざるの徒は、知らず〳〵の間、多少此の流に漂はざるはなかりき。　尋常人にして停流に漂へるは、只徒に女々しく泣き、又退流に漂へるは、恍然過去を回顧して、暫らく現在の汚穢を忘れ、惘々然として一時を樂めり。　此れらは温和性の徒にあらずば愼嚴着實の徒、さからざれば柔弱無氣力のともがらなりき。　前者の最美なるものは、譬へば『ハムレツト』中のホラシオの如く、後者の尤なる者は頗るハムレツト太子に似たり。　ホラシオは温厚なれども、奮つて救世の任に當たる大改革家的狂憤なく、ハムレツトは多感多才なれども、ひとり徒に懊惱するのみ、蹶然として直往し、猛然として勇進するの大我慢なく、空しく大打撃の好機をして、幾回か目前に逸し去らしむ。　然るにこゝに他の一人あり、其の名をレアルチーズといふ。　彼れや多血多感の肉塊男兒、客氣の權化、目は只脚下にあり、思慮前後に及ばず。　激しては水火を避けず、怒りては暴憑を辭せず、愚狂といはゞ、是れ愚狂の徒、向ふ見ずといはゞ、是れ向ふ見ずの驕兒、年少氣鋭、片時も屈辱を忍ぶ能はず。當時實にかくの如き徒ありき。　此れを前の柔なる性に對して剛なる

性と名づけ、此の潮流に漂へるを名づけて、思想の進潮に漂へりしものとす、すなはち憎世・怨世の餘り絕望狂憤して突飛猛進せんと試みし徒なり。是れ實に近世大革命の爆裂に最初の道火(みちび)を加へしもの、政治上に於ては彼の佛の San Culott、若しくは後のジャコバン、山嶽、英の文壇に例を求めば、壯年のソウシー、コールリッジ、ヲルヅヲルス、若しくはバルンス、若しくはバイロン、若しくは彼の理想詩人、蜀魂の如く叫びしポルシー、シエレー。

此の三大潮流は日に月に相激して、やがて全歐を震ふ怒濤となりぬ。社會は遂に敗北せり、惡世間は壞れたり、惡習俗、惡慣例、惡格式、惡制度、其の他一切の惡差別、一時に地を掃つて蕩然たりき。個人は全勝を得たり、平等主義は凱歌を奏したり、社會は無差別の社會となりぬ。貴賤平等、男女平等、四海平等、詩文平等、一切平等、平等々々々々。天下到る處、平等の呼ばひをきかざるはなかりき。あはれ、此の絕對的無差別、此の絕對的平等、あはれ、是れ健全なる思潮か。

按ずるに、所謂平等主義は甚しき矛盾の僻說なりき、所謂平等主義の、其の平等といふ假面の底に、甚しき差別主義を潛ませしは、殆ど革命前の諸制度が、平等の習慣といふ名義の下に、門閥階級の差別をたてゝ、ひと

へに或種族をのみ利益せしに似たり。　後者は上流の爲に私し、前者は萬人の爲に私せり。　萬人の爲に私せりとは如何。　他なし、個人がおの〳〵所謂平等を名義として、私意私情をほしい儘にし、互ひに此の大世界を我れ一人の有の如く思ひ、惡社會といふ當の敵を制し得たるや否や、忽ち其の本相を現し、相衝突し、相呑噬し、我と我と私と私と、個人と個人と、更に激烈なる鬪爭を始めしをいふ。　すなはち所謂平等主義は、俄然として覆面を脱し、我れはまとは個人主義ぞと名宜るよと見る間(ま)に、化して主我となり、利己となり、獅子の如く吼え、虎の如く荒れ、遂に一個人と化して躍りいでき。　大ナポレオン是れなり。　小ナポレオン是れなり。　否、今の所謂政治壇の名流は、いづれか此の怪(ばけもの)の血統にあらざる。

嗚呼、所謂平等主義は遂に勝ちぬ、然り、個人主義を包藏せし假面的平等は勝ちたりと雖も、其の假面の落ちしと共に、第二の慘劇ははじまれり、個人と個人とが呑噬せり。　彼等は門閥習慣によりて建てられたる貴族的差別主義の邪曲を看破し、首尾よく其の惡差別を破壞し了れり、さもあれ平等を名とせし個人主義は、根底に甚しき差別を寓せしゆゑに、矛盾は忽ちに著明となり、一大軋轢はこゝに起これり。　見ずや、佛國革命後の全歐の狂浪怒濤を。　無慚又無慚、慘劇又慘劇。　万國公法、何かあ

らん、倫理道德、何かあらん、唯利、唯名、唯金、唯慾、あはれ、此の濁潮は、今尚蕩然たる能はざる也。

而して此の絶對的平等主義、又の名、個人主義の獘害は、單に政治上、社交上にのみとゞまらざりしなり、學問もこれが爲に獨斷に流れんとし、信仰も之れが爲に地を拂はんとし、文學も之れが爲に破格無法、浮泛猥雜なるものとならんとせり、是れ豈第二の反動を招致せずして止まんや。果せるかな、第二の反動は起こりたり。新差別主義は此の絶對的平等を調理安排せんと試みたり。同時に前にいへる停退の二潮流も漸く本流に戻り來たりぬ。超絶哲學の大系統は頻々相ついで倒れたり、科學は急流の如く進み來たれり。進化論は暗に人間を絶望に救ひ、經驗說は大に着實の思潮を注ぎ、空理漸く排斥せられ、實驗あらためて重せられ、差別々々の呼ばひ、四方八面に轟きたり。政治家も曰はく「時、處、人」と、社交家も曰はく「時、處、人」と、學者も曰はく「人種、周圍、時勢」と、是れ豈差別を認めたるにあらずや。又曰はく國家主義と、又曰はく國粹と、又曰はく秩序と、又曰はく實際と、又曰はく現實と、又曰はく秩序兼改進と、又曰はく理論兼實際と、又曰はく國家兼個人と、又曰はく宇宙主義兼國粹主義と、又曰はく現實兼理想と、又曰はく詞形兼感想と、又曰はく信仰兼道

理と、又曰はく實驗兼純理と、其の他兼字を脱しては論ずる能はざるもの、今や幾何といふ數を知らず。是れはそも如何の現象ぞや。畢竟ずるに、泰西今日の思想は、平等兼差別の矛盾的潮流に漂ひつゝあるなり。曩には惡差別を打破して平等に開き、更にまた差別に戻り來たり、此新差別と平等との間に圓滿の調和を試みつゝあるなり、何となれば、平等眞に尊ぶべく、差別また尊ぶべく、決して偏棄する能はざればなり。是れを歐米現在の思潮なりとす。且吾人が常に毎に彼なたの文學的作物の上に陰顯しつゝあるを認むる所なり。

いでや、此の思想の潮流、是れを我が現在の思潮に比せば如何。讀者諸君、諸君は此の比較を聽くことを要するか。諸君は、上來叙説せる所によりて、既によく二者の類似せるを認めざるか。我が明治の思潮が、種々の緊要なる點に於て、泰西最近の思潮に接し、殆ど合流せんとせるを認めざるか。予はくだ〳〵しく絮説せざるべし、只大概を諷示せしめよ。例へば、我が維新の大革命は、暗に彼なたの大革命と呼應し、我が所謂歐化熱は、暗に彼なたの平等熱に因縁す。又は彼の國粹論や、國家的觀念論や、古文學、元祿文學の復興や、國文法論や、佛教哲學の流行や、東洋美術論や、支那哲學の研究や、皆是れ我が先覺の士が、似て非なる

歐洲の近世思潮と我が近世思潮との比較

彼れは醇精我れは粗雜

平等の舊夢より醒めて、再び新差別に戻り來り、更に差別兼平等の彼岸に船を進めんとするの呼渡聲にあらずや。予は、此の限ある一論文の中に、我が複雜なる思想海の千波萬波を狀し、其の起伏の順序を叙し、仔細に評論するの餘綽を有せず、はた一々に例證して、諸君に示すことの要なきを感ず。　何となれば、諸君の聰明なる、只少しく潛思せば、予が言ふ所の欺むかざるをば、前後左右、到る處に見いだすべければ也、之れを要するに、我が現在の思潮は、已に明に泰西十九世紀の潮流に合せり、彼なたの思想海の千波萬波は、こゝにも浩蕩として起伏するなり。　恐らくは、速度の上よりいはゞ、我が思想の潮流は、尙いまだ彼れのとひしきこと能はざらん、恐らくは彼れに後るゝこと數段ならん、而も彼れの行くかたは、明に我れの行くかたにして、彼れに澎湃たる雄浪雌浪は、今や悉く我れにも及びて、相拍ち相激して轇轕たり。　明言すれば、今の泰西の思潮と我が明治の思潮とは、概括して大體の上よりいへば、其の內包も、其の方向も、また其の性質をも一にせるなり。　若し歷然たる差異ありとせば、そは度と量との上にあらん。　度の差とは何をかいふ。　第一に先後の度合をいはゞ、彼れは已に十里程に進み、我れは尙五里程にあり、次に粗密の度をいはゞ、彼れは稍〻醇精に近づき、我れは尙粗雜にさ

要素の分量の多きことは我れ彼れに優る

まよふ。例へば、商工業の進歩、若しは學問藝術の發達等に就きて見よ、吾人は遺憾ながら、我が今日の思想の度の、彼れのに劣れるを認めざるを得ず。之れを度の相違とす。さて所謂量の相違とは何ぞ。こゝに量といふは、單に分量の謂にはあらず、要素の分量の多寡をいふなり。予は前に、我れと彼れと、大體の上よりいへば、其の質も殆ど相同じく、其の内包はた相敵すといへりき、そは蓋しひとへに泰西十九世紀の思潮のみを標準とし、それに類同せる點のみに就きて、我が現思潮を概評せるなり、いまだ悉したる説にあらず。我が思潮の全體につきていふときは、予は斷じていはんとす、我が明治の思潮は泰西現今の思潮に比べて、先後精粗の度合に於ては、遺憾ながら劣ること數等なれども、要素の分量の多きことに於ては、我れ彼れに勝る一等なり、と。委しくいへば、我が今日の思潮の要素は、明に二大思潮より成れるものなり、泰西十九世紀の思想の要素が殆ど悉く入り來たれると同時に、東洋固有の諸要素も、方に新生氣を得て活動しつゝあり。日本廿六世紀的思潮は、曾て泰西に見ることなうして、獨りこゝにのみ見る所のものなり。すなはち泰西十九世紀の思潮としては、先後粗密の度合に於て、我れ彼れに後るゝこと數段なる代りに、別に日本廿六世紀的思潮といふ一種特得の

要素ありて、我が思潮の量分を加ふ、すなはち要素の分量に於ては、我れは彼れに優ると一等といはんも、強ちに謂はれなき説にあらじ。　見よや、東洋の特殊の開化は、彼れのいまだ領解し得ざる所、すなはち東洋の文明の史は、彼れのおぼろげに探り得たるもいまだ知悉せざる所にあらずや。　ペルシア、印度の史は彼れ已に探ぐり得たり、東洋最古の支那帝國、東洋最有爲の日本帝國、此の二大國の古今につきては、彼等如何に知ることの淺きぞ。　彼等は支那の今を知るも、支那のいにしへを知らざるなり、我が日本國の皮膚を知るも、いまだ其の神を察せざるなり。されば見よ、東洋特別の人情風俗は、彼れの頻に知らんと欲して、今尚究め得ざる所にあらずや。　比較宗教學や、人種學や、博言學や、社會學や、凡そ人間に關する科學は、いづれも東洋の方角に向ッて、頻に其の視線を注ぎつゝあれども、今尚其の効果を收め得ざるは是れ果して何の故ぞ。東洋的知識の缺乏せるに因らずや。　其の他、東洋の特殊の哲學、若しは東洋の特殊の美術、若しは東洋の特殊の文學、制度や、習慣や、遊戯や、技術や、皆是れ彼れが爲の他山の石、彼れの常に得んと欲して、尚いまだ得ざる所、而して我れの已に得たる所、彼れには缺けたる所、我れには備はれる所にあらずや。　就中、我が日本帝國特得の美德、此の烈々火の如き勤

王の至誠、此の烈々火の如き愛國の情操、此の烈々火の如き仁義禮智忠信孝悌の念、此の一種不抜の情操、尠くとも現歐洲の實際に於ては、決して見いだすこと能はざるべき前古比類なき道德的理想は、彼れ歐洲列國の未だ曾て有せざる異原素にあらずや。　若しはまた、我が高雅瀟洒、清淡幽遠なる山水畵、若しは我が優美閑雅、簡淨にして洒脫なる詩歌文章、何ぞ彼れが妖艶濃厚と相異なるの甚しき、何ぞ彼れが精刻緻密なると相そむくの著き。　彼れも佳也、我れも佳也、相照らし相緻へ、相補ひ相助けば、佳更に佳なるべき也。　而して彼れ泰西列國の思想界は、いまだ此の二者を併せ有するに至らずして、我れは已に二者を兼ねたり、たとへ度に於ては劣る所あるも、量に於ては我れ彼れに勝るといふ、豈國自慢の虚誇のみならんや。　予は斷言す、我が明治の思潮は、外に比類なき濃き流也と、東洋廿六世紀の大思潮と、泰西十九世紀の大思潮とを併せたれば也。　度に於て彼れに劣るの故に、遽に落胆し沮喪する勿れ、量に於て我れ彼れを凌ぐ。　一蹶して彼れに駕する、豈必しも期し難からんや。　猛進せよ、彼岸は目前にあり、彼岸は咫尺にあり。

然れども、讀者諸君よ、いまだ輕々しく滿足する勿れ。　我が明治の思潮は、甚だ濃厚なるがゆゑに甚だ複雜なり、甚だ複雜なるがゆゑに甚だ紛

我が思潮は濃厚、故に混濁

錯せり、甚だ紛錯せるが故に、尙頗る混沌たり。見よ、此の東西大調和の古今未曾有の大紀元の岸頭に立ちながらも、今尙依然として維新前の思想に彷徨するものあり、攘夷鎖港の舊夢尙いまだ醒めざるものあり、歐化熱の餘炎尙いまだ去らずして、惡平等の囈語を口走るものあり、無差別に泰西の思想を輸入して、十八世紀の英佛人と同感するものあり、ローマンチシズムの舊窠に跼蹐するものあり、ヱルテリズムに呻吟するものあり、破壞主義、厭世主義に沈湎して、前途の妙光を認めざるものあり、支那哲學に精通しながら、之れを調理するの腕力なく、徒に至寶をいだきて、名聞の巷に彷徨するものあれば、空しく過去を回顧する古學者となりて、新思潮の澎湃たるを知らざるものあり。要するに、我が現時の思潮は、濃厚なるが爲に混濁をまぬかれず、すなはち濁りたる思潮也。東洋の思潮と泰西思潮とが、已に合流せることは事實なれども、二者尙相激しつゝあるなり、調和の必要は認められながらも調和の實はいまだ擧がらざるなり。水先案內は聲を揃へて、彼岸々々とよばふと雖も、舟子等互ひに相爭ひ、船これが爲に進まざるの概あり。蓋し、我が現在の地位は、最も多望多祥なると同時に、また最もおぼつかなき境遇なり。何が故ぞや。若し此の好機を逸せしむるときは、啻に度に於て

のみならず、量に於てまた泰西に劣らんとするの虞あれば也。學問藝術の上のみよりいふも、如何に泰西の專門家は孜々營々として東洋の學術を研鑽しつゝあるぞ。印度哲學の研究の、今如何に泰西學者間に盛なるぞ。日本美術の賞鑑の、今如何にかなたの士人間に盛なるぞ。支那文學、日本文學の翻譯の、如何に盛に行はるゝぞ、諸君は日本人種論の已に屢ゝ泰西人の口に上れるを知るか、比較宗教學の步武の駸々として進みて、我が神道も、佛教も、次第に論題に入りつゝあるを知るか、古事記、萬葉、源語、等はいふに及ばず、近世文學の諸作すらも、漸く翻譯せられ、對照せられ、玩味せられ、咀嚼せられ、品隲批判せられんとするを知るか。嗚呼、吾人は長く東洋的知識の獨占に安ずる能はざるべし、彼の泰西の大思潮は、日ならずして、東洋の思潮を併せんとする也。思ふに、十九世紀は、知識傳播の神速なる點に於ては、眞に前古未曾有の時也。吾人が僅々三十年にして泰西の文明を會得したるが如く、彼等もまた十數年をいでずして、東洋の開化を領解し盡くしぬべし、讀者よ、就中專ら國文學、古學學を研究する青年の讀者よ、諸君は最近數年間に於ける古文學思想の傳播に驚かざるか。印刷の便利と、教授法の發達と、研究者の熱心及び敏捷とが、知識の傳播を速かならしむるの度驚くべきかな。

去年までは『萬葉』の何たるをも知らざりし輩の、けふは揚々として「萬葉論」と題して、滔々數萬言を陳ぬるを見ざるか。　去年までは直譯の文章の外に、一句をもならぶる能はざりし者が、ことしは頻に國文法を論じて、手爾葉、係結を是非するを見ざるか。　去年までは國學者の專有なりし古文學も、ことしは文壇の共有物となり、ようせずば後進の研究者の爲に先進の專門家の凌がれんとするを見ざるか。　元より其の間に粗密の大差あり、後進は粗にして先進は密也、前者は一をもて十を推さんとす、故に其の論に粗漏あり、後者は十によりて十を知り、百によりて、百を知る、此の故に確實也。　然れども此の活動なき確實能く長く他の精進する粗漏に打克つを得べきか。　予は十餘年を俟たずして、後の粗漏なる精進者の、前の確實なる停滯者を凌ぎ、其の確實を奪ふと同時に、理論の精到と周密とを兼ね具ふるに至らんを恐る。　思ふに、かくの如きのこと、之れを大にしては、東西兩思想界の間にもあらぬか。　泰西學者の休せざる精進は(我れ若し姑息因循せば)遠からずして我れを凌ぎ、當來廿世紀の思想海に於て、曩には頗る多望なりし、我が明治の思潮をして、最も淺ましき、最も後れたる、最もいふがひなき、最も望なき思潮たらしむるの恐れなきか。　度に於ても、量に於ても、勝を制せらるゝの恐れ

なきか。　讀者よ、諸君若し我が思想界の現狀を精撿し來たらば、此の杞憂めく恐れの、悉く杞憂のみにあらざるを感ぜん。　蓋し、我が國文學界、博學達識の士乏しからざるべく、先見の明ある士も尠からざるべし、而も船の進められんとする港口に於て、舟子互ひに相牴牾し、相爭論するの觀はなきか。　かなたに進航の必要を大呼する楫取あれども、こなたに投錨を主張する舟子あり、高く檣頭によぢのぼりて彼岸を望み、順風の到るをよばふものあれども、檣下に懶眠を貪る者あり、甲は將來の港灣を談じ、乙は過ぎにし停泊の夢を語る。　あはれ、艫を進むるの機乏しいかな。

暗黑面を見れば、實に斯くの如し、されど飜りて光明の方面を見れば、最も多望なるは現在の日本なり。　我が思想界は、最近百年間に於ける最も進步せる思想の精髓を蒐め、加ふるに英氣鬱勃たる日出帝國の志氣を領し、東西兩世界の智識を兼ね備へて、將に大進步の途に上らんとす。

位地と境遇との上より見て、東西列國のうち、いづれの國か、最も東西の思想を折衷して圓滿の調和を成就するに適するかといはゞ、予は斷じていはんとす、我が大日本國にまさるものなし、と。　彼の泰西新思想の精髓は、我が己に領し得たる所にして、我が特殊の東洋思想は、我が固

より有する所、只精進して休することなく、此の二大思潮を調和して一大新思潮となし、之れを其の言にあらはし、之れを其の功にあらはし、之れを其の德に現ずるを得ば、泰西の文明何かあらん、未來に於ける世界的文明の指導者は、我が日出帝國を除いて他に求むること能はざるべし。　然れども、嗚呼、然れども、こは只吾人の希望なるのみ、然り、いまだ絕えて實現し得ざる吾人が胸中の希望なるのみ、何となれば、かゝる偉大なる希望ありといふことは、爭ふべからざる事實なれども、我が現在の言行云爲はいまだ嘗てかゝる大希望あることを標示せざればなり。

夫れ言ふは易うして行ふは難し、此の故に、言まづ立ちて、而して後に功立ち、德立つ。　文學は一國民が感想意欲の影、すなはち其の理想の影、一言をもて之れを蔽へば、文學は國民の言也、當代の聲也。　言すらいまだ立たざらんか、其の國の功德いまだ容易に期すべからざる也。　然るに我が國の現狀は如何。讀者よ、諸君は諸君の大希望に副ふべき現日本の聲ありと信ずるか。　孤弱なる鷄林を擁護し、暴慢なる大淸を膺懲し、義名を全世界に轟かし、更に進んで東西の大思想を調和し、率先して未來の文化を指導し、東洋唯一の君子國をして、天上天下、千古不動の大君子國たらしめんとする現日本、此の大日本の國粹を發揮し、兼ねて大理想

を表示すべき好恰の聲(文學)ありとするか。　諸君は如何なる文學を取りてか、是れ吾人の理想の影なり、現日本の聲なりと稱し、海外列國に示さんとするぞ。

諸君は如何なる文學を取りて、現日本の思想の影なりといはんとするぞ、我が國古來、神、儒、佛の鴻學夥多ありと雖も、彼等が嘗て道破せし所は、移して以て今日の思想の影とするに足るか。　諸君は如何なる文學を取りて、現日本の意欲の影なりといはんとするぞ。　孔、老、莊、佛を祖述したる過去の著述、若しは神道の諸舊說は、今日の理想の影たるに足るか。

諸君は如何なる文學を取りて、現日本の情感の影なりといはんとするぞ、叙情詩の標本として如何なる作を、叙事詩の標本として如何なる作を、劇詩の標本として如何なる作を、海外列國に示さんとするぞ。　萬葉、古今、以下、三十一字の名作、妙はすなはち妙なりと雖も、十九世紀兼廿六世紀の偉大なる胸懷を代表するに足るか。　式部や、近松や、馬琴や、これを過去の作家としては、頗る世に誇るに足るべしと雖も、東西最近の兩大思潮を融會し、進んで全世界に師たらんとする現大日本の叙事詩たるに叶ふか。　若しは淨瑠璃や、臺帳や、近時の脚本や、此等我が希望に副へるの作か、文學の最上乘なる劇詩、廿六世紀の劇詩たるに足るか。　諸

君は人丸、赤人等を擧げて、十九世紀の泰西抒情詩人に敵せしめんとするか、西行高しといへども、芭蕉玄なりといへども、我が絕大なる新理想の代表たるに足るか、式部いみじと雖も、平安の社會を代表するに過ぎず、作の技倆に於ても、いまだエリオットを凌ぐに足らず、オウスチン、スタエルを凌ぐに足らず。近松が戲曲、馬琴が稗史、妙は頗る妙なりと雖も、共に是れ舊理想の影、單に美文たるの品位よりいふも、近松はボーモント、フレッチャル、マッシンジャル、フォード等の亞流、馬琴はスコット、デューマ等の血脈、已に現日本の美文たるに叶はず、豈新理想の影たるに堪へんや。維新以降、才子雲の如く起こり、著作萬篇、千紅萬紫、絢爛陸離、光彩眼を奪ふ。諸君は此等新著作のうちに、現日本の影を認め得たるか、否、現日本の大希望の影、大理想の影を認め得たるか。嗚呼、諸君にして、其希望する所卑小ならざる限は、諸君もまた長大息して、予と共に、否と答へざるを得ざるべし。然り、嚴密にいふときは、今日我が國には眞正の國文學なし、今日最も重ぜらるゝは、奈良、平安以降、德川全盛期の文學ならずや。吾人は口を開きて、我が國文學の標本を語る每に、必ずまづ源氏物語、枕草子を擧げ、萬葉、古今を稱し、やうやく降りては、近松、西鶴、芭蕉、馬琴、等を粹とするにあらずや、是れ豈過去の聲をあがめて我が聲とな

祖先の功を數へて現身の粧飾とするに近し

すに近からずや、祖先の功を數へて、現身の粧飾とするに近からずや。嗚呼今の我れに聲なきか、世界に誇示すべき情感なきか、何ぞ只管に過去のみを回顧し、過去の情感を推重するの甚しき。否々、世界に誇示すべき情感なきにあらず、大なる理想なきにあらず、只之れを表するの聲なきのみ、眞正の文學なきのみ。方今我國の文學は、昌盛の域に達したるに似たれど、憾むらくは混沌たる日本の影あるのみにて、大ならんとする日本の影なき也、現日本の理想の影たる大なる文學は絶無也、すなはち現日本は聲を有せず、無言也、默然たり、啞の如し、死せるが如し。偶ゝ聽くに足るの聲あるを聽けば、悉く皆過去の聲なり、過去の日本の記せる聲なり、君子も全く默すれば愚なるが如く、至人も全く默せば庸人と異ならざるべし、言動してはじめて賢愚を知るべし。今や海外列國は死せる日本の聲のみを聽き、過去の日本の感想のみを聽く、彼等の我れを誤解し、我が大理想を認め得ざる、當然の結果といはざるべけんや。

さもあらばあれ、これはた時の勢の然らしむる所なり、舟子尚相爭ひ、左眄右顧、船を進むるの方針の未だ確として決せざるが爲なり。過去の理想に拘泥して新理想を追ふ能はざるの徒、若しは現在に執着して當

來の妙光を認めざるの徒、若しは外國の過去の聲を我が聲として奉戴するの徒、今の國文界に尠からざればなり。　歎ずべきの至にあらずや。現在の國文壇に絶望したる吾人は、切に將來の國文壇に向かひて、幾層の奮勵を望まざるを得ず、すなはち曰はく、我が大日本の理想の影を表現し得るまでは休息する勿れ、尠くとも內外の耳目をして、大日本の影を見、大日本の聲を聽かしむるまでは休息する勿れ、過去の文學に滿足する勿れ、回顧の爲に回顧する勿れ、平等に執する勿れ、差別に着する勿れ、此の東洋の君子國をして、其の高大なる言をたてしめ、海外をして我が所由と所安とを觀察せしむるに至るまでは、ゆめ〱一日も休する勿れ、と。　予は深く國文學者任務の、當來の國文壇に對して、重且大なるを感ずるなり、我が日出帝國をして眞に世界に知られしむるは、彼等が將來の奮勵によることと、すこぶる大なるべしと信ず。　こゝに國文學者といふは、もとより古學者、國學者のみを指せるにあらず、廣く現在の文學家を總べていふなり。　行文蕪雜、措辭散漫、恐らくは事理詳具せずして、微衷徹底せざらんことを。　讀者若し言の許なるを咎めずして、其の直なるを取られなば、何の幸かこれに如かん。

（六月）

文海の新潮　（某新雑誌の需に應じて）

元錄以後、文化以前の小説類は、概して有りのまゝの浮世を描きて、兎もすれば、新聞紙の第三面の面影あり。　西鶴が作を浮世草子と呼べるも宜なり、若しくは江島屋、八文字屋のかたぎ類も、おしなべて粗畫の浮世繪なり、表向は嘲世諷俗といふ名義ありながら、馬琴が勸懲主義とは同じからず、文化以後に至りては、小説また一變し、浮世のさまは客となりて、奇を綴り、異を集めて、脚色のたくみに、只管讀者をよろこばせんとし、やう〳〵荒唐に流れたり。　所謂くさ草子、よみ本のたぐひ是れなり。尤も、春水の人情本、三馬の戯作のみは寫實の舊脈を傳へたれど、これだに稍〻長き物となれば、時尙には敵しかねて、間〻傳奇風の脚色をまじへ用ひき。　春水が作の、ところ〴〵演劇めきたる、三馬の『船頭新語』の後にくさ草子と化けたるを見ても察すべし。　さてかく浮世の實を離れて、綺語狂言を綴ることゝなれば、往々たはいもなき架空談となりて、婦幼の目をこそわざむかめ、大人（おとな）に面白く讀まするることとかたければ、いつしか勸善懲惡といふ一の主義成りたち、夢まぼろしの如き狂言綺語の底に、常に一條の理窟を宿しき。　蓋し、ありのまゝの世のさまは、眞

戯作に勸懲主義の入りしはNonsenseにSenseあらせんの方便なり

馬琴

近松

に。ありのまゝに書き來たれば、却りて其の間に美妙の天理見え、時には勸懲の影もほの見ゆるものなれど、識見高からぬ凡作家が、世に媚びて物する架空談は、癡人が歌の如く、狂人が舞の如く、變化はあまりあれど統一なく、をかしきばかりにて興味なし、もとより深き感を呼ぶに足らず、勸懲主義の行はれしには、此の他にも因緣あれど、一つは Nonsense（たはごと）に Sense（意味）あらせん爲めなり。　之れを草双紙時代とす。

馬琴此の間に生まれて、一機軸をいだし、性。格。をも書き、世態をも描き、兼ねて勸懲の旨をも寓せんとせり。　只惜むらくは馬琴の着眼は、彼の老近松の如く超絶的なる能はざりしゆゑ（くはしくいへば、夢幻しの如き筋立の中に、人情の妙致を宿らしめて、支離滅裂の脚色の底に情といふ一貫の靈線を通じ、之れによりて安心するの勇なかりしゆゑ）あくまでも理窟にすがりて、註し、釋し、評し、論じ、次いで趣向の荒唐なるを强ひて尤らしく見せんとせり。　若し夫れ老近松の作は、いふまでもなく荒唐なれど、ひとり其の燃ゆるが如き詩的情熱のあるが故に、よく此の荒唐を燒き盡くすに堪へたり、然るに馬琴の筆の妙は、屢々性。格。をも寫し得て、性をも寫すといふ點よりいへば、往々近松をも凌げりと雖も、理窟に泥むこと甚しきゆゑ、虛と實との調和とゝのひかね、矛盾おのづからいち

近松に於ては讀者夢醒めて後に現を見、馬琴に於ては幻消えてやがて夢に入る

じるく、讀者の幻想を破却するの失あり。　近松に於ては、讀む者夢醒めて後に現を見、馬琴に於ては、幻（まぼろし）消えてやがて夢となる。　虚より實に移るは感深けれど、實かと思ひしものゝ、化して虚となるはいとはかなく、狐狸につまゝれし思ひあるべし。　馬琴の今人に厭はるゝは、此の故なるべし。　それはともあれ、此の勸懲的理窟の流行してより、詩的着眼は次第にすがれ、架空又架空、狂言又狂言、小説はあるまじき事をあるらしくこじつくる、一種のお伽草子たるに止まりしは、維新前後の有様なり。　さるほどに其の反動程なく起りて、寫實々々といふ呼聲高くなり、紅葉、美妙いで、西鶴熱盛に、又も浮世のありのまゝを、筆に寫しいだすことゝはなりぬ。　さはれ、此の寫實はまがひものなりき。　そは作家の若きが故か、若しくは他に事情ありてか、そは兎も角も、寫實とは名のみにて、多くは作家の空想なりき、然からざれば、作家が小さき眼界に浮ぶ世のかたかげなりき。　戀といふも、作者自身の空想中の戀、善といふも、惡といふも、賢といふも、愚といふも、皆彼等が空中樓臺、作家はひとりうなづけども、三十歳以上の讀書社會は、是れを見て微笑し、小鼻を動かすが關の山なりき。　是れいつともなく不平の聲ありて、Nonsense 々々といふわるくちのやう〳〵高くなりし本源なるべし。　夫れ化政度

觀念派とも名くべき新作家

の Nonsense は勸懲主義の力にて、兎も角も Sense を得たりき、當世の Nonsense は、何物の力をかりてか Sense あらしめん。 昔堅氣の批評家は曰はく、勸懲々々と、さはれ勸懲に反動して起こりし今の似而非なる寫實派は、意地にも當の敵馬琴が門に、降參することは能はざるべし、此に於てや、觀念派起こりぬ。 觀念派とは何ぞや。 之れを近時の小說に徵せよ、尠からず其の例を見るを得ん。「憎むべきは社會なり、個人はむしろあはれむべし」といふユーゴー等、十四世紀初頭の諸作家より借り來たれる觀念を骨子とせる小說「戀は人間の生命なり、之れなければ死す」といふ觀念其の物を主とせる小說「畢竟戀は肉慾に外ならず」といふ旨をほのめかせる小說、其の他社會の腐敗といふことを根底の觀念として、專ら暗黑面のみを觀察、否、想像して描ける作など、かゝるたぐひ次第に流行し來たらんとす。 是れを文海の新潮とす。 所詮、かく成り來たれるは文學的進化の自然の順序なり、もと、これらの作は文學上の作物としては、もとより上乘のものにあらねど、前の Nonsense の甚しきものに比すれば、一きざみ優る所あらん、只戒むべきは此の風潮の弊なり、弊とは理窟に流るゝこと、追々實相に遠ざかりゆくことゝなり。 何となれば觀念主となりて、人間客となるゆゑなり。 哲學者が立つる原則だ

に、大かたはあてにならぬならひなれば、凡作者が直覺はもとよりあぶなし、先入主となれる觀念ありて、世間の有樣を觀察すれば、例へば、色目鏡にうつる樣々、之れに想像の尾鰭をそへて、憺怛づくし、暗黑づくめ、我が國の狀態を、魯西亞、佛蘭西にしてのけんも、わるくするとはかる可からず、此の邊注意肝要なり。　しかし此の文海の新潮は、たしかに進步の一段なれば、あまり氣短に弊を數へてせきとめんとはすべからず、弊あればとて、たかゞ知れたものなり、自身さへ捲きこまれぬ用心あらば、暫らく風潮を傍觀するも可なり。　何事も少しは手放してやらねば善惡とも成るものにあらず、こゝには主筆某君の求に應じて、ほんの思ふまゝを吐露するのみ。　(八月)

翻案につきて

翻譯いまだ盛頂に達したりといふべからざるに、翻案已に盛行せんとするは、明治文學の瑞兆なりや否や。　論者或はいふ、是れ明に倦怠衰弱の徵なり、と。　吾人は此の說にうなづく能はず、但し、翻案の鹽梅に至りては、從來の諸著は、一も吾人を悅ばしめしものなし。　古人は翻案の鹽梅を說きて、脫胎換骨といへり、思ふに此の說はいまだ悉さじ、否、其の釋

を誤り易し、何となれば通例換骨の義を釋して、ひとへに旨を換ふるの意に外ならずとし、原作の趣意義賊の事ならば、翻して之れを孝子の事とし、原作男子に關するときは、翻案には女子、關せしむるなど、兎角に精髓を逸せしむるの弊あり。翻案の第一義はかゝる皮膚にはあらざるべし。我れは以爲へらく、我が國の場合にていはば、事をも、人をも、嚴密に「日本化（ニホンナイズ）」するを、是れ翻案の最要義なりと、精しくいへば、第一、作中にあらはるゝ人物をして、性習、所爲、悉く日本的たらしむべし、第二、作中の事件をして、悉く日本的たらしむべし、第三、事件の聯絡、感情、德操、其の他一切をして、嚴密に日本的たらしむべし、少しだに外國臭味を留めたらんは、翻案にあらずして無慚なる一種の翻譯なり。好翻案は西洋の菜魚を利用せる新會席料理にも比ぶべし、批評家或は翻案者を難じて一概にヅルイ人種となせども、料理鹽梅の結果は、優にかゝる評を默せしむるに足るべし、蓋し、筋を他に借るは、深く咎むべきことにあらじ。眞作家の目より見れば、筋は彼の大工が下圖にもひとしきものなり、腕のあらはるゝは建築の上にあり。『失樂園』にもせよ、沙翁の傑作にもせよ、下圖は前にも後にもあれど、建築者は前後に空絕なり、ツマリ、艸双紙時代の作家にこそ筋といふものが命なれ、人を描くが眼目の作物には、筋はは

んの足場やうのもの也。　但し、筋を他に借りし上に、人物まで死物又は贋物ならば、作家の不面目勿論也、かゝる場合には剽竊と譏らるゝも語なかるべし。　予は從來筋を借ること下手也、一昔前「巣守の妻」といふ小品文に、或女史が作の筋幾分か借りし以來、ふたゝびと試みしことなし。外國物を日本化することは、自身の感想を具象にするよりもはるかにむづかしと感じたる故也、飜案を卑劣也と思ひてにはあらず。　腕ある作家は陸續飜案するも可し、立派なる腕ありながら、筋を立つるに拙きため、竟に大作せで止むの例、古今に見えていとあたらし。　只日本化といふことに十二分の重きを置きて、剽竊若しくは不精といふ惡名を蒙らざらん用心せよ。　（九月）

歴史小說につきて　（「讀賣新聞」の爲めに）

往ぬる年、日就社にて、賞を懸けて歴史物の小說を募りし時、予も其の判者のうちに數へられて、數十篇の新作に目を觸れしが、何事も思ひ〳〵の當世とて、歴史小說の解釋も人每に同じからずと見え、作意のよしあし、技倆の巧拙の外に、讀む〳〵心にとまること多かりき。　例へば、歴史小說とは、事實の穿鑿に重きを置きて、煩しき風俗の考證に力を盡くし、

いはゞ青表紙の補遺たるべきものとやうに心得たらんが如くに、正史に拘泥して綴られたるもあり。又は化政度の稗史、草双紙のたぐひを師として一向結構の奇しきを求め、限なく事件を錯綜ませ、數知らず人物をいだし、主と事件の波瀾に目先の變化を力めたるもあり。或は歴史は只の借物と見做してか、人物の姓名と大事件の年代とのみを正史の表より借り來て、人物の性格、事件の性質、風俗、人情等は、すべて作者の想像より作りいだし、譬へば、巣林子が時代物のやうに、今様ぶりの空想に過去の薄ぎぬを着せたるもあり。加ふるに、結構、措辭の巧拙はた作毎に差等ありて、拙きは草双紙の燒直しの如く、やゝ巧みなるも、大方は文章の空花なりき。是れ併しながら必ずしも腕の弱き爲のみにはあらじ、歴史小說の本體の尙よく知られざるが爲にはあらぬか。

按ふに、詩歌小說は誠を本とするものにて、作者の感だに深からば、審美學又は脩辭學などいふむね〳〵しき理窟はつゆ程も知らずとも、之れを作るに故障なく、生中の理窟は却りて詩思を局せしめ想像を縛する弊ありとは、間ゝ議論家のいふことなれど、これはた一概には信けがたくや。何さま、發句、短歌のみじかきは、心に浮ぶまゝをいふなれば、理窟も圖案も要ることとならねど、歴史と銘打ッたる小說、又は舞臺に懸ける

といふ約束ある脚本などは、全く夢心地にては成りがたかるべし。現世の有樣を打見たるまゝに寫すといふ或派の短篇などは、ふと感じたるまゝを綴りても成るべけれど、歷史物と表招牌掛けたる上は、什麼生歷史物の本意か、と一座禪して考へざるべからず、然なくば歷史といふ枕詞は、何の意味もなき贅語となるべし。「大詩人はやがて大批評家」といふと、今も尙疑へる人のあれど、シェークスピア、ギョオテ、巢林子等の實例によれば、多分はキハメつきの事實なるべし、一概に理論は不用とは此のごろの天氣にうッかり雨傘を棄つる格なり。しからば歷史小說は如何なる性質を正しとすべきか、と言はんに、此れ例の審美學上の問題にて、表玄關より解釋すれば、無數の片假名と的の字若干とが入要なれど、此處には暫らく畧式を用ひ、學者連の說には賴らで、予が一存の說明を臺所口より試むべし。

まづ歷史小說と一概にいへども、此に謂ふ歷史は、萬國歷史の意味ならぬこと明なれば、「日本歷史」即ち「我が國の過去の事を描ける」といふ形容詞たること勿論なり、已に「我が國」といふ肩書のあるからは、所謂歷史小說は、兎も角も日本國の特性を多少表現するの作ならざるべからず、委しくは日本國粹若しくは日本國風といふものを現さゞるべからず、然

らずば日本國といふ肩書は全くの疣詞となるべし。　扨又「過去の事を描ける」と斷りたるからは、其の小說を讀む者をして、如何さま、是れは過去の事態なり、過去の人情なり、過去の風俗なり、今日の事態、人情、風俗にあらず、といふ感を起さしめざるべからず。　例へば、源平時代の歷史小說ならば、其の中に現るゝ事態、人物、人情、風俗に源平時代の特質いちじるく見えて、今のと異なる所なかるべからず、然らずば「過去の事を描ける」といふ斷りは香具師が招牌と一般なるべし。　扨かく詮じつむれば、歷史小說の第一の條件はザッと左の如し。

　歷史小說は其の國の特性を發揮すると同時に、其の當時の人情及び風俗を反映するを要す。

さてこれ程のことは、何の手間ひまも要らぬやうなれど、總て小說は、敍說又は議論の間に、過去を發揮又は反映するものにはあらで、篇中にあらはるゝ人物の言行、情操、思想、若しくは事件の性質等の上に隱然とほのめかすを旨とするものゆゑ、上にいへる條件だけにても、卒となれば、中々の重荷なり、　蓋し、尋常の敍說の筆にて、當時の風俗は云々、人情は云々、重盛の性癖は云々、爲朝の特質は云々、某は云々の服裝をなせり、云々の器具を携へたり、其の邸宅の模樣は云々、其の交際はかやう〱、と

只ひらたく並ぶるのみにて事足らば(又かゝる死文をつらねてそれにて小説となるべくば)所謂歴史小説はたやすき程の仕事にて、考古家を叔父にもてる小才子は、皆日就社の金時計を貰ふべし、されども一々これを油畫にかいて見せるやうに、と思ふときは、作者の丹精一通りのことにあらず。　例へば、熊谷直實を描かんとせんか、理論上より彼れが人柄を知りしばかりでは事足らず、情の上よりも深く熊谷に同感し、みづから其の人に同化せずば、到底畵のやうには畵きがたし。　但し、こゝに熊谷に同化すといふは、必ずしも正。史。の。熊。谷。といふことにはあらず、源平時代の勇士らしと讀者に思はしむるに足る一人物に同化すれば澤山也。　こは活歴派の小説論に比すれば、はるかに寛大なる條件なり、されどそれだにも履行しがたきこと案外の至也。　何となれば平生明治の太氣(思想、情感、習俗、好尚)にのみ取卷かれたる作者にして源平時代の感想らしきものに同化することは、譬へば、四十歳の分別盛りが、俄に十歳の童子に戻ッて、終日隣の惡太郎とメンコをして遊ぶやうなものなり。　二三十分こそはあれ、數時間にして分別が鼻の先にぶらつき、理窟も出れば説法もはじまり、遂には元の分別老爺に戻ッてしまふなり。試に尋常作家の歴史小説を繙きて見よ、發端第一章に當時の情態風俗

を叙せる。あたりは、何さま過ぎにし世に手ぶりよ、と讀む者にも思はしむれど、二章、三章と讀みゆくうちに、描かれて現はるゝ許多の人物、男、女、其の扮裝こそは博物館に幾日をか費やしゝ、考古家を幾たびか訪問せし、古記錄、繪卷のたぐひを幾十卷か繰返しゝ、と思はるゝまでに精細なれど、又其の言葉づかひまでが、嗚呼、狂言集を幾十回か讀みそらんぜし、と感服せらるゝほど、當年の口吻をまねびたれど、悲しや其の面(つら)つき、其の言葉の意味、其の情操、其の行爲、其の根本の性格が某學校に通ふ何の誰れに髣髴たり、否、作者みづからのとッとき若しくは餘所ゆきの性格に似たることあり、すなはち身を殺しても仁を遂げ義を遂げし士堅氣(さむらひかたぎ)も、此の鹽梅にて寫さるゝ時は、トンダ外強(みかけづよ)の心弱(しんよわ)となり、眼中君父あッて我が身無かりし我が中古の武士魂も、自意識のおそろしく強き主我的明治男と化し去る也。かくては如何ほどに服裝を調べ、器具調度の穿鑿を力め、年月、事實を考證して周圍の舞臺面を飾るとも、所詮イルージョン(幻影)は浮かばざる也。小說は、詩歌にひとしく、情より情に訴ふるが本旨なれば、幾分か過。去。といふ幻影をまづ情の上に起こさしめざるべからず、然なくば態々歷。史。と題して風がはりの小說を作る要もなく、且は歷史小說の尊。嚴。をいたく侮蔑せる振舞なり。　此の歷史小說の

尊嚴といふことにつきては、少々的の字の要る理窟あり「ひッこめ」といふ半壘なくば、次の月曜の紙上に述べん。

歴史小説の尊嚴

過去の事件を語ることは、希臘三千年の昔より行はれたれど、歴史小説といふものに格段の貫目添はりしは、十九世紀のはじめよりなり。其れより前かたの歴史小説は、概して奇事異蹟を語るを主とし、風俗人情を寫せども、大かたは只皮相ほどにて、譬へば、家柄自慢の子孫が先祖の手柄話物するにも似たり。　しかるに前世紀(十八世紀)の末となり、歐羅巴列國の大腐敗が元にて、舊感想と新感想との軋轢はげしくなり、人心疑惑の雲に掩はれ、人間の踏むべき道いづれとも見定めがたく、是非紛々、前途漠々たりし時、多感多情なる血氣の徒は、氣鋭にして心淨きだけに、悉く安心の據を失ひ、或は蹉跎絶望のあまり世を厭ひ、又はこらへかねて自殺を念ひ、然なきも狂憤になりて政治、社交、文學のいづれに論なく、何事につけても無謀の改革を行はんと欲し、人心いたく動搖せり、佛蘭西革命なども、蓋し、此の思潮の一大汎濫なり。　又彼のエルテリズムと稱ふる、慨世絶望のあまり自殺せんと欲する傾向も、ヤハリ此の際に發生せしもの也。　有名なるバイロン、シエレーも、此の思潮を母として

生まれし兒にて、バルンスも、クウパルも、ヲルヅヲルス、ソウシー、ムーアなどいふ英國の詩人も、總じて此の思潮に漂ひたりし者也。そも〳〵此の思潮は、佛蘭西大革命の前かたより盛なりしが、大革命以後までも續きて、今尙全くは跡を絶たず。予が見る所ひが目ならずば、不幸にも、近年は我が國までも流れ入りぬ、とおぼし。それはさておき、斯く一方に於いて、狂憤より生ぜし破壞主義と絶望より生ぜし自殺熱とが歐羅巴列國に蔓延せし折から、他方に一種の歷史熱ともいふべきもの萌したり。是れはた元をたゞせば、腐敗せる當時の政治及び社會、習慣及び制度に反動して起こりしに外ならず。扨此の歷史熱の總名は「ローマンチシズム」と稱したり。「ローマンチシズム」とは「中古語主義」といふ義にて、本來は文學上の改新主義なり、詳しくいへば、其のころ盛なりし擬古文學の陳腐爛熟なるを惡みて、中古時代に行はれし天眞爛熳なる文學を激賞し、彼れを以てこれに易へよと叫び、從來行はれし種々の文學的格式を罵倒し、詩歌小説はひとへに誠を元とすべきものなれば、所謂格式のたぐひは總て顧るの要なし、とさながら桂園派の主義を大ゲサにしたるやうの意氣込にて、歐羅巴の文壇に荒れいでしものが中古語主義の詩文人なり。されば一面より見れば、此派の文學者は頗る激烈

なる改革主義のやからのみのやうなれど、其の實は內部に保守黨の卵を藏したりき。何となれば、たとへ彼等自身は氣付かざりしにもせよ、いたく腐敗せる現社會に住しながら、まづ其の社會をば改めんとはせで、ひとり其の文學のみ改めんとせるは、畢竟社會上の改革は企て及はずと見切をつけ、餘憤を文學上に洩しゝ者とも見らるべければ也。　政治上に口を出せば忽ち一命をも失ふのみか、倒れかゝれる大厦に一木の喩、到底詮なしと諦め、セメテモ詩文の別天地に、精神上の悅樂をだに得まほしと願ひ（自身はかくと氣附かぬながらも）知らず〳〵現世を厭離し、社會の風俗も、國民の人情も、遙に自然にして誠實なりし中古時代の社會に向へるなりけり。　前にいへる狂憤黨は現世の賴まれぬを看破せる爲に、一か撥か、改革を試みて、賴となるべき未來世を造りいださんと欲せしなるべく、又彼の絕望黨は現世を賴みなしと絕望したると同時に、一か撥かを試みる程の無謀なる勇氣もなきゆゑ、進退谷まりて、我れ知らず自殺を欲せしなるべく、最後のローマンチシズム派は到底身體上の幸福は得がたしと暗裡に瞑悟し、セメテモ精神上の悅樂を美術文學の上に求めんと願ひ、知らず〳〵過去に其の心を注ぎしなるべし。狂憤黨は活潑にして未來を詠め、絕望黨は懊惱として現世界に理想を

求めわび、ローマンチシズム派は安住を文學の別天地に求め、玄ばらく過去を夢みたりき。勿論、ローマンチシズム、は獨にも佛にも處々に起りて、其の隆替も一樣ならねど、最初の狀態はほゞ斯う也。されば はじめは激烈なりし文學的改革派が、次第に分派し、變形して、ヲルヅヲルスの如きは隱君子となり、ソウシー、ムーアの如きは煩瑣なる歷史考證となり、スコットの如きは、其の最後の旗頭なるだけに、純然たる歷史小說家、すなはち殆んど悉く現世を離れて、をさ〳〵過去に執着し、ありのまゝに過去を描き過去を夢みる作者となれり。歷史小說といふものが甚だ重大なる意味に於て慰鬱排悶の具となりしは此の間の事なり。昔は貴紳婦幼等が春晝秋夜のなぐさめ草たるに過ぎざりし歷史物語も、今は保守派の民心を慰籍安諭するの具となれり。現世の汚穢に絕望せんとする國民をして過去の社會の種々相を見せしめ、因緣果報の理の止むべからざるを瞑悟せしめ、且暗に告げて曰はく

　歷ふべきは現世間のみにして過去は必しも厭ふべきにあらず。　善惡は代謝す、前の惡は後の善、人間世の一分を見て人間世の全分とする勿れ。理想は世と共に進化す、中古の理想と現世の理想と其の異なること何ぞさしも甚しき。　今の理想をもて過去を評する勿れ、今日の理想に着して未來を測る勿れ。　理想は時を異にして異なり。　人を殊にして異なる理

想は限なく進歩す、而して此の限なき理想の進歩は限なき人間の進歩を意味す。人世また樂しからずや。 狂憤と絶望とは史に暗きが故に生ず、現世に着するが故に生ず、自國に着するが故に生ず。 廣く東西古今の實歷を撿せよ、造化の妙工を史に徵せよ。 天道の流行を史に徵せよ。

と。

もとより斯くの如き思想はローマンチシズム派全躰の意見にはあらず、否、むしろ彼等の多數が殆ど無意識にして表彰せりし敎訓也。さはれ、彼等の後世に遺したる功績の一は、予が見る所誤らずば、たしかに此の點に存するが故に、今日謂ふ所の歷史小說家は、概ね此の氣脈を繼承し、彼の寫實主義の盛行するにつれて、過去穿鑿の熱はいよ〳〵加はりぬ。 されば近時の小說家が歷史小說を作るや、昔にくらぶればはるかに眞面目也。 近代の小說家は徒に先祖の手柄を語り、過去の痴夢を語らんとて歷史小說を作らざるなり。 彼等は過去世のうちに天道の流行即ち因緣果報の理を見んとする也。 過去の理想を發見し、且之れを有形にせんと欲する也。 器具、調度、服裝、等の如きも幻影を生せんが爲にとて取調ぶることはあれども、その着眼いにしへと異なるが故に、今はこれらにのみ重きを置かず、むしろ過去の人間を見んとする也、過去の理想を見んとする也、思想と感情との異なれる社會に、因緣果報の理の、如何さまに活動せしかと、最廣義に謂ふ天道の、活けるが如き足

跡を見んとする也。此の故に今の歴史小說は博物館の陳列品を文章にしたるが如き死文章を惡み、正史、野史をありのまゝに敷演したるが如き死文章を忌み、偶然の事件のみを綴合はせたる混沌たる痴夢の記錄を厭ふ。又之れと同時に、現今の理想をもて歷史を描き、現今の感想により て因果を造爲し、若しくは偏狹なる道德說を元として歷史の人物を褒貶するの作を厭ふ。畢竟、我々の欲する所は過去の理想及び感想と、其の理想及び感想が造化天道と相因緣果報するの形跡也。爲朝を見んと欲するにあらず、義經を見んと欲するにあらず。這は欲すとも能ふまじきこと也。我々の望は、せめても源平時代を見んと欲する也、否、過去の人間と天道とが關係因果せし面彰を髣髴にだに知らんとする也。彼の風俗や、言語や、事實や、此等は皆此の複雜なる因果史を探知せん爲の資料のみ、若しくは活現せん爲の方便のみ、所謂歷史小說の主腦にはあらず。

按ふに、小說といふ本領よりいへば、歷史といふ肩書はホンの借物も同然なれば、小說の本領に叶ふ以上は、たとへ人物が現今の人物にても、又全篇を貫ける理想が現今の理想たりとも、單に美術といふ一點よりいへば、必しも咎むまじきことならめど、尙歷史いふ肩書の添はれるだけ

にかゝる根本の不都合は、兎角に讀者の幻想を破り、美術たるの價値を損ずるの悔あるべし、故に、予は歷史小說と自稱せる作に向かつては、尠くとも當代の人情、風俗、理想及び人物の影を見んことを望むなり。夫の歷史的舞臺及び外飾を單に方便として用ひたる作は、之れを假粧的散文抒情詩、若しくは抒情的歷史小說と名けんと欲す、方便とおとしめらるゝときは歷史といふ肩書は無意義同然となり、殆ど全く尊嚴なきものとなるべければなり。

脚本『牧の方』の緒言

野史稗官をむさぼり讀みしころの頭腦に、多少の印象を殘したりし、眞假くさぐの人物のうちに、其の後そこばくの變化を經て、今もなほ殘れるは、北條時政が後ぞひ、牧の方の面影なり。予がはじめて此の女性を知りしは、高井蘭山が演義『星月夜顯晦錄』にして、其の印銘を強めしは、曲亭馬琴の作『朝比奈巡島記』なり、みづからはさばかりとも氣づかざりしが、此の二作家が筆のあやは、我が幼稚なる頭腦に、淺からぬ印銘を與へたりとおぼしく、口繪、挿繪なる面影は、數年の後までも目に殘りぬ。されば明治十四五年の頃、東京大學の講堂にて、米人なにがしが[illegible]たが

ひて、はじめてシェークスピアが作『マクベス』を讀みし折にも、彼の影ふと胸に浮びて、レデー、マクベスと牧の方とを、いとよく似たるやうに感ぜしとあり。今にして思へば、牧の方とマクベス夫人とは其の性格(ひとなり)はいふに及ばず、其の罪惡の性質も、其の動機も、はた其の經行も、すべて根底より異なりたるを、其のころの分別のいかでかはえ判(わ)かたん、恰も『シーザル』の劇を意譯せんの心ありし當時とて、我れ若し『シーザル』を譯し果てなば、次には此の作を翻案して、學友某等を驚さんなど、一時は思ひたちしこともありしが、もとより深く案じたることもなくて、年波は矢を射るやうに流れ、明治廿一、二年となり、東京專門學校の講堂に、屡〻『マクベス』の作意を講じ、次いで『早稻田文學』の紙上に、同じ脚本を評釋するに及びて、又も舊夢の繰返されて、獨り前愚を笑ふこともあり、また、今昔の感といふことと、かゝる場合にもいふべくば、其の感はた淺からざりき。さるはいくらか目の肥えて、やう〳〵彼の作のいみじさの知らるゝにつけ、當年のうぬ惚れ、野心、忘想は影を潛め、翻案の初一念は絶ちたりしが、なほ、牧の方の面影は、マクベス夫人といふ對照すべき面影を得て、異同のいとしるきだけに、感銘一きはいちじるくなりきて、前とは異なりたる或感想、兎角に念頭を離れざりき。　さる程にふと思ひたつ由あり

て、去年『桐一葉』を完了せし前後より、より〳〵に正史、野乘、記錄、小說のいづれを問はず、牧の方に緣あるを求めて讀み、若しくは、曾て讀みし書をも、繰り返して讀むほどに、牧の方はいつか餘所になりて、みだりがはしき當時の世態、保元、平治の亂倫、鎌倉三代の罪惡史など、目にとまり胸に徹るとぞ多かる。

上は白河、鳥羽の御ふるまひ、崇德院の御あやまち、義朝父子の悲劇、平家盛衰の大叙事詩、右大將がトラヂコメデー、鎌倉三代間の因果應報、延いては承久の大亂まで、寔に是れ造化自然の大悲劇詩、若し紙背に透るといふ史眼ありて應報の隱微を讀むことを得ば、何者か造化の大作家たるを否み得べき、因緣果報の理脈、彰乎として掌紋を指すが如く、之れを讀む輩をして覺えずも畏れ戰かしめ、やがて肅然として襟を正さしむ。

彼の足利史をもて、最暗黑なる國史の部分なりと思へる者は、疑ふらくはひとり勤王の觀察點より、我が帝國史を讀める批判家ならんか、心理的方面より觀察せば、二千五百五十餘年の過去中、最も哀しむべき、最も痛ましき、最も怖るべき、最も畏るべき罪惡史は、遠くば白河の御宇に萠して、長く綿々たる業因を延き、彼の『愚管抄』の著者をして、「道理以外」なりと暗示せしめし、承久の亂に至りて一大頓挫せるにあらざるか。而し

て其の罪惡史の絕頂は、蓋し、賴朝が死後に於ける、鎌倉將軍家の二代史なるべし。

見よ、右大將が墳墓の土は尙未だ固からざるに、嬖臣梶原景時父子、右大將が在世には、そが連枝にして功臣たりし九郎判官が傲慢をも挫き、剩へ蒲の入道をも寃死せしめし、嬖臣梶原景時父子、一族郞黨、五十餘人、飛ぶ鳥をも落すべかりし暴威、春の淡雪と消えて、駿州淸見が關の夕嵐に、ゑかばねの算を亂し、二代將軍紀の劈頭に、まづ大悲劇の緖端を發けば、之れを無慚の口繪として、陸續展開し來たる活修羅の繪卷物、尼御臺所の依怙偏執、北條父子が陰險、賴家が蕩佚、その墮落の經行、其の補弼比企能員が野心、その露見、其の滅亡、これに連座したる一幡が非業の死、賴家禪室が幽閉、其の無慚なる浴室の最後、等、正史の表のみを見るときは、いづれも自招自致の業果にして、頗る單純なる應報たるに似たれど、之れを心性史の方面より觀れば、因緣果報の關聯、蓋し、甚だ複雜なるものあり。　夫の賴家をして酒色に溺れしめ、蹴鞠に耽らしめ、政務を怠らしめ、惰弱蕩逸に沈湎せしめしもの、豈ひとり彼れが性の失のみならんや。

予は其の弟實朝の、往々史家に寵せらるゝに比して、賴家の全く度外視せられ、史家の繼兒たるを憫まずばあらず。

さもあれ、斯の如きは、予が所謂鎌倉府罪惡史の一斑のみ、否、寧ろ保元以後、連綿として斷絶せざる一大罪惡鎖の一環のみ。さて之れに繼ぎて起こる修羅闘諍の慘劇、何ぞ其れ慘絶なるぞや。仁田の忠常が寃死の悲劇、畠山の重忠父子、一族郎黨が無慚の最後、稻毛入道重成が自業自得の末路、牧の方が奸計、時致が老耄、其の逆謀、其の露見、其の退隱、平賀朝雅があへなき滅亡、泉の親衡、和田の胤長等の不運なる陰謀、及び其の失敗、和田一門と北條義時との軋轢、首府の中央にての血雨劍電、前者の族滅、後者の全盛、深意ありげなる右大臣の遊惰、引つゞく天變地妖、惡禪師公曉が淺はかなる暴擧、及び其の神速なる伏誅、其の他、此の間に點綴せる幾多無慚なる小悲劇、若しくは准悲劇、文覺上人が末路、六代御前の横死、熊谷直實が頓悟の動機なんど、若し前代までも遡りて種々の業因を算し來たらば、殆ど僂指するに堪へざらんとす。嗚呼、何等のおびたゞしき惡因惡果ぞ。時間は僅々十有七八年、而も此の期の活史乘を繙かんに、血痕の斑々たらざるページ、果たして幾何かある。嗚呼、彼の乾燥なる『吾妻鏡』はそも如何なる脫世間の歴史家の筆ぞや。予は其の冷靜なる記事の背に沸くが如き貪嗔痴、燃ゆるがごとき煩惱の陰顯するを認むる毎に、未だ曾て史筆の冷々然たるに驚かざるを得ず。予はいさゝ

か東西の革命史を讀めり、革命期に伴隨せる罪惡は嘗て聞知せる所なり、豈罪惡の連續せる爲にのみ當期の史に駭かんや。予はその業因の遠くして深きに駭き、又その亂倫の甚しきに驚く。革命の前後には罪惡ならび起こる習ひとはいひながら、倫常のかくまでに腐れて、高きは雲の上の貴きより、低きは地下の卑しきに至るまで、只管私慾にのみ執着して、親子相殺し、兄弟相屠り、君を弑し親族(うから)虐げ、義理をも人情をも忘れ果てたる、飢ゑたる狗の腐肉を爭へるにさも似たり。當代の叙事詩(エポス)たる『平家物語』が、祇園精舍の鐘の聲に、其の悲哀譚(トラジガルテールス)の筆を起こし、六道輪廻の章に卷を了へたる、長明が『方丈記』に當代の苦叫を抒らし、西行が『山家集』に獨世を避け、無名氏が『愚管抄』に道理を說ける、げにとこそ思はるれ。嗚呼、世は擧げて禽獸となれりしか、そも〳〵また此のあひだにも、幾多人情の濃淡あるにや。予は他の平然として當代の史紀を讀み、玄かも亂世の一語をもて此の空絕なる暗黑史を蔽ひ、何等の感得せる所も無き世間尋常の讀史家を異しむ。彼等は人間の時としては野獸に墮落するを當然事となせるか。其の大墮落の因緣には何等の感慨をも寄せざるか。予は從來の史論なるものゝ頗る膚淺なるを怪しまざるを得ず。

まづ此の墮落の絶頂期ともいふべき鎌倉三代間の罪惡を檢せよ。　正史の傳說する所のみによれば、源二位が罪惡も、梶原が罪惡も、賴家、能員等の罪惡も、時政の罪惡も、將た本論の主人公たる、悍婦牧の方の罪惡も、因緣薄弱なる罪惡たるに近く、彼等を私慾一方の半獸的動物と見做し、若しくは淺慮粗忽なる人物と見做さゞる限は、因果の關係を悉しがたき趣あり。　他はしばらく措き、ひとり牧の方の罪惡を檢せよ、又時政が逆意の動機を按ぜよ、史に見えたる零碎なる事實は、彼等を常識無き愚人とせざれば、目前の私慾にのみ偏着せる半獸的動物たらしめんとす。乞ふ試に左の史筆を見よ。

時政諸子母氏各異、牧氏最後所娶、頗險驕恣、時政寵憚之、所言皆聽、平賀朝雅畠山重忠皆時政女婿、而重忠妻非牧氏所生、重忠子重保與朝雅忿爭、朝雅讒之牧氏、牧氏乘間誣以謀叛、請殺重忠父子、時政遣兵殺重保、遂遣諸將殺重忠於二股川、人以爲冤、牧氏以朝雅亦源氏疎屬欲彊時政殺實朝立朝雅、密聚兵士、政子使三浦義村結城朝光等、取實朝移居義時家、用義時計、勒兵矯實朝命、如將誅時政狀、迫使剔髮、幷牧氏徙于北條、云々

假に時政をば耄せりとするも、牧の方の逆意には若干の因緣なかるべからず。　按ずるに、當時實朝は齡わづかに十三才、名は將軍といふと雖も、實は露ばかりの權力あるなし、而して上には威權宏大なる尼御臺あ

り下には尼御臺の腹心にして一味同躰なる相摸守義時父子あり、左右には和田、大江、三浦の諸黨あり、幼主を殺し得たりとするも大事の成らざらんは彰として明なり、かゝる自明の理をだに解せざる狂愚の婦が、時政を魅し得たるは不可思議ならずや。或は史筆の不具なるが爲か、と更に原史に遡りて見るに『保歴間記』には下の如くあり。

扨時政權を取る間その妻女牧の女房と申人心武く驕れる人なりけり元久二年六月廿二日畠山次郎重忠四十二才にて誅せられたり其故は重忠時政の聟也武藏左衛門佐源朝雅朝臣も平賀四郎義信の子也時政の聟なりけり朝雅は牧の女房一腹の聟なり重忠は二位殿尼御臺所頼朝後家義時以下の前の妻女の一腹の聟也中惡くして不思議の讒言ありけるにや又牧の女房思立事もありけるにや重忠は弓箭を取ても無双の仁なり當將軍の守護の人なり亡さんと思て牧の女房重忠が從弟三郎入道重成法師を語らひて二俣川にて被レ誅畢、同廿三日重成法師舍弟榛谷四郎重朝も後惡かりなんとて打れ畢、不思議なりし事共なり、かやうに萬思ひの儘なりける程に彼の女房思ひけるは我聟の左衛門佐朝雅當時京都に上りて時政が代官として指置昇殿しけり是も伊豫入道頼義朝臣六(五?)代の末なれば將軍に成さんに何の子細かあるべきと云て當將軍を失ひ奉らんとて時政の家へ同七月廿日奉請て湯殿にて失ひ奉らんとしけるを二位殿聞食て武部丞義時を召てかゝる不思議ありと仰らる義時急ぎ馳向て見奉るにはや湯殿

へ入り賜はんとしけるを懷き奉て御所へ入奉りけりこはなに事ぞと仰らる二位殿しか〳〵の事申させ給ふさては義時とても心ゆるすべからずと被仰けるに義時事の由を申遣たりければ時政を討て進ぜよとありければ、さん候子細候はじとて則打て候とて伊豆國奥山なる所に押籠つ、牧の女房をも同國へ則流さるゝと聞きしが後は不知、朝雅をば京都にて同二十七日被討けり、時政此の事爭か知らざるべきなれども女性の計に付きけるが老耄の至か不思議なりし事なり、二位殿の御計にて義時を時政に替て將軍の執權とす相摸守とぞ申ける。

是れはた罪惡の因緣に關して些も説明を加ふる所なし。讀者は更に他の舊記を探らざるべからず。

そも〳〵當年の事蹟を窺はん料は、正史にては、前に擧げたる『大日本史』、又其の元となれる『吾妻鏡』『愚管抄』『保曆間記』『北條九代記』『神皇正統記』若しくは零碎なる日記類、演義躰の書類にては、上に擧げし『顯晦錄』、八文字屋版にて、疑ふらくは、蘭山が種本かとも思はるゝ『武德鎌倉舊記』、『顯晦錄』のやゝ荒唐なるものとも見るべき『鎌倉新話』、『鎌倉見聞志』といふ未讀の書、『鎌倉舊記』の後篇、『鎌倉繁榮廣記』など、又地理と纏綿しては、『相摸風土記』『鎌倉志』『鎌倉物語』など、又純然たる小說には、前にいへる『巡島記』、そを合卷に翻したる種員が『島巡浪間朝比奈』、書名も作者(万

亭應賀？)も忘れたれど、予が稚きころ一讀せし『顯晦錄』の飜案とも見るべき豐國畫の合卷、尚此の外にも若干あらめど、牧の方の事蹟に聯關したるものは、おほよそ此れ程に過ぎざるべし。　さて此等の諸書に縋りて牧氏が罪蹟を探り見るに、やゝ注意すべき要點は、わづかに左の數ヶ條に過ぎず。

一牧の方は「大舍人允宗親と云ひける者の女なり、兄は大岡判官時親とて、五位尉に成りてありき、其の宗親賴盛入道がもとにつかひて(本ノマヽ)駿河國の大岡の牧といふ所を知らせけり」(『愚管抄』等)

一牧の方は時政の後妻にして、齡は夫時政よりも、はるかに若かりしものゝ如し、『愚管抄』には「時政若き妻を設けてそれが腹に子共設け女多くもちたりけり」と見ゆ。

一牧の方の一腹の子は、諸書に見えたるは平賀朝雅に嫁せし女某と政範とのみ、(政範は齡わづかに十六歲にして左馬の權介に任せらる、こは牧の方が寵愛のあまり、ひたすら時政に勸めて、申し請はしめし結果なりといふ)尤も『愚管抄』によれば、牧の方が生める女子尚此の外にも多くありて殿上人の妻となれりしに似たり、曰はく「こと女ども皆公に殿上人どもの妻になりて過ぎけり」云々。

一牧の方は『保暦間記』の所謂「心武く驕れる」のみにはあらで、嫉妬偏執の心深く、又頗る奸智にたけたりし女性と見ゆ。 頼家、能員、忠常、重忠の殺されしは、直接若しくは間接に皆彼れが毒舌にかゝれるなりといふ。

一牧の方と先妻腹の子等と其の中睦じからざりし跡は諸書に見えたり、こは前に擧げたる『保暦間記』の記事にも明かなれど、『吾妻鏡』、『顯晦錄』、『九代記』、『鎌倉舊記』等はた屢〻其の影を示せり。 就中『舊記』には重忠、稻毛等を誣殺せしも、畢竟は繼兒の聟なればなるべしといへり。

一牧の方が畠山重忠を讒殺せしは、頗る複雜なる因緣あるに似たり。

大望の邪魔となる將軍家の守護人といふも其の一理由なるべけれど、繼兒の聟といふとも、たしかに一條の緣なりしなるべし。又『吾妻鏡』、『顯晦錄』、『九代記』などに見えたる重保と朝雅との爭論、朝雅が讒言、稻毛入道と畠山重忠との關係など、いづれも含味すべき因緣なるべし。

一書によりて多少の異同はあれど、重忠が滅亡の近緣は、朝雅と稻毛とが讒言なりしこと明かなり、而して朝雅が讒言は、左馬介政範が

夭折に關係せり。

一政範は實朝が御臺所奉迎の爲、朝雅、重保等と共に京都に上り、途中病を得て夭折す、時に齡十六なり。　時政夫婦が狂氣のやうになりて悼哭せし由は諸書に見えたり。

一『吾妻鏡』『顯晦錄』等によるに、牧の方が重忠を怨みしは、主として六郎重保が其の寵兒政範が死を等閑視せし點にあるものゝ如し。尤も其の以前よりも畠山父子が剛直は、時政夫婦の忌む所たりしこと勿論也。

一牧の方の非望は實朝がはじめて將軍となりし當時、已に其の緒を露せり。『吾妻鏡』建仁三年九月の條下に曰はく

九月十三日　庚辰　阿波局參尼御臺所申云若君御座遠州御亭雖可然倩見牧御方之體於事咲之中挿害心之間、難恃傅母定勝事出來歟云々此事兼思慮之內事也早可奉迎取之由御返答即遣江馬四郎殿、三浦兵衛尉義村、結城七郎朝光等被奉迎取之遠州不知子細周章以女房駿河局被謝申之處成人之程於同所可扶持之由被仰御返事云々

按ふに、牧の方の陰謀の由來は、史に明說せられたるよりも深遠なるが如し。若し牧の方の逆意を、單にその聟平賀朝雅を愛するの餘りにいでたりとすれば、理會す可からざる疑問、條も生じ來たる、何となれば

已に前にもいへる如く、假に其の非望思ふ儘に成りて、將軍實朝は空くなりぬとするも、上に尼御臺あり、下には尼御臺と同心一腹の義時あり、而して此の二人は、たとへ父母（ちゝはゝ）の命なりとも、朝雅を推さゞらんは明白なれば、彼等をも併せ亡さゞる限は、朝雅を立つるとは叶ふべからず。よし假に此の二人は、親の意に逆ひかねて、暫くいふが儘に從ふべしとするも、大江、和田、小山、三浦等、豈緘默して傍觀すべしや、大事の成らざるべきは、火を覩るよりも明かなり。然るに此の障碍を見ざるものゝ如く、敢て大逆を行はんとせしは、狂にあらざれば至愚ならずや。時政は當時六十八歳、或は老耄とも解すべく、又は牧の方に惑溺せりきとも解すべし、ひとり奸智にたけたりと見ゆる牧の方が、かゝる輕擧（かるはづみ）は解しがたきにあらずや。それも一時の出來心ならば知らず、多年の宿志としては心得がたし。予は、此の間先人未發の甚だ複雜なる消息あるべきを思ふ。又牧の方の性格も、蘭山が敍事の筆に物し、馬琴が小說の筆に描きたるとは頗る異るべきものあらんを思ふ。蘭山が寫せる所によれば、彼れは卑しむべき一奸婦のみ、馬琴が描ける所によれば、彼れは人面の一怪獸のみ、前者はさすがに人間の影をとゞめ、後者は殆ど人情を遺失す。若し二作家が描ける如くば、牧の方は一箇の半獸的動物にし

て予が所謂鎌倉罪惡史を個人に表現せる雛形たるに外ならず。𛀁かるに予が史を讀みて感せし所は、未だ必ずしも然らざるなり。予は彼の罪惡の絕頂期をもて人面獸横行の期と信ずる能はず、又牧の方を以て半獸的動物と見做す能はず。如何に社會は腐爛するも、如何に道義は地に墮つるも、尙人間には良能ありて善惡邪正の辨別の悉皆忘じ去らるゝが如きことは、殆どあるまじき事なりと信ず。すなはち墮落には墮落の因緣あり、一見理會すべからざるが如き罪惡にも、所詮理會すべき經行あるを信ず。予は牧の方の罪惡は、此の一見理會すべからざる罪惡の一種なるを認め、その經行の甚だ深遠にして複雜なるを思ふ。又其の結果の狂人の所爲に類するにも拘らず、其の遠因の極めて自然にして當然なるべきを思ふ。又其の行爲の最も惜むべきにも拘らず、其の心事の頗る憫むべきものあるを思ふ。さもあればあれ、凡そ此等隱微の事は、大かたは是れ不可言不可說の消息、譬へば色の如く又聲の如し、咄嗟、得て聞くべく、轉瞬、得て觀るべし、剖きては傳へがたく、解きては語りがたし。乞ふ予をして描かしめよ、剖析して說明する能はざればなり。

『早稲田文學』「雜界」彙報の緒言

本欄内には(第一)風俗、流行、好尙、等の變遷及び現況を叙し(第二)には繪草紙店、寄席等(第三)には臨時の諸興行物、若しくは見世物、等に反映する社會の嗜好を窺ひ、尙及ぶべくば歐米に於ける同類の現諸象、幷びにそれと此れとの關係をも觀察し、以て當來の文藝に於ける多少の影響をも探らんとす、されどもこは甚だ複雜なる現象にして、其の相渉る所、廣く且深く、吾人の狹睹寡聞を以てしては頗る成し易からざるの取調なり、恐らくは觀察も、報道も、尠くとも當分の間は、甚だ不完全ならざるを得ざるべし、或は一斑によりて全豹を推し、或は揣摩して臆說する等、多少の弊なきを保する能はず。讀者幸ひに吾人が觀察の疎漏を咎めで、誤謬ある時は之れを正し、遺脫ある時は之れを補ひ、且讀み且幇助するの厚意を賜はば、此の躰裁、月日と經驗とを重ぬるにつれて、早晩完備するの域に近づかん。若し夫れこゝに錄する所は、總序又は緒言たるに外ならずと知るべし。

風俗の大變動

は維新の革命と共に起こりたり。維新以前の風俗と維新以後のとを

比ぶれば、殆ど隔世の感あるは、人皆の親睹せる所なり、貴賤男女の服裝の翻然として一變せる、舊儀式、舊禮法の頽然として廢れたる、等、今更に叙說せんは管々しかるべし。　蓋しかく成り行きしは大革命の必然の影響にて、敢て其の因緣を求むるにも及ばざれど、第一の直接緣は、士農工商の階級の取り除かれしこと、帶刀制度の廢せられしこと、結髮の習慣の廢れしこと、是れなり。　此の三ヶ條は、中流以下の風俗をして平等的ならしめ、所謂平民的ならしめしことに大なる關係あり。

今一つの主なる緣は、維新以後の上流及び中流社會は、最上流の幾分を除くの外は、殆ど皆革命動亂の風雲に乘じ、突然家を興し、身を立てし者より成り、其の大多數は大抵舊中流以下の國人なりしが爲に、舊幕時代の上流及び中流社會とは、大に其の要素を異にし、隨うて其の嗜好生活をも異にせしことなり。　若し夫れ維新前の上流社會及び中流社會は、おしなべて世襲の門閥家なりしに、維新以後のは尠くとも其の半程は、俄大身、俄長者、成上り、又は出來星紳士なり。　所謂新華族中には、昔は足輕、草履取に類したる身分の者もあり、所謂紳商の中には、博徒、日雇取に類したる身柄の者もあり、今の某伯夫人、昔は左褄の歌妓にして、某令夫人、曾て何樓の娼婦たりき、或は下婢より一躍して奥方となれるもあれ

ば、或は矢場娘の令閨と化したるもあり、主人公は殺伐なる擾亂中に立身せるが故に、必要上より無禮講的生活に慣熟し、令夫人、權夫人等は、氏も育ちも賤しきが爲に、必然の結果として無禮講的生活を行ひ、夫と婦との生活期せずして相適し、こゝにいつしか無禮講的新交際社會及び新家庭の素を成せり、まづ中央首都の上を言はんに、大躰の上よりいへば、維新當座の風俗は、大紊亂無秩序と評するの外無し、さて此の

無禮講時代

には、何事も便宜を主として、手とり早きを佳とし、挨拶應對も成るべく簡略をよろこびしかば、風采なども、尠くとも男程は、磊落肌、豪傑肌を可とし、言葉づかひなどは物躰ぶらぬを妙とし、卑野猥褻なることをも、態と憚らずして放言するのならひなりき。不幸にも其のころの風俗を反映せる小說類は、殆ど一も存せざれど、發刊當初の『東京新誌』などを翻讀せば、隱然其の影を捉ふるを得んか。其のころは、男は豪傑肌を理想とし、女は慧利なるを最上とせり。さる程に、維新の大紛雜もやう〳〵緖に就き、衣食やゝ足るの時代となりて、此の新風俗中に生長せる新中流社會、彼の『東京新誌』などに屢〻見えたる電信にすがりて立身せる小鯰紳士、又は書生あがりの山出し紳士、等の增加するにつれて、風俗の無

規律は、一層甚しきを加へ來たれり、但し、泰平の餘澤として、禮儀虚飾の必要も、おひ〳〵に感ぜられたるが故に、所謂無禮講主義は幾分か薄らぎ

隨意採擇的風俗

とも名くべき一種の新風俗を釀成するに至れり。或嚴格なる舊習家はさておき、大多數の情態よりいへば、此の時代には銘々自分勝手の禮法やうの者を工風せる跡あり、禮服の如きも官以外のは隨意なりしが如し。流石に男子の服裝は、諸官省との關係あるが故に、概して一定せる趣ありしが、其の妻、其の女、其の下婢、等の禮服の如きは、或門閥家、又は稍〻心得ある者流のを除くの外は、全く隨意的なりしこと明なり。此の風今も尙新紳士者流の家庭には殘れり。彼の正式的三枚重ねの上に、羽織又は被布を被て、大禮の席に臨み、若しくは下婢、小使が紋付羽織を着して、令夫人の後に隨へるなど、昔堅氣の目には奇怪と思はるゝ服裝も少なからず。之れにつれて、住居の建かたも思ひ〳〵となり、和洋折衷と打ちいでたるはえばらく措き、純然たる和風の建築ながら舊幕風とは全く趣を異にせる奇態不思議なる建物もあり、書院の待合茶屋又は料理店などに似たるもあり、便宜一點張に建て設けたるもあり、隨

うて、室内の粧飾もいろ〳〵にて、西洋風に骨董店めけるもあれば、待合風にいたく洒落れたるもあり、何處の寺院の一室ぞと訝らるゝもあり、或は蕩然としてけふはじめて開ける不明の間のごときもあれば、絨氈の上に段通を敷き、其の上に黄八丈の座蒲團を並べたるもあり。挨拶應對もさま〴〵にて、「頼まう」の聲に應じて、お手車の主人公奥より飛んでいづるあれば、書生取り次いで後、尚半時間以上も俟たするあり。點頭を辭義とするもあれば、頭を疊につくること分餘に及ぶもあり。これらは今も尚依然として殘れり。かく何事も自由隨意となりもて來しかば、五節句の祝儀は更也、年頭、年尾の儀式も、虚禮虚文として斥けられ、嫁取、聟取の大禮すら、知交はいふも更也、親戚縁者にだに知らせずしてツイちよいと行ひし者尠からず。現に今日の紳士の妻にして披露目ヌキの分鮮少ならざるべし。年頭に近縣旅行の廣告尤も甚しかりしは此の際也。さて此の隨意採擇時代の特象として記臆すべきは、花柳社會の影響の中流以上にまで及びしこと也。夫れ維新以前に在りては、總じて習慣格式等は三百年來の因襲によりて固定し、就中、中流以上の風俗、殊に士人服裝等は、件の舊慣に沙汰せられて、確定不動なるを常としたり。而して中人以下、所謂町家の風俗だにも、尠くとも其の儀

禮に關係ある程は、百年猶ほ一日の如く、殆ど變移なきを例とせりき、但し、日常の服裝、持物、又は男女結髮の風などは、隨時の流行につれて間々いちじるき變遷ありき。　これは彼の浮世繪、又は吾妻錦繪、若しくは浮世草子、洒落本、人情本等の挿繪を見ば、以て其の一斑を窺ふ足にらん。ろの頃謂ふ所の流行社會(fashionable world)は、ひとへに中流以下の社會を指せり。　さて此の町家的流行社會に、時々の新調子(ニウトーン)を與へしものは、いふまでも無く梨園と狹斜となり。　これは元祿以來の主樂主義(ヘドニズム)の餘波(なごり)にして、町家的社會の無上道樂は、男子に在りては、狹斜の肉慾、女子に在りては、梨園の蕩遊、梨園と狹斜とは、彼等が無上の極樂園なりき。　されば狹斜にもてはやさるゝ風俗は、すべて町家男子の理想的風俗にして、梨園の創始せる服裝は、町家女子の隨喜渇仰する所なりき。　さもあれ件の二方面より來たる影響は、明治維新の前かた、士人と士人以下との階級の截然として相分かれたりしころには、尠くとも表向きは、概して士族以下にのみ及び、上流、すなはち士族以上の社會には流行社會(ファショナブル・ソサイアチ)などいふべきものは、殆ど存在せざるが如き觀ありしに、前にいへる隨意採擇の行はれ來たりしにつれて、中流以上の局面翻然として一變し、梨園、狹斜の影響は、普く全社會に波及するに至れり。　これは維新以後、藝妓の

大にもてはやされて、普く上流社會に接觸せしこと、妾(權妻)を蓄ふることの一般に流行して、上にいへる無禮講時代の風雲に乘じ、おひ／＼下等社會の風俗の、上流、中流に侵入せしこと、梨園の重せられて、從來は上流社會の見ぬものなりし歌舞伎芝居が、一種の高等興行物とせらるゝに至りしこと、等に基く也、令孃の風俗と雛妓の風俗と殆どわいだめなきに至りし源はこゝに萠し、廿九年の今日に至りては殆ど其の極點に達せんとす。之れと同時に、一方よりは西洋風の濃厚なる好尚入り來たり、他方には西京風の絢爛目を奪ふが如き扮裝よろこばれ、それにつれて日常言語の變動も頗るいちじるく、東京語は關西語に化せられ、關西語は關東語に化せられ、おひ／＼全國語脈を等一せんとするの傾を生せり。此の風俗大混亂の際に於て、所謂歐化熱頂點に達したり、さて此の歐化熱は、一方よりいへば、時勢の必然的結果なりき、とはいへども、現に其の主動者となりし者は、時の上流社會、即ち官吏社會よりいでしなれば、我が國の風俗史は、こゝに明に一新紀元を畫したり、何となれば、上流社會が流行(ファション)の新調子(ニツトーン)を全國民に向かッて與へしことは、此の時を以て嚆矢とすれば也。伊藤內閣もまた多方面なる哉と風俗史家たる者は特筆すべき也。さて此の時こそは佛のロチーが『秋の日本』に『をか

め八目」に於て冷嘲せし舞踏熱、束髪熱の時代にして、藝妓熱のやゝ冷却せる時代なりしが、此の流行は壽命存外に長からずして、所謂國粋主義の影響おひ〳〵風俗上にも波及し來たれり。但し之れより先き廢娼論、基督教會より唱へいだされ、時尚もやゝ一變し來たりしかば、維新以前に於ては、はるかに藝妓よりも上位にありし娼妓、今は藝者よりも一層賤しむべき者と見做され、藝妓もやゝおとしめられ、隨うて、從來の豪傑肌、即ち狹斜通ひを公誇するの風は、おひ〳〵薄らぎ、眞摯謹嚴を賣物にする紳士風大に流行し、吉原、洲崎さびれ、地獄といふ者、就中、奥様風、令嬢風、束髪女學生に假粧せる私娼大に殖え、待合、會席の蕩遊もいとめやかなるを通とし、藝妓は殆ど大坂風となり、無駄口の敵手たらざれば花がるたの敵手たり、然らざれば臨時の外妾たるに外ならざる有様となり、彼等の大多數は嫵媚以外殆ど何等のトリヱ無しといふべき姿となりぬ。

もとより廿九年の今日と雖も、舊豪傑肌絶えたるにはあらず、否、或一部の社會には、所謂磊落を賣物とするの徒、尚頗る多げなれど、要するに、そは幾分か時尚後れの徒なり、今はやゝ秩序をよろこぶの風と眞地目を粧ふの風と流行す、こは比較的に眞摯謹嚴なる、而も割合に勢力ある新代國民の生長せしにも因するならめど、一は秩序のやゝ整ひて破

壊的磊落風のやゝ廢れ來しに因る也。　現に二三年以前より年頭、年末の儀式などもおひ／＼回復せられんとする傾向を生じ、五節句の祝儀なども、其の幾分かは再興せられんとす、思ふに、廿九年以後は風俗整頓の時代なるべし。

かく秩序をよろこぶ念のいちじるくなり來たるにつれて、茶の湯、生花などいふ禮儀に關係ある藝事、次第に流行し來たるの兆あり。　紳士社會に謠曲の行はるゝなども、其の因緣は一二のみならねど、其の中の一因は、マサカ端歌、百々一でもなからうといふ殿さま氣質に基くなるべし。　殿さまといへば、此の殿さまといふ語、六七年以前より流行せり、これは舊華族に對する敬語を新華族にハメたるに外ならねど、折々は如何なる殿さまも無きにあらず、畢竟、お出入商人のお世辭が元にて、此の尊稱の濫用がはじまりしなるべし、これにつれては著きは奥樣の墮落なり。　衣裳に上下の差別無くなりし爲に、小官員の妻も皆奥樣風なり、さるからに今は黒縮紋附三枚重ねにて八百屋の店に立つ奥樣の、さしてゆくゑは裏長屋なるがあり。　殿さまの子に「おとつさん」と叫ぶ若さまあれば、紙屋のお孃が目ざましき被布姿して、お手車に「おかアさま」と鶯の初音、へイ只今と布巾で手をふく鮨屋の若主人、けふは山高、黒鴨の

お侶、トント夢幻劇を眞で見る今の世の千態万狀、皆堅氣の目には奇怪なれど、これすなはち當世風の平民的、平等的なり、只奢侈の度の不釣合にして、收入の多き者も尠き者も、一切平等なる驕りの振舞、上下無差別の贅澤、かくて長う續かばと危ぶまるゝのみ。　就中、親の臑かぢる書生の贅澤は沙汰の限なり、毎月十圓の學費は、諸色高今の世是非も無けれど、卒業後の下宿に收入僅に二十圓足らず、支出二十圓乃至三十圓以上は多からずや、さて其の外出の姿を見れば、雇附の車に流行のマハシ、隆たる紳士風、アヽおいてもらひたし。　ホイ思はず筆がそれて、トンダ橫道に這入ッたり、さてこれからは好尙の現況、遊戲、寄席、興行物と一々變遷を叙すべきなれど、兎角思ふ程筆がまはらず、書く當人大不服なれば、讀む手合は尙更なるべし、委細は例の次號として、こゝにはほんの搔いつまんで好尙の一斑といふ表題下に、ふと胸に浮ぶ一二をいはんに、まづ

繪艸紙屋

の店頭に立ちて目につくは、錦繪の變遷なり。　維新以前に錦繪の大部分を占めし藝娼妓の美人繪の著く減少せしこと、芝居の流行の甚しきにも似ず、役者繪の割合に尠くなりしこと、

美術石版と稱する古畫伯(應擧、探幽等)の名畫の翻刻流行すること、石版

肖像畫の殖えしこと、幼年者流のもてあそびに供する小冊子類のいちじるく殖えしこと、遊藝獨稽古用のクダラヌ書類のおびたゞしきこと、『造化機論』やうの書類今も尚あまた陳列しあること、錦繪の彩具及び紙質のわるくなりしこと、淨瑠理稽古本の賣足よきこと、其の他は今思ひいださず、去りて横町の

寄席

に入ればまづ目につくは掛持多くなりしため、招牌に眞打の名のズラリと並び、一見甚だ面白げなれど、其の實三日坊主の羊頭狗肉多きこと、義太夫大全盛となりて、昔は五六ヶ所なりし義太夫席の、今は數十ヶ所となりたると是れなり。所詮、繁昌は昔に優るとも劣らざれど、落語、講釋は昔ながらにして、殆ど些も新意匠の加はれるを見ず。松林派の漢語まじりも今はトント珍らしからず、三遊派の新作も枝葉かはッて幹かはらず、書生連大よろこびの女義太夫といふもの、浪花ぶしといふもの、共になさけなきもの也。日本橋、淺艸、芝邊の樣模は知らず、山の手の皮相を見てだに覺えず太き息の吐かるゝ也。嗚呼、河東、一中の棄てられし其の同じ秋風の長唄、清元、常盛津にも及ばんとするあはれさよ。江戸ッ子かたぎ廢れては、常盛津、清元だに俚耳に入りがたきにや、將た

「美しき囀語」に飽いて稍意味の連續せる義太夫淨瑠璃をよろこぶにや、さては當時流行の心理的趣味とかいふ者を變則ドラマ中に味ふにや、と倩ら聽衆の樣子を窺ふに、「如何する〳〵」の褒めどころ必しも心理的と思はれず、又たはいなき前座の話に、讀んで字の如く噴飯し、握り飴のおまんま粒を隣の禿頭まで飛ばすを見れば、審美的好尙も知れたものぞ。圓太郎流の鳴物入は、今も尙盛ゆれど、歌ふといふ部類のよろこばれずして語るといふ部類の歡迎せらるゝを思へば、寄席的好尙は下落といはんかた當然なるべし。維新前には大温習は中流以下の大音樂會にして、寄席は或意味に於て、常住の小音樂會なりしに、今は此の常置音樂會やゝ廢れたりとやいはまし。但し、其の代り、小温習會に類するものは、甚だ盛に行はるゝに似たり、所謂踊のさらひ是れなり。又茶番の催しめくと、こゝかしこに行はる。さすれば寄席に俗樂の衰へたるが如く見ゆるは、畢竟寄席の主權が寄留人に歸したればなるべし、尠くとも神田より山の手へかけての寄席の常得意は、書生若しくは或種の小官吏なるが如し。序に尙一つ注意すべきは、昔ながらといふ落語の、昔よりも尙種少なになりしことなり。十たびも續けて寄席に通へば、尠くとも前座程は、十中六七まで同じ話を聽くことあるべし。これは

例の警察の注意にて、卑猥なる狹斜の話を成るべくせぬやうにと說諭あるが故に、前座輩の十八番、大概は封せられ、自然の結果として單調子となる也、譬へば、彼の昔風の脚本が、第一の山とせりし濡れ場と猥褻とを禁せられて、無味淡泊となりたると一般也。寄席に限らず、總て昔の興行物は、猥褻と慘刻と野卑なる滑稽とを第一の武器としたりしに、近來此の三者を禁せらるゝが爲に、當局者大弱り、見世物も活人形のたぐひも、これが爲に氣焰大に衰へたる趣あり。彼等の審美的技倆に乏しき、實感に訴ふるの手段を禁せらるゝ時は、忽ち工風の源泉を涸らす、笑止といふべし。さて

遊戲

の方面に於て、維新以後の新象と見るべきは、第一に西洋風の諸種の遊戲の入り來しことなり、トランプの流行は、日一日に甚しく、公然花かるたと並び行はれて、男女上中下の消閑の具といはんよりは、むしろ甚しき貪嗔痴の媒たり。之れと相ならんでは圍棊、將棋の行はるゝあり、彼の發句、連俳の小會なども、一種の遊戲たることと勿論之。其の他、玉突きも、一時ほどにはあらねど、今も尙行はれ、釣、乘馬、銃獵、自轉車、弓術、柔術、擊劍なども、半は衞生上、半は遊戲として行はる。謠曲は紳士間におひ

〻流行す、劍舞は書生輩の踊也、尺八月琴は近來少しく衰へたれども義太夫を唸るものは白面間に尠からず。海陸軍の樂隊、市中音樂隊は、大なる集會の與を添へ、園遊會やうの催し、中流以上には間〻行はる。能狂言はやゝ整肅を旨とする宴席の餘與に用ひられ、平家薩摩の琵琶、はた同種の席に奏せらる。西洋音樂會あり、雅樂會あり、俗樂會あり。相撲は舊時ほどにあらねど、芝居は全盛の有樣なり、其の他、手品、幻燈、輕業、獨樂の藝事など、一時の目をたのしますることは、昔にまさるとも劣らざれど、此等一つとして眞に高尚なる心をして高尚なる悅樂を感ぜしむるに足らず、彼等の大かたは小兒だましにあらざれば、舊時代の殘物々、眞に新代の聰明なる心を悅ばしむるに足る遊戲は、未だ一も成立たずと評して當然なるべし。就中、最も人心を感動する力ある俗樂の依然として舊のまゝなる、歎息の至也。

文學その折々

終

正誤

本書各奇數字頁の左端に付したる小標題のうち

第五頁　「國文學の興隆」は　「文躰紛亂」

自第三十六頁至第四十七頁　「歐文直譯幷に文點」は　「マクベス評釋の緒言」

第四十九頁　「評釋の緒言」は　「マクベス評釋の緒言」

自第五十三頁至第六十五頁　「我にあらずして汝に在り」は　「文人社會」

のいづれも誤植なり

明治二十九年九月五日印刷
同　年九月八日發行

文學その折々奥附

實價金壹圓

版權所有

內に發行者の印章捺印なき書は僞版也

著者　東京市日本橋區通四丁目五番地　坪內雄藏

發行者　東京市京橋區築地三丁目十五番地　和田篤太郎

印刷者　東京市日本橋區通四丁目五番地　野村宗十郎

發行所　春陽堂（電話五十一番）

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所